岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第406集

久田（きゅうでん）遺跡発掘調査報告書

土地改良総合基盤整備事業関連遺跡発掘調査

岩手県水沢地方振興局水沢農村整備事務所

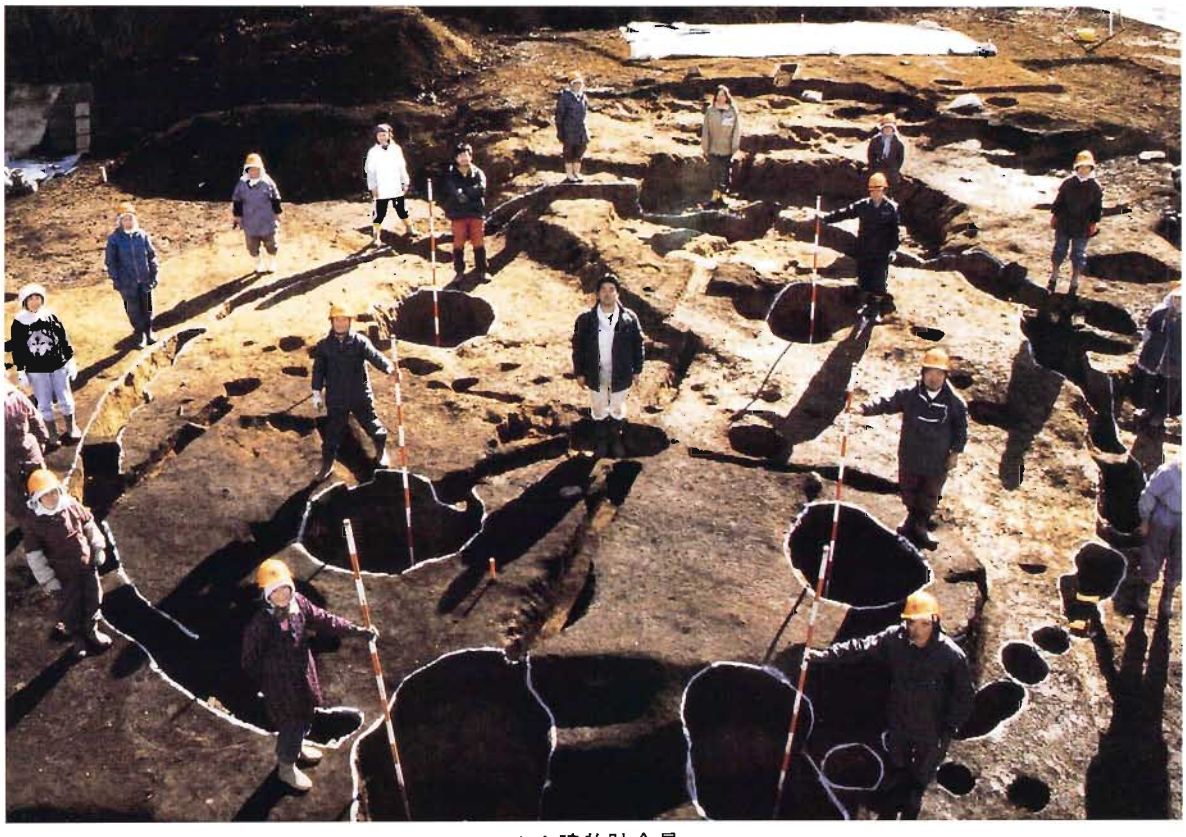
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

久田（きゅうでん）遺跡発掘調査報告書

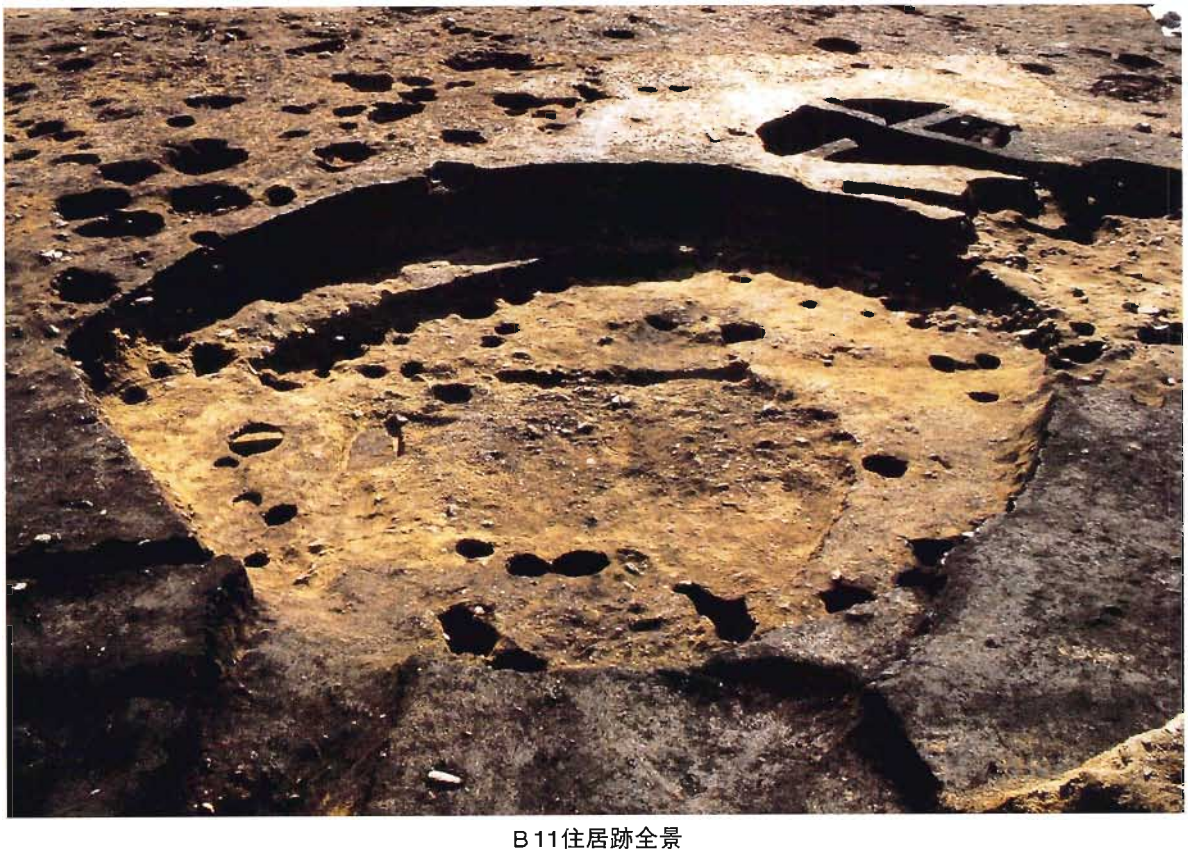
土地改良総合基盤整備事業関連遺跡発掘調査

航空写真

Ａ１配石（西側）全景



Ａ１建物跡全景



Ｂ11住居跡全景

出土土器①（縄文）

出土土器②（縄文）

出土土器③（古代）

土偶等

単孔土器

スタンプ形土製品等

序

岩手県には旧石器時代から近代までの数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しており、岩手県教育委員会のまとめではその数9,000箇所を超えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護・保存していくことは、私たち県民に課せられた重大な責務であります。一方、豊かで快適な生活環境を実現するための地域開発もまた、県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和のとれた施策が今日の課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、岩手県教育委員会の指導および調整の下、開発事業によりやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、土地改良総合基盤整備事業に関連して、平成13年度に発掘調査を実施した江刺市久田遺跡の発掘調査の結果をまとめたものであります。調査の結果、縄文時代後期および平安時代の遺構とそれらに伴う遺物が発見されました。縄文時代後期の集落は竪穴住居・掘立柱建物・配石遺構・墓と思われる土坑で構成される当該時期としては規模の大きなものであることが判明しました。とりわけ、当時の集落において特異な性格を有するであろう円形大形建物跡が確認されたことは、縄文時代研究の上で貴重な資料を提供することができたものと思われます。また、竪穴住居跡から出土した縄文後期中葉を主体とする土器は、県南部における該期土器編年の研究に寄与する資料であると思われます。一方、平安時代の集落は、古代社会の転換期にあたる10世紀初め頃の一般集落の様相を探る資料となることと思われます。本書にまとめられた調査成果は、資料の少ない北上山地丘陵部における各時代の集落研究の一助となることと思われます。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解を一層深めることに役立つよう切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました水沢地方振興局水沢農村整備事務所、江刺市教育委員会をはじめとする多くの関係機関ならびに関係各位に厚く感謝申し上げます。

平成15年２月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　合　田　　武

例　言

1．本報告書は岩手県江刺市伊手字沢田23番地ほかに所在する久田遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2．本発掘調査は、土地改良総合基盤整備事業伊手西部地区に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3．岩手県遺跡登録台帳登載の遺跡番号はＮＥ09－1329、調査時の遺跡略号はＫＤ－01である。
4．調査対象面積は3,000㎡である。このうち1,000㎡については遺構確認調査に止まり、本調査を行ったのは残り2,000㎡である。
5．発掘調査の期間・担当者は次のとおりである。
　野外調査　平成13年６月８日～平成13年12月５日　千葉正彦・佐々木信一・八木勝枝・菊池賢
　室内整理　平成13年11月１日～平成14年３月31日　千葉正彦・菊池賢
6．出土遺物の分析・鑑定は、次の方々および機関に依頼した。
　石器・石製品の石材鑑定　　矢内圭三・柳沢忠昭（花崗岩研究会）
　炭化材の樹種同定　　高橋俊彦（木工舎ゆい）
7．基準点測量および空中写真撮影は、次の機関に委託した。
　基準点測量　　興国設計㈱
　航空写真撮影　　㈱東邦航空
8．野外調査および室内整理・報告書作成にあたり、次の方々ならびに機関から指導・助言・協力をいただいた。（敬称略）
　小田野哲憲・中村英俊・神敏明・日下和寿（岩手県教育委員会）、及川洵・野坂晃平（江刺市教育委員会）、沼山源喜治・稲野裕介（北上市立埋蔵文化財センター）、酒井宗孝・千葉悟（花巻市教育委員会）、井上雅孝（滝沢村教育委員会）、川向聖子（山田町教育委員会）、佐々木嘉直（紫波高等学校）、伊東格（花巻南高等学校）、小原眞一（種市町立城内中学校）、小笠原健一郎（不来方高等学校）、岩渕計（一関市立本寺中学校）、鳥居達人（宮古市立第二中学校）、朝倉雄大（岩谷堂高等学校）、菊池貴広（遠野市立小友中学校）、及川久美子（地権者）、豊島建設㈱、江刺市教育委員会
9．野外調査では、江刺市および水沢市の次の方々に協力していただいた。（敬称略、五十音順）
　石川健士、石川ルミ子、及川加津子、及川キヨ、及川ミヅエ、加藤利子、菅野雄、菊池一子、菊池幸子、菊池シマ、菊池智枝子、菊池昇、菊地やよい、後藤光夫、小竹彦孝、小松原清広、佐藤喜久雄、佐藤クニ子、佐藤賢喜司、佐藤チヨエ、佐藤艶子、佐藤ツル子、佐藤信夫、佐藤初男、佐藤ミワ、佐藤レイ子、菅原厚子、高野アイ子、高橋東、高橋タマ、高橋光雄、高橋亮子、千葉クニ子、千葉清行、千葉智恵子、千葉ナミ、千葉等、千葉藤男、千葉芳夫、広野智、松渕教子
10．本書の作成は当センター臨時職員の協力を得て千葉・菊池が行った。担当は次のとおりである。
　〈執筆・編集〉　千葉正彦、菊池賢
　〈作図・図版作成〉　阿部敏子、三上ゆかり、浅沼八千代、佐々木美穂子、竹鼻智子、田村昌子、岩崎毅〔その他、当センター臨時職員多数の協力を得た〕
　〈遺構写真撮影〉　千葉正彦、菊池賢
　〈遺物写真撮影〉　村田憙鴻、福士昭夫
11．本書の執筆分担は、第Ⅰ章を水沢地方振興局水沢農村整備事務所〔一部、千葉が加筆〕、附編を高橋俊彦、その他を千葉と菊池が分担して執筆した。
12．文中の脚注は章単位で一括して各章末に置いている。
13．本書では国土地理院発行の以下の地形図を使用した。
　1／25,000 地形図　人首、阿原山、陸中江刺、水沢
　1／50,000 地形図　人首、陸中大原、北上、水沢
　1／200,000 地形図　盛岡、一関、秋田、山形
14．調査で得られた出土遺物および調査に関わる諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。
15．調査成果の一部については、現地説明会・遺跡報告会等の発表資料および「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成13年度）」（岩文振調報第397集）において一部公表しているが、本書の記載内容と異なる場合は本書の記載内容が優先する。

目　次

巻頭カラー写真
序
例言

〈本　文〉

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境
1．遺跡の位置と環境……1
2．地形的・地質的環境……4
3．基本層序……6
4．歴史的環境－周辺の遺跡……8
Ⅲ　調査方法と整理方法
1．野外調査の経過……11
2．野外調査の方法……13
3．整理の方法と経過……17
4．掲載の方法……17
Ⅳ　検出された遺構
1．A・B区の検出遺構……21
(1)竪穴住居跡・住居跡状遺構……21
(2)掘立柱建物跡……58
(3)土坑類……68
(4)配石遺構……89
(5)焼土遺構……97
2．C・D区の検出遺構……97
Ⅴ　出土遺物
1．縄文時代の遺物……101
(1)土器……101
(2)土製品……104
(3)石器……105
(4)石製品……105
2．平安時代の遺物……105
(1)土師器……105
(2)須恵器……106
(3)金属製品……106
3．その他の遺物……106
Ⅵ　まとめと考察
1．遺物……167
(1)縄文時代……167
(2)平安時代……174
2．遺構……174
(1)縄文時代……174
(2)平安時代……183
3．遺跡……183
(1)縄文時代……183
(2)平安時代……186
(3)まとめ……187
最後に……188
参考引用文献……189
附編　自然科学的分析
炭化材の樹種同定……191
報告書抄録……287
職員名簿……288

〈　表　〉

第1表　遺構名の変更・抹消……14
第2表　柱穴状小土坑計測表……93
第3表　遺構内出土土器重量……102
第4表　遺構外出土土器重量……103
第5表　土器観察表……152
第6表　土製品観察表……163
第7表　石器・石製品観察表……165
第8表　金属製品観察表……166

〈図　版〉

第１図　遺跡の位置……2
第２図　遺跡周辺地形図……3
第３図　江刺市周辺の山稜と水系……4
第４図　地形・地質分類……5
第５図　調査区の土層断面……7
第６図　周辺の遺跡分布……9
第７図　トレンチ設定位置……15
第８図　試掘調査時の検出遺構・遺物……16
第９図　凡例……18
第10図　遺構配置図……19
第11図　Ａ１住居跡(1)……22
第12図　Ａ１住居跡(2)……23
第13図　Ａ２・３住居跡……25
第14図　Ａ４・５住居跡……27
第15図　Ｂ１住居跡……30
第16図　Ｂ２住居跡……31
第17図　Ｂ３住居跡……33
第18図　Ｂ４・５住居跡……35
第19図　Ｂ６住居跡(1)……37
第20図　Ｂ６住居跡(2)……38
第21図　Ｂ７・20住居跡……40
第22図　Ｂ８・９住居跡……42
第23図　Ｂ10住居状遺構……43
第24図　Ｂ11住居跡……45
第25図　Ｂ12住居跡……47
第26図　Ｂ13住居跡(1)……49
第27図　Ｂ13住居跡(2)……50
第28図　Ｂ14・15・16住居跡……52
第29図　Ｂ17住居跡……53
第30図　Ｂ18・19住居跡……55
第31図　Ｂ21住居跡、Ｂ22・23住居状遺構……57
第32図　Ａ１建物跡(1)……59
第33図　Ａ１建物跡(2)……60
第34図　Ａ１建物跡(3)拡大図……63
第35図　Ｂ１建物跡……65
第36図　Ｂ２建物跡、Ｂ１・２建物跡重複状況……67
第37図　Ｂ３建物跡……68
第38図　Ａ６・７・９土坑、Ａ区柱穴状土坑群……70
第39図　Ｂ区土坑群分布状況……72
第40図　Ｂ１～５土坑……73
第41図　Ｂ６～９土坑……75
第42図　Ｂ10～13・18土坑……77
第43図　Ｂ14・16・17・19土坑……79
第44図　Ｂ20・21土坑……81
第45図　Ｂ22～27土坑……83
第46図　Ｂ29～31・33土坑……85
第47図　Ｂ34～36・39・44土坑……87
第48図　Ｂ45土坑……88
第49図　Ａ区柱穴状土坑群、Ａ１焼土……90
第50図　Ｂ区柱穴状土坑群(1)……90
第51図　Ｂ37土坑及び周辺柱穴群……91
第52図　Ｂ区柱穴状土坑群(2)……92
第53図　Ａ１配石……95
第54図　Ｂ１立石、Ｂ1組石、Ｄ1焼土……98
第55図　Ｃ区住居群……99
第56図　Ａ１住居跡出土遺物(1)……107
第57図　Ａ１住居跡出土遺物(2)……108
第58図　Ａ１住居跡出土遺物(3)……109
第59図　Ａ１住居跡出土遺物(4)……110
第60図　Ａ１住居跡出土遺物(5)……111
第61図　Ａ１住居跡出土遺物(6)……112
第62図　Ａ１住居跡出土遺物(7)……113
第63図　Ａ２・Ａ３住居跡出土遺物……114
第64図　Ａ３～Ａ５・Ｂ１・Ｂ２住居跡出土遺物……115
第65図　Ｂ３住居跡出土遺物……116
第66図　Ｂ４・Ｂ５住居跡出土遺物……117
第67図　Ｂ６住居跡出土遺物(1)……118
第68図　Ｂ６住居跡出土遺物(2)・Ｂ８住居跡出土遺物……119
第69図　Ｂ９住居跡・Ｂ10住居状遺構出土遺物……120

第70図　B11住居跡出土遺物(1) ……121
第71図　B11住居跡出土遺物(2) ・B12住居跡出土遺物(1) ……122
第72図　B12住居跡出土遺物(2) ……123
第73図　B13住居跡出土遺物(1) ……124
第74図　B13住居跡出土遺物(2)・B14住居跡出土遺物(1) ……125
第75図　B14住居跡出土遺物(2) ……126
第76図　B15・16住居跡出土遺物(1) ……127
第77図　B15・16住居跡出土遺物(2) ……128
第78図　B16住居跡出土遺物……129
第79図　B17～B20住居跡出土遺物、A1建物出土遺物(1)・土坑出土遺物(1)・130
第80図　A1建物出土遺物(2)・土坑出土遺物(2)・131
第81図　土坑出土遺物(3) ……132
第82図　土坑出土遺物(4) ……133
第83図　柱穴出土遺物・遺構外出土遺物(1) ……134
第84図　遺構外出土遺物(2)縄文土器 ……135
第85図　遺構外出土遺物(3)縄文土器 ……136
第86図　遺構外出土遺物(4)縄文土器 ……137
第87図　遺構外出土遺物(5)縄文土器 ……138
第88図　遺構外出土遺物(6)縄文土器 ……139
第89図　遺構外出土遺物(7)縄文土器 ……140
第90図　遺構外出土遺物(8)縄文土器 ……141
第91図　遺構外出土遺物(9)縄文土器 ……142
第92図　遺構外出土遺物(10)縄文土器……143
第93図　遺構外出土遺物(11)縄文土器……144
第94図　遺構外出土遺物(12)縄文土器……145
第95図　遺構外出土遺物(13)縄文土器……146
第96図　遺構外出土遺物(14)土製品……147
第97図　遺構外出土遺物(15)石器……148
第98図　遺構外出土遺物(16)石器……149
第99図　遺構外出土遺物(17)石器、石製品……150
第100図　遺構外出土遺物(18)土師器等 ……151
第101図　出土土器集成図(1) ……169
第102図　出土土器集成図(2) ……171
第103図　出土土製品集成図 ……173
第104図　出土土器集成図(3) ……175
第105図　住居跡集成図 ……177
第106図　大形円形建物集成図 ……179
第107図　B1・2建物跡変遷想定図 ……181
第108図　時期別遺構配置図 ……184

〈写真図版〉

写真図版1　航空写真……199
写真図版2　遺跡遠景・基本土層……200
写真図版3　調査区近景等……201
写真図版4　A1住居跡(1) ……202
写真図版5　A1住居跡(2) ……203
写真図版6　A2住居跡……204
写真図版7　A3住居跡、A4住居跡(1)……205
写真図版8　A4住居跡(2)、A5住居跡……206
写真図版9　B1住居跡……207
写真図版10　B2住居跡……208
写真図版11　B3住居跡(1) ……209
写真図版12　B3住居跡(2) ……210
写真図版13　B4住居跡(1) ……211
写真図版14　B4住居跡(2)、B5住居跡……212
写真図版15　B6住居跡(1) ……213
写真図版16　B6住居跡(2)、B7住居跡……214
写真図版17　B8住居跡……215
写真図版18　B9住居跡……216
写真図版19　B10住居状遺構……217
写真図版20　B11住居跡(1) ……218
写真図版21　B11住居跡(2) ……219
写真図版22　B12住居跡……220
写真図版23　B13住居跡(1) ……221
写真図版24　B13住居跡(2) ……222
写真図版25　B14住居跡、B15・16住居跡(1)……223
写真図版26　B15・16住居跡(2) ……224
写真図版27　B17住居跡……225
写真図版28　B18・19住居跡……226

写真図版29　B20住居跡……227
写真図版30　B21住居跡、B22・B23住居状遺構
……228
写真図版31　A1建物跡(1)……229
写真図版32　A1建物跡(2)……230
写真図版33　A1建物跡(3)……231
写真図版34　A1建物跡(4)……232
写真図版35　A1建物跡(5)……233
写真図版36　B1・2建物跡(1)……234
写真図版37　B1・2建物跡(2)、B3建物跡
……235
写真図版38　土坑(1)……236
写真図版39　土坑(2)……237
写真図版40　土坑(3)……238
写真図版41　土坑(4)……239
写真図版42　土坑(5)……240
写真図版43　土坑(6)……241
写真図版44　土坑(7)……242
写真図版45　土坑(8)……243
写真図版46　土坑(9)……244
写真図版47　土坑(10)……245
写真図版48　土坑(11)……246
写真図版49　A1配石……247
写真図版50　立石・組石・礫群……248
写真図版51　焼土遺構等……249
写真図版52　遺構内出土遺物(1)……250
写真図版53　遺構内出土遺物(2)……251
写真図版54　遺構内出土遺物(3)……252
写真図版55　遺構内出土遺物(4)……253
写真図版56　遺構内出土遺物(5)……254
写真図版57　遺構内出土遺物(6)……255
写真図版58　遺構内出土遺物(7)……256
写真図版59　遺構内出土遺物(8)……257
写真図版60　遺構内出土遺物(9)……258
写真図版61　遺構内出土遺物(10)……259
写真図版62　遺構内出土遺物(11)……260
写真図版63　遺構内出土遺物(12)……261
写真図版64　遺構内出土遺物(13)……262
写真図版65　遺構内出土遺物(14)……263
写真図版66　遺構内出土遺物(15)……264
写真図版67　遺構内出土遺物(16)……265
写真図版68　遺構内出土遺物(17)……266
写真図版69　遺構内出土遺物(18)……267
写真図版70　遺構内出土遺物(19)……268
写真図版71　遺構内出土遺物(20)……269
写真図版72　遺構内出土遺物(21)……270
写真図版73　遺構内出土遺物(22)……271
写真図版74　遺構内出土遺物(23)……272
写真図版75　遺構内出土遺物(24)……273
写真図版76　遺構外出土遺物　(1)……274
写真図版77　遺構外出土遺物　(2)……275
写真図版78　遺構外出土遺物　(3)……276
写真図版79　遺構外出土遺物　(4)……277
写真図版80　遺構外出土遺物　(5)……278
写真図版81　遺構外出土遺物　(6)……279
写真図版82　遺構外出土遺物　(7)……280
写真図版83　遺構外出土遺物　(8)……281
写真図版84　遺構外出土遺物　(9)……282
写真図版85　遺構外出土遺物(10)……283
写真図版86　遺構外出土遺物(11)……284
写真図版87　遺構外出土遺物(12)……285
写真図版88　遺構外出土遺物(13)……286

Ⅰ　調査に至る経過

久田遺跡は「土地改良総合整備事業　伊手西部地区」の実施に伴って発掘調査を実施することとなった。

当事業は、関係受益地36haの水田を高生産性圃場に整備(圃場の大型化)し、大型機械の導入を可能にすることを目的に、平成10年度から施行されている。

当事業地の一部は既に久田遺跡として周知されていたため、事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、水沢地方振興局から岩手県教育委員会に試掘調査を依頼した。岩手県教育委員会は平成12年10月24日に試掘調査を実施し、事業計画地が久田遺跡の範囲内であり事業施行に伴って本調査が必要である旨回答した。その後、水沢地方振興局水沢農村整備事務所と岩手県教育委員会との間で協議が行われた結果、平成13年4月1日から平成14年3月31日までの期間で(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業として発掘調査を行うこととなり、水沢地方振興局長と(財)岩手県文化振興事業団理事長との間で契約が結ばれた。発掘調査は平成13年6月8日に開始され、同年12月5日で終了した。報告書作成に係る整理作業は、平成13年11月1日から平成14年3月31日まで行い、報告書刊行は平成14年度とした。

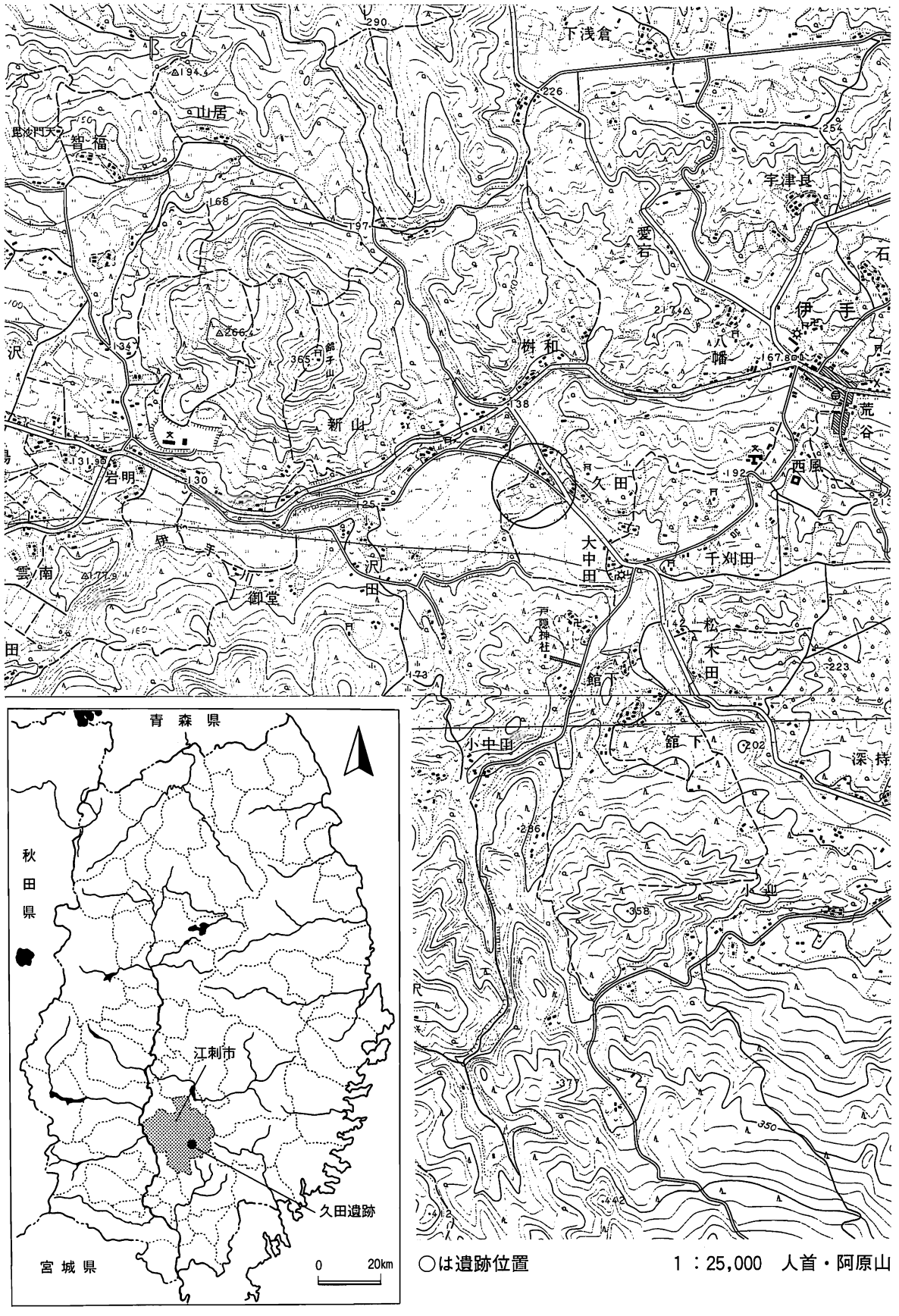
(水沢地方振興局水沢農村整備事務所)

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1．遺跡の位置と環境

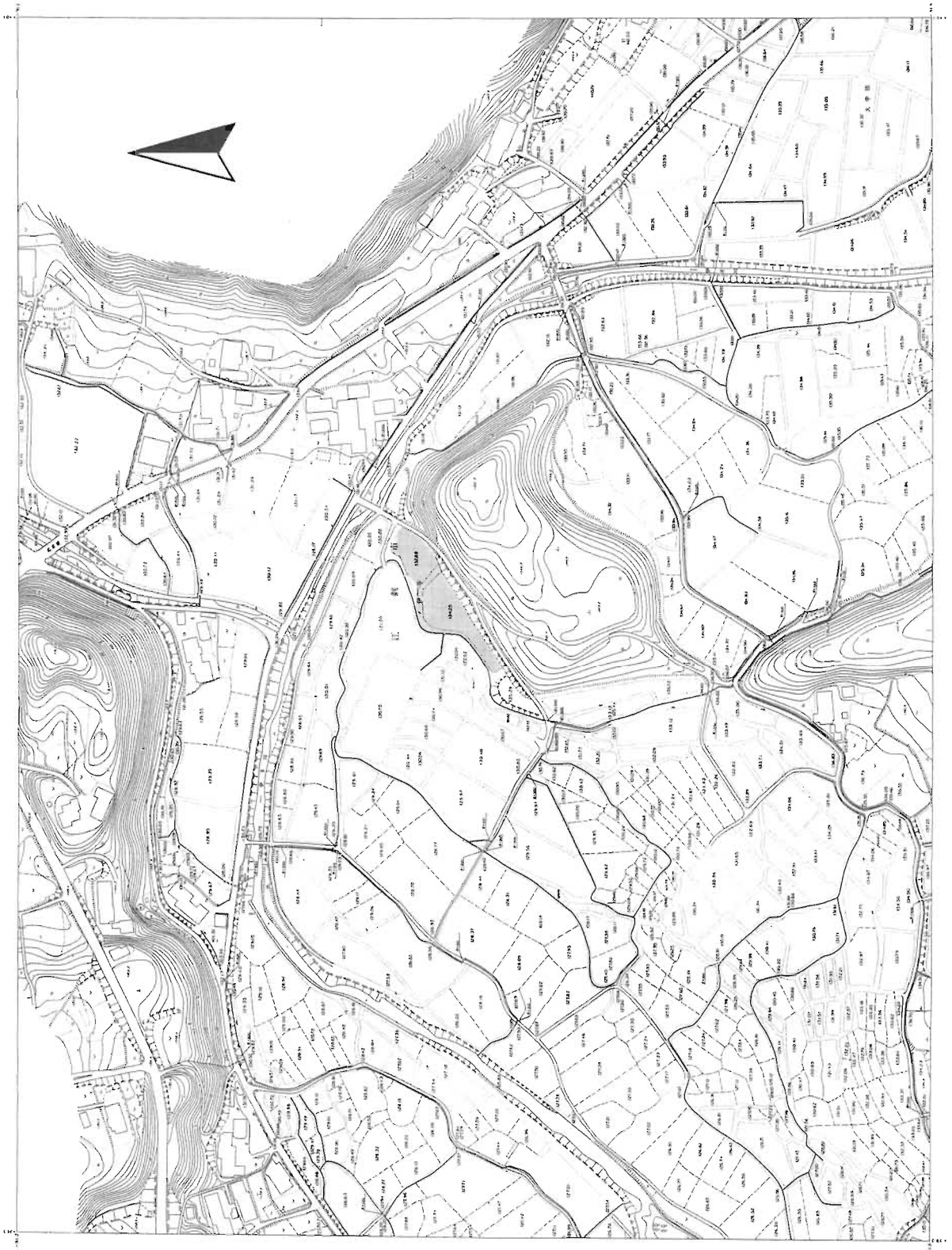
久田遺跡は東北新幹線水沢江刺駅から東へ約9㎞の「岩手県江刺市伊手字沢田23番地ほか」地内に所在しており、国土地理院発行1／50,000地形図「人首」NJ－54－14－9(一関9号)の図幅に含まれる北緯39°10′30″、東経141°17′37″付近に位置する。遺跡は、北上山地丘陵部を西流する伊手川上流部の谷底平野に広がっている(第1・2図)。

江刺市は岩手県中南部に位置している。昭和30(1955)年に岩谷堂町と愛宕・田原・藤里・伊手・米里・玉里・梁川・広瀬・稲瀬の9村が合併し、昭和33(1958)年に市制施行した。総面積は362.50㎢で、東は遠野市・気仙郡住田町、南では東磐井郡大東町、西は水沢市・胆沢郡金ヶ崎町、北側では北上市・和賀郡東和町の3市4町と境を接している。総人口は約33,700人、人口密度は93.0人/㎢である。江刺市はその東半分が北上山地の山間部であり、遠野市・住田町との行政区境をなす山々が聳(そび)えている。北から、金成山(541m)・笠根山(521m)・明神山(623m)・大森山(820m)・物見山(種山；標高871m)・立石(751m)・鷹ノ巣山(792m)を結ぶラインが両市町との行政区境をなしている。さらに主要な山稜を列挙すれば、阿茶山(533m)・烏堂山(553m)・阿原山(782m)・大鉢森山(733m)・天狗岩山(775m)・蓬莱山(789m)といった標高500m以上の山稜が連なっている。これらの山稜の多くは、頂部一帯が浸食により平坦化した準平原である。一方、西半分はさらに2分され、西の北上川流域低地帯、東の漸移的な中間地帯となっている。市域西端を北上川が区切っており、東部の山稜から発する広瀬川・人首川・伊手川等の支流が東から西へと横断し江刺平野において北上川に合流する。これらの支流が山稜を下刻・浸食した結果、流域には狭隘な谷底平野が断続的に形成されている。江刺市の主要産業は農業であり、農家数約4,800戸、農家人口約21,000人と人口比60％を超える。農業生産の中心は北上川流域の沖積平野(江刺平野)であり、水稲・果樹・ホップ・野菜栽培が行われている。とりわけ「江刺金札米」と称せられる良質米や矮化(わいか)林檎の栽培が盛んである。また東部丘陵地帯では種山高原を中心とした馬産地であったが、乳・肉牛飼育や養鶏等が増加している。一方、現在においては就業人口の2％程度に過ぎないものの江刺市における鉱業の歴史は古く、江刺市東部の山岳地帯には金・銅・鉄等の



○は遺跡位置　　1：25,000　人首・阿原山

第1図　遺跡の位置



県営ほ場整備事業伊手西部地区地形図〈3〉より転載

0　100m　200m

第2図　遺跡周辺地形図

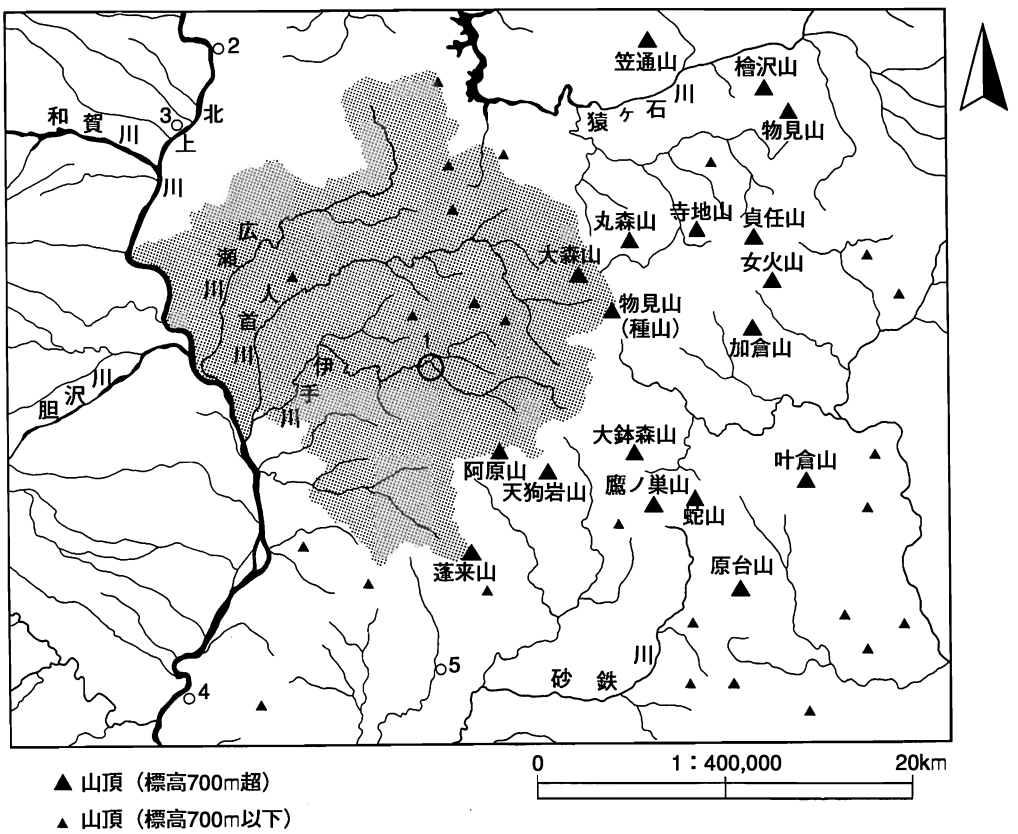
鉱床が人首川水系と伊手川水系に囲まれる地域に分布している。その起源が奥州藤原氏時代まで遡るとの説もある金山は米里・伊手地区に点在しており、昭和初期まで操業していた。また天明年間に生産が開始され、民芸家具として著名な「岩谷堂箪笥」は国の伝統的工芸品として指定されている。市域西端付近を東北新幹線が南北に縦貫しているが鉄道駅はなく、人や物資の移動・流通は市域中心部の岩谷堂地区を経由して縦横に延びる道路網に頼らざるを得ない。国道456号および県道14号(主要地方道一関北上線)が稲瀬～岩谷堂地区を縦貫しており、これと交差して国道397号が田原～伊手地区を横断し、県道8号が愛宕～玉里～米里地区を経由して種山付近で国道397号に連結する。

次に、遺跡が所在する伊手地区であるが、伊手地区は江刺市東部の北上山地南部山稜に立地している。地区の中央付近を伊手川が西流して流域に谷底平野を形成しており、本遺跡はこの谷底平野東側にあたる。伊手は元来、盛街道(現在の国道397号)の要衝の地であり、宿駅が置かれたことで町場が形成された。藩政時代には伊達仙台藩と南部盛岡藩との藩境となっていた。この地域の気候は内陸性の特徴を示しており、年平均気温は10℃未満と比較的低温で、年間降水量は1,100～1,300㎜である。

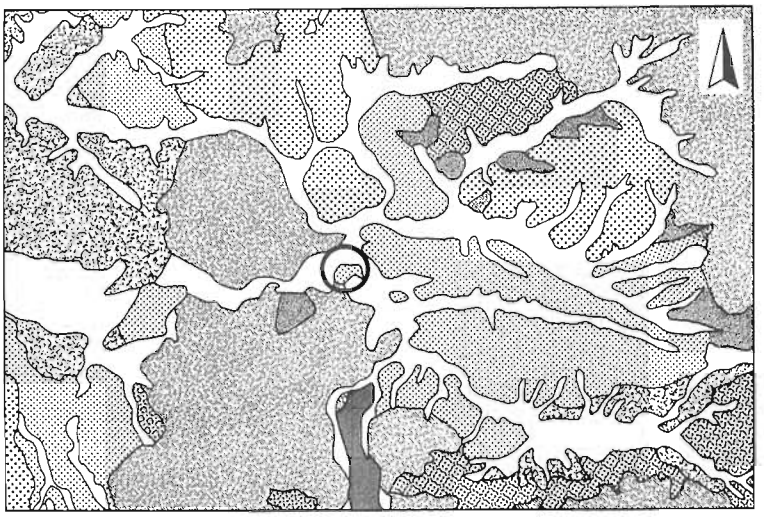
2．地形的・地質的環境

本節では、遺跡が立地する伊手地区周辺の地形的・地質的環境について、岩手県(1970・1973)の分類に拠りつつ述べる。

地形(第2～4図)　遺跡の存する江刺市周辺の山稜・水系の配置を第3図に、遺跡周辺部の地形を第4図に示した。図に即して概観する。前節で述べたとおり、江刺市一帯の地形は、北上山地から北上川流域低地帯へと連続する漸移的な様相を呈しており、西部の北上川左岸の沖積平野部(江刺平野)、東部の北上山地山岳部、



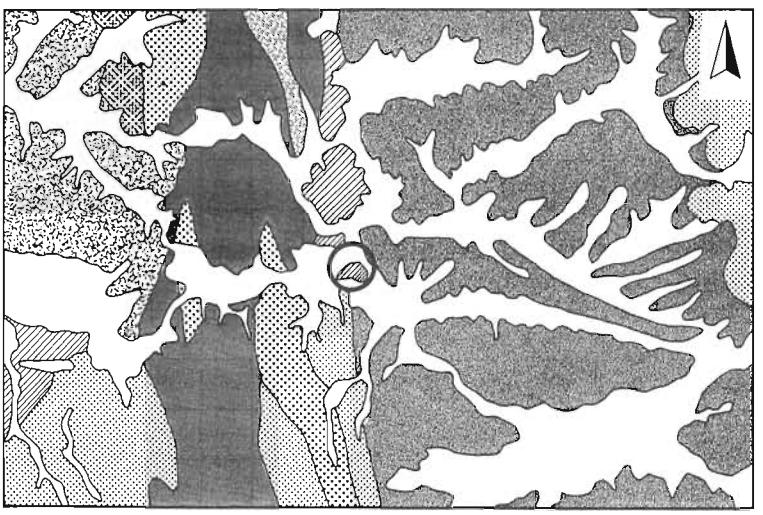
第3図　江刺市周辺の山稜と水系



〈地形分類図〉　　1：50,000

中起伏山脈（起伏量400～200m）
小起伏山脈（同200m以下）
山麓地・緩斜面
丘陵地Ⅰ（同200～100m）
丘陵地Ⅱ（同100m以下）
砂礫段丘〔台地〕
扇状地・崖錐
谷底平野

〈表層地質分類図〉



砂岩
珪岩質岩石（チャート）
輝緑凝灰岩
古生代
安山岩質岩石
斑糲岩質岩石
蛇紋岩質岩石
中生代
緑色片岩
泥岩（頁岩）
新第三紀鮮新統
砂礫（未固結）
沖積世

岩手県　1970・1973より引用（一部改変）　　1：50,000

○は久田遺跡の位置

第4図　地形・地質分類

およびその中間の丘陵部という3地帯に分類される。伊手地区は上記3地帯のうちの丘陵部分にあたるが、東側の図幅3／4と西側図幅1／4とでは極端に様相が変わる。すなわち、東側においては「中起伏山脈」を主にその山裾部分に「山麓地・緩斜面」や「丘陵地」が張付く様相であるのに対して、西側では「砂礫段丘」や「谷底平野」といった比較的平坦な地形となる。概ね、梁川と岩明付近を結ぶラインがこの両者の境界となっている。伊手川は図幅中央付近を東から西へと横切っており、伊手川およびその支流の流域には狭隘で複雑に入組んだ谷底平野が形成されている。うち、本遺跡周辺の伊手～岩明～藤里付近には、比較的広い盆地状の谷底平野が広がっており、現況では水田が連なる平坦面である。本遺跡の括りはその平坦な谷底平野および丘陵部にあたり、調査区は平坦面に張出す丘陵の北西部分である（第2図）。この丘陵部は、本来、南

側の山脈から東側の丘陵へと連続するものだったと考えられるが、伊手川の流路変化および浸食作用により東側丘陵から分断され、浸食されずに残ったもの、残丘であると思われる。前述のとおり現況は棚田であったが、改変前の原地形は丘陵頂部から低位平坦面へと続く緩斜面である。

地質(第4図)　表層地質区分を示した第4図に即して概観する。盛岡～早池峰～五葉山を結ぶラインよりも南部の北上山地では礫岩に富む古生層が広く分布しているが、江刺市東部付近では古生層を南北に貫く形で中生代の花崗岩体・超塩基性岩体が分布している。図幅内で見ると、遺跡周辺部はほぼ後者、貫入する花崗岩質岩石および超塩基性の蛇紋岩質岩石の分布範囲に含まれている。伊手川の流路に対応して砂礫・砂泥等の未固結の沖積層が図幅中央を横断する形で分布している。調査区付近は沖積層に張出した緑色片岩体にあたる。当該岩体は本来、南北方向に延びるように分布しているようであり、伊手川の浸食作用により、それらから分離されたものであろう。地質的には、調査区周辺は中生代の岩体からなる比較的古い様相を示す地域であるといえる。

3．基本層序

調査区内に設定した土層観察ベルトの土層断面(第5図)に基づいて、調査区における堆積土の層序を次のように把握した。

Ⅰ層　水田耕作土および盛り土を一括した。

Ⅱ層　10YR3/2黒褐色～3/4暗褐色。砂質土。調査区低位面(C・D区)西側の低標高部分で見られる。当該部分は旧河道と考えられることから、河川の堆積作用により形成されたと考えられる。縄文・平安時代の遺物を含んでいる。

Ⅲ層　調査区中高位面(A・B区)では表土直下、低位面(C・D区)ではⅡ層直下に見られる。いわゆるクロボク層である。調査当初は見分けが付きづらく単一層とも考えたが、土層断面の観察から細分した(註1)。本層は縄文時代後期および平安時代の遺構検出面となり、かつ当該時期の遺物を包蔵している。よって、本層中には縄文時代～古代の生活面が存在すると思われる。

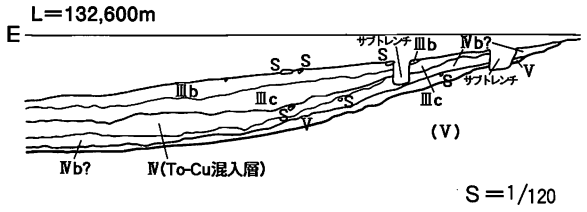
Ⅲａ層　10YR3/2黒褐色。シルト。砂・小礫が少量混入する。人為的再堆積層、開田の際に動かされたものである。

Ⅲｂ層　10YR2/2～2/3黒褐色。シルト。Ⅲａ層と同じく砂・小石を含む土層であるが、Ⅲａ層よりもやや黒っぽく見える。縄文時代と古代の遺物を含んでいるが、量は少ない。自然堆積層か人為的な再堆積層なのか明確には判断できなかった。現時点では、人為的堆積層と判断している。

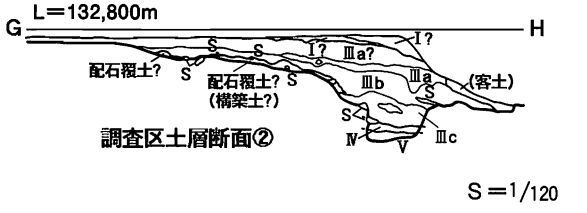
Ⅲｃ層　10YR1.7/1～2/1黒色。シルト。縄文時代～古代の遺構構築面であり、かつ遺構の覆土となっている。当該時期の遺物が包含されている。局所的に灰白色パミスの混入が認められる。当該パミスは十和田ａ降下火山灰(To－a)と推測される。

Ⅳ層　10YR3/3暗褐色～4/3にぶい黄褐色。粘土質シルト。層上位～中位には黄橙色火山灰微小ブロックの混入が見られる。とりわけ、調査区北東側(A区)の北～北西部では、当該火山灰ブロックが面的に混入する様相を示している。当該火山灰は中掫浮石(To－Cu)と推測され、当該層面が縄文時代前期前葉の生活面に相当すると推測される。今回の調査では該期の遺構は検出されていない。

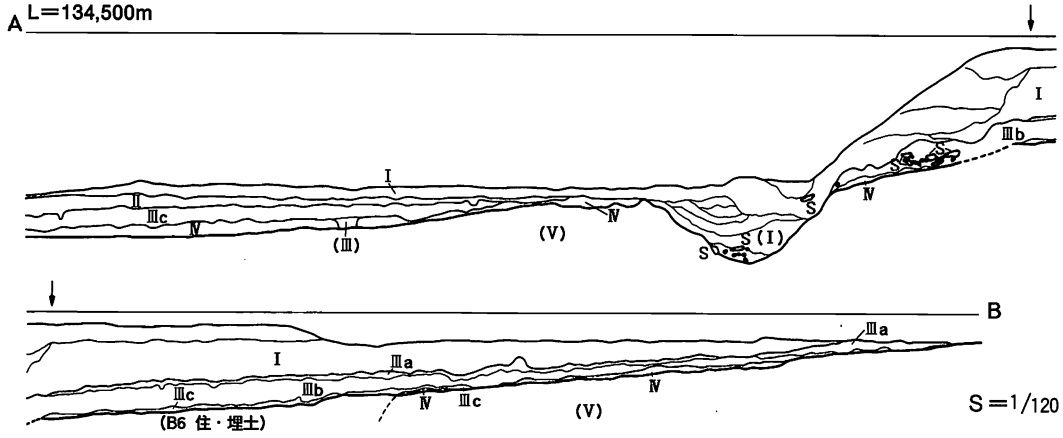
Ⅴ層　10YR6/8明黄褐色～7/8黄褐色。層厚不明。上面付近では火山灰起源の粘土質シルトであるが、



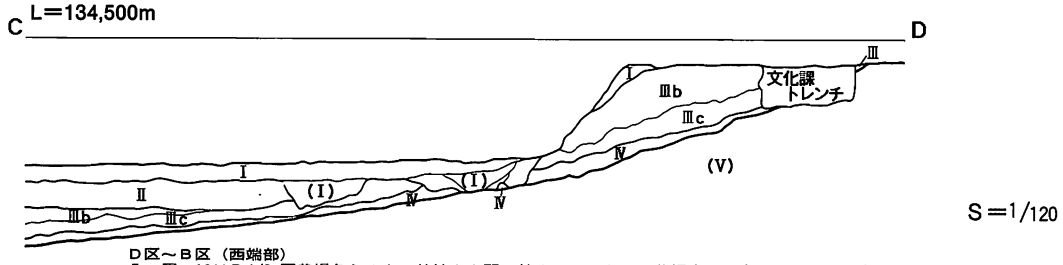
A区（東端部）
Ⅲb.10ＹＲ3/3 暗褐色シルト　粘性やや強　締まりややなし　土器片少量混入礫混入
Ⅲc.10ＹＲ3/2 黒褐色砂質シルト　粘性弱　締まりなし
Ⅳ．10ＹＲ2/1 黒色シルト　粘性やや強　締まりややあり　明黄褐色粘土ブロック１％混入　小礫１％混入
Ⅳb.10ＹＲ3/2 暗褐色粘土質シルト　粘性やや強　締まりややあり　上位に10ＹＲ7/2 にぶい黄褐色火山灰ブロック（中掫浮石）５％混入
Ⅴ．10ＹＲ7/8 黄橙色粘土質質シルト　粘性強　締まりややあり　中礫５％混入



A区（中央部）
Ⅰ．10ＹＲ4/2 灰黄褐色シルト～10ＹＲ3/2 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　土器小片混入　地山土細粒微量混入　褒土層に類似した色調を呈す
Ⅲa.10ＹＲ2/3 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり
Ⅲb.10ＹＲ2/2 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり
Ⅲc.10ＹＲ2/1 黒色シルト　粘性ややあり　締まりややあり
Ⅳ．10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性あり　締まりあり　漸移層
Ⅴ．10ＹＲ3/4 暗褐色シルト　粘性あり　締まりあり　所謂地山　層厚不明



C区～B区（中央部）
Ⅰ　層　表土（耕作土）層／盛り土層（田面造成に伴う）盛り土はよく締まっていて粘性が強い　小礫・拳大の礫を多量に含んでいる
Ⅱ　層　10ＹＲ3/4 暗褐色砂質土　粘性弱　締まりややあり　礫１％混入
Ⅲａ層　10ＹＲ3/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりややなし　微小礫５％混入
Ⅲｂ層　10ＹＲ2/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりなし　微小礫・小石10％混入
Ⅲｃ層　10ＹＲ1.7/1 黒色シルト　粘性やや強　締まりややなし　小礫３％混入
縄文後期を主体とする遺物包含層　遺構検出面
Ⅳ層　10ＹＲ4/6 褐色粘土質土　粘性強　締まりややあり　黒褐色土10％混入
Ⅲｃ層とⅤ層との漸移層である
Ⅴ層　10ＹＲ6/8 明黄褐色粘土質土　粘性強　締まりあり　黒褐色土３％混入　地山である　下位は 10ＹＲ6/6 明黄褐色砂礫層（粘性なし　締まりあり）となる



D区～B区（西端部）
Ⅰ　層　10ＹＲ4/2 灰黄褐色シルト　粘性やや弱　締まりややなし　草根多し　小石２％混入　水田耕作土（下位に酸化鉄の薄い集積層が形成されている）
Ⅱ　層　10ＹＲ3/2 黒褐色砂質シルト　粘性弱　締まりあり　小石20％混入　砂の堆積は概ね帯状に２層あり、水成堆積（氾濫）によるとみられる
Ⅲｂ層　10ＹＲ2/3 黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりあり　小～中礫10％混入　明黄褐色土ブロック１％混入
Ⅲｃ層　10ＹＲ1.7/1 黒色シルト　粘性強　締まりややなし　中礫１％混入　下位に明黄褐色土ブロック７％混入
縄文後期を主体とする遺物包含層
Ⅳ　層　10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色シルト～10ＹＲ3/3 暗褐色シルト　粘性やや強　締まりややあり　Ⅲｃ層とⅤ層との漸移層
Ⅴ層　10ＹＲ7/8 黄橙色粘土質シルト　粘性やや強　締まりあり　地山である

第５図　調査区の土層断面

その下では砂礫の混入が著しくなる。丘陵部の基盤となる礫層と思われる。本来細分可能であると思われるが、一括した。上位シルト部分でも拳大～人頭大の石が混入しており、このことが後述の配石遺構の認定を難しくした。最終の遺構検出を本層上面で行っている。本層を掘り込んだ遺構の底面・壁の観察から、本層以下では遺構・遺物は検出されないものと判断した。

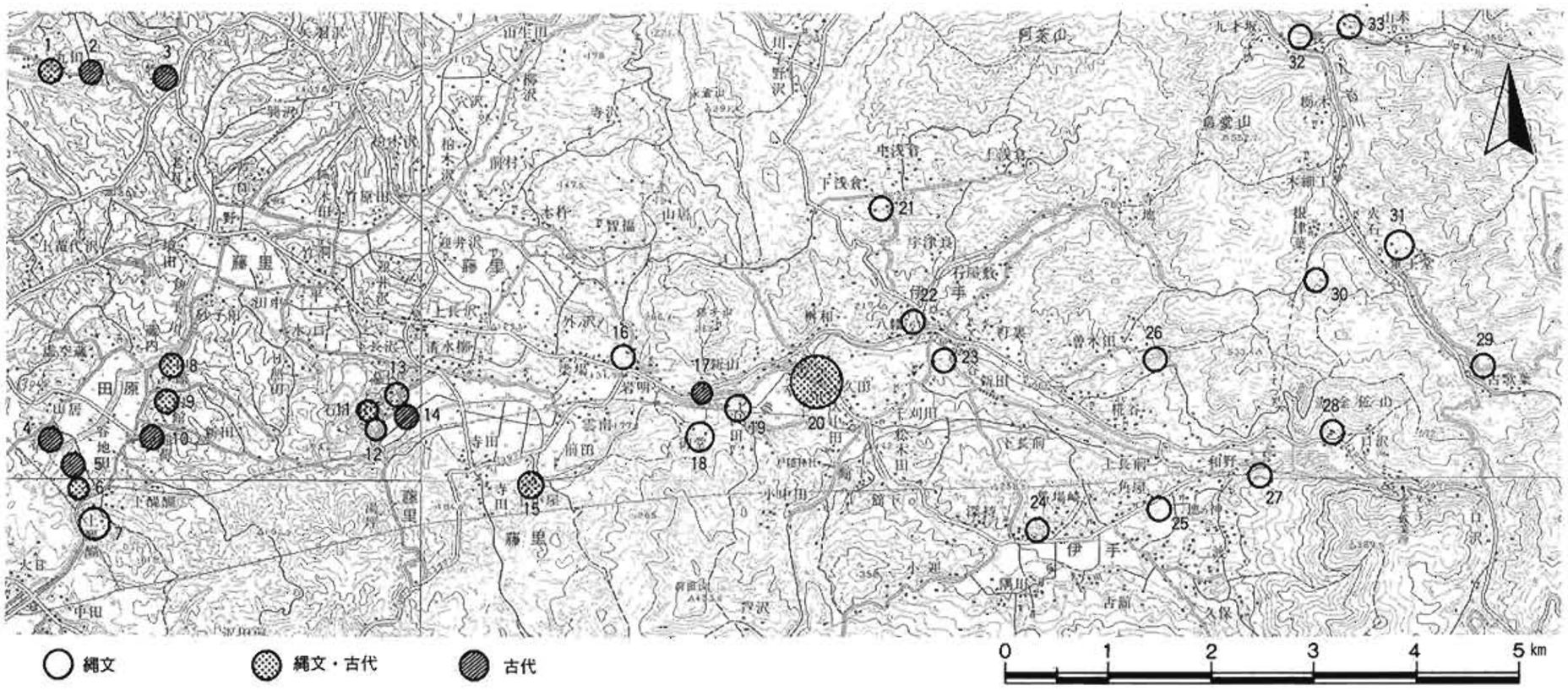
Ⅴ層より下位の土層については深掘りを行わなかったため不明である。

野外調査時点では、層序――特にⅢ層系の黒色土層の把握に誤認があった。すなわち調査開始当初、表土・盛り土直下の黒色土層については、上位のやや褐色がかった土層をⅢａ層、下位のクロボク土層をⅢｂ層として、二つに細分した。しかしながら調査進行の過程で解釈に齟齬を来たし、再度土層の検討を行ったところ、実際にはⅢ層が上位のⅢａ・Ⅲｂ層と下位のⅢｃ層に３細分されることが判明した。そこで、既に取り上げた遺物については可能な限り層名を変更したが、修正しきれていない可能性もある。よって「Ⅲｂ層」出土となっている遺物は、層位が怪しい(本来はⅢｃ層出土の可能性が高い)ものを含んでいる。

４．歴史的環境－周辺の遺跡

岩手県教育委員会の遺跡登録台帳には、江刺市内288箇所の遺跡が登載されている。当遺跡近隣の伊手川の上流～中流域における遺跡分布状況について第6図に示した(註２)。図幅中には本遺跡を含めた33遺跡が含まれている。時代別に見ると、縄文時代26遺跡、古代14遺跡(うち平安時代５)である。江刺平野部に比べて遺跡数が極端に少ない(註３)。図示した遺跡の多くは分布調査等で得られた表採遺物から推定されたもので、発掘調査が実施されたのは、本遺跡(20)以外に**下醍醐(6)・新田(19)**を数えるに過ぎない。下醍醐・新田ともに縄文時代を主体とする遺跡で、いずれも当センターが調査を行った。下醍醐遺跡は地形的には江刺平野末端部に位置する。平成10年の調査では、縄文時代の住居状遺構・土坑・焼土および中～後期の土器片が検出されている。また、平成13年に調査された新田遺跡は、縄文時代前～中期の集落跡と推測される。伊手川縁の丘陵縁辺部分に形成された集落の土坑域と捨て場を調査し、前期後葉～中期初頭(大木５～７式)の土器がコンテナ約100箱分出土している。その他の遺跡は詳細な内容が不明であり、遺物散布地として登録されている。

以上のとおり、本遺跡の周辺に限るとその様相が不明であり、多くを語り得ない状況である。そこで、次に、伊手川を下って北上川中流域左岸部にまで視野を広げてみる(第3図)。縄文時代について見れば、本遺跡から北西約20㎞の北上川縁には北上市**八天遺跡**(北上市教委1978)・**上川岸Ⅱ遺跡**(岩手埋文1991)が位置する。八天遺跡では夥(おびただ)しい数の遺構・遺物が検出された。部分的調査であるためその全容は不明であるが、中期末葉～後期前葉を中心とする大規模集落(拠点集落)だったものと推測される。中でも、大形の円形建物は後期に属するもので本遺跡検出Ａ１建物跡と同形態をとるものである。上川岸Ⅱ遺跡では、後期の遺物が出土するとともに、5本柱の特殊な形態をとる建物跡が検出されている。一方、本遺跡の南西約20㎞のやはり北上川縁に西磐井郡平泉町**新山権現社遺跡**(岩手埋文1993)が位置しており、南に約16㎞の砂鉄川水系には東磐井郡大東町**板倉遺跡**(岩手埋文1997)が位置する。新山権現社遺跡では後期の捨て場が調査され、後期前葉～中葉の土器が多量に出土している。板倉遺跡では敷石住居1棟を含む後期(中葉？)の集落跡が検出されている。なお、第3図の図幅には入らないものの、本遺跡の南西約48㎞には淡水性貝塚である花泉町**貝鳥貝塚**(花泉町教委1971)がある。伊手川を遡って種山高原を越えると沿岸南部地域に出る。やはり図幅には入らないが、この地域には後期の良好な遺跡が散在している。本遺跡の東約36㎞には大船渡市**上甲子遺跡**(岩手埋文1997)・**上鷹生遺跡**(岩手埋文1997)が、北東約63㎞には大槌町**崎山弁天遺跡**(大槌町教委1974)がある。上甲



番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	備考
1	大名野	散布地	縄文・古代	土師器、須恵器、縄文土器（晩期）、石斧、石槍、石匙、石鏃	
2	丸田Ⅱ	散布地	平安	須恵器、古墳（損壊）	
3	牧沢	散布地	古代	刀子	
4	虚空蔵	散布地	古代	土師器	
5	高野前	散布地	古代	土師器	
6	下醍醐	散布地	縄文、古代	住居状遺構、土坑、焼土、畝間状遺構、縄文土器（中・後期）、土師器、須恵器	平成10年調査 岩手埋文
7	醍醐寺跡	散布地	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器	
8	山舘	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	
9	山舘Ⅱ	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、石器	
10	稲荷	散布地	平安	須恵器	
11	勝軍寺跡	寺院跡	縄文・古代	縄文土器（中・晩期）、土師器、須恵器	
12	湯坪	散布地	縄文	縄文土器	
13	妻の神古墳	古墳	縄文	縄文土器（後期）、人骨	
14	若神子	散布地	古代	土師器、須恵器	
15	上小屋	散布地	縄文・古代	縄文土器（後・晩期）、土師器、須恵器、小石斧	
16	花立森	散布地	縄文	縄文土器	
17	下舘	散布地	古代	土師器	
18	御堂	散布地	縄文	縄文土器（中期）、弥生土器、環石	
19	新田	集落跡	縄文	住居跡状遺構、土坑、捨て場、縄文土器（前・中期）、石器	平成13年調査　岩手埋文
20	久田	集落跡	縄文・平安	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、配石、縄文土器（後期）、石器、土師器、須恵器	平成13年調査報告遺跡
21	下浅倉	散布地	縄文	縄文土器、石斧	
22	北伊手	散布地	縄文	縄文土器（中・晩期）、石器	
23	西風	散布地	縄文	縄文土器	
24	馬場崎	散布地	縄文	縄文土器（中・晩期）、石冠、土偶	
25	角屋	散布地	縄文	縄文土器（後期）	
26	曽木田	散布地	縄文	縄文土器（晩期）	
27	和野	散布地	縄文	縄文土器（晩期）	
28	赤金	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）	
29	古歌業館	城館跡	縄文・中世	縄文土器（中期）、堀	
30	根津葉	散布地	縄文	縄文土器（後期）、石器、獣骨	
31	重王堂	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石鏃、石斧、土偶	
32	二股	散布地	縄文	縄文土器	
33	中屋敷	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）、石棒、丸石	

第6図　周辺の遺跡分布

子遺跡では後期中葉～後葉の集落跡、上鷹生遺跡では後期の墓域が検出されている。

これらの遺跡と本遺跡との比較検討については章を改めて、考察を加えることとする。

註

1) 近隣住民からの聞き取りに拠れば、今回の調査区域である残丘北～北西部分は、現況の棚田となる以前には緩斜面であり、馬の放牧場であったという。この緩斜面を造成して棚田とした訳であるが、Ⅲａ・Ⅲｂ層ともにその造成時に動かされたもの－本来はクロボク土であったものが、造成により旧表土層や盛り土層と混ざったものであると解釈できる。Ａ区～Ｃ区に設定した土層観察ベルトを参照すると、Ａ区では本来のクロボク層であるⅢｃ層がごく僅かに薄くしか残存していない。つまり、Ａ区北部の６Ｅ・６Ｆ・７Ｅグリッド付近においては造成に際しての削剥がフラットに行われた訳ではなく、ある程度地山面付近まで削剥されたものと推測される。このことは、遺構が密集する当該グリッドにおいて、殆どの遺構が地山上面でしか検出出来なかったことから傍証される。但し、Ｂ区北東端付近～Ａ区北縁辺、特にもＡ１建物跡付近においては様相が異なる可能性がある。すなわち、当該部分で基本層序Ⅲｂ層と捉えた土層が建物構築時の整地層だった可能性が高いからである。この点については、第Ⅳ章において後述する。

2) 江刺市全体の遺跡分布については、岩手埋文1979・1999等の記述を参照していただきたい。

3) 本地域は開発行為にかかることが少なく、かつ緩やかな丘陵が連続する地形的環境に鑑みると未発見の遺跡が多いものと考えられる。開発行為に伴って新規の遺跡が発見される可能性は高いであろう。例えば本文中で言及した新田遺跡は、伊手川河川改修事業に伴う試掘調査で確認された新規登録遺跡であった。

Ⅲ　調査方法と整理方法

１．野外調査の経過

本遺跡の調査に先立って、平成13年5月28日、委託者立会のもと現地確認を行い、調査範囲等の確認を実施した。調査区は休耕田および畑地であるが、休耕田部分には丈の長い雑草が生い茂っており、現況の地形を測りかねる状況であった(写真図版3)。

6月8日、調査事務所プレハブへ機材を搬入して調査を開始した(登録作業員22名)。除草および雑物撤去作業を行う。11日、雑草の除去が終了。調査区の現地形が２段の棚田状態であることを確認した。早速、文化課の試掘トレンチ痕跡の位置および土層を確認した。さらに、トレンチが入っていない部分について、新規に試掘トレンチを設定し、掘り下げを行った。これら試掘トレンチの様相から、棚田上段部分については旧地形を改変し削平によって平坦な段を作り出しているものと考えた。下段部分については、試掘報告どおりに、黒色土が厚く残存していた。この時点では、上段部分では遺構の遺存状態が悪いものと推測され、調査の主体は下段部分となるものと考えた。12日、県教委生涯学習文化課・中村主任主査来跡、現地指導。18日から重機による表土・盛り土の全面的掘削を開始し、黒色土層(Ⅲ層)を露出させた。表土・盛り土の掘削は、断続的に7月初旬まで行った。表土・盛り土を除去した結果、調査区の旧地形は本来緩やかな北西～北向きの斜面であり、現況の棚田は斜面上方の切り土と下方の盛り土により人工的に造られていたことが判明した。後日、周辺住民から聴取したところでは、戦後の造成によるものとのことである。一方、表土・盛り土剥ぎと併行して遺構検出を順次行った。Ⅲ層面が縄文時代の生活面であると認識し、いわゆる「黒に黒」状態ではあるがこの面で遺構検出することを目指した。しかし、Ⅲ層上面では遺構プランは明瞭ではなく、Ｂ区北東側７Ｆ～８Ｆグリッドについて2×2mの小グリッド単位で掘削を実施した。Ｂ区の南東側についても各所にサブトレンチを設定して層位を確認しつつ、順次掘削しながら遺構検出を行ったが明瞭には把握できな

かった。この時点で、黒色土から遺物は出土しており、本来遺構に伴っていた遺物を遺構外として取り上げてしまったものが多いと思われる。結果的に黒色土面で検出した遺構でも、面的な把握が明確にできた遺構は少なく(例えば古代のB13住居跡ー火山灰の存在により辛うじて把握できた)、多くはサブトレンチにより壁・床面を確認したものばかりであった。19日、興国設計㈱に委託した調査区内の基準点杭打設作業が開始された。26日、調査区低位面(C・D区)の重機による表土およびⅡ層砂質土の除去を開始(～7月4日)。B区西側・D区の土層断面を検討し、Ⅲb層までは人為堆積層と判断。Ⅲb層までは重機を用いて掘削することとし、23～24日、掘削を行った。7月末からB区中央部付近で検出された住居跡・土坑群の精査に着手した。当初、縄文時代の遺構のみを想定していたが、少量ながら土師器片も出土しており、古代の遺構の存在も予想された。

8月1日、前日夜半からの豪雨により伊手川が増水し、調査区付近でも水位が急激に上がる。第2図に示したとおり、調査区付近では伊手川が北側に膨らむように緩く湾曲して西流しており、そこに伊手川の支流・荒谷川が北から合流している。その荒谷川から流れ込んだ濁流が反対側(南側)の川岸を抉る状況となった。調査区は川岸から離れており、かつ河岸よりも一段高位であるため直接の被害はなかったが、調査事務所のプレハブへ配電するため川岸に仮設した電柱が、地盤を抉られて宙吊りとなって川に落ち込んでしまった。普段は水量少なく穏やかな伊手川が、いざとなるとまさしく暴れ川となることが実感され、護岸がしっかりとなされていない状況であれば、容易に流路が変わりうることが身をもって思い知らされることとなった。実際、調査区低位面(C・D区)の西辺には旧河道状の落ち込みが見られ、かつての伊手川の流路であった可能性がある(写真図版51)。27日、江刺市の宝性寺遺跡の調査開始に伴い、作業員6名が移籍し作業員18名に減。この時期は主にB区中央部の住居跡・土坑の精査を継続するとともに、C・D区に新規の試掘トレンチを設定し、D区(南端付近)については部分的な黒色土掘削を行った。

9月3日、新田遺跡の調査が終了し、作業員13名増員となるが、翌4日には実測を担当していた3名が宝性寺遺跡に移籍(登録28名)。今回の調査では、江刺市内とりわけ地元伊手地区の作業員が多く、かつ江刺市内で本遺跡および新田遺跡・宝性寺遺跡と3遺跡について調査が行われる形となっていたことから作業員の配転が頻繁であった。調査開始時に集まった作業員は調査経験のない“初心者”ばかりであったが、調査に慣れた頃に他遺跡に異動ということになり、必ずしも調査にいい影響は及ぼさなかった。この時期、A・B区の検出遺構の精査を進める。A区では、大形の竪穴住居跡(A1住居跡)で廃棄された多量の遺物が出土した。また、斜面部のⅢ層中で礫群が確認されはじめ、結果的に弧状の配石遺構(A1配石)であることが判明した。一方、B区では縄文後期の遺構とともに、平安時代の住居跡が複数検出された。以降、翌10月にかけて、これらの遺構について精査を急いだ。

10月21日、現地説明会を開催した(参加者約60名)。22日、調査範囲について、水沢農村整備事務所および県教委の立会のもと現地協議が行われた。その結果、調査区低位面(C・D区)については工法変更することで現状保存することとなった。したがって、調査面積3,000㎡のうち、低位面約1,000㎡については遺構検出および一部掘削した現状で調査終了となり、精査面積は事業により完全に削平される高位面約2,000㎡ということになった。同月下旬、A区で検出されていた土坑4基に柱痕跡が認められ、大径の柱穴であることが判明した。この時点で、先に検出されていた亀甲形建物と同様の形態を想定して、対応する位置に柱穴を探したものの検出できなかった。

11月5日～16日、佐々木信一調査員の調査支援を受ける。5日、大形の住居跡プラン(B11住)の精査開始。同日、㈱トプコンの菊池氏が来跡し、A区配石遺構(A1配石)についてデジタルカメラによる写真測量のデ

モンストレーションを実施した。8日、セスナ機による調査区全体の航空写真を撮影(写真図版１；この時点で大形建物跡・Ａ１建は未確認だったため写っていない)。この頃より、調査区が夜間の冷え込みにより凍結、霜が生じるようになった。とりわけ調査区が北西向きの緩斜面であるため午後にならねば陽が当たらず、調査に支障が生じるようになった。9日、Ｂ３住カマド精査。この際、カマド脇で攪乱状の土層を確認。12日、この「攪乱」がA12住床面からＡ区９Ｅグリッドに延びる溝状プランであることを確認。覆土は攪乱に似ているが、プランを追って順次精査。14日、この「溝」が既に検出・精査していた大径の柱穴を囲む位置にあること、次いでこの「溝」が実は壁柱穴列であること、掘り方覆土部分が攪乱状に見えていたこと、が判明した。このことから柱穴と溝が一組の遺構－円形プランの大形建物跡であることが把握された(Ａ１建物跡)。21日、北上市埋文センター所長・沼山氏来跡、Ａ１建物跡等について指導・助言をいただく。26日、八木勝枝調査員が調査支援のため合流(～30日)。同日午後、県教委生涯学習文化課と水沢農村整備事務所の立会のもと、野外調査の終了確認が行われた。その結果、調査状況から判断して、11月30日で調査終了する予定となった。主にＡ区の配石およびその下位の精査を進めた。29日、配石より下位面、中掫浮石より上位のⅢｃ層下位で住居跡を検出し(Ａ３～５住居跡)、精査を急ぎ実施する。ここに至り、予定の11月末日での調査終了が難しくなり、12月5日まで再延長された。当初の終了予定日の11月30日、主として実測に必要な機材のみを残して、その他の機材を埋文センターへ搬出した。12月4日、Ａ５住居跡の精査を終了。柱穴状ピット群の平板実測を実施する。12月5日、残りの機材を搬出、柱穴の写真撮影等の残務を処理。現場作業をすべて終了、撤収した。

野外調査日数は100日、稼動作業員数は延べ1,786人であった。

２．野外調査の方法

〈グリッド設定と遺構名〉　平面直角座標系第Ｘ系に沿うようにグリッドを設定した。まず、調査区内に設定した基準点１(Ｘ＝－91,500.000、Ｙ＝39,700.000)を調査座標原点として、第Ｘ系に載り基準点１で直交する東西・南北方向の直線を基軸線とした。この基軸線をそれぞれの方向に10m単位で区切り、調査区全体を覆うように10m×10mのグリッド〔区〕を設定した。グリッドの呼称は北西隅を基点とし、東方向へは１～12のアラビア数字、南方向へはＡ～Ｋのアルファベットを付した。大グリッドの表示は数字とアルファベットの組み合わせで２Ｊ、５Ｆ、10Ｄ等と呼称する。さらに、この大グリッドを東西・南北ともに25分割して２ｍ×２ｍの小グリッド〔小区〕に分割した。小グリッドについても北西隅を基点に、東方向には１～５のアラビア数字、南方向にはａ～ｅのアルファベットを付した。小グリッドの呼称はグリッド名との組合せで、２Ｊ３ａ、５Ｆ２ｅ、10Ｄ５ｂ等と表示した。調査区内に設置した基準点(２点)・補点(４点)の測量成果値は、次のとおりである。

基点１	Ｘ＝ －91,500.000	Ｙ＝ 39,700.000	Ｈ＝134.492
基点２	Ｘ＝ －91,470.000	Ｙ＝ 39,700.000	Ｈ＝133.031
補点１	Ｘ＝ －91,500.000	Ｙ＝ 39,680.000	
補点２	Ｘ＝ －91,470.000	Ｙ＝ 39,680.000	
補点３	Ｘ＝ －91,470.000	Ｙ＝ 39,750.000	
補点４	Ｘ＝ －91,450.000	Ｙ＝ 39,750.000	

第１表　遺構名の変更・抹消

遺構種別	旧遺構名	新遺構名	備考
竪穴住居跡	Ｂ４住居跡(旧)	登録抹消→新規検出分に流用	古代住居と推測したが抹消。Ｂ12住居の南側。
	Ｂ５住居跡(旧)	登録抹消→新規検出分に流用	縄文住居と推測したが抹消。Ｂ４住居(新)の東側。
	Ｂ７住居跡(旧)	登録抹消→新規検出分に流用	古代住居と推測したが抹消。Ｂ６住居の北側。
	Ｄ１住居跡(旧)	Ｄ１焼土遺構	遺構名は新規検出分に流用。
掘立柱建物跡	変更・抹消なし		
土坑	Ａ１土坑	Ａ１建物跡主柱穴	
	Ａ２土坑	Ａ１建物跡主柱穴	
	Ａ３土坑	Ａ１建物跡出入口	
	Ａ４土坑	Ａ１建物跡出入口	
	Ａ５土坑	Ａ１建物跡主柱穴	
	Ａ８土坑	Ａ１建物跡主柱穴	
	Ｂ32土坑	Ｂ１住居跡床面土坑	
	(Ｂ40～43土坑)	登録なし、欠番	
配石遺構	Ｂ１配石遺構	登録抹消→「Ｂ区礫群」	
焼土遺構	Ａ３焼土	Ａ４住居跡・炉	

一方、調査区は現況では３段の棚田であったため、現況の地形とグリッドが必ずしも合致しなかった(斜面に対してグリッドが斜に掛かる)。そこで調査では便宜的に、現況の地形を基に(具体には田面別に)した「区名」を併用した。具体には、高位田面(上・中段)については東側からＡ・Ｂ区、低位田面については水路を境として東側からＣ・Ｄ区、北東側の張出し部分をＥ区、とそれぞれ呼称した（第10図)。

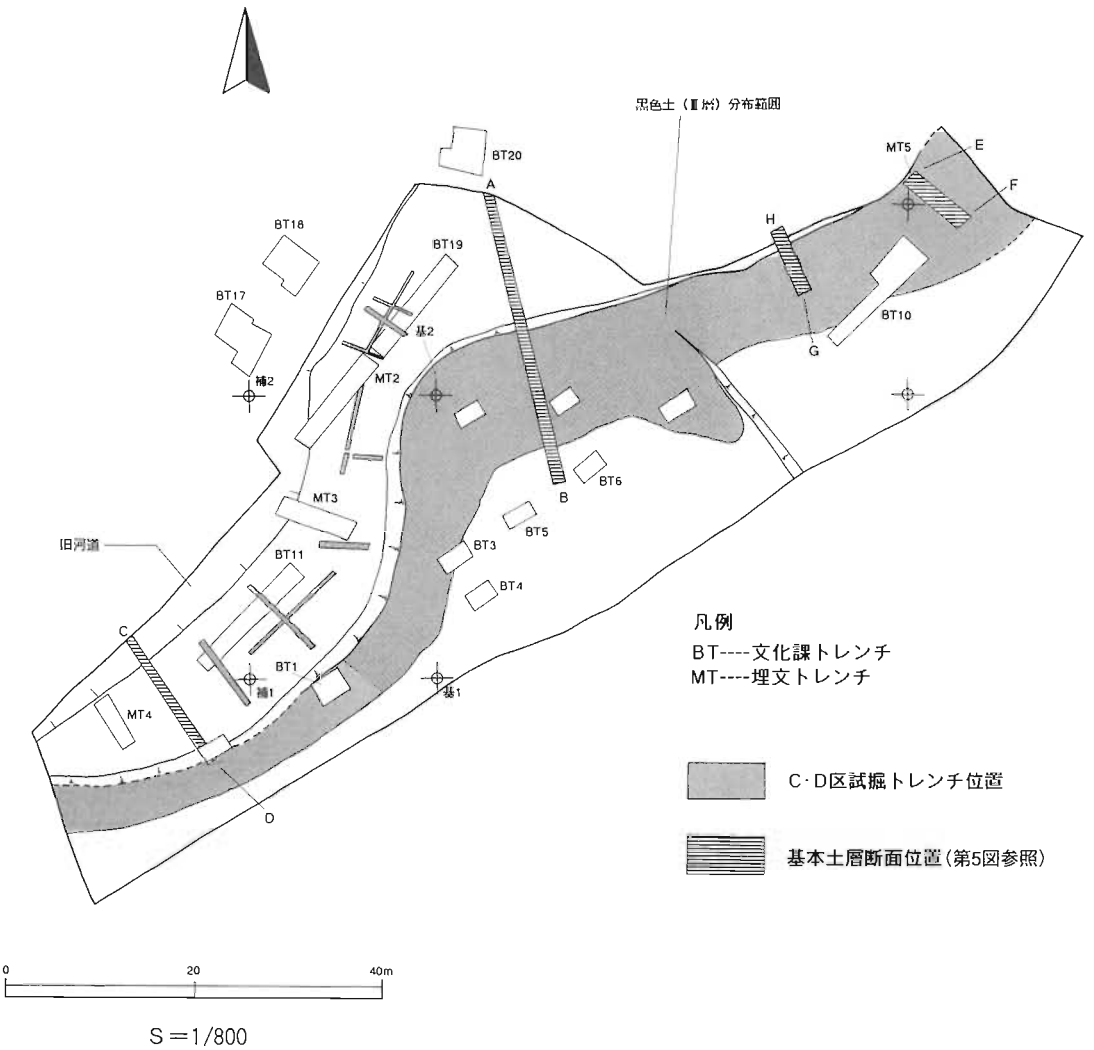
検出した遺構については、区毎に遺構種別と検出順の連番を組合せた名称を付した。すなわち、Ｂ８住居跡、Ａ１建物跡、Ｂ20土坑等と呼称した。遺構のうち幾つかについては、現場で付した遺構名を登録変更・抹消したものもある。遺構名の変更・抹消の状況は第１表のとおりである。

〈粗掘と遺構の検出〉　調査開始時点で、文化課の試掘トレンチが埋め戻されていなかった。遺構・遺物の状況および層序把握のため、文化課試掘トレンチの土層を確認するとともに、調査区内の任意の地点に新規の試掘トレンチを入れた(第7図)。調査区内には文化課トレンチが12箇所（文Ｔ１～11､19）設定されている。文化課の試掘調査では、文Ｔ11で縄文後期の遺物包含層、文Ｔ10・19で竪穴住居跡・土坑が検出され、文Ｔ１で縄文土器が出土したと報告されている(岩手県教委2001；一部を第8図に引用)。実際に文化課トレンチを確認したところ、文Ｔ10で住居プランの一部が確認でき(後述のＡ１住居跡)、文Ｔ19では截り合った複数の住居プランが認められた(註１)。文化課トレンチおよび新規トレンチの土層観察の結果、調査区の高位部分(Ａ・Ｂ区)については遺構上部が削平されており遺構の遺存状態は良好ではなく、低位部分(Ｃ・Ｄ区)でのみ遺物包含層であるⅢ層が厚くなると考えた。ところが、調査区高位部と低位部の段間法面に新規トレンチをいれたところ、高位部で地山と認識していた層が実は厚い盛り土層であり、盛り土下位には低位部分と同じくⅢ層が残存していることが判明した。

高位部の表土・盛り土層、低位部の表土については重機を使用して除去した。Ⅱ層以下については基本的に人力で粗掘りを行った。遺構検出は、Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ層については各層上面で１回のみ実施したが、Ⅲ層については掘削の進行に応じて適宜実施した。縄文後期・古代の遺構検出面がともにⅢ層中にあり、かつ遺構覆土との区別がつきにくかったためである(黒色土面に黒色プランで検出)。ただし結果的にはⅢ層で検出できずにⅣ層まで下げた時点(構築面よりも下げた面)で検出した遺構も多い。

〈遺構の精査と出土遺物の取り上げ〉

遺構の精査は、住居跡は４分法、土坑・柱穴・焼土等は２分法を原則とした。ただし、斜面下方が消失している住居跡の一部に関しても２分法を採用して精査を行っている。精査の各段階で、必要に応じて写真撮影や断面・平面実測を行った。



第７図　トレンチ設定位置

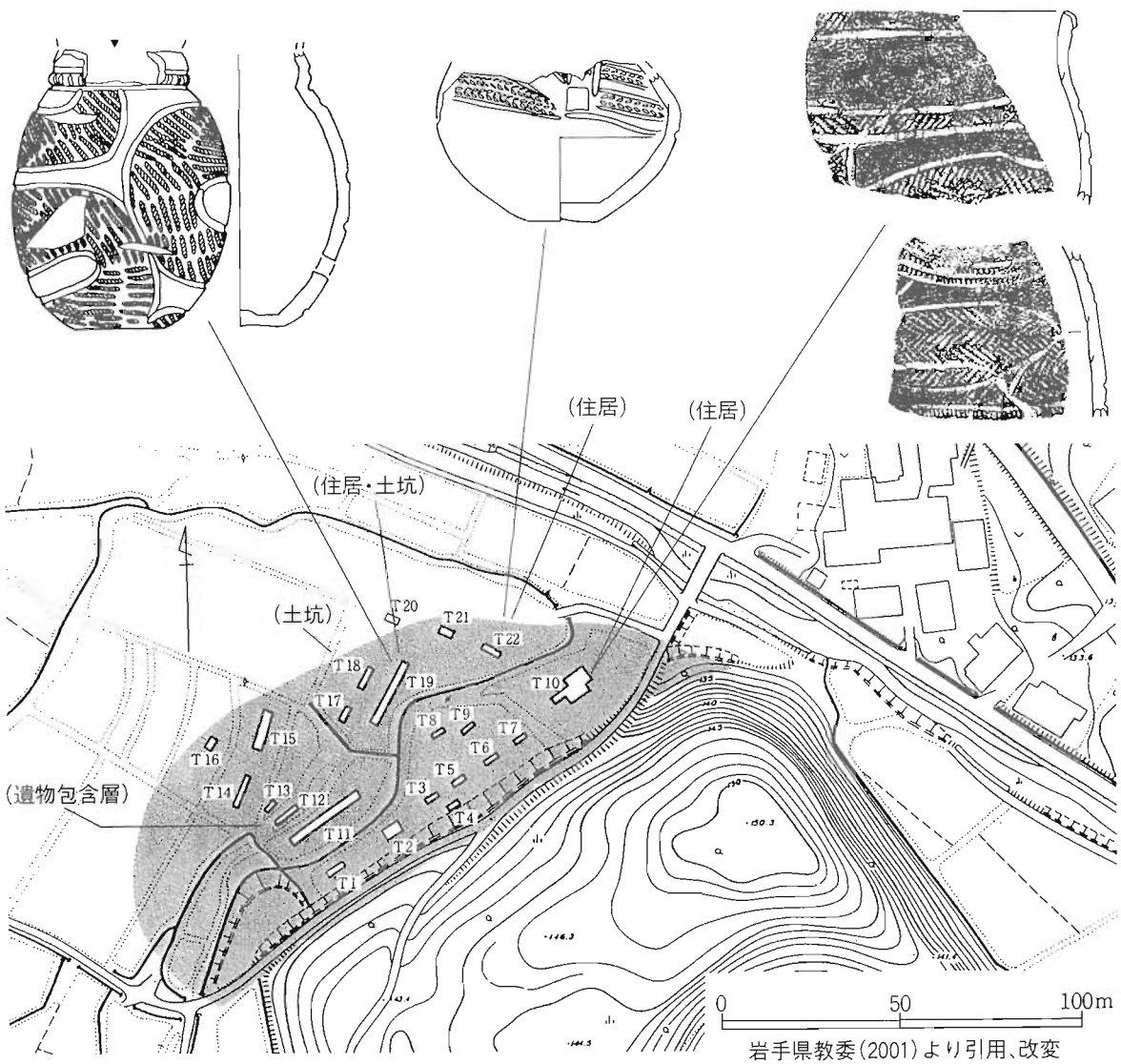
遺構内の出土遺物については、原則として「覆土上部・覆土下部・床面直上・床面」〔古代住居跡の場合はさらに「カマド」〕等に区分して取り上げた。また、一部の遺構については土層観察ベルト部分に限って細分した覆土層位で取り上げたものもあるが、逆に一括して「覆土」で取り上げたものもあり、徹底していない嫌いがある。遺構外の出土遺物については、グリッド別に出土層位を記録し、適宜、写真による記録を行って取り上げた。従って、遺構外出土遺物については、多くが出土位置・状況の図面での記録をとっていないものである。精査における観察事項は、可能な限りフィールドカードや野帳に記録し、広汎な情報の収集に努めた。

〈実測方法・写真撮影〉

遺構の実測は、いわゆる簡易遣り方によって行った。なお、住居跡状遺構や土坑の一部については平板測量で実測している。遺構の実測図は、住居跡・土坑・掘立柱建物跡については1／20縮尺で、古代住居跡のカマド・土器埋設遺構・焼土遺構については1／10縮尺で平面図・断面図を作成した。土層の観察に際して、色調の判別は『新版 標準土色帳(第10版)』(小山正忠・竹原秀雄 1990)に拠った。土層注記の表現について

は、以下のとおりである。土質については概ね「砂・砂質土・シルト(壌土)・粘土質土・粘土」で記録した。また、粘性・締まりについては、野外調査では概ね「粘性：強・やや強・中・やや弱・弱(・なし)」「締まり：(堅く締まる)・あり・ややあり・中・ややなし・なし」という表現で記録したが、本報告書では「粘性：強・弱(・なし)」「締まり：あり・なし」のみ表記し、各属性の中間表記(「やや～」、「中」の類)は記さないことを原則とした。従って、注記において各属性の記載がない場合は、その土層が中間的性質であることを示している。また、含有物等については、「10%含む」「少量含む」等、表現にばらつきがあるが、統一していない。

写真撮影は、当初、6×7cm判カメラ(モノクロ)を主として、35mm判カメラ2台(モノクロ・カラーリバーサル)を補助カメラとして使用した。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるため、撮影カードを使用している。また、適宜、ポラロイドカメラを使用し、文章記載による記録を補完した。また、調査終盤にはセスナ機による調査区全体の航空写真を撮影している。



第8図　試掘調査時の検出遺構・遺物

3．整理の方法と経過

平成13年11月１日～平成14年３月31日の期間に調査記録および出土遺物の整理を行った。前述のとおり野外調査を12月５日まで継続したため、整理開始から約１ヶ月間は調査員不在のまま整理作業を進めざるを得なかった。整理作業のおおまかな推移は、次のとおりである。

〈遺構〉　遺構の実測図は遺構毎の分類・整理および点検を行った後に、必要に応じて図面合成を行って修正図(第二原図)を作成してトレースした。図版の作成・修正は３月上～下旬に行った。原図・修正図には番号を付して図面台帳を作成した。

〈遺物〉　野外調査中に並行して遺物洗浄作業を行い、11月中～下旬に洗い残し分を処理した。室内整理が開始された11月以降、遺物を遺構・グリッド別に仕分けした後、以下の手順で資料化を図った。

土器・土製品：平成13年11月～翌年1月中旬まで、遺構・グリッド別に接合・復原・選別・登録を行った。整理場所の関係で、土器を一斉に広げるスペースがなく、原則として異なる遺構内・遺構外(グリッド毎)で分けて接合を行い、その後に遺構内と隣接グリッドで接合を実施した。時間的な余裕がなく、スペースもなかったため、早目に見切りをつけた形であり、本来はもう少し接合するものがあったと思われる。接合の結果、反転実測可能な状態まで接合した個体は立体として登録し、立体とならなかった破片から、口縁部・文様の明瞭な胴部(体部)・底部の破片(主に網代痕のあるもの)を拓影作成用破片として選別・登録した。土器片への出土地点・層位の記名は、最低限に止めて接合分破片についてのみ行った。引き続き、１月中旬から立体土器(および破片の一部)・土製品の実測、破片の拓影作成、写真撮影を行い、順次、図版作成作業を行った。

石器類・石製品：土器・土製品と並行して器種・出土地点別に仕分け・登録し、それぞれ別個に出土地点・層位を記入したビニール袋へ収めた。石器類はすべて登録した。１月中旬に実測を行い、土器・土製品と一括して図版作成を行った。

〈写真〉　撮影したコマ順に整理して写真台帳を作成した後、6×7cm・35mmのネガフィルムはネガアルバムに貼付し、35mmリバーサルフィルムはスライドファイルへ、それぞれ収納した。

4．掲載の方法

(１)図版・写真図版について

〈遺構〉　遺構図版の縮尺は、竪穴住居跡・住居跡状遺構1/60、掘立柱建物跡1/60、土坑1/40、焼土遺構1/40を原則とし、個々にスケールを付した。また古代住居跡のカマドについては、住居全体の平面図には検出時の平面図を合成しており、別個に完掘時の平面図を縮尺1/60で掲載した。ただし、断面図は1/30と平面図とは縮尺が異なっている。図の表現については、当センターにおける一般的な表現方法をとったが、特別な表現方法をとっている場合は、その都度、註を付した。写真図版はすべて任意の縮尺である。

〈遺物〉　遺構内遺物と遺構外遺物を分けて、種別(土器・土製品・石器・石製品)に掲載した。遺物掲載番号は遺物図版・写真図版ともに共通としている。個々の遺物の観察事項については遺物観察表へ記載しており、本文中では特徴ある個体についてのみ言及した。遺物図版の縮尺は、土器1/3、土製品1/2、石器類2/3(石鏃・剥片石器)・1/3(礫石器)、石製品1/3、金属製品1/2を原則とし、個々にスケールを付した。写真図版の縮尺は原則として図版と同じである。

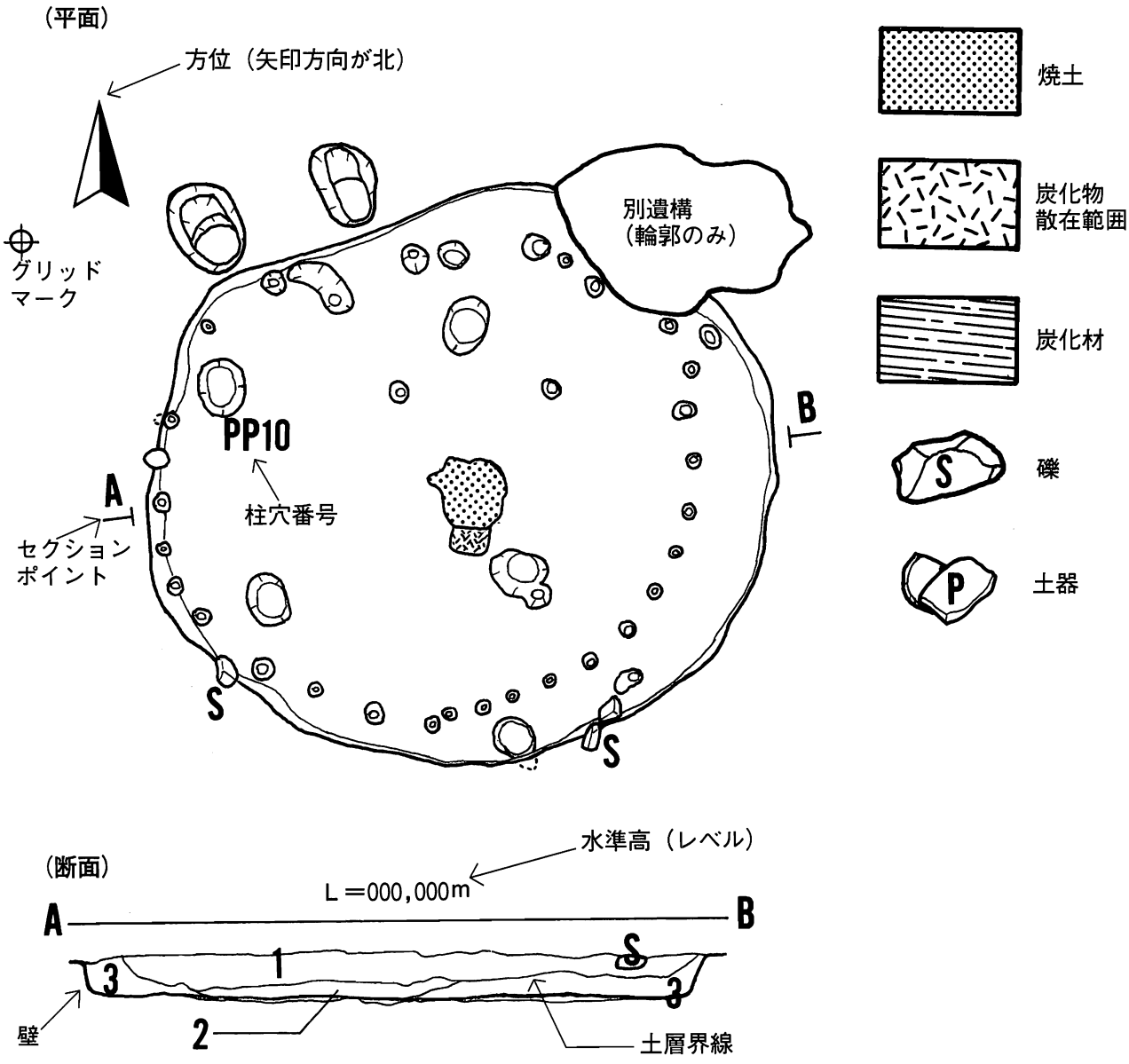
(２)本文執筆分担について

文章記載は一部を除いて千葉・菊池が分担した。

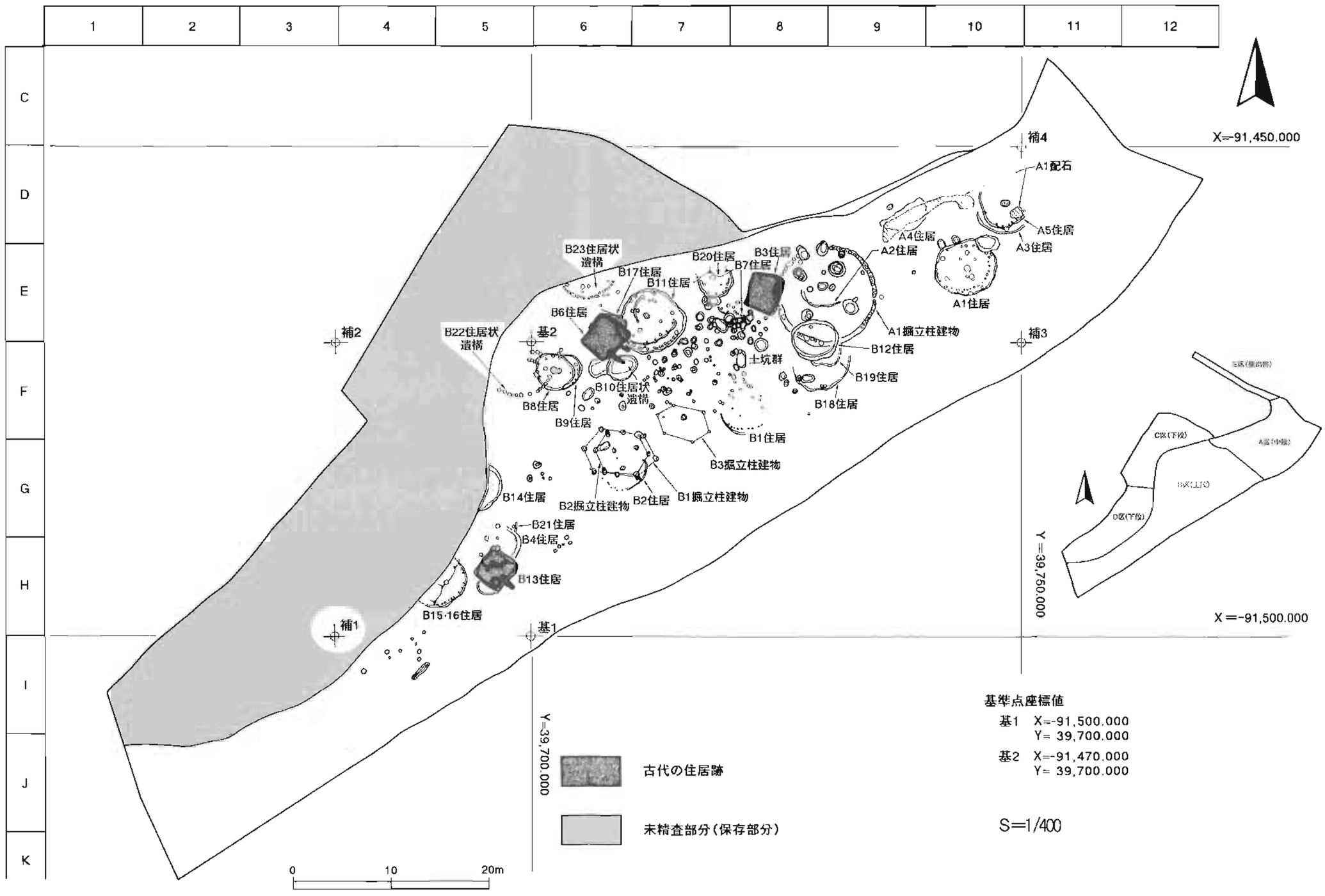
第Ⅰ章	水沢農村整備事務所〔千葉が一部加筆〕
第Ⅱ・Ⅲ章	千葉
第Ⅳ章	千葉：1－(1)(2)(4)・2、菊池：1－(1)(3)(5)
第Ⅴ章	千葉：1、菊池：2
第Ⅵ章	千葉：1－(1)・2－(1)・2－(2)・3－(1)、菊池：1－(2)・3－(2)
附編	高橋俊彦

註

1) 今回の調査範囲外となる文T12～16・22でも遺構・遺物が確認されている。とりわけ文T22では竪穴住居跡が確認されており、今回の調査で確認された縄文後期の集落は低位面部分にも広がるのは確実である。後述第Ⅴ章参照。



第9図　凡　例


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
C
D
E
F
G
H
I
J
K
X=-91,450.000
補4
A1配石
A5住居
A4住居
A3住居
A2住居
A1住居
B23住居状遺構
B17住居
B20住居
B3住居
B7住居
B11住居
B6住居
補2
B22住居状遺構
基2
A1掘立柱建物
補3
B12住居
土坑群
B19住居
B10住居状遺構
B8住居
B18住居
B9住居
B1住居
B3掘立柱建物
B14住居
B2掘立柱建物
B2住居
B1掘立柱建物
B21住居
B4住居
B13住居
B15·16住居
補1
基1
Y=39,700.000
古代の住居跡
未精査部分(保存部分)
0
10
20m
C区(下段)
A区(中段)
B区(上段)
D区(下段)
Y=39,750.000
X=-91,500.000
基準点座標値
基1 X=-91,500.000
Y= 39,700.000
基2 X=-91,470.000
Y= 39,700.000
S=1/400

第10図　遺構配置図

Ⅳ　検出された遺構

Ａ・Ｂ区で検出された遺構は、竪穴住居跡・住居跡状遺構28棟、掘立柱建物跡4棟、土坑44基、配石遺構3基、焼土遺構1基、柱穴状小土坑135基である。一方、Ｃ・Ｄ区では、竪穴住居跡・土坑(建物跡柱穴？)状の平面プラン、焼土遺構が検出されているが、精査を行っていないため詳細不明である。本章では、まずＡ・Ｂ区の検出遺構について種別に記述し、最後に一括してＣ・Ｄ区の遺構検出状況について述べることとする。

なお、遺構内出土遺物については出土層位に従って掲載し、器種別とはなっていない。個々の資料の詳細は遺物観察表に記す。それらの所属時期・分類等については、遺構外出土分を含め第Ⅵ章において述べる。

1．Ａ・Ｂ区の検出遺構

(1) 竪穴住居跡・住居跡状遺構

竪穴住居跡は25棟(Ａ区5棟、Ｂ区20棟)、住居跡状遺構は3棟(Ｂ区3棟)検出された。住居跡状遺構については積極的に住居跡と確定できないものであるが、それに類するものとして一括して本項で扱うこととした。

Ａ1住居跡

遺構（第11～12図・写真図版4～5)

〔位置・検出状況〕10Ｅグリッド北西に位置している。県教育委員会の試掘調査において、試掘トレンチ(第8図の文Ｔ-10)内のⅤ層面で本住居跡のプランの一部が確認されていた。北壁の一部を重複するＡ9土坑に截られている。

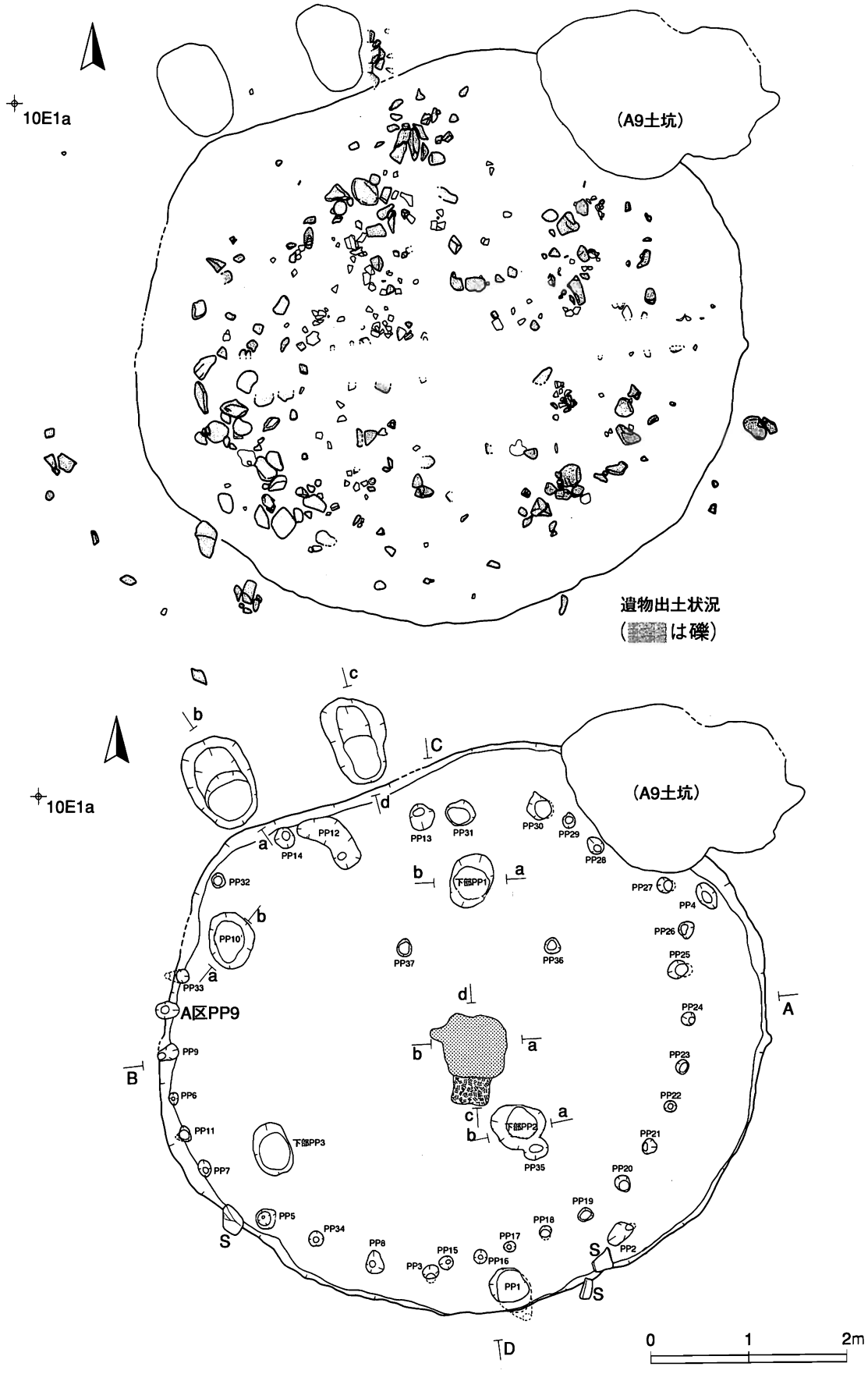
〔平面形・規模〕楕円形基調であるが、北側が拉(ひしゃ)げてやや六角形ぎみの平面形となっている。規模は東西6.3ｍ×南北5.4ｍである。

〔覆土〕概ね3層に大別される。上～中位は自然堆積層と思われる。上位堆積土層は黒褐色土(1層)、南～中央部ではその下位に黒色土(2層)が堆積する。覆土上位の1層には遺物や礫の混入が著しく（第11図・写真図版5)、遺物が集中的に廃棄された様相が窺える。一方、壁際から斜めに床面へと落ち込む形で下位層(3層)が堆積する。この下位覆土は地山ロームブロックの混入する褐色土層であり、やや堅く締まっている。人為的な埋め戻しによるものと考えられる。精査時にはこれらの1～3層をサブトレンチにより分層し、各層ごとに遺物取り上げを行った。

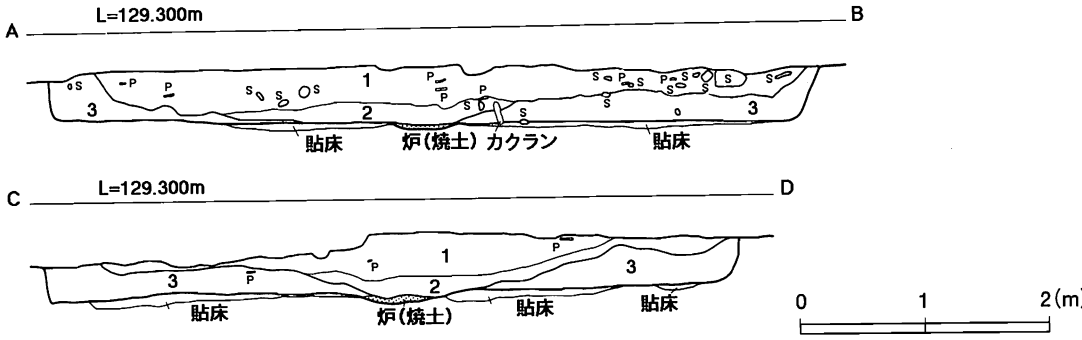
〔壁・床面〕壁は直立気味に立ち上がる。残存する深さは30～50㎝ほどである。床面はほぼ平坦で、中央寄りの一部には貼床が施されている。壁・床ともに概ねⅤ層に相当しているが、斜面下方にあたる北壁上部はⅢｃ層に相当する。

〔炉〕床面のほぼ中央付近に地床炉1基が設置されている。焼土範囲の形状は約60㎝四方の隅丸方形ぎみで、焼土層厚は最大８㎝である。焼成は良い。焼土範囲の南側には炭化物の薄い分布層が見られる。

〔柱穴〕貼床上面において柱穴2基、杭穴状小ピット10基、溝状ピット1基を検出した。また、貼床除去後に柱穴3基、杭穴状小ピット23基が検出されている。柱穴は合計5基で、合成した遺構平面図で見ると五角形状の配置に見えるものの、貼床上面では2基しか検出できず、一連のものではないと思われる。貼床上面の小ピットはほぼ西半部の壁に沿って巡り、東側では検出されていない。逆に貼り床下部の小ピットは東側でのみ弧状に並ぶ形で検出されているが、壁からやや内側に入った位置である。明確に把握できなかったが、柱穴の

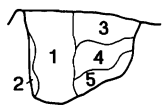

10E1a
(A9土坑)
遺物出土状況
(▒▒は礫)
10E1a
(A9土坑)
A区PP9
下部PP1
下部PP2
下部PP3
PP1
PP2
PP3
PP4
PP5
PP6
PP7
PP8
PP9
PP10
PP11
PP12
PP13
PP14
PP15
PP16
PP17
PP18
PP19
PP20
PP21
PP22
PP23
PP24
PP25
PP26
PP27
PP28
PP29
PP30
PP31
PP32
PP33
PP34
PP35
PP36
PP37
A
B
C
D
S
0
1
2m

第11図　A１住居跡(1)



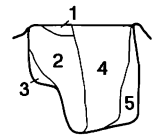
1．10YR2/2 黒褐色シルト　土器片多量混入　粘土塊混入　炭化物粒２％散在　焼土粒微量混入　２～３㎝大の小礫微量混入　拳～人頭大の砂岩礫が層の西側に顕著に混入
2．10YR2/1 黒色シルト　地山土細粒微量混入　土器片混入　層央に３㎝大の焼土塊及び焼土粒混入　炭化物粒微量混入（１層より寡）
3．10YR4/4 褐色シルト　土器片含むも１・２層に比して寡　地山土細粒～極大ブロックが層全体に30%混入　１～５㎝大の小礫微量混入　炭化物粒ごく微量混入
4．(貼床) 10YR5/2 灰褐色シルト　締まりあり　地山土のブロックを30%混入

出入口柱穴
a L=132.600m b



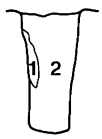
出入り口柱穴（西側）a－b
1．10YR2/3 黒褐色シルト　地山土細粒・炭化物粒微量混入
2．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土細粒10%混入
3．10YR2/2 黒褐色シルト　地山土細粒・炭化物粒微量混入
4．10YR6/6 明黄褐色シルト　締まりあり　黒褐色土10%混入
5．10YR2/2 黒褐色シルト　締まりあり

出入口柱穴
c L=132.600m d



出入り口柱穴（東側）c－d
1．10YR6/6 明黄褐色シルト　締まりあり　黒褐色土５％混入
2．10YR3/2 黒褐色シルト　地山土細粒５％混入
3．10YR2/3 黒褐色シルト
4．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土細粒・炭化物粒微量混入
5．10YR2/3 黒褐色シルト

貼床下部 PP1
L=132.500m
a b

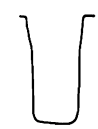


ｐｐ１　a－b
1．10YR4/6 褐色シルト　締まりあり　黒色土微量混入
2．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土細粒～極大ブロック５％混入　炭化物粒微量混入

貼床下部 PP2
L=132.500m
c d

ｐｐ２　c－d
1．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　地山土細粒～極大ブロック25%混入　黒色土混入

PP10 空断面
L=132.500m
a b



炉断面①
a L=132.400m b

炉断面②
c L=132.400m d

a－b、c－d炉
1．2.5YR6/8 橙色焼土　焼成良好である

番号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
直径 cm	36×35	34×17	14×14	29×17	24×22	15×10	20×10	28×18	23×10	58×47
深さ cm	28	26.5	29	27	32.3	22.4	24.3	32.3	22.4	86.5

番号	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	PP20
直径 cm	17×10	62×30	27×24	24×20	15×13	15×15	14×12	15×12	16×15	20×14
深さ cm	記録せず	34	32	30	19	13	15.5	13	15.5	17.5

番号	PP21	PP22	PP23	PP24	PP25	PP26	PP27	PP28	PP29	PP30
直径 cm	16×12	14×13	15×12	15×10	22×18	20×15	20×14	22×15	18×13	30×25
深さ cm	19	22	6.5	18.5	22	28.5	14	19	39	48

番号	PP31	PP32	PP33	PP34	PP35	PP36	PP37	貼床下部PP1	貼床下部PP2	貼床下部PP3
直径 cm	30×25	15×13	14×13	18×15	25×18	17×14	18×15	56×40	58×45	52×37
深さ cm	22	31	記録せず	24.5	13.5	33.7	36.5	97	71	63

第12図　A１住居跡(2)

様相から見れば、建て替えの可能性もあろう。溝状のPP12は後述の出入口状施設の中間に位置しており、出入口に関連する可能性がある。

〔付属施設〕斜面下方にあたる北壁の外側に、大径の楕円形ピット2基が並列して配置されている。2基ともに円形ピットの北側壁が浅い掘り込み状に張出しており、開口部形状は楕円形である。柱痕跡はともに住居本体側で明瞭である。長径85～90cm、短径50～65cm、深さは約80～90cmを測る。2基の間隔は85cmである。このピット2基は当住居の出入口状施設であると推定される。

遺物(第56～62図・写真図版52～57)

〔土器〕覆土、とりわけその上位(1層)から比較的多量の縄文土器片が出土した。総量21.9kgで、うち98点を掲載している(1～89・106～114)。以下、出土層位別にその概要を記すが、掲載点数が多いため特徴的な個体についてのみ触れる。床面出土：1～3。1は変形入組み状の帯縄文が施された注口土器である。2・3は深鉢口縁部で、2は波状口縁の波頂部、3は口縁端内面が肥厚する平縁。覆土下位(3層)：5・7～26。5は床面に極めて近い位置で出土した（写真図版5「遺物出土状況」)。器面が著しく赤みを帯びた壺形土器で、器表面は粗いミガキにより無文となっている。15は波状口縁の深鉢で、Ⅱａ文様帯が上下ともに二重の刻み目帯(口縁端部＝Ⅰ帯？、頸部＝Ⅱｂ帯)により区画され、区画内には櫛掛け状の帯縄文が展開する。覆土上位(1層)：27～36・38～89。30は注口土器の口縁～胴部片と思われる(注口部を欠くため不確実)。口縁部には二股状の小さい貼り瘤が4単位付され、胴部にはいわゆる“ミミズ腫れ”状の微隆起線による文様が施される。赤色塗彩の痕跡あり。33の壺胴部には、非結束の羽状縄文が充填された入組み状帯縄文が展開。40・46・47・72・73・76・78～83の文様は木葉状文的である。40は口縁部に小さい瘤状突起が貼付され、46・47・82(?)では口縁部に沿って二重の刻み目帯が巡る。67の注口胴部片には、やや大振りな突起が貼付されている。覆土(層位が不明確なもの)：106～112・114。106はやや大形の注口土器の注口部片。107はⅡａ帯が無文で、胴部には櫛掛け状の帯縄文。111～112の粗製深鉢はいずれも直線的に外形する器形で、口縁部で僅かに内彎している。出入口ピット覆土：113。底部破片で底面にはナデ。

〔土製品〕4・6・37・90～104・115～116。4・6・37は袖珍土器で、4・37は無文、6は地文のみ。90は便宜的に土製品に含めたが、いわゆる“多孔底土器”の破片と推測される。91は耳栓形の土製品で、耳飾りの類と思われる。92～94は土製円盤。95～99土偶は、いずれも破片で詳細不明。100～102はスタンプ状土製品で、100・101は二叉状の印面部であるのに対して、102は楕円形基調であり形態が異なる。印面部の文様はそれぞれ別個のものである。103は器種不明で、土器の突起である可能性もある。104は土鈴形の小形土製品で、雑な手捏ねの成形である。中位に貫通孔1箇所が穿たれており、垂飾品の類かもしれない。

〔石器〕石鏃1点(105)。無茎で基部に抉りが入って脚状となるが、片側は欠損している。表裏両面ともに一次剥離面を多く残しており、縁辺部にのみ微細な剥離調整が施される。

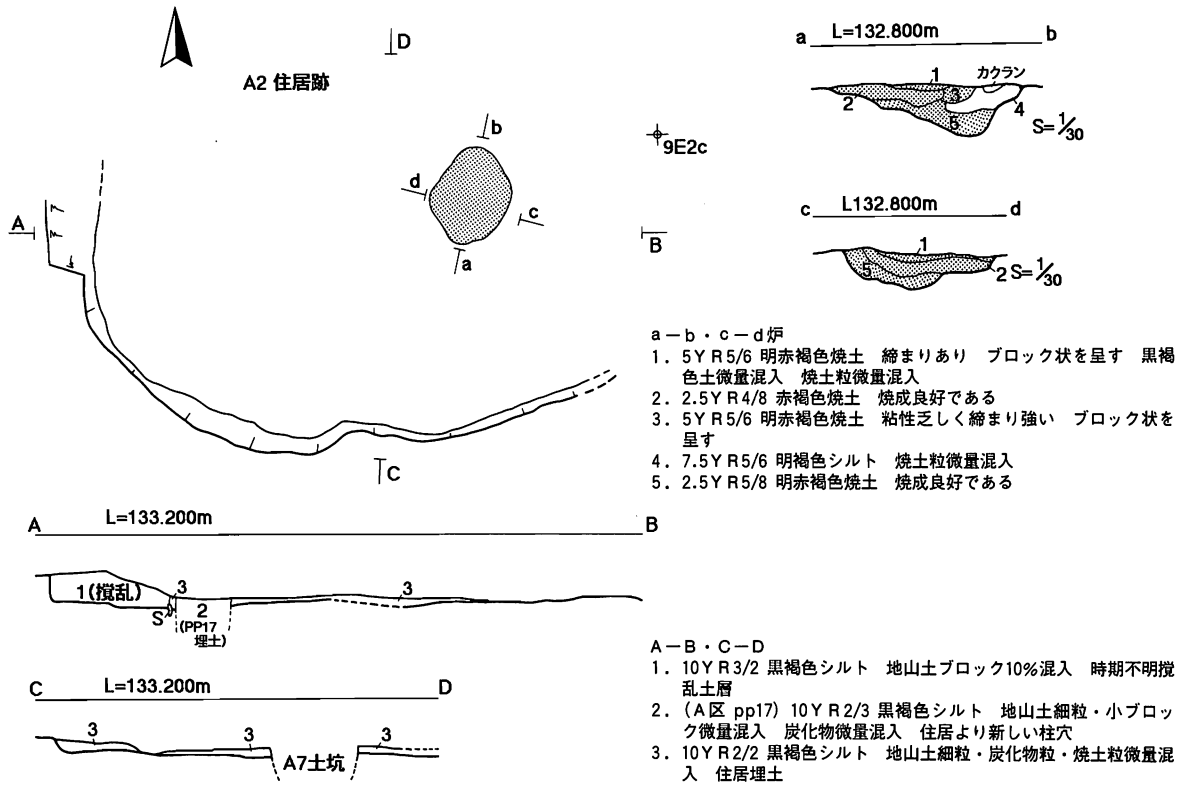
時期　出土した土器はその特徴から見ると縄文時代後期中葉(新)～後葉(古)に属するものが見られる。本住居の所属時期は後期後葉(古)であると推測される。（千葉）

Ａ2住居跡

遺構（第13図・写真図版6)

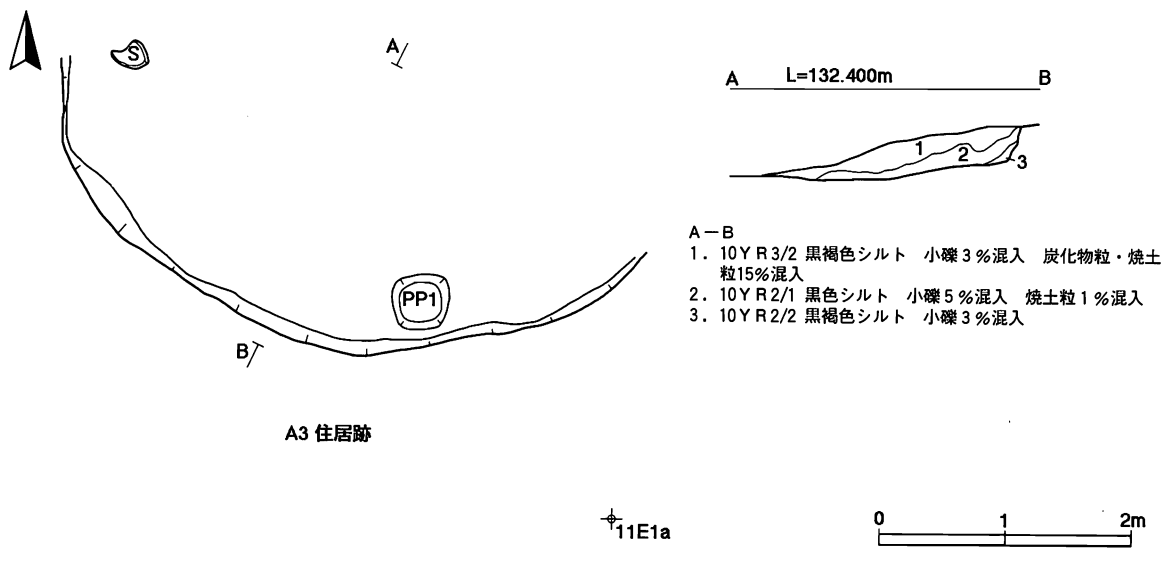
〔位置・検出状況〕8Ｅ区から9Ｅ区に跨って位置する。Ⅴ層面において半円状の黒褐色土の広がりとして検出されている。

〔平面形・規模〕北半が削平されており不明である。残存部から平面形が円形乃至は楕円形であったと推測



a－b・c－d炉
1．5Y R5/6 明赤褐色焼土　締まりあり　ブロック状を呈す　黒褐色土微量混入　焼土粒微量混入
2．2.5Y R4/8 赤褐色焼土　焼成良好である
3．5Y R5/6 明赤褐色焼土　粘性乏しく締まり強い　ブロック状を呈す
4．7.5Y R5/6 明褐色シルト　焼土粒微量混入
5．2.5Y R5/8 明赤褐色焼土　焼成良好である

A－B・C－D
1．10Y R3/2 黒褐色シルト　地山土ブロック10%混入　時期不明撹乱土層
2．（A区 pp17）10Y R2/3 黒褐色シルト　地山土細粒・小ブロック微量混入　炭化物微量混入　住居より新しい柱穴
3．10Y R2/2 黒褐色シルト　地山土細粒・炭化物粒・焼土粒微量混入　住居埋土



A－B
1．10Y R3/2 黒褐色シルト　小礫３%混入　炭化物粒・焼土粒15%混入
2．10Y R2/1 黒色シルト　小礫５%混入　焼土粒１%混入
3．10Y R2/2 黒褐色シルト　小礫３%混入

第13図　A２・３住居跡

できる。〔覆土〕床面直上の炭化物粒、焼土粒を微量に含んだ黒褐色土層のみ確認された。
〔壁・床面〕削平を受け壁は殆ど残存しない。僅かに斜面上方側10cm弱の立ち上がりが確認できたのみである。残存する床面は概して平坦である。貼床はない。
〔炉〕地床炉1基を検出した。焼土は76×61cmの範囲で楕円形状に広がり、最大厚は13cmほどである。
〔柱穴〕検出されない。（菊池）

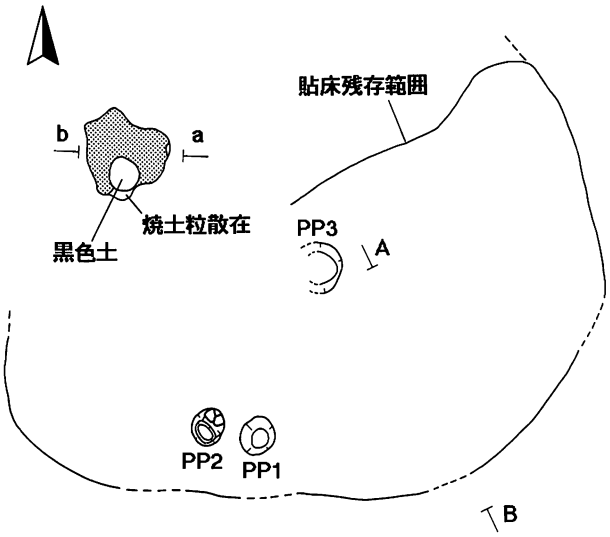
遺物（第63図・写真図版57）
〔土器〕縄文土器約1.2kg分が出土している。117～125。全体の形状がわかるのは壺形土器(117)1点のみである。117は胴部に逆S字状の帯状文が付され、口縁下半～頸部は無文帯となる。119・121・122は鉢の破片で、重畳する横位平行沈線が施され、121・122では縦位の区切りが付されている。123・124では磨り消しによる帯状文が展開する。
時期　出土遺物の様相から、縄文時代後期中葉に属すると推測される。（千葉）

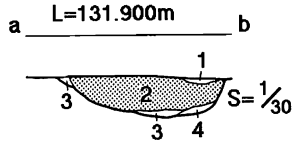
A3住居跡

遺構（第13図・写真図版７）
〔位置・検出状況〕10Dグリッド東側のⅢｃ層下位面で検出した。当住居の下位にA5住居跡が重複して構築されており、当住居がA5住居跡を截っている。
〔平面形・規模〕壁・床面ともに南側(斜面上方)でしか確認できなかった。残存部分の壁は緩い弧状を呈しており、楕円形ぎみの平面形だったものと思われるが、詳細は不明である。
〔覆土〕上位・黒褐色土と下位・黒色土の概ね2層に細分される。全体に小礫が混入し、1層には焼土・炭化物の細粒が混入する。
〔壁・床面〕残存部分では壁はやや外形しており、床面は緩く起伏する。残存する壁高は最大25cmを測る。壁および斜面上方の壁際床面がⅤ層、斜面下方の床はA5住居跡覆土に相当する。
〔炉〕検出されていない。但し、当住居の検出前にA1配石東脇付近のⅢｃ層面で、痕跡程度の焼土があった(検出の際に消えてしまい精査できず)が、これが当住居の炉の痕跡だった可能性もある。
〔柱穴〕1基検出された。径50×47cm、深さが26cmである。主柱かどうか不明である。
遺物(第63～64図・写真図版57～58)
〔土器〕総量約1.5kgの縄文土器が出土した。126～145。126は壺(?)の胴～底部片で帯縄文が付される。127～130の深鉢口縁部には、口縁から胴部まで連続的な帯縄文が展開する。132の口縁部破片は口縁端部に刻み目帯。138・144は小破片であるが、複数段の横位平行沈線が縦位の弧線により区切られる。145は底面に網代痕あり。
時期　出土遺物から判断して、縄文時代後期中葉に属するものと推測される。（千葉）

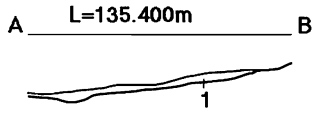
A4住居跡

遺構（第14図・写真図版7～8）
〔位置・検出状況〕9Dグリッドの南東部に位置し、貼床・炉のみを検出した。A1配石の下位に構築されており、配石よりも古い住居跡である。A1配石の裁ち割りの際に、断面で配石下位に広がるフラットな黄褐色粘土層を検出していたが、その時点では配石構築のための整地層と認識した。しかし配石遺構の精査終了後に礫を除去したところ、当該粘土層が半円状に延びることが判明、住居跡の貼床痕跡と認定した。また、





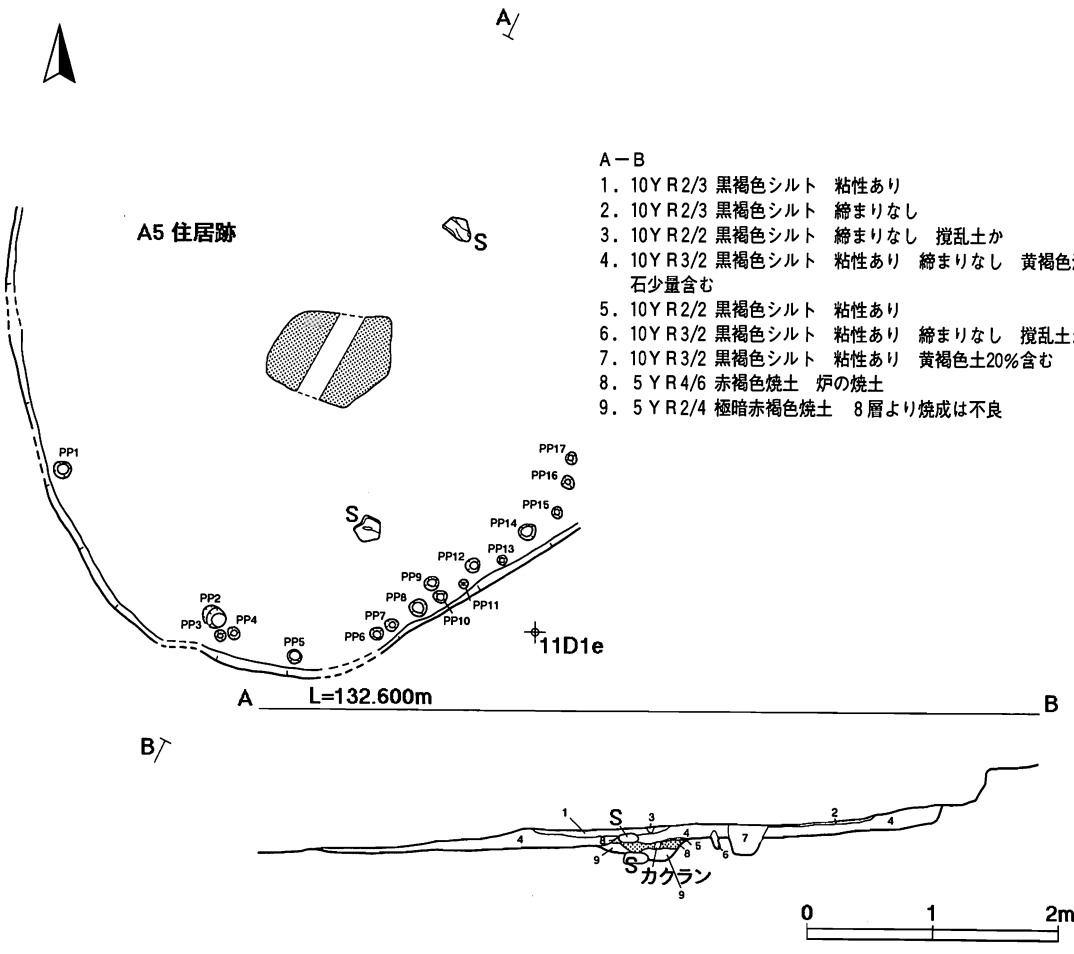
a－b炉
1．10YR2/2 黒褐色シルト　焼土粒微量混入
2．5YR6/6 褐色焼土　焼成極めて良好
3．10YR4/4 褐色シルト　焼土粒微量混入
4．10YR1.7/1 黒色シルト　焼土粒微量混入



A－B
1．10YR7/6 明黄褐色粘土質土　粘性やや強　締まりあり
黒色土10%混入　貼床層

A4 住居跡
（貼床と炉のみ）

10E1a



A－B
1．10YR2/3 黒褐色シルト　粘性あり
2．10YR2/3 黒褐色シルト　締まりなし
3．10YR2/2 黒褐色シルト　締まりなし　撹乱土か
4．10YR3/2 黒褐色シルト　粘性あり　締まりなし　黄褐色浮石少量含む
5．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性あり
6．10YR3/2 黒褐色シルト　粘性あり　締まりなし　撹乱土か
7．10YR3/2 黒褐色シルト　粘性あり　黄褐色土20%含む
8．5YR4/6 赤褐色焼土　炉の焼土
9．5YR2/4 極暗赤褐色焼土　8層より焼成は不良

第14図　A4・5住居跡

それに先だって検出されていた焼土遺構(旧・A3焼土)は当住居に伴う炉跡であると考えて、一括で住居跡とした。

〔平面形・規模〕検出した貼床範囲は、東西約4.6m×南北3.2m(最長幅)の概ね半円状を呈している。残存部分から推測すると、本来の形状は概ね約5m径の円形だったのではないかと思われる。

〔覆土〕本遺跡の上位に構築されているA1配石の断面図(第53図)で見ると、断面A－A´・B－B´の3～4層が本住居の覆土である可能性がある。但し、3層はA1配石の構築に伴う人為層かもしれず、不確実である。

〔壁・床面〕Ⅲc層面にV層系の粘土質土を貼り付けて床面としている。床面は斜面の傾斜に沿って、緩く北西方向に傾斜している。壁は確認できなかった。A1配石断面図でも壁に該当する立ち上がりは確認できない。

〔炉〕貼床残存部よりも斜面下方(貼床範囲外)で、焼土1基を検出した。当該焼土は非常に焼成が良く、最大層厚15cmを測る。この厚い焼土層が当住居の地床炉であると推測される。

〔柱穴〕貼床面で3基検出した。PP1は径31×26cm、深さ27cmを測る。PP2は径32×25cm、深さ27cmを測る。PP3は深さ7cmである。主柱は不詳である。

遺物(第64図、写真図版58)

〔土器〕貼床構築層から出土した縄文土器146・147のみである。

〔石器〕有茎形の石鏃(148)、敲磨器(149)。やはり貼床構築層の出土である。

時期　A1配石との重複関係から、少なくてもA1配石よりも古期(縄文時代後期以前)の住居である。また、貼床構築層から少量ではあるが縄文時代後期の土器片が出土している。これらから、敢えて所属時期を推測すると縄文時代後期と思われるが、論拠が弱く不確実である。　(千葉)

A5住居跡

遺構(第14図・写真図版8)

〔位置・検出状況〕10Dグリッドに位置する。A3住居跡の床面精査中に当住居のプランを検出した。A3住居跡により南側の壁上部を截られている。

〔平面形・規模〕斜面上方でのみ壁・床面を確認した。残存部分はやや一端が張出しており、全体は隅丸方形ぎみの平面形状を呈していたものと思われる。規模は不明である。

〔覆土〕概ね4層に細分されるが、主体は黒褐色土である。

〔壁・床面〕壁は斜面上方でのみ検出されており、床面から直立ぎみに立ち上がっている。床面は緩く傾斜して北側へ下っている。壁および斜面上方の床面はV層相当、斜面下方の床面はⅣ層相当(中掫浮石混入面より下位)である。

〔炉〕地床炉1基を検出した。焼土は不整な五角形状に広がり、最大層厚は約10cmである。

〔柱穴〕17基の杭穴状小ピットが検出された。いずれも浅く小径で、壁に沿って配置されている。主柱穴と思われるものはない。時間の制約から深さを記録出来なかった。

番　号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
直径 cm	14×13	21×16	9×9	10×10	11×11	11×11	9×9	14×13	12×10	10×10
番　号	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17			
直径 cm	8×5	11×10	8×7	15×13	9×8	12×9	11×8			

遺物(第64図、写真図版58)

〔土器〕本住居に伴って出土したものは少ない(A3住居跡の精査に際して本住居覆土の遺物を取り上げてしまった可能性もある)。すべて縄文土器片である(150～153)。150・151の深鉢には多重平行沈線を縦位弧線で区切る文様が施される。〔石器〕覆土から敲磨器(154)が出土している。

時期　出土遺物の様相から見て、縄文時代後期中葉に属するものと推測される。　(千葉)

B1住居跡

遺構(第15図・写真図版9)

〔位置・検出状況〕8Fグリッド南西部に位置する。当該グリッド付近は棚田造成時の削剥が激しく表土直下が平坦なV層面となっている上、当住居東半部は耕作に伴って攪乱されており、住居プランは主に西半の一部でしか確認できなかった。

〔平面形・規模〕上述の状況であるため、全体の平面形は明確ではないが、残存部の形状から見て径5.5mほどの円形を呈していたと考えられる。

〔覆土〕削剥により覆土はごく僅かしか残存していないが、主に黒褐色土に被覆されたものと思われる。

〔壁・床面〕壁は南西部の一部でしか検出されていない。残存する壁高は5cmほどで、床面はV層である。斜面上方の南東側は削剥により壁・床面ともに確認できず、東側は耕作による攪乱を受けており、床面以下まで掘削され失われている。

〔炉〕床面で地床炉1基を検出した。床面(中央付近?)が掘り窪められており、その窪み部に50×70cmほどの焼土が形成されている。

〔柱穴〕床面及び床面と想定される範囲にて、杭穴状の小ピット32基を検出した。いずれも小径で浅い。配置は明瞭ではないが、斜面上方の壁際に巡るものと、炉の周辺に円形ぎみに配置されるものが見られる。

番　号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12
直径 cm	45×37	28×17	56×35	45×30	28×25	30×20	30×25	28×20	30×19	46×32	20×17	20×12
深さ cm	31.1	21.0	36.0	24.0	12.8	34.5	23.0	6.0	33.7	28.7	26.0	21.3
番　号	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	PP20	PP21	PP22	PP23	PP24
直径 cm	25×20	17×15	23×20	25×20	35×27	30×22	15×10	15×10	25×20	18×15	22×14	17×12
深さ cm	22.8	42.0	18.2	25.2	30.3	－	12.8	11.5	15.2	28.7	30.6	7.0
番　号	PP25	PP26	PP27	PP28	PP29	PP30	PP31	PP32	PP33	PP34	PP35	PP36
直径 cm	18×12	17×14	16×14	14×12	16×12	12×10	11×10	20×12	9×8	20×16	15×10	12×10
深さ cm	21.1	23.5	38.8	11.8	25.0	31.6	18.2	26.9	7.9	14.5	－	37.8

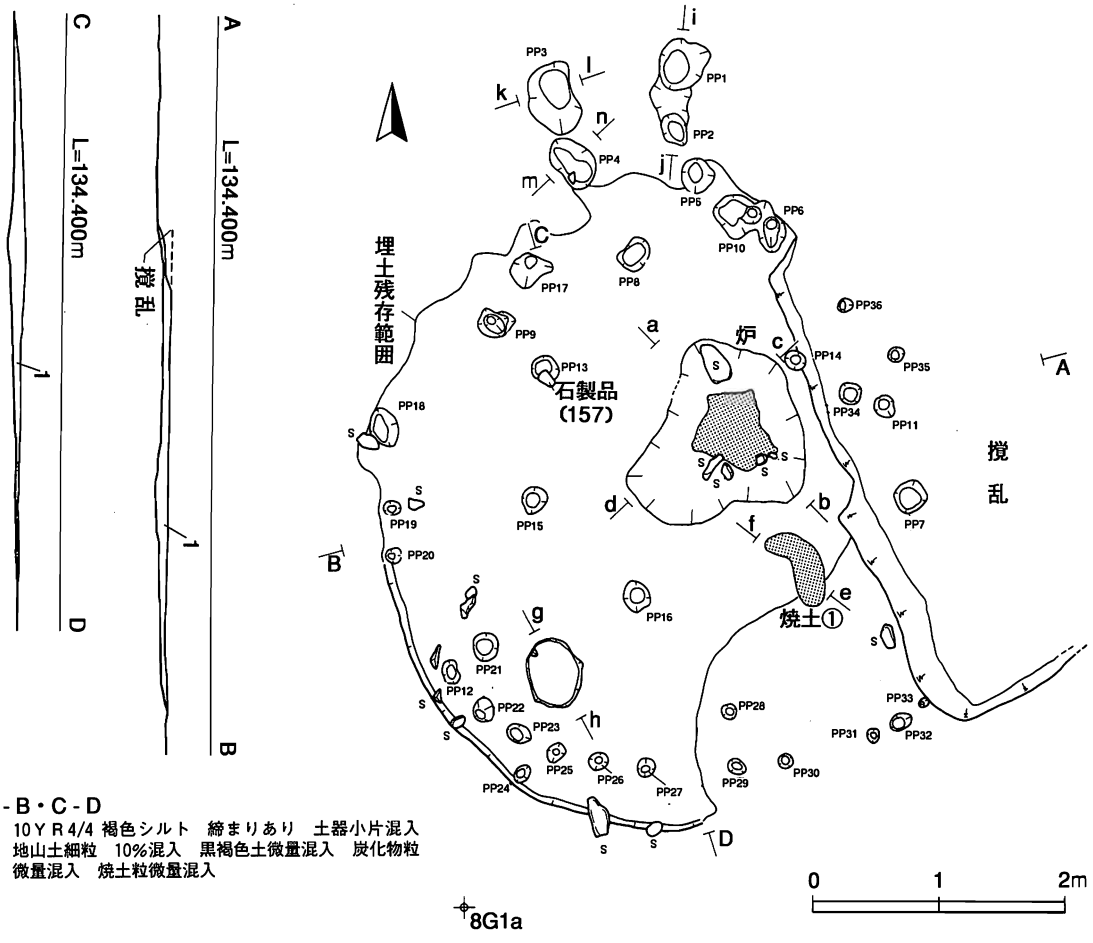
〔付属施設〕推定の住居範囲にあたる斜面下方で、外側へ「ハ」字状に開くように配置された小ピット4基(PP1～4)が検出された。2基が対になっており、東側のPP1・2は浅い溝で連結される。当住居の出入口状施設である可能性が高い。

遺物(第64図、写真図版58～59)

〔土器〕縄文土器が出土しているが、量は約0.45kgと少ない。155～156。

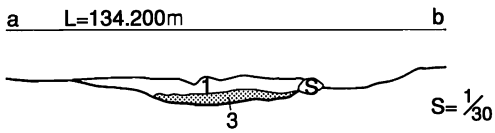
〔石製品〕床面直上で板状石製品(157)が出土した。

時期　出土遺物および住居形態等から見て、縄文時代後期中葉に属するものと推測される。　(千葉)

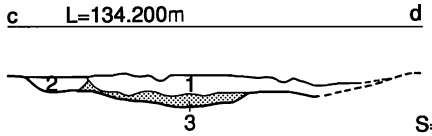


A - B・C - D
1．10Y R4/4 褐色シルト　締まりあり　土器小片混入
地山土細粒　10%混入　黒褐色土微量混入　炭化物粒
微量混入　焼土粒微量混入

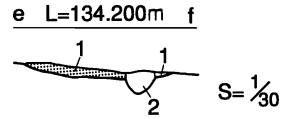
炉断面①



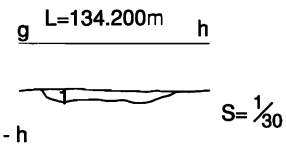
炉断面②



a - b・c - d 炉
1．10Y R3/4 暗褐色シルト　焼土粒・炭化物粒微量混入
2．10Y R3/3 暗褐色シルト　地山土極小ブロック微量混入
3．2.5Y R4/8 赤褐色焼土　焼成良好

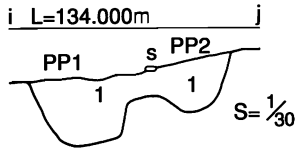


e－f
1．10Y R5/8 明赤褐色焼土　焼成良好　層下位に若干の地山
土細粒を含む
2．10Y R3/4 暗褐色シルト　締まりあり　焼土粒・炭化物粒
微量混入

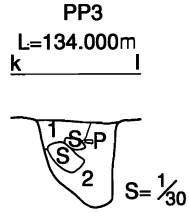


g - h
1．10Y R2/3 黒褐色シルト　締まりあり　土器小片混入
地山土細粒・炭化物粒微量混入

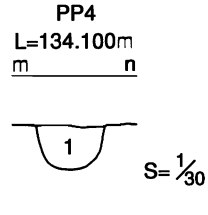
PP1・PP2



PP3

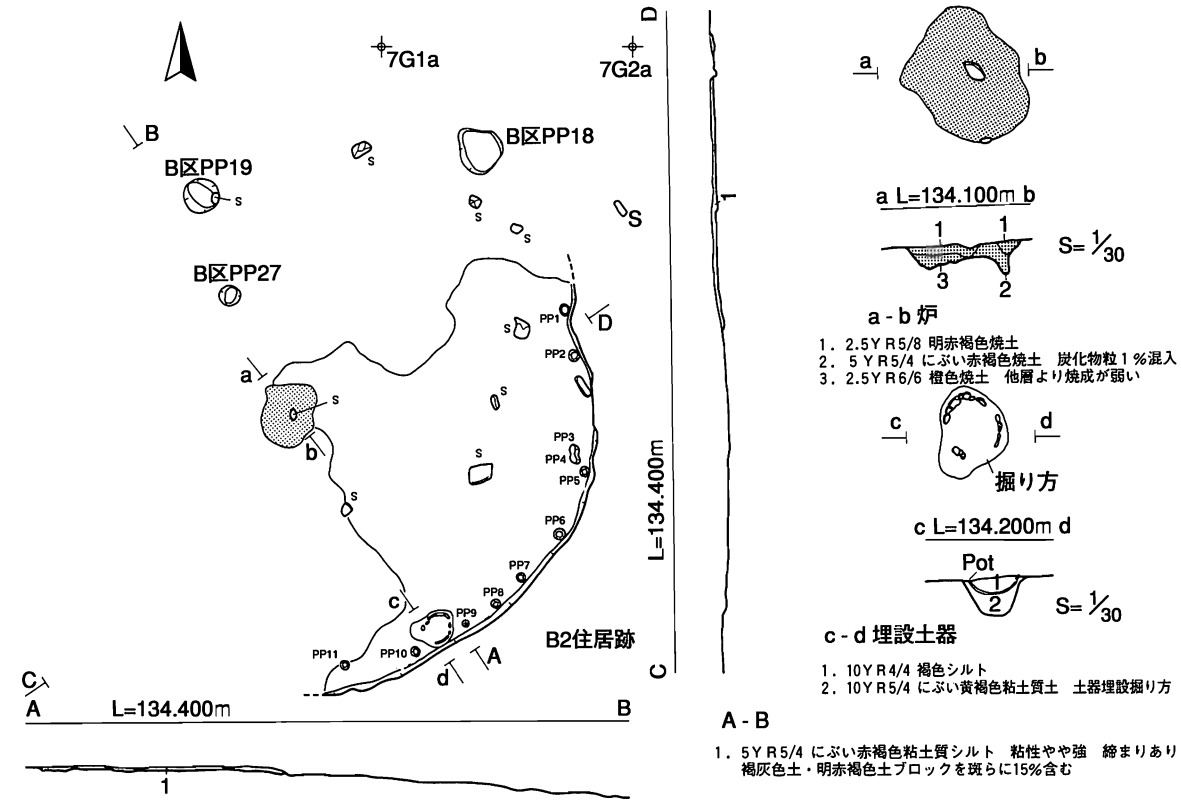


PP4



柱穴
pp 1　1．10Y R2/3 黒褐色シルト　地山土細粒
微量混入
pp 2　1．10Y R2/3 黒褐色シルト　地山土細粒・
炭化物粒微量混入
pp 3　1．10Y R3/3 暗褐色シルト　地山土細粒
10%混入　拳大礫混入
2．10Y R2/2 黒褐色シルト　土器小片混
入　地山土細粒・炭化物粒微量混入
pp 4　1．10Y R2/3 黒褐色シルト　地山土細粒
～極大ブロック微量混入

第15図　B 1 住居跡



番 号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10	PP11
直径 cm	8×7	9×9	8×7	8×7	8×7	9×8	7×7	8×7	6×5	8×7	7×7
深さ cm	15.6	12.5	9.2	11.7	9.9	14.6	5.9	10.1	1.6	7.7	8.5

第16図　B２住居跡

B2住居跡

遺構（第16図・写真図版10）

〔位置・検出状況〕6G～7Gグリッドの V層面で検出した。B1住居跡と同様に周辺の削剥が激しく、当住居プランも斜面上方の南東側の一部でしか確認できなかった。北側でB1建物とB2建物の柱穴を截り、南西部では文化課試掘トレンチ(文T5)により截られている。また、斜面下方のB39土坑とも重複関係があると思われるが、新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕南東側で一部を確認できたに過ぎず、詳細不明である。残存部の様相からは、円形乃至は楕円形状と推測される。〔覆土〕削剥によりごく僅かしか残存していない。

〔壁・床面〕残存する斜面上方でも削剥を受けており、壁は2～3cmほどとごく僅かしか残存していない。炉の南西側は文化課トレンチにより床面下まで掘削を受け、炉の南東側で床面を確認できたのみである。炉を中心とする円形平面と仮定すると全体の1／4程度しか残存していないことになる。残存する床面はほぼV層に相当するが、南東壁際のB1・2建物の柱穴との重複部分にのみ褐灰色土の貼床が施されている。

〔炉〕地床炉の痕跡と思われる焼土1箇所が検出された。焼土は径54×40cmほどの楕円形状に広がり、最大層厚は8cmである。焼土の中央付近および縁辺部に小礫が見られるが、意図的に設置されたものではなく、地山礫が露出したものである。

〔柱穴〕主柱穴は検出されていない。壁際に杭穴状小ピット11基が巡るが、全体に浅いものである。

〔付属施設〕南東壁際の床面で埋設土器が検出された。掘り方は擂鉢形で、口縁～胴上部を欠く鉢形土器を据えている。土器内の堆積土には遺物は含まれていなかった。

遺物(第64図・写真図版59)

〔土器〕床面の埋設土器(158)以外に床面直上で土器小片1点が出土しているが、精査中の手違いで所在不明である。158は鉢の胴下半～底部で、胴部には木葉状の文様が展開している。

時期　当住居に伴う遺物は僅少で量的保証に欠けるものの、床面の埋設土器および住居形態から見て、縄文時代後期中葉～後葉に属する可能性が高い。　(千葉)

B3住居跡

遺構(第17図・写真図版11～12)

〔位置・検出状況〕8E区南西部に位置する。斜面上方から下方にかけて、Ⅲa層上面より設定した試掘トレンチによって浅黄色を呈する火山灰と多量の炭化物が検出されたため、古代の住居跡とみて調査を行った。A1掘立柱建物跡の西側周溝部及びB7住居跡と重複し、これらを截る。

〔平面形・規模〕長辺4m、短辺3.3mの隅丸長方形である。北に対して約15度東偏している。

〔覆土〕黒色土、黒褐色土からなる全て6層に細分される。第2層には二次堆積とみられる浅黄色の火山灰が疎らに混在していた。第3層には降下堆積とみられる浅黄色の火山灰ブロックが多量に堆積する。第6層は床面直上の土層であり、土師器片と共に、多量の炭化材・炭化物粒及び焼土ブロックが混入する。

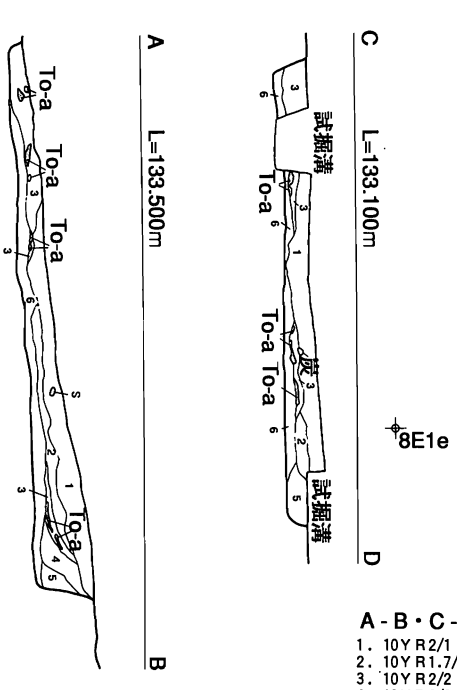
〔壁・床面〕壁はⅢc層からⅤ層まで掘り込まれ、床面より直立気味に立ち上がる。斜面上方側で最大50cmの立ち上がりが確認された。床面には多量の炭化材が存し、炭化物粒が散在していた。また床面が部分的に焼土化しており、その焼土厚は最大8cmほどである。以上から当住居は火災に遭い焼失した家屋であり、炭化材は住居の建築部材であったことが確認されている。なお炭化材の一部は鑑定の結果(後掲)ヤナギ属、ニレ属と樹種が同定された。床面にはほぼ全面的に厚さ2～3cmほどで黄褐色ロームが貼られており、よく締まっていたものの、時間の制約からその平面的広がりと厚みを記録出来なかった。

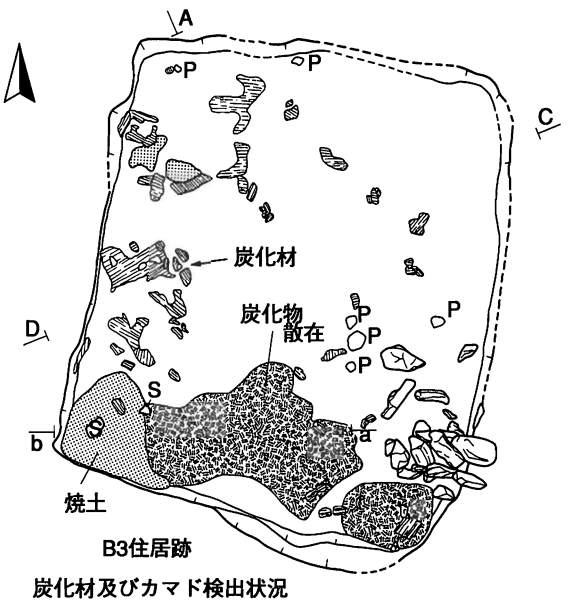
〔カマド〕斜面上方の東壁隅に取り付けられている。天井部は崩落していたものの、多量の礫が検出され、構築部材として礫が用いられていたことが確認された。袖部は長さ30～35cmの礫を直立させて側壁・芯材となし構築されていた。覆土は締まりと粘性に乏しくかつ砂質に富むものが主体をなしており、随所に焼土粒や焼土ブロックが混在する。恐らくは天井部の崩落土であろう。またカマド覆土中から完形の土師器坏(159)が、礫に覆い被さった状態で出土している。この出土状況から、これは支脚として使用されていたものであるとみられる。燃焼部は径57×43cmほどの楕円形の範囲で焼土化しており、その最大厚は4cmほどであった。煙道は、カマド外側の斜面上方においてごく微量の焼土粒が散在していることが確認出来たものの、削平を受けたものとみられ、残存しないようである。

〔柱穴〕検出されない。〔床面土坑〕東壁と南壁とが接する部分にて2基検出された。土坑1は床面からの深さが20cm、覆土は炭化物粒・焼土粒の混入した黒色土単層で、角釘状の鉄製品(168)が出土している。土坑2は床面からの深さが10cmであり、覆土は炭化物粒・焼土ブロックの混入した黒褐色土単層である。

遺物(第65図・写真図版59～60)

〔土器〕159～162、165はロクロ成形の土師器坏である。内面は全てヘラミガキの後、黒色処理されており、外面はロクロナデのみである。163の底面には糸切り・焼成ののちに十字の線刻が施されている。164・165・166は土師器甕である。165はロクロ使用の小型甕で、底部に一箇所、把手状の貼付がなされる。166は非ロクロ成形になるもので、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整痕が認められる。〔鉄製品〕167は住居覆土中から出土した。168は床面土坑1の覆土中から出土した。〔その他〕169～173は住居本体の覆土上層から出

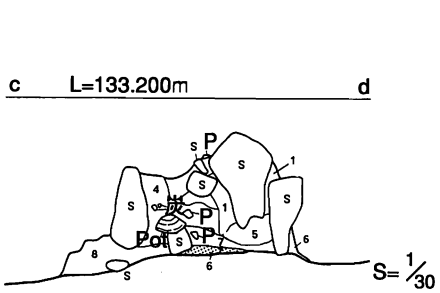


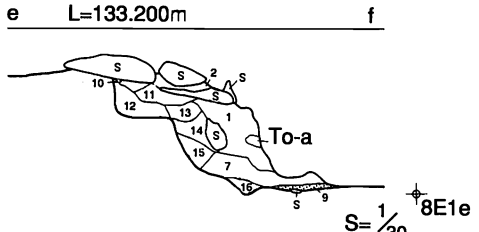


炭化材及びカマド検出状況

A-B・C-D

1．10YR2/1 黒色シルト　炭化物粒・焼土粒微量混入　縄文土器片が混入
2．10YR1.7/1 黒色シルト　炭化物粒混入　二次堆積10YR8/3　浅黄橙色・十和田ａ降下火山灰含む
3．10YR2/2 黒褐色シルト　炭化物粒微量混入　降下堆積・十和田ａ降下火山灰含む
4．10YR2/2 黒褐色シルト　炭化物粒・焼土粒微量混入　地山土細粒微量混入
5．10YR3/2 黒褐色シルト　黒色土ブロック20%混入　地山土極小ブロック５%混入　壁際崩落土みられる
6．10YR2/3 黒褐色シルト　土師器片混入　炭化物粒・炭化材多量混入　焼土極小ブロック混入　地山土ブロック微量混入

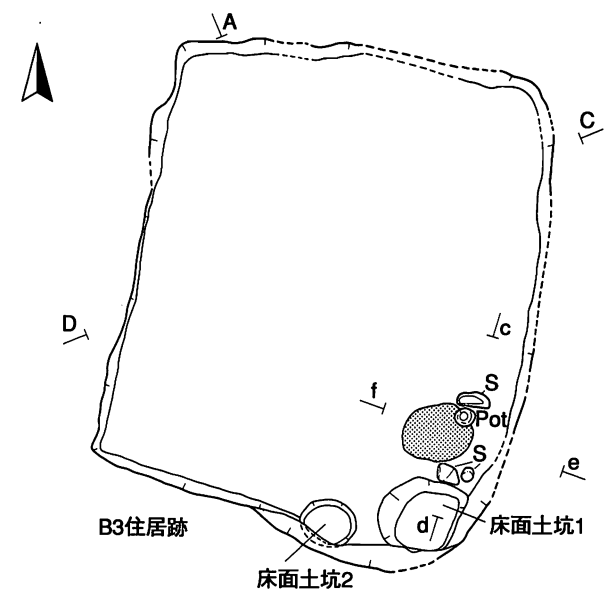




c-d・e-fカマド

1．10YR2/2 黒褐色シルト　十和田ａ火山灰含む　住居埋土３層に相当
2．10YR3/3 暗褐色シルト　締まり・粘性に乏しくさらさらしている　天井部の崩落土か
3．10YR3/4 暗褐色シルト　締まり・粘性に乏しくさらさらしている　天井部の崩落土か
4．10YR4/4 褐色砂質シルト　締まり・粘性に乏しくさらさらしている　炭化材若干混入　天井部の崩落土か
5．10YR3/3 暗褐色シルト　粘性弱　炭化物粒・焼土粒微量混入
6．10YR2/3 黒褐色シルト　地山土のブロックと入り混じり締まりがある　側壁の構築土か
7．2.5YR6/6 橙色焼土粒・ブロックと10YR4/3 にぶい黄褐色シルトの混土　焼土は硬化している　天井部焼土の崩落したものか　土器小片混入
8．10YR2/3 黒褐色シルト　黒色土と黄褐色土の混土層　締まりややあり　側壁の構築土か
9．5YR4/6 赤褐色焼土　燃焼部焼土
10．10YR2/2 黒褐色シルト
11．10YR3/3 暗褐色シルト　やや砂質に富む　焼土粒ごく微量含む
12．10YR3/2 黒褐色シルト　粘性などの性状が住居埋土に類似している
13．10YR4/4 褐色シルト　やや砂質に富む　炭化物粒ごく微量含む
14．10YR4/4 褐色シルトと2.5YR5/8　明赤褐色焼土との混土層　締まり弱　焼土は砂質細粒で30%ほど混入　天井部焼土の崩落したものか
15．10YR3/3 暗褐色シルト　色調・混入土において14層とは明確に区分され、且つ住居の埋土に色調が類似している
16．10YR3/3 暗褐色シルト　炭化物粒微量混入

0　1　2m



a-b

1．2.5YR5/8 明赤褐色焼土と10YR3/4　暗褐色シルトとの混土層　焼土は小粒状であり、30%強含まれ、焼成良好である　炭化物粒微量混入
2．5YR5/6 明赤褐色焼土　炭化物粒微量混入　暗褐色土微量含む
3．10YR2/2 黒褐色シルト　焼土小ブロック微量混入　地山土細粒微量混入
4．10YR2/2 黒褐色シルト　１～２cm大の炭化物10%混入

第17図　Ｂ３住居跡

土した縄文時代の遺物である。172は欠損品で詳細不明であるが、土偶の一部と思われる。

時期　覆土の堆積状況から、当住居の焼失後、さほどの時期を経ずして浅黄色の火山灰が降下していることが確認された。この火山灰は、色調や当住居が古代に属することを勘案するに、延喜15（915）年に降ったとの説がある十和田ａ降下火山灰の可能性がある。また出土土器の様相をも加味せば、当住居跡の存続時期は平安時代の9世紀末葉から10世紀初頭に属するものと考えられる。（菊池）

Ｂ4住居跡

遺構（第18図・写真図版13～14）

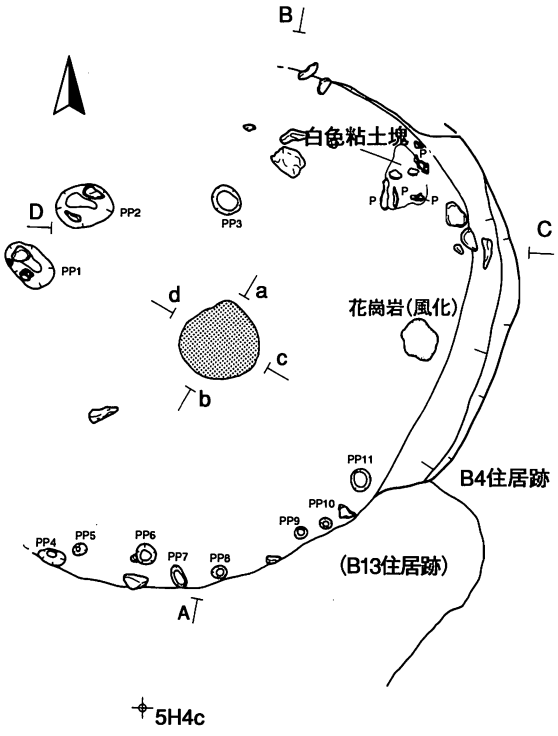
〔位置・検出状況〕5Ｇ～5Ｈグリッド緩斜面部に位置する。Ⅲｃ層下位～Ⅳ層面で検出した。南側ではＢ13住居に截られ、北側ではＢ21住居を截る。また、本住居跡の覆土を截って、上位にＢ5住居が構築されている。〔平面形・規模〕Ｂ13住居との重複部分はほぼ床面付近まで削剥され、北西部（斜面下方側）では壁・床ともに流失しており、全体の形状・規模は不明である。残存部分の形状から推測すると、本来は楕円形状を呈していたものと思われる。残存部では径（長径？）4.5ｍを測る。〔覆土〕上位の灰褐色土、下位の黒色土の2層に大別される。土色記載では大きく差があるが、実際のところではそれ程の色調の差はない。ともに地山ブロックを混入させ、かつ締っている。また、東側の覆土上位で白色粘土塊が検出されている（写真図版14）。粘土塊には比較的大きな縄文土器片が混入している。当粘土塊は本住居の床面よりも浮いた状態で検出されており、調査時点では本住居の覆土中に混入したものとしていたが、改めて検討すれば、本住居の上位に構築されていたＢ5住居の床面にあったものとも考えられる。ただ、Ｂ5住居の床面範囲が粘土塊の位置まで広がっていた確証がないことから、ここではＢ4住居に属するものとしている。〔壁・床面〕壁は斜面上方の一部（東側）のみでしか確認できなかった。斜面下方では判然とせず、Ｂ13住居によって南側の壁を破壊されている。残存する壁は最大で約60㎝を測る。床面は斜面上方ではＶ層に相当し、斜面下方では定かではない。断面図Ｃ－Ｄの10層部分が壁に相当するかもしれないが、不確実である（10層と基本層序Ⅳ層の差がない）。〔炉〕地床炉1基を検出した。直径約60㎝の円形状に焼土が形成されている。焼土の層厚は10㎝で焼成は良い。〔柱穴〕床面および周辺部（斜面下方側）で柱穴状ピット3基（ＰＰ１～3）、壁際床面で杭穴状の小ピット8基を検出した。ＰＰ１～3は主柱穴としては配置が不整である。また壁際小ピットも南側でのみ検出され、全周していない。壁際小ピットの検出部分はＢ13住居との重複部分にあたり、Ｂ13住居の床面掘り方を誤認した可能性があり、多分に不確実なものである。〔付属施設〕斜面下方で検出したＰＰ１・2は、出入り口施設の可能性がある。

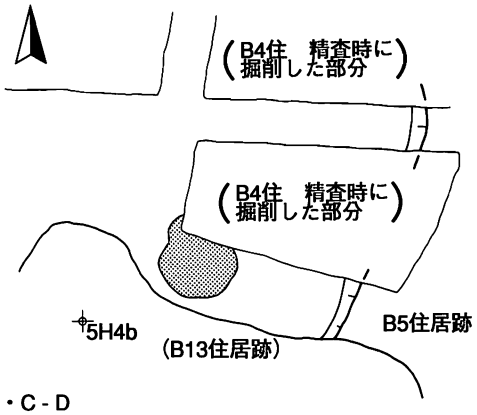
遺物（第66図・写真図版60）

上述の経過により、覆土上位の出土遺物中にＢ5住居跡に帰属するものが含まれている可能性があるが、両者を明確に分離できないため現場での注記のままで報告する。

〔土器〕総量約3.7㎏の縄文土器が出土した。174～184。174は完形の壺形土器である。口縁部文様帯はやや狭く、胴部には磨り消しの曲線的な帯状文が展開する。全体の文様構成を見ると、磨り消し＋ミガキによる無文部の占める割合が通常よりも大きい。胴部最上位付近に膠（にかわ）様の付着物が横位帯状に認められる。当該の付着部分には亀裂が入っており、土器の補修のために意図的に塗ったものである可能性が高い。175は口縁部突起の破片、177・178は大波状口縁の深鉢片である。

時期　出土遺物から見て、縄文時代後期中葉に属すると推定される。（千葉）



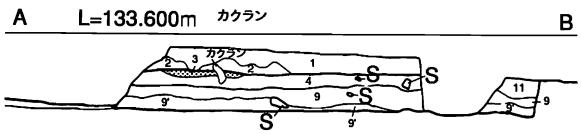


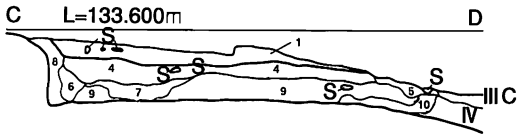
A - B・C - D

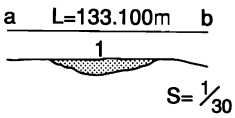
1. 10YR2/1 黒色シルト　小礫3%混入　B5住居跡覆土
2. 2.5YR4/6 赤褐色焼土と10YR2/1黒色シルトとの混土層　締まりあり　小礫5%混入　B5住居炉
3. 2.5YR5/6 明赤褐色焼土　締まりあり　B5住居炉
4. 10YR1.7/1 黒色シルト　締まりあり　中礫1%混入　焼土粒1%混入　B5住居貼床
5. 10YR3/1 黒褐色シルト　1層と同質か
6. 10YR2/2 黒褐色シルト　明黄褐色土小ブロック3%混入
7. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　粘性強　黒褐色土15%混入
8. 10YR3/3 暗褐色シルト
9. 7.5YR4/2 灰褐色シルト　粘性強　締まりあり　明黄褐色土ブロック15%混入

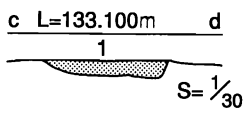
9'. 10YR1.7/1 黒色シルト　粘性強　締まりあり　明黄褐色土5%混入

10. 7.5YR4/2 灰褐色シルトと10YR7/6　明黄褐色シルトとの混土層　粘性強　締まりあり
11. 10YR1.7/1 黒色シルト　小礫10%混入



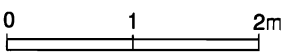






a - b・c - d 炉

1. 2.5YR6/8 橙色焼土　焼成良好　炭化物粒1%混入



B4住

番　号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10	PP11
直径 cm	44×27	44×33	24×22	22×12	12×9	15×16	18×10	12×10	11×9	11×9	19×16
深さ cm	35.0	36.0	17.0	10.0	8.0	14.0	7.0	6.0	5.5	4.5	12.5

第18図　B4・5住居跡

B5住居跡

遺構（第18図・写真図版14）

〔位置・検出状況〕5Hグリッド北側に位置する。B4住居跡と重複しており、その覆土を截って構築されていたものと思われる。B4住居跡の覆土断面を検討中に、覆土上位に本住居の壁・床面を確認した。よって、本住居を検出時点で既に壁・床面の大部分を掘削してしまっており、B4住居跡の覆土観察ベルト部分でのみ確認できたに過ぎない。

〔平面形・規模〕壁を確認できた部分がごく一部であり、平面形状・規模ともに不明であるが、円形ないしは楕円形基調の可能性が高い。

〔覆土〕Ⅲ層系黒色土のほぼ単層である。

〔壁・床面〕B4住居跡の覆土中に構築されており、斜面下方では確認できなかった。斜面上方では、壁はやや外傾して立ち上がる。床面は貼床されており(断面図の4層)、ほぼ平坦である。

〔炉〕地床炉。B4住居跡の精査に伴い一部を掘削してしまった。焼土の層厚は約5㎝、平面形状は約60㎝×45㎝以上の楕円形と思われる。

〔柱穴〕残存部分では検出されていない。

遺物(第66図・写真図版60～61)

〔土器〕縄文土器が約1.7㎏出土している。185～191。185は貼り床構築層、186・191は炉焼土層、その他は覆土から出土している。

時期　出土遺物から縄文時代後期中葉に属するものと推定される。　（千葉）

B6住居跡

遺構（第19～20図・写真図版15～16）

〔位置・検出状況〕6E～6FグリッドのⅤ層面で検出。B11・17住居跡、B10住居状遺構、B45・46土坑と重複し、これら全てを截っている。

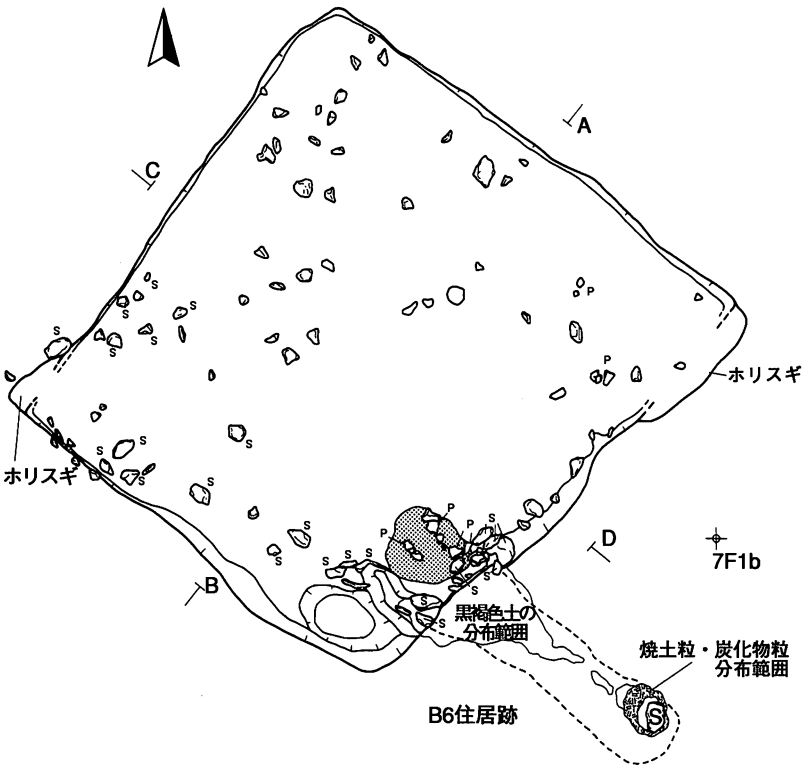
〔平面形・規模〕概ね4.2m×4.2mの方形を呈しているが、西隅付近はやや歪な形状である。但し、当住居の東側はB17住居跡およびB11住居跡と重複しており、両住居の覆土が壁・床面となるため(所謂“黒に黒”だったため)、平面プランが明確ではなかった。よって、当該部(東隅付近)については掘り拡がってしまった結果として全形が歪になった可能性もある。

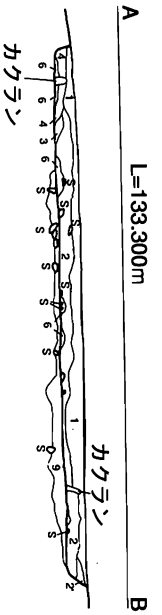
〔覆土〕8層に細分されるが、概ね上位の灰黄褐色土と下位の黒褐色土に大別できる。下位の黒褐色土には地山ブロックが混入し、床面付近で部分的に焼土・炭化物の細粒が含まれている(6層)。

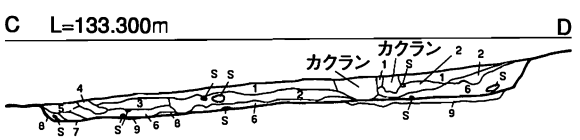
〔壁・床面〕壁・床面はⅤ層相当であるが、床面(特に斜面下方)ではⅤ層下位相当の砂礫の露出が著しい。壁は外傾ぎみで、床面は斜面の傾斜に沿って北西方向に緩く下っている。斜面上方にあたる南側の床面は貼床が施されている。

〔柱穴・ピット〕床面で柱穴は検出されていない。但し床面が砂礫層であるため、検出できなかった可能性もある。カマド右脇にはピット1基が設置されている。当該ピットの覆土下位および底面からは土師器片が纏まって出土しており、貯蔵穴的な性格が想定される。

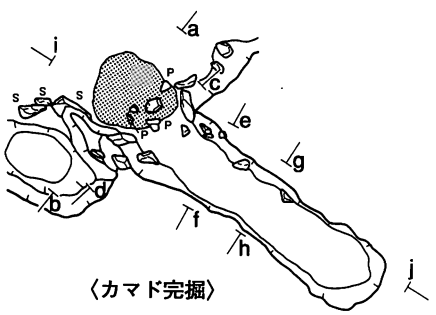
〔カマド〕位置：南東壁の南寄りで1基検出した。本体：火床部はやや浅い皿状に窪んでおり、焼土が60×65㎝の楕円形状に広がる。焼土の最大層厚は8㎝程である。天井部は崩落して潰れており確認できない。火床部焼土層の上位に堆積している焼土ブロック層が、天井部構築材だったものと思われる。側壁部は右側が残存



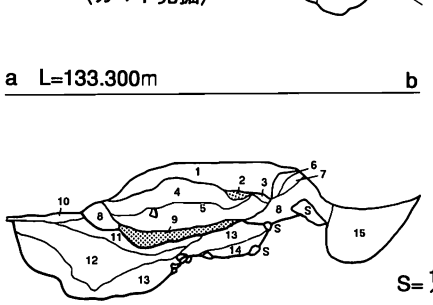


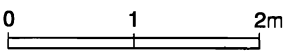


A－B・C－D
1．10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性強　小礫1％混入
2．10YR2/1 黒色シルト　粘性強　明黄褐色土ブロック3％混入　中～小礫1％混入
2'．10YR3/3 暗褐色シルト
3．10YR3/1 黒褐色シルト　ややパサパサする
4．10YR2/3 黒褐色シルト
5．10YR3/4 暗褐色シルト　締まりあり　明黄褐色土ブロックごく微量混入
6．10YR2/2 黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色シルトとの混土層　締まりなし　炭化物・焼土粒5％混入
7．10YR3/2 黒褐色シルト　明黄褐色土ブロック3％混入
8．10YR4/6 褐色シルト　締まりあり　小礫1％混入
9．10YR3/1 黒褐色シルト　締まりあり　焼土ブロック15%混入　炭化物粒3％混入

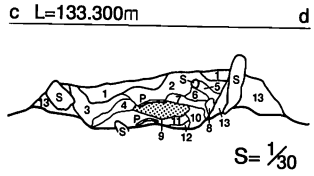


a－b　カマド
1．5YR3/1 黒褐色シルト　5YR5/8　明赤褐色焼土微細ブロック3％混入
2．2.5Y R 5/6～5/8　明赤褐色焼土　粘性弱　締まりあり
3．10YR7/8 黄橙色粘土質土　粘性強
4．7.5YR4/1 褐灰色シルト　5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック5％混入
5．10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　5YR5/8　明赤褐色焼土ブロック3％混入
6．10YR3/2 黒褐色シルト　粘性強　10YR6/6　明黄褐色土と5YR5/8　明赤褐色焼土ブロック10%混入
＊1～6層はカマド上部崩落土
7．5YR3/1 黒褐色シルト
8．10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質土　粘性強　カマド側壁
9．2.5YR5/8 明赤褐色焼土　粘性弱　締まりあり　カマド火床部
10．10YR3/1 黒褐色シルト　締まりあり　貼床か
11．10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　締まりあり　2.5YR5/8　明赤褐色焼土ブロック10%混入
12．10YR3/2 黒褐色シルト　10YR6/6　明黄褐色土ブロック10%混入
13．10YR3/2 黒褐色シルト
14．10YR5/2 灰黄褐色砂質土　粘性なし　締まりあり　小礫多量混入
＊11～14層はカマド下部土坑覆土（B46土坑）
15．10YR2/1　黒色シルト　2.5YR5/8　明赤褐色焼土粒5％混入　貯蔵穴覆土

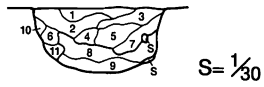




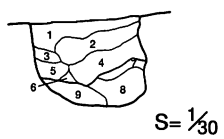
第19図　B6住居跡(1)



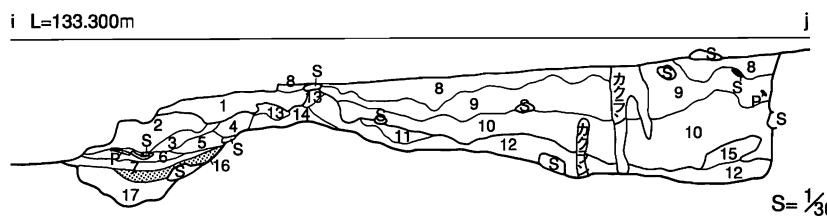
c－d
1．7.5Y R3/2 黒褐色シルト
2．10Y R2/1 黒色シルト　2.5Y R4/6　赤褐色焼土ブロック10%混入　10Y R7/6 明黄褐色土ブロック５%混入
3．10Y R2/1 黒色シルトと10Y R3/2　黒褐色シルトとの混土層　粘性強
4．10Y R6/6 明黄褐色粘土質土　粘性強
5．10Y R4/4 褐色シルト　やや砂質で締まりがない
6．10Y R5/4 にぶい黄褐色シルト　2.5Y R5/8　明赤褐色焼土ブロック15%・炭化物５%混入
7．10Y R5/4 にぶい黄褐色シルト　10Y R6/6　明黄褐色土ブロック３%混入
8．10Y R3/1 黒褐色シルト　締まりなし
9．2.5Y R5/8 明赤褐色焼土ブロック　マトリクスは10YR5/4　にぶい黄褐色
＊１～９層はカマド上部崩落土
10. 10Y R3/2 黒褐色シルト　2.5YR5/8　明赤褐色焼土微量混入
11. 10Y R4/2 灰黄褐色シルト　締まりあり
12. 10Y R5/3 にぶい黄褐色シルト　締まりあり
13. （a－b）断面の８層に同じ　カマド側壁



e－f
1．10YR2/2　黒褐色シルト
2．10Y R4/2 灰黄褐色シルト　粘性強　10Y R6/4　にぶい黄橙色土10%混入
3．10Y R3/1 黒褐色シルト　10YR6/4　にぶい黄橙色土５%混入
4．10Y R3/1 黒褐色シルト　10YR6/4　にぶい黄橙色土１%混入
5．10Y R3/1 黒褐色シルト　10YR6/4　にぶい黄橙色土10%混入
6．10Y R2/1 黒色シルト　粘性強　締まりなし
7．10Y R3/2 黒褐色シルト　粘性弱　締まりなし
8．2.5Y 4/3 オリーブ褐色シルト　締まりあり
9．2.5Y5/4 黄褐色シルト　10Y R4/1　褐灰ブロック斑らに10%混入
＊８・９層は煙道上部崩落土
10. 10Y R7/6 黄褐色シルト
11. 10Y R4/1 褐灰色粘土質シルト　締まりあり



g－h
1．7.5Y R3/1 黒褐色シルト
2．10Y R3/2 黒褐色シルト　10Y R6/4　にぶい黄橙色土10%混入
3．10Y R3/1 黒褐色シルト
4．7.5Y R3/1 黒褐色シルト　10Y R6/4　にぶい黄橙色土ブロック５%混入
5．10Y R4/4 褐色シルト　粘性強　締まりあり　10Y R7/6　黄褐色土ブロック15%混入
6．10Y R2/1 黒色シルト
7．10Y R4/4 褐色シルト　10Y R7/6　黄褐色シルトとの混土層
8．10Y R3/3 暗褐色シルト　粘性強
9．10Y R5/4 黄褐色シルトと10Y R3/3　暗褐色シルトとの混土層
＊８・９層は煙道上部の崩落土か



i－j
1．10Y R3/1 黒褐色シルト
2．5Y R3/1 黒褐色シルト　5Y R5/8　赤褐色焼土ブロック３%混入
3．7.5Y R4/1 褐灰色シルト
4．10Y R1.7/1 黒色シルト　粘性強　5Y R5/8　赤褐色焼土ブロック５%混入
5．2.5Y R5/6 明赤褐色焼土ブロック　マトリクスは2.5Y R5/3　にぶい赤褐色
＊２～５層はカマド上部崩落土
6．10Y R4/2 灰黄褐色シルト　2.5Y R5/6　明赤褐色焼土ブロック10%混入
7．10Y R4/2 灰黄褐色シルト
8．10Y R4/2 灰黄褐色シルト　10Y R6/4　にぶい黄橙色シルト10%混入
9．10Y R3/2 黒褐色シルト　10Y R6/4　にぶい黄橙色シルト５%混入
10. 7.5Y R3/1 黒褐色シルト
11. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色シルト　粘性強
12. 2.5Y5/4 黄褐色～10YR7/8　黄橙色シルト　粘性強　10Y R4/1　褐灰色土ブロック10%混入
＊11・12層はカマド煙道崩落土
13. 2.5Y R5/8 明赤褐色焼土
14. 7.5Y R4/1 褐灰色シルト　10YR7/6　明黄褐色土ブロック３%混入　2.5YR5/8　明赤褐色焼土ブロック１%混入
15. 10Y R3/1 黒褐色シルト　粘性強　10YR7/6　明黄褐色土ブロック15%混入　カマド煙出し崩落土か
16. 2.5Y R5/8 明赤褐色焼土　粘性弱　締まりあり　カマド火床部
17. 10Y R3/2 黒褐色シルト　カマド下部土坑覆土

第20図　Ｂ６住居跡(2)

しているが、左側は明確に確認できなかった。断面を参照すると、礫を芯材として地山系の粘土質土を貼り付けて側壁を構築している。カマド左側で露出していた礫は、左側壁の芯材であったものと推測され、精査の過程で構築土を除去してしまった可能性がある。煙道・煙出し部：煙道部はB10住居跡状遺構を截って構築されている。煙道は南東方向へ延びており、長さ2.1mである。断面で見ると、火床部から一旦上がった後、煙出し部に向かって緩く下っている。煙道の上部は崩落しており構造が明確ではない。断面を参照すると天井部の崩落部分と推測される黒褐色土の落ち込みが見られることから、明確ではないが地下式(刳り抜き式)だった可能性が高いと考えられる。

遺物（第67～68図、写真図版61～62）

〔土器〕出土総量は約5.1kgである(縄文土器を含む)。覆土から縄文土器、床面付近で土師器が出土している。土師器：192～204。器種は、坏(192～196)・甕(197～204)。196は坏の小破片であるが、外面に墨書が認められる。文字は判読できない。200は内外面ともに黒色処理された小形甕である。須恵器：203。壺の口縁部片である。口唇部は肥厚して突帯状。胴部は緩やかに内彎、頸部で窄まって屈曲し、口縁部は外反する。縄文土器：206～211。206は深鉢口縁の突起。208・209は鉢で、重畳する横位の多重沈線文で、ともに沈線は一筆書き的に引かれている。

時期　住居形態および出土遺物から、平安時代(9世紀末～10世紀初)に属するものと推定される。　（千葉）

B7住居跡

遺構（第21図・写真図版16）

〔位置・検出状況〕7E区から8E区に跨って位置する。Ⅲc層とV層との漸移層において半円状の黒褐色土の広がりとして検出された。調査時にⅢc層の堆積と誤認し、掘り下げてしまった。B3住居跡、B20住居跡、B8土坑、B29土坑と重複し、何れよりも旧い。

〔平面形・規模〕周囲に存在する住居跡に截られているため、全体的な規模及び形状は不明である。残存する壁は弧状を呈しており、本来の平面形は円形乃至は楕円形であったと思われる。

〔覆土〕誤って掘り下げてしまったため堆積状況をほとんど記録できなかったが、床面直上の土層は暗褐色土であった。

〔壁・床面〕壁は南側の斜面上方のみ残存し、床から約30度で外傾して緩やかに立ち上がる。V層を壁面とする。床面は概ね平坦であるが、V層の基盤礫層がやや露出している。貼床は認められない。

〔炉〕地床炉1基が検出された。焼土は他の炉跡に比して焼成が悪く、54×50cmの不整楕円形の範囲に約8cmほどの厚さで焼土粒や炭化物粒を混在した暗褐色土が確認されたのみである。なお焼土の北にある礫は基盤礫が露出したものである。

〔柱穴〕壁柱穴とみられるものを含め、14基検出されている。主柱は不詳である。

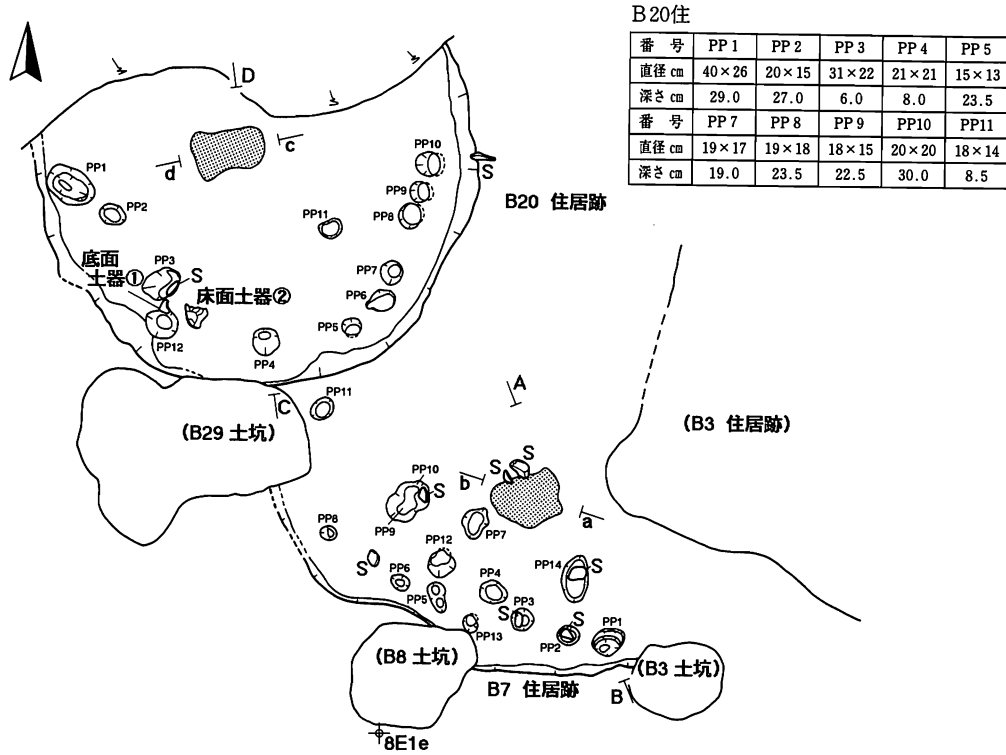
番　号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12	PP13	PP14
直径cm	26×22	17×15	18×17	23×17	20×14	16×11	25×20	13×11	38×26	38×21	21×15	24×20	14×12	36×20
深さcm	38.0	18.0	12.5	10.5	10.0	14.5	26.5	6.0	－	22.5	21.0	17.0	－	10.0

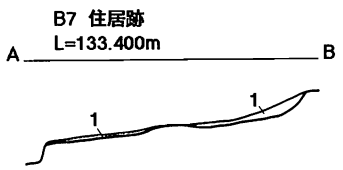
遺物　出土していない。

時期　住居形態と周辺遺構との重複関係から、縄文時代後期中葉以前の住居跡とみられる。　（菊池）

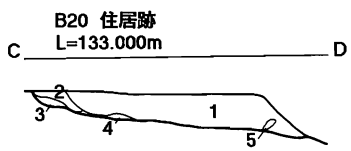
B20住

番　号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6
直径 cm	40×26	20×15	31×22	21×21	15×13	25×16
深さ cm	29.0	27.0	6.0	8.0	23.5	28.0
番　号	PP7	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12
直径 cm	19×17	19×18	18×15	20×20	18×14	25×23
深さ cm	19.0	23.5	22.5	30.0	8.5	44.5

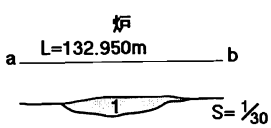




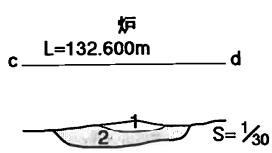
A－B
1．10Y R3/3 暗褐色シルト　締まりあり　小礫微量混入　地山土細粒微量混入



C－D
1．10Y R1.7/1 黒色シルト　粘性なし　締まり乏しい　礫・遺物がまばらに混入
2．10Y R3/1 黒褐色シルト　褐色土混入
3．10Y R3/4 暗褐色シルト　礫混入
4．10Y R2/2 黒褐色シルト　粘性なし　締まり乏しい
5．10Y R3/3 暗褐色シルト　褐色土混入　撹乱土層である



a－b炉
1．10Y R3/3 暗褐色シルト　締まり弱　下位に焼土粒と炭化物粒が微量混入



c－d炉
1．10Y R2/3 黒褐色シルト　焼土粒微量混入
2．5 Y R3/4 暗赤褐色焼土　黒褐色シルト30%混入　焼土焼成は当遺跡の他遺構より相対的不良である

第21図　B 7 ・20住居跡

Ｂ20住居跡

遺構（第21図・写真図版29）

〔位置・検出状況〕7Ｅ区東半に位置する。南側の斜面上方から下方にかけて、Ⅲｃ層面より設定した南北トレンチで当住居の炉が検出され、住居跡と認定した。Ｂ29土坑及びＢ7住居跡と重複しており、当住居跡がそれらを截っている。〔平面形・規模〕当住居跡の北側は開田のため既に削平を受けており、壁・床面とも南側でしか確認できなかったが、残存部分より円形と推定される。規模は東西側で3.5ｍを測る。

〔覆土〕概ね黒色シルトによる単層で、自然堆積と思われる。南壁際に壁の崩落土と推定される暗褐色シルトが僅かに入る。

〔壁・床面〕残存部分では壁はやや外傾気味に立ち上がる。Ⅲｃ層を壁とする。床面はⅤ層およびⅢｃ層で、平坦であるが、緩く北側に向かって傾斜している。〔炉〕住居のほぼ中央付近と思われる位置に地床炉1基を検出した。炉内の焼土は長楕円形気味に広がり、最大厚10㎝である。焼土の発達は悪い。

〔柱穴〕12基検出した。PP2・PP3・PP11以外は壁際に配列される。また、PP1は他の壁際に配列される柱穴とは形状規模が相違することから、出入り口に関係する可能性がある。

遺物（第79図・写真図版72）

〔土器〕360は床面直上、361～363は覆土中から出土している。

時期　床面直上出土の土器から、縄文時代後期中葉と推定される。（菊池）

Ｂ8住居跡

遺構（第22図・写真図版17）

〔位置・検出状況〕6Ｆグリッド北西に位置する。Ⅴ層上面で検出した。東側で重複するＢ9住居跡を截っている。また、Ｂ23住居跡状遺構と重複しているが、新旧関係を明確に出来なかった。

〔平面形・規模〕平面形状は長径4.1ｍ×短径3.5ｍの楕円形を呈している。

〔覆土〕壁に沿って堆積する黄褐色系の粘土質土と、その内側に存在する黒褐色土とに大別される。傾斜に従って流れ込んでおり、自然堆積的な様相である。

〔壁・床面〕壁は外傾しており、斜面下方側では立ち上がりが不明確になる。壁高は最大で約20㎝である。壁面はⅤ層およびＢ9住居跡覆土に相当している。床面はⅤ層相当で、壁際から中央に向けてやや窪む。

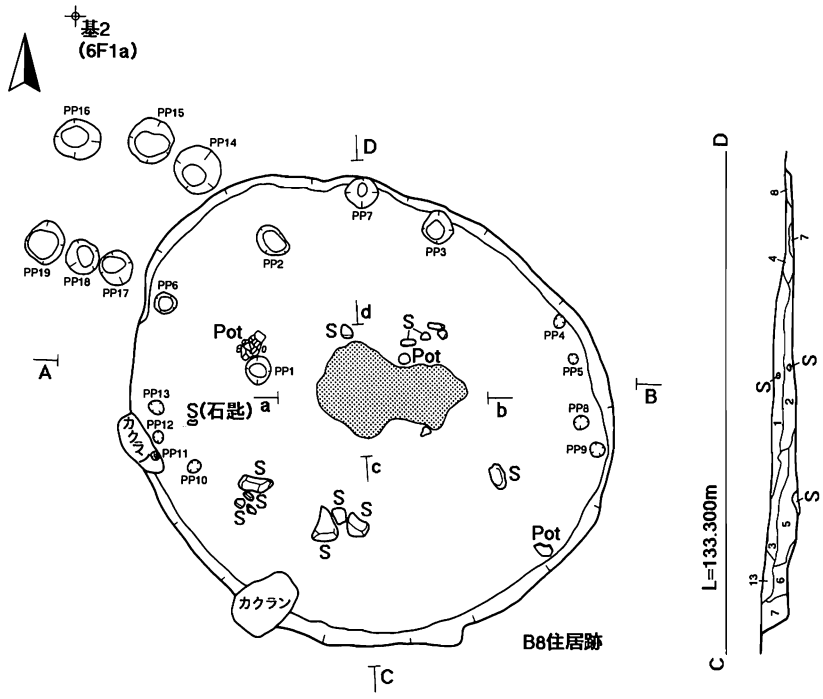
〔炉〕床面で地床炉を検出した。焼土の広がりは不整形で、床面ほぼ中央付近からやや東側へと延びる。東側に張り出した部分は重複するＢ9住居跡の炉の痕跡とも考えられるが、焼土層の断面では明確な新旧関係は認められなかった。焼土の層厚は最大8㎝ほどである。〔柱穴〕床面で柱穴状ピット5基、壁際床面で断続的に巡る杭穴状小穴8基を検出した。〔付属施設〕北西側の住居範囲外で柱穴6基を検出している。柱穴は3基ずつ2列をなして配置されており、列の間隔は約0.8ｍである。本住居跡に付随する出入り口状施設と考えられる。

遺物（第68図、写真図版62）

〔土器〕床面：212～214。覆土：217～224。217は地文を欠き、細い沈線による文様が施文される。

〔土製品〕215・225。215は床面で出土した振り子形土製品で、撮み部下位に貫通孔1箇所が穿たれる。225は土製円盤である。〔石器〕216は縦形の石匙で、表裏全面に丁寧な調整が施される。

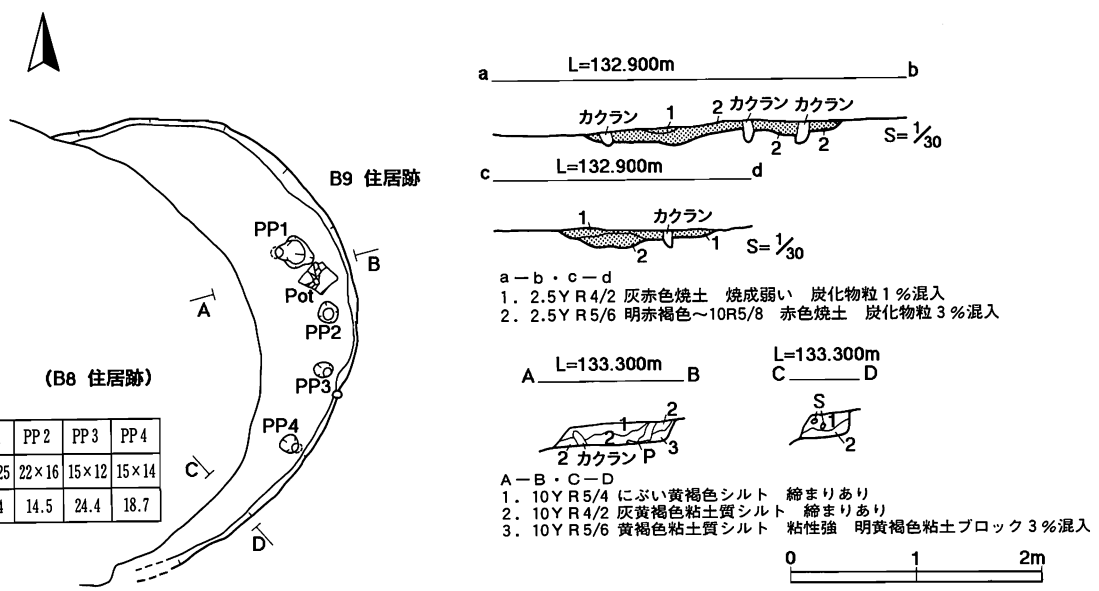
時期　出土土器には後期前葉まで遡る土器片も僅かに含まれるが、主体は後期中葉に比定されるものである。本住居も縄文時代後期中葉に属すると推定される。（千葉）



A－B・C－D
1．10ＹＲ4/2 灰黄褐色シルト～10YR3/2　黒褐色シルト　締まりあり　小礫・細砂５％混入
2．10ＹＲ2/1 黒色シルト　粘性強　明黄褐色土ブロック３％混入
3．10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色砂質土
4．10ＹＲ5/6 黄褐色シルト
5．10ＹＲ2/2 黒褐色シルト　粘性強　小礫微量混入
6．10ＹＲ2/1 黒色シルトと10ＹＲ3/3　暗褐色シルトとの混土層　粘性強　明黄褐色土ブロック５％混入
7．10ＹＲ5/8 黄褐色粘土質シルト　粘性強く、堅く締まる
8．10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性強　締まりあり
9．10ＹＲ3/2 黒褐色シルト
10．10ＹＲ3/3 暗褐色シルト　締まりなし　赤褐色焼土ブロック３％混入　撹乱か
11．10ＹＲ3/4 暗褐色シルト
12．10ＹＲ5/8 明赤褐色焼土　炉焼土の一部
13．10ＹＲ5/2 灰黄褐色シルト　締まりあり

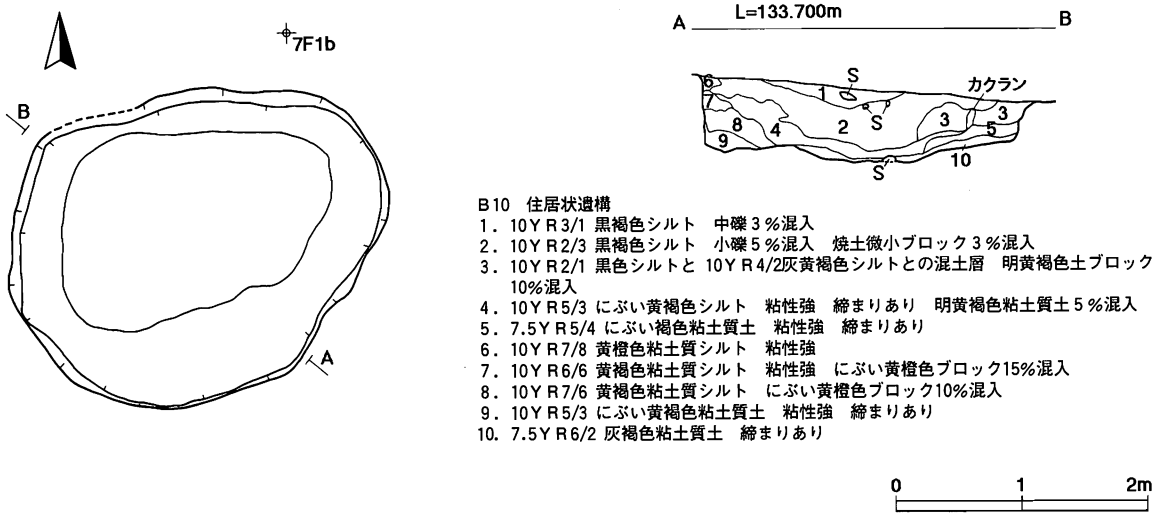
6F3a

番号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
直径cm	20×20	29×21	26×23	12×8	8×8	18×17	27×23	12×11	18×15	20×20
深さcm	25.7	15.3	8.6	8.1	6.1	19.2	28.7	8.7	22.5	-
番号	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	
直径cm	7×6	9×9	13×11	38×36	36×35	36×32	27×27	28×27	35×31	
深さcm	-	10.1	11.6	34.7	33	29	32.3	22.8	34.8	



番号	PP1	PP2	PP3	PP4
直径cm	31×25	22×16	15×12	15×14
深さcm	26.4	14.5	24.4	18.7

第22図　Ｂ８・９住居跡



B10 住居状遺構
1．10YR3/1 黒褐色シルト　中礫3％混入
2．10YR2/3 黒褐色シルト　小礫5％混入　焼土微小ブロック3％混入
3．10YR2/1 黒色シルトと 10YR4/2灰黄褐色シルトとの混土層　明黄褐色土ブロック10%混入
4．10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　粘性強　締まりあり　明黄褐色粘土質土5％混入
5．7.5YR5/4 にぶい褐色粘土質土　粘性強　締まりあり
6．10YR7/8 黄橙色粘土質シルト　粘性強
7．10YR6/6 黄褐色粘土質シルト　粘性強　にぶい黄橙色ブロック15%混入
8．10YR7/6 黄褐色粘土質シルト　にぶい黄橙色ブロック10%混入
9．10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質土　粘性強　締まりあり
10．7.5YR6/2 灰褐色粘土質土　締まりあり

0　1　2m

第23図　B10住居状遺構

B9住居跡

遺構（第22図・写真図版18）

〔位置・検出状況〕6Fグリッド北側に位置し、大部分をB8住居跡に截られている。

〔平面形・規模〕残存部分は楕円形状を呈しているが、大部分がB8住居跡に壊されており、全体の形状・規模は不明である。

〔覆土〕上層がにぶい黄褐色土、下層は灰黄褐色土で、全体にくすんだ色調の締まりある堆積土である。

〔壁・床面〕床面は重複するB8住居跡とほぼ同レベルで、殆ど段差はない。床は平坦である。壁は直立気味で、残存壁高は約15cmである。壁・床面ともにV層に相当する。

〔炉〕残存部分では確認できないが、前述したとおり、B8住居跡の炉の東半部が本住居の炉痕跡だった可能性もある。

〔柱穴〕壁際床面で杭穴状小ピット4基を検出した。

遺物（第69図、写真図版63）

〔土器〕床面で深鉢(226)が出土している。

時期　B8住居跡との重複関係や出土遺物から、縄文時代後期中葉に属するものと推測される。　（千葉）

B10住居跡状遺構

〔位置・検出状況〕6F～7FグリッドのV層上面で、B6住居跡のプランと重複する黒褐色土の広がりとして検出した。B6住居跡煙道部に北壁の一部を截られ、西側でB45土坑を截っている。

〔平面形・規模〕長径3.1m×短径2.7mの楕円形を呈する。

〔覆土〕上～中位の黒褐色土と下位の黄褐色土の、大別2層・細分9層である（断面図最下層の10層は貼床層）。主体は焼土粒や地山ロームブロックが混入した黒褐色土であるが、北西壁際下位には黄褐～にぶい黄褐色土が堆積している。南西側の覆土2層から土器が多量に出土している。土器は壁上位から覆土の堆積方向に沿って中央へ落ち込むように出土しており（写真図版19）、遺構埋没がある程度進行した時点で一括で投げ込み・廃棄された様相が見て取れる。以上の状況から、少なくとも1～3層は人為的な堆積層、4層以下も地山ブロック混入の様相から人為の可能性があると推測される。

〔壁・床面〕壁は床面から直立気味に立ち上がり、北壁では部分的に内彎している。床面は中央部がやや窪んでおり、壁周辺の床は緩く傾斜して落ち込む。床面は地山ではなく、やや粘性の強い灰黄褐色土(断面の10層)を貼り付けて人為的に構築されたものである。〔炉・柱穴〕検出されていない。

遺物(第69図、写真図版63)

〔土器〕227～237。228は粗製の深鉢で、胴部が直線的に外傾、口縁付近で緩く外反した後、内彎しており口縁が大きく開く器形である。232は櫛歯状工具による平行沈線文が施されている。

〔土製品〕スタンプ形土製品1点が出土した(238)。撮み部には貫通孔1箇所が穿たれ、印面には入り組んだ渦状の沈線2条が引かれている。

時期　出土遺物から見て、縄文時代後期中葉に属すると推測される。　(千葉)

B11住居跡

遺構（第24図・写真図版20～21)

〔位置・検出状況〕6E～7Eグリッドにかけて広がる。検出面はV層黄褐色粘土質シルト層である。西側でB6住居跡・B17住居跡（共に古代）と重複して構築されており、当住居跡がそれらに截られる。

〔平面形・規模〕平面形は円形基調であるが、東壁がやや角張ることで六角形状を呈する。規模は東西7.2×南北6.4mを測る。

〔覆土〕12層に細分した。主体的に見られる1～3層は黒色シルトで、径3～20cm大の礫を含む。6～8層の黒褐～暗褐色シルトには炭化物の混入が見られる。

〔壁・床面〕壁は東壁及び南壁ではほぼ直立気味に立ち上がる。床面は砂礫層中で、やや凹凸がある。竪穴中央付近は周囲の床より10cmほど窪んでおり、黒褐色土の広がりが見られた。この凹地部分は古い段階の住居である可能性が想定され、段階的に調査すべきところ、時間の制約から一気に掘らざるを得なかった。

〔炉・柱穴〕竪穴中央付近で地床炉と判断される焼土を検出した。焼成範囲は約70×50cmの楕円形気味に広がる。柱穴は、主柱穴と思われるPP1～PP5と命名した20cmほどのものと、壁柱穴と思われる10cm前後の柱穴、そして出入り口施設に関係する可能性があるPP6～PP11の3種に大別して捉えられる。また、壁柱穴と思われる小形の柱穴は、2列確認できることから、本住居は最低1度は建て替え－拡張と推定される－られていると捉えられる。なお炉跡は1基しか確認できないことから、建て替え後も継続して使用されたとみられる。

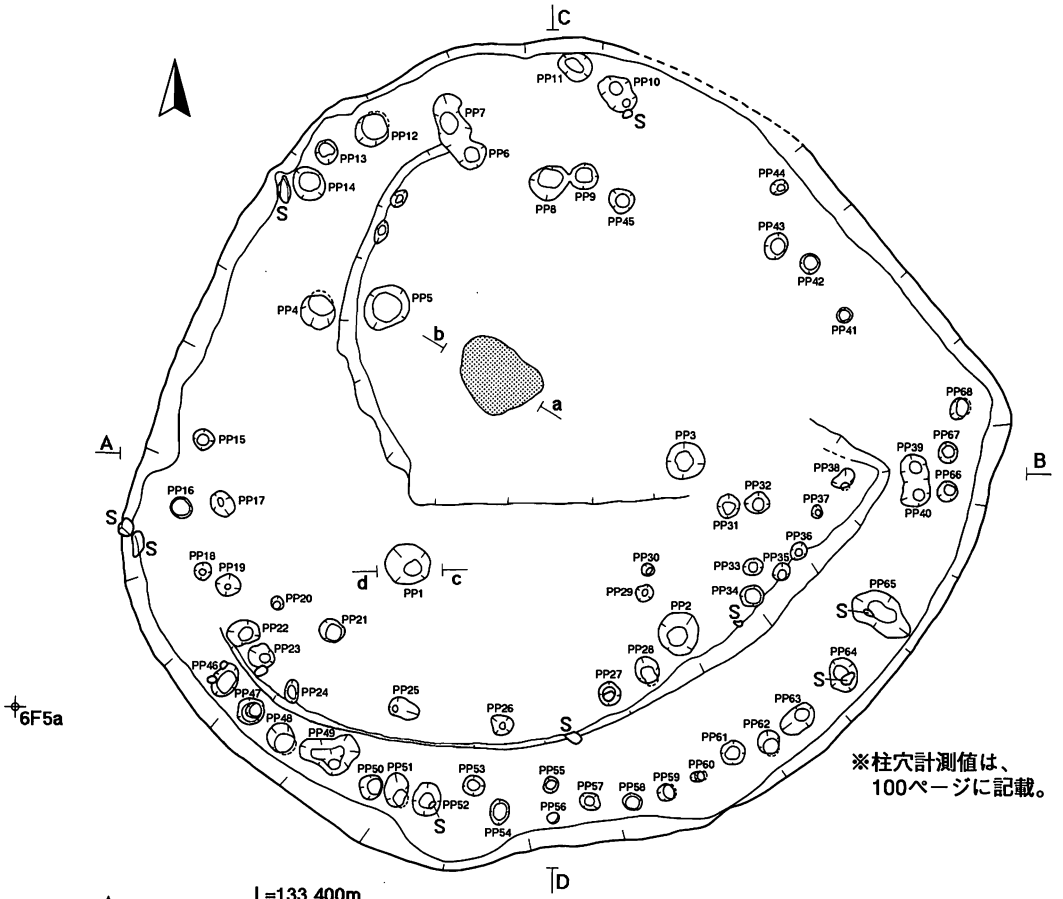
〔出入り口〕上述したとおり、住居中央付近の床は掘りごたつ状に掘り窪められ、一段低くなっている。地床炉と出入り口に関係する可能性のある柱穴は、その中にある。

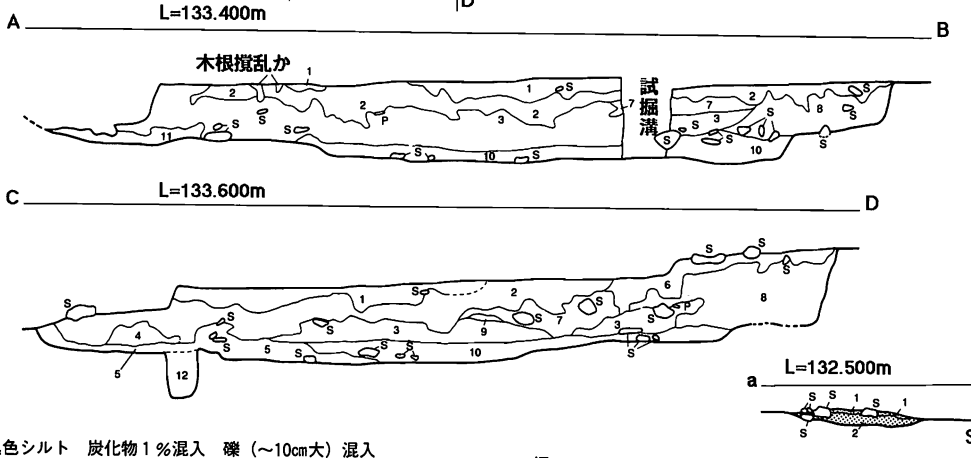
遺物(第70～71図・写真図版63～64)

〔土器〕覆土上位を主体に多量の土器が得られた。羽状縄文が施文された後に磨り消し縄文を施し文様がモチーフされるものが主体となるが，注口土器の中に微隆起線により文様がモチーフされる土器が見られる。床面：239～241。239は台付鉢で、口縁部を欠損している。胴部には逆「く」字状の帯状文。241は注口土器の胴部片で、微隆起線(ミミズ腫れ状)の文様が曲線的に展開する。覆土：243～262。〔土製品〕263。

〔石器〕242・264～268。器種は、尖頭器？(265)、敲磨器(266)、磨製石斧(242・267・268)。242は床面出土の磨製石斧で、刃部が欠損している。片方の側縁には、表裏両面に大きな剥離が施されている(柄の装着のためか)。

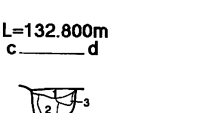
時期　出土土器から縄文時代後期中葉～後葉と推定される。　(千葉)



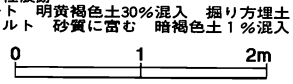


A－B・C－D
1. 10YR2/1 黒色シルト　炭化物1％混入　礫（～10cm大）混入
2. 10YR1.7/1 黒色シルト　焼土粒が部分的に混入　小礫（～3cm大）混入
3. 10YR2/1 黒色シルト　礫（～20cm大）混入
4. 10YR3/2 黒褐色シルト
5. 10YR3/3 暗褐色シルト　礫（～5cm大）混入
6. 10YR2/3 黒褐色シルト　炭化物1％混入　地山土細粒微量混入
7. 10YR3/2 黒褐色シルト　炭化物1％混入　地山土細粒微量混入
8. 10YR3/3 暗褐色シルト　礫（～5cm大）を多量混入　炭化物粒・地山土細粒微量混入
9. 10YR1.7/1 黒色シルト
10. 10YR2/2 黒褐色シルト　炭化物1％混入　礫（～8cm大）混入　人頭大礫1個混入
11. 10YR4/4 褐色砂質シルト　締まりあるが粘性なし　炭化物（1cm大）微量混入　小礫（～3cm大）混入
12. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘土質土　よく締まり粘性強い

炉
1. 10YR4/1 褐灰色シルト　粘性やや強　締まりややあり　炭化物粒1％混入　焼砂3％混入
2. 2.5YR6/8 橙色焼砂　粘性なし　締まりあり



PP1
1. 10YR2/2 黒褐色シルト　粘性あり　締まりあり 小礫（～4cm大）混入
2. 10YR3/3 暗褐色シルト　粘性弱　締まりあり　砂質に富む　明黄褐色土5％混入　柱痕跡
3. 10YR3/3 暗褐色シルト　明黄褐色土30％混入　掘り方埋土
4. 10YR6/8 明黄褐色シルト　砂質に富む　暗褐色土1％混入



第24図　B11住居跡

B12住居跡

遺構（第25図・写真図版22）

〔位置・検出状況〕8E・8F・9E・9F区の4つのグリッドに跨り位置する。南側の斜面上方から下方にかけてⅢc層面より設定した試掘トレンチによって壁の立ち上がりを確認し、この試掘トレンチに直交するように新規の東西方向のトレンチを設定した。これらのトレンチによって遺構の形状を推定し調査を行った。A1建物、B18・19住居と重複し、これらを截る。

〔平面形・規模〕平面形は長径4.8m、短径4.0mの東西に長軸を持つ楕円形を呈している。

〔覆土〕第1層黒色土、第2層にぶい黄褐色土、これらの下位の暗褐色土等からなる全て17層に細分される。第1層は自然堆積土層であり、精査時に①層として遺物の取り上げを行った。第2層も同様に自然堆積土層であり、精査時に②層として遺物の取り上げを行った。その他第17層が壁際に三角状に堆積した自然堆積土層とみられる。以上の土層以外は多寡はあるものの、V層地山土が入り混じった様相であり、一見すると全体的に黄色みがかった色調を呈している。これらの土層は人為的堆積土層と判断され、調査時に③層と一括して遺物の取り上げを行っている。

〔壁・床面〕壁は、斜面下方側は床から約60度で外傾して緩やかに立ち上がる。斜面上方側は床から直立気味に立ち上がり、斜面下方に比して深い。床面は概して平坦であり、全面わたってにぶい黄褐色土が2～5cmほどの厚さで貼床されているが基盤礫の露出する部分もある。貼床を除去するとV層の基盤礫層となる。

〔炉〕床面中央に地床炉1基が検出された。焼土範囲は狭小で、20×15cmほどにとどまり、焼土厚は3cmである。焼土周囲には炭化物粒が65×50cmほどの範囲で散在していた。

〔柱穴〕床面から2基検出されたが、主柱穴であるかどうかは明確にし得なかった。また、壁面を掘り込むようにして7基の柱穴状の掘り込みが検出されている。これらは垂木を固定した穴の可能性もあるが、詳細は不明である。（菊池）

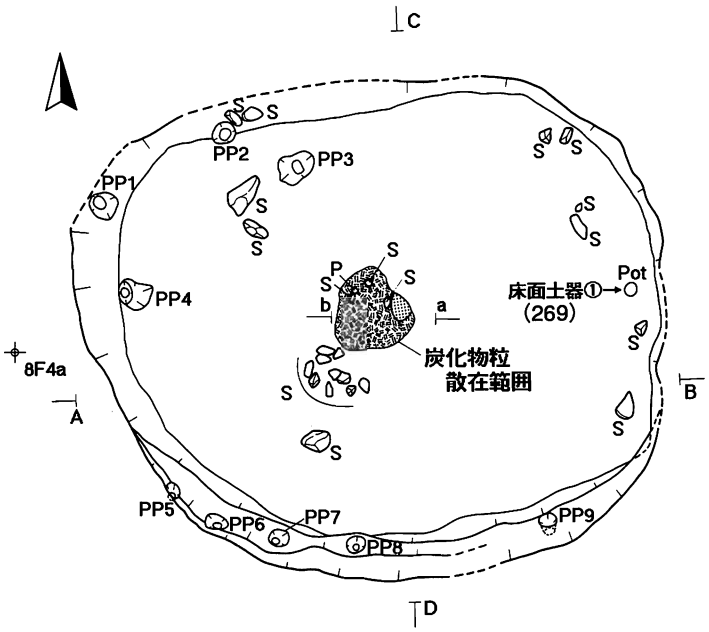
番　号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9
直径 cm	23×21	18×18	31×21	26×21	13×10	19×13	16×16	16×13	14×12
深さ cm	22.2	10.5	－	－	10.0	17.0	17.0	－	23.8

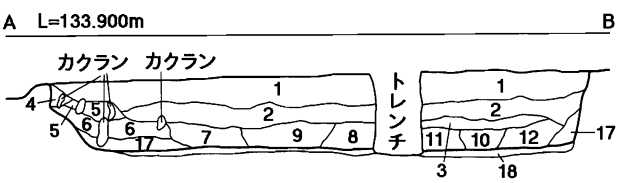
遺物（第71～72図・写真図版65～66）

〔土器〕床面：269。覆土下位：270～280。覆土上位：281～288。281は入り組みの帯状文が施された壺胴部片、283の深鉢口縁部片も同様に入り組み帯状文が施文される。288では木葉状の磨り消し縄文。282の注口土器には胴部中位に瘤状小突起が貼付される。覆土：290～294。

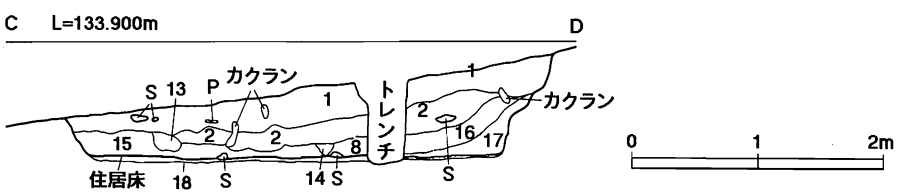
〔土製品〕土偶1点(289)。覆土上位から出土した。頭部～胴部上半の欠損品である。頭部は頭頂部が尖り、両耳は大きく張り出している。顔面は、細い粘土紐の貼付により目・口が表現されているが、一部剥落している。後頭部は突起状に隆起している。頭部は、胴部に設けられたソケット状の凹部に差し込まれている。胴部は腰部に向かって窄(すぼ)まっているが下半部が欠失しているため、形状の詳細は不明である。残存する右腕は胴部側に著しく屈曲している。

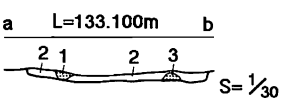
時期　出土土器の様相を見ると、覆土下位～上位で縄文時代後期後葉(中葉の新しい部分？)に位置付けられるものがあるが、それらも完全に後葉とは言い切れない(中葉から後葉の過渡的なもの？)。そこから考えれば本住居の所属時期は、縄文時代後期中葉(新)～後葉(古)となると思われる。（千葉）





A－B・C－D
1．10Y R2/1 黒色シルト　土器多量混入　地山土細粒微量混入
2．10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト　締まりあり　土器小片混入　炭化物粒・地山土極小ブロック微量混入
3．10Y R2/2 黒褐色シルト　3～6mm大の炭化物粒微量混入
4．10Y R3/2 黒褐色シルト　地山土細粒微量混入　人為的堆積の様相を示す
5．10Y R3/3 にぶい黄褐色シルト　黒褐色シルト細粒と地山土細粒が入り混じり、人為的堆積の様相を示す
6．10Y R4/6 褐色シルト　黒褐色シルトブロック混入　地山土細粒微量混入　人為的堆積の様相を示す
7．10Y R5/3 にぶい黄褐色シルト　地山土極小ブロック5%混入　黒褐色土ブロックが層の西半に偏在　人為的堆積の様相を示す
8．10Y R3/4 暗褐色シルト　地山土小～極大ブロックで20%混入　拳大の礫が数個混在　炭化物粒・黒褐色土細粒微量混入　人為的堆積の様相を示す
9．10Y R3/4 暗褐色シルト　炭化物粒微量混入　地山土細粒10%混入　黒褐色土ブロックが層の東に偏在して15%混入　人為的堆積の様相を示す
10．10Y R3/4 暗褐色シルト　炭化物粒・地山土細粒微量混入　人為的堆積の様相を示す
11．10Y R3/4 暗褐色シルト　人為的堆積の様相を示す
12．10Y R3/4 暗褐色シルト　人為的堆積の様相を示す
13．10Y R3/3 暗褐色シルト　締まりあり　炭化物粒微量混入　地山土極大ブロック混入　黒色シルト40%混入　人為的堆積の様相を示す
14．10Y R3/3 暗褐色シルトブロック　炭化物粒・地山土細粒微量混入　人為的堆積層
15．10Y R3/4 暗褐色シルト　土器小破片混入　炭化物粒微量混入　地山土細粒～極大ブロック微量混入　黒褐色土15%混入
16．10Y R4/4 褐色シルト　にぶい黄褐色土細粒混入　人為的堆積の様相を示す
17．10Y R3/3 暗褐色シルト　地山土細粒微量混入　自然堆積層とみられる
18．（貼床）10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性ややあり　締まりあり





a－b 炉
1．2.5Y R4/8 赤褐色焼土　焼成良好である
2．10Y R3/3 暗褐色シルト　締まりあり　炭化物粒混在　地山土の細粒～極大ブロック7%混入
3．2.5Y R4/8 赤褐色焼土　焼成良好である

第25図　B12住居跡

B13住居跡

遺構（第26～27図・写真図版23～24）

〔位置・検出状況〕5Hグリッド北東部に位置する。当該グリッドのⅢc層面において灰白色パミスの環状の薄い広がりを検出し、確認のためサブトレンチを入れたところ斜面上方で壁の立ち上がりを確認、古代の住居跡として認定した。B4住居跡、B5住居跡、B44土坑と重複し、これらを截っている。

〔平面形・規模〕斜面上部の南東壁上部が崩落しているが、概ね方形状を呈している。規模は3.5×3.2mである。

〔覆土〕7層に細分されるが概ね黒色～黒褐色土で構成される。灰白色パミスが混入する堆積層は斜面上方の壁際から床面へと緩く落ち込み、その上下を黒色～黒褐色土が挟み込んでいる。概ねレンズ状の自然堆積的様相を示している。

〔壁・床面〕壁は上部がⅢc層相当、下部はⅤ層に相当する。北西壁を除いて壁は外傾し、特に上部で著しい(壁上部が黒色土であるため掘りすぎた可能性はある)が、北西壁はより直立気味である。残存する壁高は45～70cmである。床面はほぼ平坦であるが、地山礫が所々に露出している。床面は主にⅤ層相当であるが、北東側(B4住居跡との重複部分)では粘土質土を用いた薄い貼床を施している。床面中央やや南寄りにごく弱い(痕跡程度の)焼成部分が見られる。

〔柱穴・ピット〕床面で柱穴状ピット4基を検出したが、配置・規模から見ていずれも主柱穴とは考えにくい。また、カマド右脇でピット1基（PP5）が検出されており、底面付近から土器片が纏まって出土している。貯蔵穴的な性格を有するものと思われる。

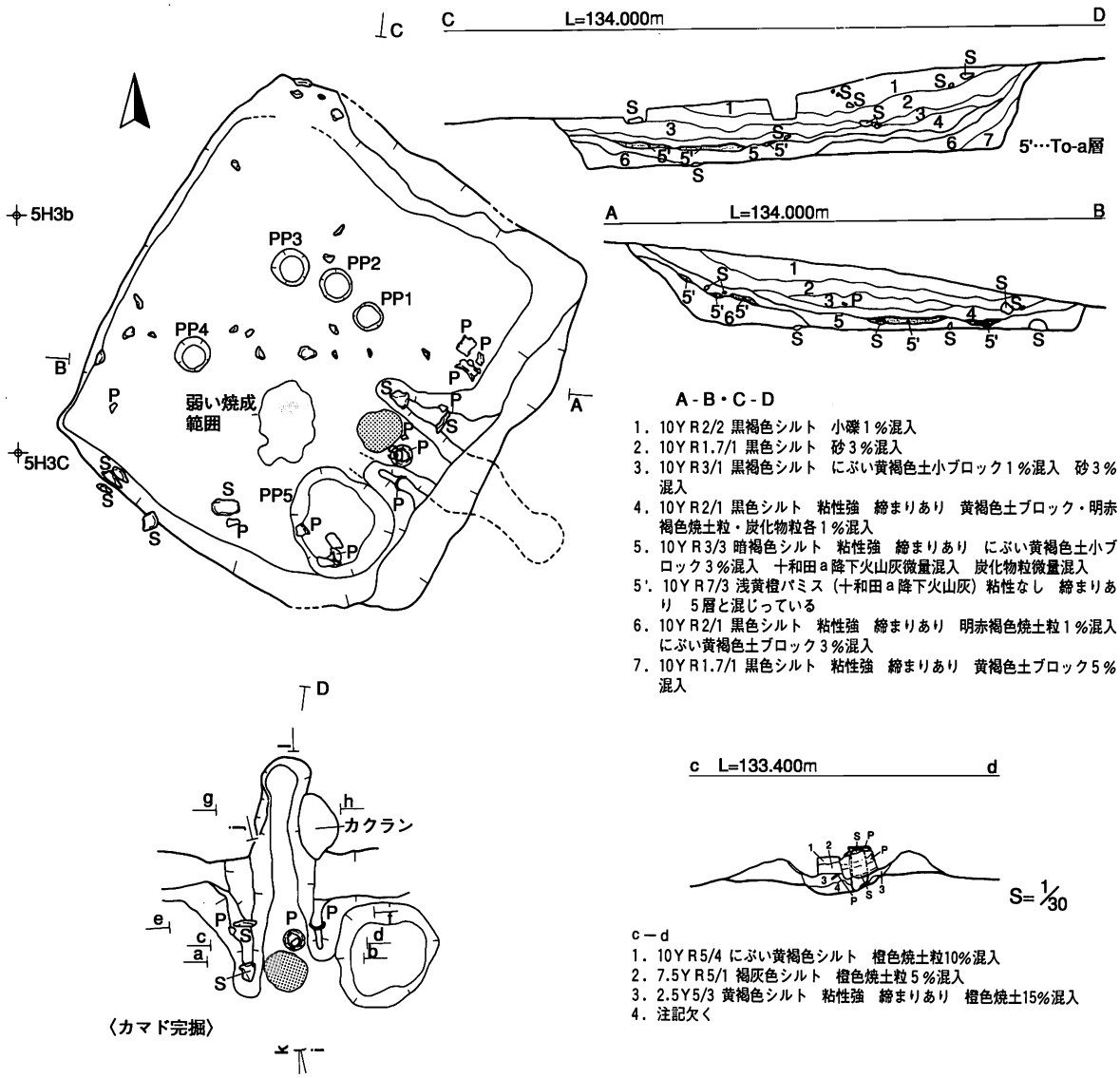
番　　号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5
直　径 cm	26×25	29×28	33×31	31×27	94×78
深　さ cm	8.7	5.2	4.8	4.8	36.5

〔カマド〕位置：南東壁のほぼ中央に設置されている。本体：火床部には径35cmの円形状に焼土が広がる。焼土層は厚さ10cmを測り、焼成は良好である。火床部右奥側には角柱状の自然礫が直立で埋め込んであり、礫を覆うように土師器甕が倒立状態で被せられている。甕はカマド底面からやや浮いていたものと思われ、安定性に欠けること、位置的に中央からややずれることなど疑義はあるものの、支脚として使用されたものと推測される。天井部は崩落しており確認できなかったが、カマド覆土下位に混入する焼土ブロック層が崩落した天井部の痕跡であると思われる。側壁は礫を芯材とし、黒色シルトを貼り付けて構築されている。煙道・煙出し部：上部が崩落しているため構造は明確ではないが、覆土断面を参照すると地下式(刳り抜き式)だった可能性がある。

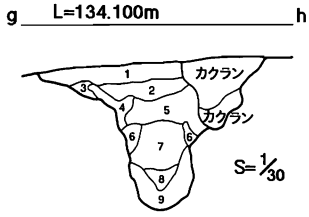
遺物（第73～74図、写真図版66～67）

〔土器〕床面で土師器・須恵器、覆土から縄文土器が出土している。土師器：坏(295～297)、甕(298・299)。坏は器高があって深いもので、底径がやや大きい。298は非ロクロ成形で底部が大きく、胴部は球状に膨らみ、口縁は屈曲して外傾する。全体形状は歪んでいる。299はロクロ成形であるが著しく歪みがある。須恵器：カマド脇の床面で出土した大甕の胴部片(300)。外面にはタタキメ、内面はタタキメおよびナデ調整がなされている。縄文土器：301～311。301は微隆起線文の注口土器である。

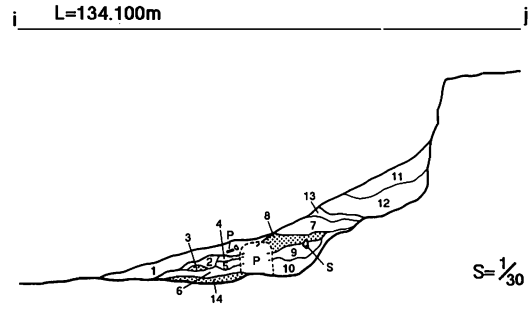
時期　覆土の様相や出土遺物から平安時代(9世紀末～10世紀初)と推定される。（千葉）



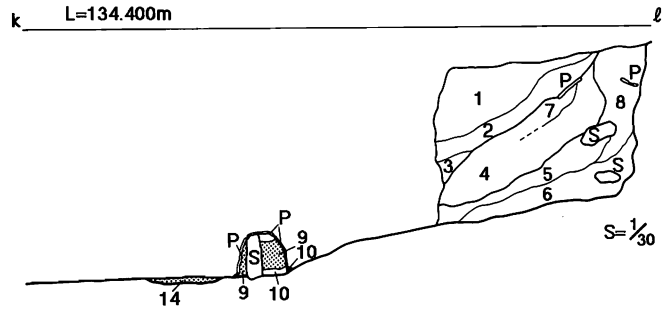
第26図　B13住居跡（1）



g－h
1．10ＹＲ2/2 黒色シルト
2．10ＹＲ3/3 暗褐色シルト
3．10ＹＲ5/6 黄褐色粘土質土　粘性強
4．10ＹＲ4/6 褐色シルトと10ＹＲ3/3 暗褐色シルトとの混土層
5．10ＹＲ2/1 黒色シルト　締まりなし
6．10ＹＲ5/6 黄褐色粘土質シルト　締まりなし　黒褐色土ブロック20%混入　煙道上部の残存部
7．10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色シルト　締まりなし　煙道崩落後の流入土
8．10ＹＲ2/1 黒色シルト　締まりなし　赤褐色焼土ブロック15%混入
9．10ＹＲ2/1 黒色シルトと10ＹＲ6/6 明黄褐色シルトとの混土層　締まりなし



i－j
1．10ＹＲ3/2 黒褐色シルト　締まりあり
2．10ＹＲ6/4 にぶい黄橙色粘土質シルト　橙色焼土ブロック３%混入　炭化物粒（５mm大）混入
3．2.5ＹＲ5/6 明赤褐色焼土　粘性弱　締まりあり
4．10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色シルト　締まりなし　橙色焼土粒10%混入　炭化物粒混入
5．10ＹＲ4/6 褐色シルト　粘性強　炭化物粒混入
6．2.5ＹＲ5/3 黄褐色シルト　粘性強　締まりあり　橙色焼土粒10%混入　炭化物粒微量混入
7．10ＹＲ7/6 明黄褐色粘土質土　粘性強
8．10ＹＲ6/6 赤橙色焼土　粘性弱
9．10ＹＲ4/2 灰黄褐色～10ＹＲ3/2 黒褐色シルト　橙色焼土ブロック５%混入
10．10ＹＲ3/2 黒褐色シルト　橙色焼土ブロック10%混入
11．10ＹＲ2/1 黒色シルト
12．10ＹＲ4/2 灰黄褐色～10ＹＲ3/2 黒褐色シルト　粘性強　締まりあり　地山土ブロック斑らに15%混入
13．10ＹＲ5/8 黄褐色粘土質シルト　締まりなし　橙色焼土大ブロック10%混入
14．2.5ＹＲ5/8 明赤褐色～2.5ＹＲ6/8 橙色焼土　締まりあり　燃焼部焼土



k－l
1．10ＹＲ2/2 黒褐色シルト　小石３%混入　煙道崩落後の埋没土
2．10ＹＲ3/3 暗褐色シルト　煙道崩落後の埋没土
3．10ＹＲ3/1 黒褐色シルト
4．10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色シルト　締まりなし　明黄褐色土ブロック20%混入
5．10ＹＲ2/1 黒色シルト　粘性やや強　締まりなし
6．10ＹＲ2/1 黒色シルトと10ＹＲ6/6 明黄褐色シルトとの混土層　締まりなし
7．10ＹＲ2/1 黒色シルト　締まりなし
8．7.5ＹＲ3/2 黒褐色シルト　締まりなし

第27図　B13住居跡（２）

B14住居跡

遺構（第28図・写真図版25）

〔位置・検出状況〕5G4b～5G3dグリッド付近のB区段際で検出した。

〔平面形・規模〕西側は棚田造成時の掘削により失われており、全体の1/4程度しか残存していない。残存部から、円形で5～6mと推定される。

〔覆土〕黒褐色土を主体とする。主に上位～中位に遺物を含み、下位では焼土ブロックが混入する。

〔壁・床面〕壁は直立気味、床面は平坦である。壁の大部分(上部はⅢc層)と床面はⅤ層に相当するが、床面ではⅤ層下位・砂礫層が露出している。〔炉・柱穴〕残存部分の床面では検出されていない。

遺物(第74～75図、写真図版67～69)

〔土器〕縄文後期中葉に比定される土器が多量に出土している（5.4kg)。磨り消し縄文手法による幅広の帯状縄文により文様がモチーフされるものを主体とする。床面で313、覆土から312・314～328。器種は壺(312～314)、深鉢(315～328)。312の胴部には鍵状の帯縄文。313・314は口縁部に地文、口縁下半は無文である。315～317は波状口縁で口唇に沿って刻み目帯が巡る。319～322は平縁で口縁から胴部に連続する帯縄文が展開する。

時期　床面直上出土の土器から、縄文時代後期中葉に属するものと推定される。　（千葉）

Ｂ15住居跡

遺構（第28図・写真図版25～26）

〔位置・検出状況〕Ｂ区段際の5Ｈ１ｅ～5Ｈ3ｂグリッド付近において、段際にトレンチを入れた際に壁の立ち上がりを確認し、住居跡として認定した。検出面はⅢｃ層面であるが、“黒に黒”状態で覆土とⅢｃ層との区別がつきにくく、平面でプランを明確には把握できなかった。そのため、トレンチを入れつつ、壁の立ち上がりをもとに精査を行ったが、結果的に重複する2棟の覆土を一緒に掘削してしまった。覆土検討の結果、2棟の重複と判明し、南側部分をＢ15住居跡とした。本住居の北側にＢ16住居跡が重複しており、本住居がＢ16住居跡に截られている。

〔平面形・規模〕不明である。大部分をＢ16住居跡に破壊を受けており、また西側は棚田造成時に破壊されている。本住居は南側の一端を検出したにとどまる。

〔覆土〕Ⅲ層系の黒褐色シルトを主体に、一部壁際崩落土と推定されるにぶい黄褐色粘土質シルトが混ざる。

〔壁・床面〕壁は僅かに外傾しており、壁高は30～45㎝。壁面は上部がⅢｃ層、下部がⅤ層に相当している。床面はⅤ層で、南側では平坦、東側では壁際で緩く上がって壁につながっている。

〔炉〕検出されていない。〔柱穴〕杭穴状の浅い小穴を壁際で検出している。また、Ｂ16住居跡の床面で検出されている柱穴状小穴のうち、内側に寄っているものは本住居に属していた可能性もあるが、明らかではない。

遺物（第76図・写真図版68～69）

前述のとおり、Ｂ16住居跡と同時に精査したため、覆土中の遺物の多くをＢ15住居跡の遺物として取り上げた。そのため、本住居の出土遺物としたものの大部分がＢ16住居跡に帰属する可能性がある。但し、明確に分離できないため、ここでは現場の注記のまま掲載する。

〔土器〕縄文土器約5.4㎏出土している。329～337。329・331は大波状口縁の深鉢で、口唇部に刻み目帯が巡る。330はクランク状の帯縄文が付された壺形土器。332～334には磨り消しの帯縄文。

時期　出土遺物およびＢ16住居跡との重複関係から、縄文時代後期中葉に属すると思われる。　（千葉）

Ｂ16住居跡

遺構（第28図・写真図版25～26）

〔位置・検出状況〕Ｂ15住居跡の北側に位置し、同住居を截っている。前述のとおり、精査当初はＢ15住居跡と同一の住居として精査しており、覆土検討の結果、別住居として認定した。

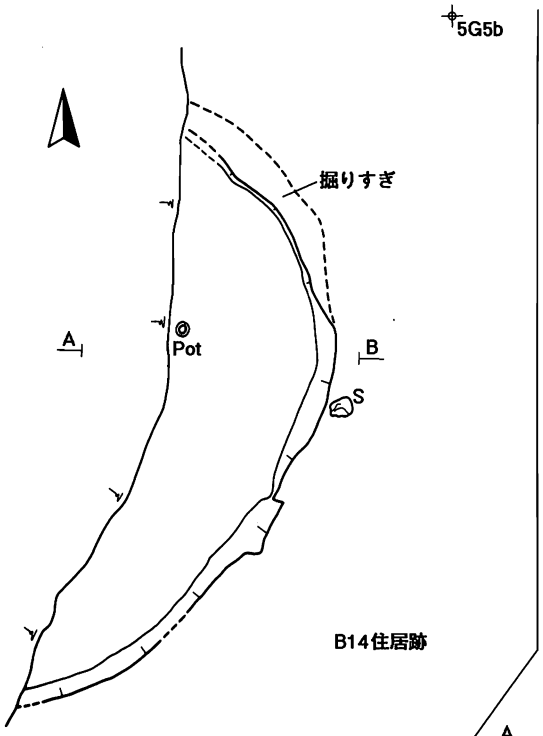
〔平面形・規模〕西側1/2程を棚田造成時に破壊されており、残存部は径4.5ｍほどの半円である。全体形状は不明だが、残存部から推測すると円形で直径5ｍほどと推定される。

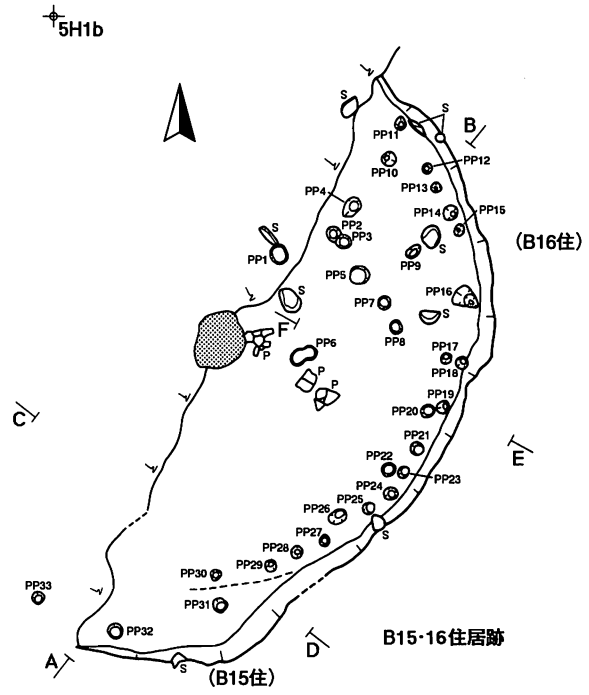
〔覆土〕上位1層は黒褐色シルトによる自然堆積層で、中位から下位の3・4層は人為堆積層と思われる。

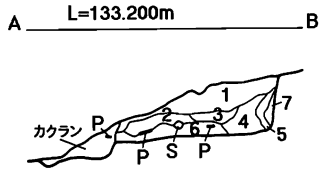
〔壁・床面〕壁は、北～東側では上部がⅢｃ層、下部はⅤ層に相当し、南側のＢ15住居跡との重複部分では同住居の覆土を壁としている。壁は直立気味であるが、Ｂ15住居跡との重複部分では崩落しており明確ではない。床面はほぼ平坦で、Ⅴ層である。

〔炉〕住居のほぼ中央付近と思われる位置に地床炉1基を検出した。段際の掘削部分に当たっており、痕跡程度しか残っていない。

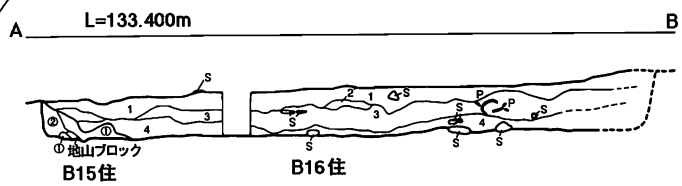
〔柱穴〕床面から多数の柱穴を検出したが、主柱は明確ではない。壁際には小柱穴が並ぶ。



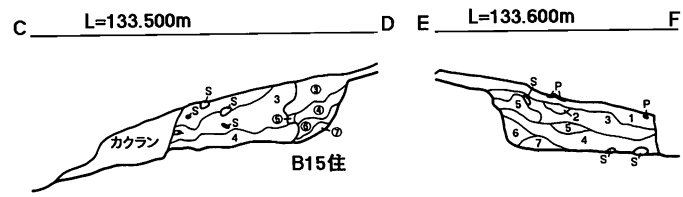




A－B
1．10ＹＲ2/3 黒褐色シルト
2．7.5Ｙ Ｒ4/2 灰褐色シルト　粘性強　締まりあり　赤褐色焼土粒５％混入
3．10Ｙ Ｒ3/2 黒褐色シルト　赤褐色焼土ブロック３％混入
4．10Ｙ Ｒ3/1 黒褐色シルト　層下位に地山細砂が斑らに混入
5．10Ｙ Ｒ4/2 褐灰色シルト　粘性強　地山粘土ブロック10%混入
6．2.5Ｙ 4/2 暗灰黄色粘土質シルト　粘性強　明赤褐色焼土ブロック15%混入　炭化物粒５％混入
7．10Ｙ Ｒ7/6 明黄褐色シルト　締まりなし　黒褐色土ブロック10%混入　地山崩落土



A－B・C－D（B15住）
①．10Ｙ Ｒ5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性強　地山崩落土か
②．10Ｙ Ｒ3/1 黒褐色シルト
③．10Ｙ Ｒ2/2 黒褐色シルト　締まりなく崩れやすい　小礫（１㎝未満）３％混入
④．10Ｙ Ｒ5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性強
⑤．10Ｙ Ｒ2/1 黒色シルト
⑥．10Ｙ Ｒ5/6 黄褐色粘土質シルト　粘性強
⑦．10Ｙ Ｒ6/6 明黄褐色粘土質シルト　粘性強　地山崩落土



A－B・C－D・E－F（B16住）
1．10Ｙ Ｒ2/2 黒褐色シルト　小礫３％混入
2．10Ｙ Ｒ3/4 暗褐色シルト　赤褐色焼土小ブロック10%混入
3．10Ｙ Ｒ3/3 暗褐色シルトと 10Ｙ Ｒ2/1 黒色シルトの混土層　明黄褐色土ブロック５％混入　小礫３％混入　人為的堆積層か
4．10Ｙ Ｒ2/1 黒色シルト　粘性強　明黄褐色粘土ブロック10%混入　小礫５％混入
5．10Ｙ Ｒ2/3 黒褐色シルト　粘性強　締まりなし
6．10Ｙ Ｒ1.7/1 黒色シルト　締まりに乏しい
7．10Ｙ Ｒ2/1 黒色シルト　明黄褐色粘土大ブロック30%混入

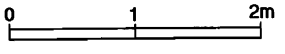
番　号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7
直径㎝	15×13	12×11	12×11	18×12	17×14	22×12	11×10
深さ㎝	17.3	11.0	6.5	15.5	13.0	20.3	6.8

番　号	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12	PP13	PP14
直径㎝	11×10	13×8	12×12	11×9	9×9	9×8	13×11
深さ㎝	5.1	8.5	20.5	10.5	4.0	6.0	9.5

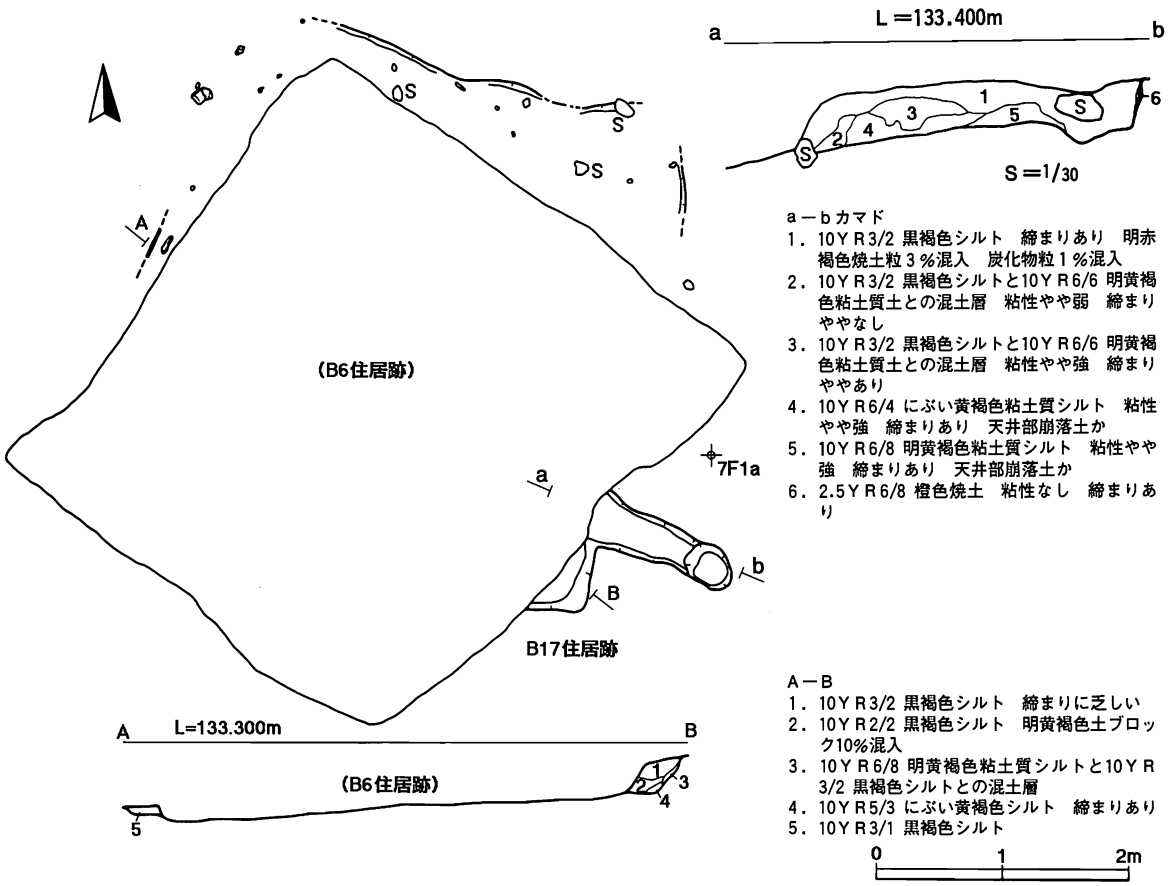
番　号	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	PP20	PP21
直径㎝	10×8	21×14	9×8	10×10	11×10	11×9	11×10
深さ㎝	6.5	15.5	8.3	7.3	25.0	10.0	16.0

番　号	PP22	PP23	PP24	PP25	PP26	PP27	PP28
直径㎝	11×10	9×8	11×10	10×9	14×11	9×8	11×9
深さ㎝	5.0	14.5	17.0	10.0	10.0	8.4	7.5

番　号	PP29	PP30	PP31	PP32	PP33
直径㎝	9×9	9×8	12×12	13×11	11×10
深さ㎝	4.4	11.2	7.2	7.4	8.0



第28図　B14・B15・B16住居跡



第29図　B17住居跡

遺物(第76～78図・写真図版70～71)

〔土器〕縄文土器が約3.7kg分が出土している。338～350。338は床面で押し潰れた形で出土した浅鉢である。口縁端部と胴部に刻み目帯が巡っており、その間にn字形のモチーフの帯縄文が反復して付されている。339の壺も床面で検出されており、胴部にはS字状の帯縄文。350は覆土上位出土の単孔土器で、壺形土器の胴部下位に孔1箇所が穿たれている。口縁部は大振りな波状で口唇に刻み目帯。頸部は欠損著しいが一旦膨らんで胴部につながっている。胴部は複雑な文様構成である。

時期　出土遺物から、縄文時代後期中葉に属するものと推定される。　(千葉)

B17住居跡

遺構（第29図・写真図版27)

〔位置・検出状況〕6Eグリッドに位置する。大部分がB6住居に截られている。東側でB11住居の西壁を截っている。カマド煙道部分についてはB6住居検出の際に確認していた。B6住居精査の結果、当住居の煙道部がB6住居とは別物であると判明し単独の住居跡とした。しかし、その時点では当住居はカマド煙道部のみ残存するもので住居本体はB6住居に破壊されたものと把握していた。当住居の残存部分がB11住居と重複して、プランの判別ができなかったことも災いした。結局、B11住居の覆土断面を観察した際に当住居の床・壁を確認したが、時既に遅く、床・壁の大部分を掘削してしまっていた。〔平面形・規模〕カマド煙道部および壁・床面の一部が残存するに過ぎず、詳細不明である。〔覆土〕残存する覆土は黒褐色土を主体としている。〔壁・床面〕残存部で見ると、壁は外傾しており壁高約25cm、床面は平坦である。

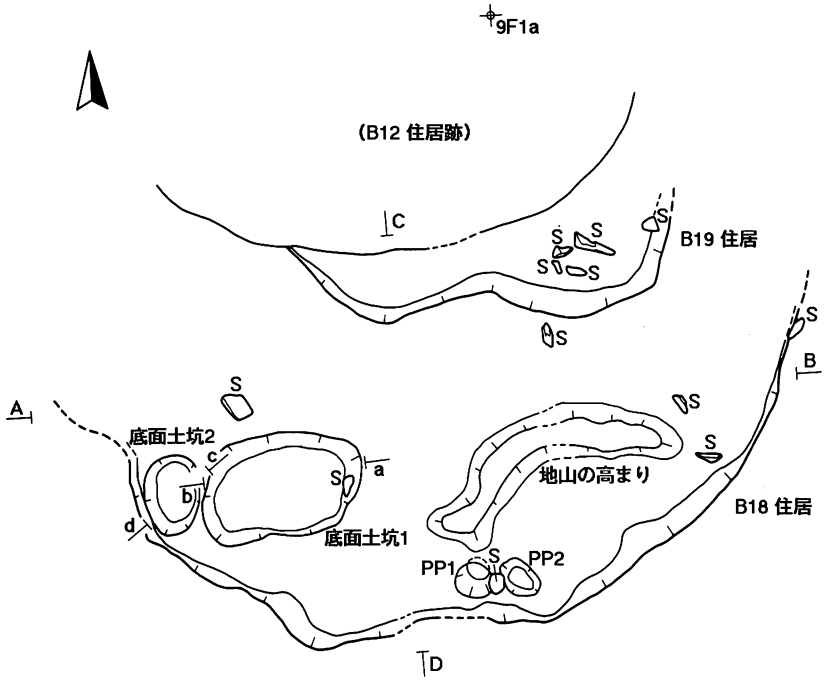
〔カマド〕位置：東壁の南側に寄った位置(南隅付近)に付設されている。本体：B6住居に破壊されており、その痕跡を確認できなかった。煙道・煙出し部：煙道は南東方向へ延びており、長さ約1.2mである。煙道はほぼ水平に住居外に延び、煙り出し部で土坑状に窪んでいる。上部構造は明確にはわからなかった。
〔付属施設〕不明確だが、B6住居カマド下位で検出されたB46土坑は、本住居の貯蔵穴だった可能性がある。
遺物（第79図、写真図版72）
〔土師器〕内外面黒色処理の甕？(351)が出土している。底部に漢字らしき1文字が刻書されている。
時期　平安時代(9世紀末～10世紀初)と推定される。　(千葉)

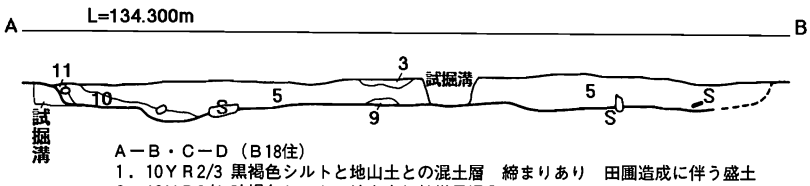
B18住居跡

遺構（第30図・写真図版28）
〔位置・検出状況〕8F区東半から9F区西半にかけて位置する。V層上面において半円状の暗褐色土の広がりとして検出された。B19住居跡およびB12住居跡と重複し、これらに截られている。
〔平面形・規模〕不明である。残存する壁の状況から、本来直径6m前後の円形であったと推定される。
〔覆土〕黒褐色土、暗褐色土等からなる全て10層に細分される。第5層は暗褐色土の自然堆積土層であるが、これより下位はV層ロームのブロックや細粒を多量に混入した土層で構成され、人為堆積の可能性がある。
〔壁・床面〕壁は南壁および西壁側で床面から直立気味に立ち上がる。最大約20cmの立ち上がりが確認されてはいるが、開田時に削平を受けているため本来の規模のものではない。床面は一部に地山ロームの高まりが存在しているものの、それ以外は概して平坦である。〔炉〕検出されない。〔柱穴〕2基検出された。PP1は径30×30cmで深さが39.8cmを測り、PP2は径が36×25cmで深さが13.8cmを測る。主柱は不詳である。
〔床面土坑〕2基検出された。土坑1は平面形が長径135cm、短径85cmの楕円形を呈す。深さ約10cmで、覆土は黒色土の単層である。土坑2は平面形が長径63cm、短径45cmの楕円形を呈す。深さが約15cmで、覆土はにぶい黄褐色土の単層である。
遺物（第79図・写真図版72）
〔土器〕352、353は口縁部破片である。354は浅鉢の体部下半の破片である。
時期　出土遺物から縄文時代後期中葉に属する可能性が高い。　(菊池)

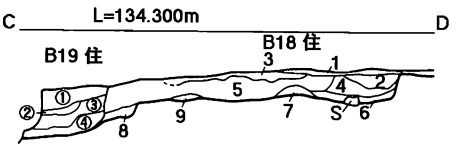
B19住居跡

遺構（第30図・写真図版28）
〔位置・検出状況〕8F区東半から9F区西半にかけて位置する。B18住居跡精査のため設定した南北土層断面の観察によって存在が確認された。B12住居跡と重複し、これに截られる。またB18住居跡とも重複し、これより新しい。〔平面形・規模〕不明である。〔覆土〕黒色土、黒褐色土、暗褐色土からなる全て4層に細分される。最下層の第4層にはV層ロームのブロックが多量に混在し、人為的堆積土層と判断される。
〔壁・床面〕V層を壁面とし、南側において直立気味に立ち上がる。壁上部は開田時に削平されている。床面は概ね平坦であるが、V層の基盤礫がやや露出する。貼床は認められない。〔炉・柱穴〕検出されない。
遺物（第79図・写真図版72）
〔土器〕358、359は縄文土器体部の破片である。〔石器〕357は磨製石斧の基部である。
時期　出土遺物及び別遺構との重複関係より、縄文時代後期中葉に属する可能性が高い。　(菊池)

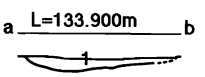




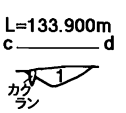
A－B・C－D（B18住）
1．10YR2/3 黒褐色シルトと地山土との混土層　締まりあり　田圃造成に伴う盛土
2．10YR3/4 暗褐色シルト　地山土細粒微量混入
3．10YR2/3 黒褐色シルト　地山土細粒微量混入
4．10YR3/4 暗褐色シルトと地山土との混土層　地山土は25%混入　人為的堆積の様相
5．10YR3/4 暗褐色シルト　地山土細粒微量混入
6．10YR2/2 黒褐色シルト　地山土細粒微量混入　焼土粒ごく微量混入
7．10YR5/6 黄褐色シルトブロック（地山土）粘性あり　締まりあり
8．10YR3/4 暗褐色シルトと地山土との混土層　地山土は15%混入　人為的堆積の様相
9．10YR4/6 褐色シルト　締まりあり
10．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土が細粒やブロックで混入　人為的堆積の様相
11．10YR3/4 暗褐色シルト　地山土細粒微量混入　人為的堆積の様相



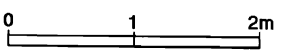
C－D（B19住）
①．10YR2/1 黒色シルト　層下位に地山土細粒が筋状に微量混入
②．10YR2/2 黒褐色シルト　小礫微量混入
③．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土細粒微量混入
④．10YR2/3 黒褐色シルトと地山土との混土層　地山土はブロックで30%混入　人為的堆積層



a－b
1．10YR2/1 黒色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　地山土細粒微量混入



c－d
1．10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　黒色土細粒・地山土細粒微量混入



第30図　B18・19住居跡

Ｂ21住居跡

遺構（第31図・写真図版30）

〔位置・検出状況〕Ｂ4住居跡の北側に位置する。大部分をＢ4住居跡に破壊されており、東壁の一端と柱穴の検出にとどまる。

〔平面形・規模〕平面形・規模ともに推定の域をでない。〔覆土〕黒褐色土シルトを主体とする。

〔壁・床面〕壁はわずかに立ち上がりを確認したのみである。床面はほぼ平坦である。〔炉〕検出されない。

〔柱穴〕床面で１基、床面残存範囲外で２基検出した。PP1は径42×41cm、深さ8.5cmを計る。PP2は径43×34cm、深さ14.8cmを、PP3は径29×23cm、深さ22.5cmを計る。本住居に伴うものか不確実である。

遺物　出土していない。

時期　詳細な時期は不明であるが、周辺などの状況から縄文時代後期中葉以前と推定される。　（千葉）

Ｂ22住居跡状遺構

遺構（第31図・写真図版30）

〔位置・検出状況〕５Ｆグリッドに広がる。検出面はＶ層黄褐色粘土質シルト層で、竪穴本体及び床面は削平されており、壁柱穴と思われる小形の柱穴の検出にとどまる。

〔平面形・規模〕平面形・規模ともに不明である。南壁際に巡っていたと推定される柱穴の連続性から円形で、直径6ｍ前後と思われる。

〔柱穴〕13個の柱穴を検出した。竪穴の南壁際に巡っていたと推定される。

番　号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12	PP13
直径 cm	40×30	30×30	30×30	40×25	30×2	40×40	40×35	40×24	25×25	37×28	30×30	32×20	30×30
深さ cm	28.0	20.7	32.7	43.7	36.5	28.0	36.5	36.5	41.0	52.2	52.2	43.7	38.2

遺物　出土遺物はない。

時期　不明である。本遺跡の縄文時代後期住居の特徴である円形気味の平面形が推定されることから、縄文時代後期と思われる。　（千葉）

Ｂ23住居跡状遺構

遺構（第31図・写真図版30）

〔位置・検出状況〕６Ｅグリッドに広がる。検出面はＶ層黄褐色粘土質シルト層で、竪穴本体及び床面は削平されており、壁柱穴と思われる小形の柱穴の検出にとどまる。

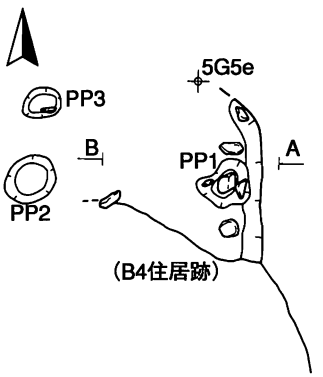
〔平面形・規模〕平面形・規模ともに不明である。南壁際に巡っていたと推定される柱穴の連続性から円形若しくは楕円形で、５ｍ前後と思われる。

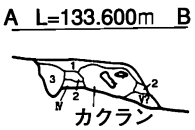
〔柱穴〕本遺構に伴う可能性が高いものを含めて27個の柱穴を検出した。PP19・PP20・PP21は、その位置関係から出入り口施設に関係する可能性が考えられる。PP23～PP27は屋外の柱穴の可能性が推定されたことから本遺構に含めた。覆土はⅢ層系黒色土の単層である。計測値を第31図内に示す。

遺物　出土遺物はない。

時期　不明である。本遺跡の縄文時代後期住居の特徴である円形気味の平面形が推定されることから、縄文時代後期と思われる。　（千葉）

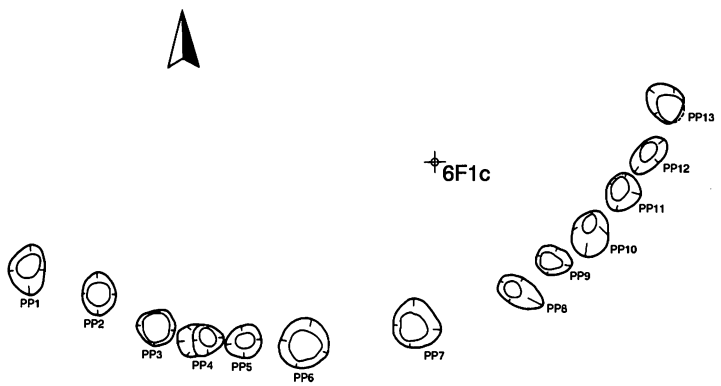
B21住居跡



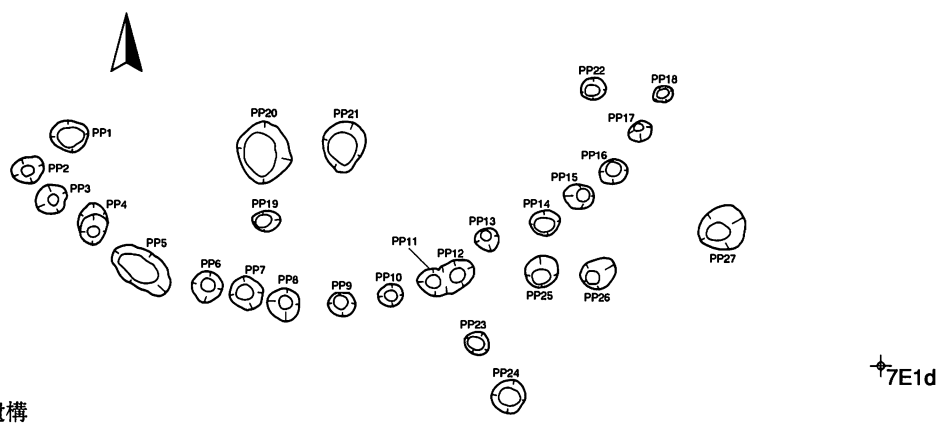


B21 住居跡
1．10YR2/1 黒色～10YR2/2 黒褐色シルト　礫3%混入　明黄褐色土ブロック5%混入
2．7.5YR3/3 暗褐色シルト　粘性強　締まりあり　貼床か
3．10YR3/3 暗褐色シルト　ＰＰ１　覆土

B22住居状遺構

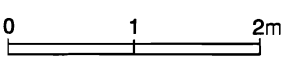


B23住居状遺構



B23住居状遺構

番　号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
直　径 cm	30×25	25×20	25×25	35×25	55×30	25×25	25×25	25×25	20×20	20×20
深　さ cm	17	30	35	25	27	34	34	36	32	40
番　号	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	PP20
直　径 cm	20×？	20×？	20×20	25×20	25×20	25×20	20×20	15×15	25×15	50×45
深　さ cm	25	29	26	57	46	46	38	34	9	26
番　号	PP21	PP22	PP23	PP24	PP25	PP26	PP27			
直　径 cm	40×30	20×17	20×20	30×27	25×25	30×20	40×30			
深　さ cm	22	44	11	22	14	34	30			



第31図　B21住居跡、B22・23住居状遺構

(2) 掘立柱建物跡

大形の円形建物1棟、六角形(亀甲形)建物3棟を検出した。いずれも縄文時代に属するものである。ここで掘立柱建物跡としたものの他、調査区域内には多数の柱穴状ピットが検出されており(後述)、ここで既述した4棟以外にもっと多数存在していた可能性はあるが、建物として認識できなかった。

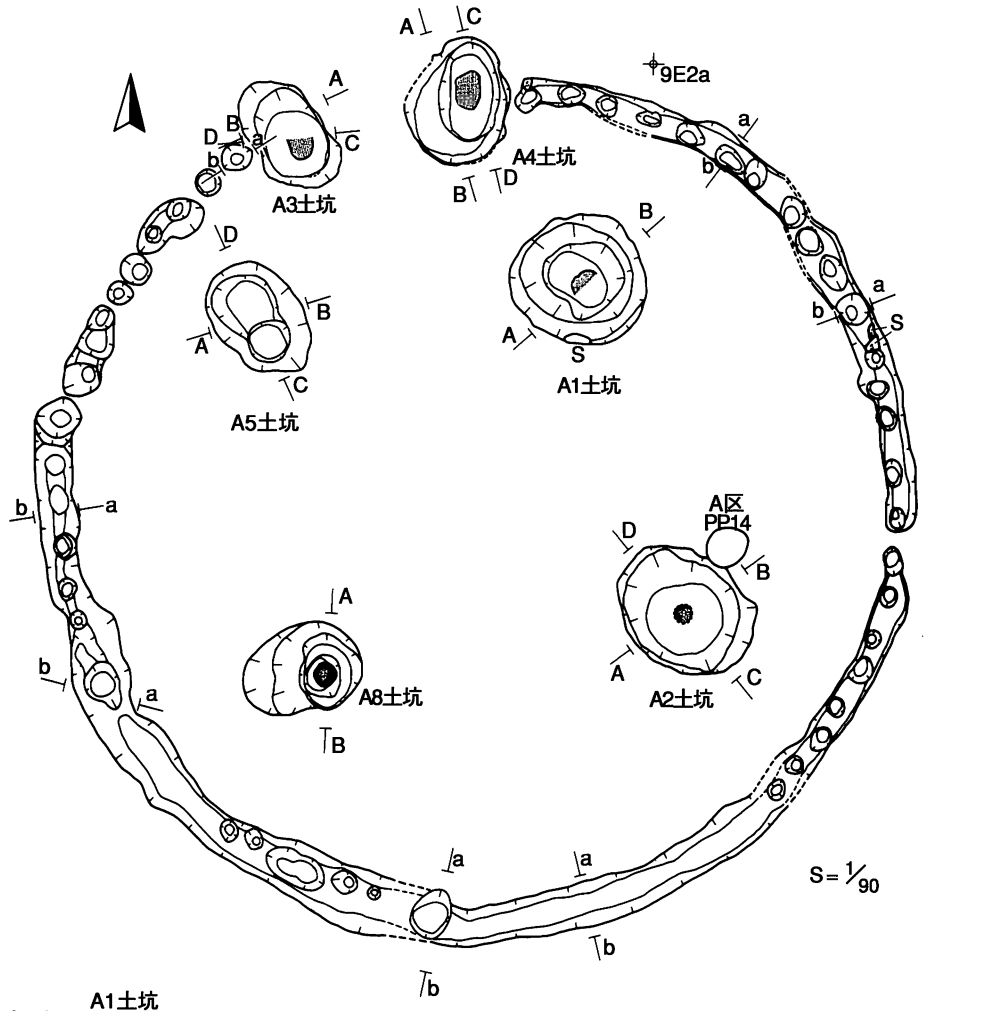
A1建物跡

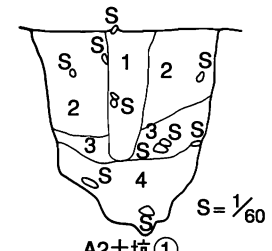
遺構 (第32～34図・写真図版31～35)

〔位置・検出状況〕 8E～9Eグリッドの第Ⅲc層面(削剥部分では第Ⅴ層面)で検出した。南側でB12住居跡、西側で平安時代のB3住居跡、北側でA6土坑にそれぞれ柱穴列部分を截られている。また、直接の新旧関係は把握できないがA2住居跡と重複し、これに截られているものと思われる。当初、主柱穴および出入口部柱穴を個別に検出・精査し、続いてそれらを取り囲む柱穴列を検出するに及んで、これらが一つの建物を構成することに気づいた。これは当建物が、A・B区の段差部およびC区との段(棚田の段法面部)際に占地していたため、建物東側(特に南東側)が削剥されて段状になっていたことが影響している。柱穴列の南東部分については、調査開始から早い時点で、棚田造成に伴う地山削剥部分において溝状のプランとして検出していた。しかし、その覆土が汚れた埋め戻し土であることから攪乱として認識していた。その後、A区の第Ⅲc層面にトレンチを設定して掘削した際に「A1土坑」、その南側の削剥による地山露出部分で「A2土坑」、棚田法面側の第Ⅲb層掘削の際に「A3土坑」と「A4土坑」、「A3土坑」の南側第Ⅲc層面で「A5土坑」を、それぞれ検出し精査を行った。この時点で各「土坑」の断面で柱痕跡が認められ、これらの「土坑」が柱穴であることが判明した。そこでこれら5基のうち、「A3・4土坑」を除く柱穴3基が六角形(亀甲形)平面の建物となるものと考え(B1・2建物の精査後だったため、六角形建物のイメージが強かった)、想定される位置に柱穴を探したが確認できなかった。ところが、B12住居跡の北側に隣接して第Ⅴ層上面で「A8土坑」が検出され、さらにそれまで攪乱と捉えていた溝状プランがこれらの「土坑」を取り囲むように巡ることが判明するに至り、これらが大形円形建物として認識された。

〔柱穴配列・規模〕 環状の柱穴列を伴う掘立柱建物である。柱穴列の形成する環状部分は、径約10mのほぼ円形である。主柱穴は4基(A1・2・5・8土坑)である。やや北側2基の間隔が狭く、台形状の配置となっており、主柱穴の間隔は3.8～4.3mを測る。主柱穴の平面形態はA1土坑が径1.5mの円形、A2土坑が1.7×1.4mの楕円形、A5土坑が1.3×1.0mの楕円形、A8土坑が1.1×1.0mのやや不整な楕円形である。西側の2基は平面形が楕円で、柱穴本体部分が建物内側へ偏在しており、やや形状を殊にする。主柱穴を囲む柱穴列は、北側(斜面下方)の大径の柱穴2基(A3・4土坑)と小径の柱穴49基 (検出分) で構成されている。小径の柱穴群は径17～60cmほどの円形ないしは楕円形のもので、深さ27～128cmである。これらの小柱穴は溝状掘り込みの底面で連続的に配置される(北西側は当建物の「検出」以前に掘削したため溝状掘り込みが消失している)が、斜面上方の南側では不明瞭となり把握できない部分もある。当該部分では第Ⅴ層下位の砂礫が露出しており、本来はあったはずの柱穴が地山砂礫の崩落により判別できなくなった可能性がある。また、柱穴列の末端にあたる大径の柱穴2基はともに平面形が楕円形で、それぞれ1.5×0.9m(A3土坑)、1.6×1.2m(A4土坑)を測り、深さは1.5～1.6mである。この2基の間(1.0m)には小柱穴列はなく、当建物の出入口部分にあたるものと考えられる。

〔柱穴覆土〕 A5土坑を除く主柱穴3基と出入口部柱穴2基では柱痕跡が確認された。検出された柱痕跡の平面形は円形ないし楕円形状で、径25～45cmを測る(A1土坑ではセクションが柱部分の中心を外れて、途中で

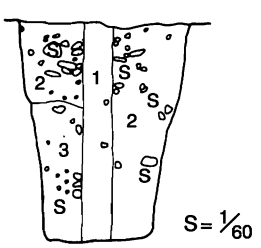


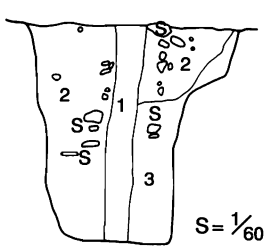


A2土坑①
A L=133.500m B

A2土坑②
C L=133.500m D

A 1 土坑
1. 10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性ややあり　締まりあり　炭化物粒微量混入　地山土細粒７％混入　拳大の礫が個数混入　柱痕跡
2. 10Y R2/3 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりあり　地山土小～極大ブロック40%混入　黒色土極大ブロック疎らに若干混入　拳大の礫多量混入　掘り方埋土
3. 10Y R2/1 黒色シルト　粘性ややあり　締まりあり　地山土小～大ブロック10%混入　にぶい黄褐色土若干混入　拳大の礫複数混入　掘り方埋土
4. 10Y R3/2 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりあり　地山土小～大ブロック20%混入　にぶい黄褐色シルト10%混入　拳大の礫若干混入　掘り方埋土

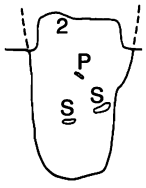




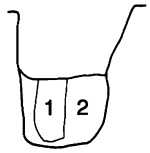
A 2 土坑
1. 10Y R4/4 褐色シルト　粘性ややあり　締まり弱　柱痕跡
2. 10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　拳大の礫が多量に混入（特に１層との境に多い）地山土細粒～大ブロックで10%混入　掘り方埋土
3. 10Y R5/6 黄褐色シルト　粘性あり　締まりあり　拳大の礫が多量に混入　掘り方埋土

第32図　A 1 建物跡（1）

A3土坑①
A L=133.500m B

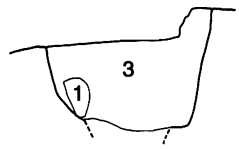


A3土坑②
C L=133.500m D

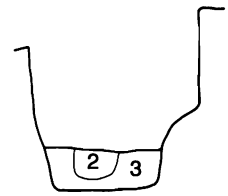


A3土坑
1．10YR2/3 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあるも2層より柔らかい　地山土細粒・ブロック混入するも2層より少ない　柱痕跡
2．10YR2/3 黒褐色シルト　粘性・締まり共にややあり　下位に縄文土器片混入　地山土細粒～極大ブロック10%混入　礫混入　掘り方埋土

A4土坑①
A L=133.500m B



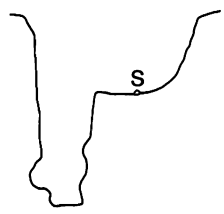
A4土坑②
C L=133.500m D



A4土坑
1．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まり弱　撹乱土（新しい柱穴）
2．10YR3/3 暗褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあるも3層より柔らかい　炭化物粒微量混入　地山土細粒微量混入　柱痕跡
3．10YR3/3 暗褐色シルト　粘性ややあり　締まりあり　地山土細粒～極大ブロック15%混入　掘り方埋土

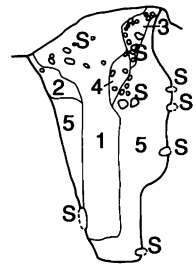
A5土坑①
A L=133.500m B

A5土坑②
C L=133.500m D



A5土坑
1．10YR2/1 黒色シルト　粘性ややあり　堅く締まる　土器片混入　拳大の礫が多量に混入　地山土細粒・中～大ブロックで10%混入　掘り方埋土

A8土坑
A L=133.500m B

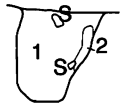


A8土坑
1．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　小礫（2～3cm大）複数混入　拳大の礫が若干混入　柱痕跡
2．10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　地山土ブロック30%混入　掘り方埋土
3．10YR5/6 黄褐色シルト　粘性ややあり　締まりあり　小礫（2cm大）や拳大の礫（風化花崗岩・砂岩）が多量に混入　掘り方埋土
4．10YR5/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR4/2 灰黄褐色シルトとの混土層　粘性ややあり　締まりあり　礫多量混入するも3層より寡　掘り方埋土
5．10YR4/6 褐色シルト　粘性ややあり　締まりあり　礫混入するも3・4層より寡　掘り方埋土

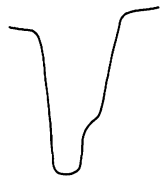
PP1
L=132.400m
a b

PP13
L=132.900m
a b

PP18
L=133.300m
a b



PP27
L=133.300m
a b



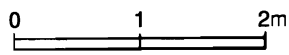
PP42
L=132.900m
a b

PP47
L=132.800m
a b

周溝内柱穴
ＰＰ1　1．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりあり　層上位に黄褐色砂5%混入　地山土細粒微量混入
ＰＰ13　1．10YR3/3 暗褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　地山土の細粒～極大ブロック15%混入　小礫微量混入
ＰＰ18　1．10YR3/3 暗褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　地山土細粒10%混入　拳大の礫、小礫微量混入
　　2．10YR4/4 褐色シルト　粘性ややあり　締まりあり　地山土細粒微量混入
ＰＰ42　1．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりあり　土器小片混入　地山土の細粒～極大ブロック5%混入
ＰＰ47　1．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　炭化物粒微量混入　地山土細粒微量混入

L=133.600
a b

南東部周溝断面
1．10YR5/6　黄褐色シルト　粘性あり　締まりあり　にぶい黄褐色シルト5%混入　黒色土微量混入　人為的堆積の様相



第33図　A１建物跡（２）

柱痕跡が消えている)。柱穴掘り方の覆土は色調に違いはあるものの、礫・地山ブロックを多く含んだ締まりある人為的な埋め戻し土であった。小柱穴(柱痕跡)の覆土は黒褐色土～暗褐色土である。一方、周溝(掘り方)の覆土は、人為的な埋め戻しによる汚れた黄褐色土である。

遺物(第79～80図・写真図版72～73)

〔土器〕柱穴覆土から縄文土器が出土している。絶対量は少ないが、文様のわかるものは縄文時代後期中葉の特徴を示している。A1土坑(主柱穴):372～374。A5土坑(主柱穴):364～366・376～377。364の壺胴部には磨り消しによる鍵状文が展開。376は小片であるが、沈線区画＋磨り消し。A8土坑(主柱穴):369・370・375。375は磨り消し縄文。

〔石器〕A4土坑(出入り口部柱穴):367は両面に磨り痕ある敲磨器である。

時期　柱穴覆土の出土遺物は少量ではあるが、縄文時代後期中葉の様相を示しており、当建物の構築時期は縄文時代後期中葉と推測される。　(千葉)

B1建物跡

遺構(第35～36図・写真図版36～37)

〔位置・検出状況・重複関係〕主体は6G～7Gグリッドに位置している。B2住居跡およびB2建物跡と重複している。柱穴の覆土様相から見て、これらの新旧関係は古い順に、B2建物跡→B1建物跡→B2住居跡となる。B2住居跡の床面およびV層上面において、一部重複するB2建物跡柱穴と一括で検出した。検出当初は建物としての認識がなく、B2住居跡に伴う柱穴と考えて個々に精査した。柱穴覆土を裁ち割った段階で、これらの柱穴が六角形(亀甲形)の柱穴配列をとる建物2棟の重複であることに気づき、建物と認定した。当建物跡の周辺は棚田造成時に削剥されており、表土直下が平坦な地山(V層)面であった。よって本来の構築面は不明であるが、本来はⅢc層面から掘り込まれていた可能性が高いと思われる。

〔柱穴配列・規模〕8基の柱穴が六角形(亀甲形)に配置され、梁1間×桁2間に入側柱PP4・8が両側に付き、上屋は切妻形の構造をとるものと推測される。規模は梁行4.3×桁行4.5m、側柱間は約7.4mを測る。

番　号	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8
直　径cm	40×38	40×28	63×40	42×34	44×38	40×30	55×38	45×35
深　さcm	54	80	81	76	72	58	78	40

〔主軸方向〕桁方向はN－82°－Wの軸線をとり、若干ズレがあるもののほぼ東西方向に沿っている。

〔柱穴の形状・覆土〕PP5はB2住居跡の床面で、その他の柱穴7基はV層面で確認した。PP3を除く6基の平面形は円形基調である。入側柱PP4・8の2基はいずれもやや内側に傾斜して掘られている。覆土はPP1(黒褐色土)を除いて、にぶい黄褐色土が主体である。柱の引き抜き・埋め戻しにより人為的に堆積したものではないかと推測される。

遺物　柱穴覆土から縄文土器の小片が出土しているが、図化不能で掲載していない。

時期　出土遺物が僅少で時期判断の材料が乏しい。本建物を截るB2住居跡は縄文時代後期中葉(新)～後葉(古)と推定されており、重複関係から考えて本建物の所属時期は縄文後期中葉と推測される。　(千葉)

出入り口柱穴計測表

名 称	直径 cm	深さ cm
A3土坑	147×90	155
A4土坑	155×120	145

主柱穴計測表

名 称	直径 cm	深さ cm
A1土坑	155×155	171.3
A2土坑	174×137	174.5
A5土坑	133×98	157.1
A8土坑	110×103	195.2

周溝内柱穴計測表

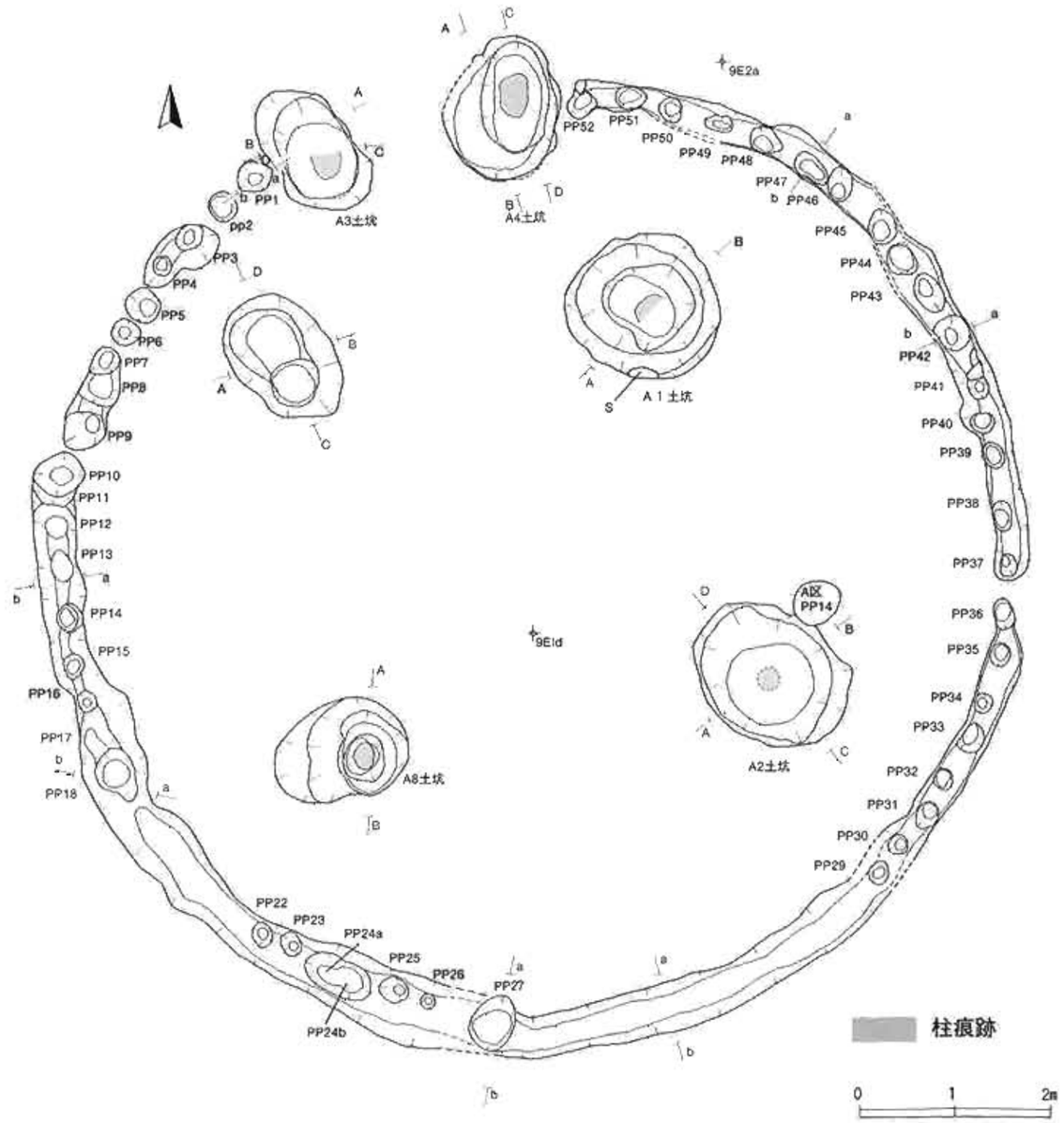
名 称	直径 cm	深さ cm
ＰＰ1	40×34	36.1
ＰＰ2	34×31	42.6
ＰＰ3	35×24	30.7
ＰＰ4	22×20	54.1
ＰＰ5	39×38	43.4
ＰＰ6	30×29	48.6
ＰＰ7	37×27	36.0
ＰＰ8	50×42	29.6
ＰＰ9	47×44	58.3
ＰＰ10	55×48	63.8
ＰＰ11	45×？	72.1
ＰＰ12	45×？	65.5
ＰＰ13	42×？	74.2
ＰＰ14	30×22	98.2
ＰＰ15	27×22	82.4
ＰＰ16	21×18	70.5
ＰＰ17	40×？	76.3
ＰＰ18	58×41	89.4
ＰＰ22	27×21	93.4
ＰＰ23	25×20	90.6
ＰＰ24a	37×？	79.2
ＰＰ24b	38×？	89.7
ＰＰ25	31×28	99.5
ＰＰ26	17×16	97.4
ＰＰ27	60×45	128.3
ＰＰ29	26×21	37.5
ＰＰ30	23×21	27.5
ＰＰ31	31×23	32.4

名 称	直径 cm	深さ cm
ＰＰ32	20×20	57.5
ＰＰ33	31×23	81.8
ＰＰ34	22×18	67.7
ＰＰ35	24×21	76.8
ＰＰ36	33×19	85.9
ＰＰ37	24×17	93.5
ＰＰ38	33×20	77.3
ＰＰ39	30×20	86.8
ＰＰ40	26×23	52.0
ＰＰ41	24×21	82.1
ＰＰ42	37×32	85.7
ＰＰ43	44×28	78.3
ＰＰ44	35×29	76.4
ＰＰ45	36×29	70.8
ＰＰ46	32×26	80.1
ＰＰ47	41×21	71.0
ＰＰ48	37×28	76.3
ＰＰ49	29×15	71.5
ＰＰ50	28×27	83.0
ＰＰ51	33×22	68.0
ＰＰ52	30×24	51.5

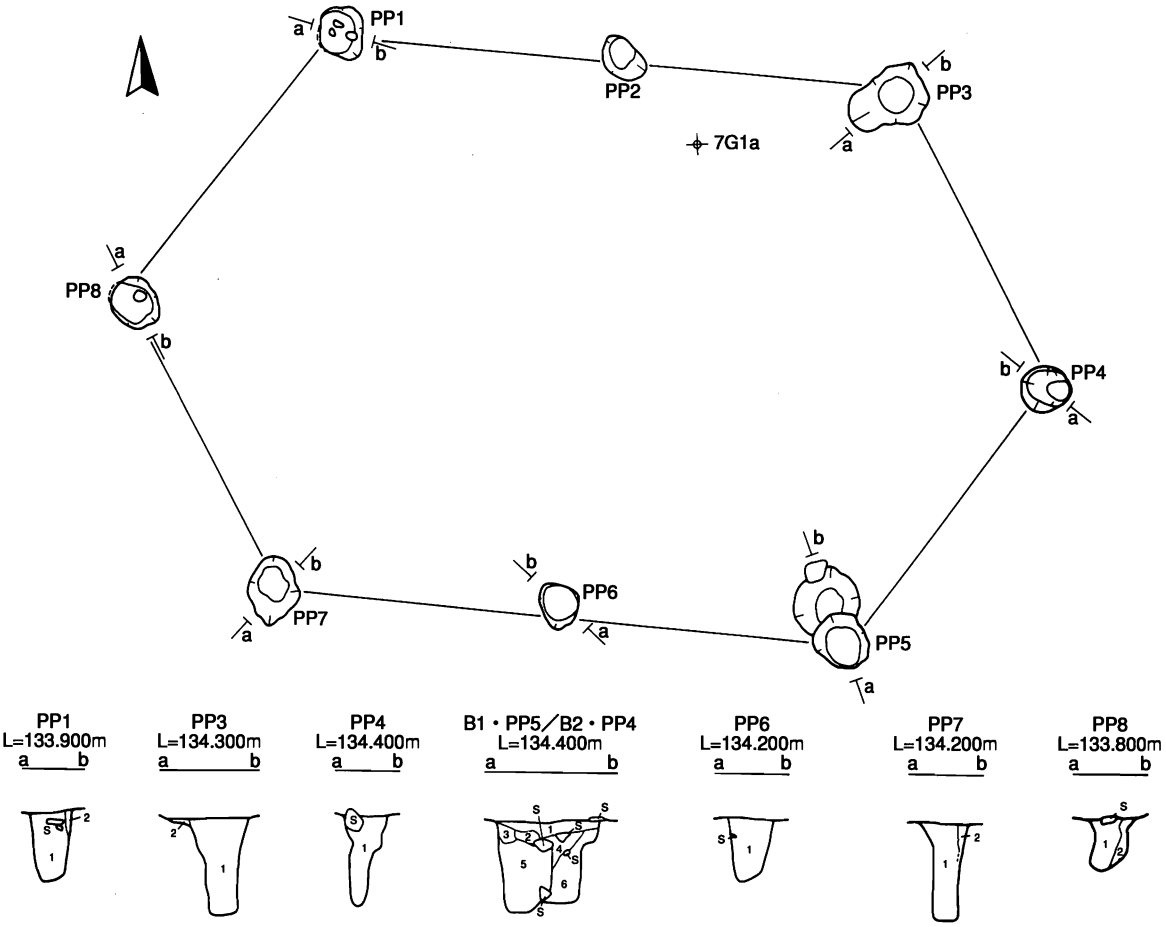
注１）径は、周溝内部で確認された柱穴上端の長径と短径を以て示す。

注２）深さは、周溝上端と柱穴底面とのレベル差を計測したものである。

注３）PP19・20・21・28は、欠番である。



第34図　A１建物跡（３）拡大図



PP1、PP3、PP4、PP6～PP8

ＰＰ１　1．10ＹＲ2/3 黒褐色シルト　粘性やや強　締まりややなし　黄橙色土ブロック10%混入
　　2．10ＹＲ5/6 黄褐色粘土質土　粘性強　締まりあり　掘り方埋土

ＰＰ３　1．10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色シルト　粘性やや強　締まりややあり　黒褐色土・黄橙色土ブロックまだらに３%混入
　　2．10ＹＲ2/1 黒色シルト　粘性強　締まりあり　黄橙色土ブロック10%混入

ＰＰ４　1．10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色シルト　粘性やや強　締まりややあり　層の上位に明黄褐色土ブロック20%混入　小礫３%混入

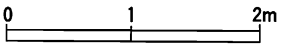
ＰＰ６　1．10ＹＲ5/6 褐色シルト　粘性やや弱　締まりあり　黄橙色土ブロック５%混入

ＰＰ７　1．10ＹＲ4/4 褐色シルト　粘性やや弱　締まりややあり
　　2．10ＹＲ6/4 にぶい黄橙色シルト　粘性やや強　締まりあり　黄橙色土ブロック３%混入

ＰＰ８　1．10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色シルト　粘性やや強　締まりややなし　黒褐色土ブロック・黄橙色土ブロックまだらに15%混入
　　2．10ＹＲ7/4 にぶい黄橙色粘土質土　粘性強　締まりなし

B1建物PP5、B2建物PP4

1．10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色粘土質土　粘性強　堅く締まる　炭化物粒微量混入　Ｂ２住居跡の貼床層か
2．10ＹＲ3/4 暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりややなし
3．10ＹＲ6/6 明黄褐色粘土質土と 10ＹＲ3/4 暗褐色シルトとの混土層　地山崩落土か
4．10ＹＲ4/4 褐色シルト　粘性やや強　締まりややなし　黄橙色土ブロック５%混入
5．10ＹＲ4/2 灰黄褐色シルト　粘性やや弱　締まりややなし
6．10ＹＲ4/4 褐色シルト　粘性やや強　締まりややなし



第35図　Ｂ１建物跡

Ｂ２建物跡

遺構（第36図、写真図版36～37）

〔位置・検出状況〕主に6Ｇ～7Ｇグリッド北側に位置し、Ｂ2住居跡床面およびＶ層面で検出した。検出状況はＢ1建物跡で述べたとおりである。柱穴の覆土様相から見ると、Ｂ2住居跡およびＢ1建物跡よりも古期の遺構である。構築面はＢ1建物跡同様に明確ではないが、Ⅲｃ層から掘り込まれていた可能性が高い。

〔柱穴配列・規模〕柱穴6基を六角形(亀甲形)に配置しているが、桁は短く、梁1間×桁1間の両側に側柱が付く形である。梁行4.1×桁行3.4～3.6ｍ、側柱間5.4ｍを測る。柱穴の配置はＢ1建物跡と同様の亀甲形であるが、6基の柱穴は径約5ｍの円周上に並んでいる点で異なっている。このことから、本建物跡の上屋は切妻ではなく寄棟的な構造をとる可能性が考えられる。

番　号	PP 1	PP 2	PP 3	PP 4	PP 5	PP 6
直 径 cm	60×32	70×60	30×25	96×35	65×40	38×30
深 さ cm	50.0	68.0	46.0	74.0	48.0	23.0

〔主軸方向〕桁方向の軸線はＮ－87°－Ｗで、ほぼ東西方向に向いている。

〔柱穴の形状・覆土〕側柱を除く4基は円形基調の平面形であるが、PP1・5では張出し状の段が付く。この張出しは、明瞭ではないが建物廃棄時の柱抜き取りに伴うものと考えられる。覆土は褐色・暗褐色・黒褐色土と一様ではない。人為的に埋め戻されたものと思われる。

遺物　出土していない。

時期　Ｂ1建物との重複関係から、縄文時代後期中葉以前である。但し、周辺の出土土器の様相から見て、後期前葉以前に遡る可能性は低いことから、後期中葉期に収まるものと推測される。（千葉）

Ｂ３建物跡

遺構（第37図、写真図版37）

〔位置・検出状況〕7ＦグリッドのＶ層面で検出した。Ｂ1・2建物と同様、当初は建物として認識せず、個々の柱穴として精査しており、一部は断面実測を省略したものもある。Ｂ1・2建物を認定した後、同様の建物の可能性を追求した結果、亀甲形の配列を見出し、建物として把握した。覆土の様相から見れば、本来の構築面はⅢｃ層と推測される。

〔柱穴配列・規模〕6基の柱穴からなり、Ｂ1・2建物に比してやや歪んでいるものの、六角形(亀甲形)の柱穴配置である。梁1間×桁1間、側柱が梁側両脇に付く形態である。Ｂ2建物と同じく、円形を基調とした寄棟形の上屋構造が想定できる。梁行3.0～3.2×桁行3.0ｍ、側柱間は5.7ｍである。

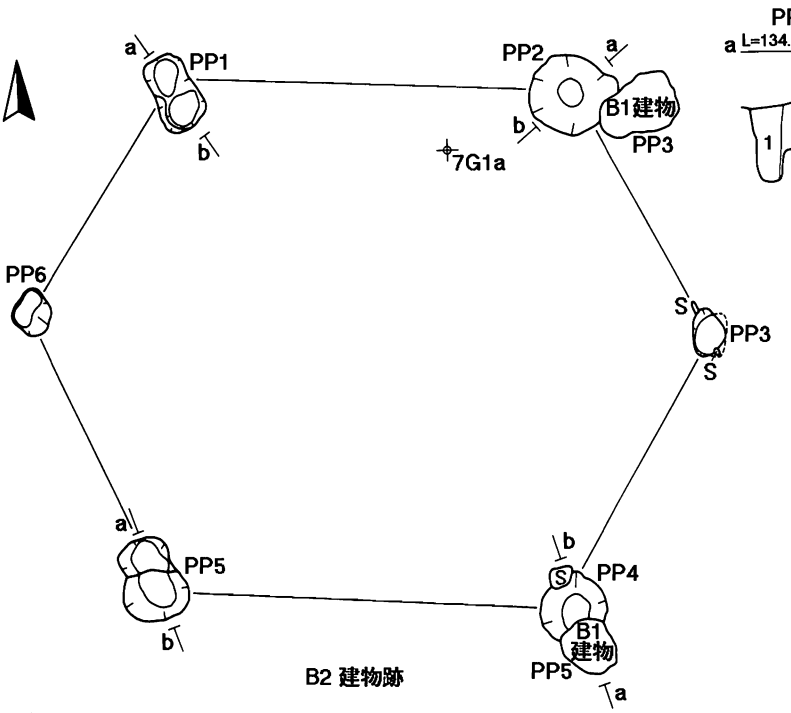
番　号	PP 1	PP 2	PP 3	PP 4	PP 5	PP 6
直 径 cm	30×25	30×30	28×22	25×18	32×30	30×25
深 さ cm	45.0	56.0	39.0	22.0	41.0	38.0

〔主軸方向〕桁方向はＮ－75°－Ｗの軸線となり、他の亀甲形建物２棟よりも北に偏している。

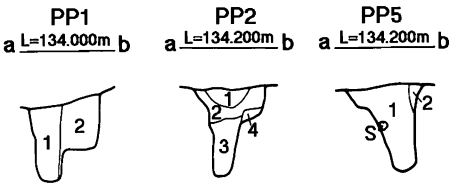
〔柱穴の形状・覆土〕6基ともに平面形は円形基調である。径20～30cmほどで深さは22～56cm、Ｂ1・2建物跡に比べてやや小径である。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物を欠いており具体の時期判断が難しいが、平面形態や規模がＢ1・2建物跡に類似する点から見て、縄文時代後期に属するものと推測される。（千葉）



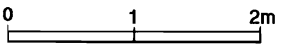
B2 建物跡

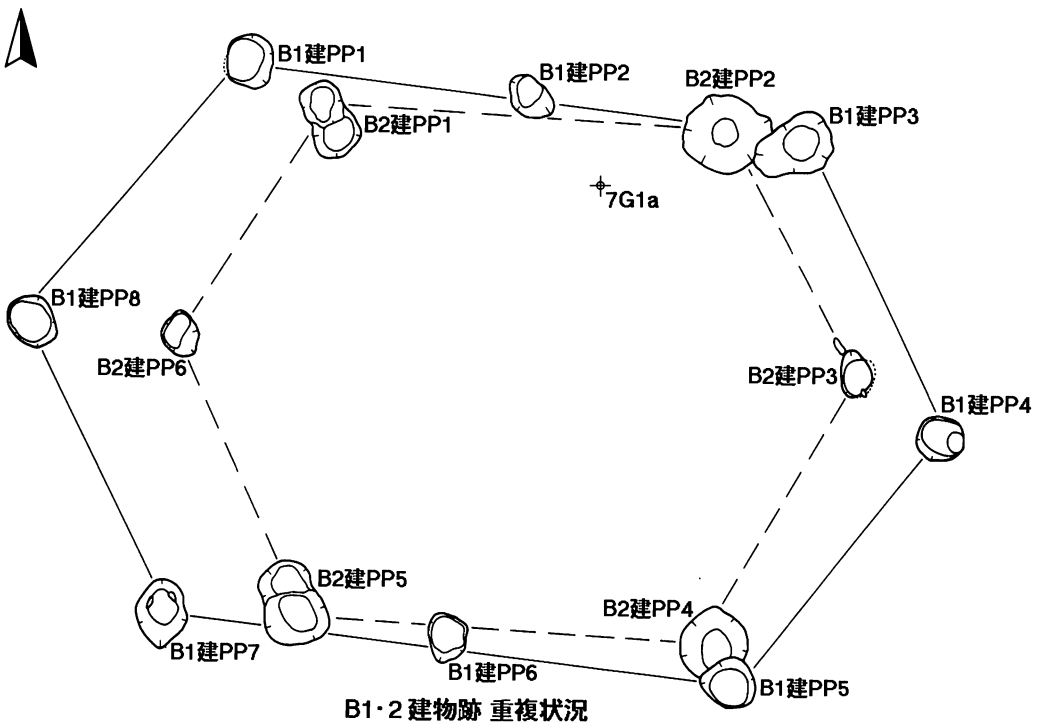


ＰＰ１　1．10ＹＲ2/2 黒褐色シルト　粘性やや強　締まりややなし　層の下位に黄橙色土ブロック３％混入
2．10ＹＲ3/4 暗褐色シルト　粘性強　締まりあり　掘り方埋土か

ＰＰ２　1．10ＹＲ5/6 褐色シルト　粘性やや弱　締まりややあり
2．10ＹＲ5/4 黄褐色シルト　粘性やや弱　締まりややあり　黄橙色土ブロック５％混入
3．10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色シルト　粘性やや弱　締まりややあり　黄橙色土ブロック１％混入
4．注記欠く

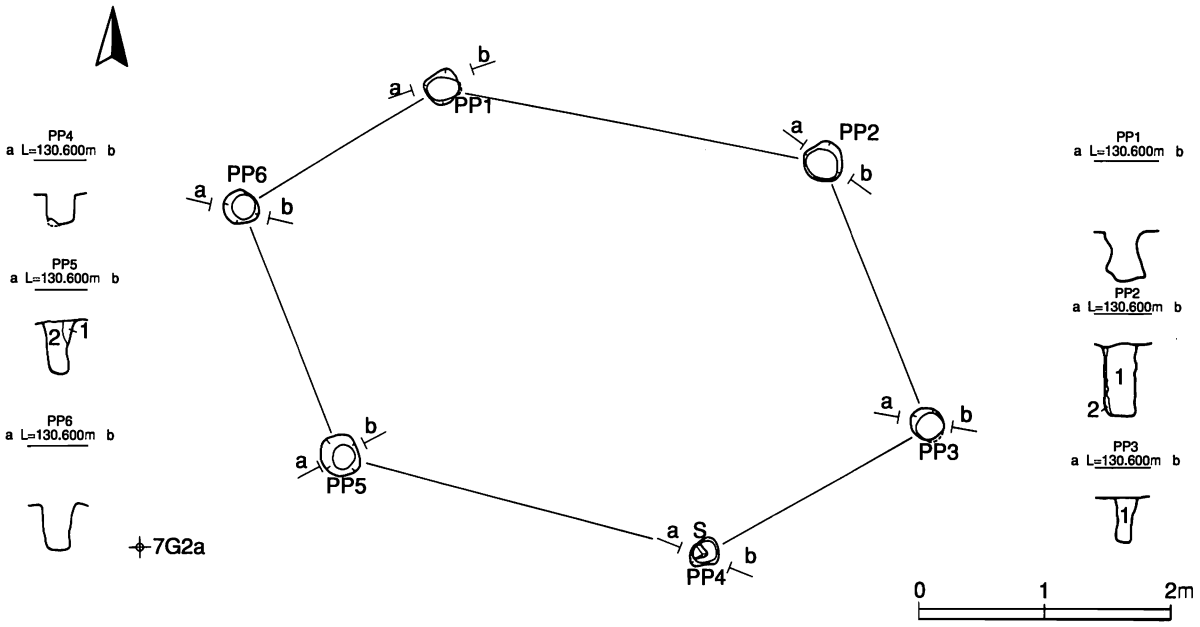
ＰＰ５　1．10ＹＲ3/4 暗褐色シルト　粘性やや強　締まりややなし　黄橙色土ブロック３％混入　小礫１％混入　柱抜き取り痕
2．10ＹＲ2/2 黒褐色シルト　粘性やや強　締まりあり　掘り方埋土





B1・2 建物跡 重複状況

第36図　Ｂ２建物跡、Ｂ１・２建物跡重複状況



ＰＰ２　１．10ＹＲ2/3 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　地山土細粒３％混入
　　２．10ＹＲ6/6 明黄褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　掘り方埋土
ＰＰ３　１．10ＹＲ2/2 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　地山土細粒～極小ブロック７％混入
ＰＰ５　１．10ＹＲ4/6 褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　小礫微量混入
　　２．10ＹＲ2/3 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　小礫微量混入

第37図　Ｂ３建物跡

(3) 土坑類

Ａ区で3基、Ｂ区で41基検出した。また柱穴状小土坑はＡ区で37基、Ｂ区で99基検出されている。これについても本項で扱い、柱穴群として一括して述べ、第２表にその計測値を示した。なお「土坑」と「柱穴状小土坑」の区分について曖昧なままに調査を行ったため、以下で述べる土坑の中には柱穴状のものも含まれている。整理段階で検討し両者を区分すべきところではあるが、時間的な余裕無く、かつ無用な混乱を招くことを避けるため、そのままの遺構名・区分で扱っている。(この項の文責は、主として菊池である。)

Ａ区の土坑

9基を検出した(Ａ１～9土坑)が、うち6基はＡ1建物跡に伴う柱穴と判明したことから、土坑から除外した(但し、遺物取り上げに際しての註記の問題等があり、遺構名は変更せずに残している)。都合、当該区の検出土坑は3基である。

Ａ6土坑

〔遺構（第38図・写真図版38)〕9Ｅ区に位置する。Ⅲｃ層上面において明黄褐色地山土の細粒がまばらに広がる範囲が存在し、これを掘り下げ土坑と認定した。平面形は、開口部が径100×75㎝の楕円形を呈し、底面が径38×32㎝の楕円形を呈する。深さが50㎝ほどで、Ⅴ層を掘り込んでいる。覆土は明黄褐色地山土の細粒～1㎝大のブロックを15％ほど混在する黒褐色土の単層で、人為的に一度に埋め戻された様相が認められた。Ａ1建物の北東側周溝部と重複しており、これより新しい。形状から住居ないしは掘立柱建物の柱穴で

あると推測されるが、柱痕跡は確認出来なかった。

〔遺物（第80図・写真図版73)〕378・379：縄文土器。

〔時期〕出土遺物から縄文時代後期の遺構と考えられる。

A7土坑

〔遺構（第38図・写真図版38)〕8E区から9E区に跨って位置する。Ⅲc層上面で焼土粒を含んだ楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径100×85cmの楕円形を呈し、底面が径70×63cmの楕円形を呈する。深さが16cmである。覆土は黒褐色土と明赤褐色焼土の混土、暗褐色土、黒褐色土からなる全て5層に細分でき、その様相から人為的堆積と判断した。A1建物およびA2住居と重複するが、これとの新旧関係及び共存関係は明らかにし得なかった。

〔遺物（第80図・写真図版73)〕380～382：縄文土器。

〔時期〕出土遺物から縄文時代後期の遺構と考えられる。

A9土坑

〔遺構（第38図・写真図版38)〕10E区北東隅に位置する。A1住居北東壁精査の過程で検出された。平面形は開口部が径255×155cmの不整な楕円形を呈する。深さが約65cmである。覆土は黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土からなる全て7層に細分できる。第3層の黄褐色土はV層地山土起源とみられ、これより下層に黒褐色土層、暗褐色土層が存在している。地山土が斯様に反転して存在する状況から、当土坑は倒木痕の可能性があると考えられる。A1住居の北東壁を破壊していることから、これよりも新しい倒木痕であるとみられる。

〔遺物〕出土していない。

〔時期〕不明である。

B区の土坑（第39図・写真図版47、B区土坑群分布状況）〈断りのない限り図の上が北方向である。〉

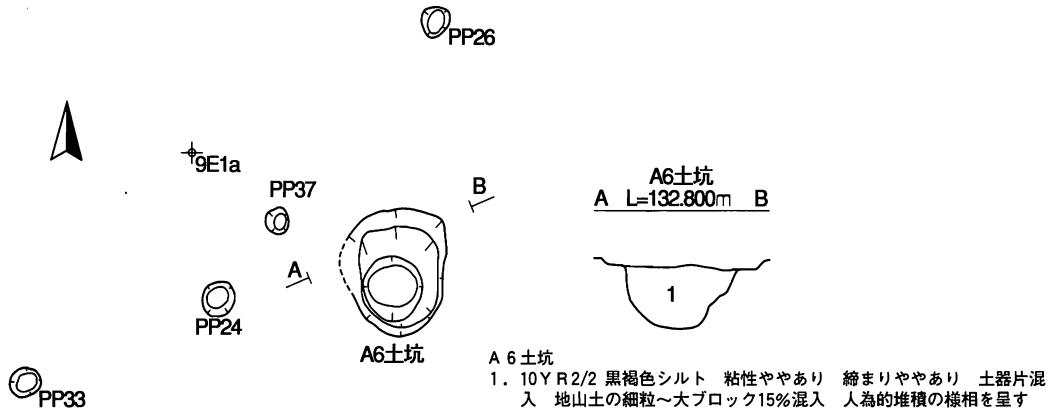
41基(B1～46土坑)を検出した。なお、“B40～43土坑”は調査時の都合(地区ごとに連番で名称を付したため)により欠番となっている。当該区の検出土坑のうち、約30基ほどが大グリッド7E、7F、8E、8F区に跨って、ある程度密集して配置されている。形状は楕円形～隅丸方形ぎみを呈するものが多い。深さは浅いもので10cmほどから深いものでは80cm以上と一様ではないが、多くはあまり深いものではない。

B1土坑

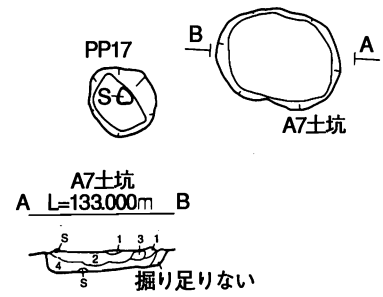
〔遺構（第40図・写真図版39)〕7F区から8F区に跨り位置する。Ⅲc層とV層との漸移層面で礫を多量に混入した不整円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径130×110cmの不整円形を呈し、底面が径106×90cmの不整円形である。断面形は深さ約20cmの皿状を呈している。覆土は炭化物粒、焼土粒を混入した黒褐色土の単層で人為的堆積の様相を示す。

〔遺物（第80図・写真図版73)〕383：縄文土器。

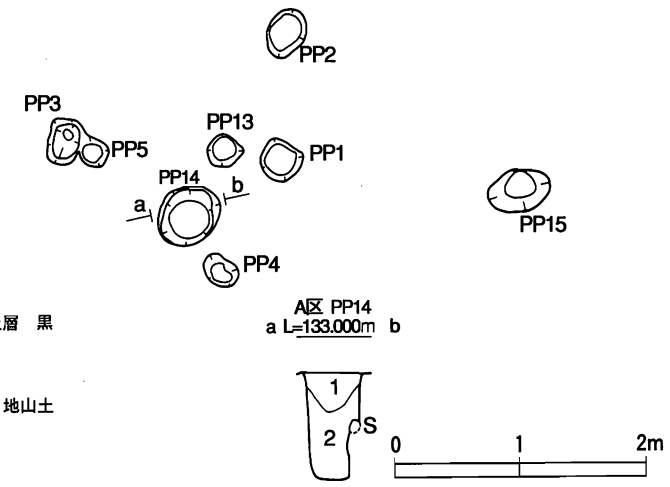
〔時期〕出土遺物から縄文時代後期の遺構と考えられる。



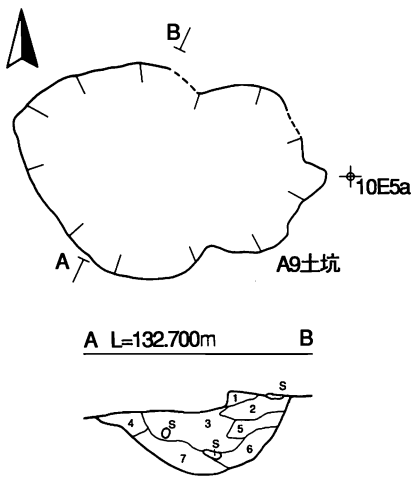
A６土坑
1．10ＹＲ2/2 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　土器片混入　地山土の細粒～大ブロック15%混入　人為的堆積の様相を呈す



A７土坑
1．2.5ＹＲ5/8 明赤褐色焼土と 10ＹＲ2/2 黒褐色シルトとの混土層　黒褐色土は20%混入　焼土は焼成良好なものである
2．10ＹＲ3/3 暗褐色シルト　焼土粒微量混入
3．10ＹＲ2/3 黒褐色シルト　焼土粒微量混入
4．10ＹＲ2/2 黒褐色シルト　焼土粒微量混入するが上層より寡　地山土細粒微量混入
5．10ＹＲ3/4 暗褐色シルト　焼土粒ごく微量混入



ＰＰ14
1．10ＹＲ3/3 暗褐色シルト　炭化物粒微量混入　地山土細粒微量混入
2．10ＹＲ4/4 褐色シルト　炭化物粒微量混入　地山土細粒～拳大ブロック25%混入



A９土坑
1．10ＹＲ2/3 黒褐色シルト　地山土細粒微量混入
2．10ＹＲ3/4 暗褐色シルト　締まりあり　地山土細粒・ブロック20%混入
3．10ＹＲ5/6 黄褐色シルト　締まりあり　にぶい黄褐色土15%混入
4．10ＹＲ2/2 黒褐色シルト　地山土細粒微量混入
5．10ＹＲ2/2 黒褐色シルト　締まりあり　地山土細粒・極大ブロック５%混入
6．10ＹＲ2/3 黒褐色シルト　締まりあり　地山土細粒微量混入
7．10ＹＲ3/3 暗褐色シルト　締まりあり　地山土細粒～３㎝大ブロック10%混入

0　1　2m

第38図　Ａ６・７・９土坑、Ａ区柱穴状土坑群

B2土坑

〔遺構（第40図・写真図版39)〕8E区に位置する。Ⅲc層とV層との漸移層面で円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部直径が約50cmの円形で、底面径は37×34cmである。深さが約26cmを測る。覆土は黒褐色土、暗褐色土などからなる全て5層に細分でき、1層には複数の礫が混入していた。人為的堆積とみられる。

〔遺物（第79図・写真図版72)〕底面から土偶の胴部（掲載番号368）が出土し、B36土坑の第2層から出土した土偶胸部と接合した。

〔時期〕出土遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。

B3土坑

〔遺構（第40図・写真図版39)〕8E区に位置する。Ⅲc層とV層との漸移層面で円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径76×55cmの楕円形を呈し、底面が径54×48cmの楕円形を呈する。深さが約40cmである。覆土は黒褐色土、暗褐色土、褐色土からなる全て4層に細分される。覆土の様相から人為的堆積と判断される。

〔遺物〕出土していない。

〔時期〕不明である。

B4土坑

〔遺構（第40図・写真図版39)〕8F区に位置する。Ⅲc層とV層との漸移層面で楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径69×34cmの楕円形を呈し、底面が径31×25cmの楕円形を呈する。断面形は深さ17cmの皿状を呈している。覆土は誤って掘り下げてしまい、記録出来なかった。

〔遺物〕出土していない。

〔時期〕不明である。

B5土坑

〔遺構（第40図・写真図版40)〕7F区から8F区に跨って位置する。Ⅲc層とV層との漸移層面で楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径71×63cmの楕円形を呈し、底面が径61×57cmの楕円形を呈する。断面形は深さ17cmの皿状を呈している。覆土は誤って掘り下げてしまい、記録出来なかった。

〔遺物（第80図・写真図版73)〕384・385：縄文土器。底面付近から土器破片が纏まって出土している。

〔時期〕出土遺物から縄文時代の遺構と考えられる。

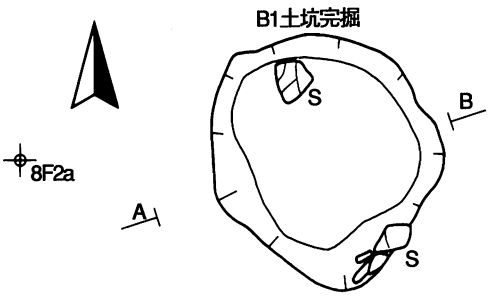
B6土坑

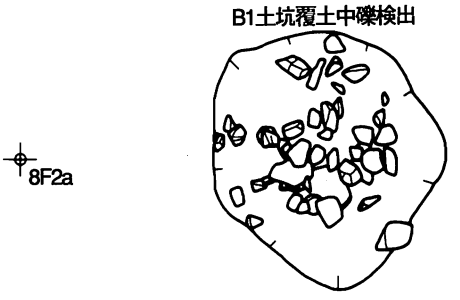
〔遺構（第41図・写真図版40)〕7F区に位置する。Ⅲc層とV層との漸移層面で楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部径100×85cmの楕円形を呈し、底面径は55×50cmの楕円形を呈する。深さが約30cmである。覆土は黒褐色土、暗褐色土、黒色土などからなる全て6層に細分出来、その様相から人為的堆積と判断される。

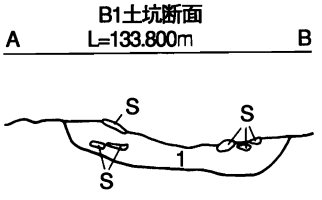
〔遺物（第80図・写真図版73)〕386：縄文土器。第6層下位の底面付近において土器小破片1点が出土した。

〔時期〕出土遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。

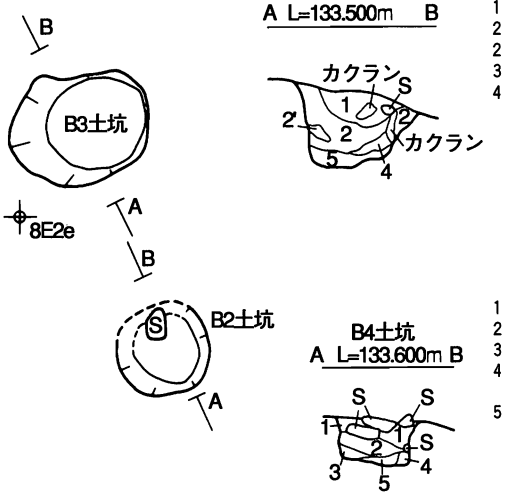
第39図　B区土坑群分布状況





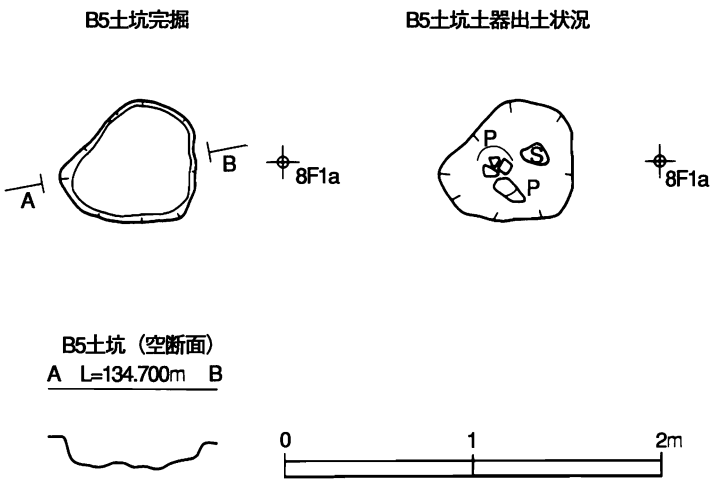


1．10YR2/3 黒褐色シルト　層の下位に炭化物粒・焼土粒が微量混入　人為的堆積土



1．10YR2/3 黒褐色シルト　地山土細粒微量混入
2．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土細粒微量混入（1層より多）
2'．10YR2/3 黒褐色シルトブロック
3．10YR4/4 褐色シルト
4．10YR3/4 暗褐色シルト　締まりあり　炭化物粒・焼土粒微量混入

1．10YR2/3 黒褐色シルト
2．10YR3/4 暗褐色シルト
3．10YR3/3 暗褐色シルト　締まりあり　地山土細粒ごく微量混入
4．10YR4/6 褐色シルト　締まりあり　にぶい黄褐色土と地山土の細粒が微量混入
5．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　地山土細粒微量混入



第40図　B 1 ～ 5 土坑

B7土坑

〔遺構（第41図・写真図版40)〕7E区から7F区に跨って位置する。Ⅲc層とV層との漸移層面で楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径64×55cmの楕円形を呈し、底面が径44×42cmの円形を呈する。深さが約26cmである。覆土は黒褐色土、暗褐色土からなる2層に大別される。

〔遺物（第80図・写真図版73)〕387：縄文土器。

〔時期〕出土遺物から、縄文時代の遺構と考えられる。

B8土坑

〔遺構（第41図・写真図版40)〕7E区から8E区に跨って位置する。Ⅲc層とV層との漸移層面で最大径30cmほどの円礫の混入した楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径107×88cmの楕円形を呈し、底面が径86×58cmの楕円形を呈する。深さが約23cmである。覆土は黄褐色土、黒褐色土、暗褐色土等からなる全て8層に細分され、5層には前述した直径30cmほどのサッカーボール状の円礫（砂岩）と、底面に置かれる形で長さ45cmの角礫が混入していた。覆土の様相から人為的堆積と判断される。B7住居跡と重複し、これを截っている。

〔遺物〕出土していない。

〔時期〕覆土の様相から、縄文時代の墓壙の可能性があるとみられる。

B9土坑

〔遺構（第41図・写真図版41)〕7E区に位置する。Ⅲc層とV層との漸移層面で長さ40cmと長さ34cmほどの2個の礫が混入した楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径163×97cmの楕円形を呈し、底面が径143×72cmの楕円形を呈する。深さが最大16cm程度である。覆土は黒褐色土、明黄褐色土、褐色土等からなる全て4層に細分でき、その様相から人為的堆積と判断される。B区PP44と重複しこれより新しいが、誤って掘り下げてしまったのでこの部分は平面図化出来なかった。またB区PP43とも重複しこれとの新旧関係は把握出来なかった。

〔遺物（第80図・写真図版73)〕388～390：縄文土器。

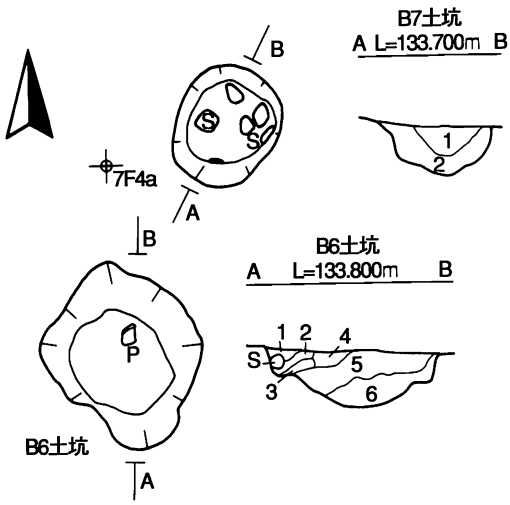
〔時期〕出土遺物から縄文時代後期の遺構と考えられる。

B10土坑

〔遺構（第42図・写真図版41)〕8E区に位置する。Ⅲc層とV層との漸移層面で円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径55×53cmの楕円形を呈し、底面が径42×40cmの楕円形を呈する。断面形は深さ13cmほどの皿状を呈している。覆土は黒褐色土の単層である。

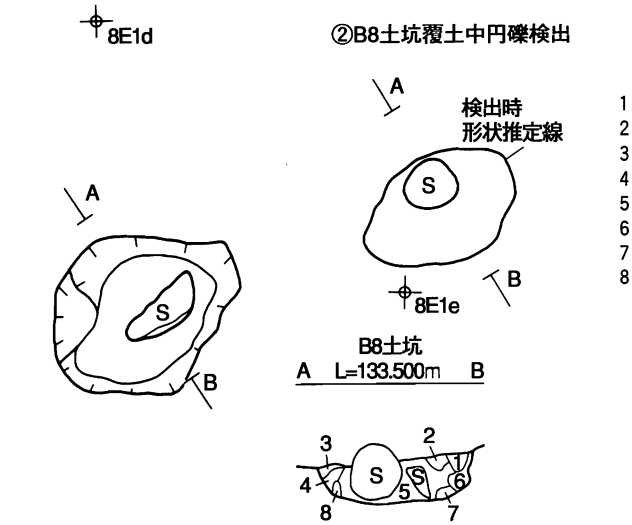
〔遺物〕出土していない。

〔時期〕不明である。

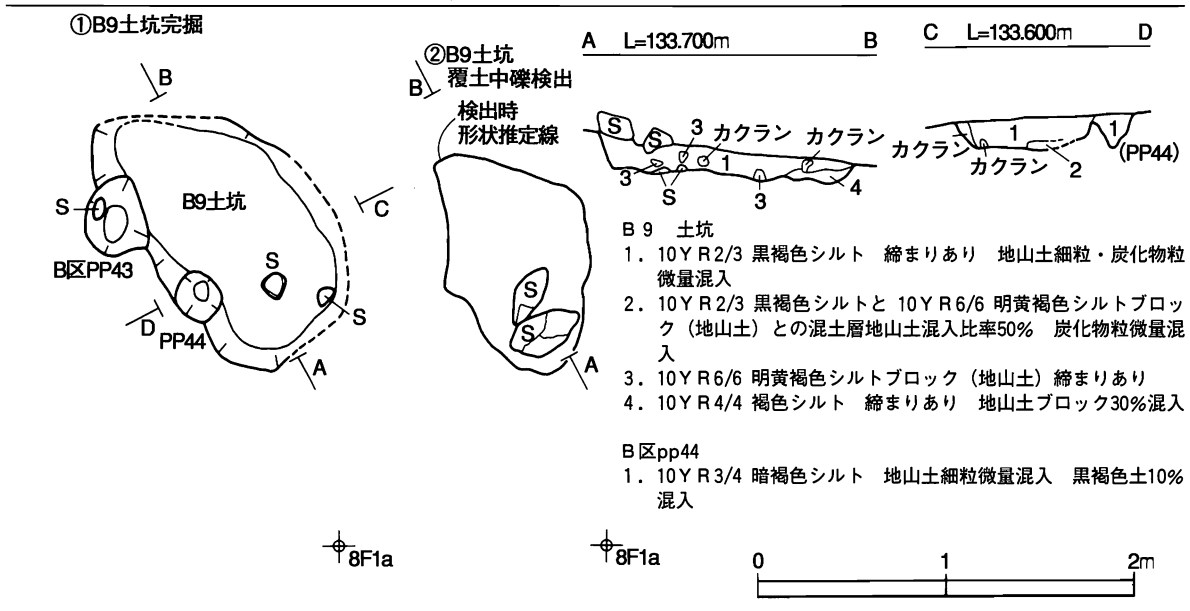


1．10YR2/2 黒褐色シルト　小礫（3㎝大）微量混入
2．10YR3/4 暗褐色シルト　上層より締まる　地山土細粒・小礫（1.5㎝大）微量混入

1．10YR2/2 黒褐色シルト　地山土細粒微量混入
2．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土細粒微量混入
3．10YR5/6 黄褐色シルト　締まりに乏しい　木根撹乱土か
4．10YR3/2 黒褐色シルト　地山土細粒微量混入
5．10YR2/1 黒色シルト　層の上部に黒褐色土混入
6．10YR3/3 暗褐色シルト　層中央に地山土細粒10%混入



1．10YR5/6 黄褐色シルト　地山土細粒微量混入
2．10YR3/2 黒褐色シルト
3．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土ブロック50%混入
4．10YR3/4 暗褐色シルト　地山土細粒30%混入
5．10YR3/4 暗褐色シルト　地山土細粒10%混入
6．10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　地山土細粒30%混入
7．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　炭化物粒混入
8．10YR6/6 明黄褐色シルトブロック　締まりあり



B9　土坑
1．10YR2/3 黒褐色シルト　締まりあり　地山土細粒・炭化物粒微量混入
2．10YR2/3 黒褐色シルトと 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック（地山土）との混土層地山土混入比率50%　炭化物粒微量混入
3．10YR6/6 明黄褐色シルトブロック（地山土）締まりあり
4．10YR4/4 褐色シルト　締まりあり　地山土ブロック30%混入

B区pp44
1．10YR3/4 暗褐色シルト　地山土細粒微量混入　黒褐色土10%混入

第41図　B 6～9 土坑

B11土坑

〔遺構（第42図・写真図版41)〕8E区に位置する。Ⅲc層とV層との漸移層面で楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径49×39cmの楕円形を呈し、底面が径29×27cmの円形を呈する。深さが22cmほどである。覆土は黒褐色土、暗褐色土、褐色土等からなる全て6層に細分でき、その様相から人為的堆積と判断される。

〔遺物〕出土していない。

〔時期〕不明である。

B12土坑

〔遺構（第42図・写真図版42)〕8E区に位置する。Ⅲc層とV層との漸移層面で楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径93×63cmの楕円形を呈し、底面が径91×58cmの楕円形を呈する。断面形は深さ15cmの皿状を呈している。覆土は黒褐色土、暗褐色土、褐色土からなる全て3層に細分される。B18土坑と重複し、これに截られている。当土坑内の北側に柱穴状の掘り込みが存在するが、これが当土坑に伴うものか否かは分からなかった。

〔遺物（第80図・写真図版73)〕391～395：縄文土器。検出面において縄文土器破片が出土している。

〔時期〕出土遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。

B13土坑

〔遺構（第42図・写真図版42)〕8E区に位置する。Ⅲc層とV層との漸移層面で円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径74×72cmのほぼ円形を呈し、底面が径52×46cmの円形を呈する。深さが36cmほどである。覆土は黒褐色土、暗褐色土、褐色土、明黄褐色土からなる全て12層に細分でき、その様相から人為的堆積と判断される。覆土の下層には拳大～30cm大の礫が複数個混入していた。

〔遺物（第81図・写真図版73)〕396～397：縄文土器。

〔時期〕出土遺物から縄文時代の遺構と考えられる。

B14土坑

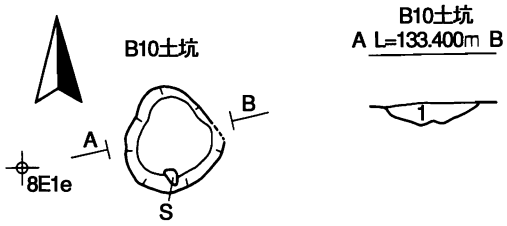
〔遺構（第43図・写真図版42)〕6F区に位置する。V層面で地山土にやや色調の類似する橙色土の楕円形の広がりとして検出された。平面形は開口部が径92×72cmの楕円形を呈し、底面が径21×17cmほどで、柱穴のごとく掘り込まれている。深さが最大30cmほどである。覆土は橙色土の単層であり、締まりがあるがもろく崩れやすかった。地山土を埋め戻したものであるかもしれない。

〔遺物〕出土していない。

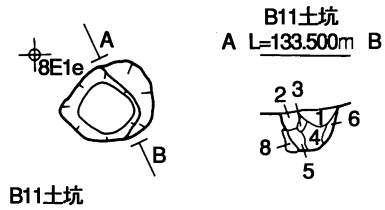
〔時期〕不明である。

B15土坑

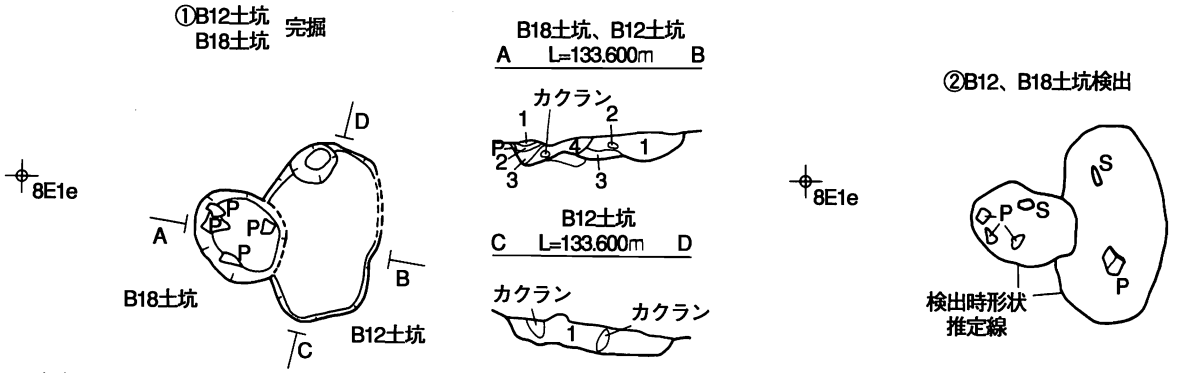
〔遺構（第46図・写真図版45)〕7E区に位置する。B29土坑精査の過程において誤って掘り進めたことにより存在が確認された。平面形は開口部が径70×68cmの楕円形を呈し、底面が径24×22cmのほぼ円形を呈する。深さが34cmほどである。誤って掘り下げてしまったため覆土を記録出来なかった。B28・29土坑と重複するが、これとの新旧関係は明確にし得なかった。



1．10YR2/3 黒褐色シルト　地山土微量混入

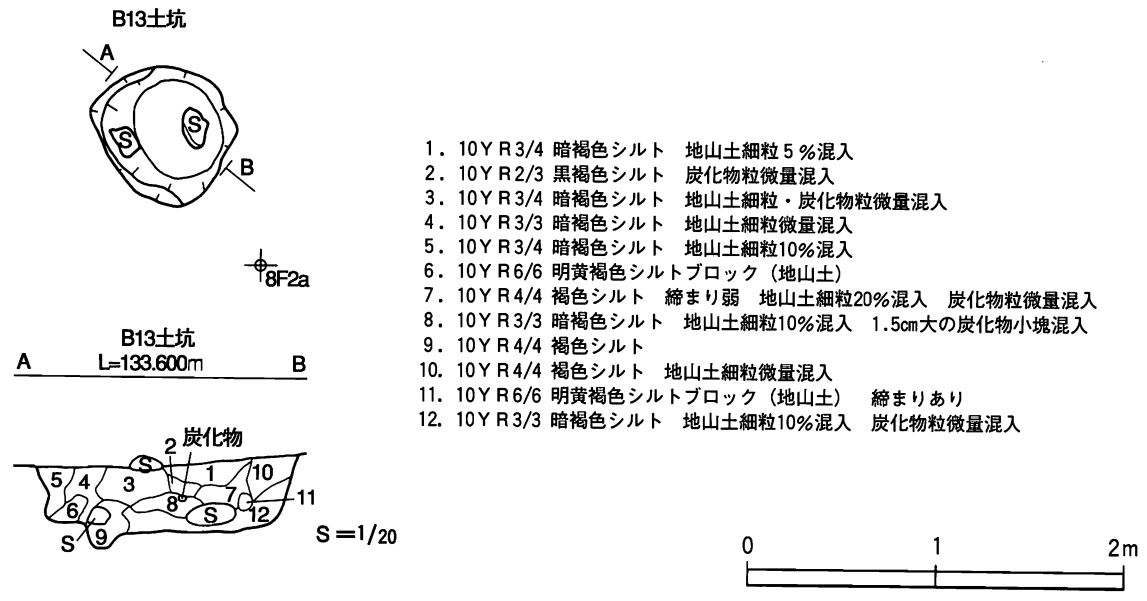


1．10YR2/3 黒褐色シルト　褐色土10%混入
2．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土細粒10%混入
3．10YR4/4 褐色シルト　地山土細粒20%混入
4．10YR4/6 褐色シルト　締まり弱　地山土細粒40%混入
5．10YR6/6 明黄褐色シルト　褐色土30%混入
6．10YR4/6 褐色シルト　地山土細粒10%混入　締まりに乏しい　木根撹乱土か



B12土坑
1．10YR2/3 暗褐色シルト　締まりあり　地山土細粒微量混入
2．10YR3/4 暗褐色シルトブロック　締まりあり　地山土細粒30%混入
3．10YR4/6 褐色シルト　締まりあり

B18土坑
1．10YR3/3 暗褐色シルト
2．10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック　地山土極小ブロック混入
3．10YR2/3 黒褐色シルト　土器小片混入　炭化物粒微量混入
4．10YR4/4 褐色シルト　地山土細粒10%混入　炭化物粒微量混入



1．10YR3/4 暗褐色シルト　地山土細粒5%混入
2．10YR2/3 黒褐色シルト　炭化物粒微量混入
3．10YR3/4 暗褐色シルト　地山土細粒・炭化物粒微量混入
4．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土細粒微量混入
5．10YR3/4 暗褐色シルト　地山土細粒10%混入
6．10YR6/6 明黄褐色シルトブロック（地山土）
7．10YR4/4 褐色シルト　締まり弱　地山土細粒20%混入　炭化物粒微量混入
8．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土細粒10%混入　1.5cm大の炭化物小塊混入
9．10YR4/4 褐色シルト
10．10YR4/4 褐色シルト　地山土細粒微量混入
11．10YR6/6 明黄褐色シルトブロック（地山土）　締まりあり
12．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土細粒10%混入　炭化物粒微量混入

第42図　B10～13・18土坑

〔遺物（第81図・写真図版73)〕398：縄文土器。
〔時期〕他遺構との重複関係から、縄文時代後期に属する可能性がある。

B16土坑

〔遺構（第43図・写真図版42)〕7F区に位置する。Ⅲc層とⅤ層との漸移層面で楕円形の暗褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径71×50cmの楕円形を呈し、底面が径47×34cmの楕円形を呈する。断面形は深さ11cmの皿状を呈している。覆土は暗褐色土の単層である。
〔遺物（第81図・写真図版73)〕399：縄文土器。
〔時期〕縄文時代の遺構と考えられる。

B17土坑

〔遺構（第43図・写真図版43)〕7F区に位置する。Ⅲc層とⅤ層との漸移層面で楕円形の暗褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径52×40cmの楕円形を呈し、底面が径47×34cmの楕円形を呈する。断面形は深さ10cmの皿状を呈している。覆土は暗褐色土の単層である。
〔遺物〕出土していない。
〔時期〕不明である。

B18土坑

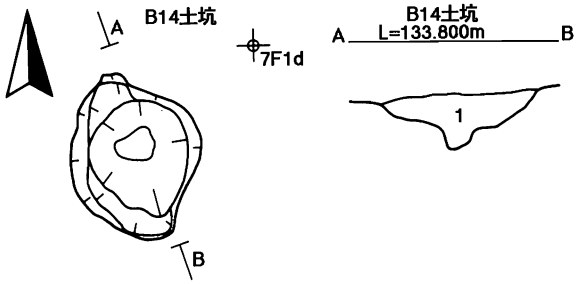
〔遺構（第42図・写真図版43)〕8E区に位置する。Ⅲc層とⅤ層との漸移層面で円形の暗褐色土、褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径54×45cmの楕円形を呈し、底面が径43×32cmの楕円形を呈する。断面形は深さ10cmの皿状を呈している。覆土は暗褐色土、黒褐色土等からなる全て4層に細分でき、遺物の混入状況等から人為的堆積と判断した。B12土坑と重複し、これより新しい。
〔遺物（第81図・写真図版74)〕404：縄文土器。検出面と底面において土器破片が出土している。
〔時期〕出土遺物から縄文時代の遺構と考えられる。

B19土坑

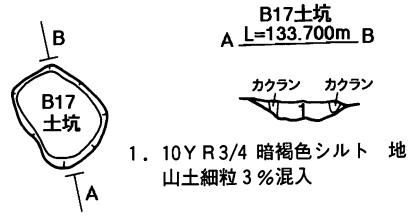
〔遺構（第43図・写真図版43)〕7E区に位置する。Ⅲc層とⅤ層との漸移層面で円形の暗褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径100×90cmのほぼ円形を呈し、底面は径76×73cmのほぼ円形を呈する。深さが44cmほどである。覆土は暗褐色土、黒褐色土、褐色土等からなる全て19層に細分出来、その様相から人為的堆積と判断される。覆土第6層および第10層には投げ込みとみられる焼土粒が多量に混入しており、底面には一カ所に纏まって複数個の礫が存在していた。
〔遺物（第81図・写真図版73)〕400：石鏃。401～403：縄文土器。
〔時期〕出土遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。

B20土坑

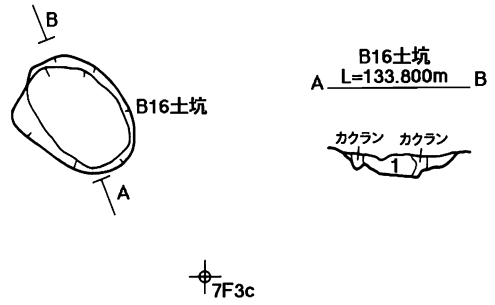
〔遺構（第44図・写真図版43)〕7E区に位置する。Ⅴ層面で円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径75×52cmのほぼ円形を呈し、底面は径68×52cmの楕円形を呈する。断面形は、著しく削平されていた為に分からず、深さが最大6cmほどしか残存していない。覆土は黒褐色土の単層である。



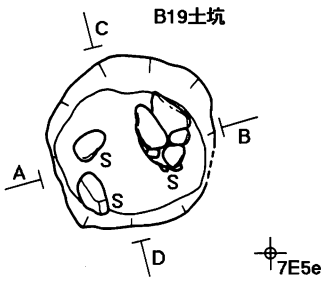
1．7.5Y R7/6 橙色シルト　粘性強　締まりあるが崩れやすい

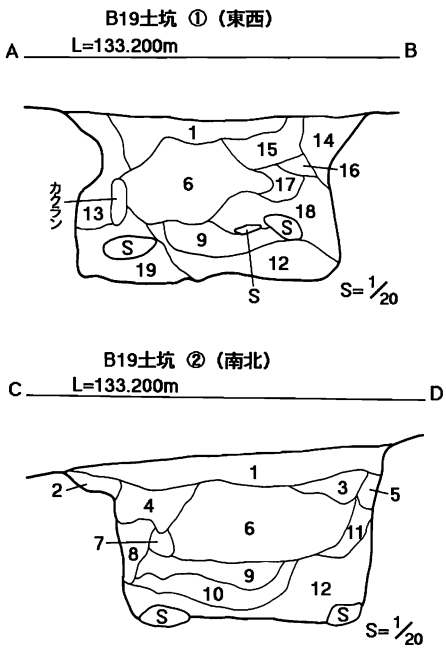


1．10Y R3/4 暗褐色シルト　地山土細粒３％混入

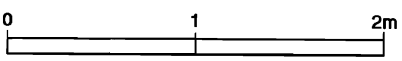


1．10Y R3/4 暗褐色シルト　地山土細粒３％混入　炭化物粒微量混入





1．10Y R3/3 暗褐色シルト　層の下位に黒色シルト微量混入
2．10Y R4/6 褐色シルトブロック　地山土細粒微量混入
3．10Y R2/2 黒褐色シルト　地山土細粒微量混入
4．10Y R3/4 暗褐色シルト　地山土細粒１％混入
5．10Y R4/6 褐色シルトブロック　地山土細粒20%混入
6．7.5Y R3/4 暗褐色シルト　土器小片混入　2.5Y R3/4 暗赤褐色焼土細粒が20%混入し、赤みがかって見える　地山土細粒１％混入　炭化物粒微量混入
7．10Y R2/3 黒褐色シルトブロック
8．10Y R5/6 黄褐色シルトブロック　暗褐色土20%混入　小礫（２㎝大）混入
9．10Y R2/3 黒褐色シルト　地山土細粒混入
10．10Y R2/3 極暗褐色シルト　土器小片混入　2.5Y R3/4 暗赤褐色焼土細粒３％混入
11．10Y R3/4 暗褐色シルト　地山土細粒微量混入
12．10Y R2/3 黒褐色シルト　土器小片混入　地山土細粒微量混入
13．10Y R4/6 褐色シルト　層の上部に暗褐色土混入
14．10Y R2/3 黒褐色シルト　地山土細粒微量混入　層の下部に地山土ブロック50%混入
15．10Y R2/3 黒褐色シルト　地山土細粒ごく微量混入
16．10Y R2/2 黒褐色シルトブロック
17．10Y R2/3 黒褐色シルト　焼土粒ごく微量混入
18．10Y R3/4 暗褐色シルト
19．10Y R3/2 黒褐色シルト　地山土細粒ごく微量混入



第43図　B14・16・17・19土坑

〔遺物（第81図・写真図版74)〕405：縄文土器。
〔時期〕縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。

B21土坑

〔遺構（第44図・写真図版44)〕8E区に位置する。Ⅲc層とⅤ層との漸移層面で楕円形の灰黄褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径183×95cmの楕円形を呈し、底面が径141×87cmの楕円形を呈する。深さが84cmほどである。覆土は灰黄褐色土、褐色土、黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土等からなる全て27層に細分でき、その様相から人為的堆積と判断される。最下層には締まりのある黒褐色土が厚さ約20cmほどで一様に堆積していた。また、北側に柱穴状の掘り込みが存在している。この部分は覆土の様相から、当土坑と同時期的に埋まったとみなせるものの、当土坑に伴うものであるか否かは判断出来なかった。
〔遺物〕掲載していないが、微細な縄文土器破片が出土した。
〔時期〕出土遺物から縄文時代の遺構と考えられる。

B22土坑

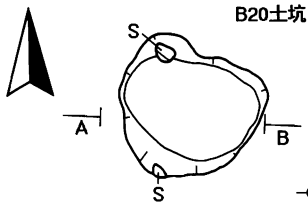
〔遺構（第45図・写真図版44)〕8E区から8F区に跨って位置する。Ⅲc層とⅤ層との漸移層面で、中央に複数個の礫が集積した楕円形の黒褐色土との広がりとして検出された。平面形は開口部が径74×58cmの楕円形を呈し、底面が径68×45cmの楕円形を呈する。深さが最大27cmほどである。覆土は黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土からなる全て3層に細分できる。埋土第1層の中央部に複数の礫が重なって存在しており、この状況から礫を伴った人為的堆積の土坑と判断される。
〔遺物〕出土していない。
〔時期〕不明だが、集石を伴う縄文時代の墓壙である可能性もある。

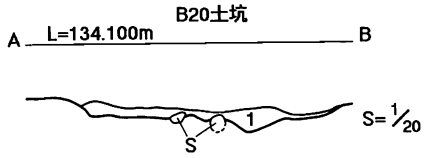
B23土坑

〔遺構（第45図・写真図版44)〕7E区から7F区に跨って位置する。Ⅲc層とⅤ層との漸移層面で楕円形の褐色土、黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径82×62cmの楕円形を呈し、底面が径60×50cmの楕円形を呈する。断面形は深さ10cmほどの皿状を呈している。覆土は褐色土、黒褐色土、暗褐色土からなる全て3層に細分される。
〔遺物（第81図・写真図版74)〕406：縄文土器。
〔時期〕出土遺物から縄文時代の遺構と考えられる。

B24土坑

〔遺構（第45図・写真図版44)〕8E区に位置する。Ⅲc層とⅤ層との漸移層面で円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径49×40cmの楕円形を呈し、底面は径25×25cmのほぼ円形を呈する。深さが17cmである。覆土は黒褐色土、暗褐色土からなる3層に細分される。
〔遺物〕出土していない。
〔時期〕不明である。

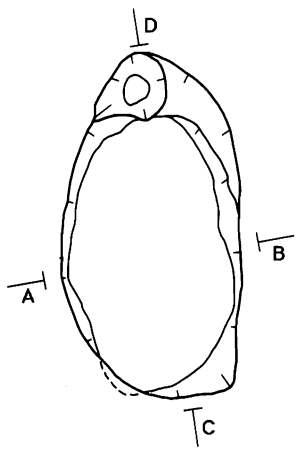




1．10Y R2/3 黒褐色シルト　地山土極小ブロック10%混入　炭化物粒・焼土粒微量混入

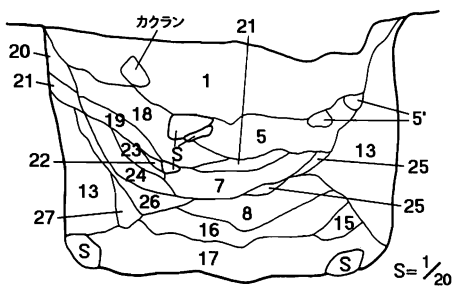
8F1a

B21土坑

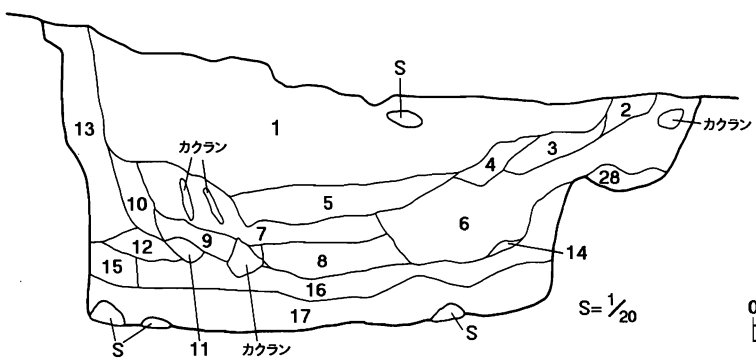


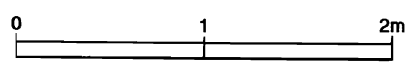
1．10Y R4/2 灰黄褐色シルト　締まりあり　地山土細粒10%混入　礫（2～15cm）混入
2．10Y R4/6 褐色シルト　締まりあり　地山土細粒微量混入
3．7.5Y R5/6 明褐色シルト　締まりあり　黒褐色土10%混入
4．10Y R2/2 黒褐色シルト　締まりあり
5．10Y R3/3 暗褐色シルト　締まりあり　にぶい黄褐色土20%混入
6．10Y R4/4 褐色シルトと 10Y R3/3 暗褐色シルトとの混土層　後者が20%混入小礫混入
7．10Y R2/3 黒褐色シルト　締まりあり　土器小片混入　植物根撹乱あり
8．10Y R4/6 褐色シルト　締まりが他層より乏しい　地山土極小ブロック微量混入
9．10Y R3/3 暗褐色シルト
10．10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト　締まりあり　黒褐色土細粒微量混入
11．10Y R4/6 褐色シルトブロック　締まりあり
12．10Y R4/4 褐色シルト　灰黄褐色土微量混入
13．10Y R4/6 褐色シルト　締まりあり　地山に類似した色調を呈すが、灰黄褐色土が混入している
14．注記欠く
15．10Y R4/6 褐色シルト　締まりあり
16．10Y R3/2 黒褐色シルト　地山土細粒微量混入　小礫混入
17．10Y R2/2 黒褐色シルト　締まりあり
18．10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト　締まりあり　地山土ブロック３%混入
19．10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト　締まりあり　地山土細粒微量混入
20．10Y R3/3 暗褐色シルト　締まりあり　黒褐色土ブロック20%混入
21．10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト
22．10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト
23．10Y R4/6 褐色シルト　地山土細粒混入（18、19層より多い）
24．10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト　締まりあり
25．10Y R2/3 黒褐色シルト
26．10Y R4/6 褐色シルト　締まりあり　にぶい黄褐色土微量混入
27．10Y R4/6 褐色シルト　締まりあり　にぶい黄褐色土が26層より多く混入

B21土坑 ①（東西）
A　L=133.800m　B



B21土坑 ②（南北）
C　L=133.900m　D





第44図　B20・21土坑

B25土坑

〔遺構（第45図・写真図版45)〕7E区に位置する。Ⅲc層とⅤ層との漸移層面で円形の暗褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径62×51cmの楕円形を呈し、底面は径30×25cmの楕円形を呈する。深さが約40cmである。覆土は暗褐色土、黒褐色土、褐色土等からなる全て5層に細分でき、その様相から人為的堆積と判断される。

〔遺物〕出土していない。

〔時期〕不明である。

B26土坑

〔遺構（第45図・写真図版45)〕7E区に位置する。Ⅲc層とⅤ層との漸移層面で楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径82×60cmの楕円形を呈し、底面は径73×53cmの楕円形を呈する。断面形は深さ12cmの皿状を呈している。覆土は黒褐色土の単層である。

〔遺物〕出土していない。

〔時期〕不明である。

B27土坑

〔遺構（第45図・写真図版45)〕7E区に位置する。Ⅲc層とⅤ層との漸移層面で楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径68×43cmの楕円形を呈し、底面が径61×35cmの楕円形を呈する。断面形は深さ16cmの皿状を呈している。覆土は黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土からなる全て3層に細分される。

〔遺物〕出土していない。

〔時期〕不明である。

B28土坑

〔遺構（第46図・写真図版45)〕7E区に位置する。B29土坑精査の過程において誤って掘り進めたことにより存在が確認された。平面形は開口部が径90×56cmの楕円形を呈し、底面は径55×25cmの楕円形を呈する。深さが41cmである。覆土は誤って掘り下げてしまったため図化出来なかった。B29・15土坑と重複するが、新旧関係を明確にし得なかった。

〔遺物〕出土していない。

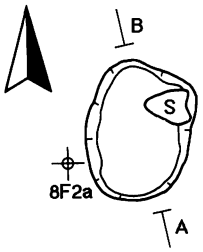
〔時期〕別遺構との重複関係より縄文時代の遺構と考えられる。

B29土坑

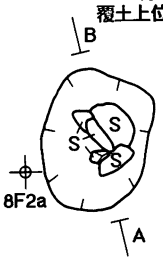
〔遺構（第46図・写真図版45)〕7E区に位置する。Ⅲc層とⅤ層との漸移層面で楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。B20住居と重複し、これに北側の壁上部を截られる。またB7住居を截っている。平面形は開口部が径121×93cmの楕円形を呈し、底面は径78×73cmの楕円形を呈する。深さが30cmである。覆土は黒褐色土、暗褐色土等からなる6層に細分され、その様相から人為的堆積と判断される。また第3層には焼土粒が10%ほど混入していた。

〔遺物（第81図・写真図版74)〕407・408：縄文土器。

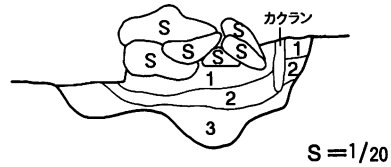
B22土坑 完堀



B22土坑
覆土上位礫検出状況



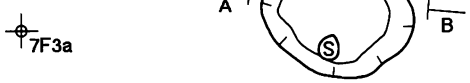
B22土坑
A L=133.600m B



S=1/20

1．10YR2/2 黒褐色シルト
2．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土細粒微量混入
3．10YR5/6 黄褐色シルト

B23土坑

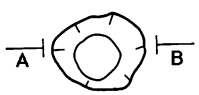


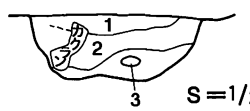
B23土坑
A L=133.500m B

1．10YR4/4 褐色シルト　地山土細粒微量混入
2．10YR2/3 黒褐色シルト　地山土細粒・炭化物粒微量混入
3．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土細粒20%混入

B24土坑
A L=133.500m B

B24土坑

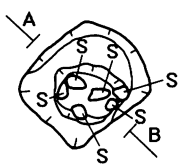




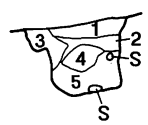
S=1/20

1．10YR3/2 黒褐色シルト　締まりあり　地山土細粒10%混入
2．10YR3/4 暗褐色シルト　締まりあり　地山土細粒～極小ブロック20%混入
3．10YR3/3 暗褐色シルト　粘性弱　締まりややあり　砂混じる

B25土坑

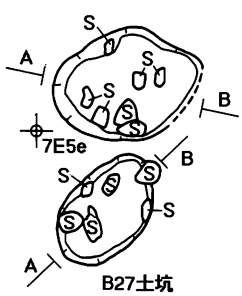


B25土坑
A L=133.500m B

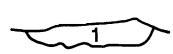


1．10YR3/3 暗褐色シルト　地山土細粒5%混入　炭化物粒微量混入
2．10YR3/2 黒褐色シルト　地山土細粒30%混入　炭化物粒混入
3．10YR6/6 明黄褐色シルトブロック（地山土）　にぶい黄褐色土10%混入
4．10YR2/3 黒褐色シルト　地山土細粒20%混入
5．10YR4/4 褐色シルト　地山土細粒20%混入　層中央部に黒色土ブロック10%混入

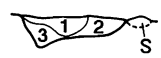
B26土坑



B26土坑
A L=133.400m B

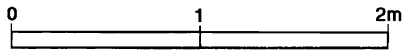


B27土坑
A L=133.500m B



1．10YR2/3 黒褐色シルト　地山土細粒10%混入　炭化物粒微量混入

1．10YR2/2 黒褐色シルト　地山土極小ブロック5%混入
2．10YR3/4 暗褐色シルト　地山土極小ブロック微量混入
3．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　地山土極小ブロック・黒色土微量混入



第45図　B22～27土坑

〔時期〕出土遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。

B30土坑

〔遺構（第46図・写真図版46)〕6F区に位置する。V層上面で楕円形の暗褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径72×59cmの楕円形を呈し、底面は径56×52cmの歪な楕円形を呈する。深さが18cmほどである。覆土は暗褐色土の単層である。

〔遺物（第81図・写真図版74)〕411：縄文土器。覆土中位で縄文土器小片が出土している。

〔時期〕出土遺物から縄文時代の遺構と考えられる。

B31土坑

〔遺構（第46図・写真図版46)〕6F区に位置する。V層上面で楕円形の暗褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部径155×88cmの楕円形を呈し、底面径は142×78cmの楕円形を呈する。断面形は、著しく削平されていた為に分からず、深さ6cmほどしか残存していない。覆土は暗褐色土の単層である。

〔遺物〕出土していない。

〔時期〕不明である。

B33土坑

〔遺構（第46図・写真図版46)〕7F区に位置する。V層上面で楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径113×70cmの歪な楕円形を呈し、底面は径が88×59cmの楕円形を呈する。北東部と南西部とで底面の高さに差異があり、南西部の方が15cmほど深くなっている。2つの土坑の重複の可能性もあるが判然としなかった。南西部の底面には、長さ41cmの扁平な礫が置かれていた。覆土は黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土等からなる全て10層に細分される。第5層は異地性の焼土ブロックである。覆土の様相から人為的堆積と判断される。B区PP73と重複し、これより新しい。

〔遺物（第81図・写真図版74)〕410：縄文土器。

〔時期〕出土遺物から縄文時代の遺構と考えられる。

B34土坑

〔遺構（第47図・写真図版47)〕8E区に位置する。V層上面で楕円形のにぶい黄褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径67×57cmの楕円形を呈し、底面は径50×27cmの楕円形を呈する。断面形は深さ15cmの皿状を呈している。覆土は上層のにぶい黄褐色土と下層の明黄褐色土の2層である。

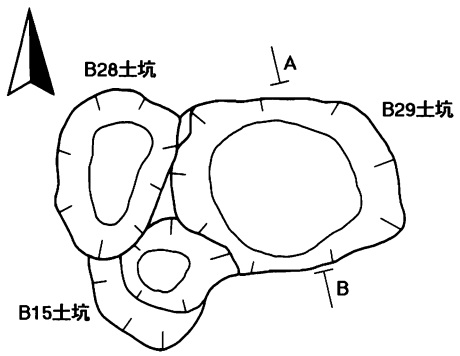
〔遺物〕出土していない。

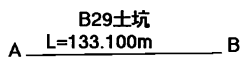
〔時期〕不明である。

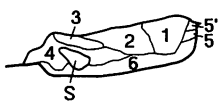
B35土坑

〔遺構（第47図・写真図版47)〕8E区に位置する。V層上面で円形のにぶい黄褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径43×40cmの円形を呈し、底面は径30×28cmの円形を呈する。深さが15cmである。覆土は上層のにぶい黄褐色土と下層の明黄褐色土の2層である。

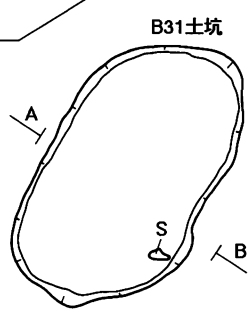
〔遺物〕出土していない。

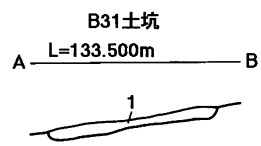




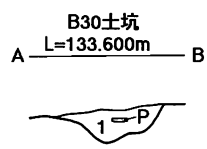


1．10YR2/2 黒褐色シルト　地山土細粒・炭化物粒微量混入
2．10YR2/3 黒褐色シルト　地山土細粒・炭化物粒・焼土粒微量混入　小礫・拳大の礫が混入
3．10YR3/4 暗褐色シルト　炭化物粒微量混入　焼土粒10%未満混入
4．10YR3/3 暗褐色シルト　締まりあり　地山土細粒・炭化物粒微量混入　小礫・拳2つ分ほどの礫混入
5．10YR2/3 黒褐色シルト
5'．10YR6/6 明黄褐色粘土ブロック（地山土）
6．10YR3/4 暗褐色シルト　締まりあり　地山土細粒～大ブロック5%混入　炭化物粒微量混入

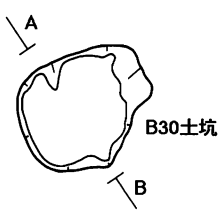


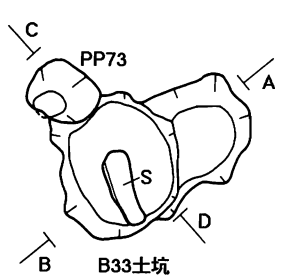


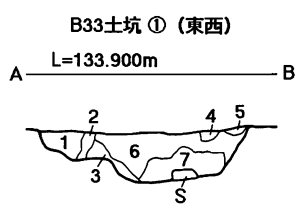
1．10YR3/3 暗褐色シルト　浅い　底面に撹乱（植物根か）多い

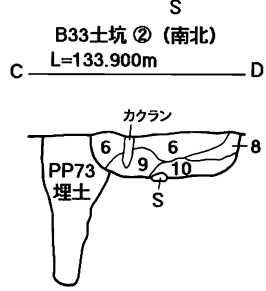


1．10YR3/3 暗褐色シルト　土器小片混入　地山土細粒5%混入　炭化物粒・焼土粒微量混入



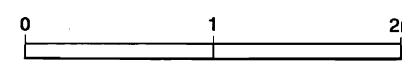






1．10YR2/3 黒褐色シルト　地山土細粒微量混入
2．10YR3/4 暗褐色シルト
3．10YR5/6 黄褐色シルト
4．10YR4/4 褐色シルト　地山土細粒微量混入　炭化物粒・焼土粒微量混入
5．7.5YR5/6 明褐色焼土　炭化物粒微量混入
6．10YR2/3 黒褐色シルト　地山土ブロック微量混入
7．10YR5/8 黄褐色シルト　にぶい黄褐色土30%混入
8．10YR5/8 黄褐色シルト
9．10YR5/8 黄褐色シルト　締まりあり
10．10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　締まりあり

B区ＰＰ73
1．10YR5/6 黄褐色シルト　地山土に類似した色調だが、それよりややくすんでいる



第46図　B29～31・33土坑

〔時期〕不明である。。

B36土坑

〔遺構（第47図・写真図版46)〕8E区に位置する。V層上面で暗褐色土の広がりとして検出された。B12土坑とB3土坑に挟まれこれらよりも旧い。残存する開口部の直径は69㎝、底面径は50㎝である。深さが15㎝である。覆土は暗褐色土、黒褐色土、にぶい黄褐色土からなる全て4層に細分できる。第2層にはその10％ほどに相当する焼土粒が混入していた。覆土の様相から人為的堆積と判断される。

〔遺物（第79図・写真図版72)〕第2層から土偶の胸部（368）が出土しており、これがB2土坑底面から出土した土偶の胴部と接合した。

〔時期〕出土遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。

B37土坑

〔遺構（第51図・写真図版46)〕4I区北東に位置する。県教委生涯学習文化課による試掘トレンチ（BT1）の底面（V層）において溝状の黒褐色土の広がりとして検出されている。平面形は開口部が径224×50㎝の溝状を呈す。底面の両端には小規模な柱穴状の掘り込みが存在している。覆土と断面形は、時間の制約から記録出来なかった。なお当土坑の所在する位置は急斜面地であり、住居跡が全く確認されず、遺構も疎らである。当土坑は形状から陥し穴の可能性があると考えられる。

〔遺物〕出土していない。

〔時期〕形状から縄文時代の遺構とみられる。

B38土坑

〔遺構（第52図)〕6G区北西隅に位置する。V層面で楕円形の黒褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径80×55㎝の歪な楕円形を呈し、底面は56×14㎝と細長い。深さは18㎝である。覆土と断面形は、時間の制約から記録出来なかった。

〔遺物〕出土していない。

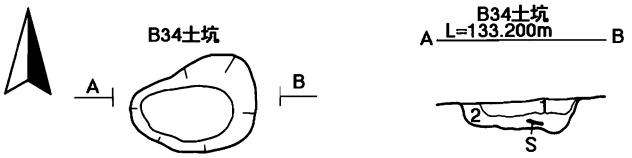
〔時期〕不明である。

B39土坑

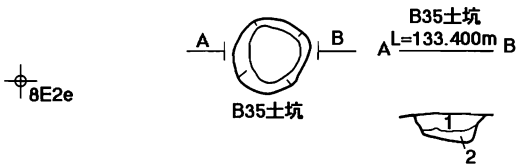
〔遺構（第47図・写真図版48)〕6G区北東に位置する。V層面で楕円形のにぶい黄褐色土の広がりとして検出された。平面形は開口部が径128×62㎝の楕円形を呈し、底面は122×53㎝の楕円形を呈する。断面形は深さ最大14㎝の皿状を呈している。覆土はにぶい黄褐色土の単層である。斜面上方のB2住居、B1建物、B2建物と重複しているが、新旧関係は削剥のために明らかにし得なかった。

〔遺物〕出土していない。

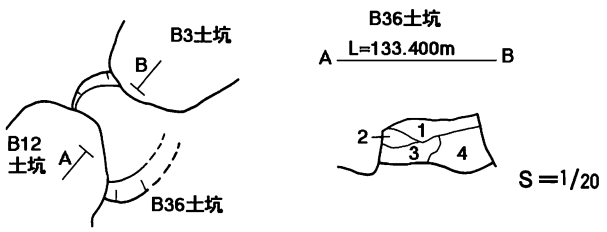
〔時期〕不明である。



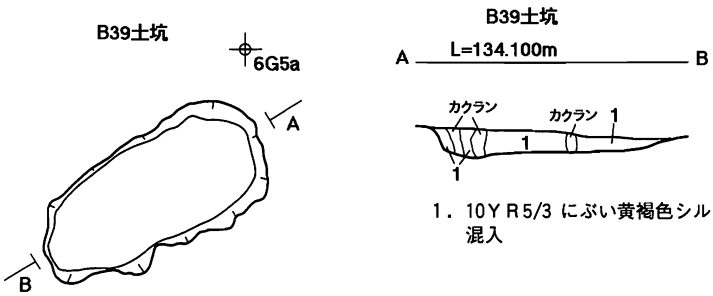
1．10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　地山土細粒微量混入
2．10YR6/6 明黄褐色シルト　締まりあり



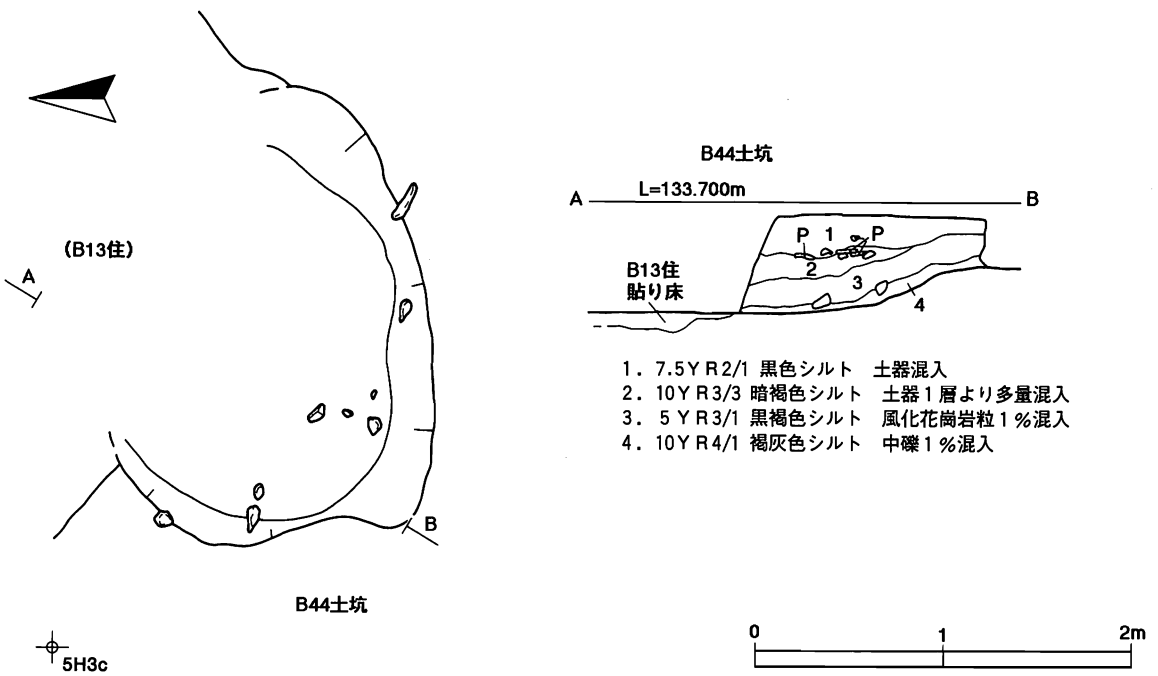
1．10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　地山土細粒微量混入　小礫（3㎝大）混入
2．10YR6/6 明黄褐色シルト



1．10YR3/4 暗褐色シルト
2．10YR2/3 黒褐色シルト　土偶の胸部混入　焼土粒10%未満混入
3．10YR3/2 黒褐色シルト　地山土細粒微量混入　焼土粒ごく微量混入
4．10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　締まりあり

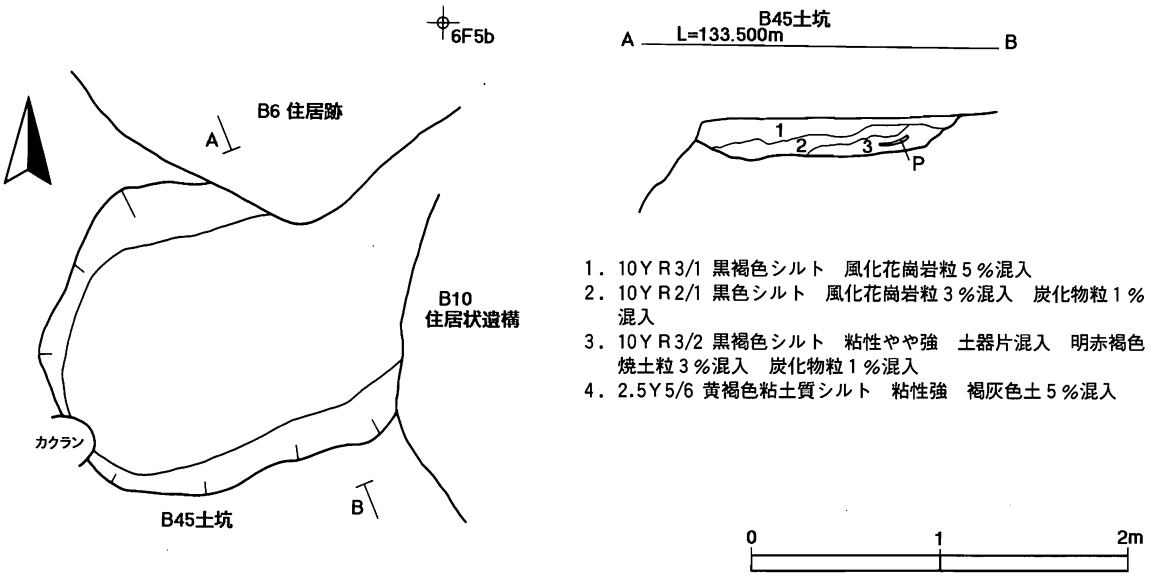


1．10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　粘性やや強　締まりあり　黄橙色ブロック10%混入



1．7.5YR2/1 黒色シルト　土器混入
2．10YR3/3 暗褐色シルト　土器1層より多量混入
3．5YR3/1 黒褐色シルト　風化花崗岩粒1%混入
4．10YR4/1 褐灰色シルト　中礫1%混入

第47図　B34～36・39・44土坑



第48図　B45土坑

B44土坑

〔遺構（第47図・写真図版48)〕5H区中央付近、B13住居跡東隅に重複している。同住居跡の壁面でⅢ層・黒褐色土の落ち込みが確認され、Ⅴ層を掘り込んでいる土坑であることが確認された。検出面はⅢc層であるが、土層観察ベルトを残して周囲をⅤ層面まで掘削したため、平面形は完掘時のⅤ層面でのものである。断面を参照すると本来はより大径で深い土坑であったものと思われる。平面形は楕円形を呈すると思われるが、B13住居跡により截られて1/3程度が失われており詳細不明である。完掘時の残存部径は開口部2.2m、底面径1.8m、断面形は皿状で深さ約20cmである。埋土は黒褐色～暗褐色土で、その上位にⅢc層土が被覆している。

〔遺物（第81～82図・写真図版74)〕主に上位堆積土から縄文土器が出土している。412～419。

〔時期〕出土遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。　（千葉）

B45土坑

〔遺構（第48図・写真図版48)〕6F区のⅤ層面で検出した。本来の平面形は楕円形状を呈していたものと思われるが、B6住居およびB10住居状遺構に截られており、平面形は不詳である。開口部の短径が160cm、底面の短径が120cmである。断面形は深さ23cmの皿状を呈している。埋土は黒褐色土、黒色土からなる3層に細分される。第3層には焼土粒が微量に混入する。

〔遺物（第82図・写真図版74～75)〕底面付近で縄文土器片420～423・426～429、及び磨製石斧424が出土した。

〔時期〕出土遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。　（千葉）

B46土坑

〔**遺構**（第19図・写真図版48)〕B6住居跡のカマド下位で検出された。同住居のカマドを断ち割った際に、断面で土坑状の掘り込みを確認し土坑と認定した。同住居により截られている。手違いにより完掘写真のみで平面形の記録を欠き、形状の詳細が不明となってしまった。写真を参照すると概ね円形基調の平面形である。断面形は深さ約30cmの鍋底状である。埋土は大別すると下位の黒褐色土(第19図・断面ａ－ｂの12・13層)と上位のにぶい黄褐色土(同11層)であるが、後者についてはB6住の貼床かもしれない。確証はないものの、位置的にはB17住居跡のカマド脇の貯蔵穴の可能性もある。

〔**遺物**〕出土していない。

〔**時期**〕出土遺物を欠き時期不明であるが、平安時代の可能性がある。（千葉）

A区柱穴群（第38・49図）・**B区柱穴群**（第39・50～52図）第2表

A区で37基、B区では98基検出された。規模は直径20～60cmほどと多様で、深さが60cmを越えるものもある。これらの中には住居ないし建物跡の柱穴も含まれているとみられるが、判然としない。遺物の出土は僅少だが、大方は縄文時代の遺構と思われる。特筆される遺物は、B区PP12出土の赤色顔料が付着した腕輪とみられる土製品破片(425，第82図・写真図版75)である。PP12はその形状から柱穴より寧ろ土坑の扱いでもよかったかもしれない。（菊池）

(4)配石遺構

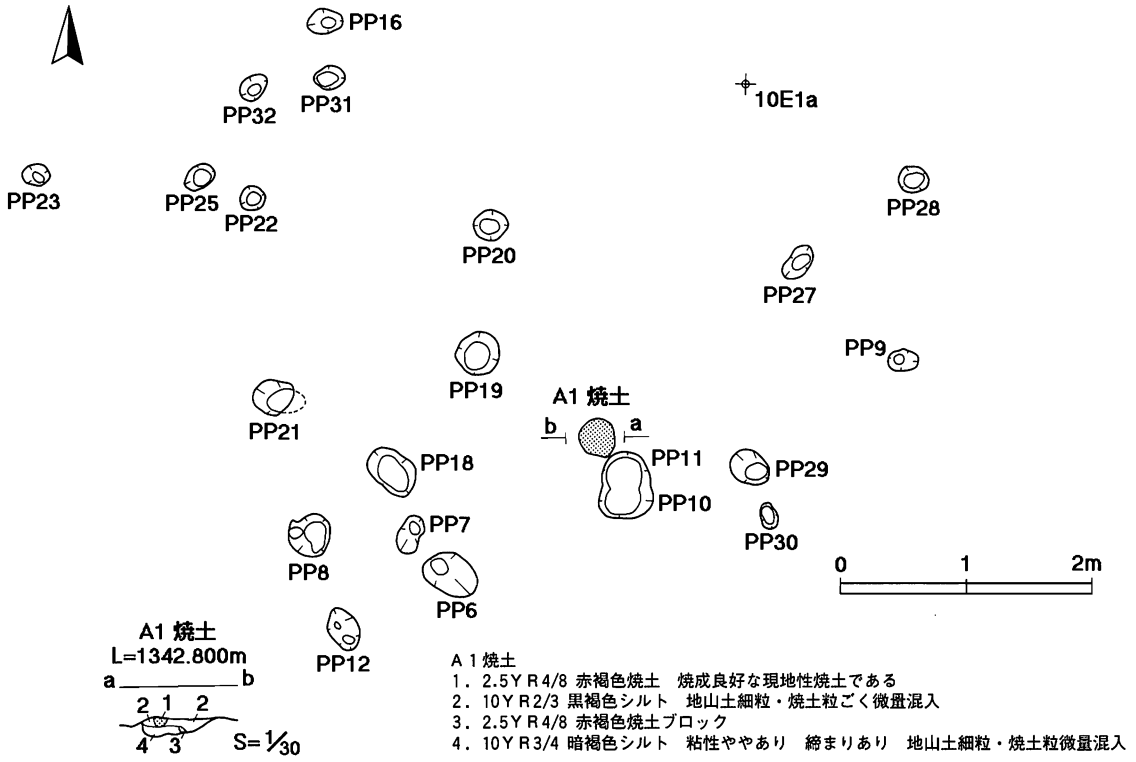
A区で配石が1基、B区で組石・立石が各1基検出された。またB区のⅢ層面では多数の礫が検出され、意図的に配置されたものとも思われた。結局、下位に付属する施設(土坑等)もなく、意図的な設置との確証もなく、遺構としての認定が怪しまれたため「礫群」として扱うこととした(写真図版50を参照されたい)。

A1配石

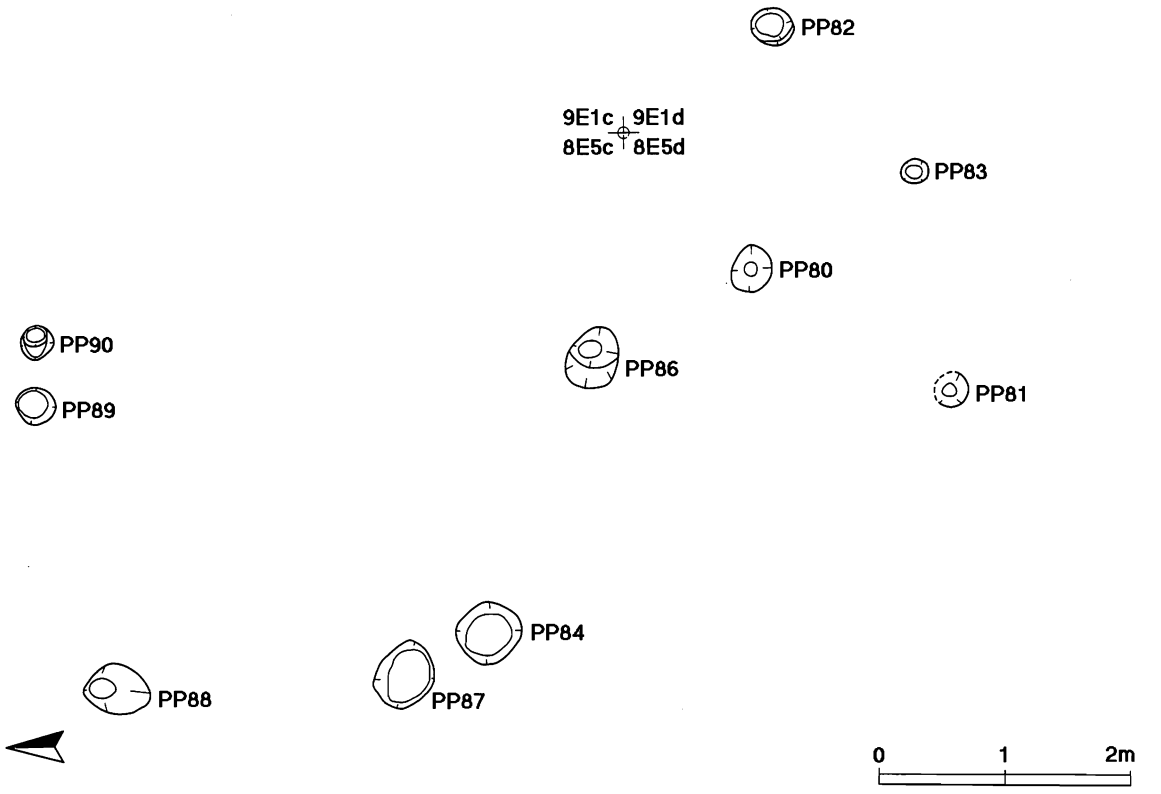
〔**遺構**（第53図・写真図版49)〕A区の9Ｅ～10Ｄグリッドに位置し、当該グリッドのⅢｃ層下位面の緩やかな斜面部分に構築されている。本遺構西半部の下位にはA4住居跡が構築されている。配石の遺存状態から判断して、本遺構が住居跡を截っている。角がとれた川原石を斜面下方へ膨らむ弧状に配しており、弧の延長は約10mを測る。幅は一定ではなく、狭いところで約0.5m、拡がっている部分で約2mである。弧の西端付近は石が散らばって不明瞭となっており、攪乱等により本来の配置から動いたものと思われる。よって、本配石はさらに西に延びていた可能性がある。一方、東端付近では円形に膨らむように石が配置されており、この部分が本配石の一応の末端部ではないかと考えられる。ただし、この“末端部”からさらに2.5mほど東側の同一層面では、雑然とした一群の礫が検出されており、本配石と関連するものだった可能性がある。本配石がさらに東に延びていた可能性も否定できない。配石の下位には土坑等は認められず、特別の付属施設は伴わないようである。なお、配石上部の土層はⅢｃ層に相当しているが、部分的に地山土であるⅤ層の小ブロックが散在していた。これは別遺構掘削時の廃棄土の可能性がある。

〔**遺物**〕確実に本遺構に伴う遺物は確認できなかった。

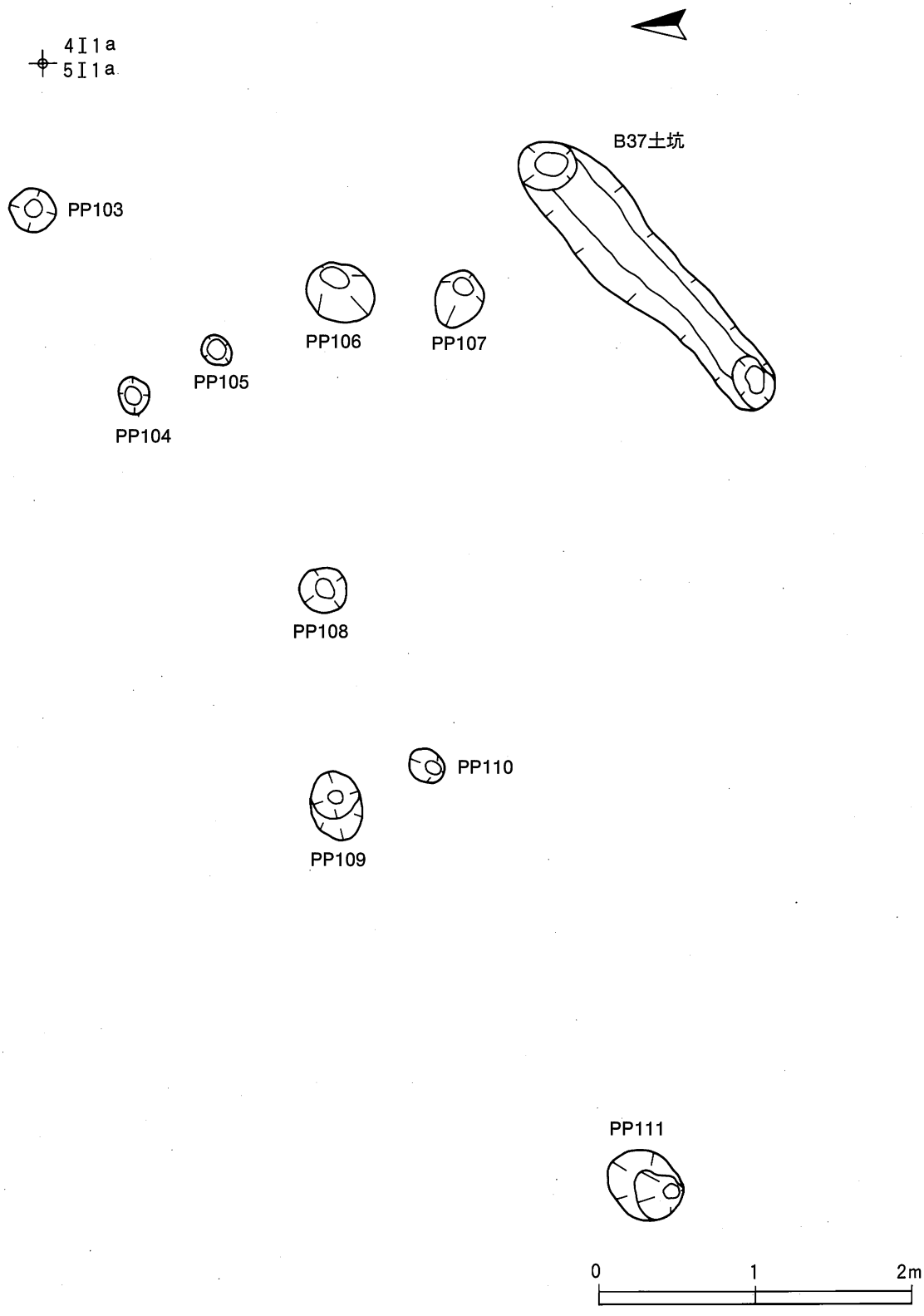
〔**時期**〕伴出遺物を欠くため明確ではないが、本遺構検出面を挟む上・下位の層(いずれもⅢｃ層)からは縄文時代後期中葉の土器が出土しており、本遺構の構築時期も該期に比定される可能性が高い。（千葉）



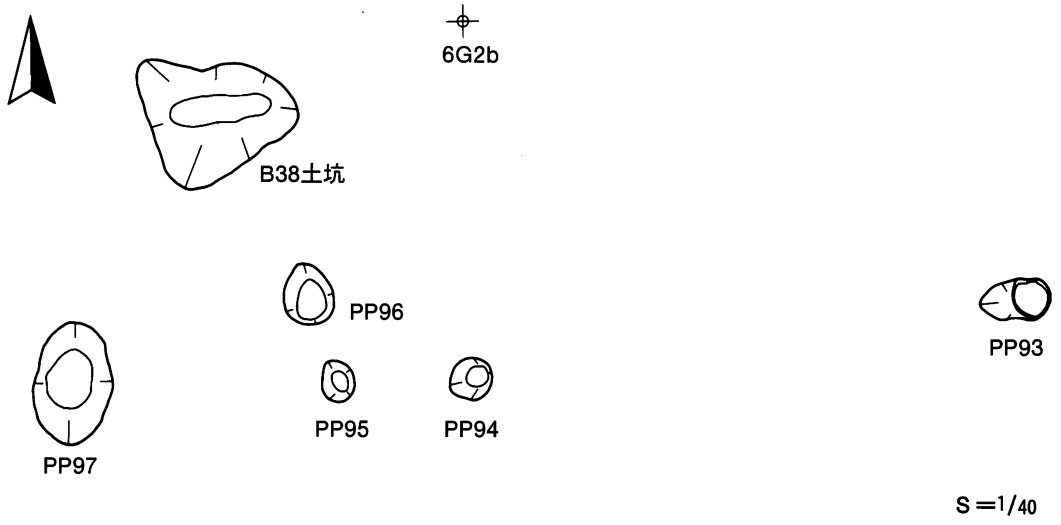
第49図　A区柱穴状土坑群、A１焼土

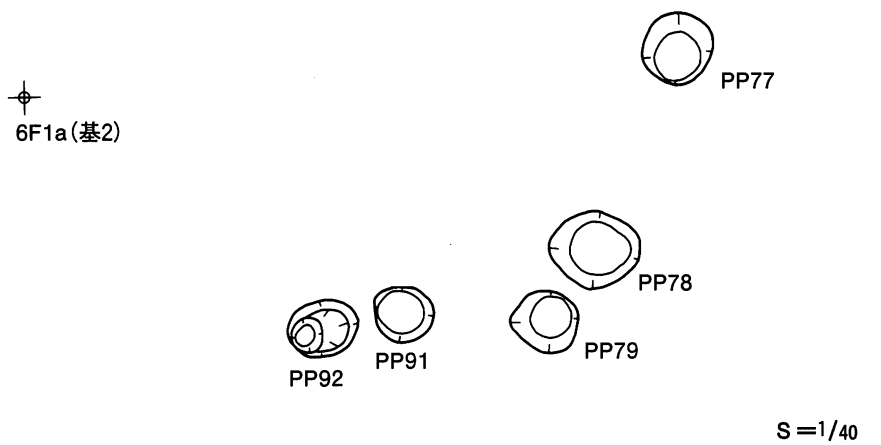


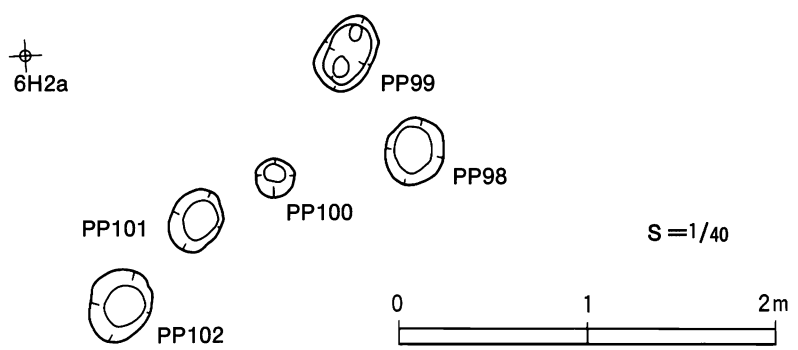
第50図　B区柱穴状土坑群（１）



第51図　B37土坑及び周辺柱穴群







第52図　B区柱穴状土坑群（2）

第2表　柱穴状小土坑計測表

区	No	長径×短径	深さ(cm)	底面標高値(m)
A	ＰＰ1	36×35	14.4	132.59
A	ＰＰ2	40×31	18.4	132.49
A	ＰＰ3	37×26	25.8	132.46
A	ＰＰ4	30×21	33.6	132.38
A	ＰＰ5	25×24	29.7	132.41
A	ＰＰ6	46×31	20.2	132.43
A	ＰＰ7	31×16	29.0	132.35
A	ＰＰ8	34×33	14.3	132.53
A	ＰＰ9	24×17	48.5	132.68
A	ＰＰ10	43×？	20.5	132.46
A	ＰＰ11	36×？	17.6	132.48
A	ＰＰ12	37×25	26.1	132.44
A	ＰＰ13	30×26	44.0	130.27
A	ＰＰ14	54×46	82.2	131.90
A	ＰＰ15	51×35	57.1	132.14
A	ＰＰ16	29×21	24.0	128.14
A	ＰＰ17	58×51	57.5	128.39
A	ＰＰ18	44×30	26.8	128.69
A	ＰＰ19	35×34	36.0	128.51
A	ＰＰ20	28×26	22.6	128.46
A	ＰＰ21	34×29	30.5	128.31
A	ＰＰ22	21×21	21.6	128.52
A	ＰＰ23	23×17	40.6	128.09
A	ＰＰ24	30×26	27.1	128.52
A	ＰＰ25	26×18	25.2	128.41
A	ＰＰ26	25×23	50.0	128.09
A	ＰＰ27	31×18	18.0	128.52
A	ＰＰ28	24×23	22.5	128.42
A	ＰＰ29	34×26	38.5	128.61
A	ＰＰ30	21×14	42.5	128.56
A	ＰＰ31	25×19	18.0	128.34
A	ＰＰ32	24×18	18.0	128.26
A	ＰＰ33	26×23	31.5	128.36
A	ＰＰ34	？	37.0	—
A	ＰＰ35	40×38	66.0	—
A	ＰＰ36	50×46	53.0	—
A	ＰＰ37	21×20	22.0	128.49

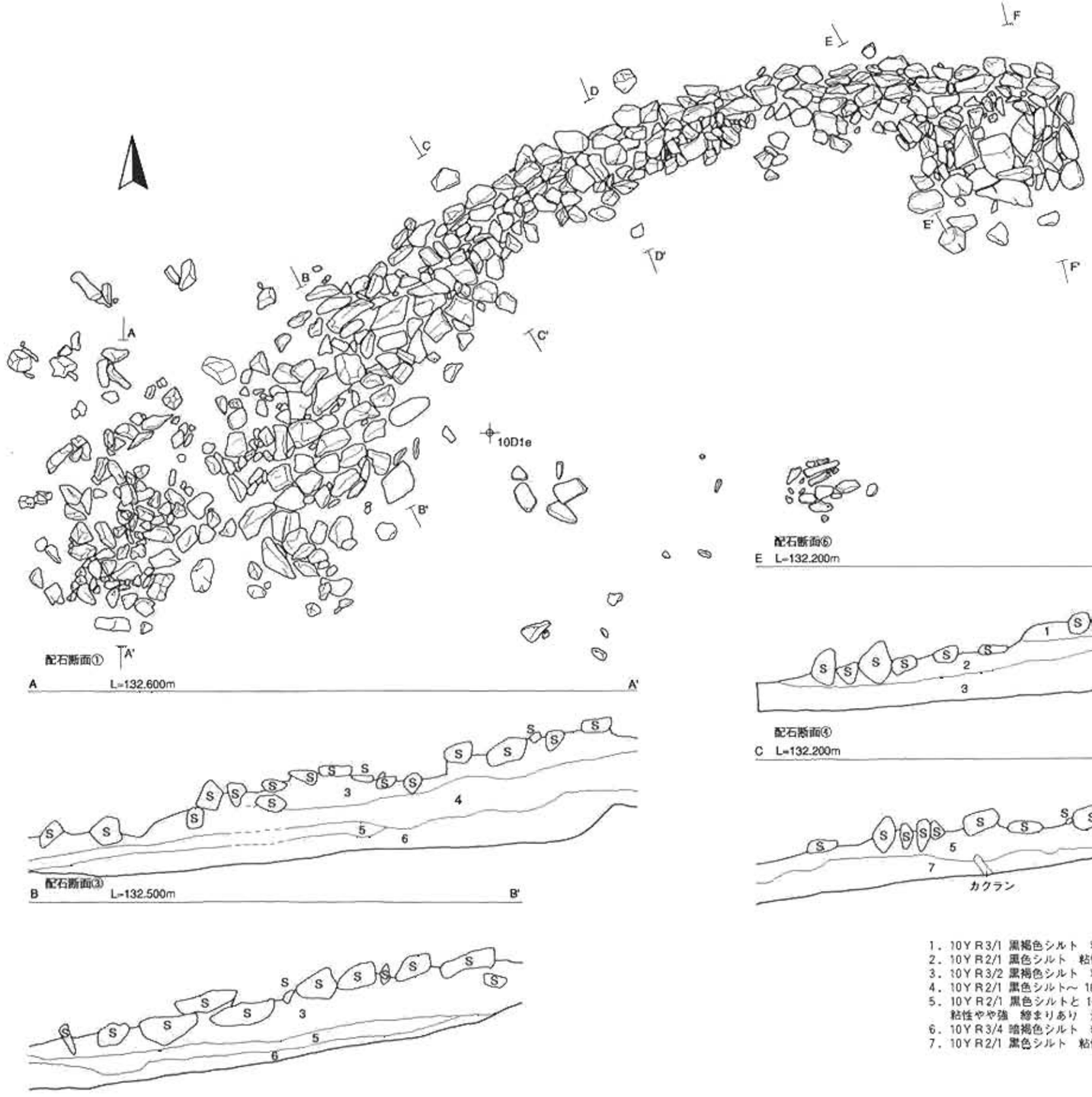
区	No	長径×短径	深さ(cm)	底面標高値(m)
B	ＰＰ1	攪乱	—	—
B	ＰＰ2	63×52	11.9	130.14
B	ＰＰ3	50×48	6.6	130.27
B	ＰＰ4	21×20	7.4	130.29
B	ＰＰ5	46×28	54.0	133.00
B	ＰＰ6	30×30	20.7	129.53
B	ＰＰ7	45×43	14.0	129.55
B	ＰＰ8	43×38	20.0	129.36
B	ＰＰ9	24×20	24.5	129.34
B	ＰＰ10	33×31	16.4	129.50
B	ＰＰ11	50×34	40.1	129.32
B	ＰＰ12	80×49	75.6	129.08
B	ＰＰ13	33×28	11.4	129.91
B	ＰＰ14	35×29	18.5	130.18
B	ＰＰ15	30×23	13.0	129.71
B	ＰＰ16	24×22	19.5	129.91
B	ＰＰ17	B3建物PP4	—	—
B	ＰＰ18	38×35	13.5	130.14
B	ＰＰ19	29×27	28.0	129.87
B	ＰＰ20	B3建物PP1	—	—
B	ＰＰ21	21×20	不明	—
B	ＰＰ22	32×17	12.2	130.08
B	ＰＰ23	50×39	23.0	129.87
B	ＰＰ24	19×17	29.3	129.62
B	ＰＰ25	19×15	17.6	129.70
B	ＰＰ26	25×21	6.8	130.23
B	ＰＰ27	16×15	14.9	130.07
B	ＰＰ28	B2建物PP3	—	—
B	ＰＰ29	B1建物PP5・B2建物PP4		—
B	ＰＰ30	B2建物PP1	—	—
B	ＰＰ31	B1建物PP1	—	—
B	ＰＰ32	51×48	27.0	129.40
B	ＰＰ33	31×26	16.0	129.58
B	ＰＰ34	B2建物PP6	—	—
B	ＰＰ35	41×33	44.6	129.49
B	ＰＰ36	34×32	不明	—
B	ＰＰ37	42×34	7.8	129.82
B	ＰＰ38	34×33	15.5	129.80
B	ＰＰ39	34×26	31.3	129.72
B	ＰＰ40	30×21	13.5	129.91

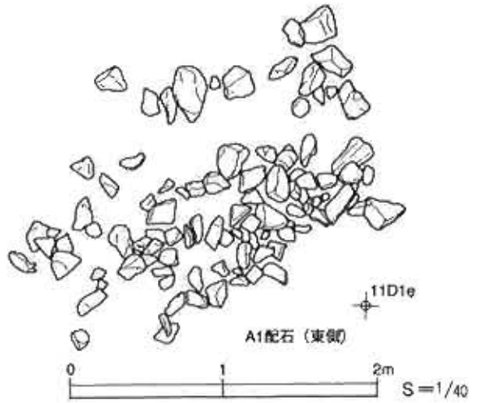
計測表(1)

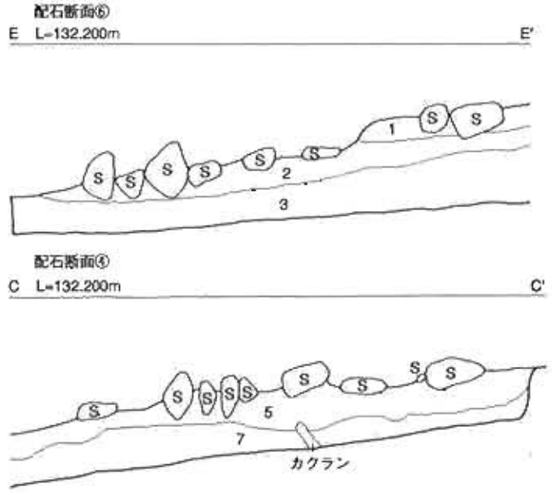
区	No	長径×短径	深さ(cm)	底面標高値(m)
B	ｐｐ41	20×19	23.6	133.15
B	ｐｐ42	B3建物PP６	—	—
B	ｐｐ43	41×33	24.0	133.01
B	ｐｐ44	29×25	32.0	132.94
B	ｐｐ45	41×30	29.6	133.23
B	ｐｐ46	24×21	32.0	133.60
B	ｐｐ47	41×38	21.2	133.52
B	ｐｐ48	29×18	12.9	133.32
B	ｐｐ49	23×22	19.5	133.27
B	ｐｐ50	27×24	27.4	132.99
B	ｐｐ51	24×18	12.5	133.71
B	ｐｐ52	27×24	27.4	132.78
B	ｐｐ53	31×21	22.0	133.01
B	ｐｐ54	22×19	39.8	133.41
B	ｐｐ55	35×31	63.7	133.18
B	ｐｐ56	35×23	13.3	133.32
B	ｐｐ57	16×16	19.5	133.39
B	ｐｐ58	72×43	29.8	133.23
B	ｐｐ59	25×21	28.2	133.25
B	ｐｐ60	29×28	27.5	133.20
B	ｐｐ61	65×45	26.3	132.86
B	ｐｐ62	35×25	50.6	133.51
B	ｐｐ63	40×29	25.0	133.23
B	ｐｐ64	24×16	16.5	133.29
B	ｐｐ65	29×25	12.3	133.33
B	ｐｐ66	54×51	25.7	129.50
B	ｐｐ67	39×28	41.0	129.45
B	ｐｐ68	34×31	13.3	130.19
B	ｐｐ69	40×37	59.5	129.28
B	ｐｐ70	B3建物PP３	—	—
B	ｐｐ71	B3建物PP２	—	—
B	ｐｐ72	B3建物PP５	—	—
B	ｐｐ73	38×29	80.8	129.08
B	ｐｐ74	36×？	24.0	129.53
B	ｐｐ75	41×31	26.0	130.09
B	ｐｐ76	32×27	18.0	129.63
B	ｐｐ77	39×36	27.0	128.81
B	ｐｐ78	49×43	23.5	128.90
B	ｐｐ79	36×35	30.6	128.84
B	ｐｐ80	38×31	24.5	128.99

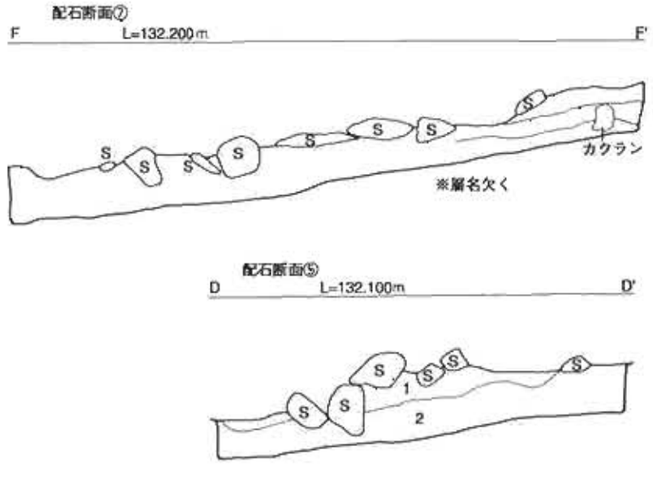
区	No	長径×短径	深さ(cm)	底面標高値(m)
B	ｐｐ81	29×？	37.3	129.11
B	ｐｐ82	33×31	36.5	128.90
B	ｐｐ83	24×19	14.9	129.12
B	ｐｐ84	53×51	23.8	128.52
B	ｐｐ85	A１建物PP９	—	—
B	ｐｐ86	50×40	38.1	128.60
B	ｐｐ87	57×44	29.7	128.40
B	ｐｐ88	54×39	32.9	127.98
B	ｐｐ89	32×29	1.8	128.25
B	ｐｐ90	27×26	33.1	128.05
B	ｐｐ91	30×31	21.0	128.91
B	ｐｐ92	37×30	29.0	128.80
B	ｐｐ93	38×22	12.2	129.90
B	ｐｐ94	24×23	40.0	129.41
B	ｐｐ95	22×17	16.0	129.36
B	ｐｐ96	33×28	25.0	129.18
B	ｐｐ97	65×42	47.0	129.03
B	ｐｐ98	37×32	12.0	130.24
B	ｐｐ99	43×28	18.0	130.13
B	ｐｐ100	21×21	32.0	129.96
B	ｐｐ101	35×28	16.0	130.12
B	ｐｐ102	41×34	28.0	130.00
B	ｐｐ103	31×27	25.8	128.87
B	ｐｐ104	24×20	37.8	128.62
B	ｐｐ105	23×19	20.0	128.97
B	ｐｐ106	46×39	41.0	129.14
B	ｐｐ107	38×31	33.8	129.29
B	ｐｐ108	31×29	18.8	128.80
B	ｐｐ109	46×34	39.8	128.31
B	ｐｐ110	24×21	26.7	128.61
B	ｐｐ111	52×43	52.3	128.23

計測表(2)









1．10YR3/1 黒褐色シルト　粘性やや強　締まりややあり
2．10YR2/1 黒色シルト　粘性やや強　締まりややあり
3．10YR3/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりややあり　やや砂質である
4．10YR2/1 黒色シルト～ 10YR3/1 黒褐色シルト　粘性強　締まりあり
5．10YR2/1 黒色シルトと 10YR7/6 明黄褐色粘土質土ブロックとの混土層
　粘性やや強　締まりあり　混合比率は同じ　A4住居跡の貼床である
6．10YR3/4 暗褐色シルト　粘性やや強　締まりあり　小礫3％混入
7．10YR2/1 黒色シルト　粘性やや強　締まりややあり　小礫1％混入

0　1m　S＝1/20

第53図　A1配石

B1組石

〔遺構（第54図、写真図版50)〕6E区に位置する。Ⅲc層掘り下げ時に、同層下位で検出された。北西から南東にかけて、礫が1.4mほどの長さに並べられている。検出当初、東西長がさほどなかったことから古代住居跡の煙道部であることを想定していたが、精査の結果単独の遺構であることが判明した。30㎝以上の大きなものから拳大のものまで、25個ほどの礫が使用されている。礫の設置痕は認められなかった。

〔時期〕当遺構検出面（Ⅲc層）を生活面とした時期、すなわち縄文時代の遺構であると考えられるが、礫下部から遺物は出土せず、時期推定の材料を欠く。（菊池）

B1立石

〔遺構（第54図、写真図版50)〕

5F5eグリッドのV層面で検出している。長さ35㎝・幅10㎝・高さ30㎝の亜角礫を立てて埋め込んでいる。検出面では掘り方を面的に捉えられなかったが、断面で見ると礫に接する1層・黒褐色土が掘り方覆土にあたり、掘り方自体は設置する礫の大きさぎりぎりであったものと解される。

〔遺物〕出土していない。

〔時期〕時期判断の資料を欠いているが、周辺の出土遺物から見れば縄文時代後期に属する可能性がある。（千葉）

(5)焼土遺構

A区で1基検出されている。

A1焼土

〔遺構（第49図、写真図版51)〕

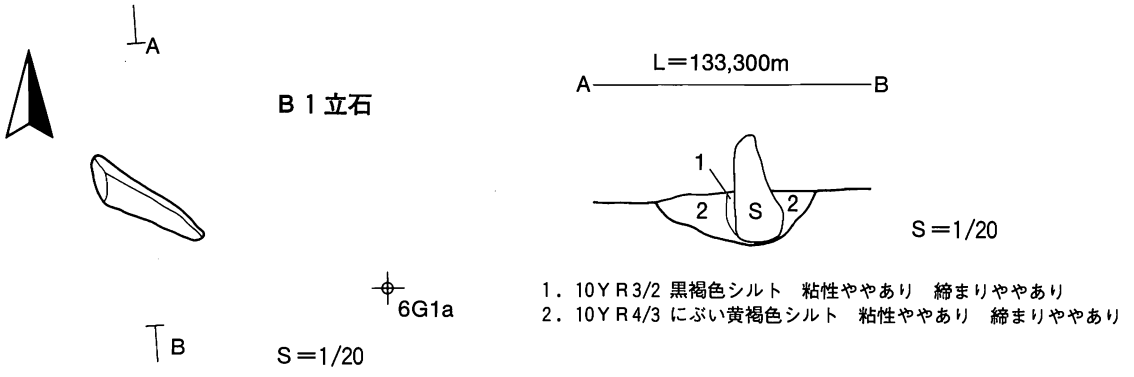
表土除去後、9E5b区のⅢc層下位～V層面で検出した。焼土及び焼土粒が30×26㎝ほどの円形の範囲に散在している。縄文時代の竪穴住居に伴う地床炉跡と推測されるが、開田時に削剥を受けているため、壁は一切確認出来ない。住居跡であるとすれば、A1住居と重複していると思われる。なお、焼土の周辺では複数の柱穴状小土坑も検出されている。（菊池）

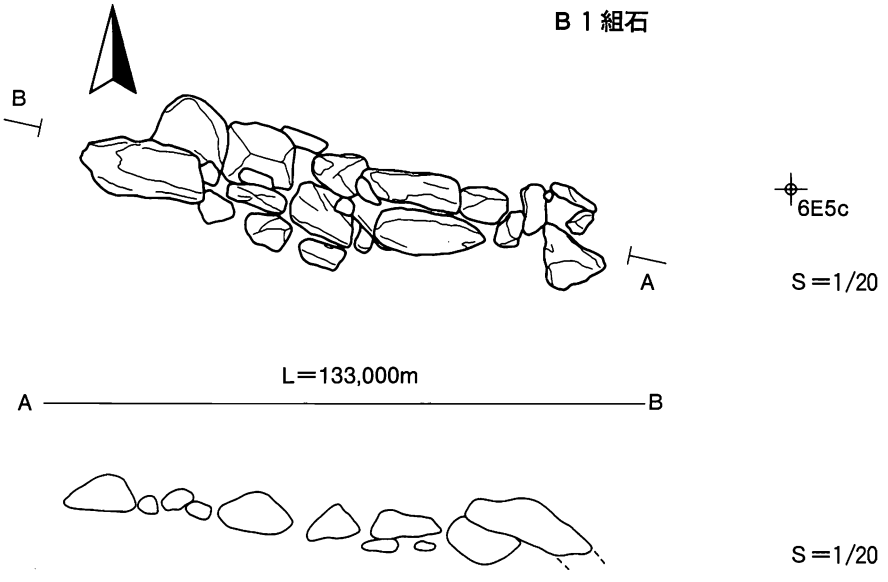
2. C・D区の検出遺構

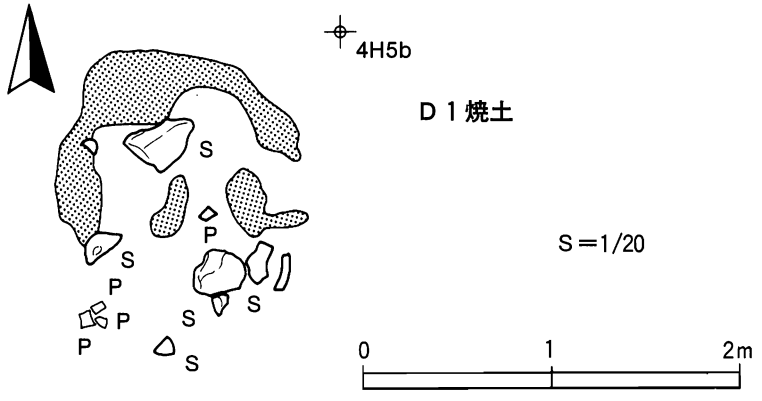
既述のとおり、該区は調査途中で盛り土保存されることとなり、遺構検出の段階で精査を中止した。以下、平面プランを検出し遺構と推測したものについて述べるが、殆どのものが詳細不明で不確実である。

C区住居跡群

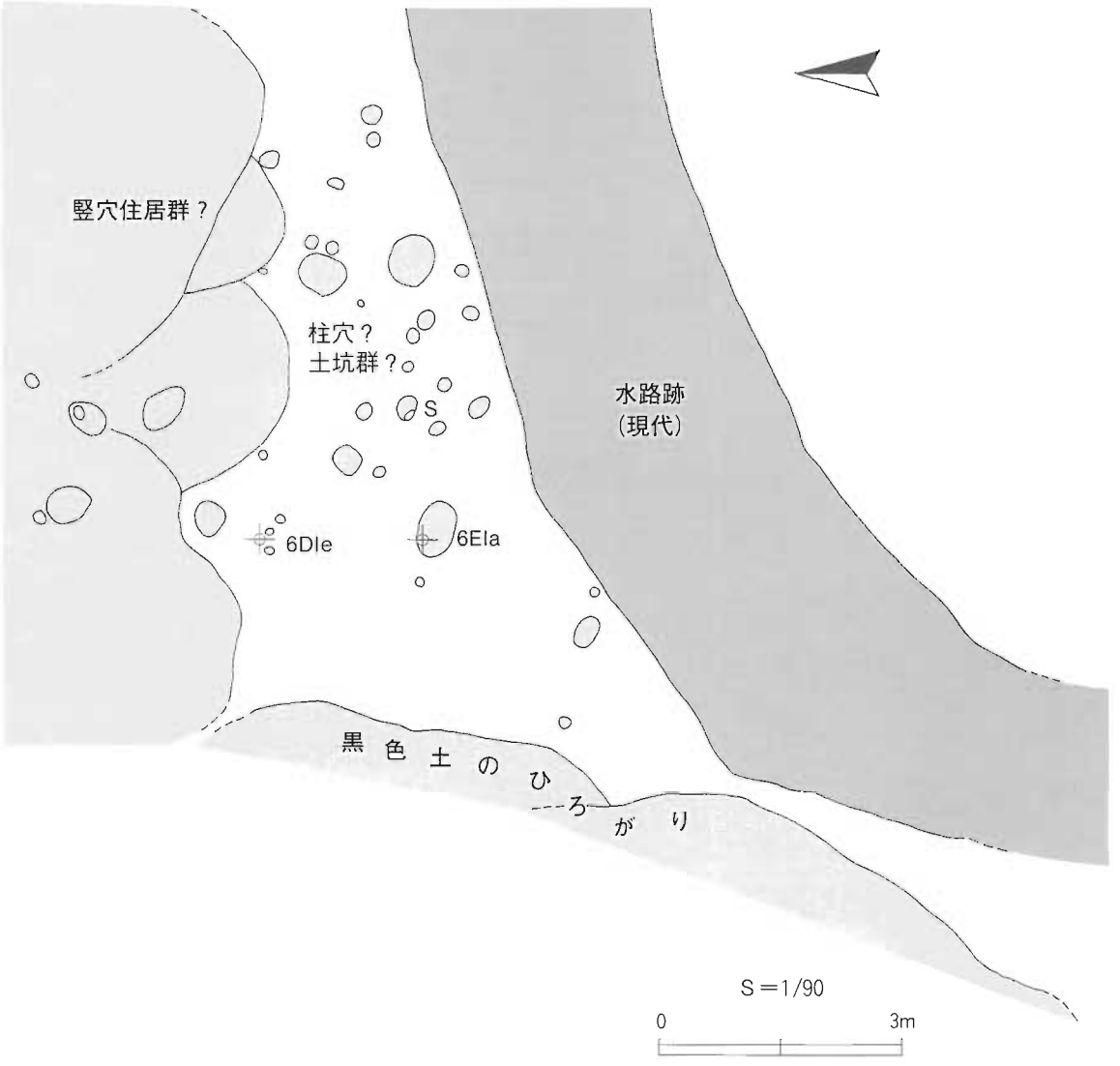
〔遺構（第55図、写真図版51)〕5D～7Dグリッドにおいて、Ⅱ層除去後にV層（砂層）面で黒褐色土の広がりとして検出された。検出段階では6棟前後の竪穴住居跡の重複であると把握したが、本格的精査に着手しなかったため詳細は不明である。単なる自然堆積土の可能性もある。試掘溝を設定し掘り下げた結果では、黒褐色土は20㎝ほどと浅く、Ⅱ層下位で検出されることからしても、伊手川の氾濫によって土壌が流出していることを考えておかねばならない。なお周辺では多数の土坑状、柱穴状のプランも検出されている。（菊池）







第54図　B 1 立石、B 1 組石、D 1 焼土



第55図　C区住居群

D1焼土遺構

〔遺構〕（第54図・写真図版51）

4HグリッドのⅢc層上面で検出した。D区のⅡ層を除去した段階で検出している。焼土周辺がやや固く、住居跡床面とも思われたため、Ⅱ層を覆土とする住居跡の炉ではないかと考えた。しかし壁・柱穴等を確認できず、結果的に単独の焼土遺構とした。焼土は（検出面では）焼成弱く、三日月状に細長く延びている。断ち割っていないため、焼土層厚は不明である。

〔遺物〕焼土周辺で縄文土器の小片が出土している。

〔時期〕未精査のため詳細不明であるが、縄文時代に属すると思われる。（千葉）

B11住居跡柱穴

※本文記載は44頁

番　号	ｐｐ１	ｐｐ２	ｐｐ３	ｐｐ４	ｐｐ５	ｐｐ６	ｐｐ７	ｐｐ８	ｐｐ９	ｐｐ10
直径cm	34×30	34×30	30×30	30×26	38×34	26×20	40×24	30×28	20×20	23×26
深さcm	－	42.2	13.6	－	62	52.2	46.1	32	23.6	25.8

番　号	ｐｐ11	ｐｐ12	ｐｐ13	ｐｐ14	ｐｐ15	ｐｐ16	ｐｐ17	ｐｐ18	ｐｐ19	ｐｐ20
直径cm	30×20	40×26	18×20	30×22	18×18	16×14	22×16	12×14	16×20	12×10
深さcm	22.5	41	16.1	45.9	18.8	55.6	11.6	16.2	9.1	4.8

番　号	ｐｐ21	ｐｐ22	ｐｐ23	ｐｐ24	ｐｐ25	ｐｐ26	ｐｐ27	ｐｐ28	ｐｐ29	ｐｐ30
直径cm	20×14	28×20	18×20	18×10	24×18	20×14	18×16	20×18	12×14	10×10
深さcm	30.6	12.6	12.6	－	－	－	18.4	35.4	20.7	21.9

番　号	ｐｐ31	ｐｐ32	ｐｐ33	ｐｐ34	ｐｐ35	ｐｐ36	ｐｐ37	ｐｐ38	ｐｐ39	ｐｐ40
直径cm	20×18	18×18	14×12	18×16	12×12	12×12	10× 8	20× 8	28×22	28×22
深さcm	17.5	21.8	5.8	7	5.7	11.4	15	16.2	11.7	－

番　号	ｐｐ41	ｐｐ42	ｐｐ43	ｐｐ44	ｐｐ45	ｐｐ46	ｐｐ47	ｐｐ48	ｐｐ49	ｐｐ50
直径cm	10×10	14×14	20×18	12×14	20×20	26×20	20×20	24×20	48×28	20×18
深さcm	4	8.8	9.4	20.4	22.6	36.2	47.4	53.8	52.3	43.9

番　号	ｐｐ51	ｐｐ52	ｐｐ53	ｐｐ54	ｐｐ55	ｐｐ56	ｐｐ57	ｐｐ58	ｐｐ59	ｐｐ60
直径cm	28×18	26×20	16×16	20×14	8 ×12	10×10	16×16	14×16	14×14	12× 8
深さcm	36.4	33.4	20.9	8	9.4	1.3	12.5	10.5	21.9	27

番号	ｐｐ61	ｐｐ62	ｐｐ63	ｐｐ64	ｐｐ65	ｐｐ66	ｐｐ67	ｐｐ68
直径cm	20×20	20×18	30×16	30×22	52×30	16×16	16×14	16×14
深さcm	40.9	30.9	46.5	52	46.6	20.3	14.7	16.3

Ⅴ　出土遺物

出土遺物の総量はＴ-40規格コンテナ約13箱分である。内訳は縄文時代の遺物(縄文土器・土製品・石器・石製品)、平安時代の遺物(土師器・須恵器)および時期不明の遺物(鉄製品)であり、主体を占めるのは縄文土器である。

１．縄文時代の遺物

(1) 土器

出土した縄文土器のうち、完形および実測可能な復原個体203点(底部のみの個体を含む)を登録し、復原できなかった破片では文様等の特徴がわかる個体約800点を選別して登録した。この登録資料約1,000点のうち、遺構内352点、遺構外203点、合計555点を掲載した。登録した資料には前期前葉・中期中葉・後期前葉～後葉のものが見られるが、前期・中期・後期前葉のものは数点しかない。主体を占めるのは縄文時代後期中葉の土器群である。本項では、遺構内外を含めた復原資料および破片資料について、その大まかな出土傾向に触れ、特徴的な個体について説明を付す。

以下のとおり分類を行った。まず、出土土器を大まかな時期で分類し、前期～中期(第Ⅰ群)、後期(第Ⅱ群)に大別した。本遺跡で主体的に出土したのは第Ⅱ群土器であるが、前述のとおり立体まで復原できたものが少なく、破片資料が大勢を占めている。そのため、第Ⅱ群土器の多くは本来の器種・器形を特定できないものもあり、破片を含めて細分類群を設定することが難しいと判断した。そこで、必ずしも良好な層位的資料とは云えないものの、グリッド別に共伴する資料を提示することとした。以上の意図で図版作成を行ったため、図版には立体資料と破片資料とが混在する形をとっている。個々の資料の部位・文様・色調・計測値等の詳細については後掲の観察表に記載したので参照されたい。

〈出土状況の概略〉　出土総量は約227.3kg〔遺構内約82.4kg、遺構外約131.4kg〕である。調査区全域に亙って、主に遺構覆土および基本層序Ⅲ層から出土している。各遺構・グリッドの出土重量は第３・４表に示したとおりである。遺構が密集するグリッドでは遺構外出土量も多くなっている。前述のとおり、遺構検出面がⅢ層・黒色土であったため遺構検出が遅れたことにより、本来遺構に伴っていた遺物(＝遺構覆土上位に包含されていた遺物)が「遺構外」として取り上げられている可能性が高い。Ａ1住居跡およびＢ10住居跡状遺構では、覆土上位層で集中的廃棄の様相が確認されたが、これら以外には特定範囲への遺物の極端な集中ー捨て場的な様相は認められなかった。

第Ⅰ群　縄文時代前期・中期に属する土器(433～435)

僅かに３点で、いずれも遺構外で出土した資料である。433は深鉢の口縁部付近の破片と思われ、原体結節のループ文が重畳するように施文されている。胎土は赤みがかって脆く、繊維が多量に混入している。434・435は深鉢胴部破片である。沈線により渦巻き文が描かれ、434では渦文部分が棘状に尖る。435は小破片であり文様詳細が不明であるが、434に類するものであろう。435はＡ１配石に設定したトレンチにおいて配石より下位層で出土している。文様の特徴から見て、433は前期前葉・大木１式、434・435は中期中葉・大木８ａ式にそれぞれ属すると思われる。

第Ⅱ群　縄文時代後期に属する土器

概ね、縄文時代の遺構覆土および基本層序Ⅲ層相当(細分層のⅢｂ～Ⅲｃ層)から出土した土器群である。一部、平安時代の遺構覆土からの出土例があるが遺構覆土であるⅢ層系黒色土に包含されたものや、重複す

る縄文遺構覆土を掘り過ぎた結果によるものであり、遺構外出土土器と同列に取り扱うこととする。器種は、深鉢、鉢・浅鉢、壺、注口土器がある。いわゆる袖珍土器については、土製品と一括して後述することとした。以下の記述では、それぞれの遺構・グリッドの出土資料について、大まかな出土状況と所属時期について一通りの見解を記した。

遺構名	重量(g)	遺構名	重量(g)
A1住居跡	21,935	B17住居跡	145
A2住居跡	1,210	B18住居跡	1,225
A3住居跡	1,500	B19住居跡	65
A4住居跡	35	B20住居跡	1,340
A5住居跡	65	住居跡計	82,407
B1住居跡	445	A1建物跡	1,820
B2住居跡	485	A6土坑	160
B3住居跡	2,185	A7土坑	100
B4住居跡	3,730	B5土坑	205
B5住居跡	1,660	B12土坑	405
B6住居跡	5,062	B18土坑	355
B7住居跡	25	B19土坑	185
B8住居跡	2,695	B23土坑	865
B9住居跡	270	B26土坑	310
B10住居状	6,510	B29土坑	110
B11住居跡	7,655	B30土坑	150
B12住居跡	5,280	B44土坑	3,380
B13住居跡	5,625	B45土坑	3,820
B14住居跡	5,365	B46土坑	770
B15住居跡	4,220	土坑・柱穴計	11,760
B16住居跡	3,675	**総計**	**95,987**

※土坑類で100g以下は割愛した(計には含めた)

第3表　遺構内出土土器重量

a．遺構内出土土器

竪穴住居跡・住居跡状遺構　住居跡および住居跡状遺構から出土した土器の総量は約82.4kgである。検出された住居跡・住居跡状遺構28棟のうちで、A1住居跡から約21.9kg分の土器が出土しており、他の住居跡に比して群を抜いて出土量が多い。出土した土器群は、概ね後期前葉～後葉に属する資料である。

掘立柱建物跡　A1建物跡柱穴から縄文土器片が少量出土している。出土資料は小片が多いが、A5土坑(出入り口部柱穴)の364は後期中葉に属するものである。

土坑・柱穴状小土坑　A区の6号土坑、B区の1・5～7・9・12・13・15・16・18～20・23・29・30・32・33・44・45号土坑の覆土から縄文土器片が出土しており、出土資料は後期中葉に属するものである。B44・45土坑から比較的纏まった資料が出土している。

b．遺構外出土土器(436～639)

遺構外出土した縄文土器をグリッド別に掲載している。掲載は大グリッド単位で北西から順に、具体には2H→2I→…→11D→11Eという順番に、出来るだけ層位に従って〔Ⅰ→Ⅱ→(Ⅲ)→Ⅲa→Ⅲb→Ⅲc〕掲載したが、一部矛盾もある。

〈出土状況〉　Ⅲc層を主体として、Ⅲa～Ⅲb層・Ⅳ層から出土している。Ⅲc層中に複数の生活面(遺構検出面)が存在していた筈であり、本来遺構覆土中にあった遺物を「遺構外」としたものも多数あると思われる。調査区低位部分のC・D区に存在する砂質土・Ⅱ層中にも遺物が包含されるが、量は多くない。

〈器種〉　鉢形土器－深鉢・鉢・浅鉢・台付鉢、壺形土器、注口土器である。

〈出土土器の概要〉　グリッド別に出土土器の概要を見る。詳細については観察表に記しているが、特徴的なもの、補足が必要なものについて言及する。なお、以下の記載では「グリッド」は省略して記す。

2H・2I・3H・3I：436～439。いずれも調査区低位部・D区のⅢb～Ⅲc層から出土した。436は胴部が直線的に外傾する粗製深鉢片。438は壺形土器の頸部～胴上部(注口土器の可能性もあるが)で、頸部に刻み目帯、胴部には帯縄文。3J：調査区高位部(B区)段際の斜面部分にあたる。440は壺形土器の胴部で、鍵状の帯縄文が施文される。4G・4H：D区の黒色土・Ⅲc層から441～443が出土。442は段際に掘られていた新期(近現代)の水路跡覆土からの出土である。443は、くの字に屈曲する深鉢の頸部片(図では傾きが誤まっている)。4I：444～445。B区南側斜面部にあたり、B37土坑および柱穴数基が分布する付近である。5E：446。調査区低位部・C区のⅡ層砂質土から出土した完形の注口土器である。小形。文様はいわゆる“ミミズ腫れ”状の微隆起線により表現され、弧線による(( ))のモチーフが施される。地文を欠き、全面が磨

かれて光沢を帯びている。口縁～頸部は短く、２段の横位沈線が引かれ、口唇部には４単位の瘤状突起、胴部にも微隆起の弧線の交点に貼り瘤が付される。注口部に対向する位置には把手様の突起。瘤が付されておりやや後期後葉的な様相であるが、注口土器のこの種の文様－微隆起線文の出現がやや早いとの見解もある(註１)。ここでは後期中葉に収まるものと解しておく。５Ｆ：Ｂ区北側の段縁付近。447～450。448は鉢の口縁部片で、口縁部は無文帯、胴部下半には短い弧線で区切られた横位の平行沈線文。449は小破片であり、文様の詳細不明であるが、木葉状の磨り消し縄文となる可能性がある。口縁には二重の刻み目帯が付される。450は深鉢口縁部破片であるが、二条の細い刻み目帯が巡っている。小片であるため判然としないが、449・450はやや後期後葉的な様相と感じられる。５Ｇ：Ｂ区、Ⅲｂ層から出土。451～458。Ｂ14住居跡付近であるため、本来は同住居跡に伴っていた可能性もある。452は磨り消しの帯縄文であるが、鍵状のモチーフか。454・455はいずれも大波状の深鉢口縁部片であり、口縁端部が肥厚して刻み目帯となる。457の深鉢胴部の帯縄文が展開(おそらく鍵状)。いずれも後期中葉に属する資料である。５Ｈ：Ｂ区南側。459～490。Ｂ４・５・13・15・16住居跡、Ｂ44土坑などの遺構が比較的集中しているエリアである。掲載資料に本来は遺構覆土中の土器が混在している可能性が高い。459は大波状口縁の深鉢で、口縁部が上下両端の刻み目帯で区切られ無文化し、頸部以下には鍵状？の帯縄文。460の鉢は胴部が大きく迫り出し、口縁に向けて屈曲。肥厚した口縁部には刻み目帯、胴部には鍵状帯縄文が付される。465は台付深鉢の底部。463・466・469・471・473・475～477・480の深鉢は、いずれも胴部が直線的に外傾するが、口縁部が僅かに内彎するものとしないものとが見られる。478・486・487・488の鉢は、胴部に重畳する横位並行沈線＋縦位区切り沈線が引かれるが、いずれも横Ｕ字状の一筆書きで引かれている。485は壺の胴部上位(頸部付近)の破片である。内面には整形時の指頭圧痕が顕著に残っている。出土資料の所属時期は概ね後期中葉のものである。５Ｉ：491～494。491は大波状口縁の深鉢。493の台付浅鉢は、胴部に重畳する弧線文が４単位付されており、台部は無文となる。いずれも後期中葉の土器群である。６Ｄ～７Ｄ：495・496。鉢？495の口縁部には二重の刻み目帯。６Ｅ：497～503。497・499ともに鍵状文が付された深鉢胴部片であるが、497では胴部が直線的に外傾、499ではやや曲線的に外反している。501には、いわゆる加曾利Ｂ２式に見られる綾杉状沈線文に類似する文様が付される。これらの所属時期は後期中葉に収まるものである。６Ｇ：504～506。504は台付鉢の胴部片で、小さなボタン状貼り瘤が付される。後期後葉まで下る可能性もある。６Ｈ：507・508。７Ｅ：509～510。509には小突起状の貼り瘤。後期後葉か。７Ｆ：511・512。波状口縁の深鉢の口縁部片で、共に刻み目帯が巡る。511は波頂部が尖る。８Ｄ：513～516。513は段際客土から出土した完形の浅鉢。515の器表面には細い櫛歯文。８Ｅ：517～535。517の壺口縁には沈線区画の縄文帯に沿って、やや尖鋭的な貼り瘤が複数個付されている。526も壺と思われるが、やはり先端の尖った貼り瘤が３段にわたって顕著に見られる。534・535では一筆書きによる横Ｕ字形の多重沈線が付されている。517・526は後期後葉、その他は同中葉に属するものと思われる。８Ｆ(～７Ｆ)：536。９Ｄ：539～549。539は台付鉢？の台部。540・544には櫛歯文。544の口唇部は尖っている。541の深鉢口縁部には台形状突起が複数付されている。

グリット名	重量(g)	グリット名	重量(g)
２Ｈ	1,165	６Ｇ	2,650
２Ｉ	270	６Ｈ	1,575
２Ｊ	185	７Ｄ	210
３Ｇ	90	７Ｅ	2,500
３Ｈ	170	７Ｆ	1,185
３Ｉ	290	７Ｈ	245
３Ｊ	120	８Ｅ	9,875
４Ｅ	30	８Ｆ	2,560
４Ｆ	265	９Ｄ	5,715
４Ｇ	1,375	９Ｅ	4,520
４Ｈ	1,530	９Ｆ	975
４Ｉ	785	10Ｄ	26,615
５Ｄ	115	10Ｅ	10
５Ｅ	875	11Ｄ	4,135
５Ｆ	1,795	11Ｅ	240
５Ｇ	7,710	(Ａ区)	7,025
５Ｈ	14,775	(Ｂ区)	2,570
５Ｉ	4,870	(Ｃ区)	2,325
６Ｄ	1,265	(Ｄ区)	7,255
６Ｅ	975	(不明他)	10,426
６Ｆ	80	合　計	131,349

第４表　遺構外出土土器重量

542でも口縁部に突起、突起の直下に貼り瘤が付される。545の深鉢口縁片は沈線区画内に斜位沈線が交差するように引かれる。沈線の順は一定ではなくランダムである。541・542は後期後葉、545は判然としないが後期前葉か？、その他は後期中葉と思われる。９Ｅ：550～553。551の鉢は加曾利Ｂ２式に見られるような綾杉状沈線が引かれる。９Ｆ：554。大波状口縁の深鉢口縁部片。口縁端に刻み目が巡り、刻み目帯は波頂部から垂下する。10Ｄ：Ａ１住北側、Ａ３・５住およびＡ１配石が位置する付近である。当グリッドⅢｃ層からの出土量は多い。555～598。560大波状口縁の深鉢で、胴部下半～底部が欠失している。口縁は５単位の波状で朝顔形に開き、口縁端部に刻み目帯が巡る。胴部にはクランク状の帯縄文。563の鉢には多重平行沈線。566・567・569の深鉢の文様は木葉状である。572の注口土器は、胴上位に小さな貼り瘤が付され、胴部には襷掛け状？の帯縄文が展開する。580は平口縁の深鉢であるが口縁に二叉突起が付される。胴部の文様は沈線による帯状区画内に櫛歯状工具による細く多数の沈線を充填する。581は深鉢の口縁部突起。598は部分的な破片で詳細不明であるが、環状(袋状)の注口土器の破片と思われる(口縁？底部？)。566・567・569・572・580・581・590・(591？)は後期後葉で、その他は後期中葉。11Ｄ：599～603。区で取り上げた土器－Ｂ区：604・605。区で取り上げた土器－Ｃ区：606～608。608は胴部に逆Ｓ字状の帯縄文。区で取り上げた土器－Ｄ区：609～627。609の器表面には刷毛目状の調整痕。文化課試掘トレンチ廃棄土：628～636。古代住居跡覆土：Ｂ３住居跡／169～171。Ｂ６住居跡／206～211。Ｂ13住居跡／301～311。

全体の傾向としては、後期前葉？数点、後葉少量が含まれるが、中葉の資料が主体となっている。

(2) 土製品

51点が出土した。縄文土器(第Ⅱ群)に混在する形で、遺構内外から出土している。時期は、土器の所属時期に対応する後期中葉～後葉と推測される。

袖珍土器(4・6・26・37・38・214・637～639)　いわゆるミニチュア土器である。９点出土しており、すべて図化している。**土偶**(95～99・116・172・289・368・640～643)13点出土している。腕部または脚部の破片と思われる不確実なものも含めている。368・641はいわゆる“妊婦土偶”で、迫り出した腹部は刺突による加飾で強調されている。289は頭部～胴上半部の欠損品である。頭部はソケット状に胴部に差し込まれるものである。640は胴部(腹面)で、背面は剥落により失われている。胎土によるものか、全体に軽く脆いもので、乳房部分は２箇所ともに剥落している。胴中央の正中線付近に連続刺突による沈線が縦走する。641は“妊婦土偶”の胴下半以下の欠損品で、全体形状は不明。腹部はややランダムな刺突、脚部は前面に２列の刺突が施される。**腕輪**(426)Ｂ区・柱穴状小土坑(pp12)覆土から１点出土している。ここでは“腕輪”としているが、垂飾品かもしれない。欠損により詳細は不明である(残存1／4程度)が、円環状の土製品の破片と推測される。剥落しているが、赤色塗彩されていた痕跡が見られる。**耳栓形耳飾り**(91)１点のみである。**スタンプ形土製品**(100～102・238・644・645)６点出土している。644・645は欠損した一部分のみで詳細不明なため、スタンプ形土製品ではない可能性もある。**振り子形土製品**(215・263)２点出土した。215は８号住居跡の炉脇床面で検出されており、完形である。撮み部分に貫通孔１箇所を有し、胴部には２種の原体による羽状縄文が付される。263は欠損品で撮み部を欠く。残存部には、215同様に羽状縄文が施文されている。**円盤状土製品**(92～94・115・225・646～649)９点出土している。いずれも土器胴部破片を素材として、縁辺部を削って円形～楕円形に成形している。**その他**(90・103・104・264)用途不明の土製品を一括した。90・103・104はＡ１住居跡覆土上位層から出土している。90は多数の孔を穿たれている。接合せず小破片のみであるため、ここでは土製品に含めているが、いわゆる“多孔底土器”の破片であると思われる(註２)。103は器種不明で、深鉢の突起かもしれない。104はペンサック形の土製品で、手捏ね成形？されるが雑である。貫

通孔を有することから、垂飾品の一種かもしれない。264は焼成粘土塊である。

(3) 石器

石器は遺構内外のⅢc層相当の黒色土から出土しているが、43点と僅少で、かつ礫石器が少ない。器種構成〔( )内は点数〕は、石鏃(12)、尖頭器(1)、石錐(1)、石匙(5)、不定形石器(1)、打製石斧(1)、磨製石斧(8)、石篦(1)、敲磨器類(6)、砥石(1)、石鍬(1)である。本項では各器種の概要について述べ、個々の石器の観察事項は観察表に記載している(註3)。石器類の所属時期は出土土器の主体である縄文土器第Ⅱ群期(後期中葉～後葉)に当たるものと思われる。

石鏃(105・148・400・423・651～658)遺構内出土は4点、遺構外出土が8点である。基部形態により大別でき、**中茎**(柄)をもたない無茎鏃は105・655～657の4点。中茎を有する有茎鏃は148・400・423・651～654。658は欠損により形状不明である。**尖頭器？**(265・659)掲載した2点のみ出土した。**石錐**(660)掲載した1点のみである。細く長い機能部に大きな撮み部が付く。**石匙**(173・216・661～663)5点が出土している。663のみ横形で、残りは縦形である。173・662は未成品の可能性がある。661は機能部が三角形を呈しており、尖頭器様である。**不定形石器**(664)いわゆる掻削器で、1点のみである。**打製石斧**(665)遺構外で1点出土した。**磨製石斧**(242・267・268・357・424・666～669)9点出土している。完形は小型667の1点で、669は未成品と思われる。残りは欠損品で、欠損部位は刃部(242・268・424)、基部(267・668)、刃部および基部(357・666)である。側縁に抉りが入る。**石篦**(670)1点が出土した。敲磨器類(149・154・266・367・671・672)いわゆる磨り石で、6点出土している。**砥石？**(673)自然礫の一側縁の凹部に多数の擦過痕が認められ、砥石としての使用が想定される。**石鍬**(674)掲載した1点のみ出土した。石材は軟質の砂岩で、脆く崩れやすい。

(4) 石製品

2点出土した。157は用途不明の板状石製品である。B1住居跡の床面で検出されている。675は石刀の欠損品である。所属時期は、縄文土器第Ⅱ群(後期中葉)期の可能性が高い。　(千葉)

2．平安時代の遺物

(1) 土師器

検出された竪穴住居跡4棟全てで出土している。器種は坏と甕の2種である。坏は全て轆轤成形で、口径13.8～15cm、底形5.4cm～6.3cm、器高4.2cm～5.7cmに収まる。個体間に著しい器形の差異は認められない。江刺市落合Ⅱ遺跡出土の遺物に形態が近似しており9世紀末葉から10世紀前葉の年代観が想定される。内面は底部を放射状に、口縁部を横方向にヘラミガキするものが多く、これらは何れも黒色処理されている。切り離しは全て回転糸切りで、底部無調整のものが主体をなすが、底部から体部下半にかけて手持ちヘラケズリされるものもある。酸化焔焼成で流通した、所謂「赤焼き坏」の出土量は僅少であった。以下で特筆すべき個体について述べておく。

160はB3住居の床面直上で出土した。内外面とも黒色処理されている。底部は回転糸切無調整で、轆轤台から切り離し後に線刻が施されており、漢字の「大」と判読される。焼成前の線刻で、筆順に誤りはないものの、識字層によって刻まれたものか否かは不詳である。163もB3住居床面出土である。底部回転糸切無調整で、焼成後に「十」字の線刻が施さる。192はB6住居床面直上で出土した。回転糸切りの後、底部中央を除いた部位が手持ちヘラケズリされる。実測図に表現しないでしまったが、ケズリは体部下半にも及ぶ。この他193と295にも、底部から体部下半にかけてヘラケズリが認められる。297は内面黒色処理され、底部に糸切り後・焼成前の「十」字の線刻がある。351は内外面黒色処理されており、底部に焼成前の刻書がある。

漢字ではないかとみられるが、判読は出来ない。

160

351

墨書土器は2点出土した。196は坏の体部で、外面に墨痕がある。677は坏の口縁部外面に墨痕がある。何れも赤焼坏に墨書されており、小破片であるため文字か否かすら判読出来ない。

小型甕・大型甕ともに轆轤成形のものとそうでないものとがある。9世紀末葉以降と想定される時期の住居内に非轆轤成形の前代的色合いの濃い土器が混在していることが、当遺跡の特質と言うことが出来る。特徴的個体として3つとりあげる。200は内外面黒色処理された轆轤成形小型甕の口縁部破片で、器面がよく研かれている。205は非轆轤成形の甕で、体部外面にケズリ、内面にはヘラナデの調整が施される。そして内面が黒色処理されている。298は非轆轤成形になるもので、体部外面はヘラケズリ、内面はハケメ調整が施されている。口縁部は内外面ともにヨコナデの調整痕が見える。底部には成形時についたとみられる何らかの植物種子の圧痕が認められ、籾痕かと疑われる。

(2) 須恵器

出土量が極めて少なく、坏はない。遺構外含めて甕の破片が3片（203、300、678）出土したにすぎない。

(3) 金属製品

B3住居跡で2点出土している（167、168）。角釘やカスガイとみられる。建築部材か。（菊池）

3．その他の遺物

B区の遺構外で金属製品4点(鎌・釘・古銭)が出土している。680は鎌と思われる。681・682は釘と推測されるもので、うち681はいわゆる“折頭釘”の欠損品か。この他、釘と思われる棒状の鉄製品があるものの残りが悪いため、掲載していない。これらについては、平安時代の遺物である可能性もあるが、遺構に伴わずかつ形態的な特徴の裏付けがないため、時期が判然としない。また、A区東端部で現表土(水田耕作土)層中から近世の古銭(寛永通寶)1点が出土しているが、掲載していない。（千葉）

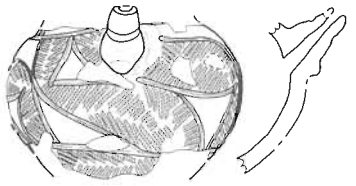
註

1) いわゆる“ミミズ腫れ状の文様”－微隆起線文を有する注口土器は、一般的には瘤付土器の初期の特徴(関東の曾谷式併行期)と考えられている。しかし小林圭一氏は岩手県長倉Ⅰ遺跡等の当該文様資料を検討した結果、「ミミズ腫れ文様というものが、加曾利B3式併行に既に存在しているのではないか」と述べ、当該文様が「加曾利B3式併行から瘤付土器第Ⅱ段階」という時間幅を有する可能性を指摘している(小林2001)。本遺跡の446はほぼ単独で出土しており共伴資料を欠いているが、周辺の出土資料から見れば後期中葉のものが主体的である。小林氏の論、および周辺の出土状況に照らして、ここでは446を後期中葉の資料と解することとする。

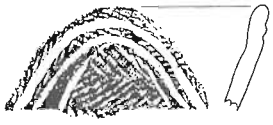
2) 多孔底土器の類例は、本遺跡近隣では新山権現社遺跡(岩手埋文1994)に見られる。

3) 石器石材の石質鑑定は平成13年12月に行われた。前述のとおり、野外調査を12月初めまで行わねばならず、鑑定時点で仕分が未了であった。そのため、鑑定時点で登録していた石器類については花崗岩研究会の矢内・柳沢両氏に石材石質を鑑定していただいたが、それ以降登録した石器については鑑定を行っていない。

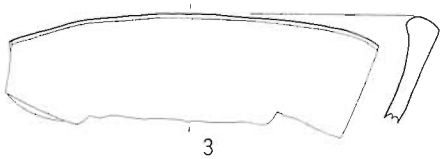
床面



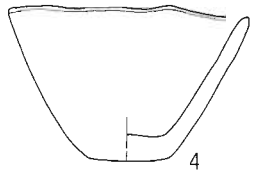
1



2



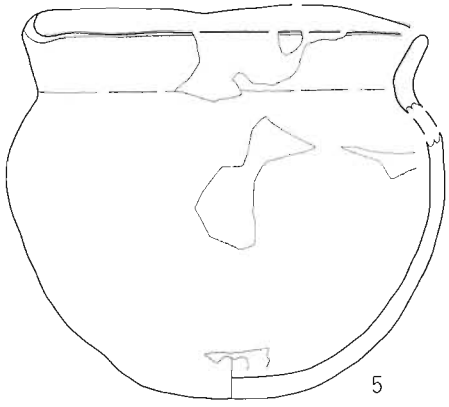
3



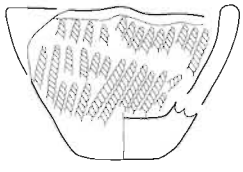
4

（S＝½）

埋土下位（埋土３層）



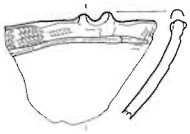
5



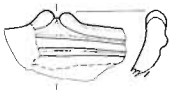
6

（S＝½）

7

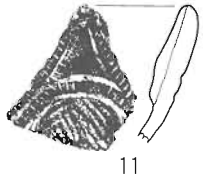


8

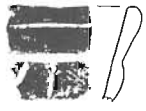


9

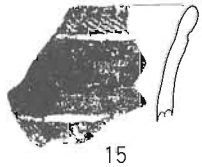
10



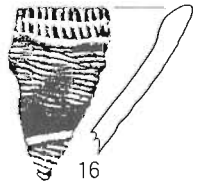
11



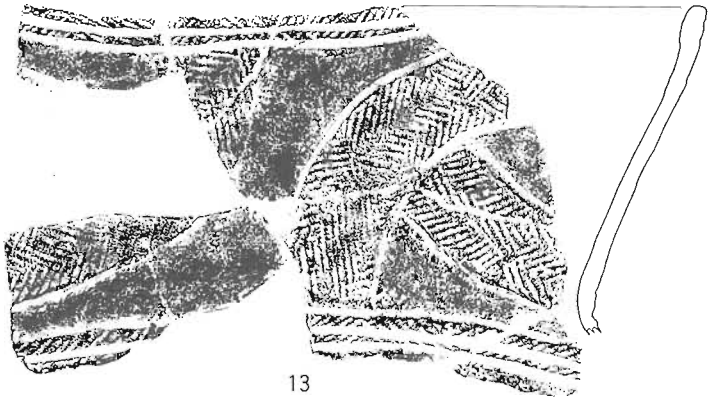
12



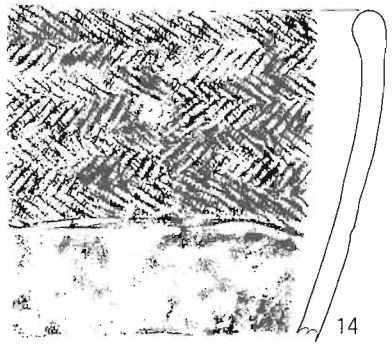
15



16



13

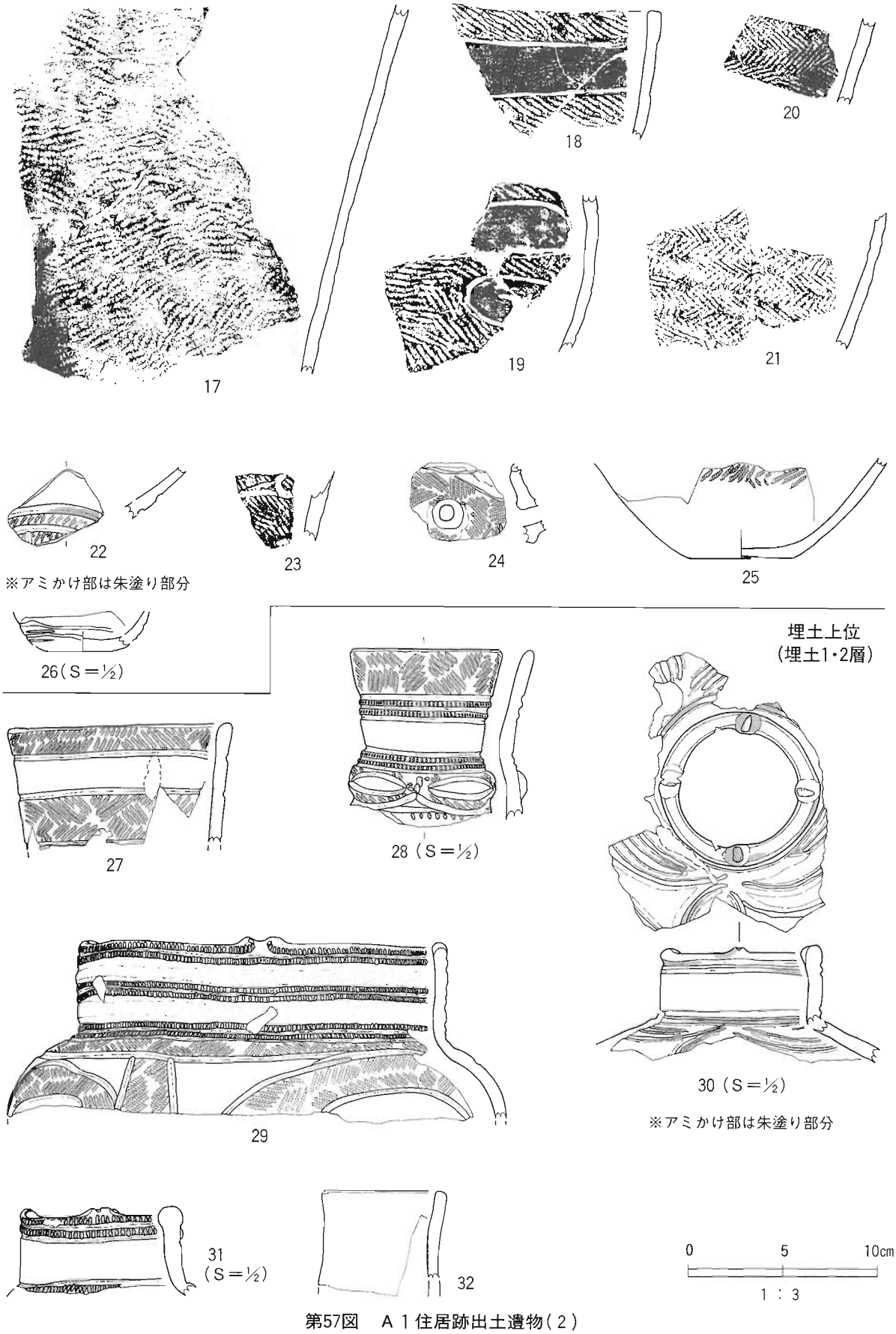


14

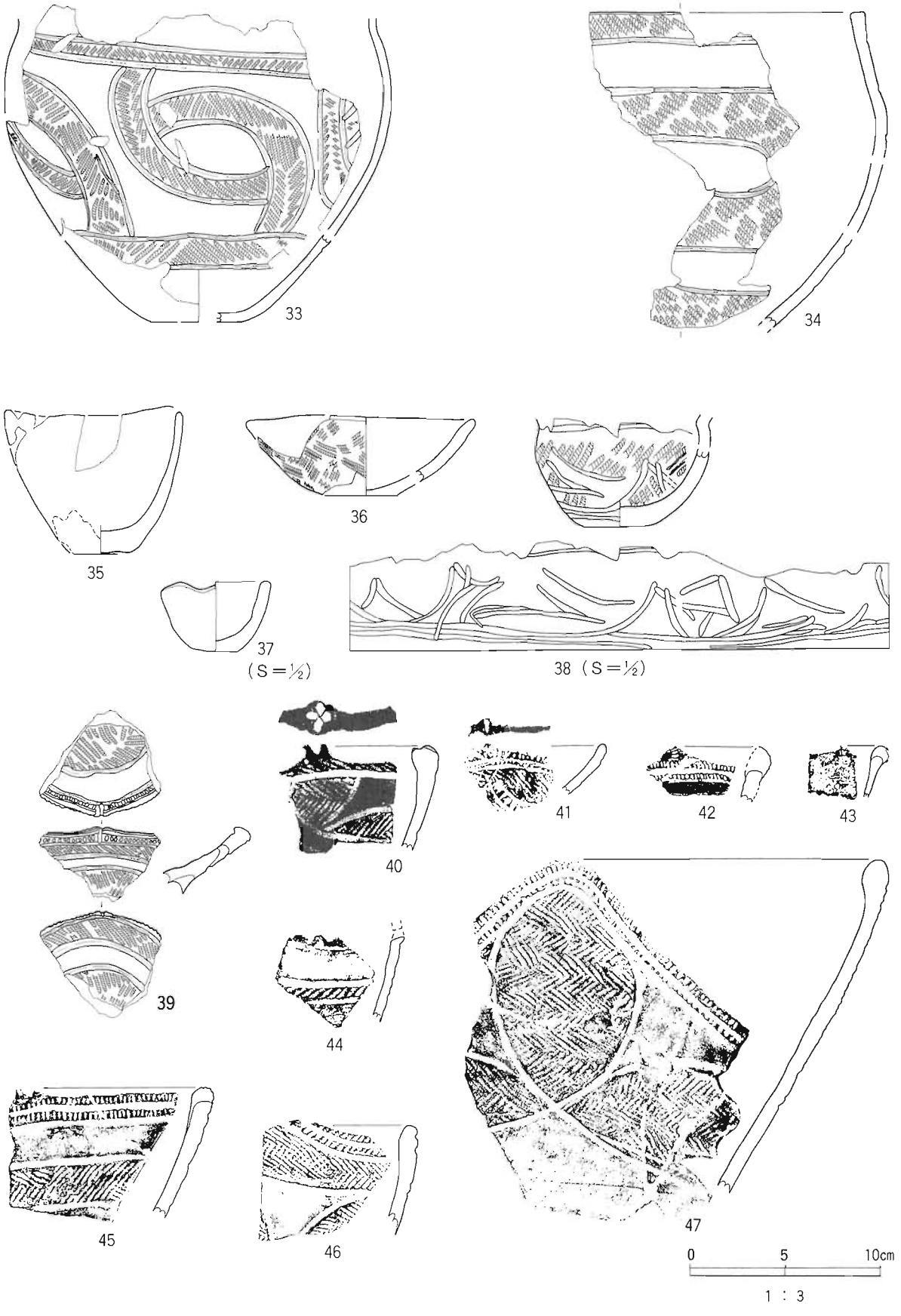
0　5　10cm

1：3

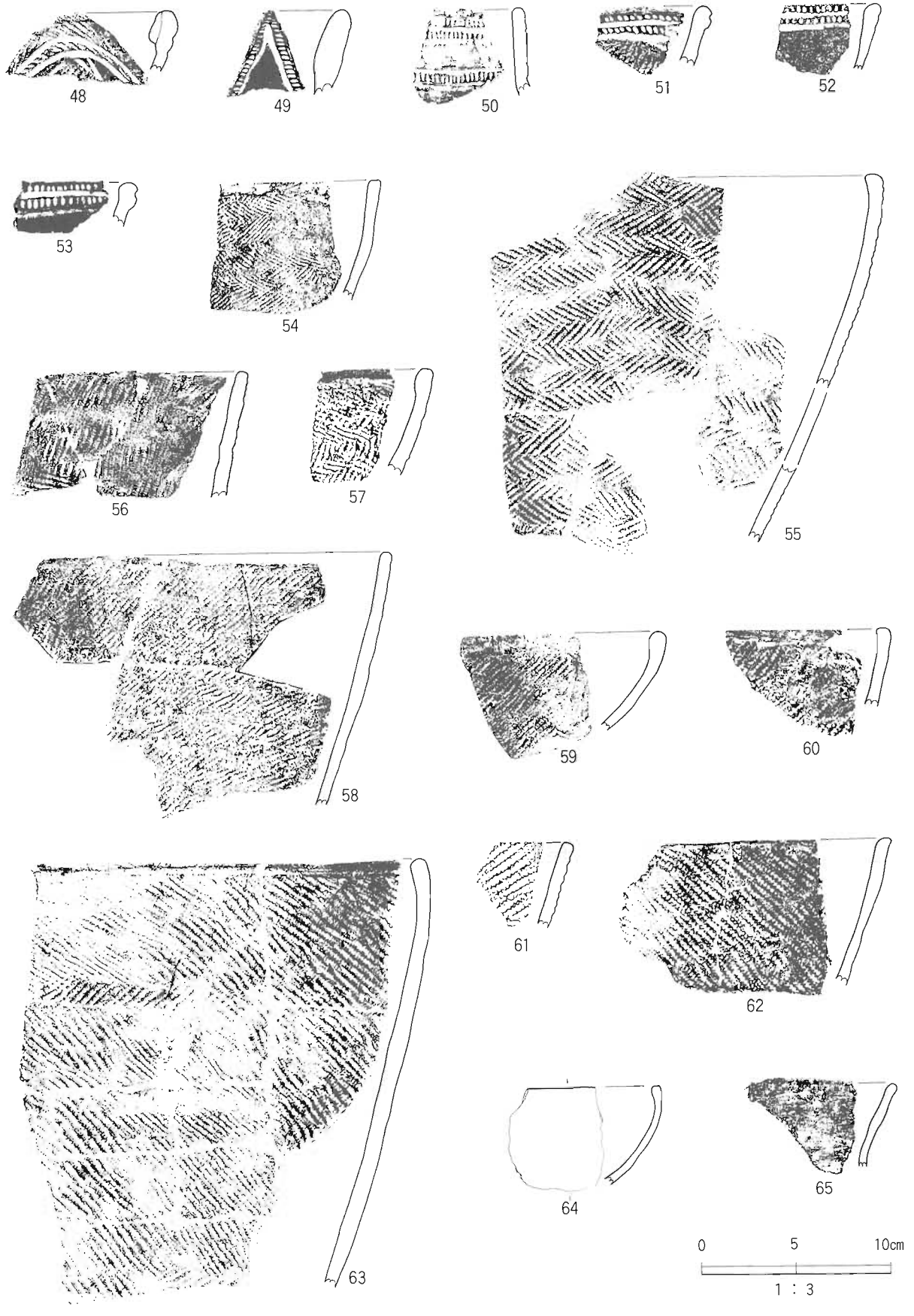
第56図　A１住居跡出土遺物（１）



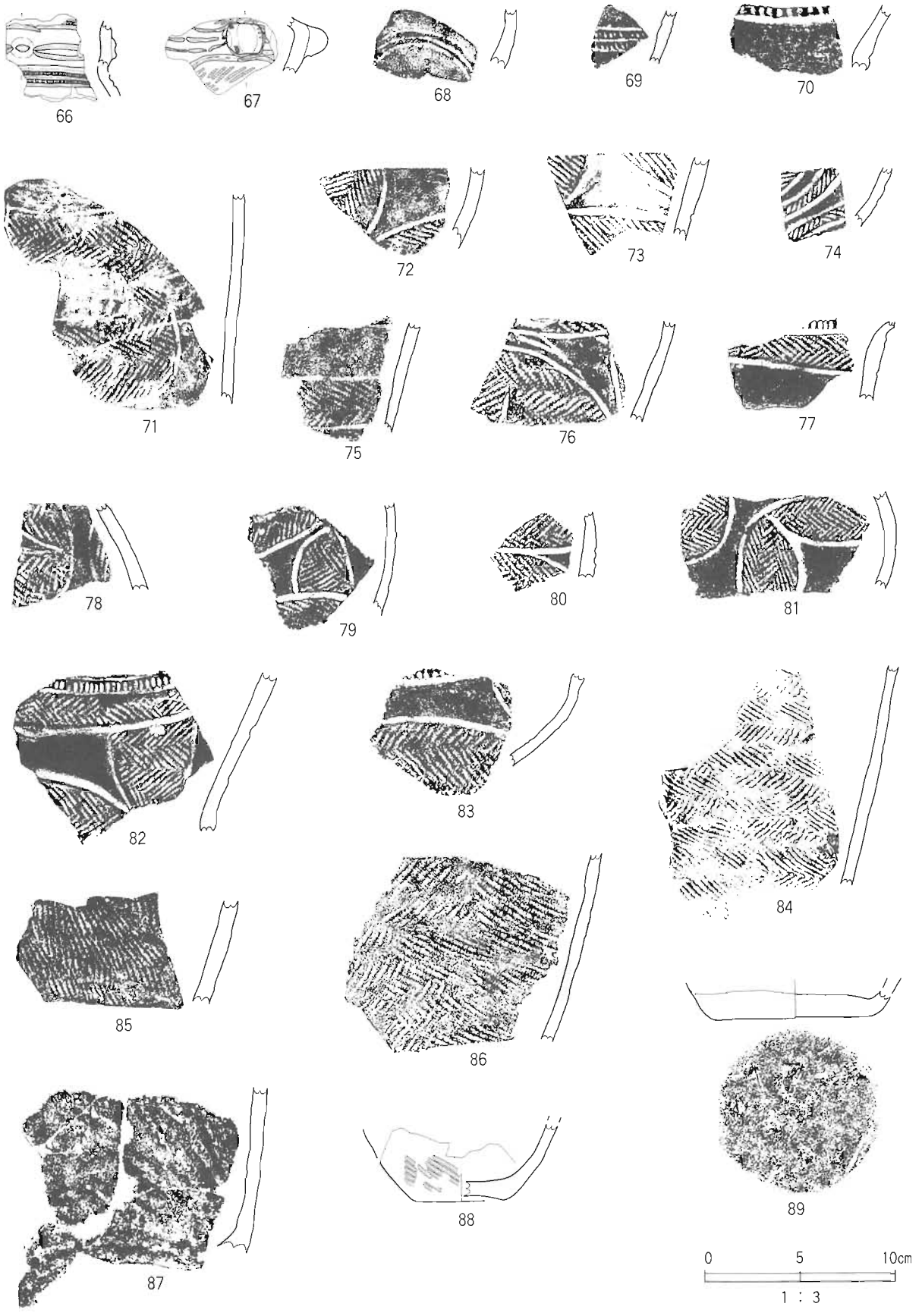
第57図　A１住居跡出土遺物（２）



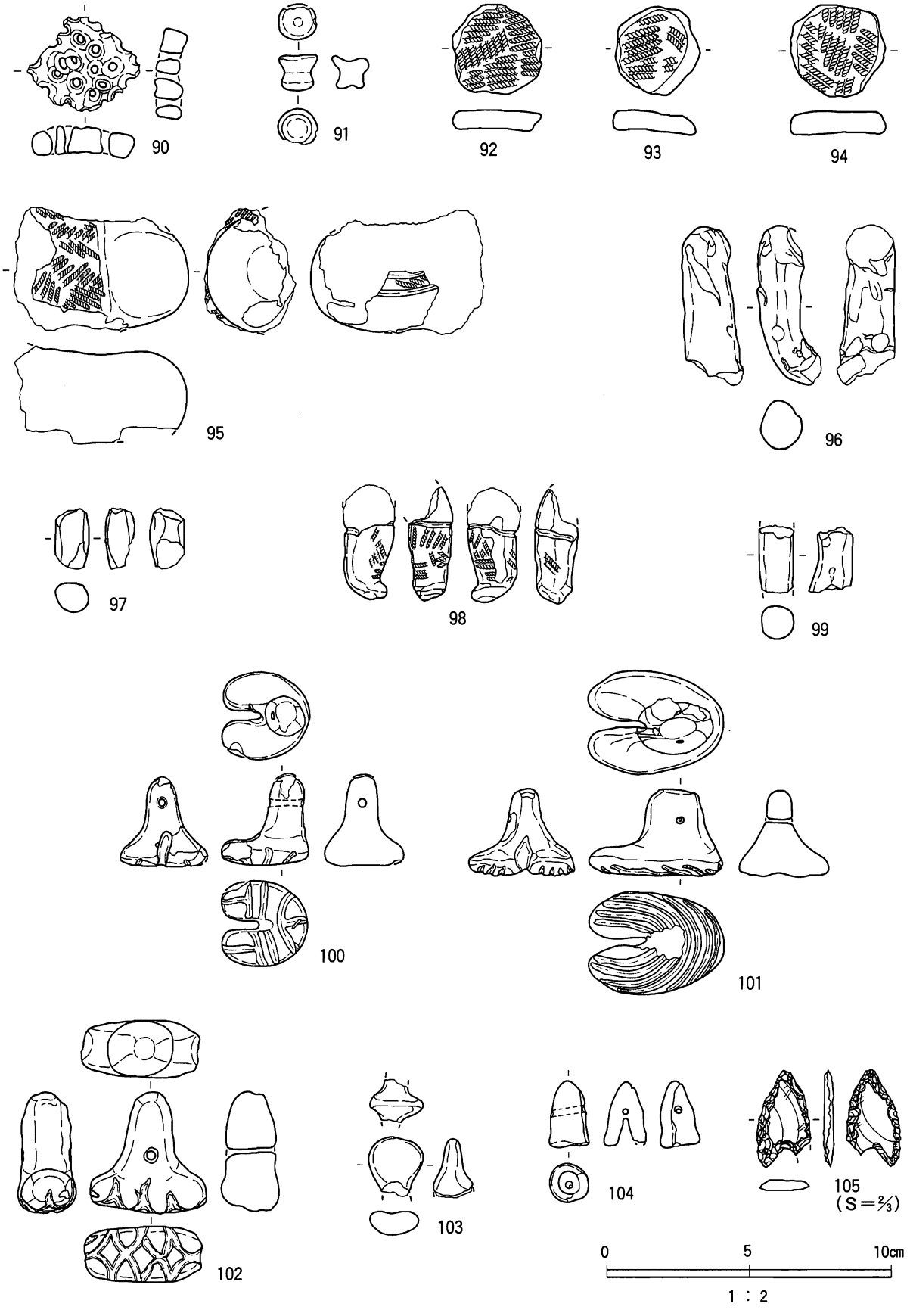
第58図　A 1 住居跡出土遺物(3)



第59図　A１住居跡出土遺物（４）

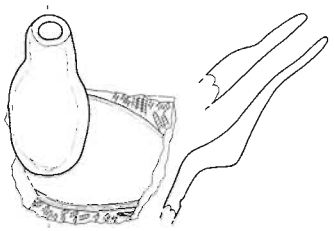


第60図　A１住居跡出土遺物（５）

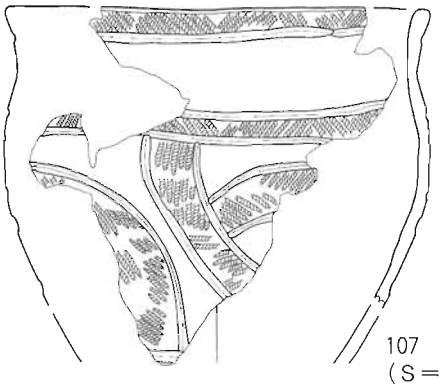


第61図　A１住居跡出土遺物（６）

埋土



106



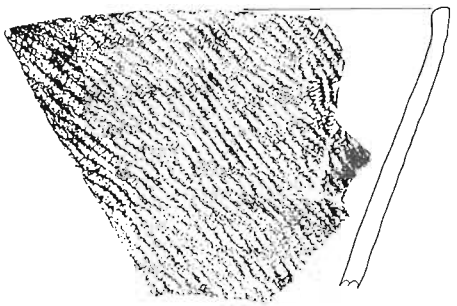
107
（S＝¼）

108

109

110

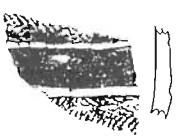
※アミかけ部は朱塗り部分



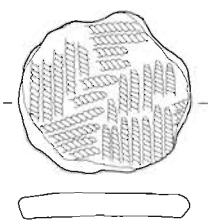
111

112

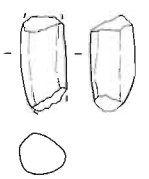
113



114



115
（S＝½）

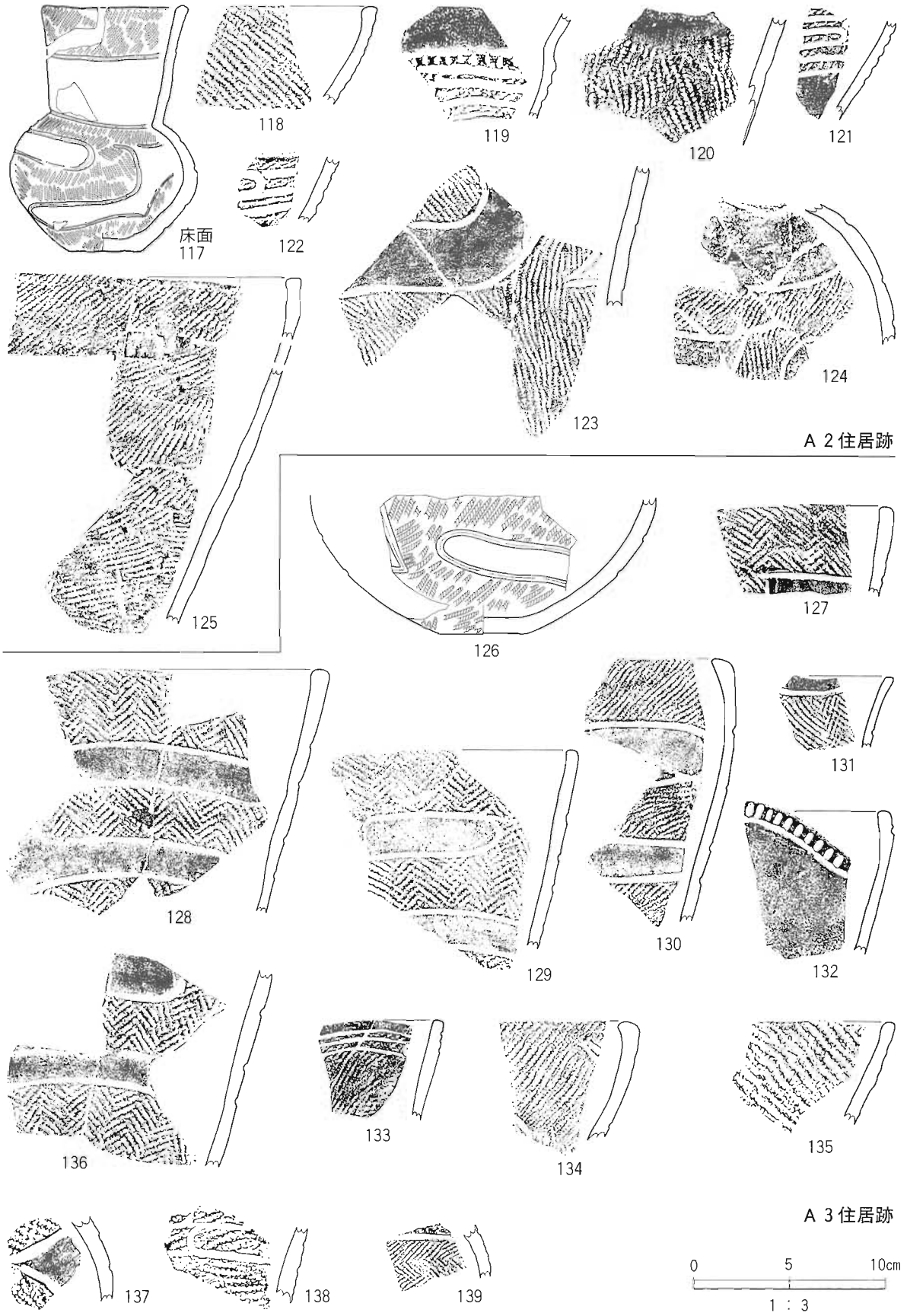


116
（S＝½）

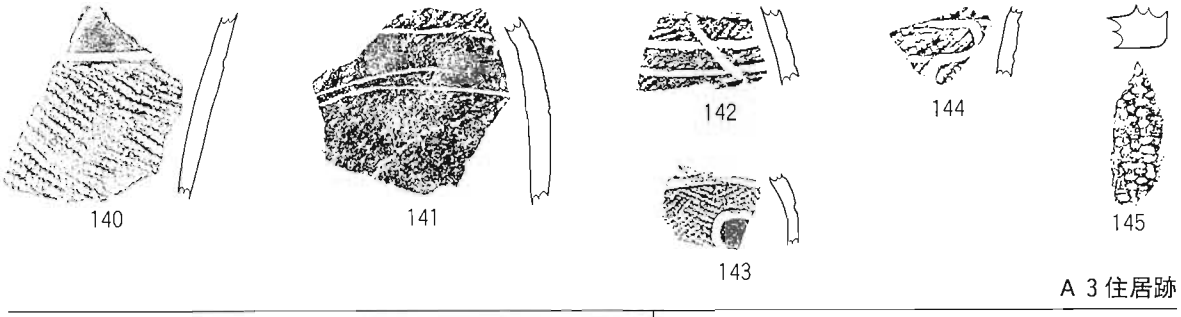
0　5　10cm

1：3

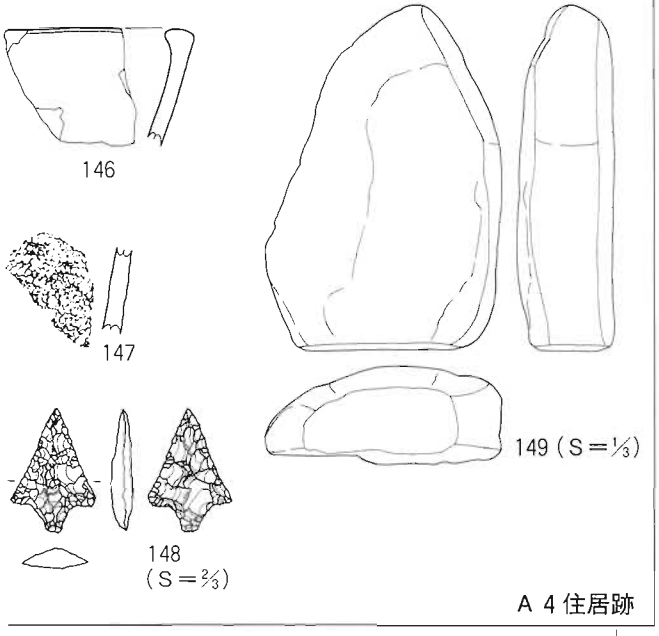
第62図　A１住居跡出土遺物（７）



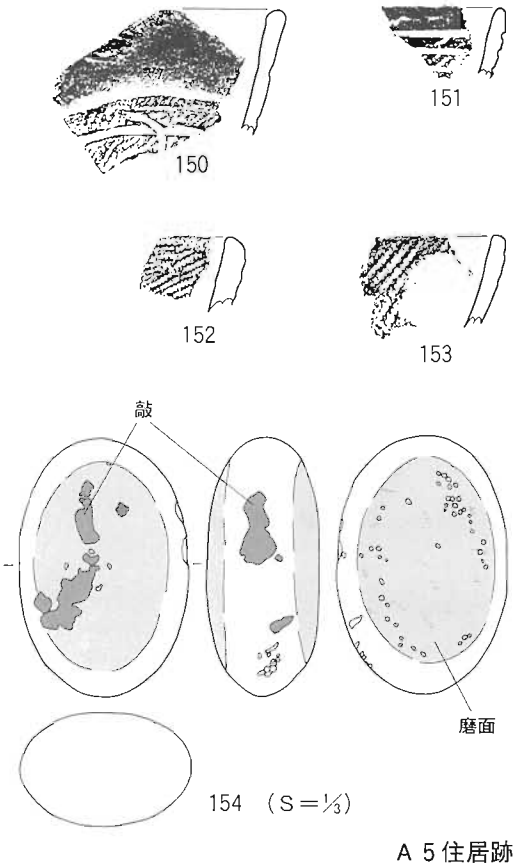
第63図　A 2・A 3 住居跡出土遺物



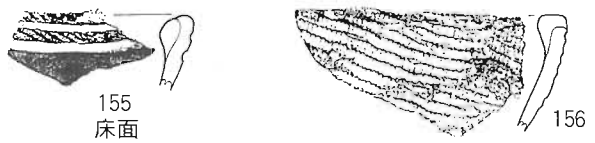
A 3 住居跡

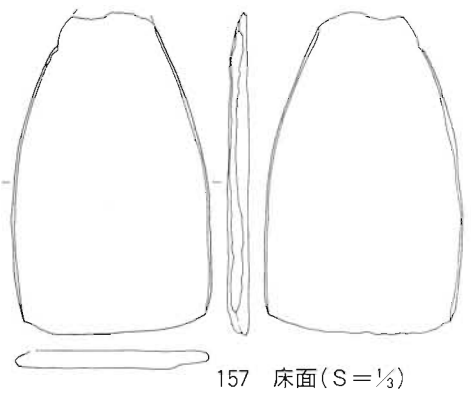


A 4 住居跡

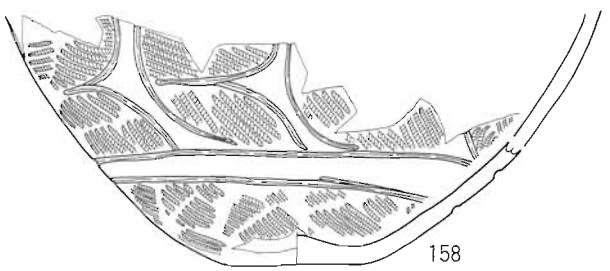


A 5 住居跡





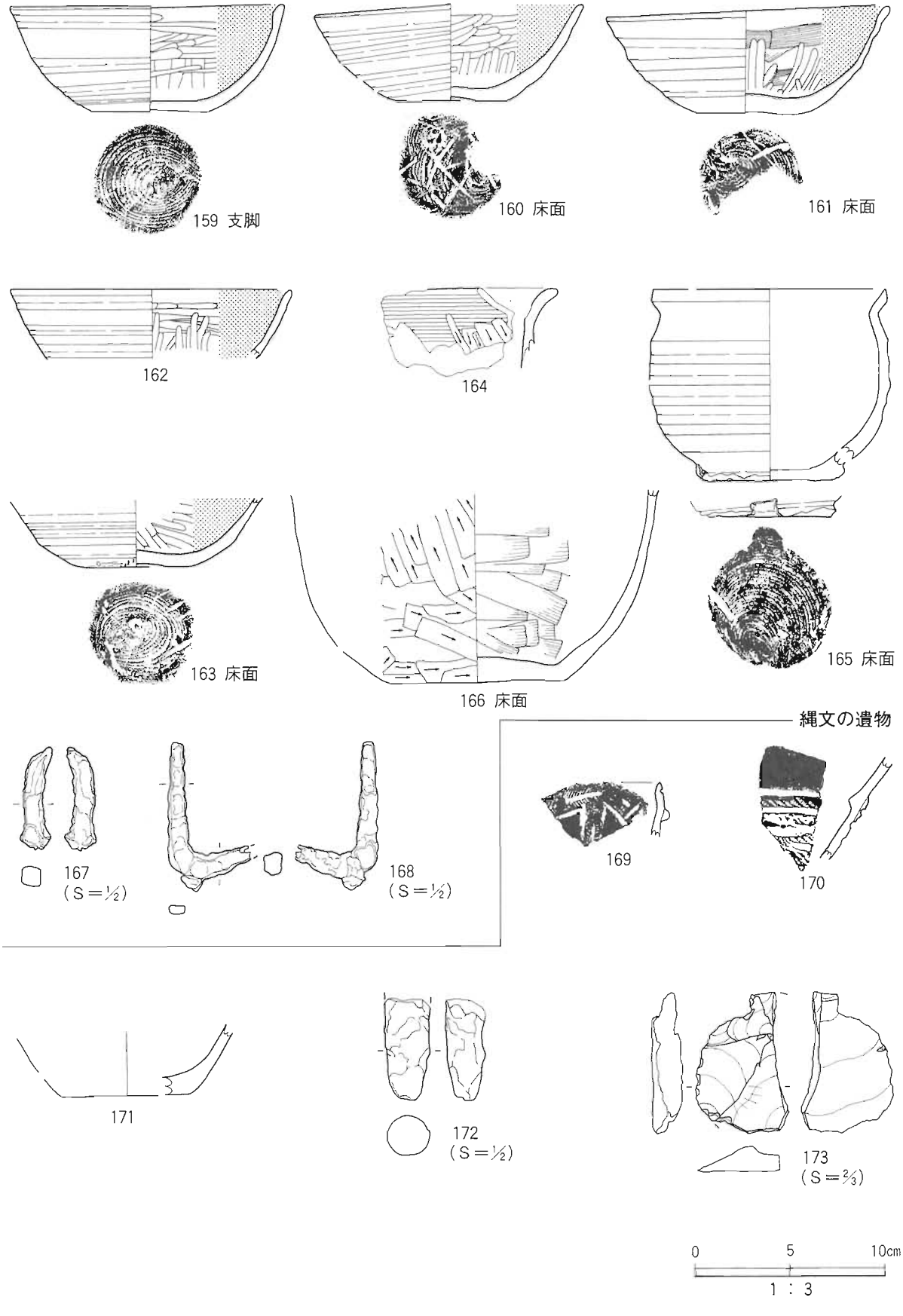
B 1 住居跡



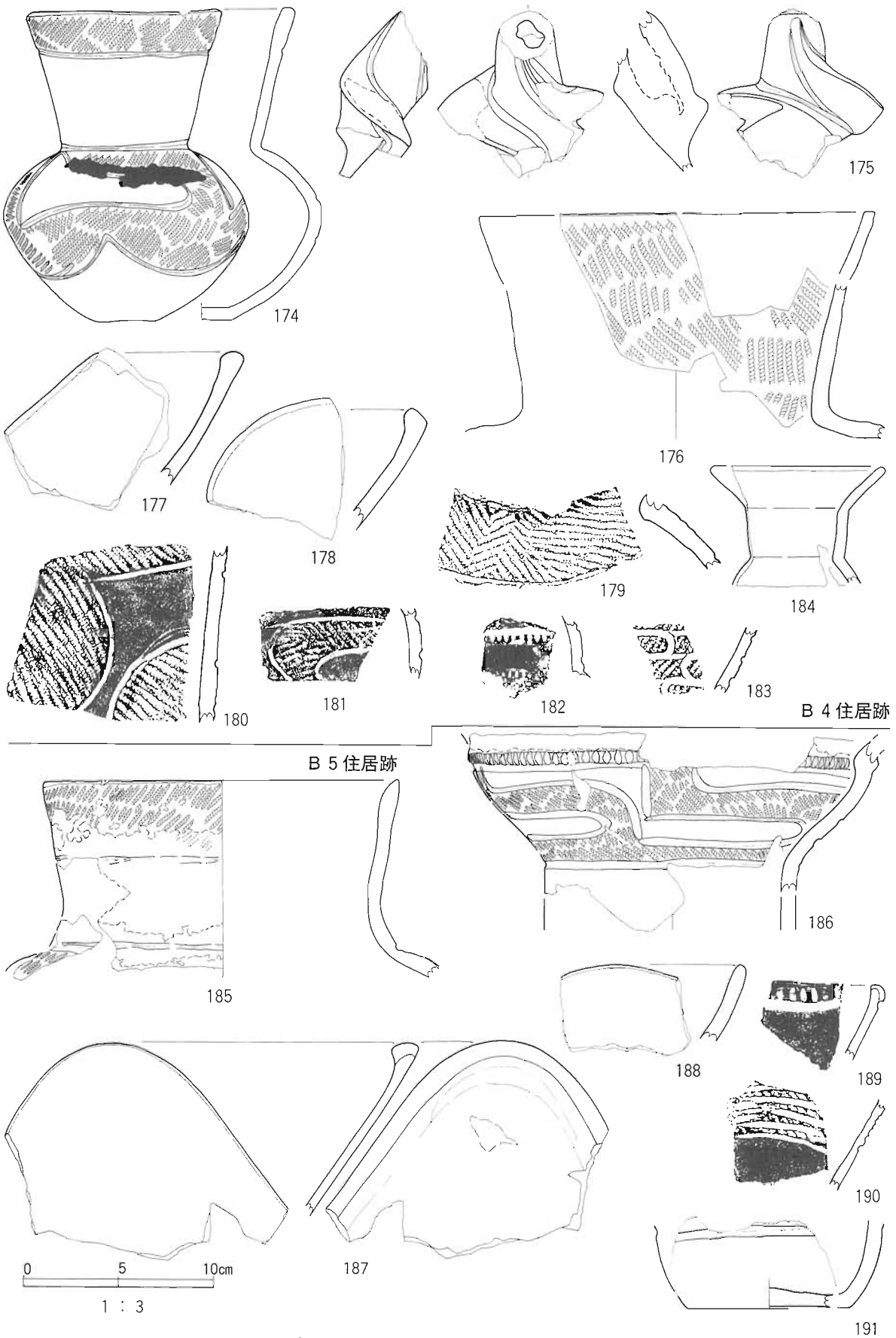
B 2 住居跡埋設土器

0 5 10cm
1 : 3

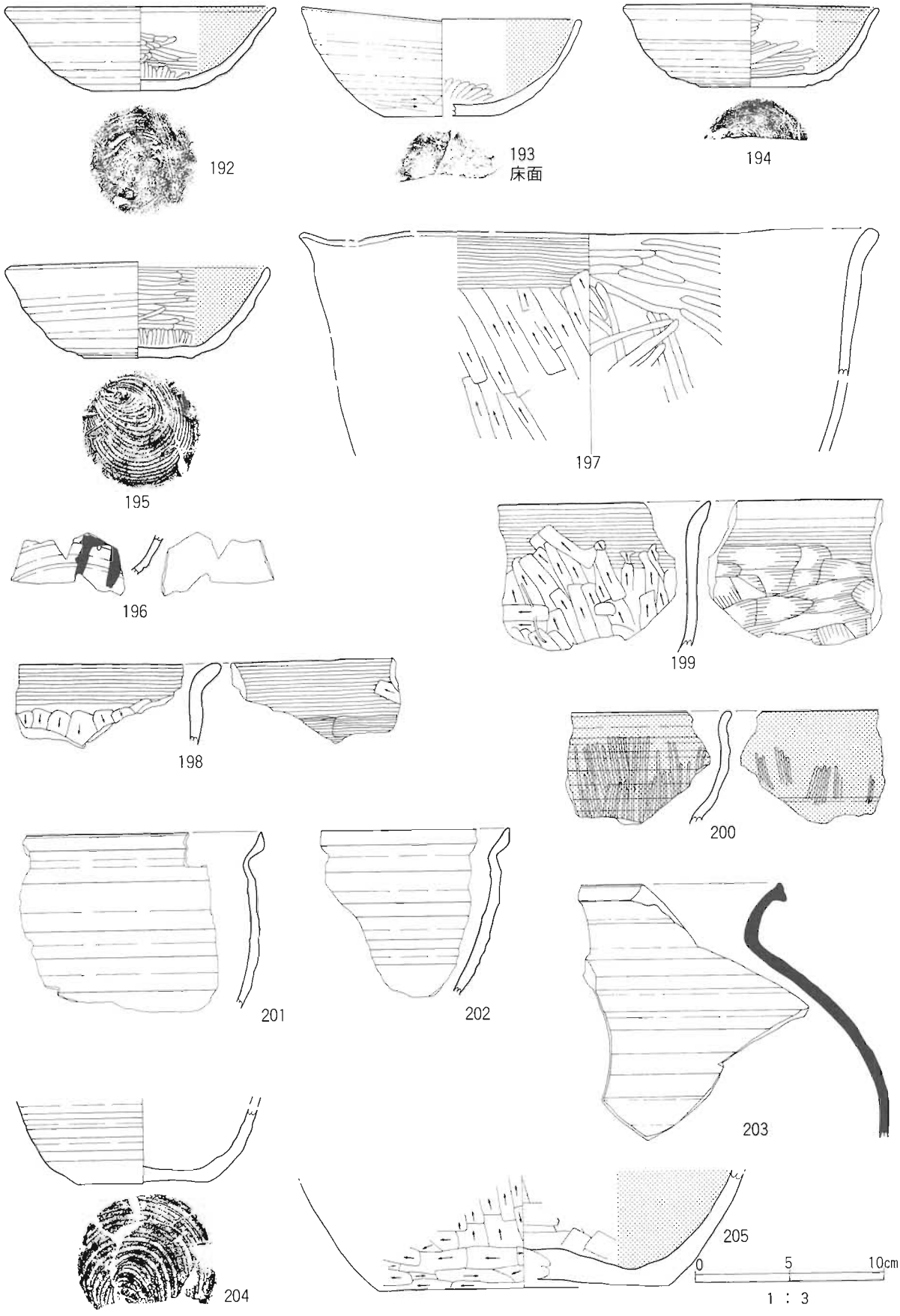
第64図 A 3・A 4・A 5・B 1・B 2 住居跡出土遺物



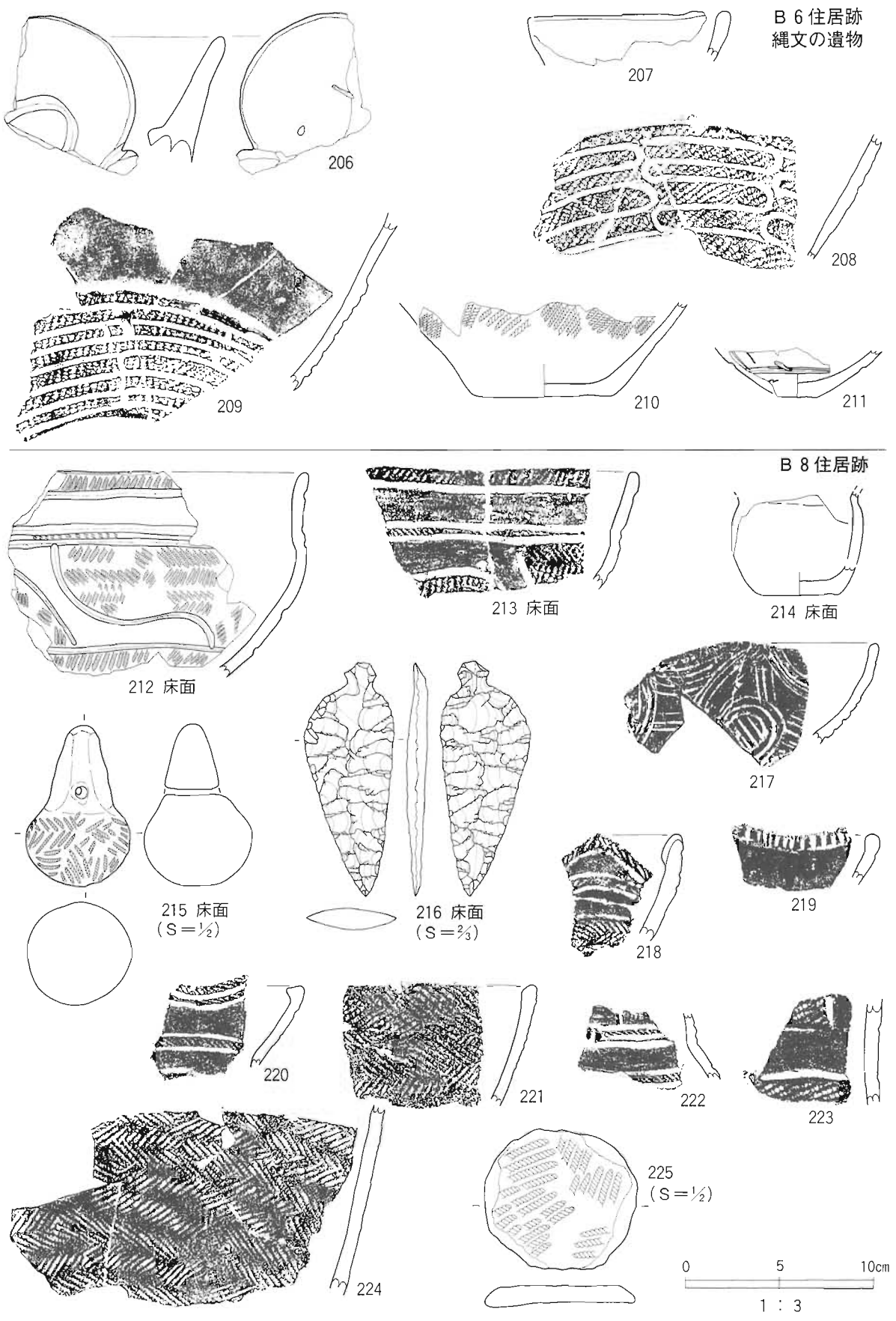
第65図　B 3 住居跡出土遺物



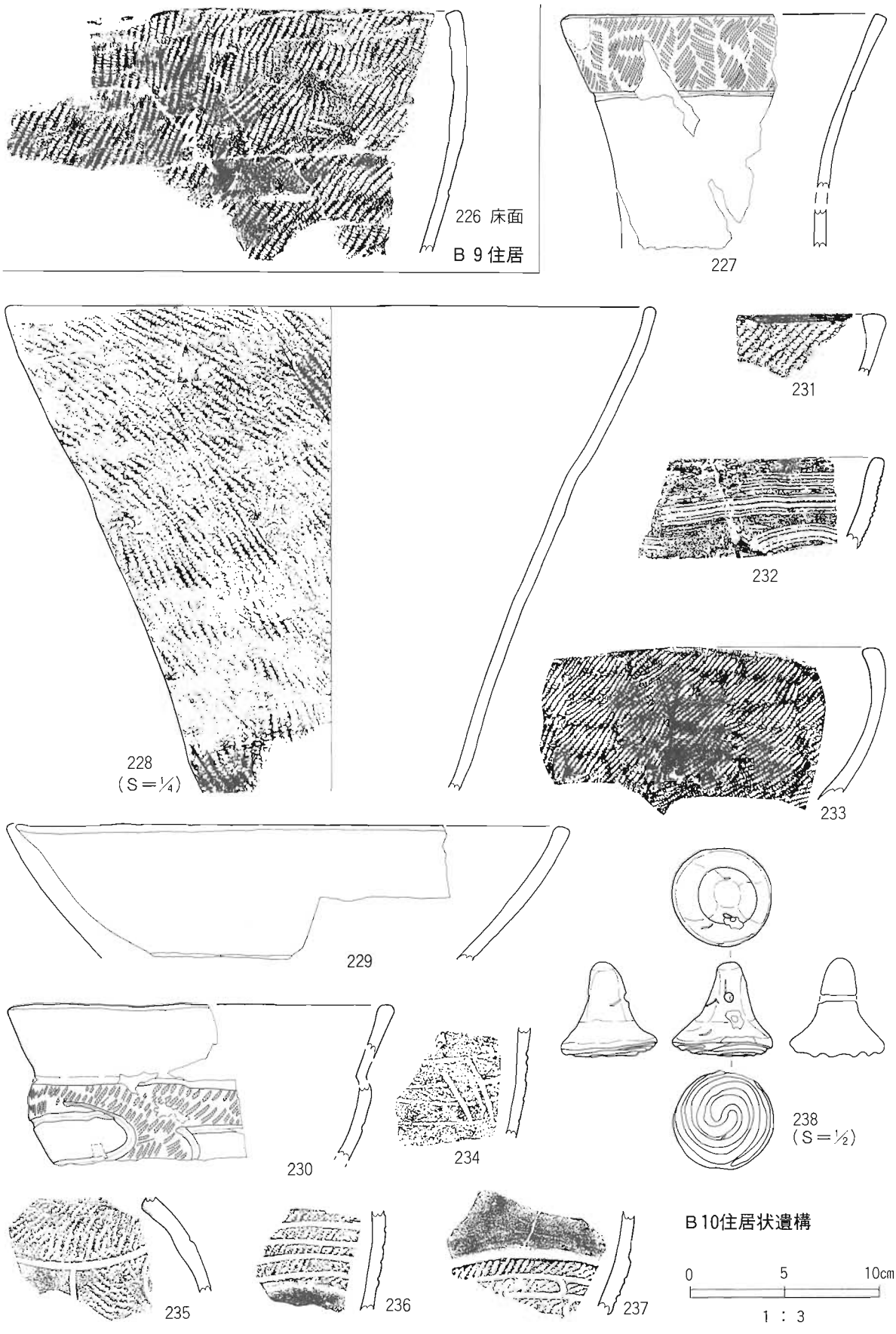
第66図　B 4 ・ B 5 住居跡出土遺物



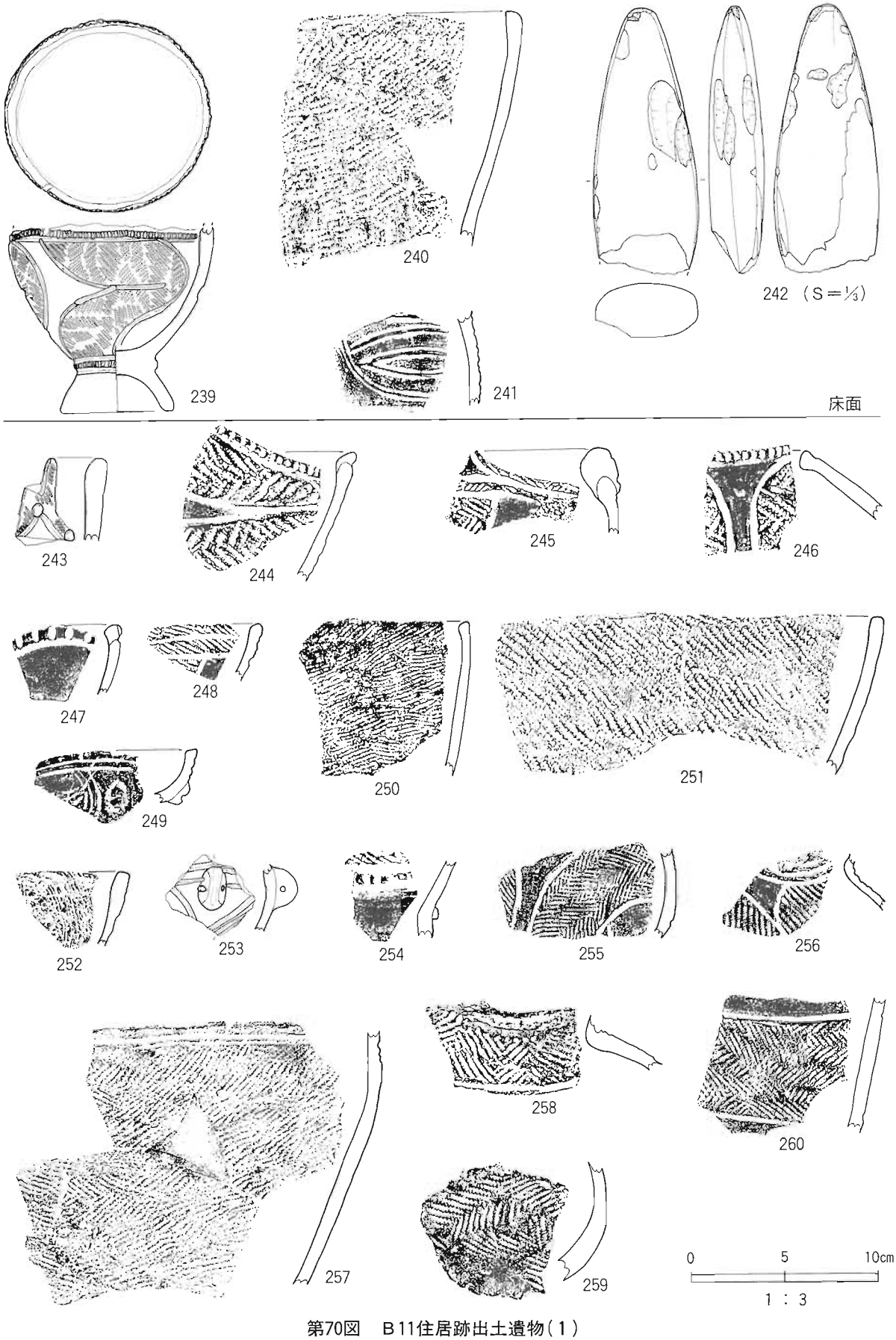
第67図　B 6 住居跡出土遺物（1）



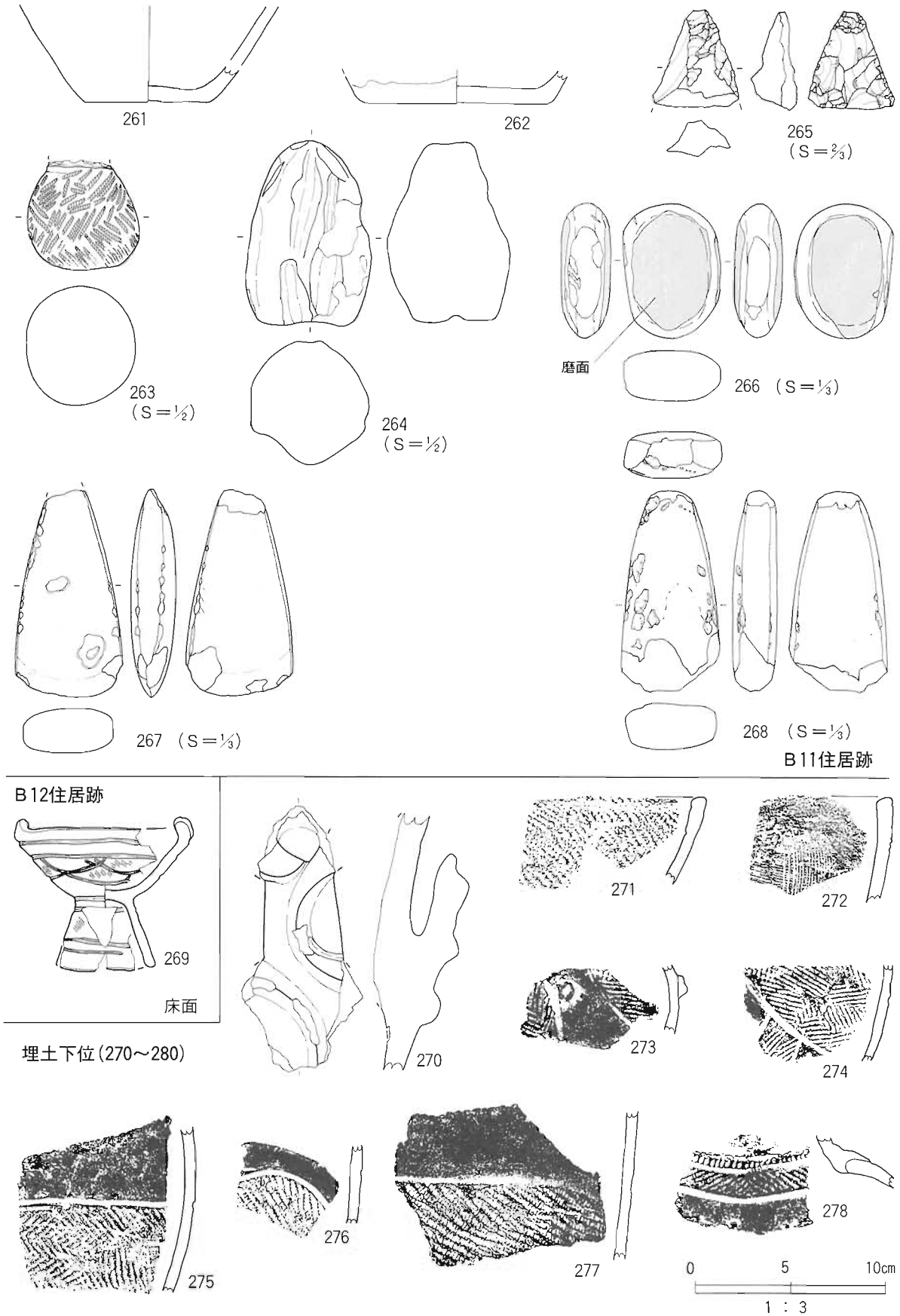
第68図　B 6 住居跡出土遺物(2)・B 8 住居跡出土遺物



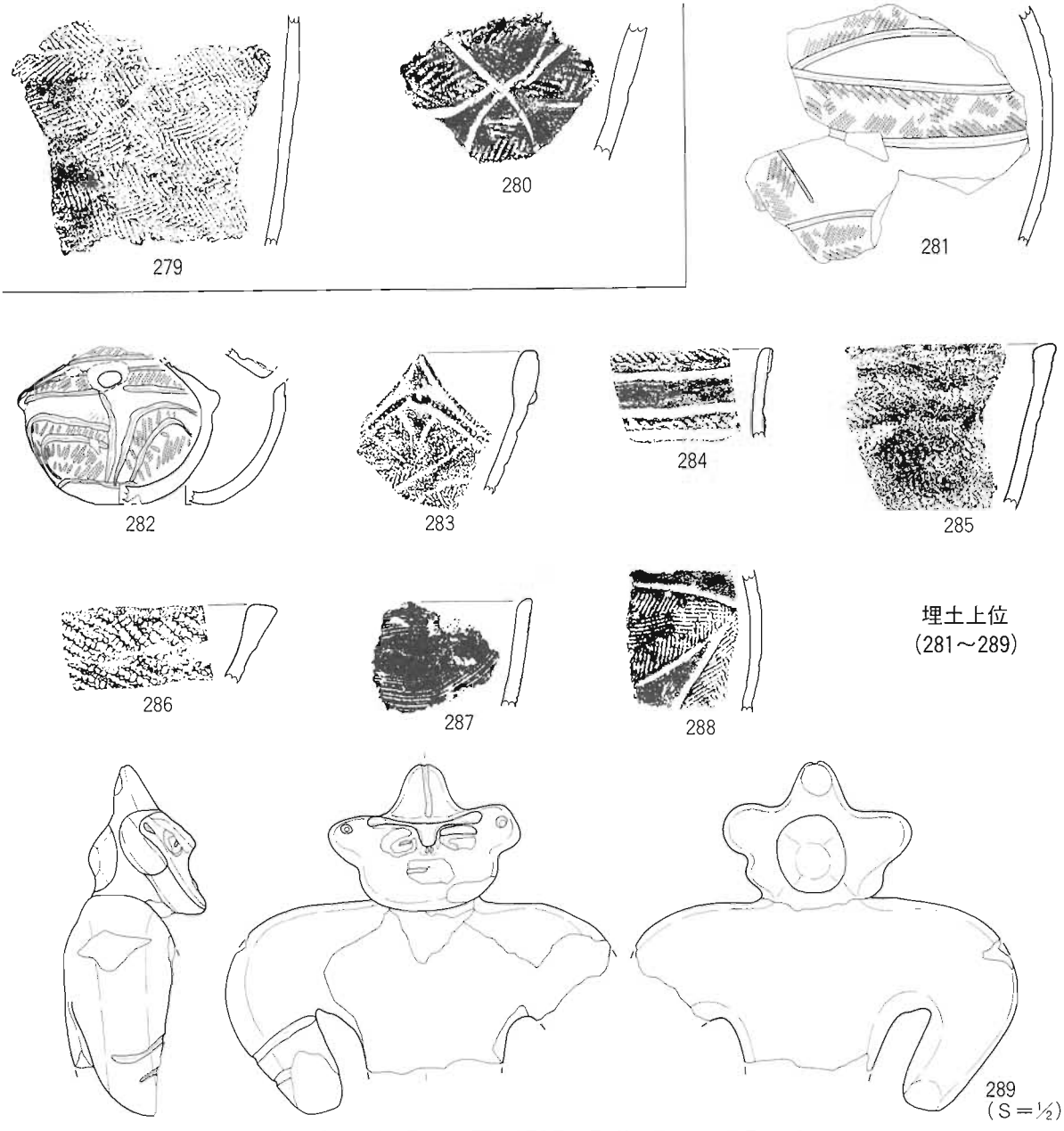
第69図　B 9 住居跡・B10住居状遺構出土遺物



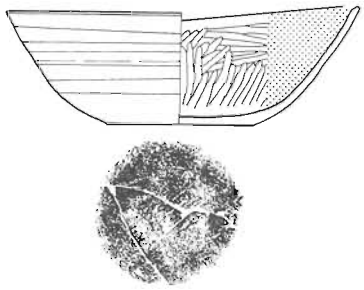
第70図　B11住居跡出土遺物（1）



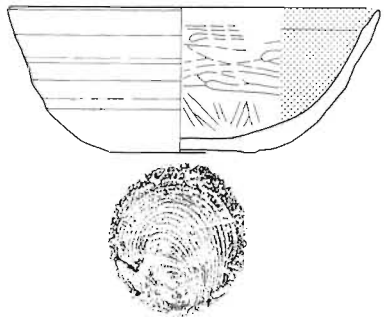
第71図　B11住居跡出土遺物(2)・B12住居跡出土遺物(1)



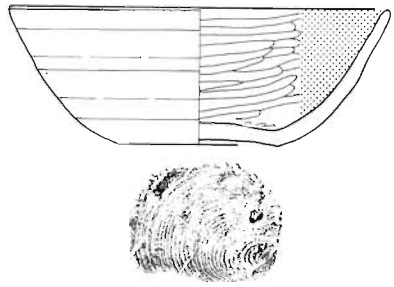
第72図　B12住居跡出土遺物(2)



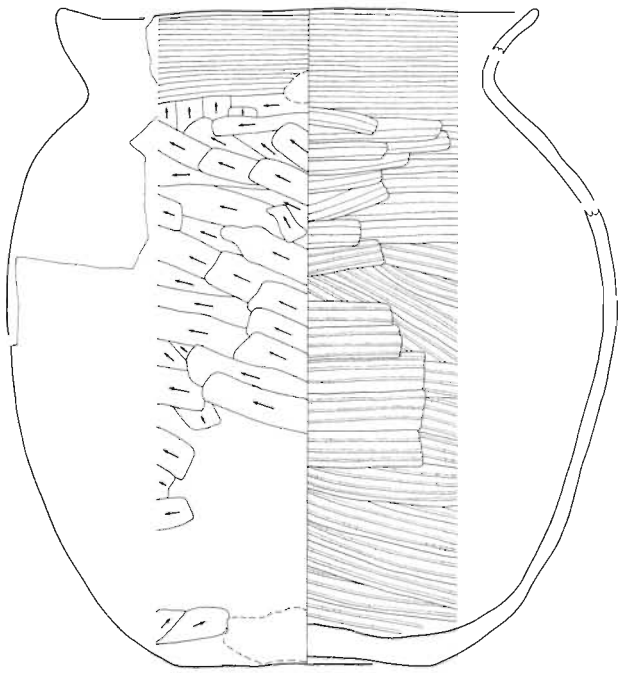
295



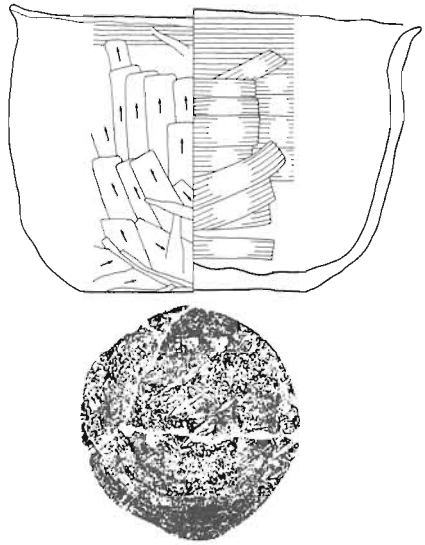
296



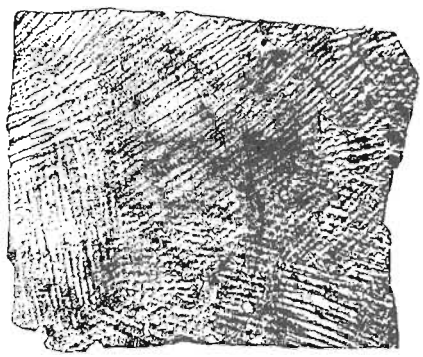
297



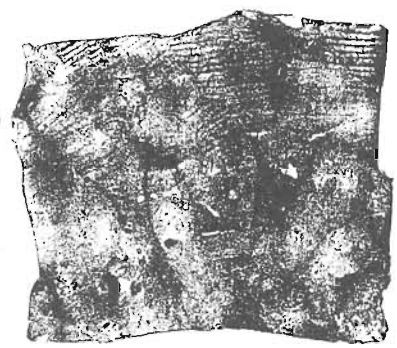
298



299 支脚



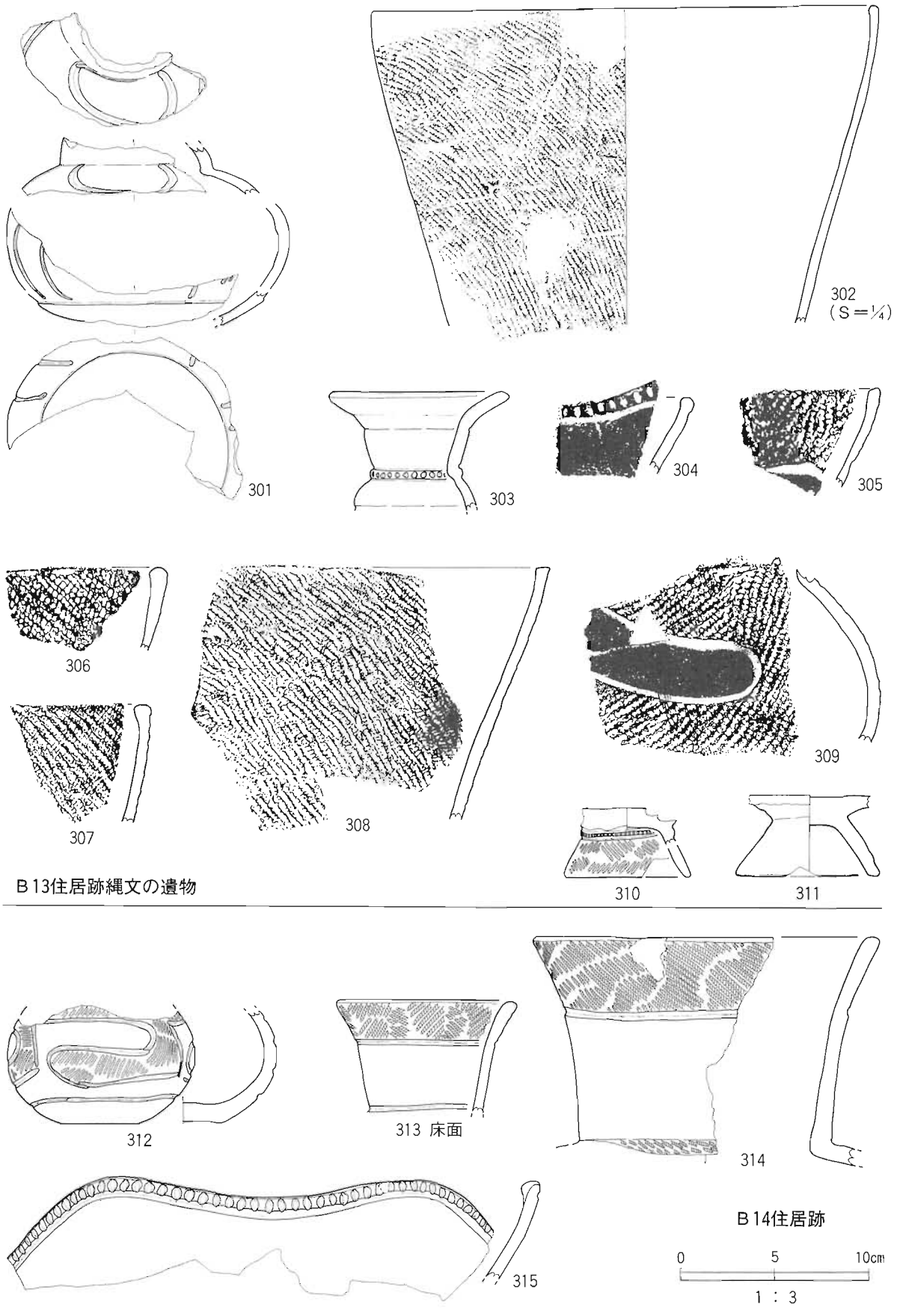
300 床面



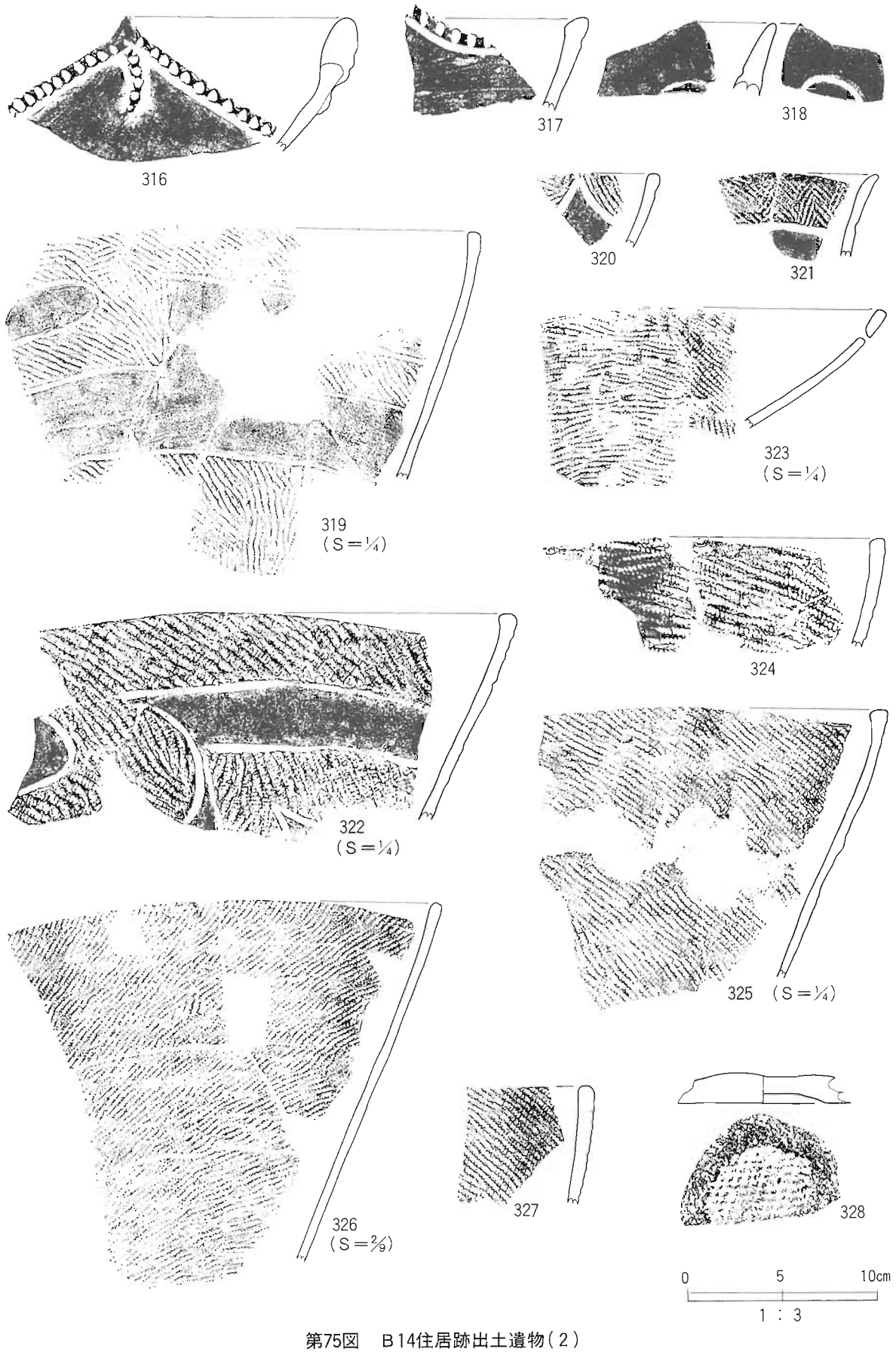
0 5 10cm

1 : 3

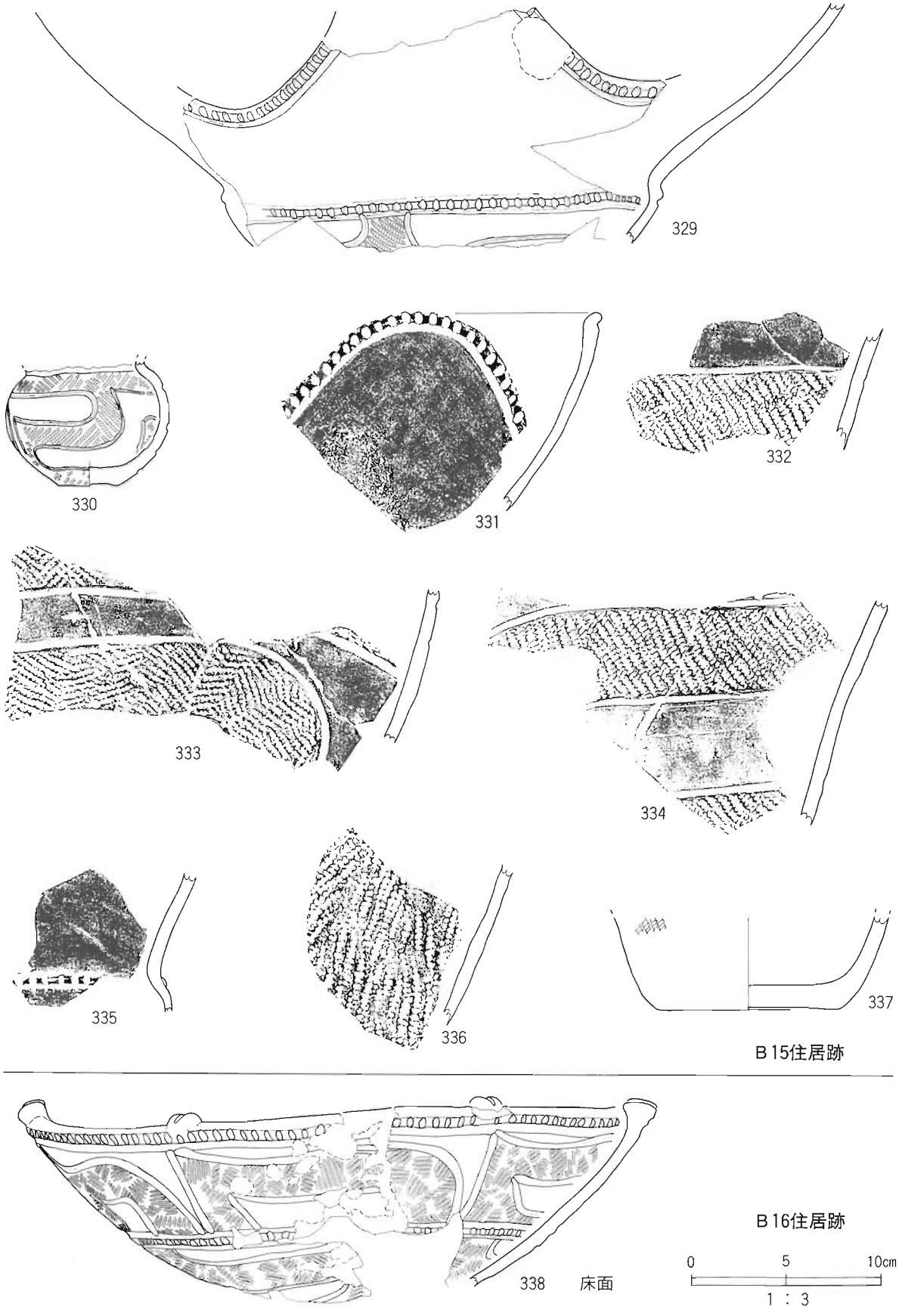
第73図　B13住居跡出土遺物（1）



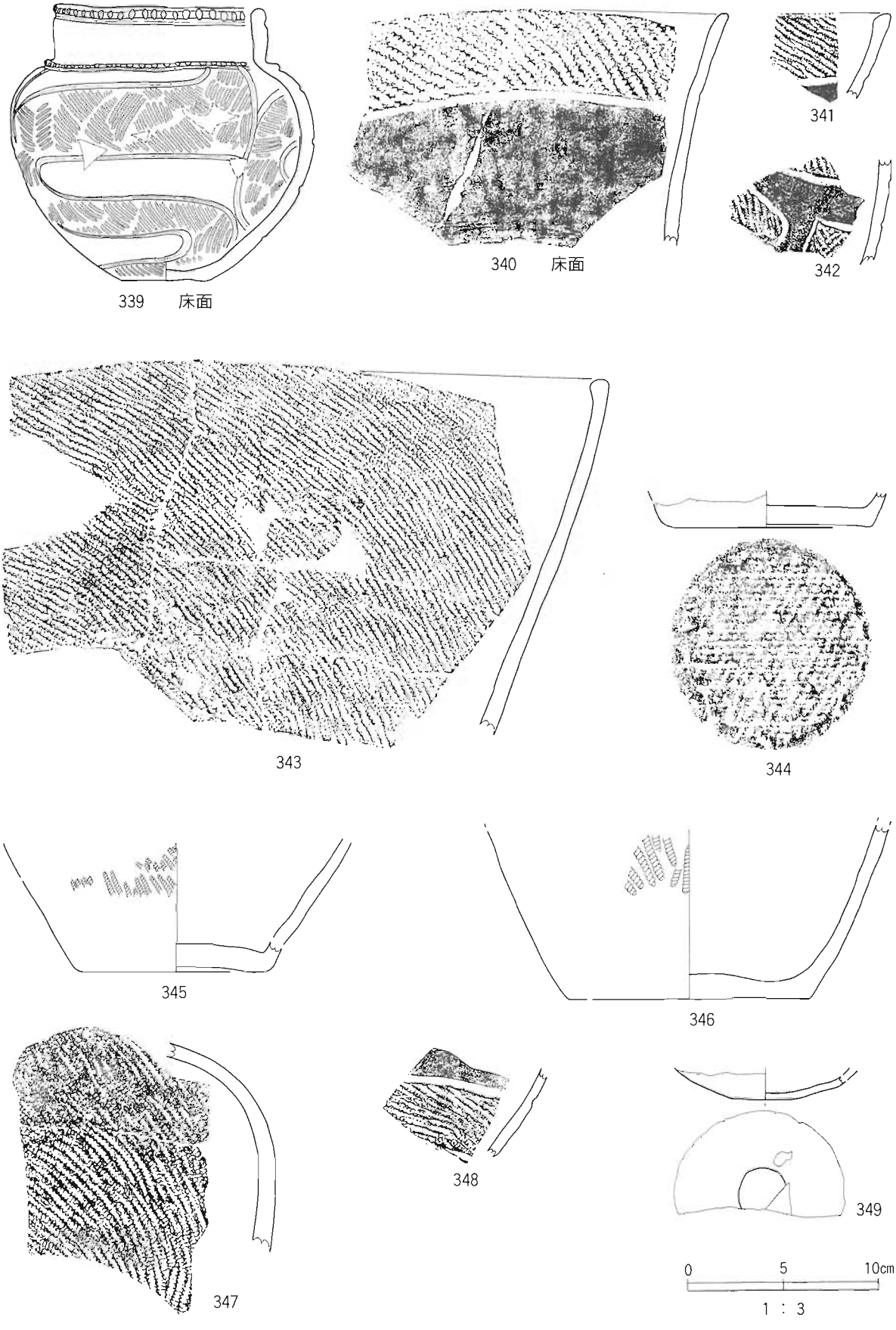
第74図　B13住居跡出土遺物(2)・B14住居跡出土遺物(1)



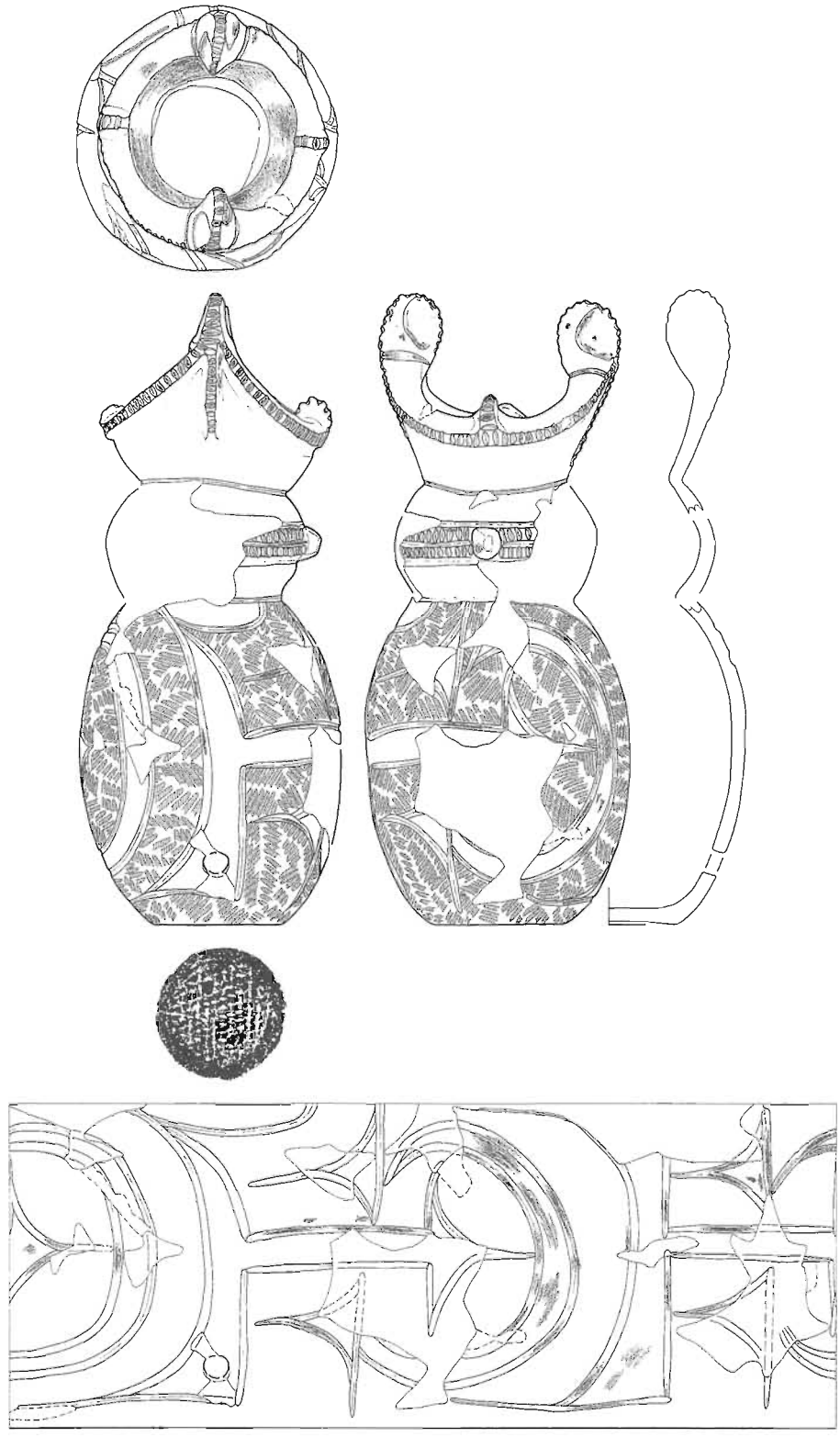
第75図　B14住居跡出土遺物(2)



第76図　B15・16住居跡出土遺物（1）



第77図　B15・16住居跡出土遺物(2)



350

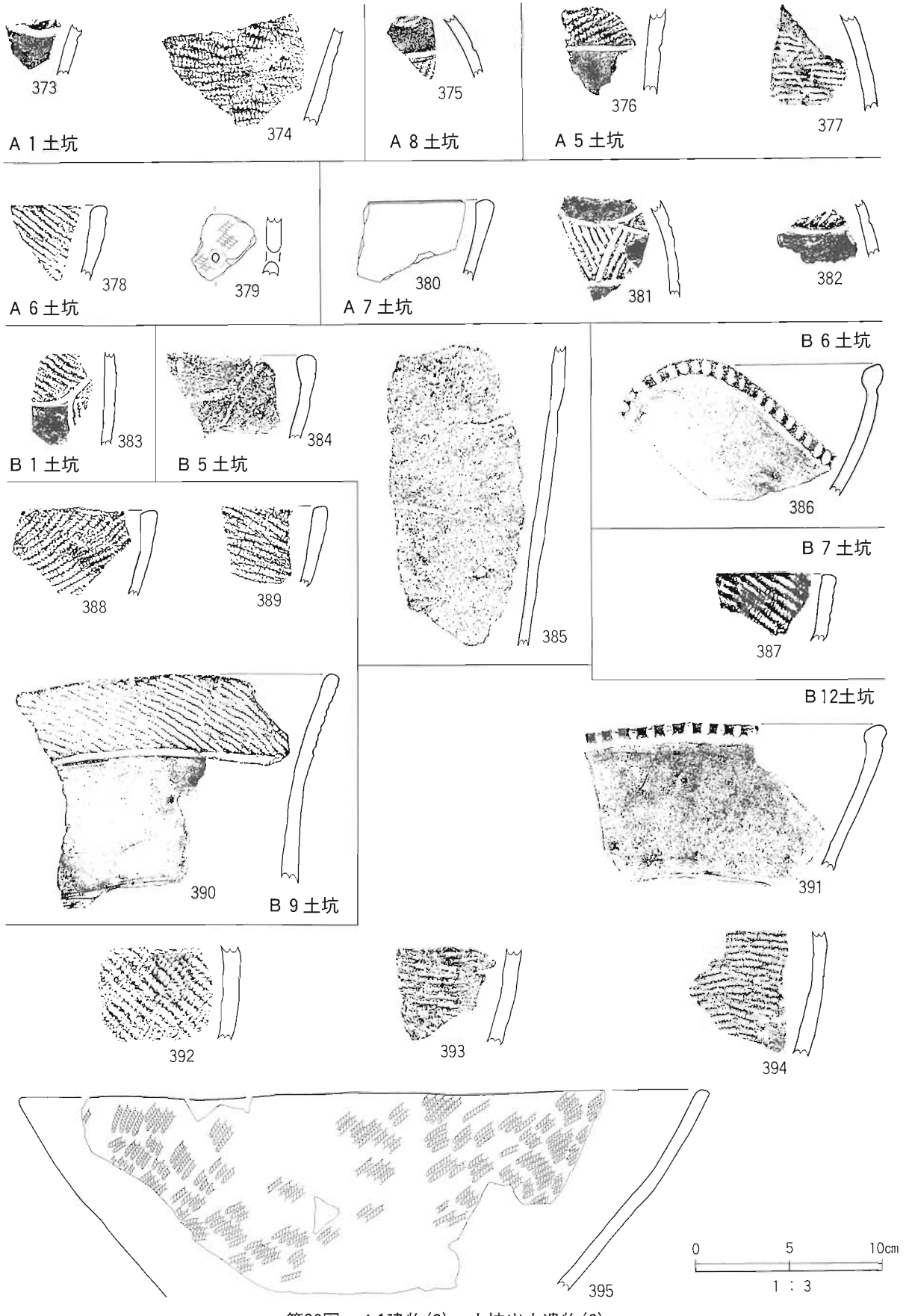
※アミかけ部は朱塗り部分

0　5　10cm

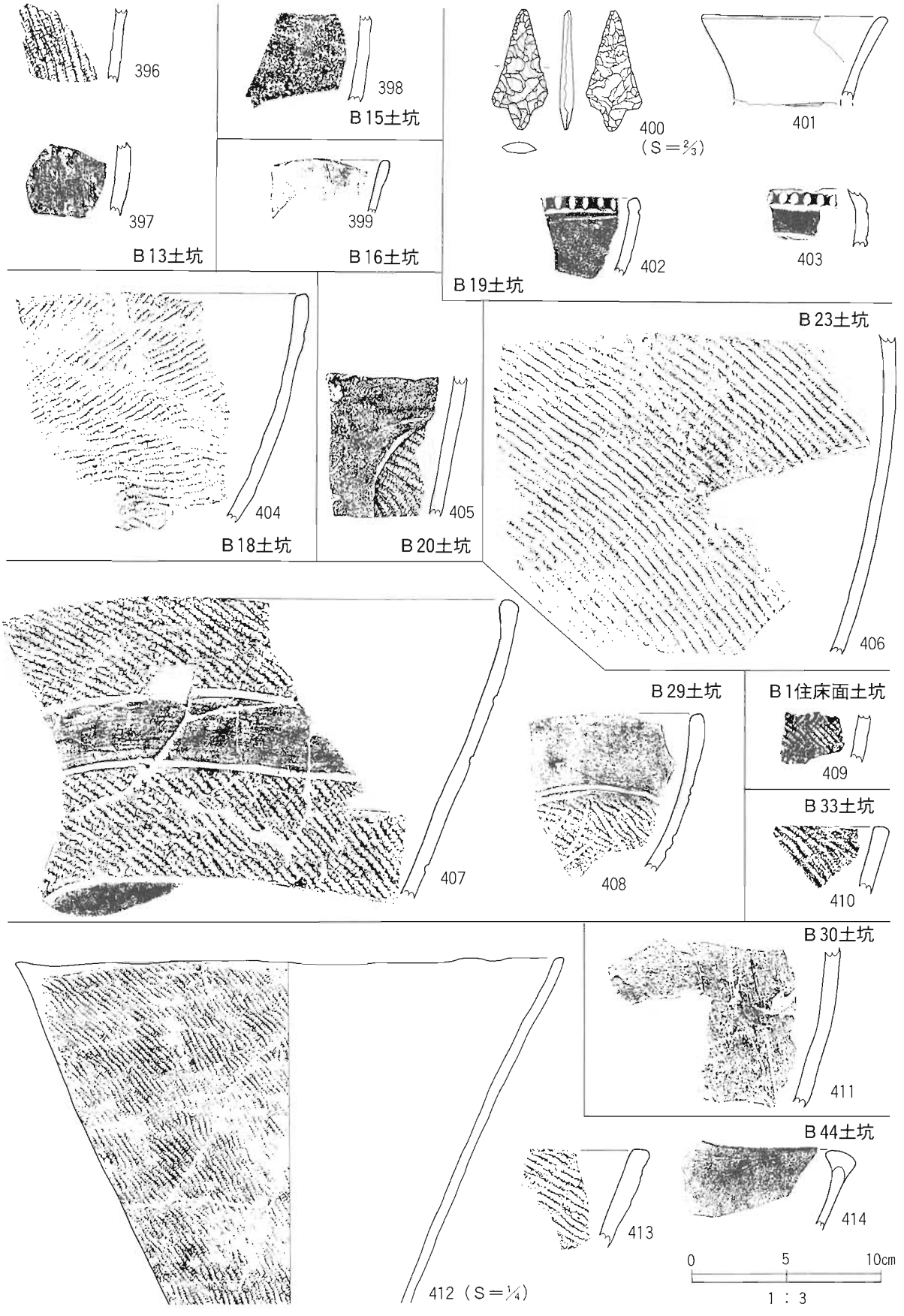
1 : 3

第78図　B16住居跡出土遺物

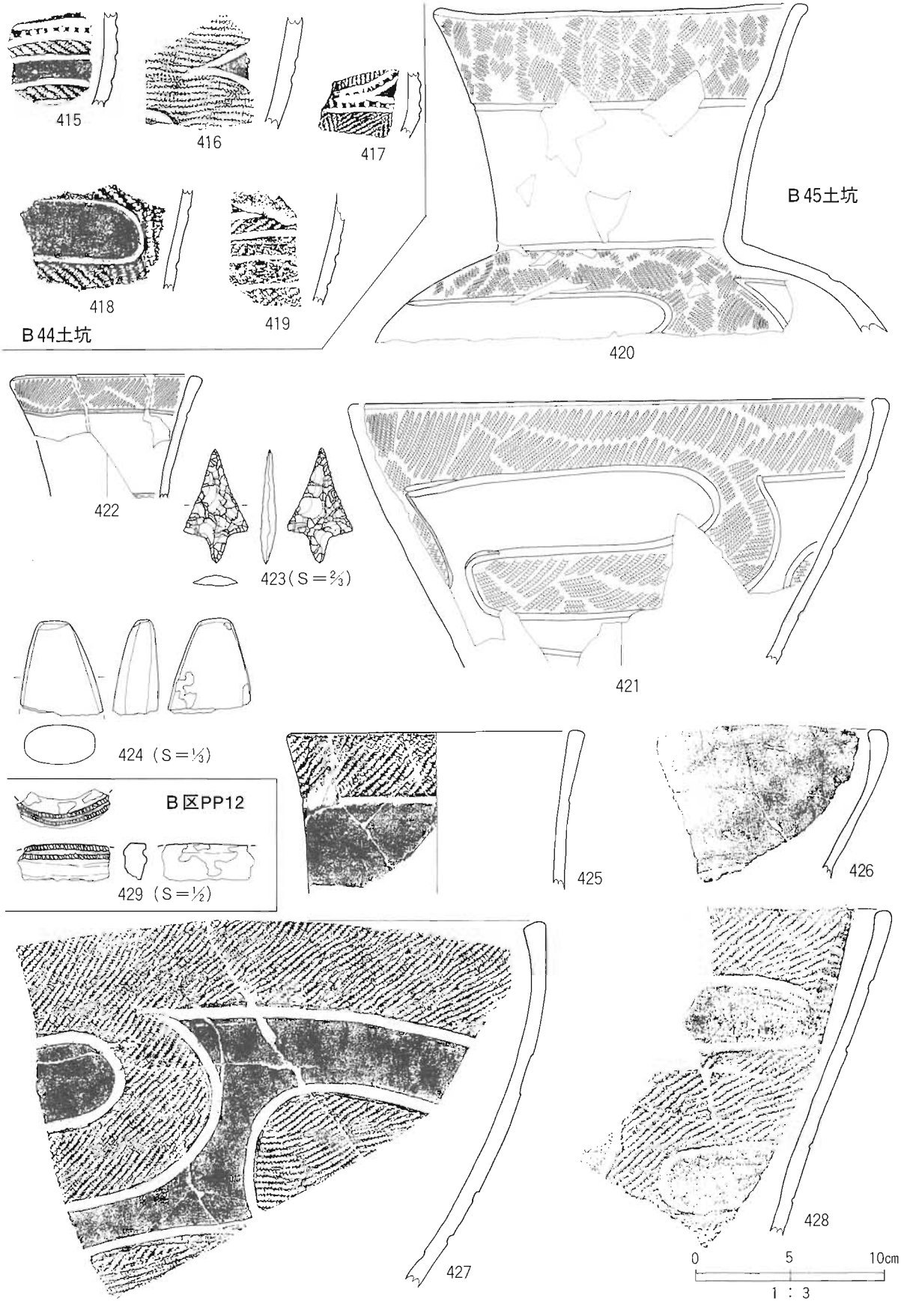
第79図　B17・B18・B19・B20住居跡、A1建物(1)・土坑出土遺物(1)



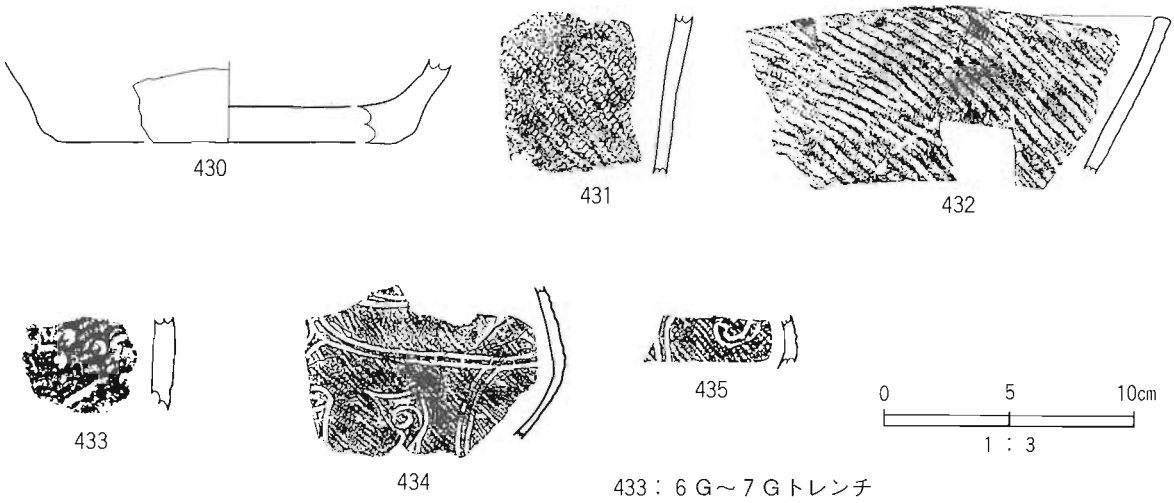
第80図　A1建物(2)・土坑出土遺物(2)



第81図　土坑出土遺物(3)

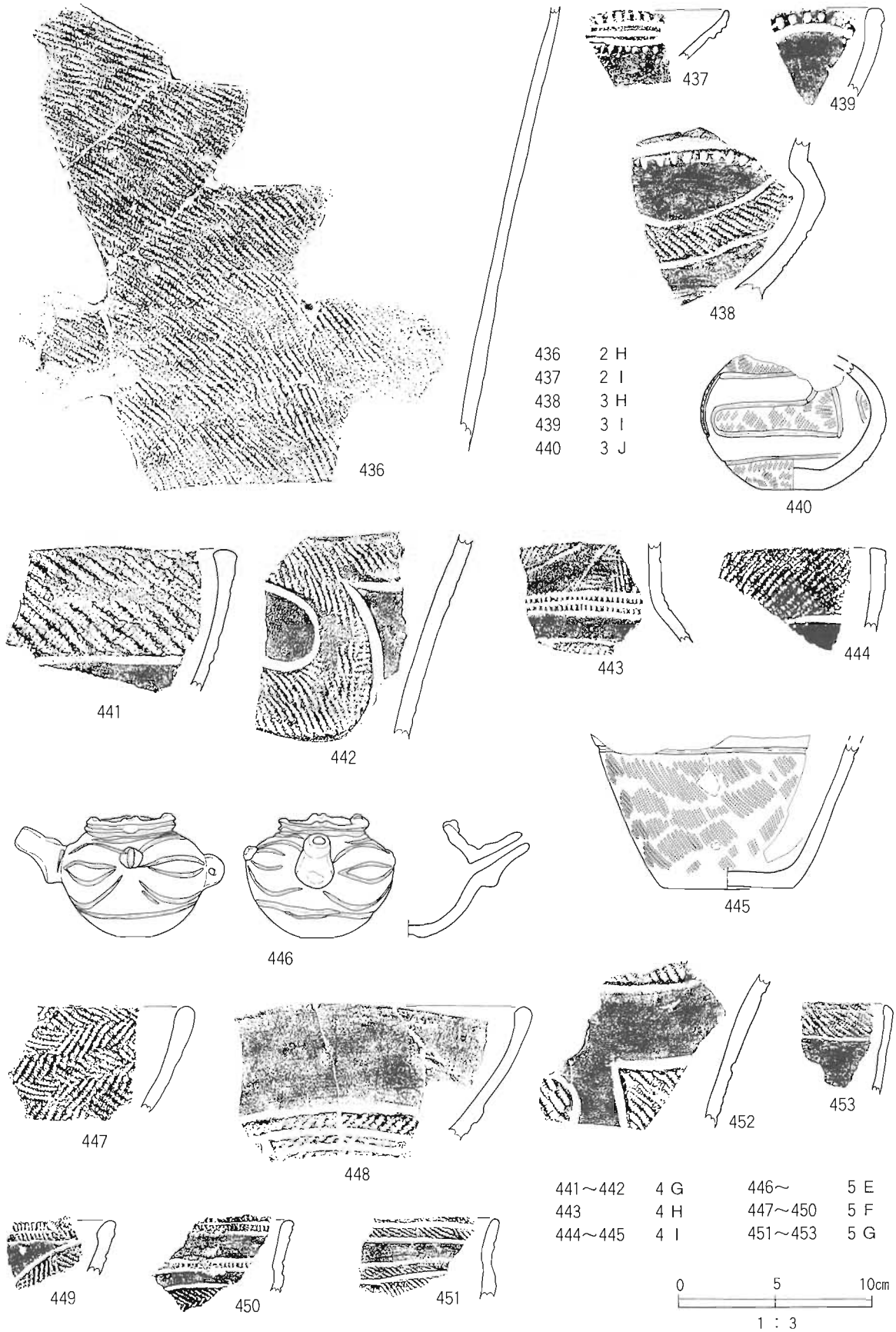


第82図　土坑出土遺物(4)

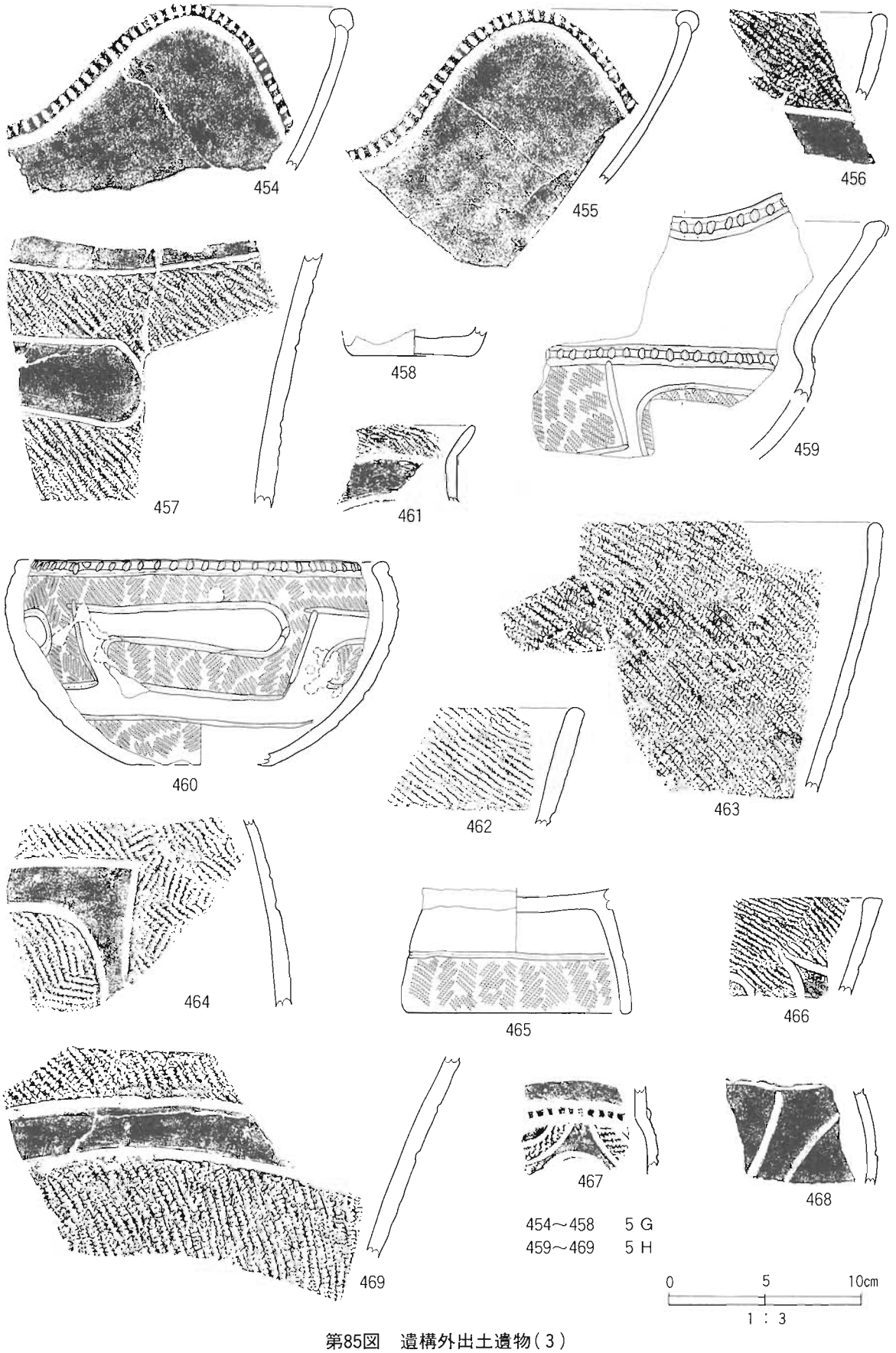


433：６Ｇ～７Ｇトレンチ
434：10Ｄ
435：Ａ１配石下位

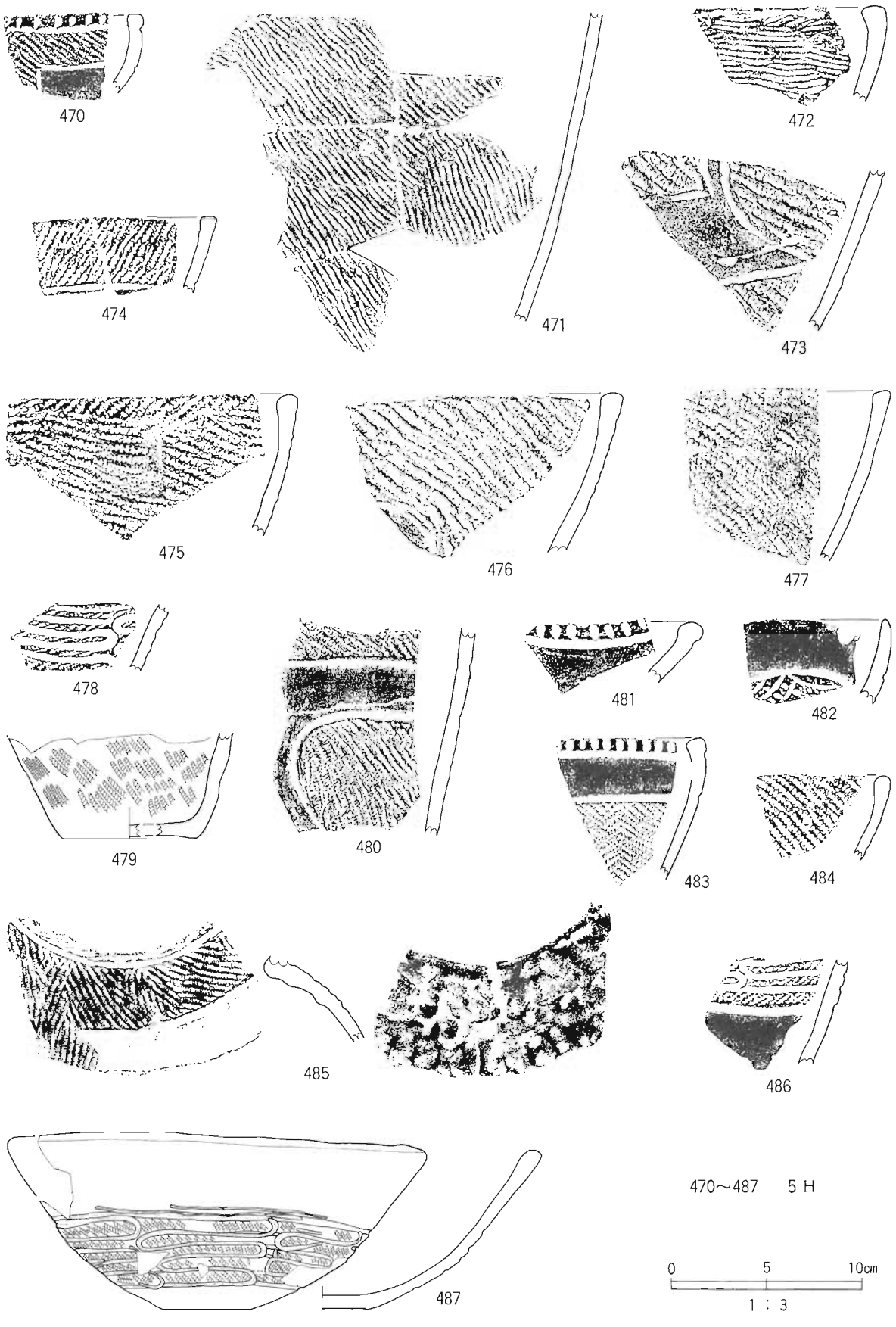
第83図　柱穴出土遺物・遺構外出土遺物（１）



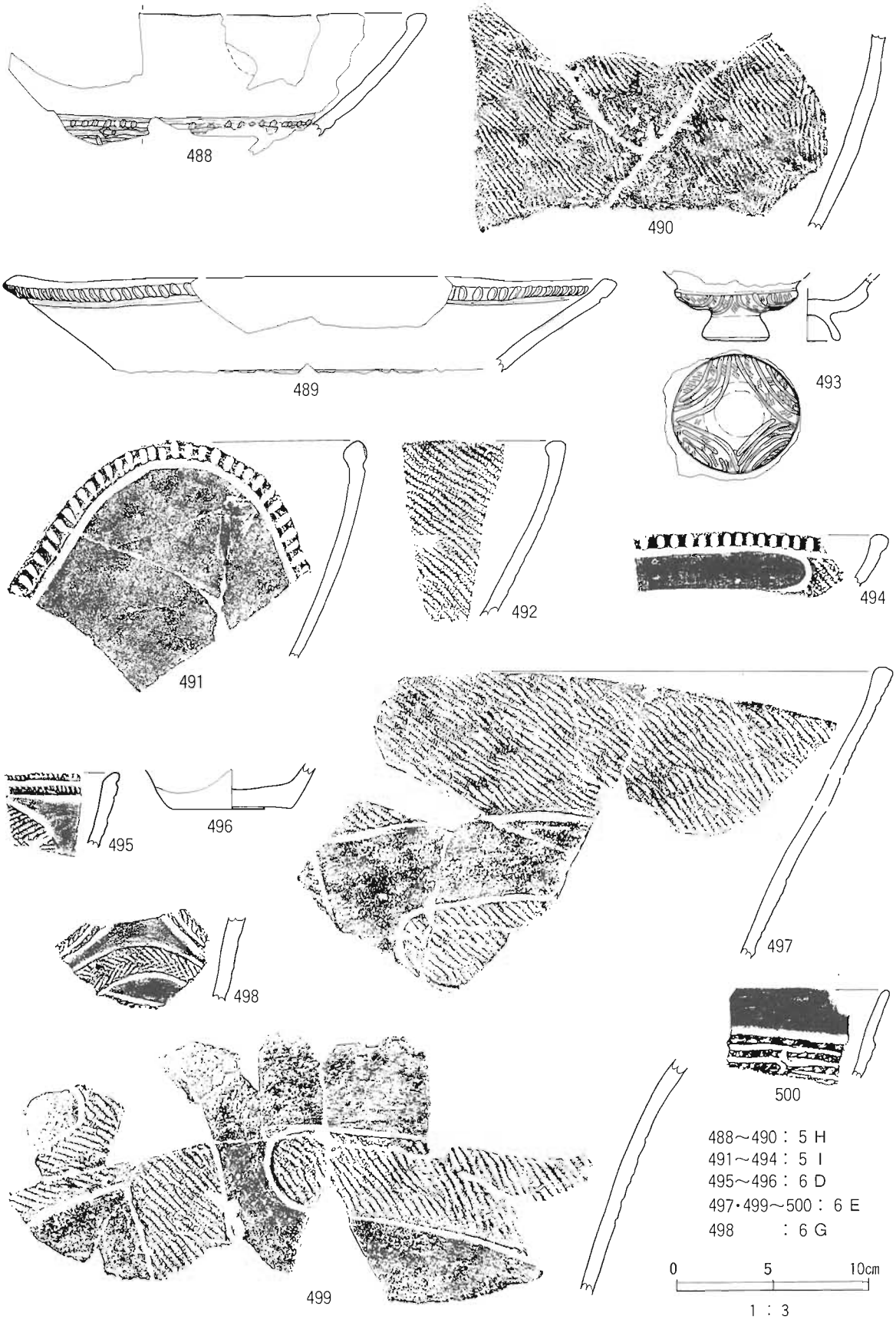
第84図　遺構外出土遺物（２）



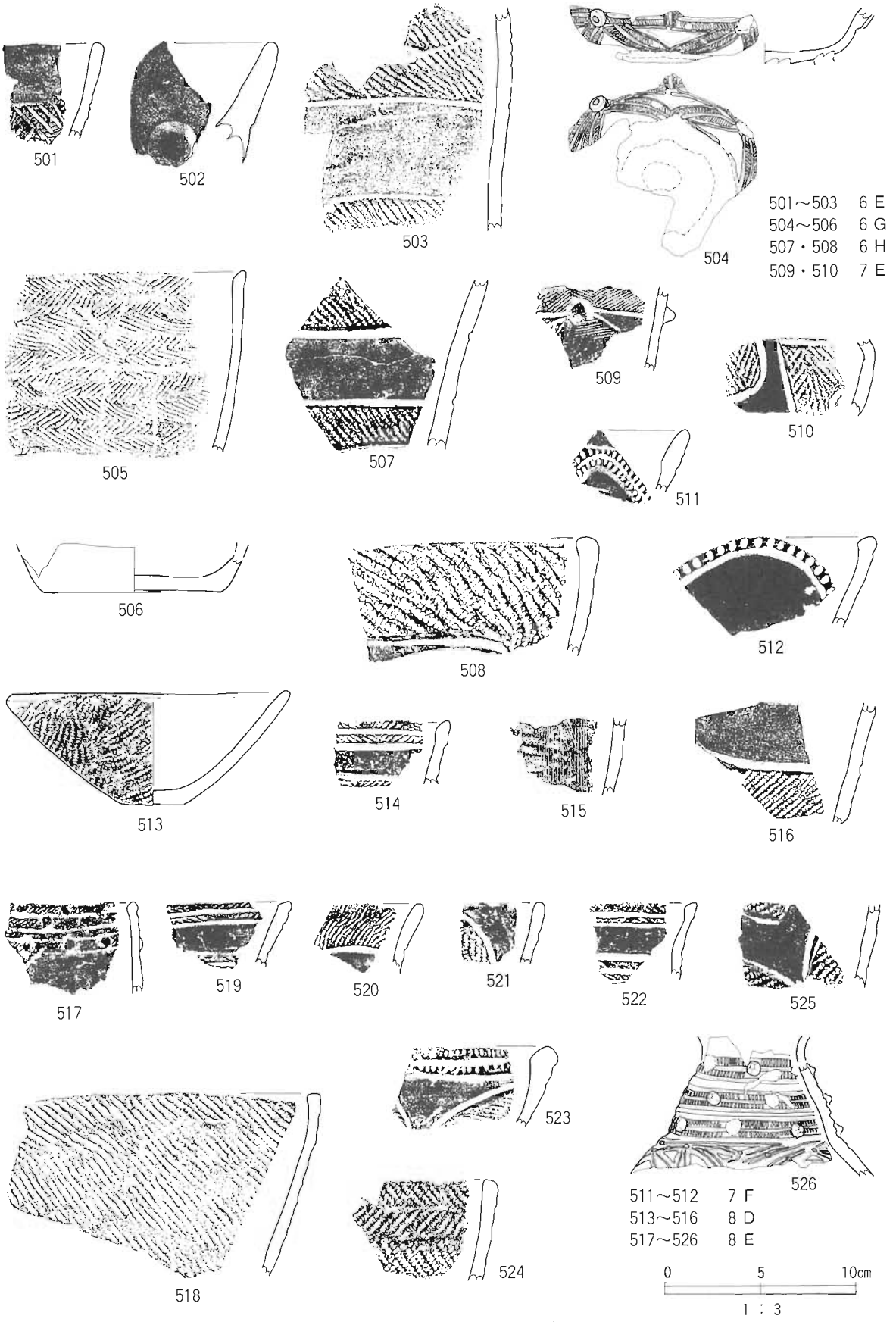
第85図　遺構外出土遺物（3）



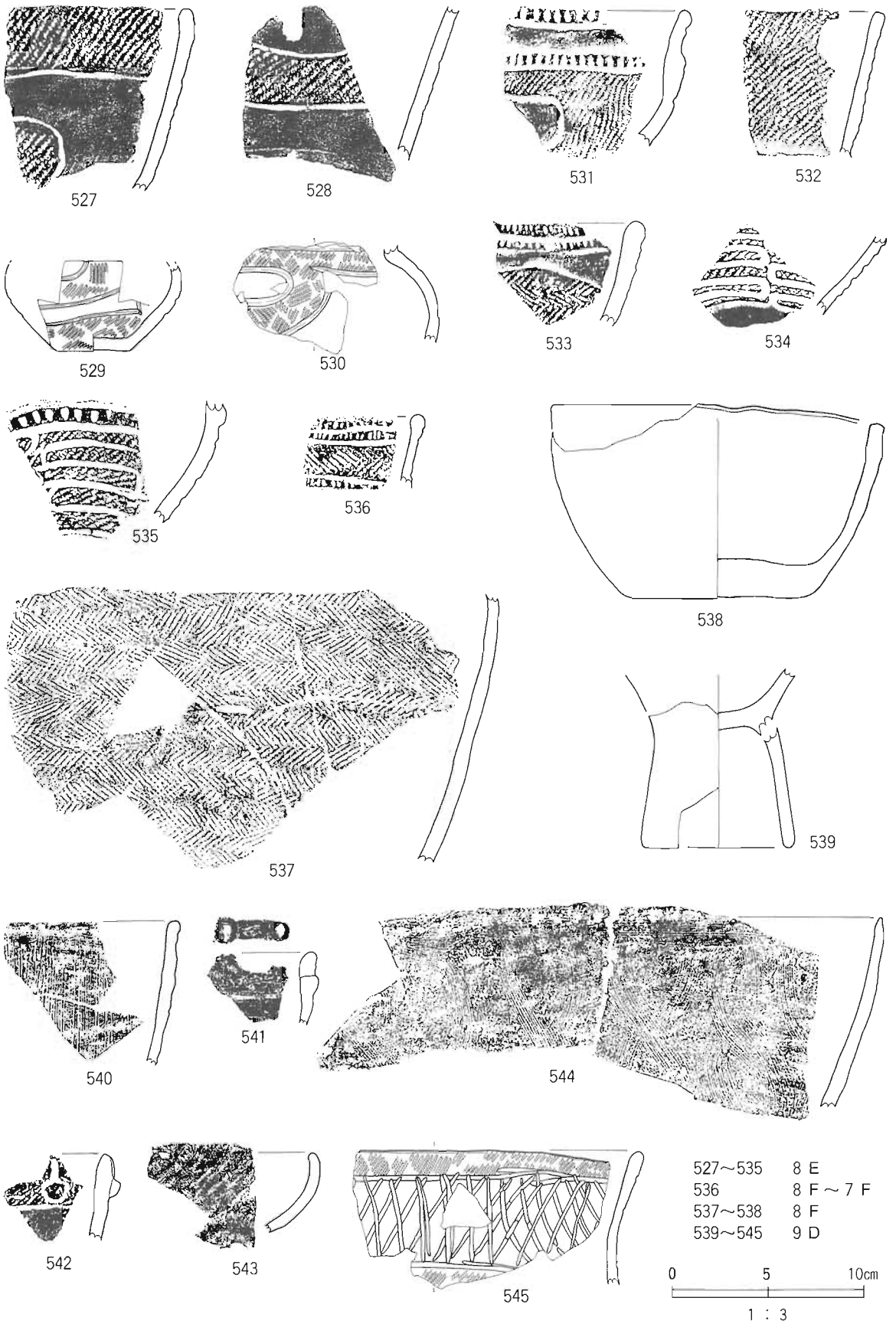
第86図　遺構外出土遺物（4）



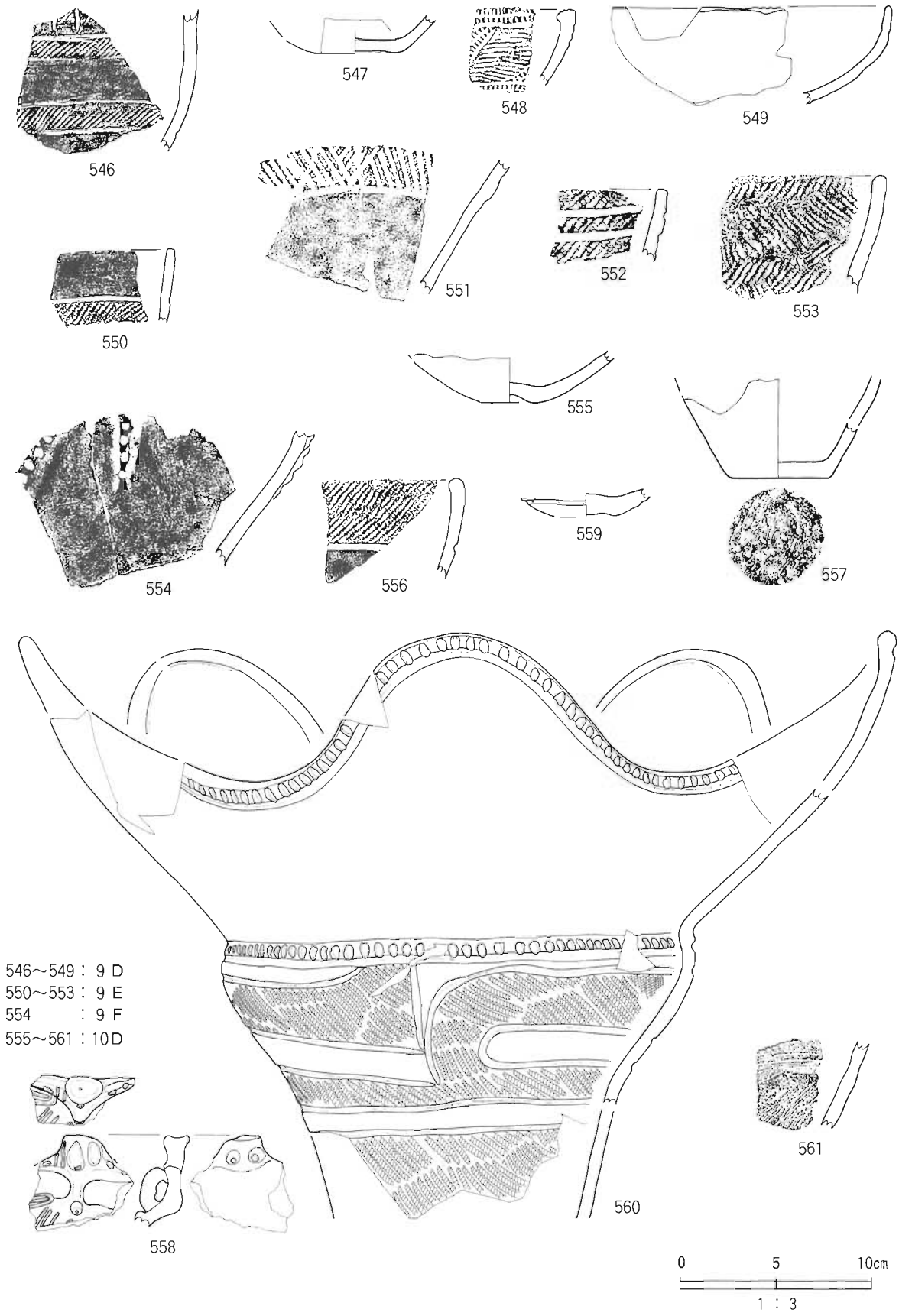
第87図　遺構外出土遺物（5）



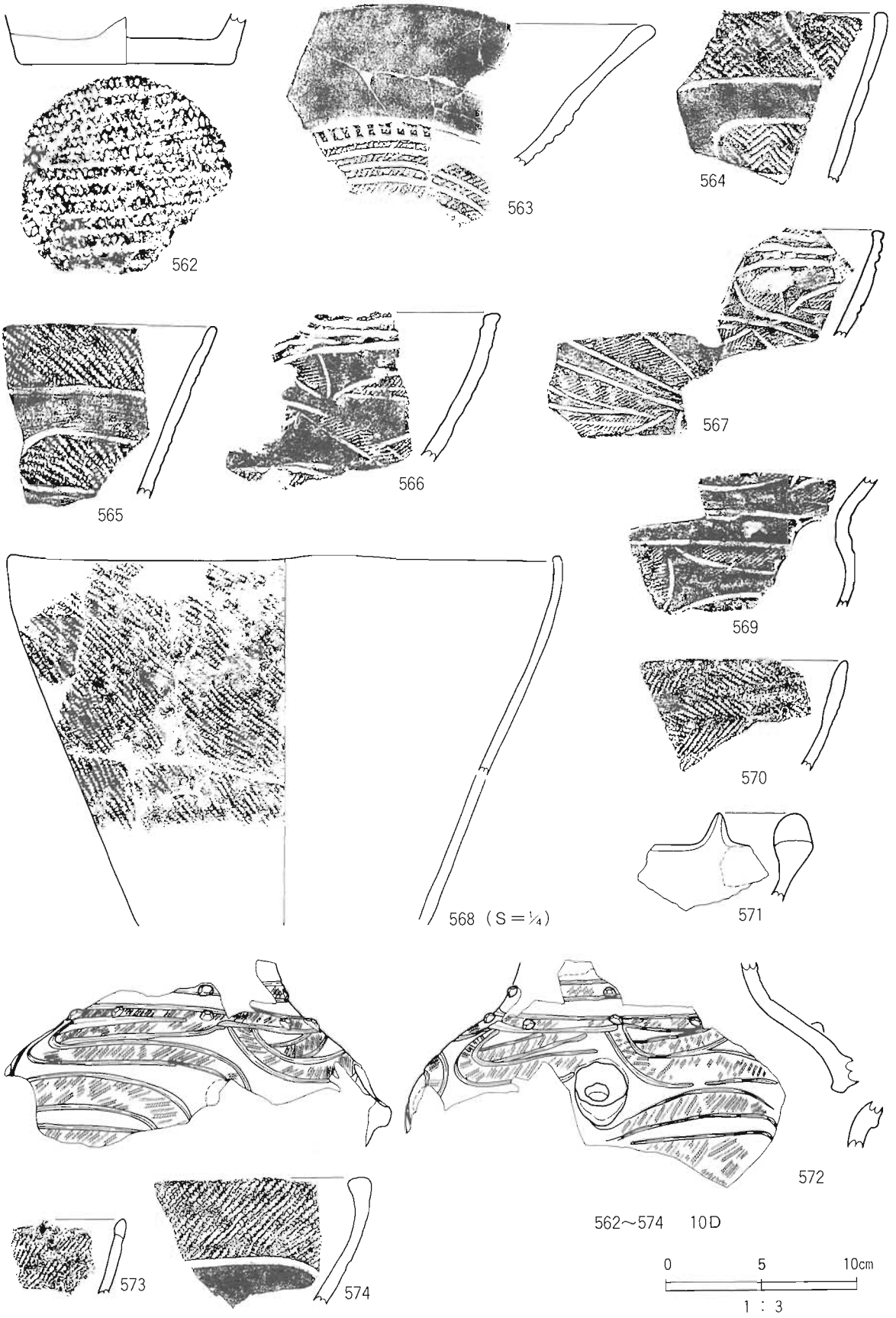
第88図　遺構外出土遺物（6）



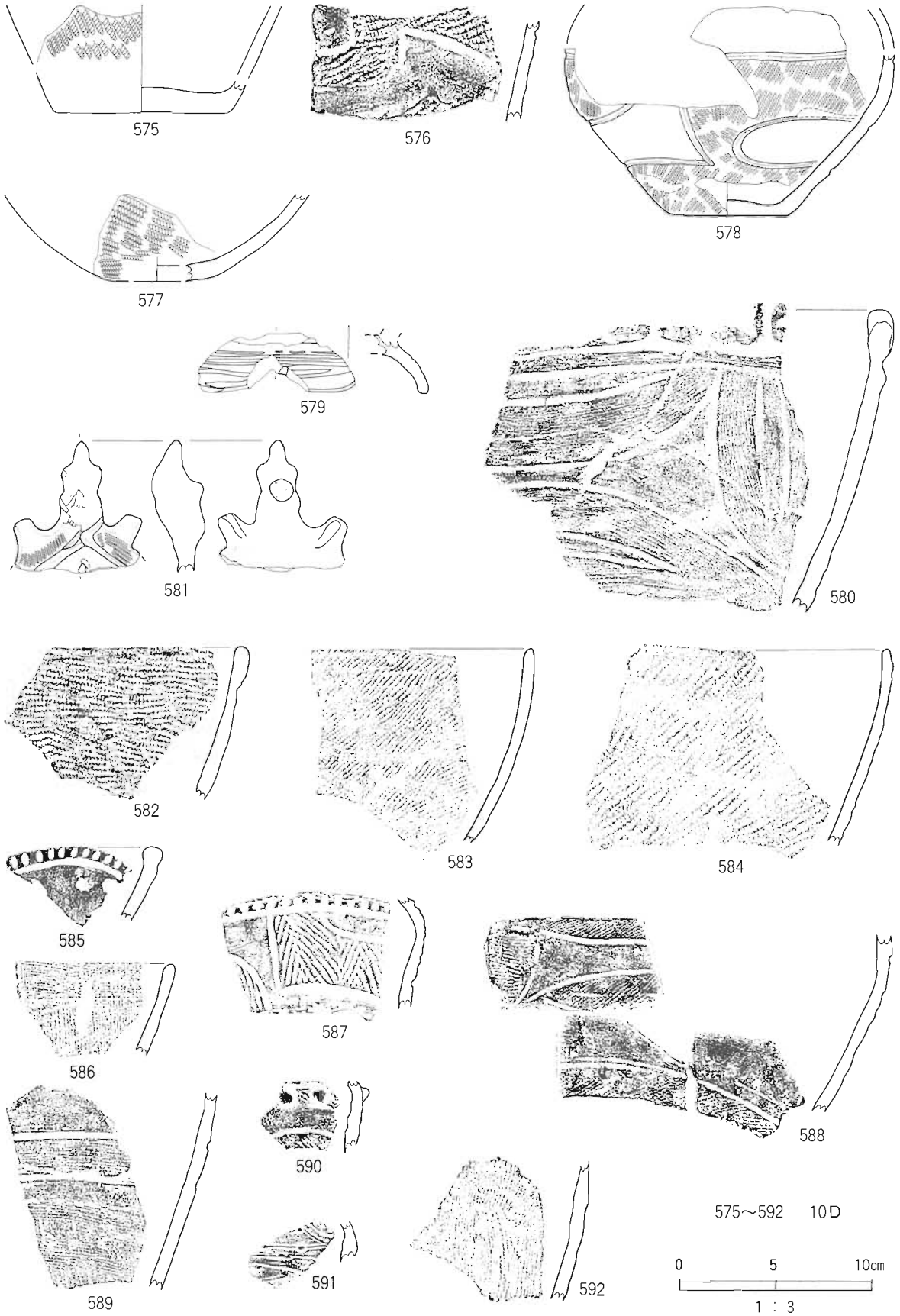
第89図　遺構外出土遺物（7）



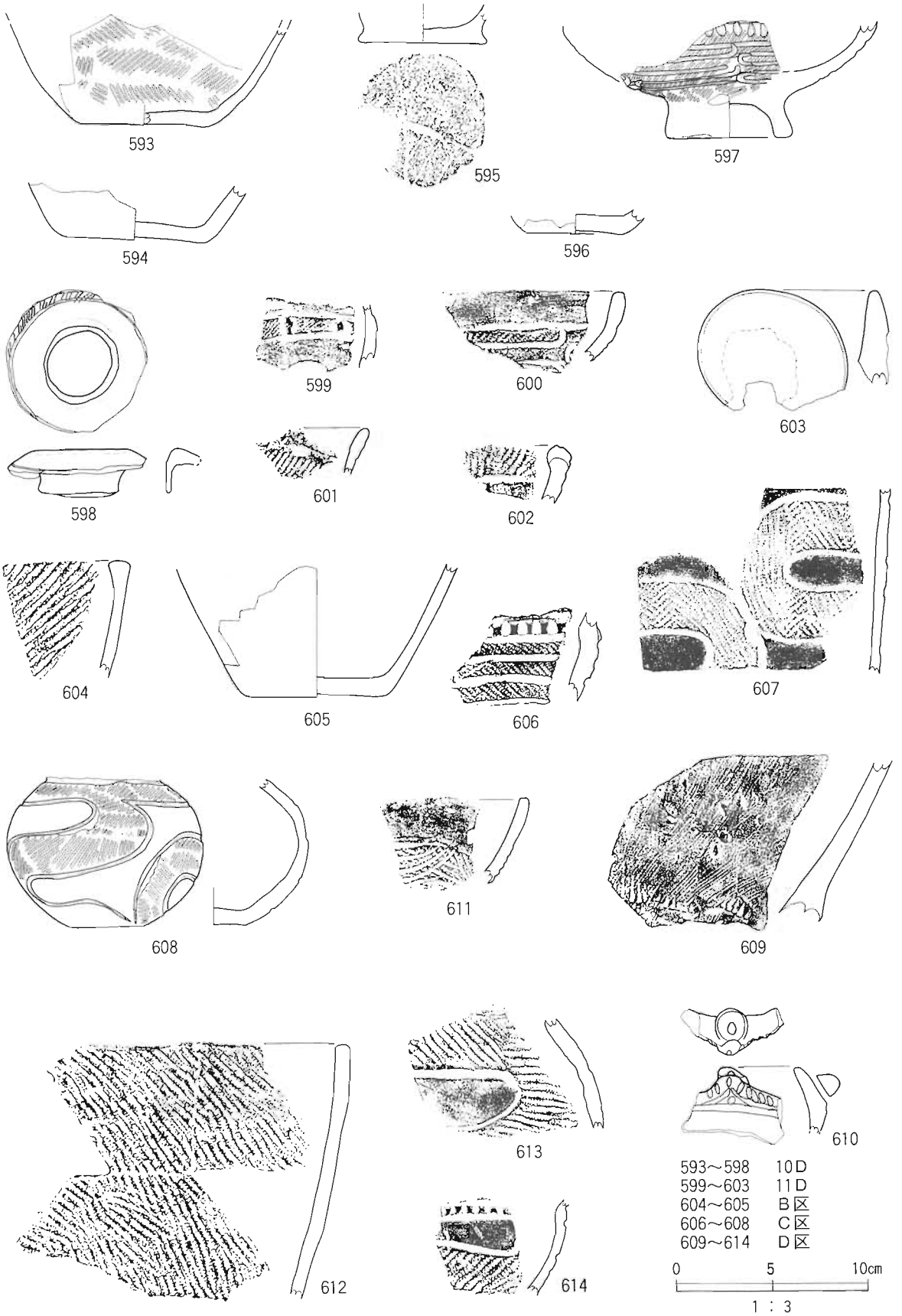
第90図　遺構外出土遺物（8）



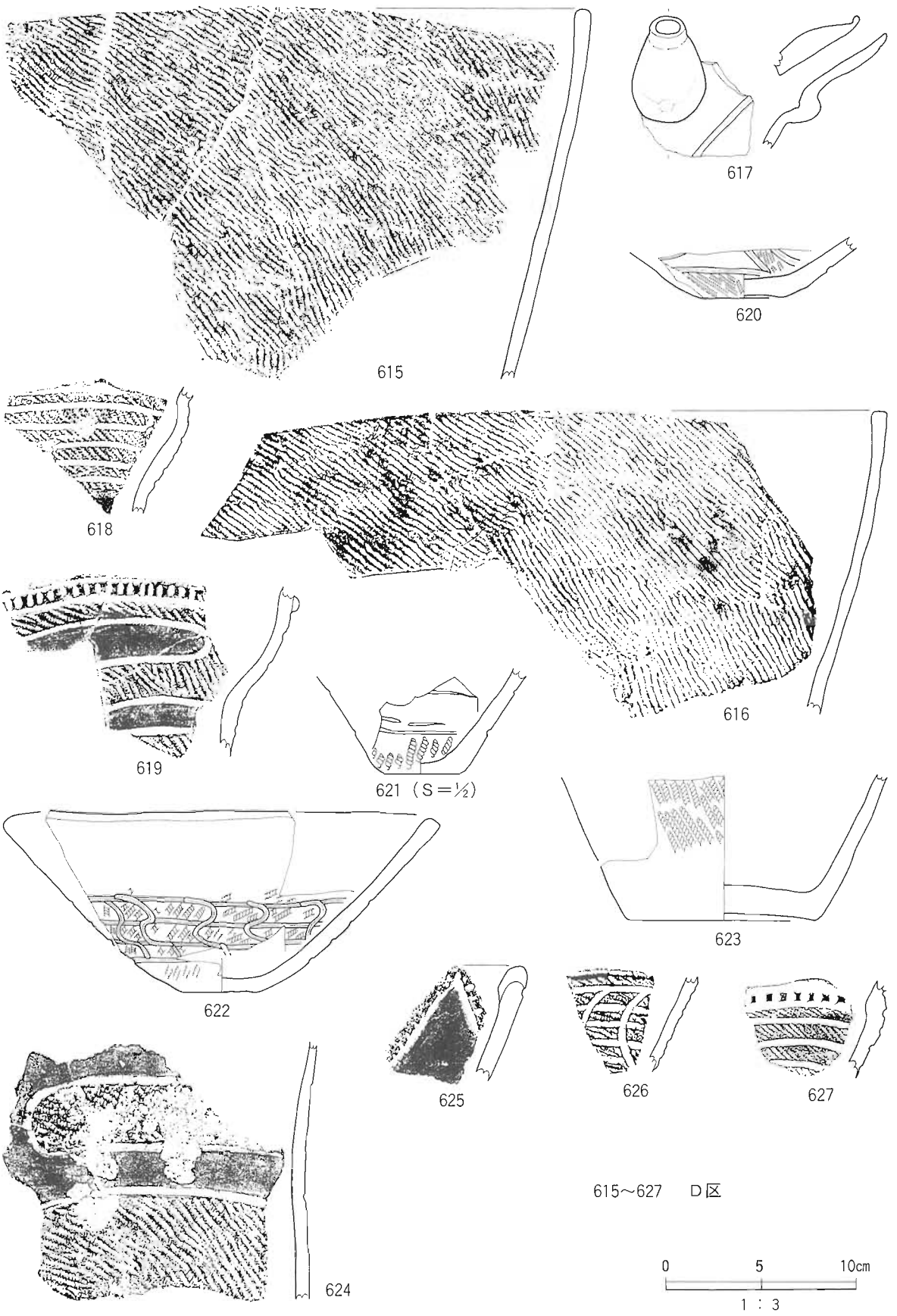
第91図　遺構外出土遺物（９）



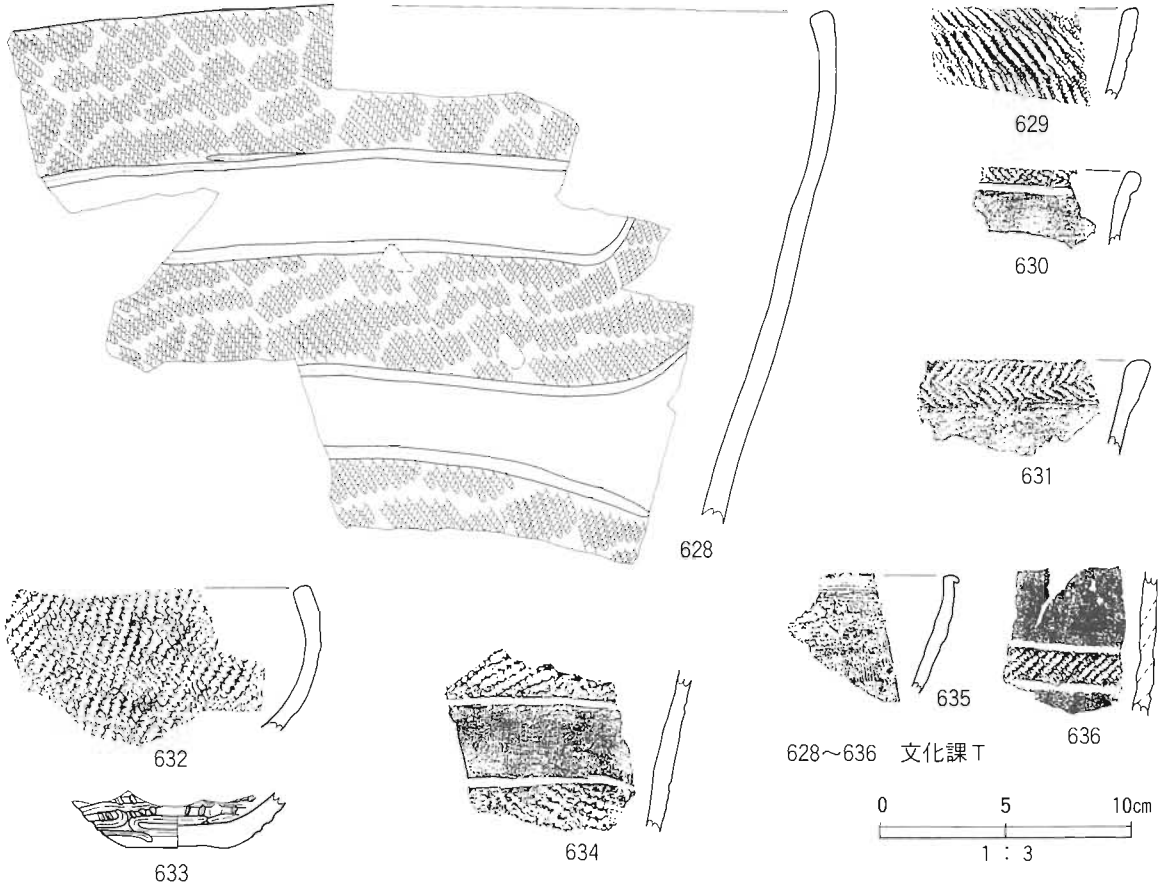
第92図　遺構外出土遺物(10)



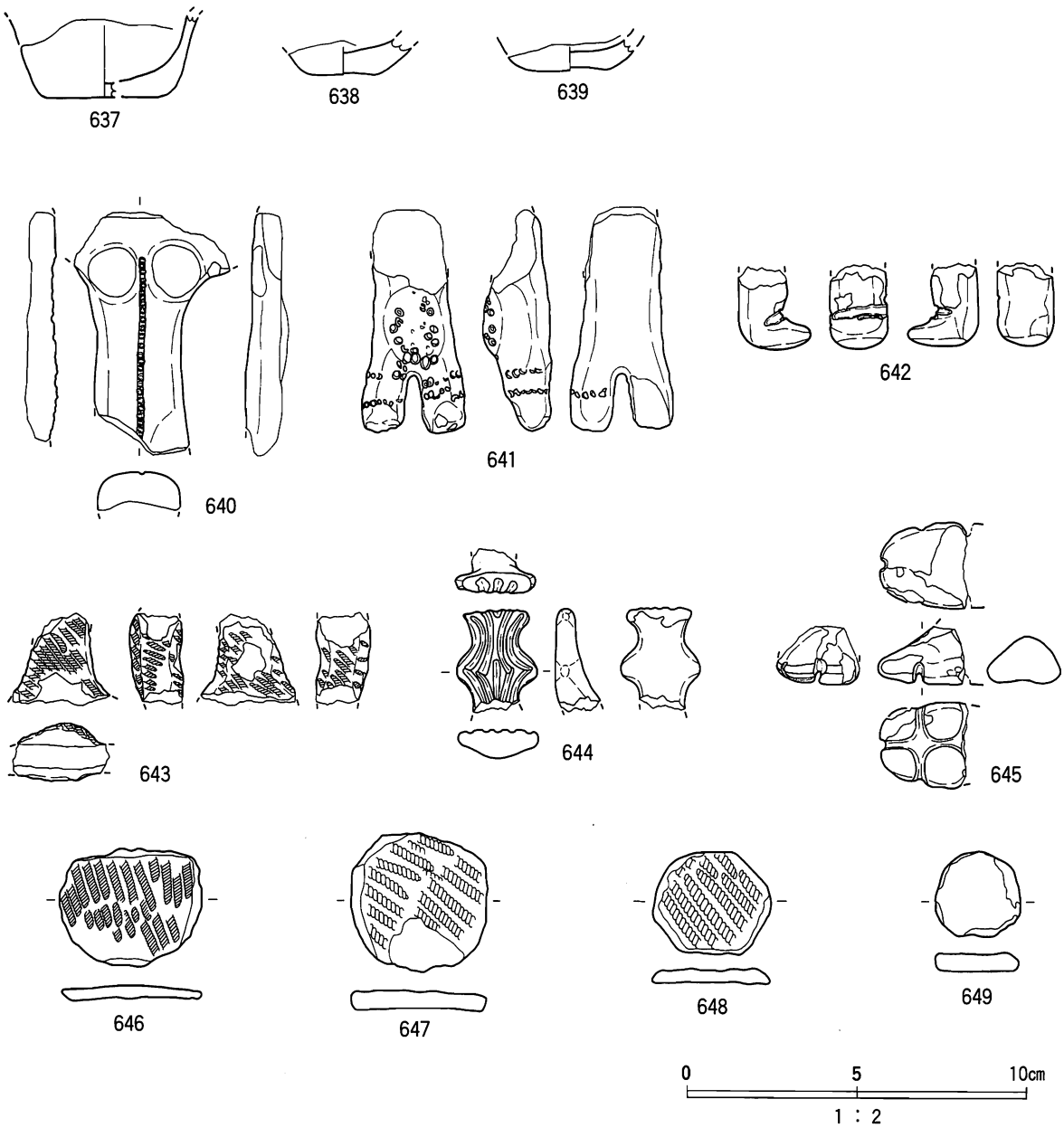
第93図　遺構外出土遺物(11)



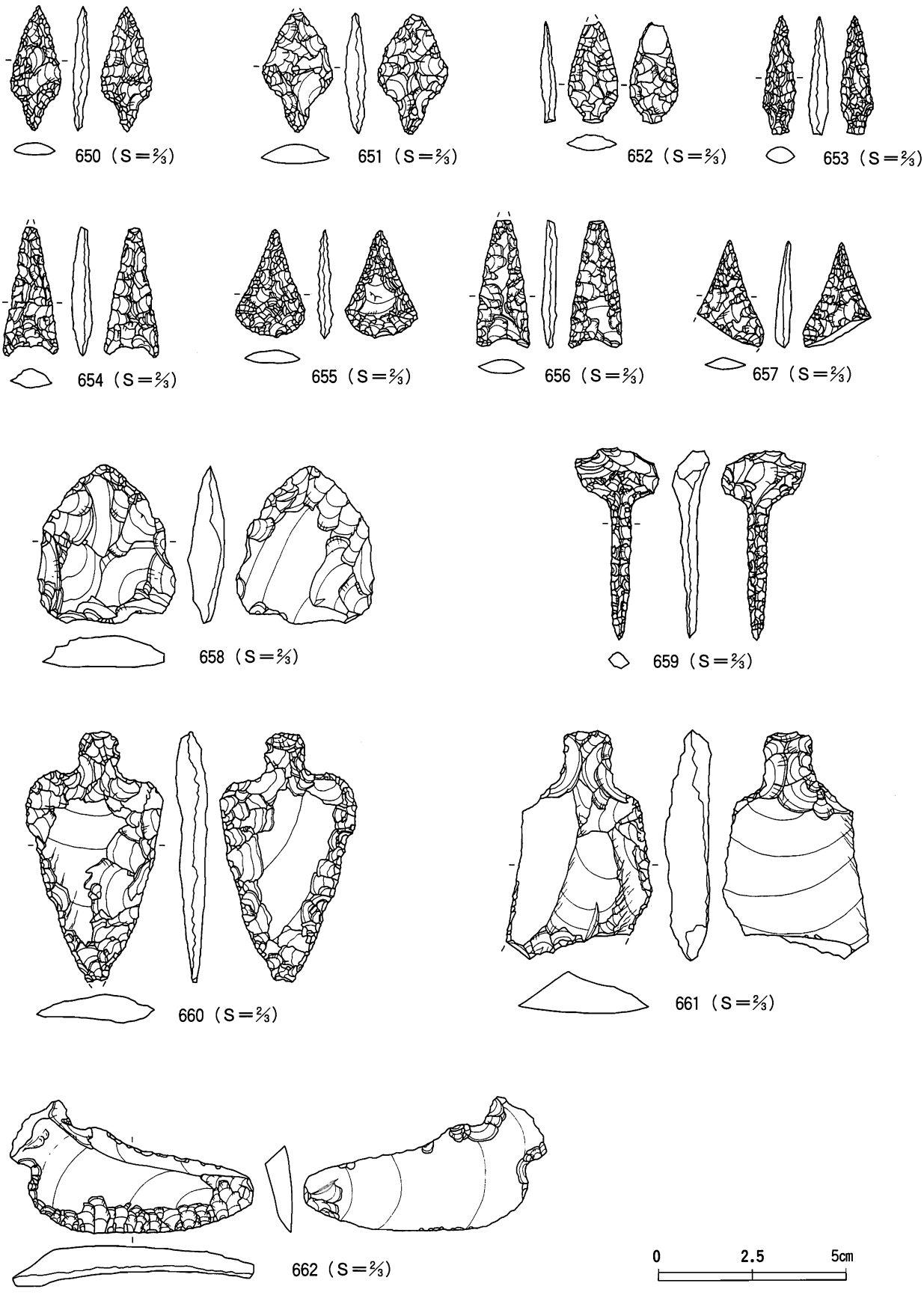
第94図　遺構外出土遺物(12)



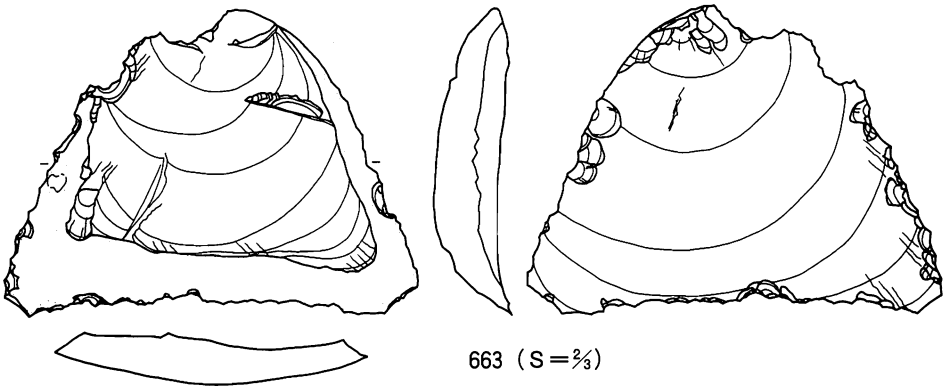
第95図　遺構外出土遺物(13)

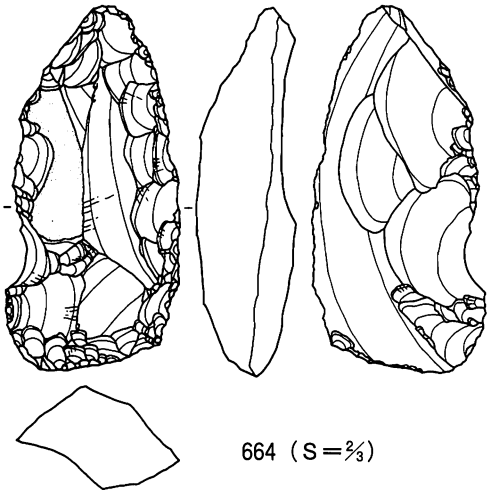


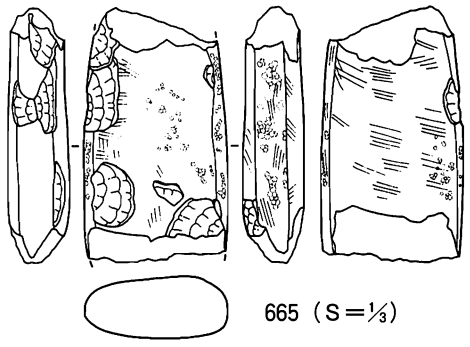
第96図　遺構外出土遺物(14)

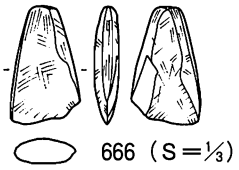


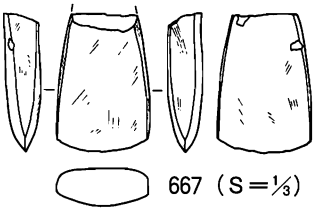
第97図　遺構外出土遺物(15)

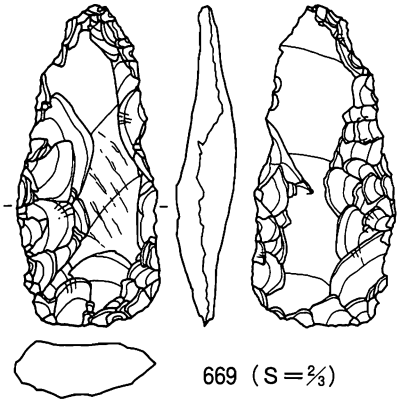


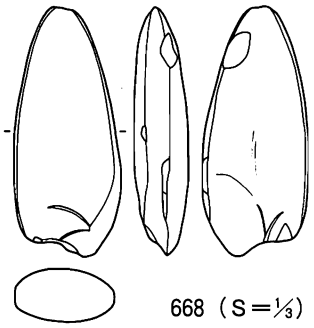


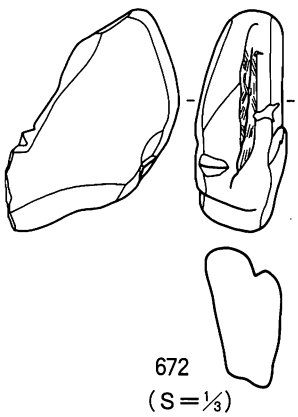


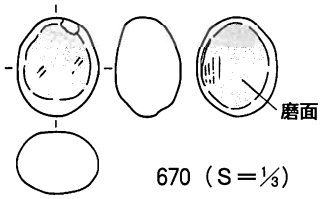


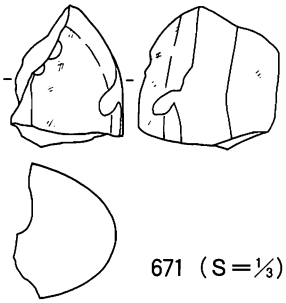


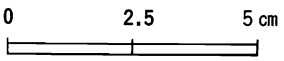




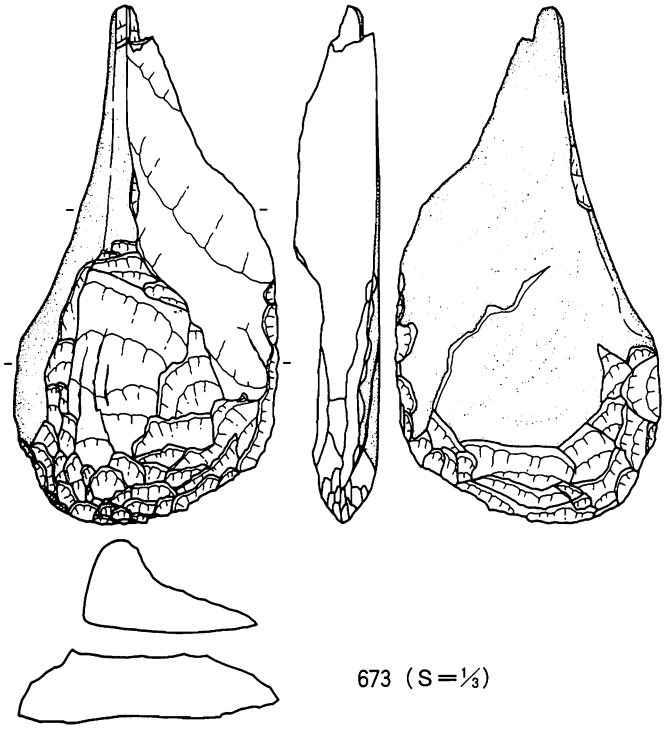




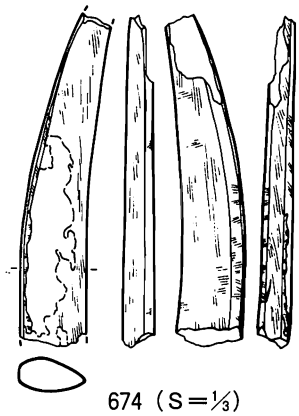




第98図　遺構外出土遺物(16)



673（S＝⅓）

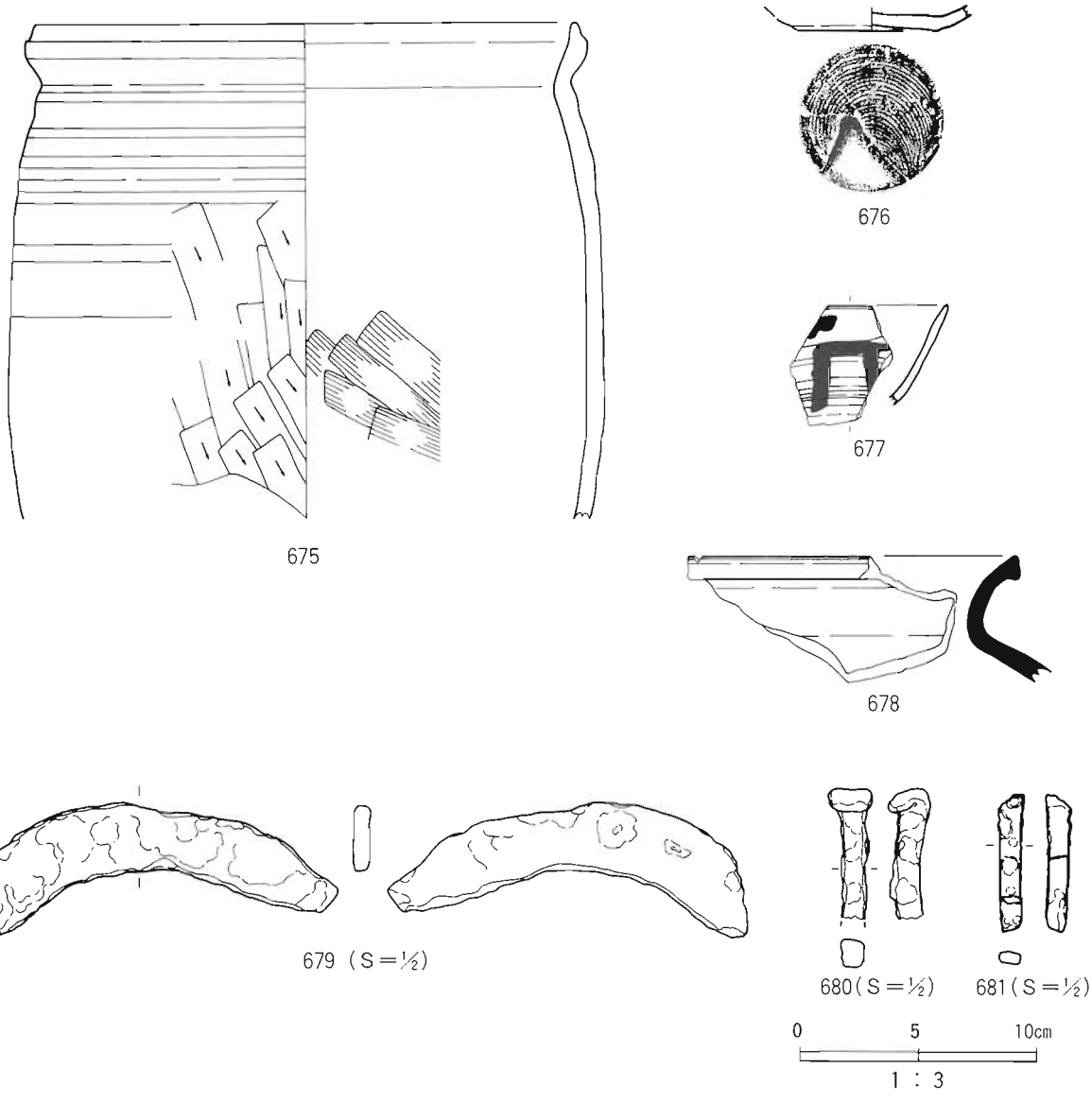


674（S＝⅓）

0　5　10cm

1：3

第99図　遺構外出土遺物(17)



第100図　遺構外出土遺物(18)

第５表　土器観察表
〈縄文土器〉

凡例　出土地点：遺構外については「グリッド」の表記を省略し、グリッド名(数字＋アルファベット)のみ記載。県教委生涯学習文化課の試掘トレンチは「文Ｔ」と省略。
施文方法：「充填」 沈線区画(下段)→縄文施文(充填)→沈線区画→磨り消し→(縄文一部充填)。「磨消」 縄文施文→沈線区画→磨り消し→(縄文一部充填)。
※　層位で①～③層と表示しているものは、覆土掘り下げの際に上・中・下層に分けたものである(Ａ１住居など)。上位から順に、①→②→③層となる。

計測値：〔 〕は推定値、( )は残存値。

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	色調	文様の特徴	施文原体	施文方法(文様帯)	内面調整	計測値(cm) 口径	最大径	底径	器高	器厚	分類	時期	備考
1	84	Ａ１住居跡	床面直上(Ｑ４)土器１	注口	胴	7.5YR3/3暗褐	変形入組み文が展開。文様内には２種の原体の非結束羽状縄文が施文される。羽状縄文の施文方向は入組み文の展開に沿って変化している。	０段多条ＬＲ・ＲＬ	充填	ナデ	－	〔9.3〕	－	(7.8)	0.6	Ⅱ－Ｂ２	後期中葉	
2	603	Ａ１住居跡	床面直上	深鉢	口縁		大波状口縁の波頂部破片。口唇丸く、口縁端部内面に段あり。口縁に沿って２条の沈線。非結束羽状縄文。	ＬＲ、ＲＬ	磨消？	ナデ						Ⅱ－Ｃ	後期後葉	
3	85	Ａ１住居跡	床面直上	深鉢	口縁	7.5YR7/6橙	無文。ミガキ。			ナデ	－	－	－	(4.2)	0.7	Ⅱ－Ｂ２	後期中葉	
5	76	Ａ１住居跡	覆土	壺	準完形	5YR5/6明赤褐	無文。全面にケズリ。			ナデ	16.1	17.5	5.5	15.6	0.7		後期中葉	
7	665	Ａ１住居跡	覆土下位	鉢(台付？)	口縁～胴		平縁に二股の瘤状貼り付け。口唇はナデ調整により、やや平坦。外面には横位の羽状縄文(非結束)が重層的に施文される。	０段多条ＲＬ・ＬＲ								Ⅱ－Ｃ？	後期後葉？	
8	89	Ａ１住居跡	覆土２層(南側ベルト)	台付鉢？	口縁	5YR5/8明赤褐	口縁部に２個一対の小突起が付され、突起間はやや凹む。口縁に沿って沈線が巡り、沈線・口唇間には地文が施されているが、摩滅により不明瞭である。	ＬＲ、ＲＬ	磨消？	ナデ	－	－	－	(4.5)	0.4	Ⅱ－Ｃ？	後期後葉？	
9	91	Ａ１住居跡	覆土②層(Ｑ１)	鉢	口縁	7.5YR6/4にぶい橙	口縁部に２個一対の小突起が付される。口縁に沿って横位の沈線が巡る。縄文が施されているらしいが、摩滅により不明瞭。	ＲＬ？		ナデ	－	－	－	(2.8)	0.9	Ⅱ－Ｃ？	後期後葉？	
10	538	Ａ１住居跡	覆土①層下位	浅鉢	口縁		口縁に二又の瘤状小突起を付す。口縁に沿って刻み目帯。	ＬＲ		ナデ						Ⅱ－Ｃ？	後期後葉？	
11	598	Ａ１住居跡	覆土①層下位	深鉢	口縁		波状口縁。突起状の大振りな貼り付けにより口唇が肥厚。口縁に沿って刻み目帯。	ＬＲ		ナデ						Ⅱ－Ｃ？	後期後葉？	
12	617	Ａ１住居跡	覆土②層	鉢	口縁～頸		頸部で一旦窄まり、段状となる。口縁は無文帯。胴部には帯縄文。	０段多条ＲＬ		ナデ							後期	
13	591	Ａ１住居跡	覆土下位	深鉢	口縁～頸		頸部で外傾し、口縁端部が内雫する深鉢。口唇はやや肥厚し丸みあり。口縁に沿って二重の刻み目帯が巡り、頸部文様帯(Ⅱ３帯)には櫛掛状帯縄文が展開する。充填される縄文は２種の原体による非結束羽状縄文。	０段多条ＬＲ、ＲＬ	充填	ナデ						Ⅱ－Ｃ？	後期後葉？	
14	72	Ａ１住居跡	覆土(Ｑ１)②層	深鉢	口縁～胴	7.5YR3/2黒褐	胴部が直線的に外傾し、口縁部でやや内雫。口唇部は丸みを帯びて肥厚する。口縁端部まで文様帯が及び、曲線的な帯縄文が展開する。帯縄文内には、同一原体異方向回転の羽状縄文が施文されるが、文様の流れに関係なく横方向に流れている。	０段多条ＲＬ	磨消	ナデ	〔57.8〕	－	－	(13.3)	0.9	Ⅱ－Ｃ？	後期後葉？	
15	539	Ａ１住居跡	覆土①層下位	深鉢	口縁		口縁に縄文帯。	ＲＬ？		ナデ						Ⅱ－Ｃ	後期後葉	胎土に小石多い。
16	600	Ａ１住居跡	覆土①層下位	深鉢	口縁		波状口縁で口縁端部が肥厚し、口唇は丸みあり。口縁に沿って刻み目帯。	ＬＲ		ナデ							後期	
17	540	Ａ１住居跡	覆土①層下位	深鉢	胴		斜行縄文。	ＬＲ		ナデ							後期	
18	613a	Ａ１住居跡	覆土②層	鉢	口縁～胴		平縁で口唇は平坦。口縁には縄文帯。胴部では曲線的な帯縄文(モチーフ不明)が展開。	ＲＬ		ナデ						Ⅱ－Ｂ２	後期中葉	
19	613b	Ａ１住居跡	覆土②層	鉢	口縁～胴		平縁で口唇は平坦。口縁には縄文帯。胴部では曲線的な帯縄文(モチーフ不明)が展開。	ＲＬ		ナデ						Ⅱ－Ｂ２	後期中葉	
20	563	Ａ１住居跡	覆土②層(Ｑ１)	深鉢	胴		非結束羽状縄文。	ＬＲ・ＲＬ		ナデ							後期	
21	608	Ａ１住居跡	覆土下位	深鉢	胴		多段の横位羽状縄文(２種の原体の異方向回転？)。	ＲＬ、０段多条ＲＬ		ナデ							後期	
22	653	Ａ１住居跡	覆土中位	鉢	胴		太い横位沈線＋縦位区切り。僅かに赤色顔料塗布の痕跡。	０段多条ＬＲ		ナデ						Ⅱ－Ｂ１	後期中葉	外面に赤色顔料塗布。
23	631	Ａ１住居跡	覆土②層	深鉢	頸		平行沈線文。２条毎に縦の弧線で区切る。	０段多条ＲＬ		ナデ							後期	
24	641	Ａ１住居跡	覆土下位	注口	胴		注口基部付近の破片。沈線区画に同一原体異方向回転の羽状縄文。	０段多条ＬＲ		無調整							後期	
25	81	Ａ１住居跡	覆土(Ｑ２)②層	浅鉢	底	5YR3/4明赤褐	欠損により詳細不明であるが、上位には単節斜行縄文が施文されているようである。底部近くは粗いケズリである。			ナデ	－	－	〔5.6〕	(5.0)	0.6		後期	
27	82	Ａ１住居跡	覆土１層(南側ベルト)	壺	口縁	10YR6/4鈍い黄橙	口縁部は平縁で、口唇部は丸みを帯びる。沈線３本により文様帯が区画され、無文帯を挟んで上下に２種の原体による斜行縄文が充填される。本来、羽状縄文を意図したものであろうが、地文は不整で崩れたものとなっている。	０段多条ＬＲ・ＲＬ	充填	ナデ	〔11.8〕	－	－	(6.2)	0.7	Ⅱ－Ｂ２	後期中葉	脆い。
28	78	Ａ１住居跡	覆土(Ｑ２)①層下位	壺	口縁～頸	10YR3/1黒褐	口唇は丸みを帯びる。口縁部には刻み帯２列により区画され、縄文が施文される。羽状を意図しているとも思われるが、不整に崩れている。大部分が０段ＲＬだが、ごく一部のみ０段ＬＲがある。口縁・頸部境界部分にも２列の刻み帯が付され、その間は無文帯となる。頸部は膨らみをもって内雫し、４単位の突起状貼瘤が貼付される。瘤中央には縦の刻みが大きく入り、不明瞭ながらその左右に細かな２～３本の横の刻みが付されるようである。瘤と瘤の間は対称的な弧線により連結される。	０段多条ＬＲ・ＲＬ	磨消？	ナデ	5.4	－	－	(6.3)	0.5	Ⅱ－Ｂ２？	後期中葉	脆く崩れやすい。
29	73	Ａ１住居跡	覆土(Ｑ１)土器16	壺	口縁～胴	10YR3/1黒褐	口縁は平坦で、２個一対・４単位の貼瘤がそれぞれ対向する位置に付される。口唇は丸い。口頸部には沈線＋縦位刻み２列が３単位施され、それぞれの間はミガキで無文となる。胴部は、沈線で区画された帯縄文で、文様の流れに沿って羽状縄文が施文される。原体は２種類の異方向回転である。	ＬＲ、ＲＬ	充填	ナデ	19.5	－	－	(9.8)	0.7	Ⅱ－Ｃ？	後期後葉？	
30	83	Ａ１住居跡	覆土１層(東側ベルト)	注口？	口縁	10YR3/2黒褐	４単位の瘤状突起の付く平縁。突起は縦位刻みにより二股状。地文を欠き全面が磨かれており、ミミズ腫れ状の微隆起線が弧状に配されている。赤色塗彩の痕跡あり。			ナデ	5.7	－	－	(4.2)	0.5	Ⅱ－Ｂ２？	後期中葉	外面および口縁内面に赤色塗彩の痕跡あり。
31	79	Ａ１住居跡	覆土(Ｑ２)①層土器12	注口？	口縁	10YR5/4鈍い黄褐	平縁で肥厚する口縁部に４単位の瘤状突起が貼付される。突起は中央付近に縦の浅い刻みが入って二股となる。口縁直下および胴部との境界線には刻み目帯が巡り、その間は無文帯となっている。			ナデ	5.7	－	－	(3.0)	0.6	Ⅱ－Ｂ３？	後期中葉	
32	80	Ａ１住居跡	覆土(Ｑ４)①層	壺	口縁	5YR3/4明赤褐	無文。全面にナデ。			ナデ	6.6	－	－	(5.5)	0.7		後期	
33	77	Ａ１住居跡	覆土１層(西側ベルト)	壺	胴～底	7.5YR4/6褐	胴部に入組み状の帯縄文が展開し、羽状縄文が充填される。羽状縄文はＲＬ異方向回転による部分と、非結束のＲＬ・ＬＲによるものとが見られ、一様ではない。			ナデ	－	－	〔4.5〕	(11.2)	0.5	Ⅱ－Ｃ	後期後葉	
34	86	Ａ１住居跡	覆土①・②層	鉢	口縁～胴	10YR6/4鈍い黄橙	胴部に膨らみをもち口縁部が内雫。口唇は平坦で角張る。胴部には曲線的な帯縄文が施され、地文は単節斜行縄文。無文部はミガキ。	ＲＬ	磨消	ミガキ	－	－	－	(16.5)	0.6	Ⅱ－Ｂ２	後期中葉	
35	75	Ａ１住居跡	覆土①層下位	鉢	口縁～底	10YR7/6明黄褐	無文。全面にケズリ。			ケズリ	〔9.4〕	〔9.4〕	3.0	7.8	0.4		後期	
36	627	Ａ１住居跡	覆土①層	浅鉢	口～底部		羽状縄文(非結束)、底面に剥落	ＬＲ、ＲＬ		ナデ							後期	
39	643	Ａ１住居跡	覆土上位	台付浅鉢	口縁～胴		口唇に低い瘤状突起＋刻み目帯。内外面ともに、縄文施文→区画内の磨り消し。	ＲＬ	磨消	－						Ⅱ－Ｂ３？	後期中葉	
40	648	Ａ１住居跡	覆土上位	鉢？	口縁		平縁に大振りな瘤状突起を貼付。瘤には十字の刻みが付される。口縁直下には、曲線的な区画文様が展開する。	０段多条ＲＬ・ＬＲ	充填	ナデ						Ⅱ－Ｃ	後期後葉	
41	597	Ａ１住居跡	覆土上位	台付浅鉢	口縁		口縁は平縁で、二股の瘤状突起が貼付される。口縁端部には二重の刻み目帯。胴部では沈線による帯状区画内に刻みを充填。胴部にも貼り瘤あり？(597Ｂの下部割れ口付近)。	ＲＬ？(不明瞭)		ナデ						Ⅱ－Ｃ？	後期後葉？	
42	594	Ａ１住居跡	覆土上位	深鉢？	口縁		平口縁に尖った突起状の貼り付け。突起部から口縁端に刻み列。			ナデ						Ⅱ－Ｂ３	後期中葉	
43	537	Ａ１住居跡	覆土上位	鉢？	口縁		口縁に小突起を付す。			ナデ							後期	
44	549	Ａ１住居跡	覆土①層・土器15	鉢？	口縁？		沈線による区画文。上部？に貫通孔(４以上)らしきものあるが、欠損により詳細不明。	ＬＲ		ナデ						Ⅱ－Ｂ１	後期中葉	
45	574	Ａ１住居跡	覆土①層・土器14	深鉢	口縁		口縁に二又の瘤状突起を貼付。口縁に沿って二重の刻み目帯。沈線区画内に縄文、一部は羽状を呈している。	０段多条ＬＲ		ナデ						Ⅱ－Ｃ	後期後葉	
46	551	Ａ１住居跡	覆土①層・土器19	深鉢	口縁		波状口縁。口縁に沿って二重刻み目帯。沈線区画に羽状縄文を付す。	０段多条ＬＲ・ＲＬ		ナデ						Ⅱ－Ｃ	後期後葉	
47	548	Ａ１住居跡	覆土①層・土器7	深鉢	口縁		波状口縁の波頂部破片。口縁は内面が肥厚し、二重の刻み目帯が巡る。口縁部文様帯には、羽状縄文が充填された木葉状の区画文。	０段多条ＬＲ・ＲＬ	充填	ミガキ						Ⅱ－Ｃ	後期後葉	
48	564	Ａ１住居跡	覆土上位(Ｑ２)	深鉢	口縁		波頂部破片。口縁内面が肥厚し段となり、波頂部内面には隆帯状の盛り上がり。口縁に沿って２条の沈線が巡る。	ＲＬ		ナデ						Ⅱ－Ｂ２	後期中葉	
49	642	Ａ１住居跡	覆土上位	深鉢	口縁突起		突起部破片。著しく肥厚し、断面は三角形状。刻み目帯。			ナデ						Ⅱ－Ｂ３	後期中葉	
50	576	Ａ１住居跡	覆土①層・土器14	深鉢	口縁		口縁部の上部に２条、下部に１条の刻み目帯。地文を欠く。			ナデ						Ⅱ－Ｃ	後期後葉	
51	595	Ａ１住居跡	覆土上位	鉢？	口縁		口縁端部が肥厚し、丸みあり。口縁に沿って二重の刻み目帯。	０段多条ＲＬ	磨消？	ナデ						Ⅱ－Ｃ	後期後葉	
52	623	Ａ１住居跡	覆土①層下位	鉢	口縁		口縁は内面が削げて尖る。口縁に沿って二重の刻み目帯。			ナデ						Ⅱ－Ｃ	後期後葉	
53	645	Ａ１住居跡	覆土上位	深鉢	口縁		口唇が膨らみ肥厚、丸みあり。口縁に沿って二重の刻み目帯。			ナデ						Ⅱ-Ｃ？	後期後葉？	
54	573	Ａ１住居跡	覆土①層(Ｑ２)	深鉢	口縁		羽状縄文。	ＬＲ・ＲＬ		ナデ							後期	内面に煤付着。

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	色調	文様の特徴	施文原体	施文方法(文様帯)	内面調整	計測値(cm) 口径	最大径	底径	器高	器厚	分類	時期	備考
55	555	A1住居跡	覆土①層下(Q1)	深鉢	口縁～胴		非結束羽状縄文。口縁内側してやや肥厚。	LR・RL		ナデ							後期	
56	646	A1住居跡	覆土①	深鉢	口縁～胴		口縁は平坦。斜行縄文、一部は羽状縄文的。	0段多条LR		ナデ							後期	
57	618	A1住居跡	覆土上位	深鉢	口縁		口縁端部が肥厚。横位の羽状縄文(非結束)。	LR、RL		ナデ							後期	
58	535	A1住居跡	覆土①層・土器16	深鉢	口縁		斜行縄文。	0段多条LR		ナデ							後期	
59	567	A1住居跡	覆土①層・土器13	鉢	口縁		口縁やや肥厚。斜行縄文。	0段多条RL		ミガキ							後期	
60	568	A1住居跡	覆土①層下位	鉢?	口縁		斜行縄文。	LR		ナデ							後期	
61	725	A1住居跡	覆土	深鉢	口縁		斜行縄文。	LR		ミガキ							後期	
62	554	A1住居跡	覆土①層下(Q1)	深鉢	口縁		斜行縄文。	RL		ナデ							後期	
63	533	A1住居跡	覆土(Q1)	深鉢	口縁～胴		斜行縄文。口縁部やや内彎して肥厚、口唇は丸み。	0段多条RL		ナデ							後期	
64	88	A1住居跡	覆土(Q4)1層 土器7	鉢	口縁～胴	5YR5/6明赤褐	無文。ケズリ。			ナデ	-	-	-	(5.5)	0.6		後期	
65	546	A1住居跡	覆土①層(Q1)	壺	口縁		無文(ナデ)。			ナデ							後期	
66	87	A1住居跡	覆土(Q1)①層	壺	頸	7.5YR4/2灰褐	上下廻に刻み目帯が巡り、瘤状の貼付けがなされる。貼瘤は中央に横位刻みが入り、二股となる。瘤から上下に弧線が伸びる。			ナデ	-	-	-	(5.0)	0.5	Ⅱ-B3?	後期中葉	
67	114	A1住居跡	覆土上位(1層?、Q4)	壺	胴	10YR7/4鈍い黄橙	「く」字状に屈曲する肩部破片で、大きな瘤状の突起が貼付される。突起は中央付近には縦位のナデにより浅い凹みが入れられ二股状で、横位の浅く短い刻みが付される。胴部には浅く不明瞭な弧状の横位沈線が引かれる。	RL		ナデ	-	-	-	(3.9)	0.7		後期	
68	561	A1住居跡	覆土上位(Q1)	注口?	胴		数条の微隆起線。			ナデ?							後期	
69	562	A1住居跡	覆土①層・土器19	深鉢	頸		二重の刻み目帯。			ナデ							後期	
70	565	A1住居跡	覆土上位(Q2)	深鉢	頸		沈線2条に挟まれた連続刻み目。口縁無文。			ミガキ						Ⅱ-B3	後期中葉	
71	557	A1住居跡	覆土①層・土器17	深鉢	口縁		沈線区画文(鍵状)。区画内には羽状縄文。磨り消しが雑で、沈線や縄文が一部消失。	0段多条RL	磨消	ナデ						Ⅱ-B2	後期中葉	
72	558	A1住居跡	覆土①層・土器17	壺	胴		沈線区画文、羽状縄文。	LR・RL		ナデ						Ⅱ-B2	後期中葉	
73	559	A1住居跡	覆土①層・土器19	深鉢	胴		沈線区画文。	RL		ナデ						Ⅱ-B2	後期中葉	
74	583	A1住居跡	覆土①層	鉢	胴		曲線的な帯縄文。縄文は一部で羽状縄文となる。	0段多条LR、RL	充填	ナデ						Ⅱ-C	後期後葉	
75	607	A1住居跡	覆土①層下位	壺	頸		沈線による区画へ縄文を横位の羽状縄文を施文。	LR、RL	磨消?	ナデ							後期	
76	625	A1住居跡	覆土①層	深鉢	頸		曲線的な帯縄文(モチーフ不明)、羽状縄文(非結束)を充填。	LR、RL		ナデ						Ⅱ-B2	後期中葉	内面に焦げ状の付着物。
77	628	A1住居跡	覆土①層	深鉢	頸～胴		頸部には刻み目帯。直下に羽状縄文(非結束)が横位の帯状に巡る。	LR、0段多条RL		ナデ						Ⅱ-B3	後期中葉	
78	629	A1住居跡	覆土①層	壺	胴		帯縄文(木葉状?)が展開。非結束の羽状縄文を充填。	LR、RL		ナデ						Ⅱ-B2	後期中葉	
79	656	A1住居跡	覆土上位	鉢	胴		曲線的区画の帯縄文。羽状縄文(非結束)を充填。	0段多条RL・LR	充填	ナデ						Ⅱ-B2	後期中葉	
80	657	A1住居跡	覆土上位	鉢	胴		曲線的区画の帯縄文。羽状縄文(非結束)を充填。	0段多条RL・LR	充填	ナデ						Ⅱ-B2	後期中葉	
81	659	A1住居跡	覆土上位	壺	胴上半		曲線的区画の帯縄文。羽状縄文(非結束)を充填。	0段多条RL・LR	充填	ナデ 指の圧痕						Ⅱ-B2	後期中葉	
82	660	A1住居跡	覆土上位	深鉢	口縁～頸		口縁に磨り消しによる区画文(木葉状?)が展開。地文は非結束羽状縄文。頸部に刻み目帯。	0段多条RL・LR	充填	ナデ						Ⅱ-B2	後期中葉	
83	661	A1住居跡	覆土下位	深鉢	胴		頸部に刻み目帯。曲線的な沈線区画に、羽状縄文を充填。胎土非常に脆い。	0段多条RL・LR	充填?	ケズリ						Ⅱ-B2	後期中葉	砂粒多量に含む。
84	579	A1住居跡	覆土①層・土器13	深鉢	胴		異方向回転の羽状縄文。	0段多条RL		ナデ							後期	
85	556	A1住居跡	覆土①層・土器16	深鉢	胴		斜行縄文。	0段多条RL		ナデ							後期	
86	590	A1住居跡	覆土①層下位	深鉢	胴		重畳する横位の羽状縄文(異方向回転)。	RL		ナデ							後期	
87	542	A1住居跡	覆土上位(南側)	深鉢	胴(底付近)		ナデ。			ナデ							後期	内面に焦げ付着。
88	92	A1住居跡	覆土上位(Q3)	鉢?	底	5YR5/6明赤褐	斜行縄文。底面はケズリ。	0段多条RL		ナデ	-	-	[5.0]	(4.9)	0.6		後期	
89	113	A1住居跡	覆土1層(Q2)	深鉢	底	7.5YR6/6橙	底面は全面ナデで無文だが、ごく一部に不明瞭な地文らしきもの残存。地文施文→ナデ?	LR?		ナデ	-	-	8.6	(2.0)	0.7		後期	
106	93	A1住居跡	覆土(Q1、ベルト際トレンチ	注口	胴(注口部)	10YR8/3浅黄橙	注口部分は全面ミガキ、胴部には帯縄文が付されると思われるが詳細不明。	LR、RL?		ナデ	-	-	-	(8.3)	0.6	Ⅱ-B2?	後期中葉	
107	74	A1住居跡	覆土(Q1、ベルト際トレンチ)	深鉢	口縁～胴		口縁端部は沈線区画されて地文が付され、以下は無文。胴部では入組み状の帯縄文が付される。帯縄文内の地文には二種の原体が用いられ、非結束羽状縄文となるが、一部では条が同方向に流れて崩れている。	LR、RL	充填	ケズリ	[57.8]	(17.0)	-	(14.2)	0.5	Ⅱ-C	後期後葉	
108	637	A1住居跡	覆土	鉢	口縁		頸部で一旦絞れて、口縁部が外反する。口唇丸み。口縁端部には二重の刻み目帯。曲線区画の縄文帯はネガ部分がミガキ?により凹み、浮き彫り状。器表面の一部に化粧粘土の捲くれ?による皺が見られる一方、断続的に並ぶごく浅く細い刻みあり(意図的なものか不明)。	LR		ナデ							後期	内面に煤状付着物。
109	621	A1住居跡	覆土	鉢	口縁		口縁は内面が削げて尖る。口縁に沿って二重の刻み目帯。	0段多条RL		ナデ						Ⅱ-B3?	後期中葉	内面に焦げ状の付着物。
110	536	A1住居跡	覆土	壺	口縁		無文(ミガキ)。			ミガキ							後期	赤色顔料付着。
111	534	A1住居跡	覆土	深鉢	口縁		斜行縄文。	RL		ナデ							後期	非常に脆い。
112	532	A1住居跡	覆土	深鉢	口縁～胴		斜行縄文。口縁やや内彎。	RL		ナデ							後期	
113	115	A1住居跡	出入口部Pit(東)覆土中位	深鉢	底	7.5YR6/4鈍い橙	無文。底面はナデ。			ナデ	-	-	[7.6]	(2.8)	0.7		後期	
114	610	A1住居跡	覆土	壺?	胴		横位の沈線、帯状文か。非結束の羽状縄文。	0段多条LR・RL	磨消	ナデ							後期	
117	97	A2住居跡	床面直上	壺	準完形	10YR3/1黒褐	口縁部は沈線により文様帯が区画され、斜行縄文が充填される。無文帯を挟んで、胴部には曲線的な帯縄文(クランク状)が展開。充填される地文は文様に沿って方向が変化。	LR	充填	ミガキ、ケズリ	7.7	9.9	3.7	12.8	0.7	Ⅱ-B2	後期中葉	
118	668	A2住居跡	床直?焼土周辺	深鉢	口縁		斜行縄文。	RL		ミガキ							後期	外面煤付着
119	674	A2住居跡	床直?焼土周辺	深鉢	胴		刻み目帯。縄文施文→沈線文。	LR		ミガキ						Ⅱ-B1	後期中葉	
120	675	A2住居跡	床直?焼土周辺	深鉢	胴		斜行縄文。	RL		ミガキ							後期	
121	683	A2住居跡	覆土・検出面	深鉢	胴		縄文施文→沈線	LR		ミガキ						Ⅱ-B1	後期中葉	
122	679	A2住居跡	床直?焼土周辺	深鉢	胴		縄文施文→沈線	LR		ミガキ						Ⅱ-B1	後期中葉	外面煤付着
123	677	A2住居跡	壁柱穴覆土	深鉢	胴		縄文施文→磨消→沈線	RL	磨消	ミガキ						Ⅱ-B2	後期中葉	
124	684	A2住居跡	覆土下位	壺?	口縁		縄文施文→磨消→沈線	LR	磨消	ナデ						Ⅱ-B2	後期中葉	
125	667	A2住居跡	床直?焼土周辺	深鉢	口縁～胴		斜行縄文。口唇は平坦。	RL		ナデ							後期	
126	98	A3住居跡	覆土(東半部)	壺?	胴～底	10YR7/4鈍い黄橙	曲線的な帯縄文に、単節斜行縄文が充填される。	LR	充填	ケズリ	-	-	5.0	(4.5)	0.8	Ⅱ-B2	後期中葉	
127	687	A3住居跡	覆土	深鉢	口縁		非結束羽状縄文施文→沈線→磨消	RL・LR	磨消	ミガキ						Ⅱ-B2	後期中葉	外面煤付着
128	685a	A3住居跡	覆土	深鉢	口縁		非結束羽状縄文(異方向)施文→沈線→磨消	RL	磨消	ミガキ						Ⅱ-B2	後期中葉	内面煤付着
129	685b	A3住居跡	覆土	深鉢	口縁		非結束羽状縄文(異方向)施文→沈線→磨消	RL	磨消	ミガキ						Ⅱ-B2	後期中葉	内面煤付着
130	691	A3住居跡	覆土	深鉢	口縁		口縁部が肥厚して内彎。胴部には帯縄文。	LR	磨消	ミガキ						Ⅱ-B2	後期中葉	
131	696	A3住居跡	覆土	深鉢	口縁		非結束羽状縄文(異方向)。	RL		ミガキ						Ⅱ-B2	後期中葉	
132	693	A3住居跡	覆土	深鉢	口縁		口端刻み目帯。			ミガキ						Ⅱ-B3	後期中葉	
133	694	A3住居跡	覆土	深鉢	口縁		3条の平行沈線。	LR		ナデ						Ⅱ-B1?	後期中葉	
134	686	A3住居跡	覆土	深鉢	口縁		口唇肥厚。	LR		ミガキ						Ⅱ-B2	後期中葉	
135	692	A3住居跡	覆土・検出面	深鉢	口縁		斜行縄文。	0段多条RL		ミガキ							後期	
136	685c	A3住居跡	覆土	深鉢	口縁		非結束羽状縄文(異方向)施文→沈線→磨消	RL	磨消	ミガキ						Ⅱ-B2	後期中葉	内面煤付着
137	699	A3住居跡	覆土	深鉢?	胴		縄文施文→沈線→磨消。									Ⅱ-B2	後期中葉	
138	702	A3住居跡	覆土	深鉢	胴		縄文施文→沈線	LR								Ⅱ-B1	後期中葉	外面煤付着。
139	704	A3住居跡	覆土	深鉢	胴		非結束羽状縄文	RL・LR	磨消	ミガキ						Ⅱ-B2?	後期中葉	
140	698	A3住居跡	覆土	深鉢	胴		沈線区画文。	RL		ミガキ							後期	
141	701	A3住居跡	覆土	深鉢	胴		縄文施文→沈線によるクランク状文	LR									後期	
142	706	A3住居跡	覆土	深鉢			縄文施文→沈線	RL								Ⅱ-B1	後期中葉	
143	707	A3住居跡	覆土	鉢?	胴		非結束羽状縄文(異方向)施文→沈線区画→磨消	RL	磨消	ミガキ						Ⅱ-B2	後期中葉	

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	色調	文様の特徴	施文原体	施文方法(文様帯)	内面調整	計測値(cm) 口径	最大径	底径	器高	器厚	分類	時期	備考
144	708	A3住居跡	覆土	深鉢	胴		縄文施文→沈線	LR							Ⅱ－B1	後期中葉		
145	711	A3住居跡	覆土	深鉢	底部		網代痕										後期	胎土中に砂粒多。
146	712	A4住居跡	貼り床層	深鉢	口縁		ミガキ、口唇部肥厚			ミガキ							後期	
147	713	A4住居跡	貼り床層	深鉢	胴		斜行縄文。	LR									後期	
150	714	A5住居跡	覆土	深鉢	口縁		縄文施文→磨消→沈線	LR	磨消	ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	外面煤付着。
151	716	A5住居跡	覆土	深鉢	口縁		縄文施文→磨消→沈線	LR	磨消	ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	
152	718	A5住居跡	覆土	深鉢	口縁		斜行縄文。	0段多条LR	ナデ							後期		
153	715	A5住居跡	覆土	深鉢	口縁		斜行縄文。表面剥落。	LR		ナデ							後期	外面煤付着。
155	302	B1住居跡	床面直上(Q4)	深鉢	口縁		口縁部は肥厚し、内傾に膨らむ。口縁に沿う2本沈線。口唇部および沈線間に縄文施文。	0段多条LR		ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
156	301	B1住居跡	PP3 覆土上位	深鉢	口縁		斜行縄文。口唇部は肥厚、断面丸みあり。	RL		ケズリ							後期	
158	1	B2住居跡	床面埋設土器	鉢	胴下半～底	10YR8/1灰白	胴上半には入組みの帯縄文(変形入組み状)が展開。充填される地文は単節斜行縄文。	RL	充填	ナデ	－	－	5.6	(10.0)	0.6	Ⅱ－B2	後期中葉	
169	305	B3住居跡	覆土1層	深鉢?	口縁		口縁が貼付けによりやや肥厚し、2段の刻み目帯が付される。刻みは斜位から入れられるものが多く、羽状的である。刻み帯の中間には尖鋭な貼り瘤が付されている。			ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	
170	308	B3住居跡	覆土	鉢	口縁～頸		口縁部は無文。口縁と頸部の境は内外面ともに段をなす。頸部には横位の多重沈線が引かれ、沈線間には縄文を施文。沈線は雑。	RL		ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	
174	2	B4住居跡	白色粘土層	壺	完形	10YR5/2灰黄褐	口縁部は沈線で区切られ、上部は地文、下部は磨り消しの無文帯。無文帯の幅はやや広い。胴部には帯縄文(変形鍵状)が展開する。地文は口縁部・胴部ともに同一の単節斜行。	LR	充填	ナデ	9.6	12.9	3.2	16.3	0.6	Ⅱ－B2	後期中葉	胴上半部にタール状の付着物。
175	10	B4住居跡	白色粘土層	深鉢	口縁突起	10YR5/4鈍い黄褐	深鉢口縁部に付される突起部分で、先端部欠損。中空の棒状突起に襞状の隆帯が螺旋を描くように貼付される。				－	－	－	8.6	4.7	Ⅱ－B2	後期中葉	
176	12	B4住居跡	覆土(Q2)	壺	口縁～頸	10YR6/4鈍い黄橙	単節斜行縄文。	RL		ナデ	(21.0)	－	－	(11.7)	0.9		後期	
177	310	B4住居跡	覆土	深鉢	口縁		内外面ともに無文、ミガキ。口唇内側がやや内彎して膨らみ、口唇部が平坦気味である。			ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
178	311	B4住居跡	覆土	深鉢	口縁		内外面ともに磨かれ無文。口唇内側が内彎して膨らむ。断面は丸みを帯びている。									Ⅱ－B2	後期中葉	
179	318	B4住居跡	覆土(Q2)	壺	胴		沈線区画内に地文充填。地文は一部、異方向回転の羽状縄文となっている。	RL		無調整						Ⅱ－B2?	後期中葉	
180	313	B4住居跡	覆土	深鉢	胴		磨り消しの帯縄文(鍵状?)。	RL		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
181	317	B4住居跡	覆土下位? (炉の北東側)	壺	胴		帯縄文(S字状?)。	0段多条RL	充填	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
182	316	B4住居跡	覆土下位? (炉の北東側)	壺	頸		無文帯を挟んで上下に刻み目帯。			ナデ							後期	B4住に伴うか不確実。
183	315	B4住居跡	覆土(Q2)	鉢?	頸?		平行沈線文。沈線は横U字状に引かれる。沈線間には地文。	RL		ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	
184	11	B4・5住居跡	覆土	壺	口縁～頸	7.5YR3/2黒褐	全面にミガキ。無文。			ナデ	9.2	－	－	6.2	0.6	Ⅱ－C?	後期後葉?	いずれに帰属するか不確か。
185	14	B5住居跡	貼り床層	壺	口縁～頸	10YR2/3黒褐	斜行縄文。口縁部下位は沈線により区画され、区画内はミガキにより無文化。	LR			(18.8)	－	－	(10.5)	0.7	Ⅱ－B2	後期中葉	反転実測。
186	13	B5住居跡	炉・焼土層	深鉢	頸～胴	7.5YR6/4鈍い橙	口縁部との境界には縦位の刻み帯。文様帯には帯縄文(鍵状)が展開し、単節斜行縄文が充填される。胴部は欠損しており詳細不明であるが、残存部分は無文。	RL	充填	ナデ			(5.9)			Ⅱ－B2	後期中葉	「覆土焼土層」と接合
187	319	B5住居跡	覆土(焼土下層)	深鉢	口縁		両面ミガキで無文。口縁端の内側が肥厚・内彎、口唇が平坦化している。			ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
188	320	B5住居跡	覆土	深鉢	口縁		内外面ともに無文、ミガキ。口唇はやや肥厚、断面形状は尖り気味である。			ミガキ							後期	
189	321	B5住居跡	覆土	深鉢	口縁		口縁窪部が肥厚。口縁に沿って沈線が引かれて区切られ、口唇側に縦位刻みが連続する。			ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	
190	323	B5住居跡	覆土	鉢	胴		5本の横位沈線。沈線間に地文。沈線以下は無文。	RL		ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	
191	15	B5住居跡	炉・焼土層	鉢?	胴～底		横の沈線1条が引かれる他は、ナデにより無文となる。			ナデ	－	－	(8.8)	(4.9)	0.8		後期	一部反転実測。
206	329	B6住居跡	煙道部覆土上位	深鉢	口縁突起		全面ミガキにより無文。外面には曲線的な沈線。									Ⅱ－B2	後期中葉	
207	328	B6住居跡	煙道部覆土下位	浅鉢?	口縁		無文。			ナデ							後期	
208	330	B6住居跡	煙道部覆土下位	深鉢	胴		平行沈線文。沈線は横U字状に引かれる。沈線間には地文。	LR		ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	
209	331	B6住居跡	カマド脇Pit覆土	鉢	口縁～胴		口縁部は磨かれて無文帯。胴部には重畳する平行沈線文(横位沈線7本以上)を縦位弧線により区切る。	LR		ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	
210	18	B6住居跡	カマド煙道部覆土	深鉢?	胴下半～底	10YR6/3鈍い黄褐	縄文施文部分が僅かであるが、残存部から推定して異種原体による羽状縄文となる可能性大。	LR、RL			－	－	7.5	(4.9)	0.8		後期	B10住状に帰属する可能性大。
211	116	B6住居跡	カマド煙道部覆土下位	浅鉢	胴～底	10YR7/4鈍い黄橙	太く浅い二重引きの沈線が横に引かれる。			ナデ	－	－	(2.1)	(2.5)	0.5		後期	
212	31	B8住居跡	床面	鉢	口縁～胴	7.5YR5/6明褐	曲線的な帯縄文。区画内には二種の原体による非結束羽状縄文。	0段多条RL・LR	充填	ナデ	(10.7)	－	－	(10.8)	0.6	Ⅱ－B2	後期中葉	
213	344	B8住居跡	床面	壺	口縁～頸		口縁部は無文帯を挟んで上下に縄文帯が巡る。頸部には帯縄文。地文は羽状縄文か。	0段多条LR	磨消	ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
217	351a	B8住居跡	覆土(Q2)	鉢	口縁		直線・弧線の沈線文が施される。文様のモチーフは幾何学的である。地文を欠く。			ナデ						Ⅱ－A	後期前葉	堀之内Ⅱ式併行か。
218	350	B8住居跡	覆土	深鉢?	口縁		波状口縁。口縁は内面が膨らんで肥厚し、波頂部には隆帯状の高まりがある。文様帯には帯縄文が展開。地文は非結束羽状縄文。	0段多条LR・RL		ナデ						Ⅱ－C?	後期後葉?	
219		B8住居跡	覆土	深鉢	口縁		口縁に刻み目帯。			ナデ						Ⅱ－B3	後期中葉	
220	345a	B8住居跡	覆土(Q3)	深鉢	口縁		口縁端部には二重沈線が引かれ、口唇部に二股の瘤が貼付される。口唇部は内面が膨らみ、丸みを帯びる。文様帯は無文。	0段多条RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
221	346	B8住居跡	覆土(Q2)	深鉢	口縁		異方向回転による羽状縄文。	0段多条RL		ナデ							後期	
222	345b	B8住居跡	覆土	壺	頸		横位の沈線により区画された幅狭い縄文帯に、二股の瘤が貼付される。	0段多条RL								Ⅱ－B2	後期中葉	
223	353	B8住居跡	覆土(Q3)	深鉢	胴		太めの沈線による区画文。	RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	内面に焦げ状付着物。
224	352	B8住居跡	覆土(Q2)	深鉢	胴		2種の原体による非結束羽状縄文。	RL、0段多条LR		ナデ							後期	
226	356	B9住居跡	床面	深鉢	口縁～胴		斜行縄文。	LR		ナデ							後期	
227	35	B10住居状	覆土上位	壺	口縁～頸	7.5YR2/3極暗褐	口縁上半に縄文帯。地文は非結束羽状縄文。以下は無文。	LR、RL	磨消	ナデ	17.2	－	－	(12.2)	0.6	Ⅱ－B2	後期中葉	
228	32	B10住居状	覆土	深鉢	口縁～胴	10YR8/6黄橙	斜行縄文。	RL		ナデ	(45.7)	(45.7)	－	(33.7)	0.8	Ⅱ－B2?	後期中葉	
229	33	B10住居状	覆土上位	深鉢	口縁	7.5YR2/3極暗褐	ミガキにより無文。			ミガキ	(29.9)	(29.9)	－	(7.0)	0.7	Ⅱ－B2	後期中葉	
230	34	B10住居状	覆土(Q1)	鉢	口縁～胴	5YR4/8赤褐	口縁部が磨かれ無文。胴部には磨り消しによる帯縄文(鍵状?)が展開。	LR	磨消	ナデ	(20.4)	(20.4)	－	(8.5)	0.7	Ⅱ－B2	後期中葉	
231	359	B10住居状	覆土(Q2)	深鉢	口縁		口容内面が顕著に肥厚。斜行縄文。	0段多条LR		ミガキ							後期	
232	358	B10住居状	覆土上位	深鉢	口縁		横位に流れる櫛歯文(5条一単位)。			ミガキ						Ⅱ－C?	後期後葉?	砂粒混入。
233	357	B10住居状	覆土上位	鉢	口縁		斜行縄文。	LR		ミガキ							後期中～後葉?	
234	361	B10住居状	覆土上位	深鉢	胴		4条の横位平行沈線+斜位区切り沈線。									Ⅱ－B1?	後期中葉	
235	363	B10住居状	覆土上位・検出面	鉢	口縁		沈線による区画へ縄文充填。	LR	充填	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
236	364	B10住居状	覆土	深鉢	胴		縄文施文→横位平行沈線	LR		ミガキ						Ⅱ－B1	後期中葉	十腰内Ⅱ式併行
237	365	B10住居状	覆土	鉢	胴		口縁部は無文帯、胴部下半に横位の平行沈線+垂下する蛇行沈線。	LR		ミガキ						Ⅱ－B1	後期中葉	十腰内Ⅱ式併行
239	36	B11住居跡	南西壁際床直	台付鉢	胴～底	10YR7/4鈍い黄橙	口縁部は欠損により不明。頸部に刻み目帯。胴部には変形入組み文が展開。充填される縄文は非結束羽状縄文。	LR、0段多条LR	充填	ナデ	－	(10.9)	(6.1)	(10.0)	7.5	Ⅱ－B2	後期中葉	形状に歪みあり、上面観が楕円形を呈する。
240	368	B11住居跡	床面(西側)	深鉢	口縁		斜行縄文	LR		ナデ							後期	
241	399	B11住居跡	床面(西側)	注口?	胴		微隆起線文による入り組み状のモチーフ			ナデ						Ⅱ－B2?	後期中葉	新地式?
243	117	B11住居跡	覆土上位	深鉢?	口縁突起?	10YR5/4鈍い黄褐	欠損により詳細不明であるが、先端に縦位の刻みが入った二股状と思われる。輪郭に沿って浅い沈線が引かれ、低い貼り瘤が貼付される。	RL			－	－	－	(4.6)	1.1	Ⅱ－C?	後期後葉?	
244	375	B11住居跡	覆土上位	鉢?	口縁		口端刻目。非結束羽状縄文。	0段多条LR・RL	磨消	ミガキ						Ⅱ－B3?	後期中葉	
245	382	B11住居跡	掘り方覆土	深鉢	口縁		非結束羽状縄文。	RL・LR	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
246	367	B11住居跡	覆土	鉢	口縁		口縁端部肥厚。口端刻目。同一原体異方向回転の羽状縄文	LR	磨消	ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	
247	369	B11住居跡	覆土	深鉢?	口縁		口端刻目			ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	色調	文様の特徴	施文原体	施文方法(文様帯)	内面調整	計測値(cm) 口径	最大径	底径	器高	器厚	分類	時期	備考
248	379	B11住居跡	覆土(中央部黒色土)	壺?	口縁		▪沈線文	RL	磨消	ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
249	370	B11住居跡	覆土	浅鉢?	口縁		口端2条の平行沈線。二股状貼瘤。			ミガキ							後期	
250	373	B11住居跡	覆土上位	深鉢	口縁		斜行縄文	LR		ナデ							後期	
251	366	B11住居跡	覆土	深鉢	口縁		斜行縄文。	0段多条RL		ミガキ							後期	
252	374	B11住居跡	覆土上位	深鉢	口縁		撚糸文			ナデ						Ⅱ－C?	後期後葉?	
253	120	B11住居跡	覆土上位	壺	胴	5YR6/8橙	やや扁平な瘤状突起が貼付される。突起の中央は縦位沈線が引かれ二股状となり、横に貫通する孔が穿たれる。胴部には横位・斜位の浅い沈線文が展開。			ナデ	－	－	－	(4.3)	0.5	Ⅱ－B2?	後期中葉	
254	398	B11住居跡	覆土(中央部黒色土)	壺?	胴		頸部に刻目帯	LR		ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
255	385	B11住居跡	覆土	注口?	胴		羽状縄文	0段多条RL・LR	充填?	ケズリ						Ⅱ－B2	後期中葉	
256	397	B11住居跡	覆土(中央部黒色土)	壺?	胴		沈線の区画文。	0段多条RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
257	386	B11住居跡	覆土上位	深鉢?	胴		斜行縄文	LR		ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
258	395	B11住居跡	覆土	壺?	口縁		非結束羽状縄文。	0段多条RL・LR		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
259	402	B11住居跡	覆土上位	壺?	胴		非結束羽状縄文。	0段多条RL・LR		ナデ							後期	
260	403	B11住居跡	覆土・検出面	深鉢	胴		非結束羽状縄文。	0段多条RL・LR	磨消							Ⅱ－B2	後期中葉	
262	118	B11住居跡	覆土上位	深鉢	底	10YR6/3鈍い黄橙	無文。底部は粗いケズリ。			ナデ	－	－	〔10.0〕	(1.4)	0.6		後期	
269	40	B12住居跡	床面(Q2)土器①	台付鉢	口縁～底	7.5YR7/4鈍い橙	口縁は突起様貼付ある平縁で、内側して断面「く」字状。胴部に細く浅い沈線による弧線文。内面には文様はない。台部は高さあるものの底面凹凸あり安定感を欠き、雑な印象。	0段多条RL		ナデ	〔9.5〕	〔9.5〕	〔5.3〕	(8.0)	0.5	Ⅱ－B3?	後期中葉	胎土脆い。
270		B12住居跡	覆土	深鉢?	突起		▪棒状の中空突起で、欠失している先端部が円盤状に拡がるものと思われる。襞状の隆帯が螺旋状に添付されている。									Ⅱ－B2	後期中葉	
271	411	B12住居跡	覆土②層(Q1)	深鉢	口縁		斜行縄文	RL		ナデ							後期	
272	412	B12住居跡	覆土②層(Q1)	深鉢	口縁		櫛歯文									Ⅱ－C	後期後葉	
273	426	B12住居跡	覆土②層(Q1)	壺	胴		曲線的な沈線区画に非結束羽状縄文を充填。二股の貼り瘤。	0段多条LR・RL	充填	ナデ						Ⅱ－C?	後期後葉?	
274	427	B12住居跡	覆土②層(Q1)	深鉢?	胴		曲線的な沈線区画に非結束羽状縄文を充填。	0段多条LR・RL	充填	ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	
275	431	B12住居跡	覆土③層	壺?	胴		上半は磨かれて無文。下半は非結束羽状縄文だが、不正整。	0段多条LR・RL	磨消?	丁寧なナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
276	428	B12住居跡	覆土②層(Q1)	鉢?	胴		弧状の沈線区画の帯縄文?。	RL	充填	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
277	436	B12住居跡	覆土②層	深鉢	胴		上半は磨かれて無文。下半は斜行縄文。	RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
278	437	B12住居跡	覆土②層	壺	頸～胴		頸部に刻み目帯、帯縄文。	LR, RL	磨消	指の圧痕						Ⅱ－B2	後期中葉	
279	424	B12住居跡	覆土②層(Q1)	深鉢	胴		全面に異方向回転の羽状縄文が横走する。	0段多条LR		ナデ							後期	
280	438	B12住居跡	覆土②層	深鉢	胴		弧状の沈線区画による木葉状文。非結束の羽状縄文。	LR, RL	充填	ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	煤状の付着物。
281	430	B12住居跡	覆土①層(Q2)	鉢	胴		沈線区画の帯縄文。区画内には非結束の羽状縄文を充填する。	LR, 0段多条RL	充填	ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	429と同一個体。
282	41	B12住居跡	覆土2層下位(Q2)	注口	胴～底	7.5YR7/6橙	口縁部・注口部を欠損。胴部には沈線により区画された帯縄文が展開する。区画の沈線はやや雑で、地文にも整正さを欠き、磨り消しも不充分で雑。胴部上半に貫通孔あり(注口接着部分)。胴部中位には二股の貼り瘤が付されている。	LR	充填	ナデ	－	〔8.6〕	〔2.0〕	(7.0)	0.5	Ⅱ－B2	後期中葉	
283	410	B12住居跡	覆土①層(Q1)	深鉢	口縁		入り組み状文。貼瘤．非結束羽状縄文。	LR・RL	磨消?							Ⅱ－B2	後期中葉	
284	413	B12住居跡	覆土①層(Q2)	壺?	口縁		斜行縄文	RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
285	414	B12住居跡	覆土①層(Q2)	深鉢	口縁部		斜行縄文	LR		ナデ							後期	
286	408	B12住居跡	覆土①層(Q1)	深鉢	口縁		斜行縄文	0段多条RL		ミガキ							後期	
287	435	B12住居跡	覆土①層	深鉢?	口縁		櫛歯状工具による細く浅い平行沈線(櫛目文)。			ケズリ						Ⅱ－C?	後期後葉?	
288	429	B12住居跡	覆土①層(Q2)	鉢	胴		沈線区画の帯縄文。区画内には非結束の羽状縄文を充填する。	LR、0段多条RL	充填	ナデ						Ⅱ－C?	後期後葉?	430と同一個体。
290	405	B12住居跡	覆土	壺	口縁		入り組み状文	0段多条RL・LR	磨消	ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	十腰内Ⅳ式併行
291	406	B12住居跡	覆土	鉢?	口縁		口端刻目			ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	
292	417	B12住居跡	覆土	深鉢	胴		平行沈線文。地文を欠く。			ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	
293	421	B12住居跡	覆土(Q1)	壺	胴		胴上半に帯縄文(櫛掛け状?)。縄文は非結束羽状縄文。	LR、0段多条RL	充填	ナデ						Ⅱ－C?	後期後葉?	
294	416	B12住居跡	覆土	壺	胴		帯縄文。縄文は非結束羽状縄文。	0段多条LR・RL	充填	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
301	47a	B13住居跡	覆土(6層)	注口	胴～底	10YR2/1黒	曲線的な沈線文。地文を施さず、全面にミガキ。			ナデ	－	(12.5)	－	(6.5)	0.6	Ⅱ－B2	後期中葉	
	47b				47b					頸～胴	－	(9.8)	－	(3.1)	0.5			
302	452	B4住居跡?	覆土上位?	深鉢	口縁～胴		緩やかに外径し開く器形で、口縁部で僅かに内劈。口唇は丸みあり、内面個がやや張る。全面に単節斜行縄文。	RL		ナデ							後期	「B13住北傾」で採取。
303	51	B13住居跡	覆土上位(Q1)	壺	口縁～頸	10YR5/2灰黄褐	口縁部が外反してラッパ形に開く。無文で、全面ミガキにより光沢あり。頸部の縦れ部分に連続的な刺突。			ミガキ、ナデ	〔9.6〕	－	－	(6.6)	0.8	Ⅱ－C?	後期後葉?	
304	439	B13住居跡	覆土・検出面	深鉢	口縁		大波状口縁。口縁端部の外面に刻み目帯が巡り、内面はやや膨らんで張出す。			ナデ						Ⅱ－B3	後期中葉	
305	462	B13住居跡	覆土下位～床面	鉢?	口縁		磨り消しによる帯縄文で、単節斜行縄文を施文。	LR		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
306	441	B13住居跡	覆土上位	深鉢	口縁		口縁部が肥厚して丸みを帯びる。斜行縄文	RL		ナデ							後期	
307	442	B13住居跡	覆土上位	深鉢	口縁		口縁端部が肥厚。口唇は丸みあり。斜行縄文	RL		ナデ							後期	
308	446	B13住居跡	カマド覆土	深鉢	口縁～胴		口縁部は緩やかに外反した後、僅かに内劈。口縁は肥厚せず、口唇は平坦。斜行縄文。	RL		丁寧なナデ							後期	
309	455	B13住居跡	覆土	壺	胴上半		磨り消しによる帯縄文で、単節斜行縄文を施文。	LR		指の圧痕、ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
310	49	B13住居跡	覆土(3層)	台付鉢	底(台部)	10YR5/3鈍い黄褐	胴部との境界部に二重沈線・刻み。台部は二種の原体による非結束羽状縄文。	LR、RL		ナデ	－	－	6.8	(3.6)	0.6	Ⅱ－B2?	後期中葉	
311	50	B13住居跡	覆土(6層)	台付鉢	底(台部)		無文。			ナデ	－	－	6.4	(4.3)	0.8		後期	
312	52	B14住居跡	覆土上位(Q1)	壺	胴～底	10YR4/3鈍い黄褐	鍵状の帯縄文。無文部は丁寧なミガキにより光沢あり。	LR		ケズリ	－	－	4.0	(6.3)	0.6	Ⅱ－B2	後期中葉	
313	53	B14住居跡	床面	壺	口縁～頸	5YR3/4暗赤褐	口縁部やや肥厚し、同一原体異方向回転による羽状縄文。口縁部以下はミガかれて無文。	LR	磨消	ナデ	9.6	－	3.3	(6.0)	0.7	Ⅱ－B2	後期中葉	
314	54	B14住居跡	覆土下位(Q1)焼土混入層	壺	口縁～頸	5YR5/6明赤褐	口縁部は沈線区画され、単節斜行縄文が付される。以下は無文帯となる。口唇部は肥厚せず、丸みを帯びる。	RL	磨消	ナデ	〔18.4〕	－	－	(11.4)	0.8	Ⅱ－B2	後期中葉	
315	55	B14住居跡	覆土	深鉢	口縁		口縁部が肥厚し、連続的な縦位の刻み。口唇部は平坦。内外面ともにミガキで光沢あり。			ミガキ	－	－	－	(6.4)	0.6	Ⅱ－B3	後期中葉	
316	480	B14住居跡	覆土(焼土混入層)	深鉢	口縁		波状口縁で波頂部に突起が付される。口唇は肥厚し内面に膨らみ段となる。口縁にそって刺突状の刻み目帯が巡り、波頂部突起部では刻み目帯が弧状に垂下している。			ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	
317	472	B14住居跡	覆土	深鉢	口縁		波状口縁。口縁端部の外面に刻み目帯が巡り、内面は僅かに張出す。			ナデ						Ⅱ－B3	後期中葉	
318	482	B14住居跡	覆土(Q2)	深鉢?	口縁突起		大形の扁れ状の突起片。弧状の深い沈線。									Ⅱ－B2	後期中葉	
319	479	B14住居跡	覆土(Q2)	深鉢	口縁		口縁以下に鍵状の帯縄文。口縁端はやや肥厚。	RL	充填	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
320	481	B14住居跡	覆土(焼土混入層)	鉢?	口縁		沈線区画文。	0段多条RL	充填	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
321	483	B14住居跡	覆土(Q2)	壺	口縁		口縁部は外反。口縁に縄文帯、同一原体異方向回転の羽状縄文を施文。	0段多条RL	磨消?	ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
322	485	B14住居跡	覆土(Q2)	深鉢	口縁		変形鍵状?の帯縄文。口縁端部が肥厚して内側で膨らむ。	RL	充填	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	外面の一部に焦げ付着。
323	56	B14住居跡	覆土下位(Q1)	深鉢	口縁	10YR5/4鈍い黄褐	斜行縄文。補修孔(2箇所)あり。内面は丁寧なミガキ。	RL		ミガキ	〔39.8〕	－	－	(8.5)	0.7		後期	
324	474	B14住居跡	覆土	深鉢	口縁		単節斜行縄文。口唇部は平坦。口縁はやや内劈。	RL		ナデ							後期	
325	478	B14住居跡	覆土(Q2 [illegible]際)	深鉢	口縁～胴		斜行縄文。口縁内面が肥厚して膨らむ。	RL		ナデ							後期	
326	477	B14住居跡	覆土(焼土混入層)	深鉢	口縁～胴		斜行縄文。	LR		ナデ							後期	内面上部に煤付着。
327	475	B14住居跡	覆土	深鉢	口縁		口唇部やや丸みあり。斜行縄文。	RL									後期	
328	488	B14住居跡	覆土(Q1)	深鉢?	底		底面中央に網代痕(2本送り1本潜り1本越え)あり。網代痕部分は著しく窪んでおり、結果的に上げ底状となっている。			ナデ(粗)							後期	
329	60	B15住居跡	覆土上位(Q2)	深鉢	口縁～頸		口縁部が大振りな波状(おそらく5単位)。口縁端部は肥厚し、沈線区画内には縦位の連続的な刻みが付されるが、以下はミガキにより無文化。口縁部と頸部の境は連続する縦位の刻みを伴う隆帯で区切られ、磨り消しによる帯縄文が展開。	RL	充填?	ミガキ、ナデ	－	－	－	(12.3)	0.7	Ⅱ－B2	後期中葉	反転実測。
330	59	B15住居跡	覆土上位	壺	頸～底	7.5YR4/6褐	鍵状の帯縄文。同一原体の異方向回転による羽状縄文。無文部は丁寧なミガキ。	LR	充填	ナデ	－	－	3.3	(6.6)	0.6	Ⅱ－B2	後期中葉	

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	色調	文様の特徴	施文原体	施文方法(文様帯)	内面調整	計測値(cm) 口径	最大径	底径	器高	器厚	分類	時期	備考
331	491	B15住居跡	覆土上位(Q3)	深鉢	口縁		波状口縁の波頂部片。口縁に沿って沈線が巡り、刺突状の刻み目が付される。			ミガキ	Ⅱ－B3						後期中葉	
332	495	B15住居跡	覆土上位(Q1)	深鉢	胴		沈線区画文。	RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
333	493	B15住居跡	覆土上位(Q1)	深鉢	胴		鍵状？の帯縄文。区画内の縄文は羽状縄文的であるが崩れている。	RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
334	494	B15住居跡	覆土上位(Q1)	深鉢	胴		鍵状？の帯縄文。	RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
335	496	B15住居跡	覆土上位(Q2)	深鉢	頸		大波状口縁を呈する深鉢の頸部付近の破片か。頸部に丸棒状工具？による刻み目帯。			ミガキ						Ⅱ－B3？	後期中葉	
336	497	B15住居跡	覆土下位(Q3)	深鉢	胴		斜行縄文。施文がいい加減。	RL		ナデ							後期	
337	58	B15住居跡	覆土上位(Q2)	深鉢	胴下半～底	10YR6/3鈍い黄橙	斜行縄文。底部付近はナデにより無文化。	RL		ナデ	－	－	9.6	(5.0)	1.0		後期	
338	66	B16住居跡	炉脇床面	浅鉢	口縁～胴	7.5YR4/2灰褐	口縁は平縁で肥厚し、縦の刻みをもつ貼瘤(おそらく6単位)が貼付される。口唇部は平坦で、内側が内彎気味に張り出し、断面三角形状。口縁過部が沈線で区画され、縦位の連続刻み目。胴部中位にも二重沈線＋刻みが付され、その上下に帯縄文が展開する。文様内には同一原体異方向回転の地文が施される。文様の流れに沿った羽状縄文を意図していると思われるが、施文がややいい加減で崩れている。	0段多条LR	充填？	ナデ	33.7	33.7	－	(9.9)	0.6	Ⅱ－C	後期後葉	
339	69	B16住居跡	床面	壺	準完形	10YR2/2黒褐	口唇はやや肥厚し丸みをもつ。口縁部は沈線により区画され無文化。無文帯の上下には縦位の刻み帯。胴部は縦状の帯縄文が展開し、区画内の地文は、上部では同一原体異方向回転の羽状縄文、下位は文様の流れに沿って方向を変えた斜行縄文で一部羽状的である。底部は丁寧なナデ調整。	0段多条RL	充填	ミガキ、ナデ	11.2	16.0	4.5	14.3	0.6	Ⅱ－B3？	後期中葉	
340	504	B16住居跡	炉脇床面	壺	口縁		口縁に沈線区画された縄文帯、以下は無文。口縁断面は内面がやや削げて尖る。	RL		ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
341	506	B16住居跡	覆土上位	壺？	口縁		沈線区画文。	0段多条RL	磨消？	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
342	509	B16住居跡	覆土上位	壺？	胴		鍵状？の区画文。	0段多条RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
343	503	B16住居跡	覆土(焼土層)	深鉢	口縁		斜行縄文。	LR		ナデ							後期	内面に焼け跡。
344	124	B16住居跡	覆土上位	深鉢	底	10YR6/3鈍い黄橙	底面に網代痕(1本送り3本潜り3本越え)。			ナデ	－	－	11.2	(1.8)	0.5		後期	
345	65	B16住居跡	覆土上位	深鉢	胴下半～底	5YR5/6明赤褐	斜行縄文。	RL		ナデ	－	－	10.2	(6.8)	0.7		後期	胎土に金雲母やや多。
346	63	B16住居跡	覆土上位	深鉢	胴下半～底	10YR6/4明黄褐	斜行縄文。底部付近はケズリにより無文となり、一部縄文が消されている。	RL		ナデ	－	－	(12.8)	(8.9)	0.8		後期	反転実測。
347	502	B15･16住居跡	覆土	壺	胴		斜行縄文。	RL		ナデ							後期	
348	501	B15･16住居跡	覆土	深鉢？	胴		沈線区画文。	0段多条LR	磨消	ナデ							後期	
349	61	B15･16住居跡	覆土	浅鉢	底	10YR2/2黒褐	ミガキにより無文化。			ナデ	－	－	(2.8)	(1.7)	0.5		後期	
350	67	B16住居跡	覆土上位	単孔	準完形	10YR2/1黒褐	壺形土器の胴部下位に穿孔された単孔土器。口縁部は2単位の波状で、波頂部には刻み目のある大形突起一対が付され、波底部にもやはり刻みを伴う小突起一対が貼付される。上面観では、大突起の位置が対向する位置より若干ずれている。口縁端部はやや肥厚して隆帯状となり、突起部から連続する縦位刻み列が施される。刻み帯以下はミガキにより無文となり頸部に向かって窄まる。頸部は丸みを帯びて膨れ、中位に刻み帯2列および貼瘤状の突起が付されるが、頸部の欠損著しいため突起の単位は不明である。胴部は張状に緩く膨れており、幾何学的な磨り消し縄文が施される。文様は、逆L・一・三日月・】状の組合せで構成され、文様部分が磨り消されてネガ・ポジが反転した形である。地文は同一原体異方向回転の羽状縄文であるが、原体は2種ある。地文の流れはある程度文様に沿っているが、下位ではやや崩れている。胴部下位、底部から2～3cmほど、大突起に対応する位置に孔1個が穿たれている。底部には網代痕(1本送り2本潜り1本越え)あり。	LR、0段多条LR	充填	ナデ	10.0	11.5	5.6	27.3	0.6	Ⅱ－B3	後期中葉	外面全体および口縁内面に赤色塗彩の痕跡あり。
352	517	B18住居跡	覆土	深鉢？	口縁		口縁に二又の山形突起。	RL？		ナデ							後期	
353	516	B18住居跡	覆土	深鉢	口縁		斜行縄文。口縁が肥厚し、内面が膨らむ。口縁の一部が焼け弾けて欠損しているが、欠損部分にも煤が付着している。	RL		ナデ							後期	内外面に煤付着。
354	519	B18住居跡	覆土	鉢	胴		4条以上の横位平行沈線＋縦位弧線の区切り。沈線は一単歯ぎで引かれる。沈線間には斜行縄文が付されている。	0段多条LR		ミガキ						Ⅱ－B1	後期中葉	
355	521	B18住居跡	覆土西半	鉢？	胴		沈線区画文。	RL		ナデ							後期	
356	522	B18住居跡	覆土西半	壺？	胴		沈線区画文。	LR		ナデ							後期	
358	526	B19住居跡	覆土	深鉢	胴		斜行縄文。	RL		ナデ							後期	
359	525	B19住居跡	覆土	深鉢	胴		斜行縄文。	LR		ナデ							後期	
360	71	B20住居跡	床面直上(土器2)	鉢	準完形	10YR2/2黒褐	口縁部は丹念に磨かれ光沢あり。胴部は地文を截る形で沈線が引かれる。沈線は横「几」字状に引かれ、沈線同士が連結して、文様帯を5段に分割している。文様帯以下はミガキにより無文。底部はナデ。	LR	磨消	ナデ	19.5	19.5	5.4	10.1	0.6	Ⅱ－B1	後期中葉	
361	530	B20住居跡	覆土	深鉢	胴		沈線区画文。	0段多条LR		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
362	529	B20住居跡	覆土	深鉢	胴		沈線区画文。	LR		ナデ							後期	
363	528	B20住居跡	覆土	壺	胴		沈線区画文で、区画内に羽状縄文。	LR？		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
364	102	A1建物跡(A5土坑)	覆土(検出面付近)	壺	胴～底	7.5YR5/4にぶい褐	胴部に釣手状の帯縄文が展開。地文は、最上位では異方向回転の羽状的であるが、中位以下は斜行縄文となっている。	RL	充填	ナデ	－	(16.2)	5.3	(9.7)	0.8	Ⅱ－B2	後期中葉	
365	103	A1建物跡(A5土坑)	覆土中～下位	深鉢	底	7.5YR5/3にぶい褐	無文(ナデ)。底部には網代痕(1本送り2本潜り1本越え)。			ナデ	－	－	11.4	(4.1)	1.0		後期	
366	728	A1建物跡(A5土坑)	覆土	鉢	口縁		斜行縄文。	0段多条RL		ミガキ							後期	
369	738	A1建物跡(A8土坑)	覆土	壺？	口縁		口端に連続する刺突状の刻み目帯。			ミガキ							後期	
370	737	A1建物跡(A8土坑)	覆土	深鉢	口縁		斜行縄文。	0段多条LR		ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	外面煤多量付着
371	724	A1建物跡(A1土坑)	覆土・検出面	深鉢	口縁		斜行縄文。	0段多条LR		ミガキ							後期	
372	782	A1建物跡(A1土坑)	覆土下位	深鉢	底		無文、ナデ。			ナデ							後期	
373	727	A1建物跡(A1土坑)	覆土・検出面	深鉢	胴		沈線文。										後期	
374	726	A1建物跡(A1土坑)	覆土・検出面	深鉢	胴		斜行縄文。	0段多条RL		ミガキ							後期	外面煤付着。
375	739	A1建物跡(A8土坑)	覆土	深鉢	胴		縄文施文→磨消→沈線	LR								Ⅱ－B2？	後期中葉	内面炭化物付着
376	729	A1建物跡(A5土坑)	覆土上位	深鉢	胴		縄文施文→沈線→磨消	LR	磨消	ナデ						Ⅱ－B2？	後期中葉	
377	730	A1建物跡(A5土坑)	覆土中位～下位	深鉢	胴		斜行縄文。	R(無節)									後期	内外面煤多量付着。
378	732	A6土坑	覆土	深鉢	口縁		斜行縄文。	LR？		ナデ							後期	
379	733	A6土坑	覆土	深鉢	胴		斜行縄文。補修孔あり。	0段多条LR		ミガキ							後期	
380	734	A7土坑	覆土	深鉢	口縁		無文、ミガキ。			ミガキ							後期	
381	735	A7土坑	覆土	鉢	胴		多条沈線による菱形文様。	LR		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	加曾利B2併行。
382	736	A7土坑	覆土	鉢	胴		多条沈線による菱形文様。	不明		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	加曾利B2併行。
383	740	B1土坑	覆土上位	深鉢	胴		縄文施文→磨消→沈線	RL		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
384	741	B5土坑	底面	深鉢	口縁部		平縁で口唇やや肥厚、斜位の擦痕			ミガキ							後期中葉	742と同一個体か。
385	742	B5土坑	底面	深鉢	胴部		斜位の擦痕			ナデ							後期	

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位		色調	文様の特徴	施文原体	施文方法(文様帯)	内面調整					計測値(cm)	分類	時期
											備考	口径	最大径	底径	器高			
386	743	B6土坑	覆土(底面付近)	深鉢	口縁部		≒大波状口縁、口端刻み目、ミガキ			ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	
387	744	B7土坑	覆土	深鉢	口縁		斜行縄文。	0段多条RL		ナデ							後期	
388	745	B9土坑	覆土	深鉢	口縁		斜行縄文。口縁部やや肥厚。	0段多条LR		ミガキ							後期	
389	746	B9土坑	覆土	深鉢	口縁		斜行縄文。口縁部やや肥厚。	RL		ミガキ							後期	
390	476	B9土坑	覆土	壺	口縁		頸部から緩やかに外反して口縁が開く。口縁部には縄文帯。	RL		ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
391	747	B12土坑	覆土	深鉢	口縁部		口端に刻み目、ミガキ			ナデ						Ⅱ－B3	後期中葉	内面炭化物付着
392	748	B12土坑	覆土・検出面	深鉢	胴		斜行縄文。	RL									後期	
393	749	B12土坑	覆土中位	深鉢	胴		斜行縄文。	LR									後期	
394	750	B12土坑	覆土・検出面	深鉢	胴		斜行縄文。	0段多条LR		ミガキ							後期	
395	104a 104b	B12土坑 B18土坑	覆土(検出面) 覆土中～下位	深鉢	口縁	10YR5/4鈍い黄褐	単節斜行縄文。	LR		ナデ	〔36.8〕	〔36.8〕	－	(10.8)	0.7		後期	B18土坑出土分と接合。 B12土坑出土分と接合。
396	752	B13土坑	覆土中位	深鉢	胴		斜行縄文。	0段多条RL									後期	
397	751	B13土坑	覆土中位	深鉢	胴		無文。			ナデ							後期	
398	754	B15土坑	覆土下位	深鉢	胴		ナデ。			ナデ							後期	胎土中に砂粒多。
399	753	B16土坑	覆土	壺?	口縁部		ミガキ										後期	
401	105	B19土坑	覆土中～下位	壺	口縁	5YR6/8橙	無文。			ミガキ	〔9.8〕	－	－	(4.7)	0.6		後期	
402	756	B19土坑	覆土	深鉢	口縁部		口端に刻み目									Ⅱ－B3	後期中葉	
403	757	B19土坑	覆土6層	壺?	頸部		刻み目									Ⅱ－B3	後期中葉	
404	755	B18土坑	覆土	深鉢	口縁部		口唇ミガキ	0段多条LR		ミガキ							後期	輪積み痕あり
405	758	B20土坑	覆土	深鉢	胴部		磨消縄文	0段多条RL									後期?	大木9式の可能性あり。
406	759	B23土坑	覆土中位～下位	深鉢	口縁部		平縁	0段多条LR		ナデ							後期	
407	760	B29土坑	覆土	深鉢	口縁部		磨消縄文	0段多条RL		ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
408	761	B29土坑	覆土	深鉢	口縁部		磨消縄文、縄文施文後沈線充填	0段多条RL		ミガキ						Ⅱ－B2?	後期中葉	
409	763	B1住床面土坑	覆土	深鉢	胴部		羽状縄文（非結束）										後期	
410	764	B33土坑	覆土	深鉢	口縁		斜行縄文。	RL									後期	
411	762	B30土坑	覆土中位	深鉢	胴部		擦痕									Ⅱ－C?	後期後葉?	内面焼けハジキ
412	107	B44土坑	覆土上位	深鉢	口縁～胴	2.5YR5/6明赤褐	単節斜行縄文。	RL		ナデ	〔39.0〕	〔39.0〕	－	(24.2)	0.8		後期	
413	766	B44土坑	覆土上位	深鉢	口縁		斜行縄文。	0段多条RL		ミガキ							後期	
414	765	B44土坑	覆土上位	深鉢	口縁部		波状口縁、著しく肥厚し、断面は三角形状			ミガキ						Ⅱ－B2?	後期中葉	
415	771	B44土坑	覆土	深鉢	胴部		刻み目帯、磨消帯	0段多条RL		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	内面炭化物付着
416	767	B44土坑	覆土上位	深鉢	胴部		縄文施文→磨消→沈線	0段多条RL		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
417	770	B44土坑	覆土	壺?	頸部		刻み目	RL								Ⅱ－B2	後期中葉	
418	769	B44土坑	覆土上位	深鉢	胴部		磨消縄文（クランク状）	RL								Ⅱ－B2	後期中葉	外面煤付着
419	768	B44土坑	覆土上位	深鉢	胴部		縄文施文→横位平行沈線	LR		ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	
420	108	B45土坑	覆土 Pot5	壺	口縁～胴	10YR5/2灰黄褐	口縁部は平縁で、やや外傾して開く。口唇は平坦だがやや外側に張り出して膨らむ。口縁上半に異方向回転の羽状縄文を施文した縄文帯。下半は無文帯。胴部には帯縄文(鍵状?)。	LR	充填	ナデ(頂部無調整	19.0	－	－	(17.5)	0.8	Ⅱ－B2	後期中葉	輪積み部で水平に欠損。
421	109	B45土坑	覆土	深鉢	口縁～胴	10YR4/3鈍い黄褐	口縁は平縁で、端部が僅かに内臂して内側に張り出す。口唇部は平坦。口縁・胴の文様帯が一体化しており、全面に鍵状の帯縄文が展開。	LR	充填	ナデ	〔28.6〕	〔28.6〕	－	(13.9)	0.7	Ⅱ－B2	後期中葉	内面一部に焦げ状の付着物。
422	110	B45土坑	覆土(Q1)	壺	口縁～頸	10YR3/2黒褐	外傾して開く口縁部で、口縁上方に縄文帯。口唇部は平坦で肥厚しない。	LR	磨消	ミガキ	〔10.3〕	－	－	(6.6)	0.5	Ⅱ－B2	後期中葉	
425	775	B45土坑	覆土	壺	口縁部		磨消縄文	LR		ミガキ							後期	
426	772	B45土坑	覆土	深鉢	口縁部		ミガキ			ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
427	774	B45土坑	覆土	深鉢	口縁部		縄文施文→磨消→沈線	0段多条LR		ミガキ							後期中葉	
428	773	B45土坑	覆土	深鉢	口縁部		縄文施文→磨消帯（楕円文）	LR		ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
430	785	B区pp20	覆土下位	深鉢	底		無文、ナデ。			ナデ							後期	
431	784	B区pp21	覆土下位	深鉢	胴		斜行縄文。	RL									後期	
432	787	B区pp78	覆土	深鉢	口縁		斜行縄文。	0段多条RL		ミガキ							後期	
433	911	6G～7G トレンチ	黒褐色土最下部 (Ⅲc層～Ⅳ層?)	深鉢	口縁	2.5YR6/8橙	原体末端結節のループ文が重畳的に施される。	結節		ナデ?						Ⅰ	前期前葉	胎土は脆く、繊維が多量混入,摩滅著しい。大木1式か。
434	1041	10D南東部	Ⅲc層	深鉢	頸～胴		縄文施文→沈線。渦巻き文様主体。	LR		ミガキ						Ⅰ	中期中葉	大木8a式。
435	789	A1配石下位	Ⅲc層	壺?	胴部		沈線による渦巻き文	LR								Ⅰ	中期中葉	大木8a式？
436	792	2H5c	Ⅲc層上面	深鉢	胴		斜行縄文。	LR									後期	外面煤付着
437	796	2I	Ⅲb層	鉢?	口縁部		口唇に刻み目、口縁に貼り付け隆線、刺突列	LR?								Ⅱ－B3?	後期中葉	
438	798	3H	Ⅲb層下位	鉢?	胴部		充填縄文、刺突列	RL		ミガキ						Ⅱ－B2?	後期中葉	
439	797	3I	Ⅲc層	深鉢	口縁部		波状口縁、口端刻み目									Ⅱ－B3	後期中葉	
440	127	3J	Ⅲb層上面	壺	胴～底	7.5YR6/4鈍い橙	磨り消しの帯縄文(鍵状文)。	LR	充填	無調整	－	〔9.6〕	〔3.0〕	(6.9)	0.9	Ⅱ－B2	後期中葉	
441	800	4G	Ⅲc層下位～Ⅳ層	深鉢	口縁部		磨消縄文	0段多条RL		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
442	802	4G水路跡	覆土(砂層→Ⅱ層)	深鉢	胴部		縄文施文→沈線→磨消	RL		ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
443	804	4H	Ⅲc層	壺	頸部		二段の刻み目帯	LR								Ⅱ－B3?	後期中葉	
444	807	4I斜面部	Ⅲc層	深鉢	口縁部		磨消縄文	LR		ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
445	128	4I	Ⅲb層	深鉢	胴～底	7.5YR5/4鈍い褐	上方(胴中位?)に横位沈線。以下、底部まで地文。底面はケズリ。	RL		ナデ	－	－	6.8	(7.9)	0.6		後期	
446	129	5E	Ⅱ層	注口	完形	10YR3/1黒褐	楕円形状の壺形土器の胴部やや上方に注口部が付された形状。器表全面が磨かれて光沢をもつ。口頸部は短く、4単位の貼り瘤が対向する位置に付される。胴部には浅い弧状の沈線で文様が表現され、浮き彫り状の効果を醸している。胴部やや上方、注口部の対向位置には把手状の貼り付けがなされ、注口部－把手に直交する位置には二股の小貼り瘤が付されている。			ナデ	3.8	7.8	1.8	6.4	0.5	Ⅱ－B2?	後期中葉	
447	811	5F4e	Ⅲb層下位	深鉢	口縁部		羽状縄文（非結束）	0段多条LR・RL									後期	
448	788	5F躍群周辺	Ⅲc層	深鉢	口縁部		口縁無文帯、頸部に平行沈線	LR								Ⅱ－B1	後期中葉	
449	812	5F4e	Ⅲb層下位	深鉢	口縁部		口端に二段の刻み目列、羽状縄文（非結束）	LR・RL								Ⅱ－B3?	後期中葉	
450	814	5F5e	Ⅲb層下位	鉢	口縁部		複数段の刻み目帯、羽状縄文（非結束）	LR・RL								Ⅱ－B3?	後期中葉	
451	830	5G4e	Ⅲb層	鉢	口縁部		縄文施文→磨消→沈線	LR		ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	
452	844	5G4d	Ⅲc層	壺?	胴		縄文施文→沈線区画→磨消	0段多条RL	磨消	ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
453	825	5G南端付近	Ⅲc層	壺	口縁		口縁部に縄文帯。縄文施文→沈線→磨り消し,であるが磨きが甘く、一部に縄文が残る。	RL								Ⅱ－B2	後期中葉	
454	829	5G4b～4c	Ⅲc層	深鉢	口縁部		大波状口縁、口端刻み目			ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	
455	828	5G4d	Ⅲc層	深鉢	口縁部		大波状口縁、口端刻み目			ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	454と同一個体。
456	820	5G	Ⅲc層	深鉢	口縁部		磨消縄文	RL		ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
457	832	5G	Ⅲc層	深鉢	胴		縄文施文→磨消→沈線区画	0段多条RL	磨消	ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
458	141	5G西端付近	Ⅲc層	深鉢?	底	10YR6/3鈍い黄橙	無文。底面はケズリ。			ナデ	－	－	6.6	(1.3)	0.7		後期	
459	132	5H1c	Ⅰ層(客土)	深鉢	口縁～胴	10YR6/4鈍い黄橙	口縁は大波状(おそらく5単位)。口縁部は無文であり、口唇に沿って刻み列を伴う貼り付け隆帯が付されて肥厚する。頸部にもやはり刻み帯が巡る。胴部は磨り消しによる帯縄文(鍵状)が展開する。	0段多条RL	磨消	ナデ	－	－	－	(13.9)	0.7	Ⅱ－B3	後期中葉	
460	138	5H1c	Ⅰ層(客土)	壺	口縁～胴	5YR6/4鈍い橙	口縁部はやや肥厚して連続する刻みが巡る。口唇は丸みを帯びる。口縁と胴部の文様帯は一体化しており、鍵状の帯縄文が施文されている。	0段多条RL	充填?	ナデ	〔19.6〕	〔19.6〕	〔7.6〕	(10.6)	0.7	Ⅱ－B3?	後期中葉	
461	856	5H1e～2e	Ⅲc層	壺	口縁		口縁が著しく外傾して開く。口縁は縄文帯、頸部は無文帯。	RL		ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	色調	文様の特徴	施文原体	施文方法(文様帯)	内面調整	計測値(cm) 口径	最大径	底径	器高	器厚	分類	時期	備考
462	855	5H1e～2e	Ⅲc層	壺?	口縁		口縁部に沈線区画の縄文帯。	0段多条RL		ミガキ							後期	
463	854	5H1e～2e	Ⅲc層	深鉢	口縁		整った斜行縄文。口唇は丁寧なミガキで、断面形は丸みあり。	RL		ナデ							後期	外面煤付着
464	871	5H1e～2e	Ⅲc層	深鉢	胴		非結束羽状縄文施文→沈線→磨消	LR・RL		ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
465	136	5H1e～5H2e	Ⅲc層	台付鉢	底(台部)	7.5YR6/6橙	上げ底の台部分のみ残存。上半は無文。下半には縄文帯が巡り、同一原体異方向回転の羽状縄文が施文される。底部は粗いケズリ。	RL		ナデ							後期	
466	860	5H2b～4H5bトレンチ	Ⅲc層	深鉢	口縁部		縄文施文→磨消→沈線区画	LR	磨消	ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
467	865	5H2b～4H5bトレンチ	Ⅲc層	壺?	胴		頸部に刻み目、沈線→縄文施文→ミガキ	LR	充填	ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	
468	870	5H2d	Ⅲc層(－10cm)	壺?	胴		沈線	無紋		ケズリ						Ⅱ－B2?	後期中葉	
469	872	5H2e～5I2a	Ⅲc層	深鉢	胴		縄文施文→沈線区画→磨消	0段多条RL	磨消	ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
470	880	5H3b～5H4b	Ⅲc層	鉢	口縁		口縁には刻み目を伴う隆帯。以下には直線的な区画の磨り消し縄文。	0段多条RL		ナデ						Ⅱ－B3	後期中葉	
471	884	5H3b～5H4b	Ⅲc層	深鉢	胴		斜行縄文。	0段多条RL		ケズリ、ナデ							後期	
472	878	5H3c	Ⅲc層	深鉢	口縁		口縁端部がやや肥厚し、著しく内彎。口唇はナデ整形されるが雑で、丸みあり。	LR		ナデ							後期	
473	883	5H3c	Ⅲc層(－10cm)	深鉢	胴		磨り消し縄文。	RL		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
474	877	5H3d	Ⅲc層	壺	口縁		下部に文様帯区切りの横位沈線、上位に斜行縄文。	LR		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
475	876	5H3d	Ⅲc層上位	深鉢	口縁		口縁端部が肥厚。口唇丸みあり。斜行縄文。	LR		ナデ							後期	
476	875	5H3d	Ⅲc層上位	深鉢	口縁		口縁端部やや肥厚し、口唇に丸みあり。斜行縄文。	RL		ケズリ							後期	
477	885	5H4c	Ⅲc層	深鉢	口縁		口縁端部やや肥厚、口唇は平坦気味。斜行縄文。	RL		ナデ							後期	886と同一か。
478	889	5H4c	Ⅲc層	深鉢	頸		重畳する横位の平行沈線、2条ごとに縦位弧線で区切りを付加。	LR		ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	
479	133	5H4c	Ⅲc層	深鉢	胴～底	7.5YR6/6橙	斜行縄文。底面は粗いケズリ。	RL		ナデ	－	－	7.2	(5.5)	0.8		後期	
480	851	5H	Ⅲb層	深鉢	胴		縄文施文→沈線区画→磨消	0段多条RL	磨消	ミガキ						Ⅱ－B1	後期中葉	
481	848	5H	Ⅲb層上面	深鉢?	口縁部		口端に刻み目									Ⅱ－B3	後期中葉	
482	846	5H斜面部	Ⅲc層上面	鉢	口縁部		縄文施文→沈線	LR		ナデ						Ⅱ－B2?	後期中葉	
483	849	5H南側	Ⅲa層	鉢	口縁部		口端に刻み目、非結束羽状縄文(異方向)施文→磨消→沈線	RL	磨消	ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	
484	847	5H	Ⅲc層	深鉢	口縁		斜行縄文。	RL									後期	
485	134	5H1e～5H2e	Ⅲc層	壺	胴上半	5YR4/3鈍い赤褐	帯縄文(変形入組み状?)。地文は一部では羽状的。内面には著しい凹凸があり、整形時の指の痕跡であろう。	0段多条RL	充填	無調整(指痕跡)	－	－	－	－	0.7	Ⅱ－B2	後期中葉	
486	868B	5H3c	Ⅲc層(－10cm)	深鉢	胴		縄文施文→沈線	RL		ミガキ						Ⅱ－B1	後期中葉	外面煤付着
487	137	5H	Ⅲc層	鉢	単完形	5YR3/6暗赤褐	口縁→胴上半は丁寧に磨かれて無文。胴下半には重畳する平行沈線文(横位6本)が付される。沈線は一度平行な直線6本が引かれた後に、縦の区切りを加えつつ、一筆書き状に蛇行して引き直される。口縁は肥厚せず、口唇部には丸みがある。	RL		ミガキ ナデ	22.0	22.0	4.4	9.5	0.6	Ⅱ－B1	後期中葉	
488	135	5H西端付近	Ⅲc層	鉢	口縁	2.5YR2/1赤黒	口縁部はミガキにより無文となり、直下に重畳する平行沈線文に、縦位の連続する刻み(むしろ刺突的なものか?)が付加される。			ナデ	(30.0)	(30.0)	－	(6.3)	0.6	Ⅱ－B2	後期中葉	
489	139	5H	Ⅲc層	深鉢	口縁	10YR6/6明黄橙	口縁部が著しく外傾して開く。口唇に沿って刻み帯が巡り、以下は丁寧なナデにより無文。			ナデ	(31.9)	(31.9)	－	(5.0)	0.7	Ⅱ－B3	後期中葉	
490	882	5H3c	Ⅲc層	深鉢	胴		斜行縄文。	0段多条RL		ナデ							後期	
491	894	5I斜面部	Ⅲc層	深鉢	口縁		大波状口縁の波頂部。口縁端部内面が膨らんで肥厚し、口唇はやや尖る。口縁に沿って刻み目帯が巡り、以下は無文。			ナデ						Ⅱ－B3	後期中葉	
492	898	5I1a～5I2a	Ⅲc層中位	深鉢	口縁		口縁肥厚して内面で段状となり、口唇は平坦気味。斜行縄文。	RL		ナデ							後期	
493	142	5I1a～5I2a	Ⅲc層	台付鉢	胴～底(台)	10YR6/3鈍い黄橙	胴部は上面観が楕円形。欠損により定かではないが、外面上半部は無文と思われる。下半部には弧状の沈線文が重層的に付される。台部は無文である。	RL		ミガキ	－	－	3.0	(3.5)	0.7	Ⅱ－B2?	後期中葉	
494	895	5I1a～5I2a	Ⅲc層中位	鉢	口縁		口唇部は丸みあり。口縁端に刻み目帯。以下は曲線区画の磨り消し縄文。	RL		ナデ						Ⅱ－B3	後期中葉	
495	903	6D～7D	Ⅲb層	鉢	口縁		口縁端部に二重の刻み目帯。以下は帯縄文(非結束の羽状縄文を充填)。	LR、RL		ナデ						Ⅱ－C?	後期後葉?	
496	143	6D～7D	Ⅲb層	深鉢	胴下半～底	10YR6/6明黄橙	無文。底面はナデ。			ナデ	－	－	(6.2)	(2.1)	0.7		後期	
497	338	6E	Ⅲc層?	深鉢	口縁～胴		口縁部には文様帯設定されず、胴部に磨り消しの帯縄文(鎖状?)が展開。	RL	磨消	ケズリ						Ⅱ－B2	後期中葉	旧・B7住。
498	906	6G1a	Ⅳ層	深鉢	口縁		波状口縁。口唇は尖り、内側が張出して段状となる。口縁に沿って二重の沈線、以下は磨り消しの帯縄文(撚掛け状?)で、非結束の羽状縄文が充填される。	LR、RL		ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	
499	339	6E	Ⅲc層?	深鉢	胴		曲線的な帯縄文(鎖状?)。	RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	旧・B7住。
500	337	6E	Ⅲc層?	深鉢	口縁		口縁部は無文。頸部には平行沈線文。地文は不明瞭。	摩滅により不明		ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	旧・B7住。
501	343	6E	Ⅲc層?	鉢	口縁		口縁直下に無文帯、その直下の文様帯には細かい平行沈線による綾杉状沈線。	0段多条LR	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	旧・B7住。
502	336	6E	Ⅲc層?	深鉢	口縁		斜行縄文。	RL		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	旧・B7住。
503	342	6E	Ⅲc層?	深鉢	胴		帯縄文。	RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	旧・B7住。
504	144	6G1a	Ⅲc層	台付鉢	胴～底	7.5YR5/4鈍い褐	口縁および台部を欠くため詳細不明であるが、上面観は楕円形か。胴部には沈線により浮き彫り状となった刻み目帯が付される。刻み目帯の繋ぎ部分には小さいボタン状の貼付あり。			ナデ	－	－	(7.2)	(2.9)	0.5	Ⅱ－C	後期後葉	
505	905	6G1a	Ⅲa層下位	深鉢	口縁		口縁端は僅かに肥厚し、口唇は尖る。全面に横位の羽状縄文(異方向回転)。	0段多条RL		ナデ							後期	
506	145	6G	Ⅲc層下位	深鉢	胴下半～底	7.5YR5/4鈍い褐	外面および底面ともに粗いケズリ。			ナデ	－	－	9.6	(2.4)	0.6		後期	
507	915	6H1a	Ⅲb層下位	深鉢	口縁		無文帯を挟んで上下に縄文帯。	LR	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
508	914	6H	Ⅲc層	深鉢	口縁		口縁部が肥厚し、やや内彎。口縁部文様帯に斜行縄文。	RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
509	925	7E4c	Ⅲa層	深鉢	胴		木葉状?の帯縄文が展開。地文は斜行縄文か。	0段多条LR	充填	ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	瘤付土器
510	919	7E	Ⅲb層	壺	胴		磨り消しの帯縄文(鎖状?)。異方向回転の羽状縄文。	RL	充填	ケズリ						Ⅱ－B2	後期中葉	輪積み部分で欠損。
511	928	7F3d	Ⅲa層～地山面	深鉢	口縁		波状口縁の波頂部。突起様に尖る。口唇内面が肥厚して張出し、外面には二重の刻み目帯。			ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	
512	927	7F	Ⅲb層	深鉢	口縁		大波状の深鉢口縁破片。口唇部は内面が肥厚して張出す。口縁端部には刻み目帯が巡る。			ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	
513	147	8D3e	Ⅲb層?	浅鉢	完形	10YR3/3暗褐	単節斜行縄文。施文方向は微妙に異なり不正整である。底面は粗いケズリ。	LR		ナデ	15.1	15.1	3.2	6.0	0.6		後期	伏せた状態で出土(→写真図版)。
514	932	8D	Ⅲa層	壺	口縁		口縁部は肥厚せず、内面が外傾して尖る。口縁端部に二重の縄文帯。	0段多条LR・RL		ナデ						Ⅱ－C?	後期後葉?	
515	935	8D	Ⅲa層	深鉢	胴		櫛歯状工具による櫛目文。			ナデ						Ⅱ－C?	後期後葉?	
516	934	8D	Ⅲa層	深鉢	胴		曲線的な帯縄文。	RL		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
517	945	8E	Ⅲb層下位	壺	口縁		口唇部がやや尖る。口縁部に4条の平行沈線を巡らせ、小さく実殻な貼り瘤を交互に付す。	0段多条R?		ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	瘤付き土器
518	951	8E東半部	Ⅲc層	深鉢	口縁		口縁が内彎し窄まる。口唇にもナデ入って平坦。全面に斜行縄文。	RL		ケズリ							後期	
519	941	8E	Ⅲb層	壺	口縁		口縁は肥厚してやや尖り、内面には僅かに段が付く。口縁端部には刻み目帯が二重に走る。	摩滅で不明。		ナデ						Ⅱ－C?	後期後葉?	
520	957	8E	Ⅲb層	壺	口縁		口縁部僅かに肥厚し、丸みあり。口縁部に沿って縄文帯。	LR		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
521	939	8E	Ⅲb層	深鉢	口縁		平縁。太い弧状沈線による区画内に縄文充填。	RL		ナデ						Ⅱ－B2?	後期中葉	中期の可能性あり(大木9式?)。
522	943	8E	Ⅲb層下位	壺	口縁		口縁は肥厚してやや尖る。口縁端部に二重の刻み目帯。	LR		ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	
523	940	8E	Ⅲb層	深鉢	口縁		口縁部が肥厚してやや尖る。口縁に沿って二重の刻み目帯。弧状の沈線区画内に縄文施文。	LR		ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	
524	950	8E東半部	Ⅲb層	深鉢	口縁		口唇は平坦。横走する非結束羽状縄文。	RL、0段多条LR		ナデ							後期	
525	958	8E	Ⅲb層下位	深鉢	胴		沈線区画の磨り消し縄文。	LR	充填	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	色調	文様の特徴	施文原体	施文方法(文様帯)	内面調整	計測値(cm) 口径	最大径	底径	器高	器厚	分類	時期	備考
526	149	8E	Ⅲb層下位	壺？	頸～胴	10YR6/4鈍い黄橙	頸部は急激に内彎して窄まり、口縁部で再び外反するようである。頸部には、沈線により浮き彫り状となった刻み目帯(2条×3段)が横位に平行して走り、尖鋭的な貼り瘤が付される。刻みは横位の区画沈線に消されている部分もあり、「区画(下辿)→刻み→沈線」という手順で付されたものである。胴部には「ミミズ腫れ」状の微隆起線文が弧状に展開しているが、欠損により文様モチーフは不明である。			ナデ	－	－	－	(7.2)	0.6	Ⅱ－C	後期後葉	注口土器の可能性あり。
527	942	8E	Ⅲb層下位	深鉢	口縁		口縁部に縄文帯。胴部には弧状沈線による区画へ縄文充填。沈線は磨り消し工程の際に消されたのか不明瞭だが、引き直した形跡なし。区画内の縄文も一部消えている。雑な印象。	LR		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
528	959	8E	Ⅲb層下位	深鉢	胴		沈線区画の磨り消し縄文。	LR	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
529	150	8E5b	Ⅲc層	壺	胴～底	10YR6/3鈍い黄橙	帯縄文(変形鍵状文)。地文は斜行縄文。	LR	充填	ナデ	－	－	(4.0)	(4.7)	0.6	Ⅱ－B2	後期中葉	
530	151	8E5b	Ⅲc層	壺	胴	7.5YR4/3褐	磨り消しの帯縄文(鍵状文？)。	LR	充填	ナデ	－	－	－	(5.7)	0.5	Ⅱ－B2	後期中葉	
531	966	8E東半部	Ⅲc層	鉢	口縁～胴		口縁部は無文帯を挟んで、上下に刻み目帯。胴部には曲線的な帯縄文。	LR	磨消	ケズリ						Ⅱ－B3	後期中葉	
532	946	8E北西	Ⅲc層	壺	口縁		平口縁で、口唇は平坦。全面に斜行縄文(一部は異原体か)。	LR(、RL？)		ナデ							後期	
533	936	8E	Ⅲ層	深鉢	口縁		大波状の深鉢口縁破片。口唇部はやや肥厚して丸みを帯びる。口縁端部に二重の刻み目帯。頸部には帯縄文。地文は異方向回転の羽状縄文か。	RL？		ナデ						Ⅱ－B3	後期中葉	一部に煤状の付着。
534	962	8E北西	Ⅲc層	鉢？	胴		横位の平行沈線文(沈線7段以上)。沈線は2段毎に交互に一筆書き(横U字状)され、互い違いの縦位の区切りとなっている。化粧粘土が貼られているのか、外面は黒く光沢がある。	RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	十腰内Ⅱ
535	968	8E北半～8F北半	Ⅲa層	深鉢	頸		上部に隆帯状の刻み目帯。直下には横位の平行沈線文(沈線6条以上)。	RL		ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	内面に焦げ状の付着物。
536	969	7F～8F	Ⅲb層	壺	口縁		口縁に縄文帯を挟んで上下に刻み目帯。口唇縄のそれは二重に巡る。縄文は磨滅により不明瞭な部分あるが異方向回転の羽状縄文か。口唇部やや内側に強出して肥厚する。	0段多条LR		ナデ？						Ⅱ－B3？	後期中葉	
537	973	8F南東	Ⅲc層	深鉢	胴		2種の原体により横位の非結束羽状縄文が重層的に施文される。羽状縄文は撚糸正整であるが一部では羽状の方向が変わり、菱形状文となる箇所や斜行縄文となる箇所もある。	0段多条LR・RL		ナデ							後期	
538	152	8F1a	Ⅲc層	鉢	準完形	5YR6/6橙	無文。外面全体に左上から右下への粗いケズリ痕跡。底面にはランダムなナデ。口縁一部欠損、外面に剥落数カ所あり。口唇部には輪積みして指で撫でた状態のまま整形されていない部分が見られる。未完成のまま焼いたものかもしれない。			ナデ	(17.3)	(17.3)	9.6	10.1	0.9		後期	胎土脆く崩れる。
539	153	9D5e	Ⅲb層	台付鉢	底(台)	10YR7/4鈍い黄橙	胴部は無文、ナデ。台部は脚が長く、底径は比較的小さい。台の内面には煤？付着。			ナデ	－	－	－	(9.3)	0.6		後期	
540	974	9D	客土？	深鉢	口縁		口唇部は平坦で、僅かに外側に捲れて折り返し状となる。櫛歯状工具による細い平行沈線が口縁端部では横走、胴部では縦に走る。			ケズリ						Ⅱ－C	後期後葉	
541	975	9D	Ⅲa層	深鉢	口縁		平口縁に突起が連続して付される。突起は台形状で、頂部に浅い刻み(沈線？)が入って、二股状となる。口縁部には櫛歯状工具による櫛目文が横位に施される。			ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	十腰内4？
542	977	9D	黒色土(Ⅲ層)	深鉢	口縁		平口縁に尖った突起が付される。突起の中央には縦の沈線が入り、下部には貼り瘤を貼付。			ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	
543	980	9D	黒色土(Ⅲ層)	鉢？	口縁		無文。ナデ。口縁は屈曲して内彎。			ナデ							後期	
544	979	9D	Ⅲb層	深鉢	口縁		口縁部は緩やかに外傾。櫛歯状工具による櫛目文が、口縁端部では横に、口縁以下では縦に緩く蛇行しながら垂下し、X字状に施文される。			ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	
545	160	9D北東	Ⅲc層	深鉢	口縁	10YR7/4鈍い黄橙	口縁部を磨り消して横位沈線2条により区画し、斜位の沈線を格子状に充填。施文順は、地文→磨り消し→横位沈線→左半部に右上～左下の斜位沈線→全面に左上～右下の斜位沈線→右半部に右上～左下の斜位沈線→右半部の一部沈線を引き直し。	LR	磨消	ナデ	－	－	－	(7.2)	0.7	Ⅱ－A	後期前葉	
546	985	9D北東	Ⅲc層	鉢？	胴		磨り消しの帯縄文。上部には平行する縦位の沈線。	RL		ナデ						Ⅱ－C？	後期後葉？	内面下半に焦げ状付着物。
547	155	9D	Ⅲc層	浅鉢	底	10YR7/3鈍い黄橙	無文。ナデ。			ナデ	－	－	(4.6)	(1.7)	0.5		後期	
548	976	9D	黒色土(Ⅲ層)上位	深鉢	口縁		全体が緩く内彎しており、口縁が大きく開く深鉢の口縁部と思われる。口縁端部内面は膨らんで肥厚し、口唇および口縁部には2列の刻み目帯が付される。	0段多条RL		ナデ						Ⅱ－C？	後期後葉？	
549	158	9D	Ⅲ層	鉢	口縁～胴	5YR6/4鈍い橙	無文。軽いナデ。整形時の指押しの痕跡があり、全体に手捏ね的である。			ナデ	(15.0)	(15.0)	－	(5.0)	0.5		後期	台付鉢と考えられるが、欠損により不明。
550	990	9E1a	Ⅲc層	壺	口縁		口縁端部は無文帯となり、直下に縄文帯。	0段多条LR		丁寧なナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
551	994	9E	Ⅲc層	鉢？	胴		上半には斜位沈線を交互に付した綾杉状の沈線文。下半は無文。			ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	加曽利B2
552	989	9E	Ⅲc層	深鉢	口縁		平縁。横位の平行沈線2条。	LR		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
553	988	9E	Ⅲc層	深鉢	口縁		非結束羽状縄文が重畳的に付される。	LR、0段多条RL		ナデ							後期	
554	1003	9F北西	Ⅲc層	深鉢	口縁		波状口縁で、口唇は内側に膨らんで肥厚。口縁部端部に刻み目帯、以下は無文。波頂部分に刻み目を付した垂下する隆帯が付くものと思われる。	LR		ナデ						Ⅱ－B3	後期中葉	
555	165	10D2e	Ⅲc層	鉢	底	10YR7/4鈍い黄橙	無文。ナデ。			ナデ？	－	－	3.0	(2.7)	0.6		後期	A1配石の周辺部で出土。
556	1013	10D	Ⅲc層	鉢	口縁		口縁部やや内彎して、僅かに肥厚。口縁端部には縄文帯。	LR		ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
557	163	10D4a	Ⅲc層下位	鉢	胴～底	2.5YR6/6橙	無文。ナデ。底面はケズリ。			ナデ	－	－	5.0	(5.2)	0.6		後期	
558	182	10D4a	Ⅲc層	鉢？	口縁	10YR6/6明黄褐	平縁に台状の突起が付される。突起部は上面観が楕円形で先端部が指頭状圧痕で凹み、突起下の頸部？の屈曲部分には横状把手が貼付される。突起・把手周辺は沈線と棒状工具の刺突により加飾される。突起部分の内面にも刺突が2箇所に付される。明確ではないが、見方によっては、人面意匠？のようにも見える。			ナデ	－	－	－	(5.1)	2.5	Ⅱ－A？	後期前葉？	人面意匠か。
559	176	10D4b	Ⅲc層下位	注口？	底	10YR6/3鈍い黄橙	ナデにより無文。太めの沈線が横1条引かれる。底面中央は凹む。			ナデ	－	－	(3.0)	(1.0)	0.7		後期	
560	185	10D4c	Ⅲc層	深鉢	口縁～胴	7.5YR4/6褐	5単位の大波状口縁。口縁部は緩く内彎して窄まる。口唇はやや丸みあり、内面側に膨らんで段をなしている。口縁部はミガキにより無文。無文帯を挟んで口縁端部・頸部にそれぞれ刻み目帯が巡り、頸部には磨り消しによる帯縄文(鍵状)が展開。胴部は斜行縄文。	RL	磨消	ナデ	(45.7)	(45.7)	－	(30.5)	0.7	Ⅱ－B3	後期中葉	
561	1054	10D4c	Ⅲc層	深鉢	胴		櫛目文			ミガキ						Ⅱ－C？	後期後葉？	
562	166	10D4b	Ⅲc層下位	深鉢	底	5YR6/6橙	底面に網代痕(1本送り、1本潜り、1本越え)。一部、網代痕が重複する部分あり。			ケズリ？	－	－	(11.2)	(2.4)	1.0		後期	
563	1065	10D4d	Ⅲc層	深鉢	口縁		口縁無文、縄文施文→平行沈線	LR		ミガキ						Ⅱ－B1	後期中葉	十腰内Ⅱ平行
564	1018	10D5c	Ⅲc層	深鉢	口縁		平縁で、口唇は平坦。帯縄文が展開、区画内には異方向回転の羽状縄文。	RL	磨消	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	内面に焦げ状の付着物。
565	1036	10D5c	Ⅲc層	深鉢	口縁		磨消縄文	RL	磨消	ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	外面煤付着。
566	1035A	10D4b	Ⅲc層下位	深鉢	口縁		入り組み文(沈線区画→縄文充填→縁辺ミガキ)	LR	充填	ミガキ						Ⅱ－C	後期後葉	
567	1035C	10D北西部	Ⅲc層	深鉢	口縁		入り組み文(沈線区画→縄文充填→縁辺ミガキ)	LR	充填	ミガキ						Ⅱ－C	後期後葉	
568	186	10D5c	Ⅲc層	深鉢	口縁～胴	2.5YR5/6明赤褐	平縁。口縁端部がやや内彎。口唇は丸みあり。斜行縄文。	LR		ナデ	38.8	38.8	－	(25.7)	0.9		後期	外面の一部に煤状の付着物。
569	1035D	10D5c	Ⅲc層	深鉢	頸～胴		入り組み文(沈線区画→縄文充填→縁辺ミガキ)	LR	充填	ミガキ						Ⅱ－C	後期後葉	
570	1021	10D5c	Ⅲc層	鉢	口縁		非結束羽状縄文	LR・RL									後期	
571	1019	10D5c	Ⅲc層	深鉢	口縁		山形状の小突起、口唇部肥厚			ミガキ							後期中葉	
572	188	10D5c	Ⅲc層	注口	胴	10YR7/3鈍い黄橙	胴部中位が膨らんで張出し、注口部が付く。胴部には櫛掛け状の帯縄文が展開し、頸部付近にはやや尖った貼り瘤が連続して2段付される。胴部中位には、欠損により判然としないが、注口部に対応する、何らかの突起乃至は把手状の貼付けがなされるようである。	LR	充填	ナデ	－	－	－	(12.7)	0.8	Ⅱ－C？	後期後葉？	
573	1017	10D5d	Ⅲc層	深鉢	口縁		平縁に小さく尖鋭な突起が付加される。斜行縄文。	0段多条RL		ケズリ							後期	内面に焦げ状の付着物。
574	1016	10D5d	Ⅲc層	深鉢	口縁		口縁部が内彎、口唇内側が膨らみ肥厚。口縁部には沈線区画の帯縄文。沈線は浅く太い。	LR		ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
575	164	10D5d	Ⅲc層	深鉢	胴～底	7.5YR4/4褐	斜行縄文。	RL		ナデ	－	－	9.0	(5.6)	0.6		後期	
576	1060	10D5e	Ⅲc層下位	深鉢	胴		縄文施文→沈線区画→磨消	0段多条LR	磨消	ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
577	177	10D5e	Ⅲc層下位	鉢	胴下半～底	7.5YR6/4鈍い橙	ランダムな斜行縄文。底面は粗いケズリ。	RL		ナデ	－	－	(5.6)	(4.5)	0.6		後期	
578	187	10D5e	Ⅲc層下位	壺	胴～底	10YR6/3鈍い黄橙	胴上半は無文、下半に磨り消しによる帯縄文(S字形？)。	LR	磨消？	ナデ	－	－	6.0	(10.9)	0.7	Ⅱ－B2	後期中葉	

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	色調	文様の特徴	施文原体	施文方法(文様帯)	内面調整	計測値(cm) 口径	最大径	底径	器高	器厚	分類	時期	備考
579	180	10D北西	Ⅲb・Ⅲc層	台付鉢？	底(台)？	7.5YR4/3褐	台付鉢形土器の台部破片とも考えられるが、不確実。台縁辺部？は緩く弧を描く。浅い横位沈線が多重に巡るが、下位のそれは縁辺の輪郭に沿って方向が変わる。一部に、孔ないしは切り込みの痕跡があるが、残存部分からは判別できない。			ナデ	－	－	－	(3.1)	0.6		後期	
580	1004	10D	Ⅲb層	深鉢	口縁		平縁で、口唇は内側に削げてやや尖る。口縁には太い二股突起が貼付される(たぶん複数付く)。口縁に沿って太く深い沈線が巡り、口縁以下には沈線による帯状の区画。区画内には縄文ではなく櫛歯状工具による浅く細い沈線が充填される。			ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	
581	183	10D	Ⅲc層	深鉢？	口縁(突起)	10YR5/4鈍い黄褐	波状縁波頂部に大突起、その両脇に小突起を貼付。大突起は上部が肥厚し、貼付けにより隆帯・瘤状の高まりが表現される。小突起は内面側に断面U字形の沈線が入り窪みとなる。	LR、RL		ナデ	－	－	－	(6.9)	3.7		後期	
582	1007	10D	Ⅲc層	深鉢	口縁		地文のみ。口縁は僅かに肥厚し、丸みを帯びる。	LR		ナデ							後期	
583	1026	10D	Ⅲc層	鉢	口縁～胴		斜行縄文。	LR		ナデ							後期	金雲母混入。
584	1032	10D南東部	Ⅲc層下位	深鉢	口縁		斜行縄文。	LR		ミガキ							後期	外面煤付着。
585	1012	10D	Ⅲc層	深鉢	口縁		波状口縁で口唇は丸い。口縁部窪部に刻み目帯、以下は無文。			ミガキ						Ⅱ－B3	後期中葉	
586	1025	10D	Ⅲc層	深鉢	口縁		櫛目文（縦・横両方向有り）									Ⅱ－C	後期後葉	
587	1042	10D南東部	Ⅲc層	深鉢	胴		刻み目帯、非結束羽状縄文施文→沈線区画→磨消	0段多条LR・RL	磨消	ミガキ						Ⅱ－B3？	後期中葉	
588	1035B	10D４b	Ⅲc層下位	深鉢	胴		入り組み文（沈線区画→縄文充填→縁辺ミガキ）	LR	充填	ミガキ						Ⅱ－C？	後期後葉？	
589	1037	10D	Ⅲc層	深鉢	胴		櫛目文→平行沈線			ミガキ						Ⅱ－C	後期後葉	
590	1038	10D	Ⅲc層	壺？	胴		貼り瘤、帯縄文	RL	磨消							Ⅱ－C	後期後葉	
591	1044	10D南西部	Ⅲc層	注口	胴		微隆起線によるモチーフ、貼り瘤（微粒）	無紋								Ⅱ－C	後期後葉	
592	1046	10D北西部	Ⅲc層(配石上位)	深鉢	胴		櫛目文			ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	
593	169	10D南西	Ⅲc層	深鉢	胴下半～底	5YR6/6橙	横走する非結束羽状縄文。底面は丁寧なナデ。	0段多条LR・RL		ナデ	－	－	(6.8)	(5.5)	0.5		後期	
594	168	10D	Ⅲc層	鉢	底	10YR7/6明黄褐	無文。ナデ。			ナデ	－	－	(8.0)	(2.7)	0.9		後期	
595	1063	10D北東部	Ⅲc層	鉢？	底		土師器？、木葉痕				－	－	6.4	－	0.7		後期	
596	171	10D	Ⅲc層	鉢	底	5YR5/6明赤褐	底面は丁寧なナデ。			ナデ	－	－	5.0	(0.9)	0.8		後期	
597	162	10D北東	Ⅲc層	台付鉢	胴下半～底(台)	7.5YR4/3灰褐	胴屈曲部付近に縦位の刻み列。胴下半には平行沈線文(5条)。平行沈線は下書き？された後、縦の区切り(横U字形)を加えて引き直されている。	LR		ミガキ	－	－	3.6	(6.1)	0.6	Ⅱ－B1	後期中葉	
598	173	10D	Ⅲc層	注口？	口縁？	7.5YR7/5鈍い橙	欠損により詳細不明だが、胴部が環状(袋状)をなす器形と思われる。胴部には横位沈線1条が巡り、一部地文が付されているようだが不明瞭で、詳細不明。	0段多条LR？		ナデ	－	－	4.4	(2.5)	0.4		後期	環状(袋状)の注口土器か。底部かもしれない。
599	1073	11D１b	Ⅲc層	壺？	胴		沈線区画→縄文施文→貼り瘤→縁辺ミガキ	LR		充填						ミガキ	Ⅱ－C	後期後葉
600	1068	11Dトレンチ	Ⅲc層	浅鉢	口縁		縄文施文→磨消→沈線	LR	磨消	ミガキ						Ⅱ－B1	後期中葉	十腰内Ⅱ平行
601	1072	11D南西部	Ⅲc層	深鉢	口縁		突起	LR		ミガキ							後期	
602	1070	11Dトレンチ	Ⅲc層	壺	口縁		口縁は縄文帯、頸部は無文帯。	0段多条LR		ミガキ							後期	
603	1067	11Dトレンチ	Ⅲc層	深鉢	突起		振れ状(耳形)突起。									Ⅱ－B2	後期中葉	
604	1076	B区	Ⅲc層？	深鉢	口縁		斜行縄文。口縁端の内面が肥厚し、口唇は平坦。	0段多条LR		ミガキ							後期	
605	190	B区斜面部	Ⅲc層下位	鉢	胴～底	7.5YR6/4鈍い橙	無文。ナデ。底面はケズリ。			ナデ	－	－	(7.4)	(6.7)	0.6		後期	
606	1085	C区	Ⅱ層	深鉢	胴		刻み目、縄文施文→沈線	LR		ミガキ						Ⅱ－B1	後期中葉	
607	1083A	C区「住居群」周辺	Ⅱ層？	鉢？	胴		沈線区画→縄文施文→再度沈線	RL								Ⅱ－B2？	後期中葉	
608	191	C区T	Ⅲc層	壺	胴～底	10YR5/2灰黄褐	胴部には逆S字状の帯縄文が展開。底面はケズリ。磨り消しによって、沈線および縄文が一部消されている。	LR	充填	ナデ、指の圧痕	－	－	3.6	(7.7)	0.6	Ⅱ－B2	後期中葉	
609	1106	D区T	Ⅲc層上位	鉢	胴～底		曲線的な帯縄文。沈線。	LR	磨消	ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	
610		D区T	Ⅲc層	鉢？	口縁		外反する口縁内面に、円筒状の貼り付け。口縁に沿って刻み目帯。									Ⅱ－B3？	後期中葉	
611	1095	D区T	Ⅲc層	鉢	口縁		縄文施文→沈線	RL		ミガキ						Ⅱ－B2？	後期中葉	
612	1096	D区T	Ⅲc層	深鉢	口縁		斜行縄文。口縁やや肥厚。	0段多条RL		ミガキ							後期	
613	1102	D区T	Ⅲc層上位	壺	胴(頸付近)		磨り消しの帯縄文(鍵状？)。	RL	充填	無調整						Ⅱ－B2	後期中葉	
614	1103	D区T	Ⅲc層上位	深鉢	頸		連続する刻みある隆帯。磨り消し帯縄文。	LR	磨消？	ミガキ						Ⅱ－B2？	後期中葉	
615	1087	D区T(B)	Ⅲc層	深鉢	口縁		斜行縄文。口縁やや肥厚。	0段多条RL		ミガキ							後期	
616	1088	D区T(B)	Ⅲc層	深鉢	口縁		斜行縄文。口縁やや肥厚。	0段多条RL		ミガキ							後期	
617	197	D区T	Ⅲc層	注口	注口部	7.5YR6/6橙	注口部は全面磨かれて無文。一部残存する胴部に沈線入るが、詳細不明。			ケズリ	－	－	－	(7.3)	0.6	Ⅱ－B2？	後期中葉	
618	1098	D区T	Ⅲc層	深鉢	胴		縄文施文→沈線	RL		ミガキ						Ⅱ－B1	後期中葉	
619	1094	D区T	Ⅲc層	鉢？	胴		刻み目帯、沈線→縄文施文→再度沈線	0段多条RL	充填	ミガキ						Ⅱ－B3？	後期中葉	
620	193	D区T	Ⅲc層	鉢	胴～底	5YR5/4鈍い赤褐	帯縄文だが、欠損によりモチーフ不明。底面はケズリ。	RL	磨消	ナデ	－	－	(4.8)	(2.5)	0.9		後期	焼土より上位。
622	203	3H付近	Ⅲc層	浅鉢	口縁～底	10YR6/3鈍い黄橙	口縁～胴上半は無文、磨かれて光沢あり。胴下半は平行沈線文。横位の平行沈線4条に縦に蛇行する沈線が区切りを加えている。底面も化粧粘土？を被せて磨かれている。	LR		ナデ	(23.0)	(23.0)	3.8	9.5	0.8	Ⅱ－B1	後期中葉	D区トレンチ(補1脇)。
623	196	D区T	Ⅲc層	深鉢	胴～底	2.5YR5/4鈍い赤褐	斜行縄文。底面は粗いケズリ。	RL		ナデ	－	－	(10.0)	(7.5)	0.9		後期	
624	1092	D区T(B)	Ⅲc層	深鉢	胴		縄文施文→沈線区画→磨消	0段多条RL	磨消	ミガキ						Ⅱ－B2	後期中葉	
625	1086	D区文T	捨て土	深鉢	突起		口端刻み目									Ⅱ－B3	後期中葉	
626	1091	D区文T	捨て土	深鉢	胴		縄文施文→沈線	0段多条RL		ミガキ						Ⅱ－B1	後期中葉	
627	1107	D区	表土採取	深鉢	頸		刻み目帯。直下に平行沈線文。	RL		ナデ						Ⅱ－B1	後期中葉	
628	198	D区文T	捨て土？	深鉢	口縁～胴	7.5YR4/3褐	平口縁で窪部がやや内劈する。口唇には丸みあり、僅かに肥厚。口縁から胴にかけて一連の磨り消し縄文が展開。鍵状ないしはS字状と思われるが、欠損によりモチーフ不明。	RL	磨消	ナデ	－	－	－	(23.0)	0.7	Ⅱ－B2	後期中葉	
629	1109	文T7	捨て土	深鉢	口縁		単節斜行縄文。	RL		ナデ							後期	
630	1113	文T10	捨て土	壺	口縁		口縁の文様帯には斜行縄文。以下は無文帯。	RL		ナデ						Ⅱ－B2？	後期中葉	
631	1112	文T10	捨て土	壺	口縁		口縁の文様帯には非結束羽状縄文。以下は無文帯。	0段多条LR・RL		ナデ						Ⅱ－B2？	後期中葉	
632	1110	文T11	捨て土	鉢	口縁		斜行縄文。	LR		ナデ							後期	
633	199	文T11	黒褐色土(Ⅲa層？)	浅鉢	胴～底	7.5YR6/6橙	重層的な平行沈線文(4条以上)。沈線は一筆書き的な横U字状に引かれ、縦に区切られる。沈線間には刻み列が充填されている。摩滅のため地文の有無は確認できない。底面ケズリ。			ナデ	－	－	(3.6)	(1.8)	0.8	Ⅱ－B1？	後期中葉	
634	1118	文T11	捨て土	深鉢	胴		無文帯を挟んで上下に縄文充填。	LR	充填	ナデ						Ⅱ－B2	後期中葉	
635	1111	文T22	捨て土	深鉢	口縁		口唇が僅かに折返し気味。櫛歯状工具による細く浅い平行沈線が縦横に施文される。			ナデ						Ⅱ－C	後期後葉	
636	1119	文T22	捨て土	壺	頸		無文帯を挟んで上下に縄文充填。	LR	磨消	無調整						Ⅱ－B2	後期中葉	輪積み痕跡が明瞭。

〈土師器・須恵器〉

※ 黒色処理：◎は内外面、○は内面、△は一部(痕跡のみ)、×は不処理　※（ ）は残存値、〔 〕は推定値

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	色調	外面調整			内面調整				計測値(cm)				残存状況(口縁部)	胎土(含有物、色調等)	備考
							口縁・頸部	体部	底部	口縁・頸部	体部	底部	黒色処理	口径	底径	器高	器厚			
159	5	B3住居跡	カマド支脚	土師器	坏	10YR6/3鈍い黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	△	14.5	6.0	5.8	6.5		雲母やや多。	
160	6	B3住居跡	床面(Q4)	土師器	坏	10YR7/3鈍い黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラによる再調整→線刻	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	△	〔14.2〕	5.6	5.1	0.5		砂粒、雲母微量。	底部外面には再調整(著しく雑)の後、線刻「大」が施される。
161	7	B3住居跡	床面(Q4)	土師器	坏	7.5YR7/4鈍い橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	14.9	5.2	3.8	0.4		砂粒微量。	「土器2」「Q4床面」「床面土坑」と接合。
162	9	B3住居跡	覆土(Q3)	土師器	坏	10YR6/3鈍い黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	－	ロクロナデ	ヘラミガキ	－	○	〔14.8〕	－	〔3.6〕	0.5			「Q4床面」と接合。
163	8	B3住居跡	床直・土器13	土師器	坏	10YR6/8明黄褐	－	ロクロナデ	回転糸切り痕、一部再調整	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	△	－	5.5	(3.5)	0.4	－	雲母少。	体部外面(底部寄り)に連続する爪形の圧痕2列あり。土器製作者の爪跡？
164	307	B3住居跡	覆土(Q1)	土師器	甕		ヨコナデ ヘラケズリ	－	－	不明(剥落)	－	－						1／4以下		
165	3	B3住居跡	床直・土器3	土師器	甕	10YR7/3鈍い黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	12.4	(6.8)	10.1	0.8		砂粒多。		底部外面に把手状の貼付あり。
166	4	B3住居跡	床直・土器8	土師器	甕	10YR6/3鈍い黄橙	－	ヘラケズリ	ヘラによる再調整	－	ヘラナデ	指の圧痕→ヘラナデ	(19.4)	(9.7)	〈9.9〉	0.9		砂粒多。		「土器9」「覆土」と接合。
171	309	B3住居跡	カマド左脇覆土	土師器	甕		－	ヘラケズリ	ヘラケズリ	－							－			
192	19	B6住居跡	カマド脇Pit底面	土師器	坏	7.5YR6/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	〔14.5〕	5.6	4.3	0.5	1／4		
193	20	B6住居跡	覆土下位～床面(Q2)	土師器	坏	10YR7/3鈍い黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	〔15.0〕	〔5.6〕	4.9	0.4	1／2		
194	22	B6住居跡	覆土下位～床直	土師器	坏	7.5YR6/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	〔13.7〕	〔5.5〕	4.3	0.4	1／4以下		「B11住覆土」と接合。一部反転実測。
195	17	B6住居跡	覆土下位(Q3)	土師器	坏	7.5YR6/4鈍い橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	14.1	5.0	5.7	0.6	2／3		
196	28	B6住居跡	貼床層	土師器	坏	7.5YR6/6橙	－	ロクロナデ	－	ロクロナデ	－	×	－	－	(3.3)	0.3	－			外面に墨書あり(判読不能)。
197	16	B6住居跡	カマド火床部	土師器	甕	10YR7/4鈍い黄橙	ヨコナデ	ヘラケズリ	－	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヘラナデ、ヘラミガキ	－		(30.3)	－	(11.7)	0.9	1 2		「床直」「カマド脇Pit」と接合。反転実測。
198	327	B6住居跡	覆土中位(Q1)	土師器	甕		ヨコナデ	ヘラケズリ	－	ヨコナデ	ヘラナデ	－						－		
199	325	B6住居跡	カマド火床部Pot 1	土師器	甕		ヨコナデ	ヘラケズリ	－	ヨコナデ	ヘラナデ	－						1 4		頸部の屈曲弱い。
200	26	B6住居跡	覆土下位(Q2)	土師器	甕	7.5YR1.7/1黒	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラミガキ	－	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラミガキ	－	◎	－	－	(5.9)	0.5			内外面黒色処理の小形甕。
201	324	B6住居跡	床面(Q2)貼床層？	土師器	甕		ロクロナデ	ロクロナデ	－	ロクロナデ	ロクロナデ	－						1／4	砂粒やや多。	
202	326	B6住居跡	カマド火床部Pot 3	土師器	甕		ロクロナデ	ロクロナデ	－	ロクロナデ	ロクロナデ	－						－		
203	29	B6住居跡	覆土下位(Q2)	須恵器	壺	10YR7/2鈍い黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	－	ロクロナデ	ロクロナデ	－		－	－	(13.4)	0.7	1／4以下		
204	64	B6住居跡	カマド火床部pot2	土師器	甕	7.5YR6/6橙	－	ロクロナデ	回転糸切り痕	－	ロクロナデ	ロクロナデ		－	7.6	(4.5)	0.8	－	砂粒やや多。	
205	21	B6住居跡	カマド脇Pit底面	土師器	甕	7.5YR6/3鈍い褐	－	ヘラケズリ	ヘラナデ	－	ヘラナデ	ヘラナデ	○	－	〔15.5〕	(5.9)	0.8	－		反転実測。
261	37	B11住居跡	覆土上位	土師器	甕	7.5YR5/4鈍い褐	－	ヘラナデ	ヘラケズリ	－	ヘラナデ	ヘラナデ		－	〔6.6〕	(5.0)	0.7	－		B17住居跡に帰属する可能性が大きい。
295	43	B13住居跡	カマド脇Pit底面	土師器	坏	10YR7/4鈍い黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕→ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	14.1	5.8	4.8	0.3	完形		形状の歪み著しく、上面観が楕円形。
296	44	B13住居跡	カマド脇Pit覆土	土師器	坏	5YR5/6明赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	14.9	5.8	5.7	0.7	2／3	砂粒やや多。	
297	45	B13住居跡	カマド焼土ブロック層	土師器	坏	7.5YR6/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕、線刻	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	〔15.5〕	〔6.4〕	5.4	0.7	1／2	砂粒やや多。	底部外面に線刻「×」。
298	130	B13住居跡	カマド焼土ブロック層	土師器	甕	10YR6/8明黄褐	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ		〔38.2〕	10.2	25.8	0.5	3／4		底部外面に籾様の圧痕あり。
299	42	B13住居跡	カマド支脚	土師器	甕	5YR6/6橙	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ(カキメ？)		(16.4)	9.0	11.4	0.5	3／4	砂粒多。	形状の歪み著しい。上面観は楕円形、側面は台形状。
300	470	B13住居跡	カマド左脇床面	須恵器	甕		－	タタキメ	－	－	当て具痕ナデ？	－						－		内面に指の圧痕上の凹凸著しい。平行な木目上の当て具痕跡が部分的に残る。
351	70	B17住居跡	覆土(1層上位)北東壁際	土師器	甕	7.5YR2/1黒	－	－	回転糸切り痕、線刻	－	－	ヘラナデ	◎	－	〔6.4〕	(1.6)	0.6	－		底部外面に線刻あり。鋭利な工具による深いものであるが、判読不能。
675	140	5H	Ⅲc層上面	土師器	甕	2.5YR6/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラケズリ	－	ロクロナデ	ヘラナデ	－		〔22.5〕	－	(20.7)	0.9	3／4		口縁やや外傾して外面に突帯様の張り出しあり、断面形が三角形状となる。
676	146	7E2c	Ⅲa層下位	土師器	坏	5YR6/6橙	－	－	回転糸切り痕→一部ヘラケズリ	－	－	ヘラナデ	×	－	6.0	1.0	0.5	－		いわゆる「あかやき」。
677	148	8E北西部	Ⅲb層	土師器	坏	7.5YR5/6明褐	ロクロナデ	－	－	ロクロナデ	－	－	×	－	－	(4.9)	0.3	－		「あかやき」。外面に墨書あり(判読不能)。
678	202	不明	不明	須恵器	壺	2.5Y7/3浅黄	ロクロナデ	ロクロナデ	－	ロクロナデ	ロクロナデ	－		－	－	(4.9)	0.6	1／4	10YR7/2鈍い黄褐。	

〈袖珍土器〉

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	色調	文様の特徴	施文原体	施文方法(文様帯)	内面調整	計測値(cm) 口径	最大径	底径	器高	器厚	分類	時期	備考
4	1151	A1住居跡	南西壁際床直(Q4)	袖珍土器	完形	7.5YR3/4褐	無文。ナデ。			ナデ	6.4	6.4	2.1	4.1	0.4	Ⅱ－B2	縄文後期	
6	1155	A1住居跡	覆土2層	袖珍土器	口縁～底	5YR6/6橙	全面に斜行縄文を施す。	LR		ナデ	(6.2)		2.7	4.0	0.5		縄文後期	
26	1154	A1住居跡	覆土2層	袖珍土器	胴～底	10YR3/2黒褐	横位の細く浅い沈線を多重に巡らす。			ナデ	－	－	2.4	(1.4)	0.4		縄文後期	
37	1153	A1住居跡	覆土1層	袖珍土器	完形	7.5YR5/4鈍い褐	緩い波状口縁。器表面はナデにより無文。			ナデ	4.0	4.0	1.5	2.5	0.4		縄文後期	
38	1156	A1住居跡	覆土①層(Q4)土器8	袖珍土器	胴～底	7.5YR6/3鈍い褐	曲線的な帯縄文。文様部分を無文としている。区画の沈線は半截竹管状工具(実際の竹管よりは細いもの)の主に腹面で引かれた平行沈線であるが、一部は背面を用いた一本沈線もある。沈線自体は浅く適当なもので、磨り消しも雑で消し残しがある。文様構成に規則性が見られず全体に粗雑な印象が強い。地文はLR斜行縄文だが一部にはRLあり。	LR、RL	磨消	ナデ	－	－	2.5	(3.8)	0.5		縄文後期	
638	1158	6D～7D	Ⅲb層	袖珍土器	底	10YR7/3鈍い黄橙	底部中央が平坦。小形の注口土器か。			ナデ	－	－	(2.0)	(1.0)	0.9		縄文後期	
639	1159	9D	トレンチ・Ⅲ層	袖珍土器	底	10YR6/2灰黄褐	無文。ナデ。			ナデ	－	－	[2.4]	(1.0)	0.5		縄文後期	
637	1160	10D北西	Ⅲc層	袖珍土器	胴～底	10YR7/4鈍い黄橙	無文。ナデ。			ナデ	－	－	[4.0]	(2.3)	0.4		縄文後期	配石遺構の上位で出土。
621	1161	D区トレンチ	Ⅲc層	袖珍土器	胴～底	10YR6/2灰黄褐	細く浅い沈線が横走。底部付近には斜行縄文。	LR		ナデ	－	－	2.6	(3.4)	0.6		縄文後期	
214	1162	B8住居跡	炉脇床面	袖珍土器	胴～底	10YR6/4鈍い黄橙	無文。ナデ。			ナデ	－	－	4.3	(5.2)	0.6		縄文後期	

第6表　土製品観察表

〈土偶〉

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	類別	部位	文様の特徴	計測値（cm）			重量（g）	備考	時期
							長さ	幅	厚さ			
95	1216	A1住居跡	覆土1層	土偶	肩部(左)	前面はRL斜行縄文を裁って横位の沈線2条、沈線よりも上側は磨り消されて無文化。背面は肩部分は無文であるが、背側には羽状縄文が施文される。羽状縄文は概ね二種の原体(LR、RL)によるものであるが、一部は同一原体(LR)の異方向回転によるものである。	(4.3)	(6.1)	3.2	80.5	前面の大部分が欠損しており、形状不明であるが、肩張形の土偶と思われる。	縄文後期
96	1205	A1住居跡	覆土①層	土偶	腕部(右？)	ナデ調整。	(5.5)	2.2	1.6	17.0		縄文後期
97	1209	A1住居跡	覆土①層(Q1)	土偶	腕部		(2.1)	(1.2)	(1.0)	2.5	詳細不明。	縄文後期
98	1217	A1住居跡	覆土①層下位(Q2)	土偶	肩～腕部(左？)	肩部と腕部の境に沈線1条。肩部は無文、腕部には斜行縄文(LR、RL)。一部、羽状ぎみになる部分もあり、羽状縄文を意識したものかもしれないが、全体にランダムな施文である。	(4.0)	1.57	(1.8)	9.2		縄文後期
99	1225	A1住居跡	覆土1層(東側)	土偶	腕部？		(2.4)	1.2	1.6	4.1		縄文後期
116	1228	A1住居跡	覆土	土偶	不明		(2.6)	1.2	1.2	3.8		縄文後期
172	1204	B3住居跡	覆土(Q2)	土偶	腕部？		(3.6)	1.6	1.4	8.3	土偶ではない可能性もある。	縄文後期
289	1201	B12住居跡	覆土①層下位(Q1)	土偶	頭部～胴上半部	頭部：頭頂部および耳部が張り出しており、一体化してT字形の隆帯により眉～鼻が表現される。頭頂部の張り出しは結髪の表現か。耳部にはそれぞれ1箇所の刺突がなされ耳穴が表現される。目・口の表現は細い粘土紐を楕円形に貼付したものであるが、一部が剥落して痕跡のみであり、詳細は不明である。後頭部は台状に出張っている。頭部はソケット状に胴部に差し込まれている。胴部の全面は欠損により文様の有無・詳細が不明、背面は無文である。残存する右腕部は著しく張った肩部分から胴部へ屈曲している。	(10.3)	(11.5)	(3.2)	220.8	頭部はソケット状に胴部に差し込まれる造りである。	縄文後期
368	1202	B2土坑	底面	土偶	胴部下半前面(腹部)	腹部が膨らみ、正中線付近に刺突列を施した隆帯貼付。腰部外側に山形の短沈線。内股～脚部付近にはLR斜行縄文。	(6.5)	(5.3)	*	102.8	1203と接合。いわゆる妊婦土偶。	縄文後期
	1203	B36土坑	第2層	土偶	胴部上半前面(胸部)	正中線付近に刺突列。乳房部分は紡錘状に突出。	(10.3)	(11.5)	*		1202と接合。いわゆる妊婦土偶。	縄文後期
641	1208	10D	Ⅲb層	土偶	胴部下半～脚部	腹部が膨らみ、腹部全体に刺突が施される。脚部前面に左右2つずつの刺突列が施されるが、脚部裏面にまで巡るものは左脚側の1列のみ。	(6.4)	(3.0)	2.1	27.8	いわゆる妊婦土偶。	縄文後期
640	1223	B区段際部分	Ⅲc層	土偶	胴部(前面)	腹部がごく僅かに膨らむが、全体に扁平な形状である。正中線に沿って1条の刺突列が施される。乳房部分が僅かに高まり、貼り付け痕跡あるが、剥落により詳細不明。縄文・沈線等の装飾文様を全く欠く。	(7.1)	(4.6)	(1.3)	20.4		縄文後期
642	1226	C区	不明	土偶	不明		(2.45)	1.7	2.1	7.0		縄文後期

〈土製円盤〉

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	類別	状態	文様の特徴	施文原体	計測値（cm）			重量（g）	時期
								長径	短径	厚さ		
92	1231	A1住居跡	覆土上位(Q1)	土製円盤	完形	同一原体の異方向回転による羽状縄文。	RL	3.1	3.1	0.6	7.2	縄文後期
93	1232	A1住居跡	覆土上位(Q1)	土製円盤	完形	斜行縄文。本来は羽状縄文か。	RL	3.1	2.9	0.7	6.6	縄文後期
94	1233	A1住居跡	覆土①層下位(Q2)	土製円盤	完形	2種の原体による非結束羽状縄文。	LR、RL	3.4	3.3	0.8	9.4	縄文後期
115	1230	A1住居跡	覆土	土製円盤	完形	2種の原体による非結束羽状縄文。	LR、RL	4.6	4.5	0.7	15.6	縄文後期
225	1229	B8住居跡	覆土(Q3)	土製円盤	完形	2種の原体による非結束羽状縄文。	LR、RL	5.5	5.0	0.6	20.7	縄文後期
646	1234	5H4a	Ⅲb層下位	土製円盤	完形	斜行縄文。	0段多条RL	4.2	3.5	0.3	12.0	縄文後期
647	1235	9D東	Ⅱ層	土製円盤	完形	斜行縄文。	RL	4.1	4.0	0.5	12.9	縄文後期
649	1236	10D南東	Ⅲc層	土製円盤	完形	無文。		2.5	2.5	0.5	4.3	縄文後期
648	1237	11D南西	Ⅲc層	土製円盤	完形	斜行縄文。	RL	3.5	3.0	0.3	10.6	縄文後期

〈スタンプ形土製品〉

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	類別	計測値(cm) 印面部長径	印面部短径	高さ	重量(g)	特徴・文様・備考	時期
100	1218	A1住居跡	覆土①層(Q2)	スタンプ形土製品	3.1	2.9	(3.2)	12.7	足袋形の本体に摘みが付く。印面部には沈線の直線・弧線による文様が描かれる。摘み部に貫通孔1箇所。	縄文後期
101	1206	A1住居跡	覆土上位(Q4)	スタンプ形土製品	4.7	3.0	2.9	23.8	足袋形の本体に摘みが付く形状で、印面部に沈線による重層的円弧文。摘み部には貫通孔1箇所が穿たれる。	縄文後期
102	1207	A1住居跡	覆土①層(Q3)	スタンプ形土製品	4.1	2.1	4.3	25.0	方形状の本体印面部には格子状の文様が沈線により施される。摘み部には貫通孔1箇所が穿たれる。	縄文後期
238	1221	B10住居状	覆土	スタンプ形土製品	3.6	3.3	2.6	17.9	円錐形。2条の沈線による入組んだ渦巻状の文様。摘み部には焼成前に穿たれた貫通孔1箇所。	縄文後期
645	1211	C区水路跡(住居群南側)	覆土(砂)	スタンプ形土製品	(2.4)	2.6	(1.4)	7.5	欠損により全体の形状は不明。印面部には、沈線により十字形の文様が施文される。	縄文後期
644	1227	10D4C	Ⅲc層	スタンプ形土製品?	—	—	—	4.6	欠損により全体の形状は不明。沈線により、印面中央に直線1条、その周囲に重層する2条ずつの弧線文。	縄文後期

〈振り子形土製品〉

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	類別	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	特徴・文様・備考	時期
215	1219	B8住居跡	炉脇床面	振り子形土製品	5.7	3.7	3.7	52.7	2種の原体(LR、RL)が施文される。羽状縄文を意識したものと思われるが、全般に不整。摘み部には、焼成前に穿たれた貫通孔が1箇所ある。	縄文後期
263	1220	B11住居跡	覆土上位	振り子形土製品	(3.8)	4.0	4.1	62.8	2種の原体(LR、RL)で施文され、下部では比較的整った羽状縄文を形成しているが、上部では不整。摘み部が欠損しており、詳細不明である。	縄文後期

〈その他の土製品〉

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	類別	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	特徴・文様・備考	時期
91	1213	A1住居南半部	検出面	耳栓形土製品	1.25	1.35	0.8	1.5		縄文後期
90	1214	A1住居Q4	覆土①層	多孔底土器?	(3.3)	(3.9)	0.9	7.9	底部の破片資料と思われる。	縄文後期
103	1212	A1住居Q1	覆土①層	不明	(2.0)	1.9	0.8	2.9	土器の突起かもしれない。	縄文後期
104	1224	A1住居跡	覆土1層	垂飾品?	2.35	1.5	1.5	3.5	粘土をペンサック形に手ずくね成形したもので、調整が雑駁なため粘土のつなぎ目が明瞭に残る。中央付近には貫通孔1箇所が穿たれている。	縄文後期
264	1222	B11住居	覆土上位	土製品?	6.4	4.4	4.2	97.1	詳細不明。焼成を受けた粘土塊の可能性もあろう。	縄文後期
429	1215	B区pp12	覆土中位	腕輪?	(1.3)	(3.25)	0.7	3.0	赤色顔料が塗布されている。欠損している。	縄文後期
643	1210	6G1a	Ⅳ層	不明	(2.7)	(2.9)	1.6	9.5		縄文後期

第７表　石器・石製品観察表

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	特徴・備考	石材	産地	時期
105	1323	Ａ１住居跡	覆土１層	石鏃	2.6	1.5	0.3	1.0	無茎。鏃身縁辺は弧を描いて末端で窄まり脚状となり、基部は抉入している。	頁岩	北上山地	縄文後期
148	1329	Ａ４住居跡	貼床層	石鏃	2.5	1.7	0.4	0.9	有茎。基部の絞りが緩く、全体がやや菱形ぎみである。鏃身は短く、長さに比してやや厚手である。	－	－	縄文後期
149	1343	Ａ４住居跡	貼床層	敲磨器	13.8	9.4	3.9	800.0	側縁辺に磨り痕。	－	－	縄文後期
154	1342	Ａ５住居跡	覆土	敲磨器	10.2	6.9	4.6	372.2	腹面および左側縁に敲打痕。また背面にはごく弱い敲打痕が見られるが、使用によるものか不明。	－	－	縄文後期
157	1315	Ｂ１住居跡	床面	板状石製品	12.8	8.0	0.7	114.8	扁平な板状である。表面の大部分は剥落しているが、ごく僅かな残存部分には磨り痕跡と思われるものも見られるが、不明瞭である。	砂岩	北上山地	縄文後期
173	1309	Ｂ３住居跡	覆土	石匙	(3.8)	(2.4)	0.7	5.6	欠損しており、全体の形状は不明。残存部では側縁に刃部が付けられているが、調整は大まかであり、製作途中で欠損した未成品の可能性もある。	頁岩	北上山地	縄文後期
216	1310	Ｂ８住居跡	床面	石匙	6.2	2.4	0.6	6.3	縦型。木葉状。比較的薄く、丁寧な刃部調整。	頁岩	北上山地	縄文後期
242	1338	Ｂ11住居跡	床面	磨製石斧	(13.9)	5.6	2.9	300.7	刃部欠損。全面に擦痕が顕著。右側縁に弱い敲打痕が見られ、左側縁には両面から剥離が入っている。	頁岩	北上山地	縄文後期
265	1333	Ｂ11住居跡	覆土下位	尖頭器？	(2.5)	(2.3)	1.2	4.5	先端部のみで、詳細不明。	－	－	縄文後期
266	1326	Ｂ11住居跡	覆土上位	敲磨器	7.0	5.2	2.7	127.5	両面・側縁に顕著な磨り痕・擦痕。本来は楕円礫を利用したものであろうが、使用により側縁が平坦化している(特に右側縁)。	頁岩	奥羽山脈	縄文後期
267	1324	Ｂ11住居跡	覆土上位	磨製石斧	(10.8)	5.7	2.3	193.9	基部欠損。両縁辺はやや弧を描いて膨らんで丸みを帯びている。器表全面に擦痕。縁辺部には、擦痕より新しい弱い敲打痕が断続的に見られる。	ホルンフェルス	北上山地	縄文後期
268	1337	Ｂ11住居跡	掘り方覆土	磨製石斧	(10.5)	5.2	2.4	207.4	刃部欠損。全面に顕著な擦痕あり、腹面には小剥離が複数見られる(擦痕よりも新しい)。基部末端は敲打痕跡が認められる。	－	－	縄文後期
357	1325	Ｂ19住居跡	覆土	磨製石斧	(9.6)	4.6	(2.2)	118.4	全体に欠損著しく、形状不明。全体に擦痕が見られ、一部に利器による瑕(ガジリかもしれない)。	頁岩	北上山地	縄文後期
367	1321	Ａ４土坑	覆土中位	敲磨器	7.8	7.0	4.5	356.6	楕円礫の両面に顕著な磨り痕跡。	砂岩	北上山地	縄文後期
400	1301	Ｂ19土坑	覆土下位～底面	石鏃	3.2	1.5	0.3	1.2	有茎。断面は扁平。	頁岩	北上山地	縄文後期
423	1330	Ｂ45土坑	覆土上位	石鏃	3.0	1.7	0.4	1.1	有茎。鏃身は三角形状だが先端に向かって内彎してやや鋭利になり、基部は短く尖る。基部にはアスファルトが付着している。	－	－	縄文後期
424	1339	Ｂ45土坑	覆土(Ｑ１)	磨製石斧	(5.0)	4.5	2.3	61.6	基部のみで、全体の形状不明。全面に擦痕。	頁岩	北上山地	縄文後期
650	1302	７Ｈ５ｂ	Ⅲｂ層	石鏃	3.2	1.4	0.3	1.2	有茎。やや紡錘形。断面は扁平。	頁岩	北上山地	縄文後期
651	1303	７Ｈ２ｂ	Ⅲｂ層	石鏃	3.1	1.9	0.5	2.2	有茎。菱形を呈し、断面は厚く鋭利さに欠ける。	頁岩	北上山地	縄文後期
652	1304	７Ｅ２ｅ	Ⅲｂ層	石鏃	(2.7)	1.3	0.4	1.2	有茎。木葉形。先端部・基部欠損。やや厚い。	赤色頁岩	奥羽山脈	縄文後期
653	1305	10D	Ⅲｂ層(配石上位)	石鏃	3.1	0.9	0.5	1.2	有茎。幅狭く、厚み有り。尖頭器状。	頁岩	北上山地	縄文後期
654	1306	Ａ区西側	Ⅲ層上面	石鏃	(3.4)	1.5	0.5	1.9	無茎。基部は平坦で、両端部が短く出て脚状。やや厚い。	頁岩	北上山地	縄文後期
655	1307	５Ｈ３ｂ	Ⅲｃ層	石鏃	2.8	1.8	0.3	1.4	無茎。幅広く、基部は弧状に張り出す。扁平。	頁岩	北上山地	縄文後期
656	1328	Ｄ区トレンチ	Ⅲｃ層	石鏃	3.4	1.4	0.4	1.5	無茎。先端欠損。基部がやや内に入る凹基形。	－	－	縄文後期
657	1331	９Ｄ北東	Ⅲｃ層	石鏃	(2.8)	(1.8)	0.3	1.2	基部欠損により形態不明。	－	－	縄文後期
658	1334	８Ｅ(Ｂ区側)	Ⅲｂ層下位	尖頭器？	4.2	3.7	1.0	12.9	五角形状。やや厚手。腹面は一次剥離面を残す。先端付近にのみ調整が入るが、先端部はそれほど鋭利ではない。不定形石器の可能性もある。	－	－	縄文後期
659	1308	10D北東	Ⅲｂ層	石錐	5.1	2.2	0.4	3.4	細い棒状の機能部に、厚い撮み部が付く。素材剥片の形状から、全体にやや反りがついている。	頁岩	北上山地	縄文後期
660	1312	７Ｅ２ｅ	Ⅲｂ層	石匙	6.6	3.7	0.8	13.3	縦型。逆スペード形。縁辺全体に刃部調整が施されている。やや厚手。	頁岩	北上山地	縄文後期
661	1311	10D北東	Ⅲｂ層	石匙	6.0	4.9	1.0		縦型？素材剥片の形状をそのまま残しており、粗い刃部調整により、側縁辺の一部に刃部が付けられている。厚手で全体に雑な印象。未成品か。	頁岩	北上山地	縄文後期
662	1332	10D	Ⅲｂ層	石匙	3.5	6.5	1.0	13.0	横型。刃部軸に対して撮みは斜位に付く。厚手。	－	－	縄文後期
663	1314	６Ｇ２ａ	Ⅲｃ層	削掻器	5.0	8.2	0.9	50.2	三角形状。剥片の形状を利用して鋭利な末端部を刃部として利用している。刃部には微細剥離が見られるが調整ではなく、使用痕(刃毀れ)である。	頁岩	北上山地	縄文後期
664	1335	４Ｉ南半斜面部	地山(Ⅴ層)直上	石篦	7.3	3.4	2.0	36.9	やや五角形ぎみで、縁辺・末端に細かい調整剥離が施されている。末端部分は急角度で鈍い刃部となっている。右側縁は大きな剥離により抉りが入っている。厚手で断面は台形状。打製石斧かもしれない。	頁岩	北上山地	縄文後期
665	1340	６Ｇ～６Ｈ	Ⅲｃ層	磨製石斧	(10.0)	5.7	2.5	240.2	基部・刃部ともに欠損。右側縁部には大きな剥離が加えられている。全体にごく弱い敲打痕が見られる(ペッキング痕跡？)。	頁岩	北上山地	縄文後期
666	1317	Ｄ1焼土周辺	Ⅱ層	小型磨製石斧	4.7	2.7	1.0	15.5	小形。短く、寸詰まりであり、欠損した石斧を再利用したものかもしれない。刃部は軸線に対して著しく斜位。刃部の片減りによるものか。	頁岩	北上山地	縄文後期
667	1316	埋文トレンチ２	表土～Ⅲａ層	磨製石斧	(5.5)	3.7	1.5	52.5	基部欠損。断面はやや丸みを帯びている。器表全面に擦痕。	ひん岩	北上山地	縄文後期
668	1318	６Ｇ１ｅ北半	層位不明	磨製石斧？	9.9	4.3	2.3	116.8	側縁部を見ると人為的な加工痕跡が認められるものの、擦痕等の整形痕跡があまりなく、刃部に鋭利さがない。使用痕もなく、実際に使用されたものか疑問がある。打製石斧の未成品かもしれない。	－	－	縄文後期
669	1313	Ａ区西端	Ⅲｂ層	石篦	6.4	2.8	1.0	18.0	短冊形。素材剥片の形状によるものか、右縁辺は急角度の調整が入る(刃潰し加工？)のに対し、左縁辺は緩やかである。	頁岩	北上山地	縄文後期
670	1341	Ｂ区斜面部	Ⅲｃ層下位	敲磨器	3.9	3.2	1.6	15.4	Ｂ20住居付近出土。小さな楕円礫の両面に磨り痕。	－	－	縄文後期
671	1322	７Ｅ２ｃ	Ⅲａ層下位	敲磨器	(5.5)	(5.6)	(5.3)	147.6	欠損品であり、形状不明。両面に磨り痕跡。	花崗岩	北上山地	縄文後期
672	1327	７Ｇ２ａ	層位不明	砥石？	8.8	3.7	(6.9)	232.7	不整形の自然礫であるが、一部に切りこみ状の溝が見られる。溝の断面はやや鋭角なＶ字状、両側に擦痕が見られる。砥石としての使用を想定したが、石質を考えると不確実である。	頁岩	北上山地	縄文後期
673	1344	５Ｆ	Ⅲｃ層	石鍬	23.5	10.6	3.4	540.0	脆く崩れやすい。右側縁・背面は自然面のまま。	砂岩	奥羽山脈	縄文後期
674	1319	６Ｇ１ｅ北半	Ⅲｃ	石刀	(13.0)	2.6	1.2	68.1	先端・基部を欠損で欠く。全体に研磨による擦痕が縦横に見られる。	ホルンフェルス	北上山地	縄文後期

第8表　金属製品観察表

掲載番号	登録番号	出土地点	層位	種別	計測値（cm）			重量（g）	時期	備考
					長さ	幅	厚さ			
167	1401	B3住居Q3	覆土下位	釘？	3.6	1.1	0.7	2.6	平安	鉄製品。
168	1402	B3住居床面土坑2	覆土	鏃？	5.2	3.0	0.6	4.0	平安	角棒状のL字状鉄製品。
681	1404	5G4b南半	Ⅲb層	不明	3.8	0.7	0.3	1.8	不明	鉄製品。欠損。
680	1405	9D南西部	Ⅲb層	折頭釘？	3.7	1.2	0.8	9.3	不明	鉄製品。欠損。
679	1406	3I斜面部	Ⅲa層	鎌	3.8	10.2	0.5	28.5	不明	鉄製品。
－	1407	A区	表土層	銭貨	*	*	*	3.7	近世	寛永通宝。不掲載。

Ⅵ　まとめと考察

1. 遺物

(1)縄文時代

a．縄文土器　前章において出土した縄文土器を主に時期的観点から大別し、後期前葉～後葉の範疇に収まる第Ⅱ群土器が本遺跡の主体を占めており、主体が後期中葉にあることに言及した(註１)。本項では、第Ⅱ群土器について、若干の特徴点および既存の土器編年における位置付けに触れる。

〈器種別の特徴〉 第101～102図に示した立体資料について、その特徴の概略を述べる。**深鉢**：口縁部形態により２分される。朝顔形の大波状口縁と平縁である。大波状口縁の深鉢はいずれも精製土器であり、口縁端部に刻み目帯が巡り、大きく開く口縁は磨かれて無文、頸部にクランク状の帯縄文が付される、という文様構成が共通して見られる。一方、平縁の深鉢には精製・粗製ともに見られるが、量的には粗製が主体的である。器形は、胴部が直線的に外傾ないしは僅かに外反し、口縁部付近で僅かに内彎している。鉢：胴部に帯縄文が付されるものと、無文のものが見られる。前者の帯縄文には入り組み状、鍵状、木葉状？、Ｓ字状？等が見られる。**浅鉢**：精製・粗製ともにあり、精製土器は胴下半に沈線文が付されるものが多い。沈線は連続する横Ｕ字形を一筆書きしているもので、結果的に４～６段の横位沈線＋縦位弧線区切りというモチーフとなっている。十腰内Ⅱ式や加曾利Ｂ1式に見られる文様と同種のものである。338は他と様相が異なり、口縁に瘤状突起が貼付され、口縁に沿って刻み目帯、器表全面に帯縄文が展開している。他の精製土器よりも若干新しい様相であると考えられる。**台付鉢**：浅鉢ないしは鉢の底部に台が付されたものであり、239は台付鉢、その他は台付浅鉢か。精製土器である。台部は底部から急激に窄まるものもあり、269などは台部が高くかつ歪みがあることから安定性に欠けている。**壺**：器形により、長頸壺と広口壺とに分けられる。長頸壺は口縁部が縄文帯＋無文帯となり、胴部にクランク状ないしは鍵状の帯縄文が付されるものが多いが、磨きにより無文となるものもある。貼り瘤が付されるものも少数ある。広口壺は、口縁部に刻み目帯が巡り胴部にＳ字状の帯縄文が付されるものと、無文のものがある。前者には口縁に山形の小突起が付されたものも見られる。注口土器：文様によって２つに大別される。“ミミズ腫れ”状の微隆起線文のものと、磨り消しの帯縄文を付されるものである。598は環状(袋状)の注口土器片と思われる。**単孔土器**： 350は頸部の欠損が著しいものの口縁～底部までの器形復原が可能な準完形個体である。また文化課の試掘調査においても１点出土しており(第８図)、本遺跡からは都合２点が出土したことになる(註２)。ともに熊谷常正氏の分類(熊谷1989)のⅢ類に相当する資料である。

〈時期〉 従来の編年観に照らせば、出土資料は次のように位置付けられる。

Ⅱ群Ａ類：後期前葉に属する土器。関東地方における堀之内Ⅱ式に併行するもの。曲線や直線の沈線のみを施された土器である。資料の絶対数は多くない。本類に該当するのは217・545・558である。

Ⅱ群Ｂ類：後期中葉に属する土器。関東地方における加曾利Ｂ式、東北地方における十腰内Ⅱ・Ⅲ式(今井・磯崎1968ほか)、新山権現社式(岩手埋文1993、金子1994ａ・1994ｂ)に併行するもの。出土土器の大部分がこの類に該当している。

Ｂ１類：加曾利Ｂ1式、新山権現社１式に併行するもの。横走する平行沈線文が施されたものである。複数段を一筆書き的に引くものが多く、横沈線と縦区切り沈線を別個に引いたものは寡少である。実測個体では360・478・597・622・633が本類に該当しており、破片資料では22・44・119・121・122・138・142・144・150・151・170・183・190・208・209・234・236・237・292・419・448・

480・486・487・500・534・535・563・600・606・618・626・627が本類に属するものと思われる。

Ｂ２類：加曾利Ｂ2式、新山権現社2式に併行するもの。文様の特徴は、綾杉状沈線文を施すもの、鍵状・クランク状などの沈線区画の帯縄文を施されたものである。本類には、実測個体の1・3・27・28・30・34・106・117・126・158・174・175・185・186・212・227～230・239・253・282・301・310・312～314・329・330・364・420～422・440・446・485・488・493・529・530・578・608・617・628が相当する。また、破片資料の多くが本類に属するものと思われるが紙幅の関係で列挙しないので、詳細は観察表を参照されたい。

Ｂ３類：加曾利Ｂ3式、新山権現社３式に併行するもの。Ｂ２類に似た文様をもつが、口縁部に刻み目帯を有するものである。破片資料の場合はＢ２類との区別が不明確な場合もあり、どちらにすべきか迷った不確定資料を含む。本類に該当するものは、実測個体で31・66・269・315・339・350・459・460・489・560、破片資料で39・42・49・70・77・109・132・189・219・244・246・247・291・304・316・317・331・335・370・386・391・402・403・437・439・443・449～451・454・455・467・470・481・483・491・494・511・512・531・533・536・554・585・587・610・619・625である。

Ⅱ群Ｃ類：後期後葉に属する土器。東北地方の十腰内Ⅳ・Ⅴ式、田柄貝塚Ⅳ・Ⅴ群土器〔田柄１・２式(金子1993)〕に併行するもの。胴部の磨り消し縄文が、入り組み状や木葉状を呈するもの。貼り瘤が付されるものがあるもののそれほど顕著ではなく、かつ主に注口土器で見られることから、いわゆる瘤付土器の初現期にあたるもので、我孫子編年(我孫子1989)の瘤付第Ⅰ様式にあたるものか。本類には、実測個体では8・9・14・29・33・107・184・338・504・526・243・303・572が相当する。破片資料では、2・7・10・11・13・15・40・41・45～47・50～52・53・74・169・218・232・252・272・273・274・280・281・287・288・293・411・495・498・509・514・515・517・519・522・523・540・541・542・544・546・548・561・566・567・569・580・586・588・589・590・591・592・599・609・635が該当すると思われるが、小破片が多く詳細不明であるため不確実なものも含んでいる。

なお、地文のみを施された粗製土器と全面がミガキ乃至ケズリによる無文の土器が見られるが、上記分類にあて嵌められず、具体の細分類は適わなかった。それらについては編年上の位置付けが不明であるが、出土状況から見て概ね第Ⅱ群Ｂ２～３類に共伴するものと思われる。

以上より、出土土器の主体は上記分類のうち第Ⅱ群Ｂ２類と推定され、検出された縄文集落の主体時期は後期中葉・加曾利Ｂ２式期にあたるものと考えられる。

本来は、施文原体の相違－羽状縄文における原体の時期差、他遺跡出土資料との対比など、やるべき検討課題は多いものの時間的な制約により詳細な検討を行い得ず、資料の羅列に終わってしまった。それらについては今後の検討課題としたい。

ｂ．土製品　袖珍土器、土偶、スタンプ形土製品、振り子形土製品、腕輪？、耳栓形耳飾、円盤状土製品など計41点が出土している。第Ⅱ群土器に共伴しており、縄文時代後期のものであると推定される。

ｃ．石器　石器43点が出土した。器種は、剥片石器－石鏃・尖頭器・石錐・石匙・石篦・削掻器、礫石器－磨製石斧・敲磨器である。検出住居跡数および土器出土量に比較しても著しく少量であり、かつ縄文の集落遺跡で普遍的に見られるはずの敲磨器類が僅かである。食糧加工具である敲磨器類がないということは、検出住居数に鑑みて極めて不自然な現象である。

ｄ．石製品　石剣・板状石製品の２点のみと、石器同様に極めて少ない。　（千葉）

〈深鉢〉

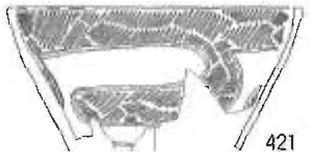
（波状口縁）

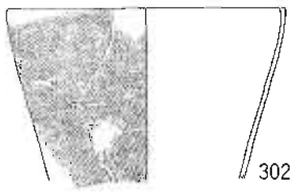
560

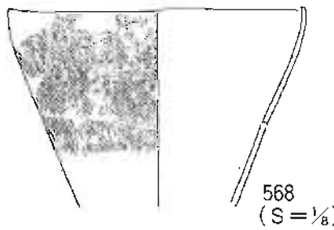
329

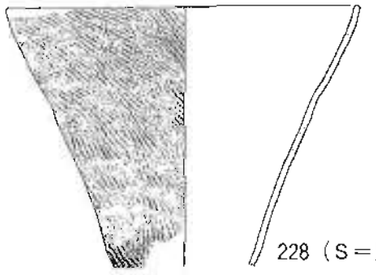
186

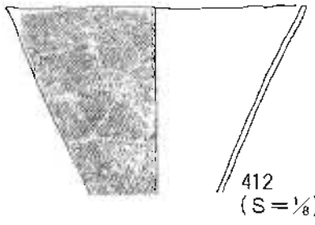
（平口縁）


421


302（S＝1/8）


568
（S＝1/8）


228（S＝1/8）

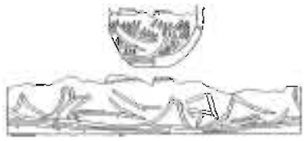

412
（S＝1/8）

〈鉢〉

107（S＝1/8）

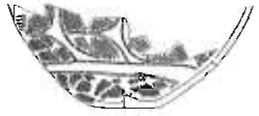
33

230


38

460

6

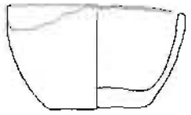

158

126

4（S＝1/4）

35

37（S＝1/4）


538

〈浅鉢〉

360

622

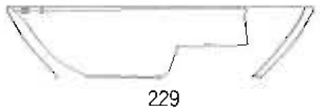
487

513

36

338

395


229

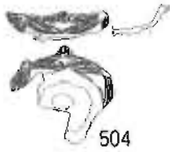
489

〈台付鉢〉

269

493

310


504

239

311

597

539

465

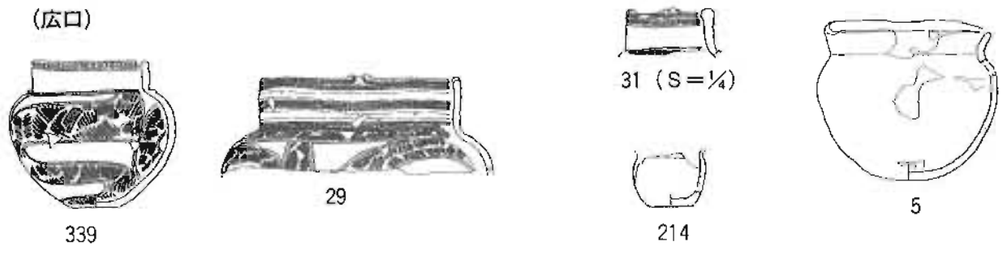
S＝1/6

第101図　出土土器集成図（1）縄文土器

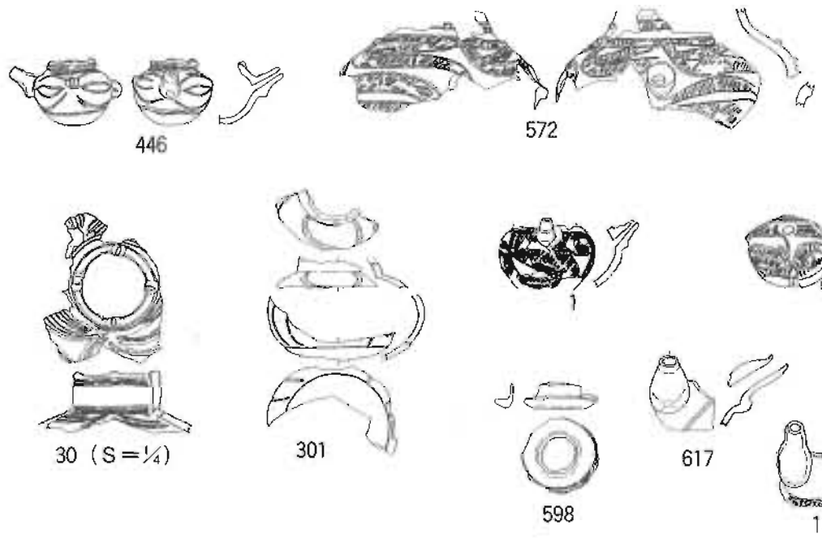
〈壺〉

（長頸）

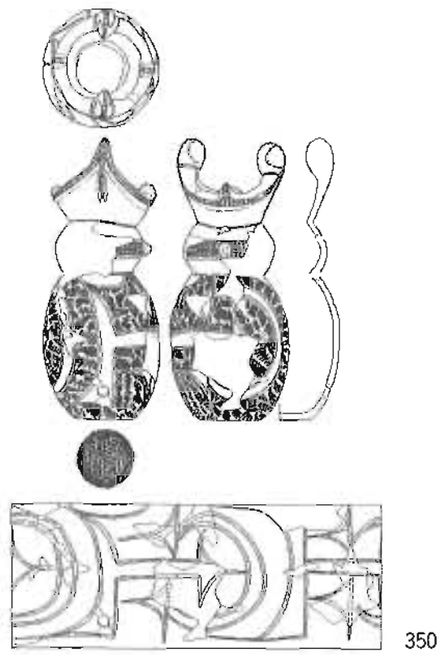
（広口）



〈注口〉

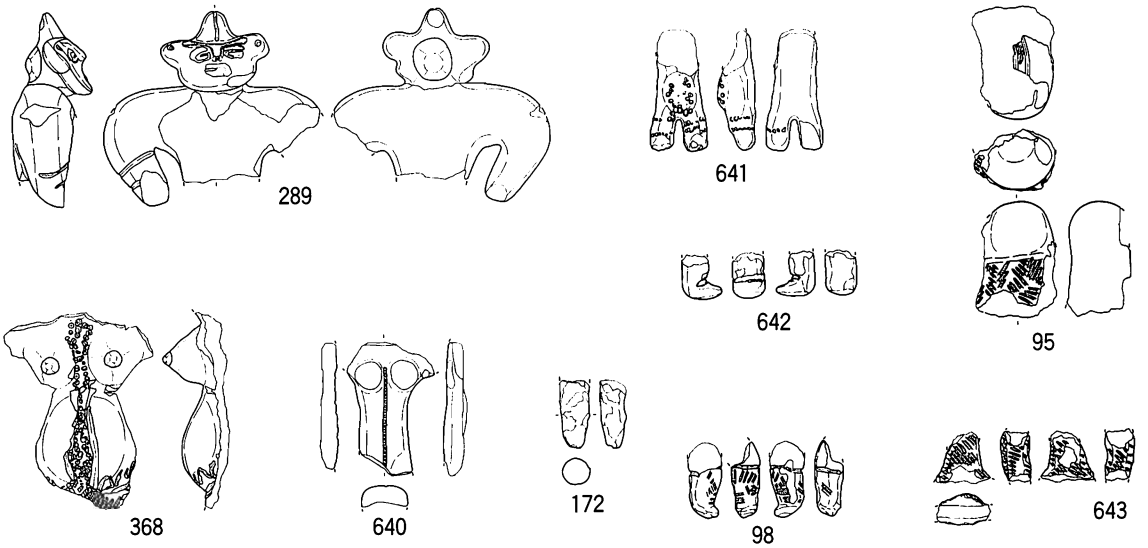


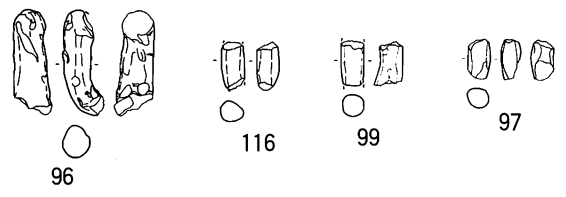
〈単孔〉



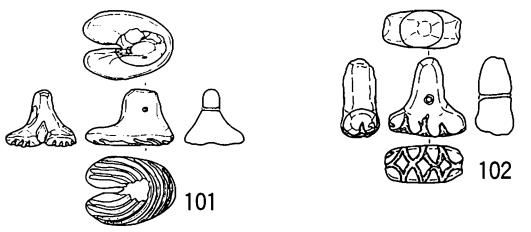
S＝1/6

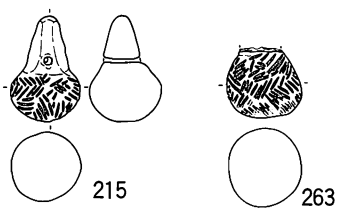
第102図　出土土器集成図（2）縄文土器



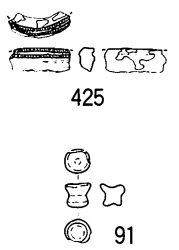


土　偶

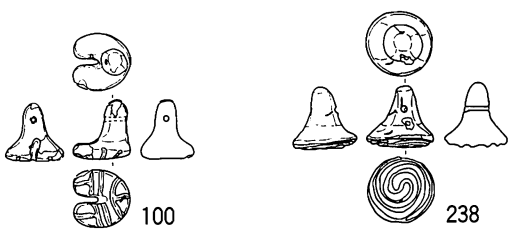




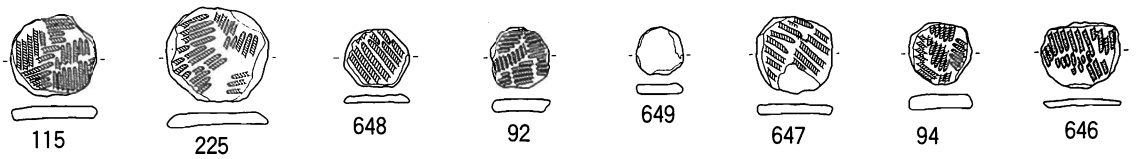
振り子形土製品



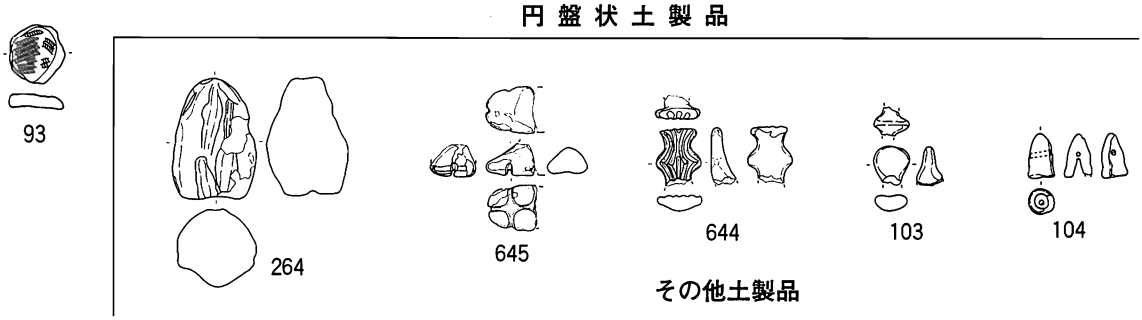
装　飾　品



スタンプ形土製品



円盤状土製品



その他土製品

第103図　出土土製品集成図（S＝1/4）

(2)平安時代

遺物の具体については既にⅤ章で述べた。検出された住居跡が4棟のみであり、且つ重複住居も存在するために遺物出土量に乏しい。そして当遺跡近郊での調査例も皆無であることから、土器について分類を行う意義も少ないと判断し、これを行わなかった。以下では前章とやや内容が重なるが、平安期の出土遺物について若干述べる。

器種は坏と甕である。坏は焼成状態及び黒色処理の有無から土師器と赤焼土器の2種に大別される。須恵器坏は出土していない。土師器坏は全て轆轤成形で内面黒色処理されている。器形に差異は乏しく（但し器形の歪み甚だしく、粗悪品的な印象を受けるものが多い）、また出土遺構の覆土の様相－火山灰の混入－からしても時期差は殆ど無いと考えてよい。底部に十字の線刻を施されるものが数点あり、焼成後にわざわざなされるものもあることから、これらは所謂「窯印」の可能性も考えておくべきだろう。時期は9世紀末葉から10世紀初頭とみられ、遺物の出土状況より遺構の年代もこれに準じる。赤焼坏は酸化焔焼成・轆轤痕のみの素焼き土器で、出土量は少なく、当遺跡では客体的存在である。墨書された破片が2点出土している。

甕は成形技法・焼成の違いから①轆轤成形甕、②非轆轤成形甕、③須恵器甕の3種に分かれる。①と③とは搬入品であろうが、②は当遺跡の年代からしても特異なもので、遺跡近郊で焼かれた在地生産の土器かもしれない。体部外面にはヘラケズリが多用され、口縁部はヨコナデされている。奈良時代以前からの伝統的な土器成形技術が保持されていたということであろうか。

江刺市稲瀬、瀬谷子・鶴羽衣台の丘陵には著名な瀬谷子窯跡群がある。当遺跡出土の轆轤成形土器がそこから供給されたものであるのかどうか今後の課題であるが、惜しむらくは土器胎土分析をせずにしまい、基礎的研究データを蓄積出来なかった。

金属製品も僅かながらある。B3住居跡から釘状・カスガイ状鉄製品が出土している。B3住居跡は焼失家屋であり、住居上屋の部材固定に用いられたものが上屋崩落の際にそのまま埋没したものかもしれない。また遺構外で鉄滓が出土している。遺跡内で小鍛冶程度がなされていた乃至、周辺で製鉄が行われていたとの証拠は今のところ何も無いが、遺跡北側を西流する伊手川の上流部には餅鉄（磁鉄鉱）が産出するとのことである。今後当遺跡周辺で発掘調査が行われる際には気に留めておいてもよいことである。　（菊池）

(3)その他

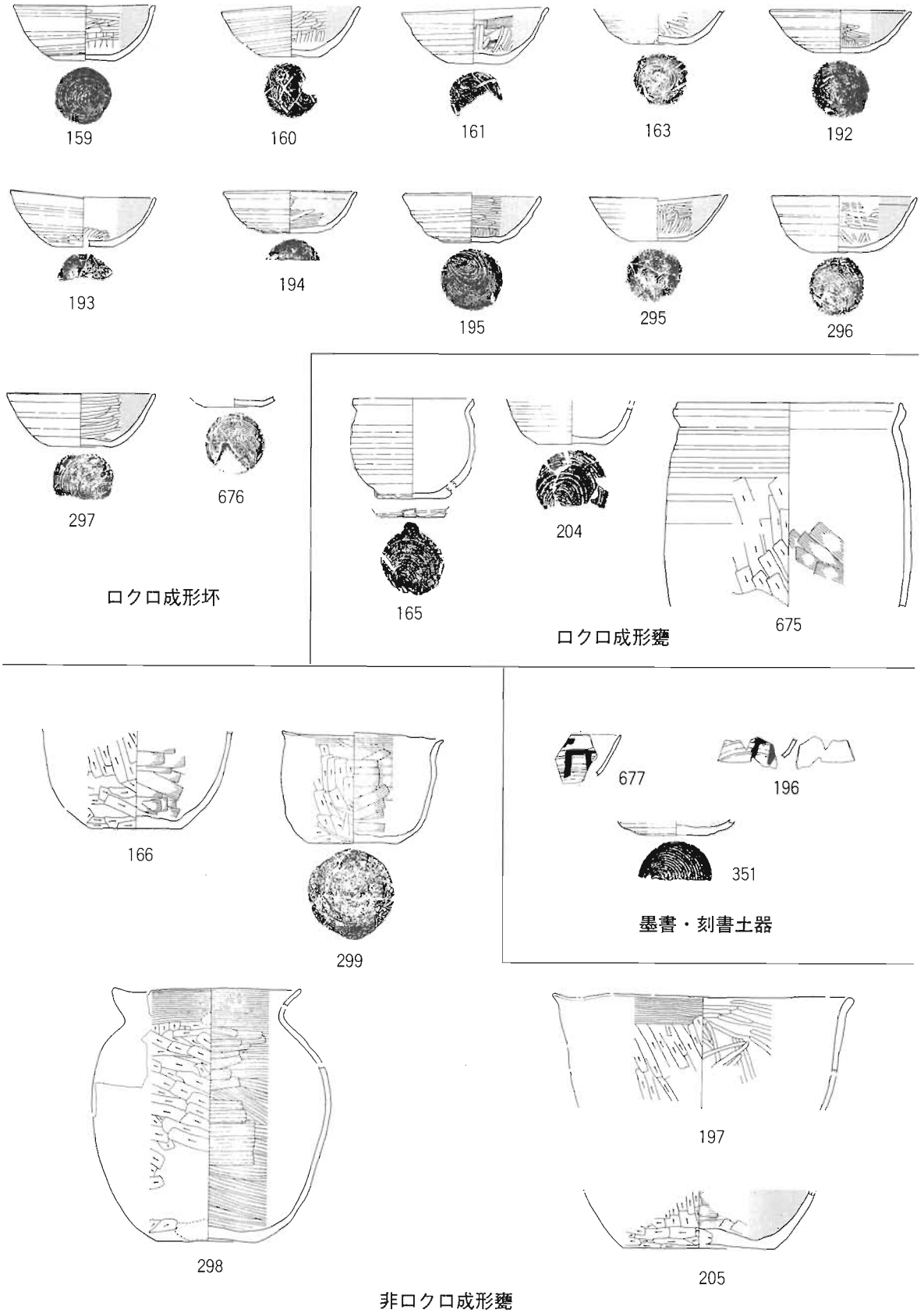
近世の銭貨〔寛永通寶〕、時期不明の金属製品〔釘状・鎌状〕である。うち釘状鉄製品については平安時代に属する可能性もあるが、遺構外で単独出土しており不確実である。　（千葉）

2. 遺構

(1)縄文時代

a．竪穴住居跡・住居跡状遺構

竪穴住居跡20棟、住居跡状遺構3棟が検出された。住居跡状遺構としたものは、土坑より規模が大きく炉・柱穴を持たないもの1棟（B10住居状）、弧状に配列する柱穴のみのもの2棟（B23・24住居状）である。後者については削平等により消失した竪穴住居の痕跡であると推定される。一方、前者については、炉・柱穴等の施設を欠く点で、住居跡であるか不確実な面がある。ただ、土坑とするにはやや規模が大きく、かつ底面に貼り床様の粘土層が見られたことから、消極的ながらも竪穴住居に類するものと考えた。以下、各属性について比較する〔住居跡→住、住居跡状遺構→住状、とそれぞれ略記する〕。



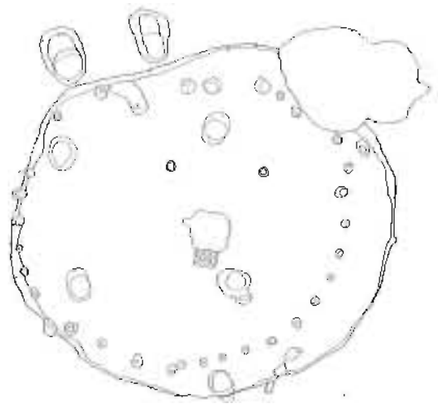
第104図　出土土器集成図（3）土師器Ｓ＝1/6

平面形・規模：平面形は、円形というよりは楕円形を基調としている。斜面に立地しており、かつ重複する例が多いため、全形を把握できたものは、A1住、B８・11・12住およびB10住状の５棟である。これら５棟で見るとその規模には大小があり、最大はB11住の長径7.2m×短径6.4m、最小はB８住の長径4.1m×短径3.5mである。なお住状を含めれば、長径3.1m×短径2.7mのB10住状が最小ということになる。**壁・床面**：壁は床面から外傾して立ち上がるもの、直立ぎみのもの、立ち上がりが不明瞭で緩やかなものが見られる。床面はいずれもほぼ地山Ⅴ層そのままが多いが、A１住、B５住、B10住状では貼り床が施される。**柱穴配列**：柱穴の在り方を見ると、しっかりとした主柱穴を有する住居は少なく、A１住・B11住の比較的大形の住居でのみ検出された。両住居ともに、主柱穴に加えて壁際に小pitが巡っている。その他の住居では主柱穴を欠き、壁際に小pitが巡る(不確実なものもある)か、柱穴自体を欠いている。中～小形住居で主柱を欠くことは、主柱を必要としない形態の上屋構造をとっていた可能性を示唆しているかもしれない。**炉の形態**：炉跡は14棟で検出された。炉の形態はいずれも石組みを欠く地焼炉である。焼土の形成は比較的良く、炉の使用面が浅い掘り込み状(皿状)に窪んでいる例もある。**付属施設**：出入り口状施設と推測されるものが４棟で見られる(A１住、B１・４・８住)。いずれも、住居外側に取り付く土坑状のものである（B４住は不確実)。**所属時期**：検出された23棟は、出土遺物の様相から概ね縄文時代後期に属するものと捉えられる。後期中葉以前のもの１棟(A４住)、後期中葉(新)～後葉(古)と思われるもの３棟(A１住・B11・12住)、詳細な時期が不明であるもの３棟(B21・22・23住状)、その他は後期中葉に所属するものと考えられる。

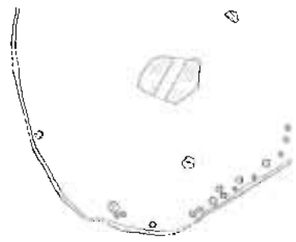
b．掘立柱建物跡

４棟検出した。形態別では、大形円形１棟、亀甲形３棟である。ここでは、形態別にその特徴点について触れ、併せてその機能・用途について考察する。

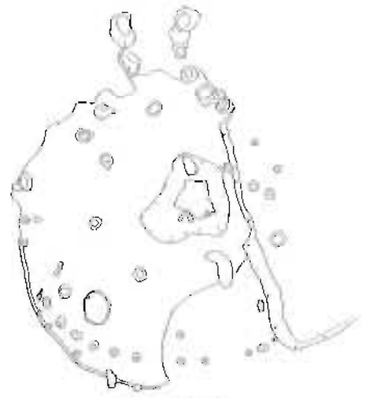
大形円形建物：A１建物跡が該当する。主柱穴は４本で、建物外周部に出入口部柱穴２本と小柱穴列が設置される形態である。列をなす小柱穴は建物の壁部にあたる壁柱穴であると考えれば、規模約10mの円形を呈することとなる。伴出遺物が柱穴から出土した土器片のみであり、所属時期を限定する根拠としては弱いが、後期中葉と考えられる。宮本長二郎氏の類型分類(宮本1998)に拠れば《壁立式平屋建物・C型》に該当する。すなわち「側壁に側柱を用いずに、細い縦木舞を間隔せまく立て並べて壁を形成するもの」である。岩手県南部における該期の大形円形建物の検出事例はごく僅かである。佐々木勝氏の集成(佐々木1994)によれば、八天遺跡・丸子館遺跡(北上市)の事例のみであり、これに近年調査された清水遺跡(一関市)の例を加えた程度であると思われる。八天遺跡(北上市教委1978・1979)は北上川東岸の段丘上に立地する中期末葉～後期の大集落跡である。検出された「５号家屋跡」は頻繁な建て替えが繰り返されている大形円形建物で、計10期の変遷が考えられている。最大規模の第１期では径17m×13.5m、建て替えに伴い規模は次第に縮小しているが、平面形は各時期ともにほぼ円形を保つ。４～５本の主柱穴の外周を壁立ての小柱穴が連続して巡り、壁柱穴列の西側には主柱穴と同規模の出入口部分に相当する柱穴２基がある。所属時期は後期前葉～後葉と考えられている。このタイプの建物は県外の事例ではあるが、大湯環状列石周辺遺跡において３棟検出されている。３棟(ＳＢ201・ＳＢ221Ａ・ＳＢ221Ｂ)はいずれも後期前葉(大湯式期)と推定され、規模5.4～8.5m、平面形態は本遺跡・A１建物跡および八天・５号家屋跡と酷似する。なお、ＳＢ201では建物の範囲内に焼土３箇所が検出されており、うち１箇所が建物に伴う炉跡であると報告されている。八天・５号家屋跡でも不明瞭ながら炉の痕跡とも考えられる焼土が検出されており、本遺跡のA１建物の構造・性格を考える上できわめて重要である。一方、丸子館遺跡(本堂ほか1983)・清水遺跡(岩手埋文2002a)では、後期初頭の大形円形建物が各１棟検出されている。丸子館で検出された「ＭＥ－１遺構」は、柱穴が同心円状に二列巡る大



A１住居跡

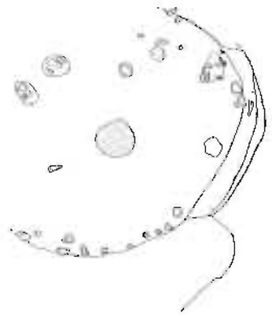


A５住居跡

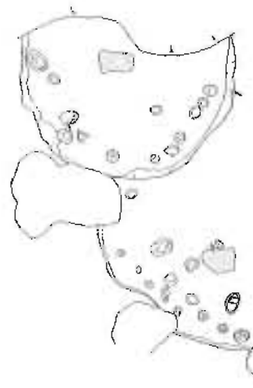


B１住居跡

B２住居跡

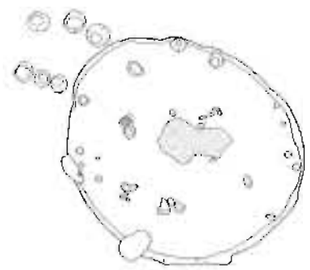


B４住居跡

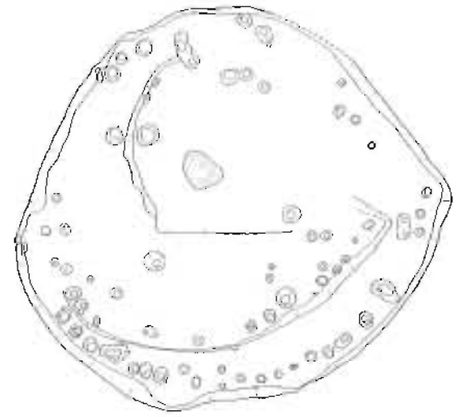


B７住居跡

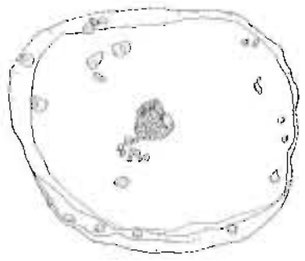
B20住居跡



B８住居跡



B11住居跡

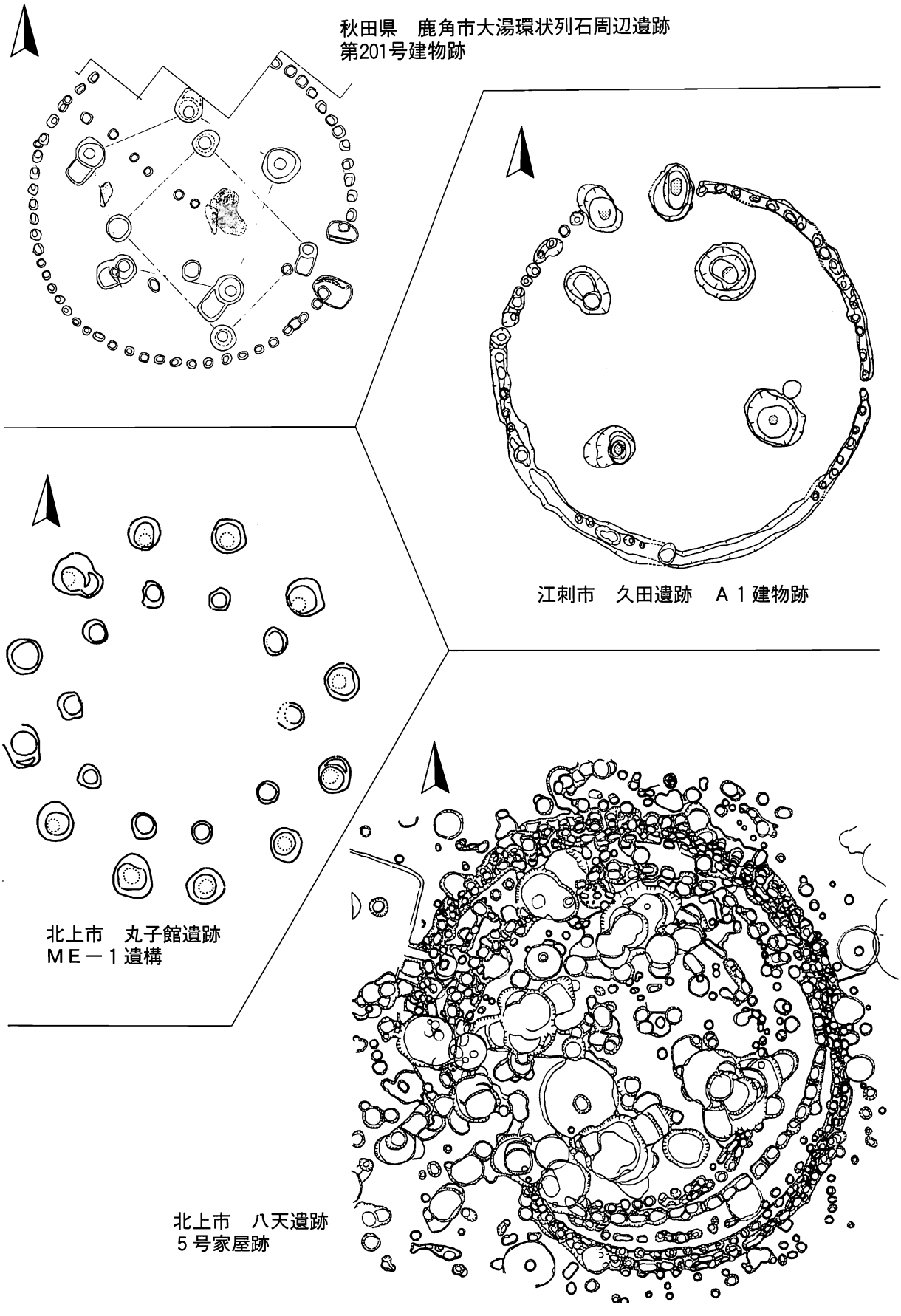


B12住居跡

B14住居跡

B15・16住居跡

第105図　住居跡集成図（S＝1/100）



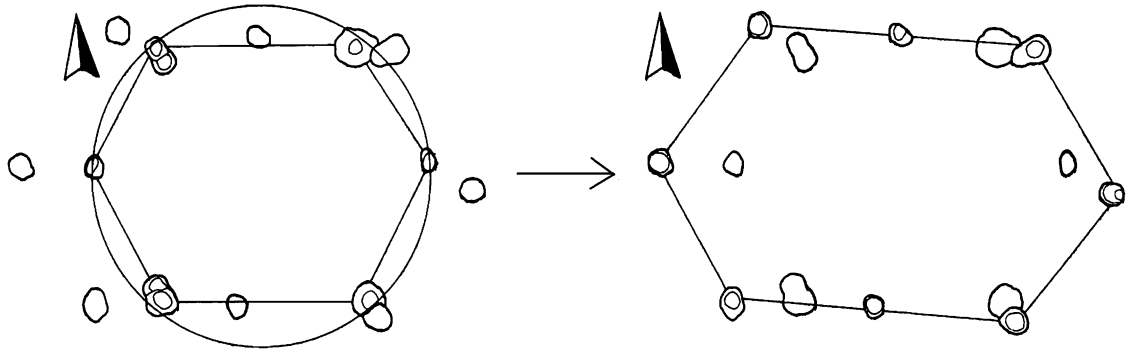
第106図　大形円形建物集成図（Ｓ＝1/150）

形円形建物である。外側の柱穴列では、掘り方の径１ｍ強・深さ90㎝・柱痕跡の径35～40㎝を測る柱穴12基が環状に並ぶ。柱穴列の描く円の径は約10ｍ×9.7ｍで、やや楕円形気味ではあるが、ほぼ円形を呈している。また、この円の内側の柱穴列は、外側よりやや小径の柱穴10基からなり、掘り方の径60㎝・深さ48㎝ほどで柱痕跡は明瞭ではない。この建物の所属時期は、外周部柱穴の出土遺物から後期初頭(堀之内Ⅰ式併行期)と考えられている。また、清水遺跡では半截木柱痕を有する大形円形建物が検出されている。掘り方の径・深さともに１ｍ以上を測る柱穴が重複しつつ環状に巡り、その外周の径は13ｍである。このうち数基の柱穴では半月形の柱痕跡が確認され、丸太材を半截して用いていたものと推測されている。

これらの類例の平面形態を宮本分類に当てはめれば、八天の建物は《Ｃ型》、丸子館・清水の建物は《Ａ１型・円形求心平面型平屋建物》にあたり、平面形態には差異が認められる。これらの３例の中では、八天・５号家屋跡が規模に差異をもつものの、本遺跡・Ａ１建物跡と構造が酷似し、かつ時期的に近いものである。既に記載したとおり、本遺跡のＡ１建物跡は斜面に構築されており、棚田造成に際して東半部は削剥を受けている。当建物の本来の構築面(あるいは床面)は確認できなかった。したがって、当建物が掘り込みを伴った竪穴住居跡に類する建物であったか、高床式の建物であったのかは明瞭には判別できなかった。上に述べたように、構造が類似している八天遺跡や大湯環状列石周辺遺跡の建物では炉跡とも思える焼土が検出されており、これらは前者――掘り込みを伴って地面を床とするものである可能性がある。本遺跡例も同様だった可能性もあるものの、斜面上方で「床面」が検出されていないことから、掘り込みを伴うとすれば、さらに上のレベルに壁・床面が存在しており、かつ削剥により完全に失われたものと解釈せざるを得ない。いずれ、現状のデータではこれ以上の推論は不能であり、構築面および構造については不明と言わざるを得ない。

亀甲形建物：Ｂ１～３建物跡の３棟である。平面の柱穴配置が六角形を呈する点で共通するが、柱穴数が異なっており、Ｂ１建物跡は８基、Ｂ２・３建物跡は６基の柱穴からなる。３棟ともにＢ区中央部付近に占地している。長軸線は概ね東西方向にほぼ共通しているが、原地形の制約によるものであろう。３棟の規模は、長軸張出部の柱穴間で5.5～7.5ｍ、短軸側の柱穴間で3.0～4.4ｍである。既述のとおり、Ｂ１建物跡とＢ２建物跡とは重複し、かつＢ２住居跡とも截り合い関係にある。Ｂ２建物をより大形のＢ１建物に改築し、さらにＢ1建物の廃絶後にＢ２住居跡が同じ場所に構築されており、新旧関係はＢ２建物→Ｂ１建物→Ｂ２住居となる。２棟の建物はどちらも平面形が亀甲形を呈する建物であるが、その構造には差異が認められる。第108図に示すとおり、Ｂ１建物が２間×１間の長方形建物の妻側に独立した棟持柱(または側柱)をもつ構造であるのに対して、Ｂ２建物は６本の柱が円形を基調として配置される求心的な柱配置であり寄棟の建物だった可能性が考えられる(註３)。平面形はいずれも亀甲形を呈しているものの、宮本分類に当て嵌めるとＢ１・３建物跡は「Ｂ１型」、Ｂ２建物跡は「Ａ２型」に該当するものと思われる。

建物の機能・用途：掘立柱建物の機能・用途については、直截的にそれを証明することが難しく、多分に状況証拠による間接的な推測を行わざるを得ず、当時の人々の精神性の類推といった困難な側面を含んでいる(註４)。縄文時代の掘立柱建物は1970年代から認識され始め、1980年代以降その機能・用途について石井寛氏、佐々木勝氏、佐々木藤雄氏、宮本長二郎氏らにより論考が示されいる(石井1998、佐々木勝1994、宮本1988・1998など)。佐々木勝氏は、西田遺跡(紫波郡紫波町)において検出された建物群を、土坑墓との密接な関連性から「殯屋的な施設」と推測しており(岩手県教委1980、佐々木勝1994)、秋元信夫氏も大湯環状列石周辺遺跡における建物群について同様の解釈を示している。一方で、佐々木藤雄氏は建物の機能を貯蔵施設(「高床式のクラ」)として捉える見解を示し(註５)、石井寛氏は祭祀施設説に対する疑問を提示し居住施設としての用途を想定している(註６)。



第107図　B１・２建物跡変遷想定図

本遺跡の亀甲形平面の建物は、B区東側の土坑群に隣接して３棟が検出された。そのうち、B１・２建物跡の間には明確な新旧関係が存在していることから、同時期に多くて２棟－筆者は１時期に各１棟と考えているーが存在していたことになる(註７)。これら３棟の存続時期は柱穴からの出土遺物が僅少なことから明確にし得ないが、B１・２建物跡とB２住居跡との重複関係から考えて後期中葉以前である。周辺の出土遺物から見て、後期前葉以前に遡る可能性はきわめて少ないであろうから、ほぼ後期中葉に収まると推測される。すなわち短期間に１～２回の改築が行われていることになる。それでは、単独かつ短期間で改築された建物の機能・用途は何であろうか。位置的に土坑墓に近いことから、調査時には葬送儀礼に関連する祭祀施設の可能性を考えていた。しかしながら、調査区の範囲内に貯蔵穴と推測される土坑(フラスコ形土坑)が検出されていないことから、貯蔵施設の可能性も否定しきれない。

問題は大形のA１建物跡である。宮本氏は《A１型》建物について、祭祀関連の遺構・遺物との関連性から「祭祀建物」と想定している(宮本1998ｂ)(註８)。また《C型》建物の八天・５号家屋跡については、遺跡内から土製の鼻・口・耳(土面の部品か)といった祭祀的な色合いの濃い遺物が出土しており、林謙作氏は集会所ないしは祭祀的施設としての機能を想定している(註９)(林1979・2001)。本遺跡のA１建物跡では用途・機能を積極的に特定できるような状況は確認できなかった。形態・時期的に近い八天・５号家屋跡の例を引けば、祭祀関連施設の可能性が想定されるところではあるが、八天でその根拠の一つとなっている祭祀的遺物は全く出土していない。但し、逆に一般居住施設ないしは貯蔵施設とすることにも、林氏の指摘するように規模の面での疑問がある。普通規模の住居や建物が集落内に別に存在することから考えて、これほどの大規模な建物を同様の用途のために特別に建てる必要性が見出せないからである。現状では、本遺跡・A１建物跡を積極的に祭祀施設と断定はできないものの、その可能性を否定できないことを指摘しておく。

c．土坑・柱穴

調査区全域で土坑45基、柱穴状小土坑を検出している。検出した土坑の分布を見ると、主にＢ区の７Ｅ・７Ｆ・８Ｅグリッド付近に土坑約30基と多数の柱穴状小土坑が密集する様相が認められる。土坑には検出時に明らかに特異な状況が見られるものがあった。すなわち、①覆土に大礫を含むもの、②覆土(特に上位)に中礫を多く含むもの、である。いずれも覆土は人為的な埋め戻しにより堆積したものである。①については、Ｂ８土坑が該当している。当土坑では覆土中に球状の大礫(安山岩系)が入れられており、礫の下端はほぼ底面直上まで達している。②は、Ｂ１・５・７・９・13・19・22・26・27土坑などが該当する。覆土中の礫はいずれも中～小礫であり、その量にもやや多寡の差がある。これらの土坑の礫についてどう解釈すべきか。①のＢ８土坑検出の球状礫については、埋葬儀礼との関連を考えたい。土坑自体の規模は長軸１ｍ×短軸0.8ｍほどで、残存部分の深さ20㎝、然程大きくも深くもないものである。仮に成人の遺体を埋葬するとすれば、やや窮屈である。いわゆる屈葬の形態をとったとしても規模が小さいと思われる。遺体の上に礫を置く行為は死者の蘇りを防ぐものとして民族学的事例でも見られるものであるが、土坑の規模からして疑問がある。可能性としては再葬墓としての利用であるが、再葬に際して置石をするものかどうか、筆者は事例を知らない。この点で検出礫が埋葬(再葬)時の置石かどうか不確実ではあるが、土坑を埋め戻す際にかかる特異な形状の礫を意味も無く土坑に投げ込む可能性は低く、そこに何らかの意味を感じざるを得ない。これを葬送と関連付けることは短絡に過ぎるとの批判もあるかもしれないところではあるが、当土坑出土礫を葬送に関連するものと考え、当土坑を土坑墓として解釈しておく。中村大氏が提唱している「土坑墓の認定基準」(註10)では「確実な認定基準」として“土坑上面の配石・集石・立石一方”や“底面・壁の礫設置”が挙げられている。当土坑もそれに該当する例と思われる。また、②の事例についても、その礫の意味付けが判然としないところではあるが、やはり中村氏のいう上面の配石・集石にあたるものではないかと考えられ、これらも土坑墓である可能性は否定できないところである。

その他、用途を推定できる積極的な根拠を欠くものの土坑墓として可能性あるものについて触れる。Ｂ21土坑は平面形状が小判形、長軸1.8ｍ×短軸１ｍ、深さ60㎝を測り、長軸方向北端部に副穴を有する。形態から見れば土坑墓の可能性があるが、伴出遺物を欠く。Ｂ33土坑では底面でやや扁平な棒状の亜角礫が出土している。Ｂ44・45土坑は、他の土坑に比して、やや多くの土器を出土している。いずれも他の遺構との重複により破壊されているため、全体形状が不明であるが、残存部から見れば小判形で浅いものである。

d．配石遺構

帯状配石１基、組石１基、立石１基が検出された。帯状を呈するＡ１配石は、Ａ区斜面部のⅢ層面に構築されており、いわゆる列石である。縄文時代後期の列石は、著名なところでは、秋田県の「大湯環状列石」(鹿角市)・伊勢堂岱(鷹巣町)、青森県の小牧野(青森市)等が上げられる。本県での検出事例は、滝沢村湯舟沢Ⅱ・松尾村釜石環状列石・新里村腹帯配石遺構群などがある。これらの遺跡はいずれも初頭～前葉期に属するものである。本遺跡のＡ１配石は、斜面に沿った弧状を呈するものである。東側末端は円形に膨らんでおり、反対の西側末端部では後世の攪乱によるものか礫が散在ぎみである。本来の形状――特にも西側がさらに伸びていたのか、調査では確認できなかった。残存部の形態から見て、本来は環状を呈した可能性も考慮したが、確証は得られていない。配石下部には何らの施設も持っていない。確実に本配石に伴う土器は無く、構築時期の特定材料が少ないものの、周辺の出土遺物から見れば縄文時代後期前葉～中葉に収まるものと考えられる。先に述べた配石遺構の類例の多くは後期初頭～前葉であることを考えれば、前葉まで遡るかもしれないが、当該期の土器は配石周辺部のみならず本遺跡自体でもごく僅かである。ここでは、後期中葉

の可能性があるとしておく。（千葉）

(2)平安時代

竪穴住居跡　4棟検出された。検出住居跡の各属性について纏め、若干の検討を加えることとする。

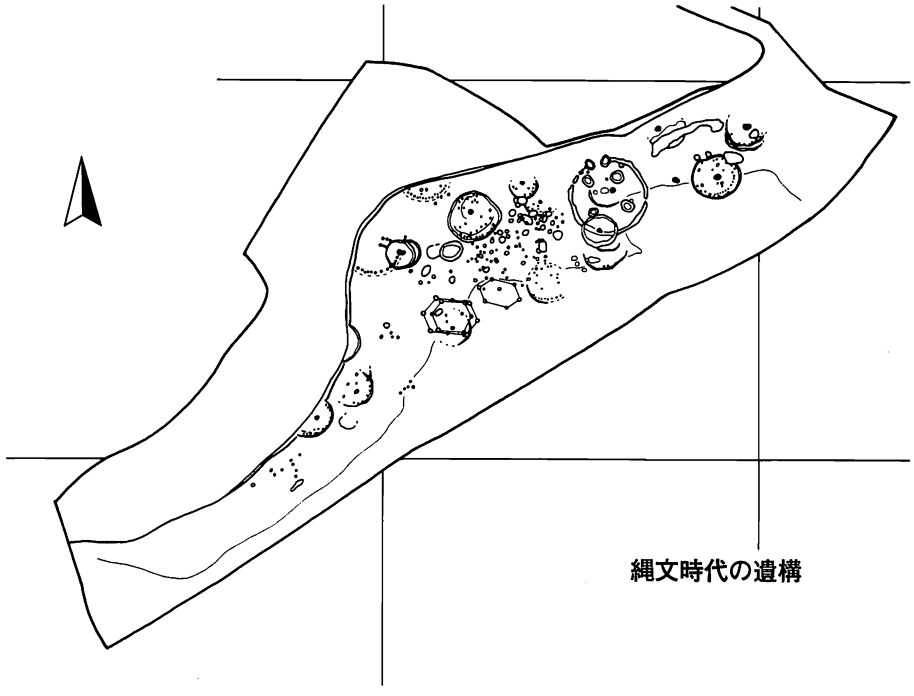
検出状況・重複関係：4棟中2棟が重複している。B17住居跡は重複によりごく一部のみしか残存していないが、他の3棟〔B3・6・13住居跡〕については全形を調査した。検出面はⅢc層面〔B3・13住居跡〕、Ⅴ層上面〔B6・17住居跡〕の各2棟である。後者2棟の周辺はⅢc層が希薄なエリア(削剥された？)であり、本来的にはⅢ層中に構築面があったものと思われる。前者2棟の検出は容易でなく、Ⅲc層黒色土面においてほぼ同質の黒色覆土の遺構プランを把握できず、結果的にトレンチにより確認したものである。**平面形・規模**：方形基調で、一辺3.2～4.2mと4棟ともにやや小形の住居跡である。**覆土**：いずれもⅢ層系の黒褐色土が主体であり、自然堆積的な様相を呈する。B3・13住の覆土中には、十和田a降下火山灰と見られるパミスが薄い層をなしている。**壁・床面**：壁は外傾しており、床面はB3・17住では地山Ⅴ層相当、B6・13住ではⅤ層に一部貼り床されている。柱穴：明瞭ではない。4棟ともに小形住居であることから,傾斜面を利用して床面に主柱を必要としない上屋構造をとっていたのかもしれない。**カマド**：4棟ともに1基ずつのカマドを有する。作り替え痕跡はない。〈本体〉3棟(B3・6・13住居跡)で火床部および側壁部を確認した。B17住居跡では側壁は残存しない。本体の構造は共通しており、礫を組んで芯材とし、その上に黒色シルトを被覆させている。B3住居跡では天井部の礫も残存(半ば崩落しているが)している。B6・13住居跡では天井部の礫は残存せず、両側壁でのみ芯材の礫が確認された。焼土の発達がB3住居跡では顕著ではなく、火床部に薄い焼土が認められた程度である。それに比してB6・13住居跡では、側壁・火床部ともに著しく赤変して焼土化している。両住居跡ともに火床部直上に焼土塊の混入層が堆積するが、カマド天井部構築土の崩落したものであろう。なお、B3・13住居跡の火床部には棒状の礫が設置され、その礫に土師器(坏および小形甕)がそれぞれ伏せられており、土師器甕を支脚に転用したものである。〈煙道部〉B3住居跡を除く3棟で確認された。B6・13住居跡では地下式構造で、煙道上部の構築土が崩落している。B17住居跡は構造不明である。煙道の方向には斉一性はなく、いずれも傾斜に沿って斜面上方側に伸びている。煙道長は1.1～2.1mである。B6住居跡では煙出し部に向かって深く掘り下がるのに対して、他の3棟では緩く上がり煙出し部に繋がっている。一方、B3住居跡では、カマド本体が石組みの比較的立派なものであるのに、煙道が確認できなかった。調査時には削平により消滅したものと解釈したが、もとより煙道が存在していなかった可能性も考慮しておきたい。〈設置位置〉すべて斜面上方側の壁に設置されており、作り替え痕跡は確認されない。B17住居跡では確認できないが、他の3棟では壁中央からやや南側にずれた位置に設置されており、該期における一般的な傾向に合致している。**付属施設**：B3・6・13住居跡の3棟では、カマド南脇床面で貯蔵穴と思われるピットが検出されている。また、B6住居跡カマドの下位で検出されたB46土坑がB17住居跡のカマド脇ピットだった可能性がある。B17住居跡カマド本体は截り合いにより失われており、正確な位置がわからないが、B46土坑北脇にあったとしても不整合はない。（千葉）

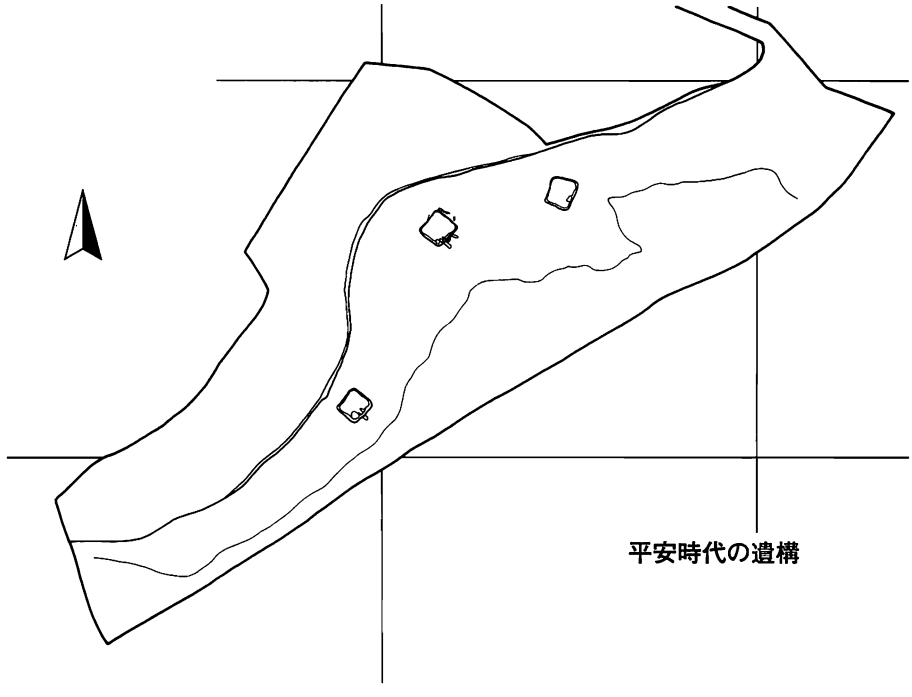
3. 遺跡

今回の調査範囲では、縄文時代後期および平安時代の集落跡が確認された。検出遺構の時期別の遺構配置は第108図に示している。本項では時期別に、集落様相やその性格について検討を試みた。

(1)縄文時代

岩手県南部における縄文時代後期集落の調査事例を文献により検索した。当初、本遺跡の主体である後期





第108図　時期別遺構配置図（S＝1/1000）

中葉期の集落を探したものの、当該地域における集落調査事例はごく僅かであることがわかった。該期の集落遺跡の調査事例はむしろ県北部において多く、当センター調査遺跡に限っても軽米町大日向Ⅱ遺跡(岩手埋文1995ほか)・馬場野Ⅱ遺跡(岩手埋文1986)・君成田Ⅳ遺跡(岩手埋文1983)、一戸町小井田Ⅳ遺跡(岩手埋文1984)・桂の木遺跡(岩手埋文1997c)、二戸市浅石遺跡(岩手埋文2002)、大野村上水沢Ⅱ遺跡(岩手埋文2002)などで該期集落の調査事例がある。さらには八戸市を含めた馬淵川(新井田川)水系まで視野を広げれば、八戸市には風張(1)遺跡(八戸市教委1991ａ・1991ｂ)、丹後谷地遺跡(八戸市教委1986)、丹後平遺跡、田面木(1)遺跡など後期の著名な集落遺跡群が存在している。次に岩手県央部に目を移すと、後期中葉の集落遺跡で、当該地域の標識遺跡とされている岩手町川口Ⅱ遺跡がある。また、御所ダム建設に伴って調査された盛岡市萪内遺跡では、後期中葉～晩期前葉期の遺構と膨大な遺物が出土した(註11)。それに対して県南部では、該期の土器自体は北上市の八天遺跡(北上市教委1978・1979)、西磐井郡平泉町の新山権現社遺跡(岩手埋文1993)、同郡花泉町の貝鳥貝塚(花泉町教委1971)、上閉伊郡大槌町の崎山弁天遺跡(大槌町教委1974)等で出土してはいるものの、中葉期集落の調査事例(面的に集落の広がりがわかるもの)は大船渡市上甲子遺跡(岩手埋文1997a)、東磐井郡大東町板倉遺跡(岩手埋文1997b)が見出せた程度である。上甲子では中葉期の竪穴住居５棟、板倉では同14棟が検出されている。

本遺跡の該期遺構配置を見ると、Ｂ区中央の７Ｅ・７Ｆ・８Ｅグリッド付近に土坑が密集し、かつ竪穴住居・掘立柱建物がその周辺に配置される様相が特徴的である。野外調査時点では、かかる様相から、当該土坑群が集落中心部に位置し、その周辺を住居・建物が環状に取り囲んで配置される、いわゆる環状集落構造を想定していた。縄文時代後期の環状集落は、青森県八戸市の風張(1)遺跡例が有名である。同遺跡では、後期中葉～後葉、特にも十腰内Ⅳ～Ⅴ式期の夥しい遺構・遺物が検出されている。検出された後期集落は「外側に住居跡群があり、その内側に土壙群そして、中央部に墓壙群と非常に規則的な配列を為して」おり、さらに「住居跡と土壙群の間に、掘立柱建物跡が点在」する良好な環状構造の集落跡である(坂川1994)。また、時期的には異なる〔縄文時代中期後葉〕が、環状集落の典型例として頻繁にあげられるのが、岩手県紫波郡紫波町の西田遺跡(岩手県教委1980)である。遺跡は北上川の低位氾濫原に存在する微高地〔残丘？〕部分であり、東北新幹線建設に伴って実施された調査では微高地北側において中期の環状集落が確認されている(註12)。調査は集落中心部を縦断するような形で行われ、環状集落の構造が明瞭に把握された。これらの環状集落の中心部の土坑群は土坑墓と解され、これらが集落の墓域をなすと考えられている。

かかる類例に照らせば、本遺跡のＢ区土坑群は集落の中心部・墓域をなすものと考えられる。事実、前項で検討したように、土坑群のうち14基程度は土坑墓だった可能性があり、検出した土坑すべてが土坑墓ではなかったにせよ、当該部分が墓域をなしていた可能性は高いであろう。但し、本遺跡の後期中葉集落が完全な環状構造をなしていたと断言することにも、現時点では躊躇を覚える。すなわち、①当該土坑群の密集範囲がやや狭いこと、②住居跡の配置が当初(調査時点に)想定していたよりも綺麗な環状とはなっていないこと、③円形大形建物であるＡ１建物跡が、遺構配置で見て集落北側〔環状の外側〕に外れること、等の点から検討の余地がある。残念ながら、本遺跡の場合は斜面上方側が削剥されているため、住居跡の配置ないしはその存在の有無すら判然としない。そのまま弧状の配置に止まっていた可能性もあるし、単に傾斜に制約された結果として環状ないし弧状に見える配置となったという可能性もある。

では、県南部の縄文後期集落の様相はどうであろうか。上甲子遺跡では後期中葉期の住居跡５棟からなる小規模集落が検出されている。南東向き緩斜面部でほぼ等高線に沿う形で纏まって配置されている。調査区内では該期の土坑４基も検出されているが、住居群からやや離れた位置に固まっている。遺構配置から見る

と、住居の配置はやや弧状ではあるが概ね等高線に沿ったものであり、土坑との関連性も読み取れない。一方、板倉遺跡では後期中葉の14棟が検出されており、うち１棟は敷石住居である。調査区は段丘平坦面で、やや標高の高い西側部分で該期住居が検出されている。また、住居跡周辺で、貯蔵穴・土坑墓と推測される土坑群が検出されているが、時期の詳細は不明とされており、住居跡との関連性は不明である。調査区の制約〔東西方向に細長い〕のため集落全体が不明であることもあり、調査区に限って見た限りでは住居・土坑の配置には規則性が認められない。上甲子遺跡および板倉遺跡ともに、該期集落は環状とはならないようである。以上を踏まえると、本遺跡の集落の在り方は特異なものであるとも思えるが、県南部における該期集落の事例自体が少ない現状では何とも結論が出せないところである。現状では、本遺跡の縄文後期集落が環状的ないしは弧状の集落構造をとっていた可能性がある、という点のみ指摘しておきたい。　　（千葉）

(2)平安時代

調査の早い段階で轆轤成形の土師器底部破片や須恵器小破片が調査区内で採集されたことから、調査区乃至その近隣に平安時代の集落が存在していることを想定していた。結果検出された古代の住居跡は4棟である。Ｂ6住居跡とＢ17住居跡は重複しており、同一住居の建替とも捉えられることから、4棟中で同時期に存在していたのは最大3棟である。これら3棟は北西向きに緩やかに下る斜面に構築されている。東から順にＢ3住居跡、Ｂ6住居跡（およびＢ17住居跡）、Ｂ13住居跡が、それぞれ約12m、約22mの間隔でほぼ等高線に沿って配置される。調査区の斜面上方は著しい削剥を被って平坦化しているため、本来はこの他数棟の住居が存在していた可能性はあるものの、削剥部分の面積や住居の配置状況から見てせいぜい2棟程度であろう（註13）。よって本遺跡の古代集落は3～5棟が疎らに配された散村的な景観を呈していたものと考えられよう。

集落の実年代であるが、2棟の埋土下層に灰白色～浅黄色火山灰の降下堆積が確認されており、これは理化学的分析を行わないでしまったものの、古代の住居跡であることから、十和田ａ降下火山灰の可能性が高いとみられる。十和田ａ降下火山灰については、西暦915年に降下したとの通説的理解がある。即ち、11世紀末頃に比叡山の僧・皇円によって著された『扶桑略記』には、延喜15年（915）7月13日のこととして、「十三日、出羽国、灰の雨ること高さ二寸、諸郷の農桑枯損の由を言上す。」と引用されており、この「灰」が、十和田ａ降下火山灰に当たると考えられている。そして土師器坏については、これまで9世紀末葉とされているものと形態的に近似する。住居埋土に混入した火山灰が十和田ａ火山灰であるとすれば、久田においては9世紀末葉から10世紀初頭にかけて集落が存在していたと考えることが出来る。江刺市内における平安期の遺跡調査例は、岩谷堂・愛宕・稲瀬等であるが、東寄りの北上山地に入った伊手地区で確認されたのは初めてである。当遺跡のような冬期間は日照条件に恵まれない北向きの緩斜面にさえ住居跡が存在していることから、広く開けた現在の伊手地区中心部などにも古代集落が存在するであろうことは想像に難くない。

久田の地で集落を営んでいた人々は蝦夷系住民か、それとも胆沢城造営時以降の移民の子孫なのか、詳しくわからない。但し出土遺物の項でも触れたが、当遺跡では轆轤成形土器と混じって前代的な非轆轤成形の土器が出土している。このことから当遺跡に居住していた人々は、伝統的な土器製作技術を保持し続けた在地系－蝦夷系住民ではなかったかとも考えられる。これとは齟齬するかもしれないが、古代の伊手について興味深い次のような説がある。即ち胆沢城造営後ほどなくして成立したとみられる江刺郡には、『和名類聚抄』に「江刺郡　大井　信濃　甲斐　槁井」とみえ、4郷存在していたことが知られる。このうち信濃郷について、伊手字小中田の**「戸隠神社」**が信濃からの移民によって祀られた神ではなかったかと考え、伊手を信濃郷に比定する説である（江刺市史第四巻、1990）。つまり江刺郡成立の段階で伊手に移民がなされたのではなかったかというわけである。現時点でこれを真説であるとする根拠は見出せないが、実際に平安期の集落が確認

されたとなれば、等閑視してしまうわけにもいかない。古代江刺郡は、稲瀬の瀬谷子窯跡群がよく知られるように、胆沢城の物的存立基盤としての役割が大きかったとされる（伊藤、2001）。市内の北上川流域には、9世紀初頭に成立した宮地遺跡、江刺郡家との関連性が想定されている落合Ⅱ遺跡など、北上盆地における律令行政の展開を考える上で重要な遺跡も存在する。但し久田遺跡の所在する伊手、平坦面の広がる米里・藤里など市域東部・北上山地域における律令行政の展開に関する検討は全く行われてこなかった。このことは当遺跡の発掘成果と併せ将来的には行われねばならないだろう。

久田の地に集落が営まれてからおよそ100年後、当遺跡にほど近い藤里に、**兜跋毘沙門天立像**（国指定重要文化財）が祀られた。そのころ時は既に安倍氏が奥六郡に勢力を拡げ始めていた。この毘沙門天を祀る藤里毘沙門堂は、大同3年(808)の創建と伝えられているが、実際のところはわからない。久田の地に暮らした人の子孫も毘沙門堂に参詣したのではなかったかと想像される。（菊池）

(3)まとめ

最後に、久田遺跡の調査結果について要点を纏める。

①本遺跡は縄文時代後期および平安時代の複合遺跡である。

②縄文時代後期の集落は、竪穴住居・住居状24棟、掘立柱建物4棟、土坑44基、帯状配石遺構で構成されている。土坑には墓の可能性をもつものが含まれ、土坑密集部分が集落の墓域にあたる可能性がある。また、検出された建物跡ー特にも大形の円形建物、配石遺構は集落の祭祀に関わる施設と考えられる。

③縄文時代の遺物は縄文土器、土製品、石器、石製品である。縄文土器は、前期前葉、中期中葉、後期前葉～後葉のものが見られる。量的には加曾利B式・新山権現社式に併行する後期中葉の土器が多く、集落の主体時期が後期中葉にあるものと推定される。

④平安時代の集落は、竪穴住居跡2～3棟からなる小規模なものである。出土した土師器の編年観等から、平安時代、概ね9世紀末～10世紀初の集落跡である。（千葉）

〈註〉

1) 東北地方の後期中葉期の土器編年は、未だ確立していない状況と云わざるを得ない。岩手県南部における該期土器は、関東地方の加曾利B1～3式を基準として「加曾利B式併行」と表現されることが多い。該期土器の編年としては、東北地方北部を中心とした十腰内Ⅱ～Ⅳ式(今井・磯崎1968)が著名であり、十腰内諸形式の土器分布圏は、現在の青森県域を中心とする東北地方北部への広がりを示すことは広く知られるところである。一方、東北地方南部については、宮戸Ⅱ式(後藤1981)・宝ヶ峯式が設定されているが、これらの形式はいずれも現在の宮城県域――とりわけ仙台湾周辺を中心とするものである。後期中葉は、後期初頭～前葉に比較すれば土器の様相に地域差が少ない時期であり、岩手県内においても、従来の調査報告では該期資料を十腰内Ⅱ～Ⅲ式(群)併行や加曾利B式併行という形で扱うことが多かった。しかし、本遺跡を含めた岩手県南部地域に青森ないしは宮城の編年を当て嵌めることは適切なのか、疑問があるところである。鈴木克彦氏が指摘するように、岩手県は東北地方の北と南の両要素が混在する地域であろうし、本来は独自型式が設定されるべきなのであろう(鈴木2001aほか)。後期中葉～後葉の編年案として岩手県南部の新山権現社遺跡の層位的資料に基づいて新山権現社1～3式が提唱され(金子1994a・1994bほか)、大湯式・十腰内Ⅰ式→新山権現社1～3式→田柄式1～4式という編年案が提示されている。十腰内式や大湯式、新山権現社式をめぐって金子氏と鈴木氏の間で論争のあるところであるが、論争の内容についてはここでは触れない。

2) 単孔土器については熊谷常正氏の集成・分類があり(熊谷1989)、それによれば45遺跡・60点と出土点数はそれ程多い訳ではない。近年、岩手県軽米町長倉Ⅰ遺跡の調査報告(岩手埋文2000)において、報告者の星雅之氏が単孔土器を集成しており、単孔土器を出土した遺跡は県内で20箇所を数えるに止まるとされている。

3) 構造の差異について宮本長二郎氏の論考(宮本1988・1998b)を参照して筆者が判断したが、筆者の力量や理解不足により断定できないところではある。

4) 石井寛氏は、掘立柱建物の機能について「竪穴住居址と掘立柱建物の組み合わせの多様性、地域の中での個々の遺跡の性格、遺跡群構成全体の中での個々の遺跡の位置付けについての解釈と関連する」ものと指摘している(石井1998)。

5) 佐々木藤雄氏の「方形柱穴列と縄文時代の集落」(1984、『異貌』、共同体研究会)については原典にあたることが出来ず、石井(1999ｂ)で引用されている部分から再引用している。佐々木氏の見解は最近の著作(佐々木藤雄2000)においても簡略に述べられている。

6) 掘立柱建物の機能論を巡る論争に関しては、石井寛氏(石井1996ｂ)、金子昭彦氏(岩手埋文1996；P192～193)のまとめを参照した。

7) 無論、現状で配列を把握できない柱穴群の中に、建物を構成するものが含まれる可能性はあり、実際にはもっと多くの建物が存在していた可能性もある。

8) 宮本氏は、栃木県根古谷台遺跡(前期)、長野県阿久遺跡(前期)、石川県真脇遺跡・チカモリ遺跡(晩期)の《Ａ１型建物》について「柱径太く、土坑墓や立石などの祭祀遺構・遺物をともなう」ことから祭祀建築の可能性を示唆した。

9) 林氏は八天・5号家屋跡について「普通の住居としてはいうまでもなく、ひとつのムラの住民が集まる施設としても大きすぎ」ることから、「いくつかのムラの住民が利用する集会所のような施設」と想定している(林2001)。また、出入口部形態の類似性から、同家屋跡と関東地方の敷石住居(柄鏡形住居)との関連性に言及しており、同家屋跡は関東地方から伝播した敷石住居が「機能・用途が切り換わると同時に、巨大化」したものであるとしている(前掲書)。

10) 中村大氏は土壙(土坑墓)の認定基準を提唱し(中村2000)、①人骨の検出②赤色顔料の撒布③土坑上面の配石・集石・立石④底面の周溝や底面・壁の礫設置⑤装身具・「第二の道具」の出土、等を土坑墓としての「確実な認定基準」としている。

11) 鈴木克彦氏は川口Ⅱ遺跡および萢内遺跡の出土土器を標識として、岩手県央部における後期の土器編年である川口２式と萢内Ａ・Ｂ式をそれぞれ提唱している(鈴木2001)。

12) 金子昭彦氏も指摘しているが、西田遺跡の航空写真(岩手日報社2001)を見ると、遺跡の立地場所は低位の水田面に小高く盛り上がった微高地である。環状集落はその微高地上の平坦面に形成される。低位面に孤立して存在する高台という点では、本遺跡もやや似通った景観を示しているとも思える。ただ本遺跡の場合は微高地というよりは残丘状でやや傾斜がきつく集落が斜面に張付いている点、様相を異にするが、遺跡の立地条件について興味ある問題ではある。

13) 調査区外の斜面上方(南東隣接部)は傾斜がきつく(写真図版１を参照していただきたい)、住居が存在している可能性は低い。また、調査区の載る残丘の南側～東側の斜面も急傾斜であり、同様である。住居が存在する可能性があるのは残丘頂部平坦面であるが、その場合は住居配置から考えて、別の住居小群になるであろう。

最後に

筆者の力量不足、筆者の人事異動による転出に起因する時間的な制約等もあり、とりあえず資料を提示するという形となり、充分な分析・検討が適わなかった。慙愧の念に堪えないが、ご寛恕いただきたい。

野外調査のみならず本報告書を纏めるにあたっても、多くの方々－とりわけ職場の同僚諸氏には物心両面で様々な援助・便宜・教示をいただいた。特にも筆者が当センターに赴任して以来懇切丁寧な指導をいただいた“師匠”星雅之氏、当センターに同期に赴任して以来さまざまなご教示をいただいた岩渕計氏・鳥居達人氏・菊池貴広氏、本遺跡の調査・整理で苦労を共にした菊池賢氏、その他、指導・助言・協力をいただいた多くの方々に、末筆ではあるが厚く感謝申し上げたい。　　(千葉)

参考・引用文献

※　以下では、編著者・発行年・書名(論文名)・巻次・発行元・所在地(県名)の順に示した。

〈発掘調査報告書〉

(財)岩手県埋蔵文化財センター、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(1979)『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第８集

(1982)『萪内遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第32集

(1983)『君成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第62集

(1985)『川口Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第84集

(1986)『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第99集

(1991)『上川岸Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第153集

(1993)『新山権現社遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第188集

(1995)『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書(第2～5次調査)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集

(1996)『寺久保遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第239集

(1997a)『上甲子遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第254集

(1997b)『板倉遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第258集

(1997c)『椛の木遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第263集

(1999)『下醍醐遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第325集

(2000)『長倉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第336集

(2002a)『清水遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第382集

(2002b)『上水沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第391集

(2002c)『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成13年度)』(浅石遺跡)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第397集

岩手県教育委員会

(1986)『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ(西田遺跡)』岩手県文化財調査報告第51集

(2001)「Ⅱ　試掘調査」(久田遺跡)『岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成12年度)』岩手県文化財調査報告書第112集

岩手県大迫町教育委員会

(1979)『立石遺跡　昭和52・53年度発掘調査報告書』大迫町埋蔵文化財報告第３集

岩手県大槌町教育委員会

(1974)『崎山弁天遺跡』

岩手県北上市教育委員会

(1978)『八天遺跡　図版編』北上市文化財調査報告書第24集

(1979)『八天遺跡　本文編』北上市文化財調査報告書第27集

岩手県滝沢村教育委員会

(1991)『湯舟沢Ⅱ遺跡』滝沢村埋蔵文化財調査報告書第16集

岩手県花泉町教育委員会

(1971)『貝鳥貝塚』

青森県青森市教育委員会

(2000)『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ』

青森県八戸市教育委員会

(1986)『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ(丹後谷地遺跡)』八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集

(1991)『八戸市内遺跡発掘調査報告書２－風張(1)遺跡Ⅰ－』八戸市埋蔵文化財調査報告書第40集

(1991)『風張(1)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集

秋田県教育委員会

(1999)『伊勢堂岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第293集

秋田県鹿角市教育委員会

(1988)『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(4)』鹿角市文化財調査資料33

(1989)『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(5)』鹿角市文化財調査資料34

(1999)『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(15)』鹿角市文化財調査資料63

宮城県教育委員会
(1986)『田柄貝塚Ⅰ(遺構・土器編)』宮城県文化財調査報告書第111集

〈論文等〉

相原康二 (1981)「岩手県南部における古代の土器群編年試案」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅠ』岩手県教育委員会
安孫子昭二(1981)「関東・中部地方」『縄文土器大成 3』講談社(東京)
(1989)「瘤付土器様式」『縄文土器大観 4』小学館(東京)
石井 寛(1998)「縄文集落からみた掘立柱建物跡」浅川滋男編『先史日本の住居とその周辺』所収、同成社(東京)
(1999a)「遺構研究 大形住居址と大形建物跡」『縄文時代』第10号、縄文時代文化研究会(東京)
(1999b)「遺構研究 掘立柱建物跡」同上
伊藤博幸(1998)「後半期の集落」『岩手考古学』第10号、岩手県考古学会(岩手)
(2001)「鎮守府領の成立とその展開」『第29回古代史サマーセミナー資料集』第29回古代史サマーセミナー実行委員会
金子昭彦(1994a)「東北地方北半部における縄文時代後期中葉の土器」『紀要ⅩⅣ』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
(1994b)「十腰内Ⅲ式とⅣ式の境界」『岩手考古学』第6号、岩手考古学会(岩手)
(1999)「東北地方 後期前半」『縄文時代』第10号、縄文時代文化研究会(東京)
(2001)「岩手県の動向」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会(東京)
熊谷常正(1989)「単孔土器考」『國學院大學考古学資料館紀要』第5輯、國學院大學考古学資料館(東京)
後藤勝彦(1981)「東北地方」『縄文土器大成 3』講談社(東京)
小林圭一(1999)「東北地方 後期(瘤付土器)」『縄文時代』第10号、縄文時代文化研究会(東京)
(2001)「東北南半の瘤付土器成立期の様相」『後期後半の再検討』縄文セミナーの会(群馬)
斎藤邦雄・酒井宗孝(1994)「岩手県の縄文期葬制遺構について」『北奥古代文化』第23号、北奥古代文化研究会(東京)
坂川 進(1994)「縄文時代後期の風張(1)遺跡の土壙墓群について」『北奥古代文化』第23号、北奥古代文化研究会(東京)
佐々木藤雄(2000)『私が掘った東京の考古遺跡』祥伝社(東京)
佐々木勝(1994)「岩手県における縄文時代の掘立柱建物について」『岩手県立博物館研究報告』第12号、岩手県立博物館(岩手)
鈴木克彦(1997)「注口土器の研究」『研究紀要』第2号、青森県埋蔵文化財センター(青森)
(2001a)『東北地方縄文時代後期土器編年の研究』雄山閣出版(東京)
(2001b)「岩手県の後期前葉土器の編年 ―萪内A・B式、川口2式―」『岩手考古学』第13号、岩手考古学会(岩手)
高柳圭一(1988)「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての編年動向」「古代」第85号、早稲田大学考古学会(東京)
中村良幸(1986)「岩手県内の配石遺構」『北奥古代文化』第17号、北奥古代文化研究会(東京)
成田滋彦(1989)「入江・十腰内土器様式」『縄文土器大観 4』小学館(東京)
(2000)「縄文時代住居跡の出入り口」『研究紀要』第5号、青森県埋蔵文化財調査センター(青森)
林 謙作(1979)「ムラとしての八天遺跡」『八天遺跡 本文編』北上市教育委員会(岩手)
(2001)「縄文巨大施設の意味」『縄文社会の考古学』同成社(東京)
本堂寿一ほか(1983)「丸子館遺跡調査略報」『北上市立博物館研究報告』第4号、北上市立博物館(岩手)
宮本長二郎(1988)「さまざまな家」鈴木公雄編『古代史復元 2』所収、講談社(東京)
(1998a)「平地式住居と竪穴住居の類型と変遷」浅川滋男編『先史日本の住居とその周辺』所収、同成社(東京)
(1998b)「掘立柱建物の出現と展開」同上

〈地形・地質に関わるもの〉

岩手県(1970)『北上山系開発地域 土地分類基本調査 人首』岩手県農地林務部
岩手県(1973)『北上山系開発地域 土地分類基本調査 陸中大原』岩手県農地林務部
―― (1983)『江刺市史 第一巻 通史編』江刺市史編纂委員会(岩手)
―― (1990)『江刺市史 第四巻 社寺旧跡篇』江刺市史編纂委員会(岩手)
―― (1990)『岩手県の地名』日本歴史地名体系第三巻、平凡社(東京)
―― (1988)『新版 岩手百科事典』、岩手放送(岩手)

〈概説・資料集成・その他〉

―― (1982)『岩手の土器』岩手県立博物館(岩手)
―― (1985)『岩手の遺跡』岩手県埋蔵文化財センター(岩手)
―― (2000)『岩手未来への遺産 縄文・弥生時代』岩手日報社(岩手)

附編　自然科学的分析

江刺市久田遺跡出土炭化材の樹種

髙橋俊彦（木工社「ゆい」）

1．試料

試料は10点で、縄文時代後期のものとされる２基の竪穴住居跡(B11住居･B12住居）と平安時代のものとされる竪穴住居跡(b3住居）から検出されたものである。作業の便宜のため試料にはNo.1～10の試料番号を付した（表１参照)。

遺跡は伊出川とその支流の荒谷川の合流点付近にあり、伊手川の左岸の氾濫原の残丘の北西に面した斜面（標高132～134m）に立地している。縄文時代後期と平安時代の複合遺跡で、縄文時代後期には竪穴住居とともに大型の円形建物や配石遺構などが認められ、規模の大きな集落があったとみられている。平安時代のB3住居検出試料(No.5～10)のうち､No.5は床面土坑内から､他の５点は床面直上から検出されたものである。その直上からは、十和田a降下火山灰とみられる火山灰層(厚さ約２cm)が確認されている。

2．方法

調査担当者により採取されていた試料の中から、担当者の立ち会いのもとで筆者が１片を採取し同定試料とした。材片を室内で自然解凍させたのち、試料の木口(横断面)･柾目(放射断面)･板目(接線断面）３面の徒手切片プレパラートを作製し生物顕微鏡で観察する方法注１）と、３断面を走査型電子顕微鏡(SEM，加速電圧10kV)で観察する方法を併用し同定した。併せて電子顕微鏡写真図版を作成した(図版1,2)。SEM観察にあたっては（株）ニッテツ･ファイン･プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝いたします。なお、作成したプレパラートと残った炭化材、ネガ･フィルムは木工社「ゆい」に保管されている。

3．結果

試料は以下の５分類群(ここでは属･節･種の異なった階級の分類単位を総称している)に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、学名と配列は「日本の野生植物　木本Ⅰ」(佐竹ほか1989)にしたがい、県内での自然分布については「岩手県植物誌」(岩手植物の会1970)を参照した。また、一般的性質については「木の事典　第2･4･16巻」(平井1979,1980,1982)も参考にした。

・ヤナギ属(salix sp.)ヤナギ科　No.9,10

散孔材で、道管は年輪全体にほぼ一様に分布するが年輪界付近でやや管径を減少させる。管孔は単独および２－３個が複合、横断面では楕円形～やや角張った楕円形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状になる。放射組織は異性、単列、１－１５細胞高。年輪界はやや不明瞭。

ヤナギ属は国内に約35種が知られ、種間雑種も多く分類の困難な群である。県内にはタチヤナギ(Salix subfragilis)・キツネヤナギ(S.vupina)など10種ほどが自生している。時に植栽される落葉低木または高木である。材は一般に軽軟で、割裂性が大きく耐朽性は低い。大径木が少ないため小細工物にする程度で、とくに重要な用途は知られていない。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(Quercus subgen. Quercus sect. Cerris sp.)ブナ科　No.3

環孔材で孔圏部は1－3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では円形、小道管は横断面ではやや角張った円形、ともに単独で配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1－20細胞高のものと複合組織がある。柔組織は短接線状、周囲状。年輪界は明瞭。

クヌギ節はコナラ亜属(落葉ナラ類)の中で果実(ドングリ)が開花の翌年に熟すグループで、クヌギ(Quercus acutissima)とアベマキ(Q.variabilis)の2種がある。アベマキは県内には自生せず、クヌギが南部に見られる。クヌギは樹高15mになる落葉高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国内材中第一の重要材である。このほか、器具・杭材、楯木などの用途がある。

・クリ(Castanea crenata)　ブナ科　No.1,2,4

環孔材で孔圏部は1～多列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では、楕円形、小道管は単独および複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単(～2)列、1－15細胞高。柔組織は周囲状、単接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。県内各地に普通にみられる。材は、やや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、楯木などに用いられる。

・ニレ属(Ulmus sp.)　ニレ科　No.6,7,8

環孔材で孔圏部は1－3列、孔圏外で急激に管径を減じ、塊状に複合する。大道管は横断面では楕円形～円形、単独。小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1－8細胞幅、1－40(100)細胞高。年輪界は明瞭。

ニレ属は国内に3種あるが、県内にはハルニレ(Ulmus davidiana var.japonica)とオヒョウ(U.laciniata)が自生する。ハルニレは肥沃な沖積地や山麓に、オヒョウは山地に生育する落葉高木である。ハルニレの材はやや重硬～中程度で、割列性は小さく、加工はやや困難、耐朽性は低い。器具・家具・建築材などに用いられる。

・トネリコ属(Fraxinus sp.)モクセイ科　No.5

管孔材で孔圏部は2－3列、孔圏外で急に管径を減少させたのち漸減する。道管は横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部の管壁は厚くなる。道管は単穿孔をもち、壁孔は小型で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状～篩状となる。放射組織は同性(～異性)、1－5細胞幅、1－20細胞高。柔組織は周囲状、ターミナル状。年輪界は明瞭。

トネリコ属は国内に9種あるが、県内にはヤチダモ(Fraxinus mandshurica var. jjaponica)・トネリコ(F. japonica)・ヤマトアオダモ(F. longicuspis)など6種ほどが自生する。いずれも落葉高木で、材質は種によって異なるが、一般には中庸～やや重硬で、靭性があり、加工は容易で、建築・器具・家具・旋作・薪炭材などに用いられる。

以上の同定結果を検出遺構などとともに一覧表で示す(表1)。

表1　久田遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	検出遺構など	種　名
1	B11住居跡　A	クリ
2	B11住居跡　B	クリ
3	B11住居跡　C	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
4	B12住居跡　埋土②下層	クリ
5	B3住居跡　床面土坑1	トネリコ属
6	B3住居跡　18	ニレ属
7	B3住居跡　22	ニレ属
8	B3住居跡　23	ニレ属
9	B3住居跡　29	ヤナギ属
10	B3住居跡　30	ヤナギ属

4．考察

縄文時代後期のものとされる2住居跡から検出された4試料はクリ(3点)とクヌギ節に同定された。クリは各地・各時代の遺跡からの出土報告が多いが、クヌギ節は北上市藤沢遺跡の奈良時代末から平安時代(8～10世紀)とされる焼失住居址検出材などに認められる(高橋　2001)ものの県内からの報告は少ない注2)。近隣地域の遺跡からは試料と近い時期の報告はない注3)が、滝沢村湯船沢遺跡の縄文時代後期とされる2住居址からクリとトネリコ属(各2点)が認められている(松田　1986)。また、沿岸部になるが山田町沢田Ⅰ遺跡の縄文時代とされる2住居跡検出材4点がいずれもクリに同定されている。(高橋　2000)。

平安時代のものとされるB3住居跡検出材からはヤナギ属(2点)・ニレ属(3点)・トネリコ属(1点)が確認できた。上記のように、北上市藤沢遺跡の奈良時代末から平安時代(8～10世紀)とされる住居跡から検出された炭化材は、クヌギ節・コナラ節が多数を占めているもののトネリコ属も認められている。また、ヤナギ属とニレ属はないが、やはり軟質なモクレン属やハンノキ属類似種も確認されている。(高橋　2001)。

〈注〉

1)　実体顕微鏡下で3断面を作製し、ここにシアノアクリレート接着剤(商品名アロンアルファ木工用)を塗布、剃刀の刃で切断し切片とする。切片はグリセリンで封入、パラフィンでシールしプレパラートとする。これは従来のセロイジン包理法とその簡便法とされるアロンアルファを用いた方法(林　1988)を筆者が改良したものである。切削には熟練を要するが、①SEM観察よりはるかに簡便に同定ができる、②観察したプレパラートが保存されるなどの長所がある。一方、透過光で観察するためには通常の材より薄い切片を作製しなければならず(必然的に小さな切片での観察像を集成することになる)、また写真撮影にふさわしいプレパラートを作製することははとんど望めない、などの欠点がある。

2)　一戸町一戸城出土の奈良・平安時代とされる炭化材の中のクヌギ1点の報告がある(嶋倉1982)が、クヌギ現生種の自生北限は宮古市とされている(岩手植物の会1970)。十分な観察を行えばクヌギを他種と誤認することはないであろうが、1㎝以下の炭片を反射顕微鏡で観察したとされるこの結果については、再検

討の余地があると考えている。

3) 江釣子村(現北上市)鳩岡崎遺跡試料にクリなどの報告がある(早坂 1982)が、肉眼観察の結果が記載されているだけであるためここでは論究しない(高橋 2001,MS)。

引用文献

林 昭三 1988 セロイジン包理法,「日本の遺跡出土木製品総覧」(島地・伊東 編), 21-23, 雄山閣.

早坂松次郎 1982 炭化材の樹種同定、「岩手県文化財調査報告書第70集 東北自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ＸＶ－２(江釣子村鳩岡崎遺跡 遺物・要約・分析鑑定結果編)」, 340, 岩手県教育委員会・日本道路公団.

平井信二 1979-1982 「木の事典 第１巻～第７巻」, かなえ書房.

岩手植物の会 1970 「岩手県植物誌」.

松田隆嗣 1986 湯船沢遺跡より出土した炭化材の樹種について,「滝沢村文化財調査報告書第２集 湯船沢遺跡(第２分冊)」, 867-872, 滝沢村教育委員会・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・トーメン住宅開発公社.

佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 大本Ⅰ・Ⅱ」, 平凡社, 321-305pp.

嶋倉巳三郎 1982 炭化木の樹種について,「一戸町文化財報告書第２集 一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ ―一戸城―」, 303-308, 一戸町教育委員会・建設省岩手工事事務所.

高橋俊彦 2000 沢田Ⅰ遺跡出土炭化材の樹種,「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集 沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書 三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査 第二分冊(四次調査), 327-328, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター.

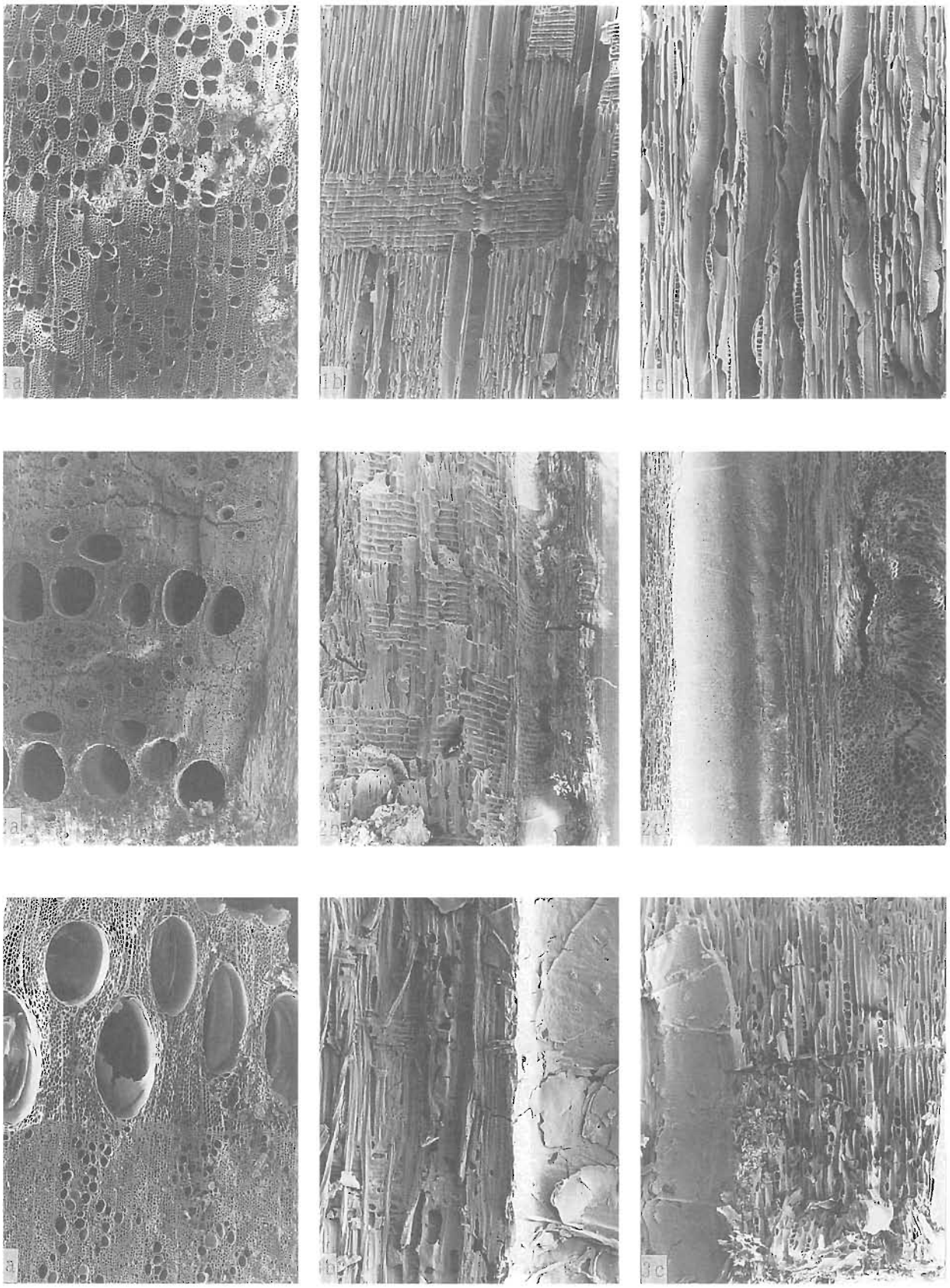
高橋俊彦 2001 藤沢遺跡出土炭化材の樹種,「北上市埋蔵文化財年報(1999年度)」, 21-31, 北上市立埋蔵文化財センター.

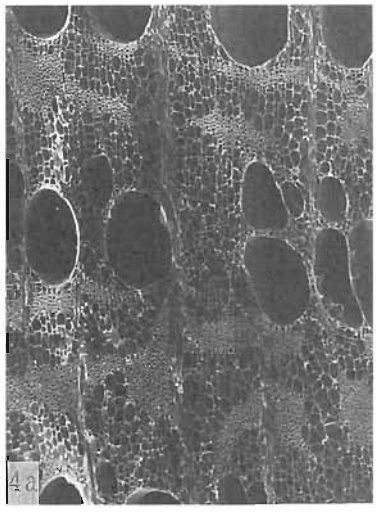
高橋俊彦 MS 胆沢町大清水上遺跡出土炭化材の樹種,「大清水上遺跡炭化材樹種同定報告書」, 木工舎「ゆい」, 3pp, 1pl.

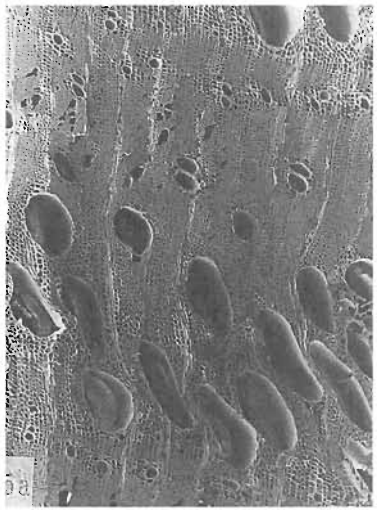
図版１ １．ヤナギ属 No.10
２．コナラ属コナラ亜属クヌギ節 No.3
３．クリ No.2

図版２ ４．ニレ属 No.6
５．トネリコ属 No.5

a:木口 x40 b:柾目x100 c:板目 x100
樹木の肥大成長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右.







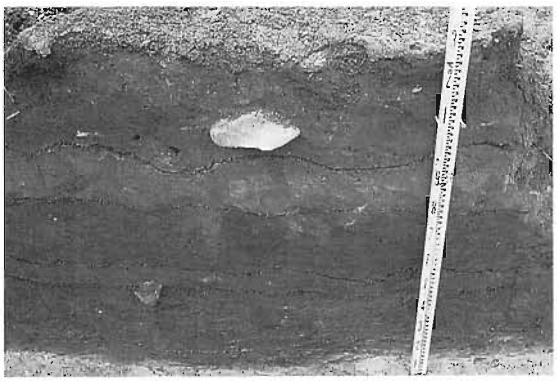
写　真　図　版

（北から）

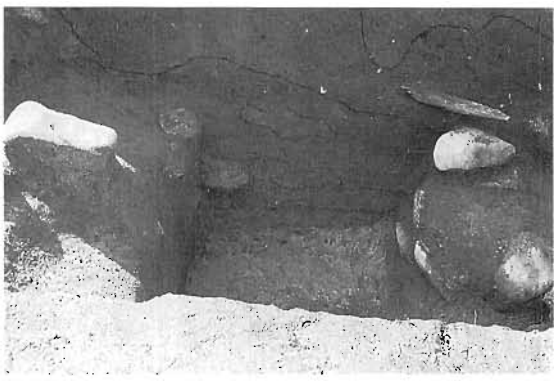
（北西から）

写真図版１　航空写真

遺跡遠景（北西から）

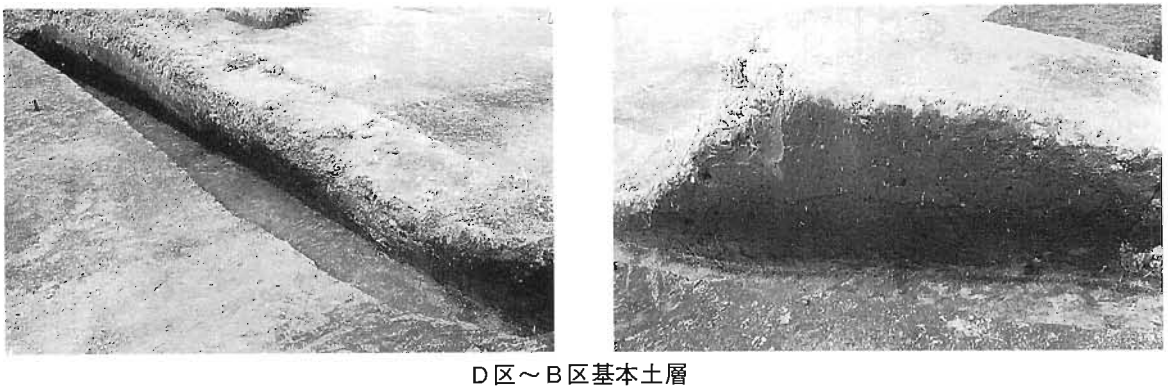


A区基本土層・1



A区基本土層・2

B区基本土層



D区～B区基本土層

写真図版2　遺跡遠景・基本土層

調査区近景　刈り払い前

調査区近景　刈り払い後

表土層　盛り土層除去状況

黒色土層　掘り下げ状況

調査風景・夏

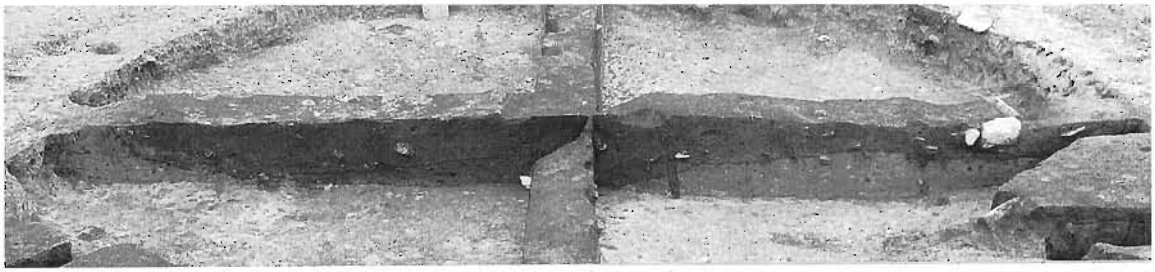
調査風景・冬

現地説明会

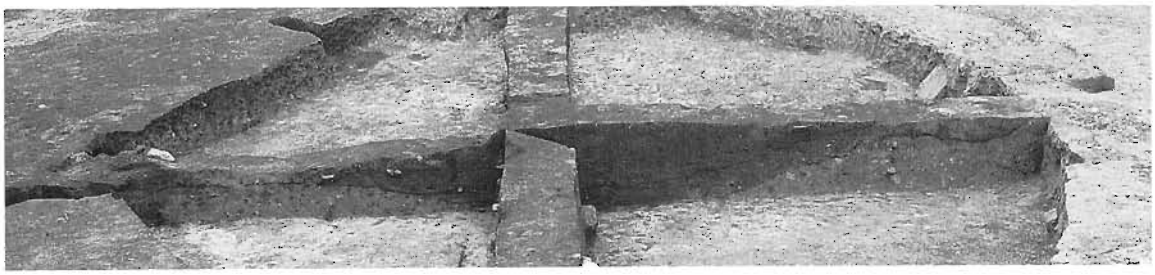
現地説明会

写真図版３　調査区近景等

完掘全景（北から）

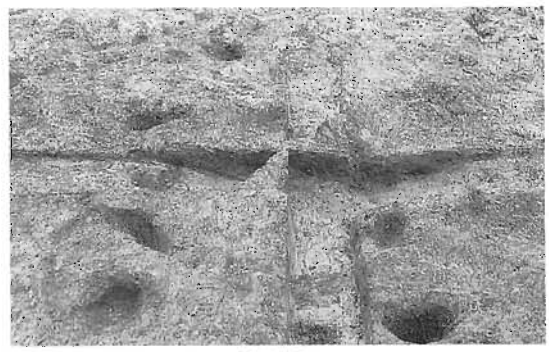


埋土断面（北から）



埋土断面（西から）

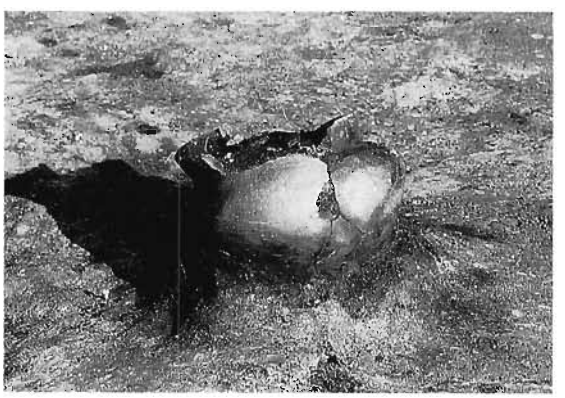
炉平面



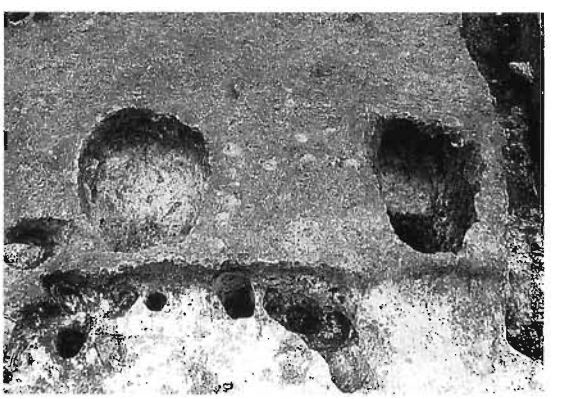
炉断面

写真図版４　Ａ１住居跡（１）

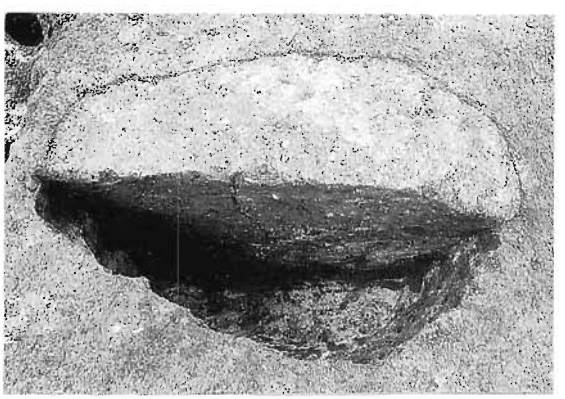
埋土第１層　遺物出土状況（北から）



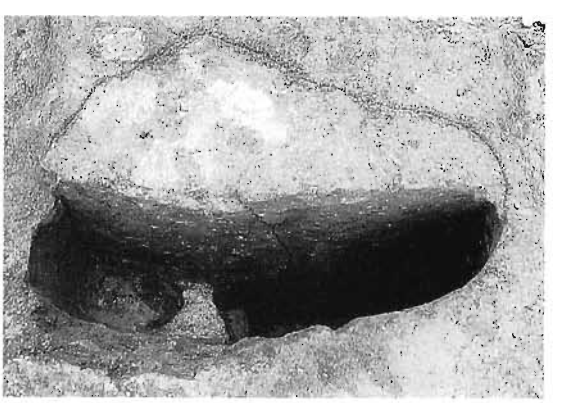
遺物出土状況



出入口柱穴完掘（南から）

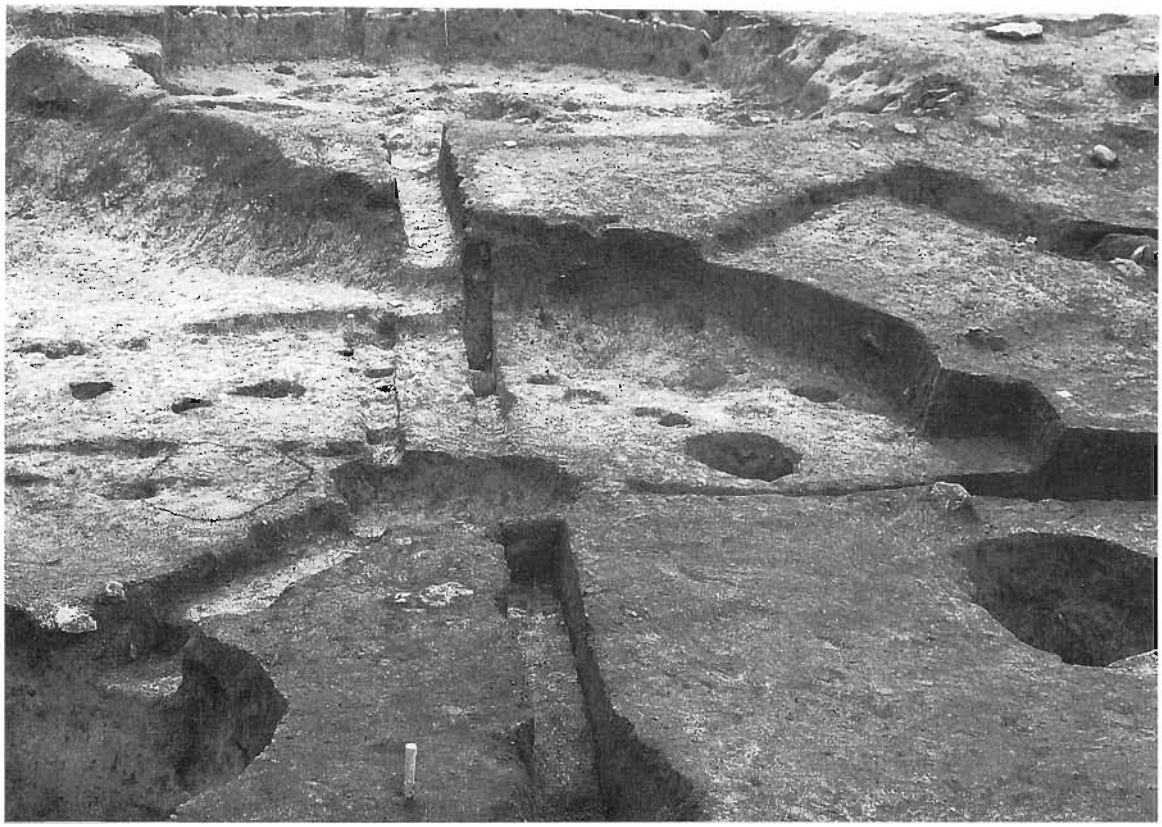


出入口柱穴断面（東側）

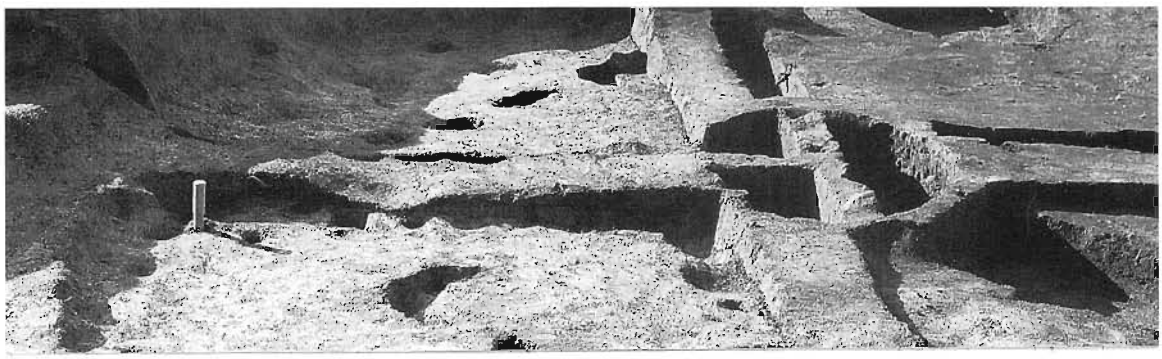


出入口柱穴断面（西側）

写真図版５　Ａ１住居跡（２）

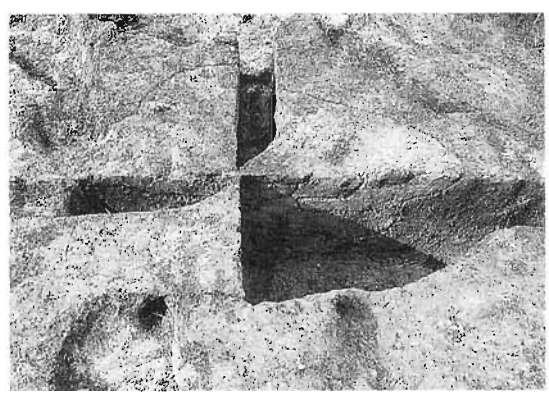


完掘全景（北から）



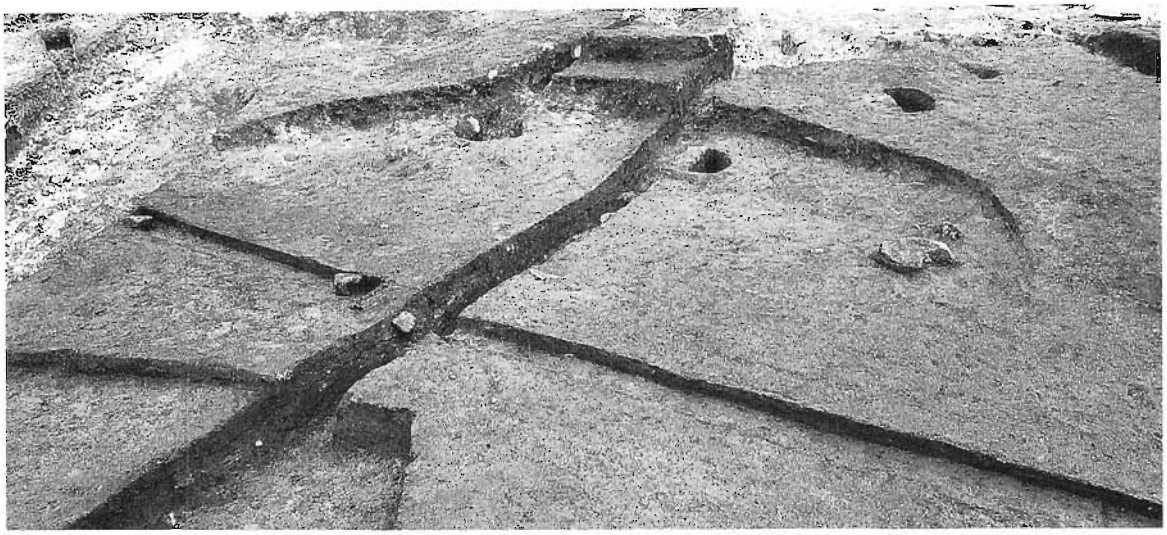
埋土断面（東から）

炉平面

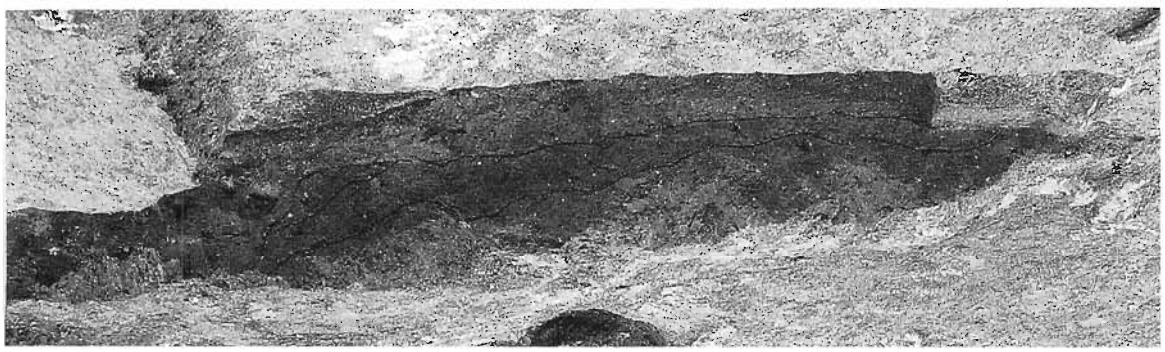


炉断面

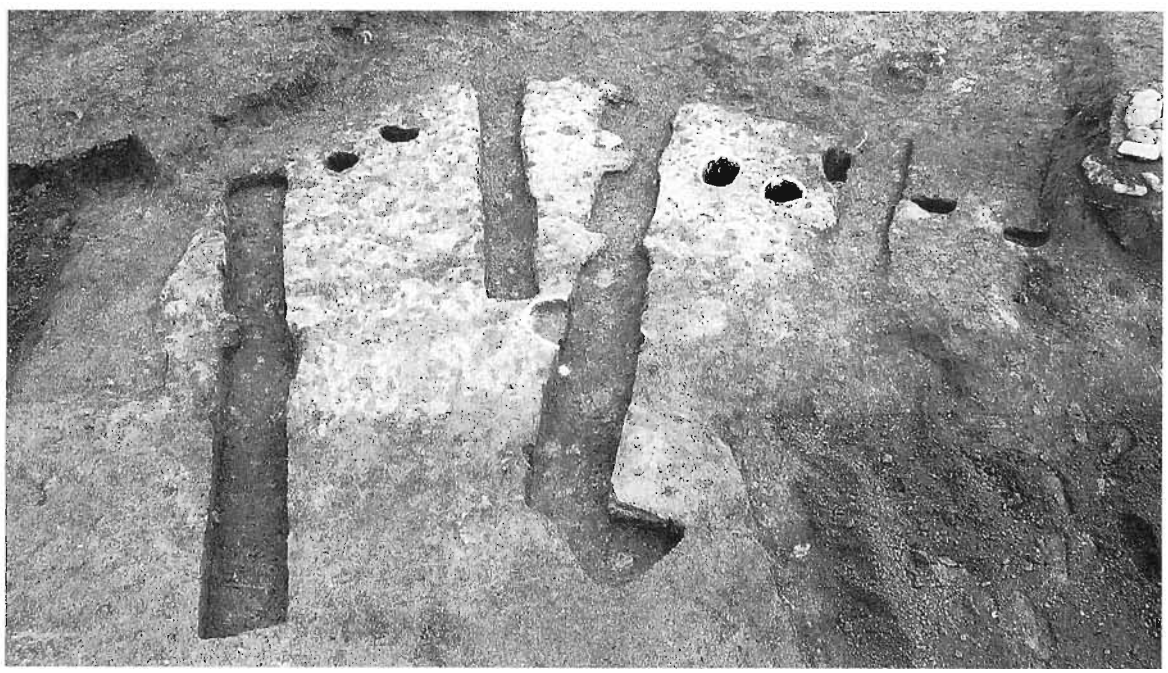
写真図版６　Ａ２住居跡



Ａ３住居　完掘全景（北西から）



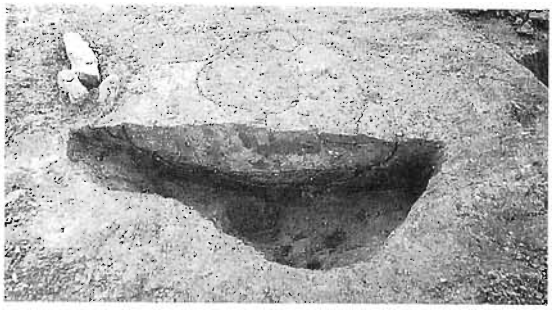
Ａ３住居　埋土断面（西から）



Ａ４住居　完掘全景（北から）

写真図版７　Ａ３住居跡、Ａ４住居跡（１）

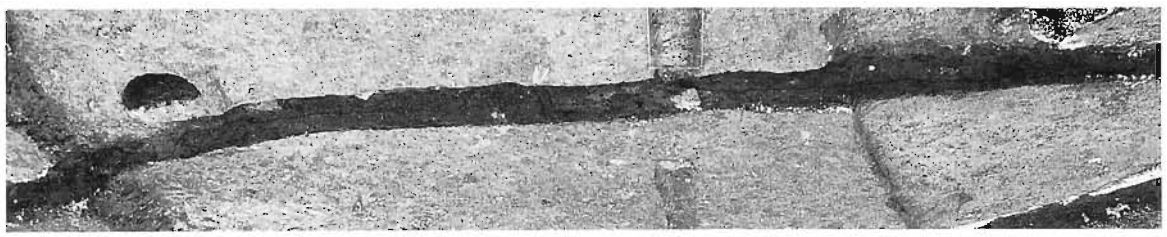
炉平面



炉断面

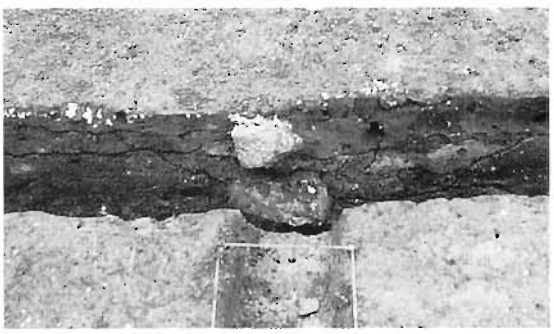
A 4 住居

A 5 住居　完掘全景（北西から）



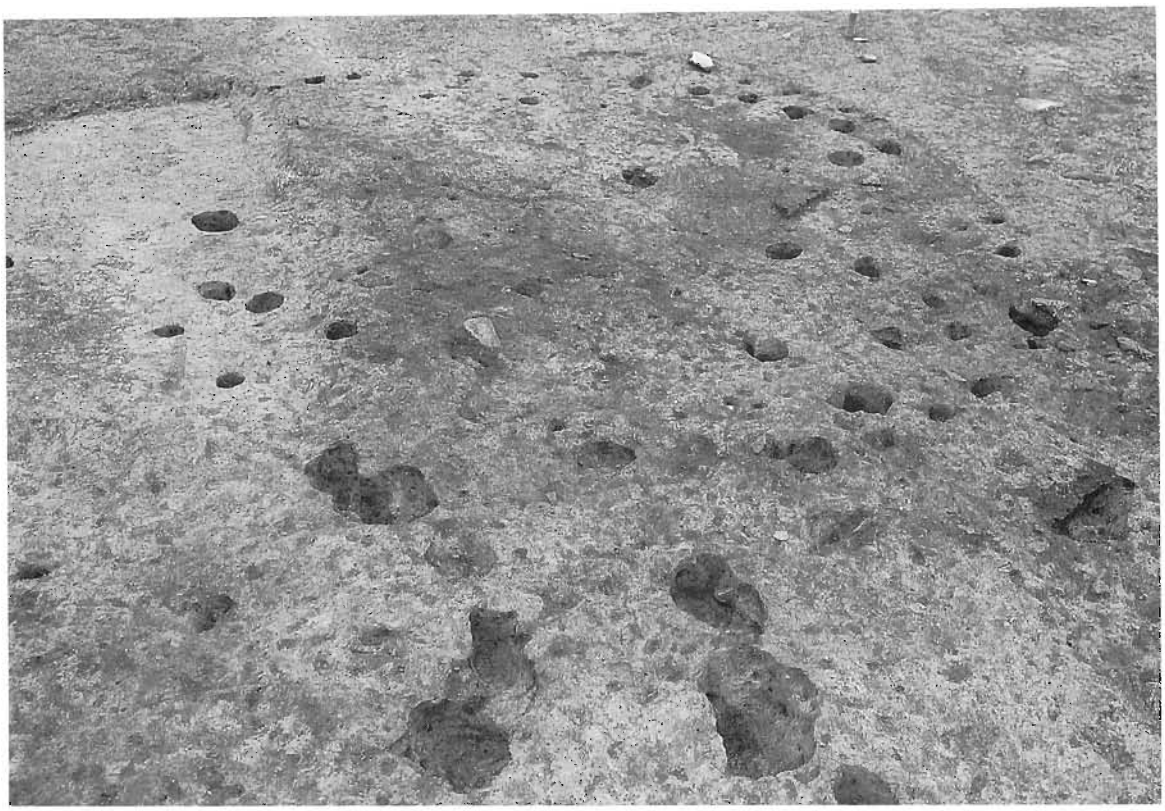
埋土断面（西から）

炉平面

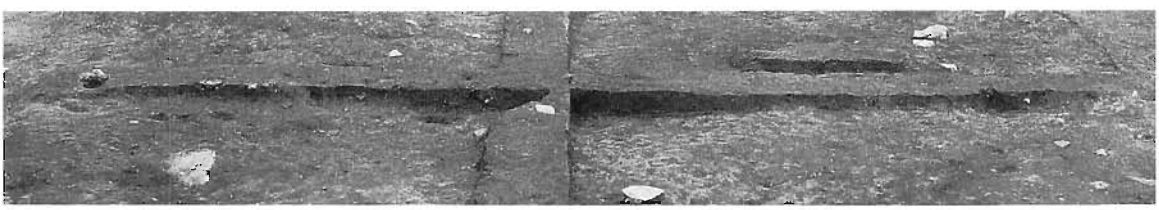


炉断面

写真図版 8　A 4 住居跡（2）、A 5 住居跡

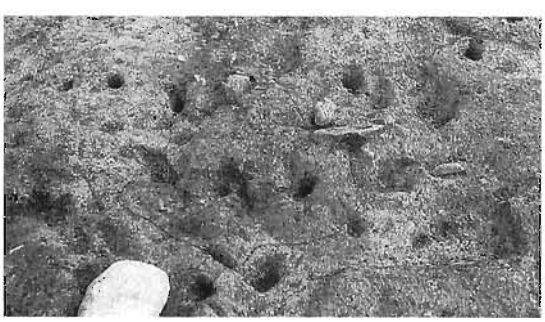


完掘全景（北西から）



埋土断面（北から）

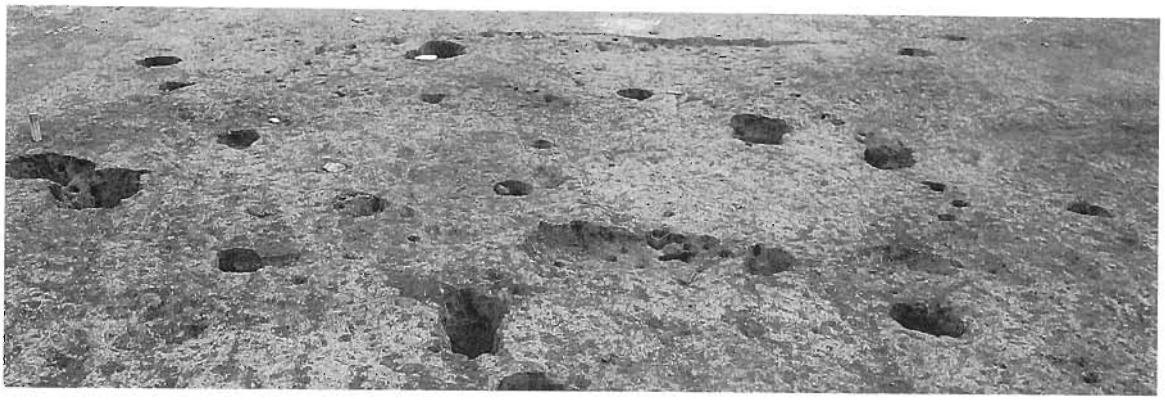
埋土断面（西から）



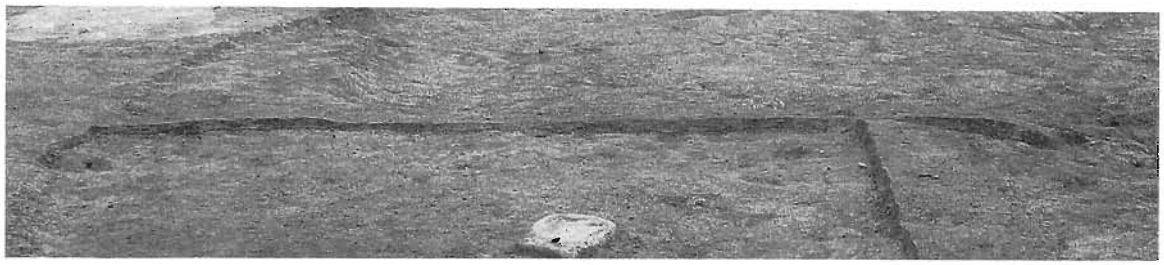
炉平面

炉断面

写真図版９　Ｂ１住居跡



完掘全景（北西から）

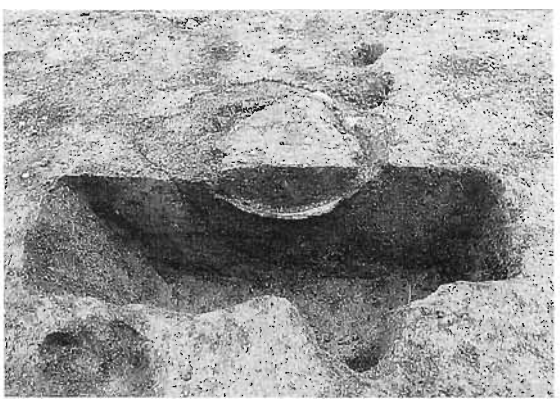


埋土断面（北東から）

炉平面

炉断面

埋設土器平面

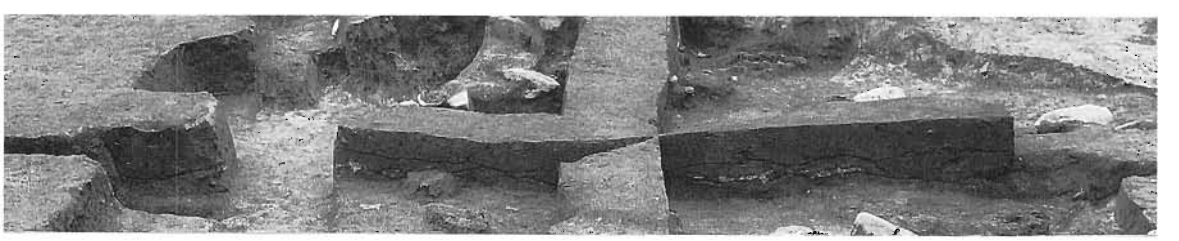


埋設土器断面

写真図版10　Ｂ２住居跡

完掘全景（北から）

埋土断面（西から）



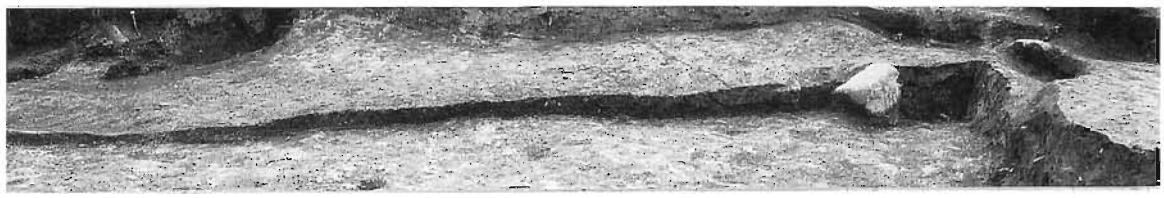
埋土断面（北から）

カマド検出

カマド断面

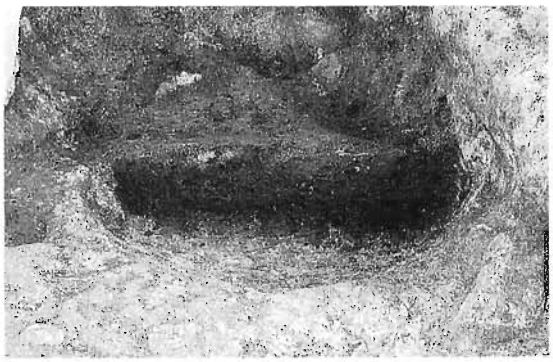
写真図版11　Ｂ３住居跡（１）

炭化材検出状況（北から）



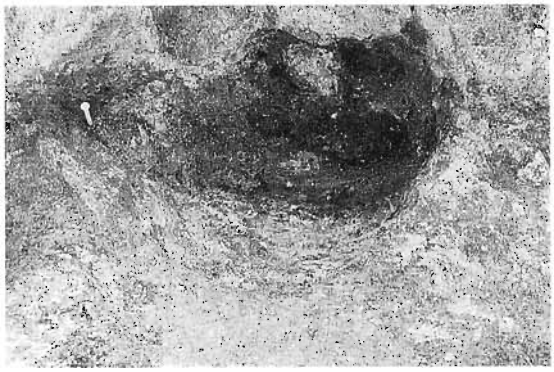
炭化物含有土・焼土断面（北から）

床面土坑１完掘



床面土坑１断面

床面土坑２完掘



床面土坑２断面

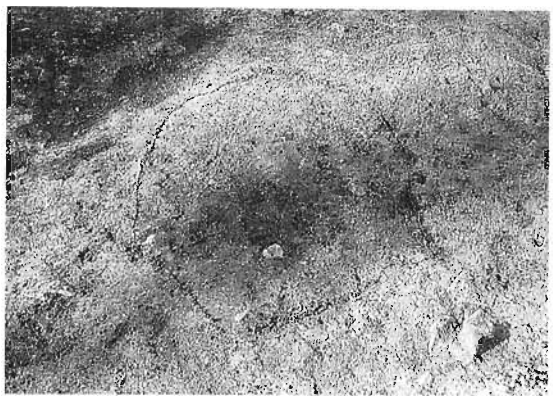
写真図版12　Ｂ３住居跡（２）

Ｂ４住居　完掘全景（北西から）

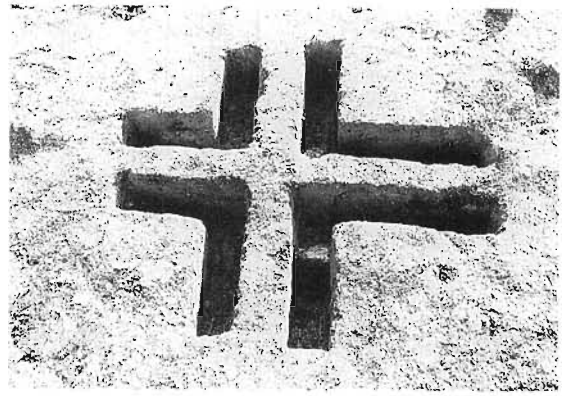
Ｂ４・Ｂ５住居　埋土断面（北から）

Ｂ４・Ｂ５住居　埋土断面（東から）

写真図版13　Ｂ４住居跡（１）



Ｂ４住居　炉平面



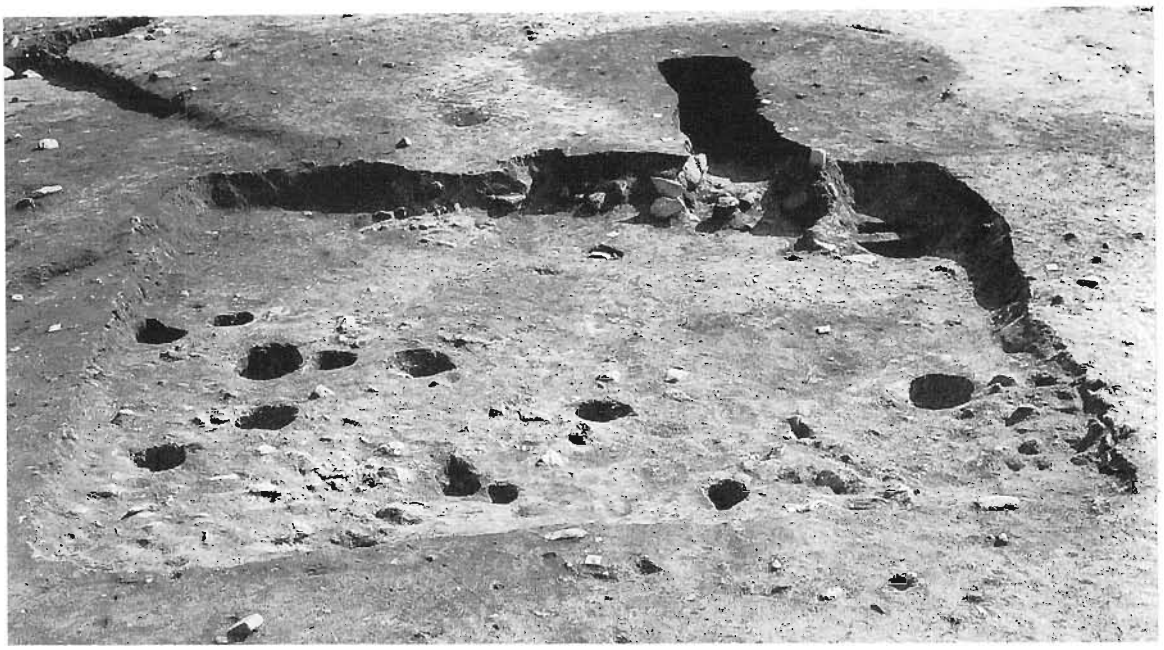
Ｂ４住居　炉断面

Ｂ４住居　埋土中白色粘土塊検出

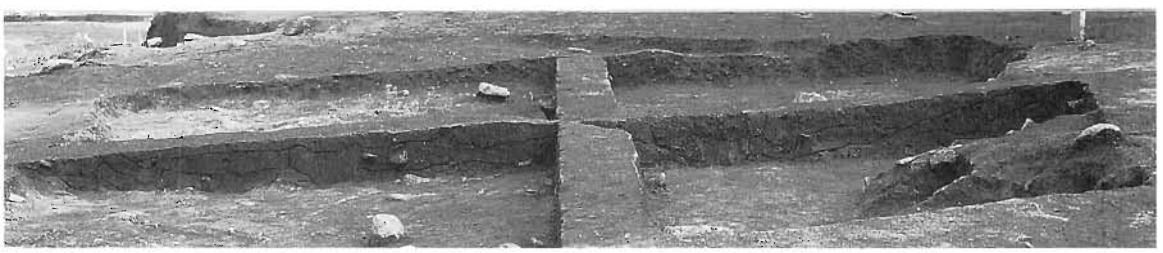
Ｂ５住居　炉平面

Ｂ５住居　完掘全景（西から）

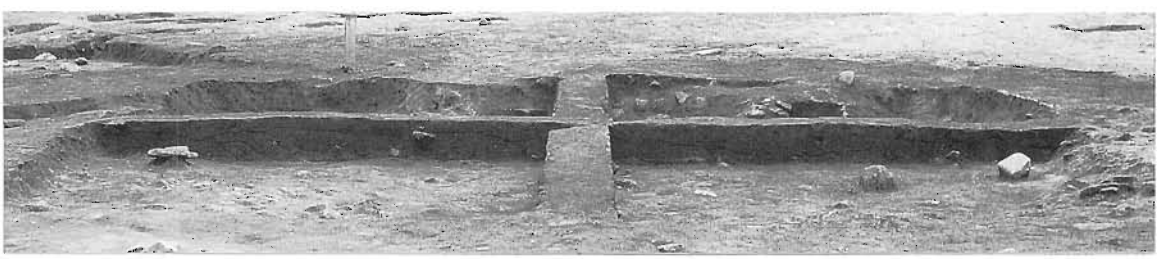
写真図版14　Ｂ４住居跡（２）、Ｂ５住居跡



完掘全景（北西から）



埋土断面（南西から）



埋土断面（北西から）

カマド全景

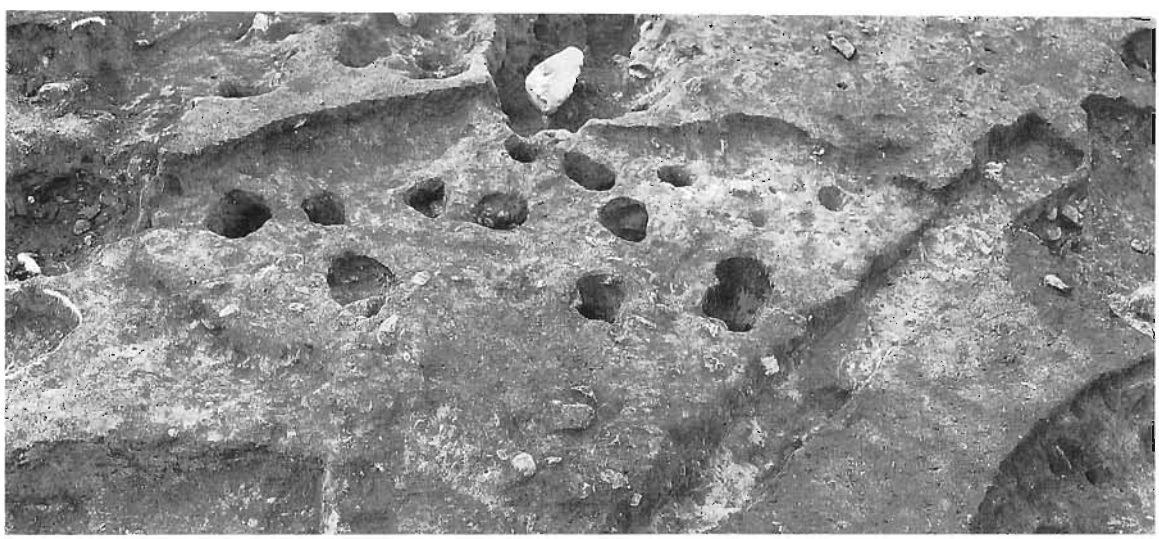
カマド断面・1

写真図版15　B 6住居跡（1）

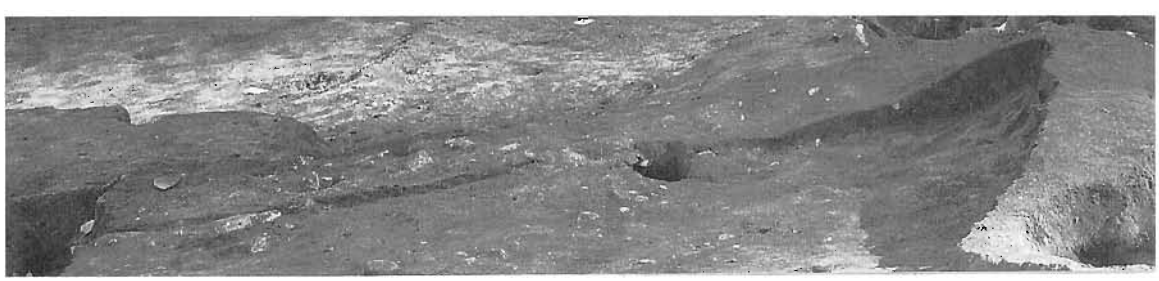
カマド断面・２

煙道断面

Ｂ６住居



Ｂ７住居　　完掘全景（北から）

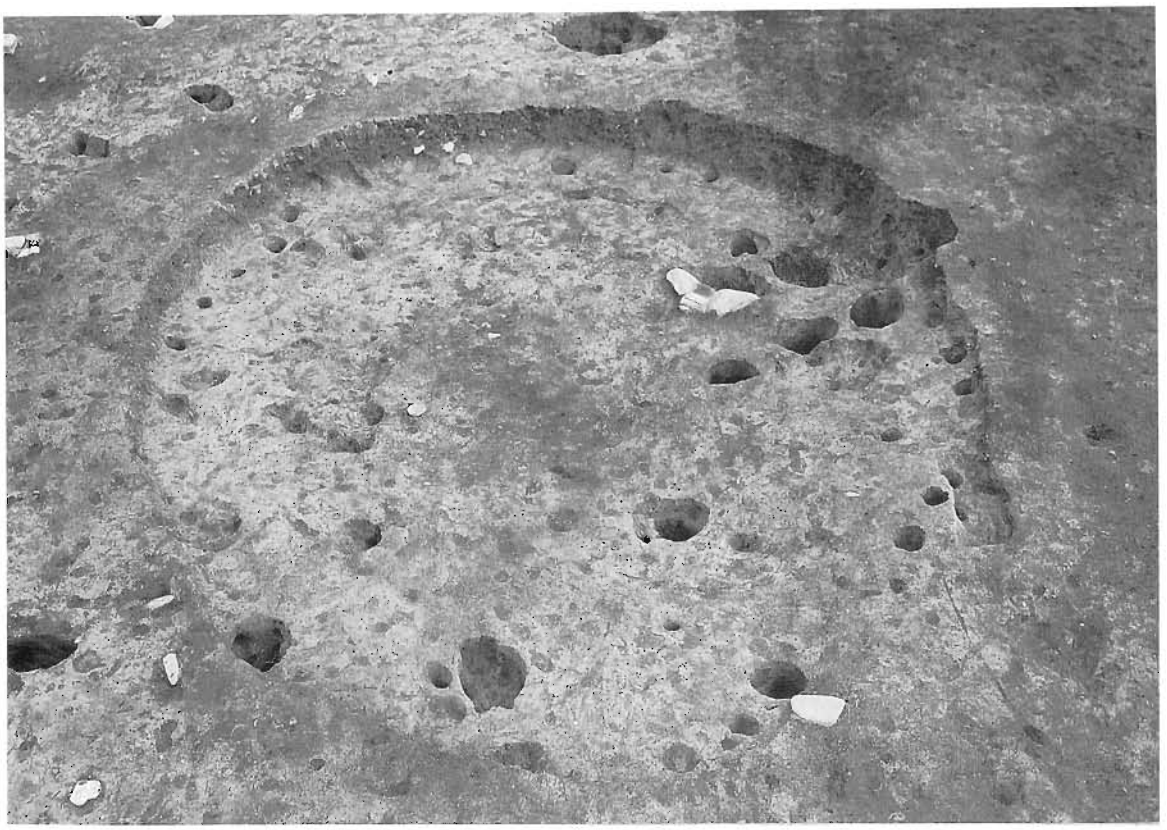


埋土断面（西から）

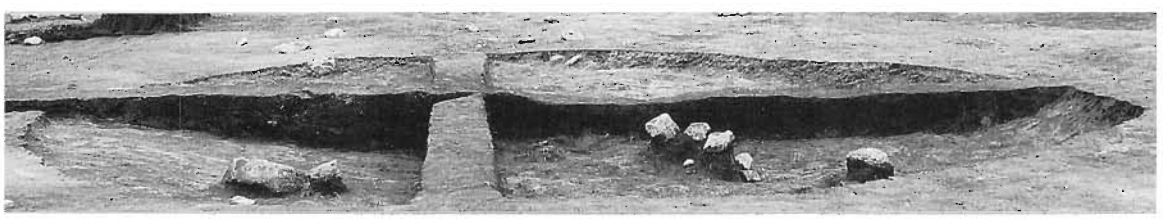
炉断面

調査風景

写真図版16　Ｂ６住居跡（２）、Ｂ７住居跡

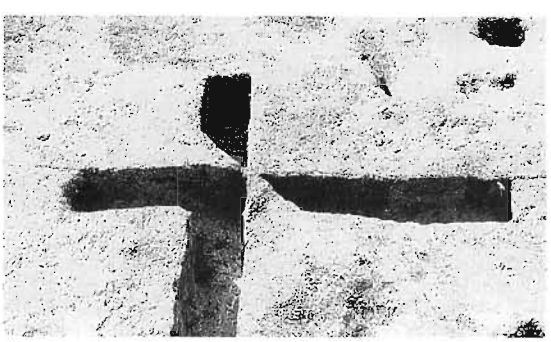


完掘全景（北西から）



埋土断面（南から）

埋土断面（東から）

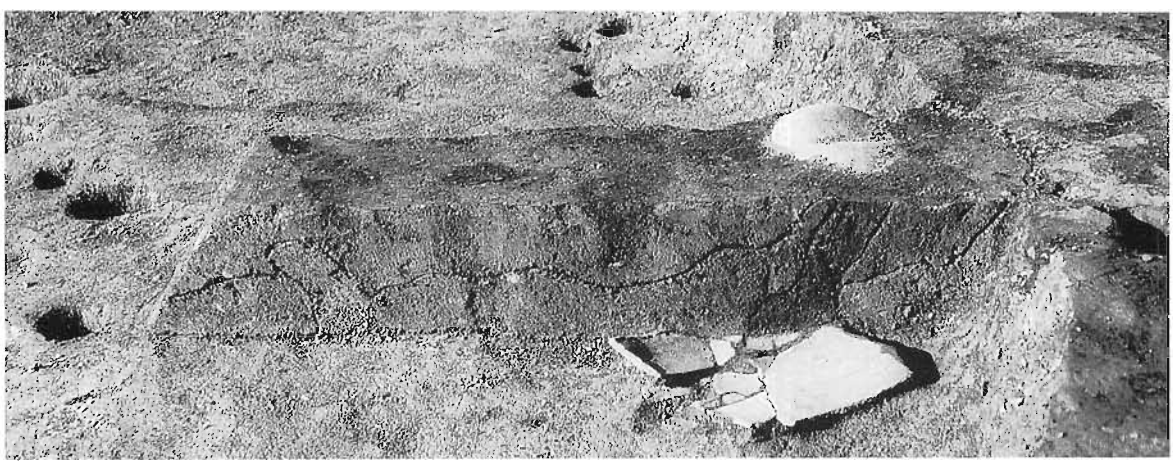


炉断面

床面土器出土状況

写真図版17　Ｂ８住居跡

完掘全景（南西から）

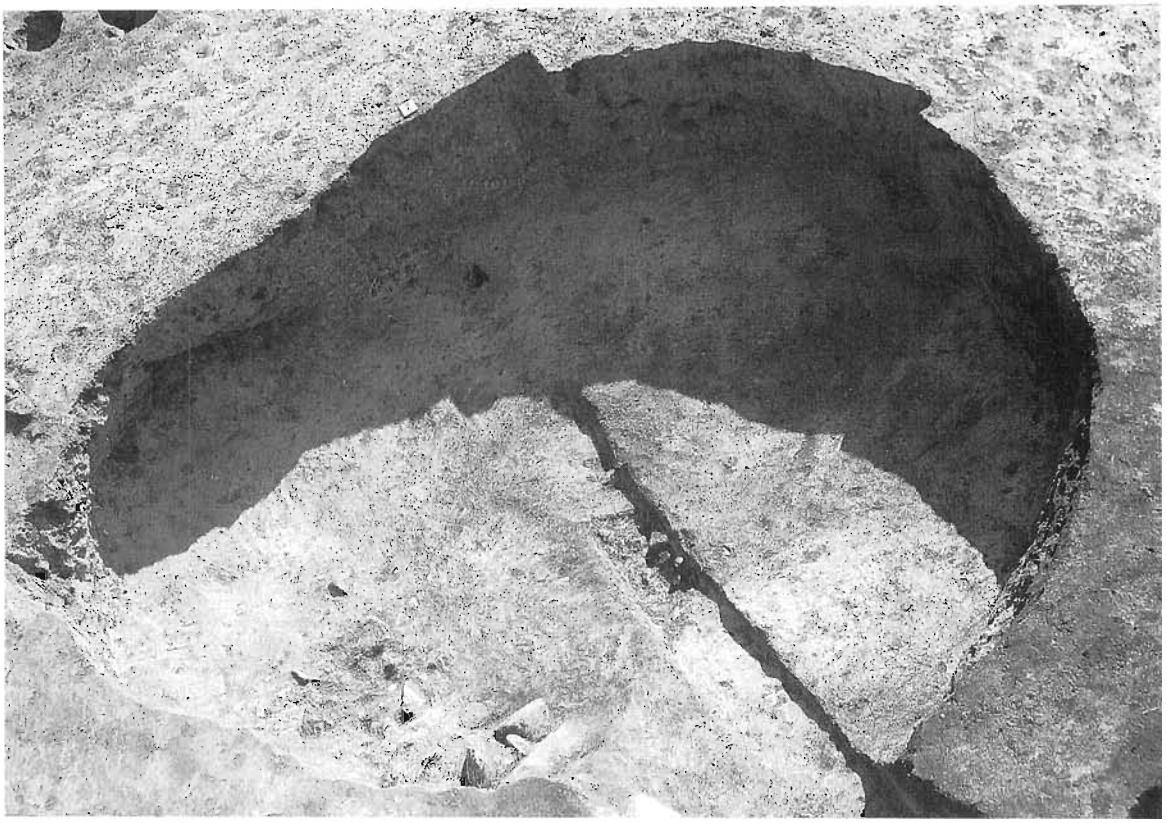


埋土断面（南東から）

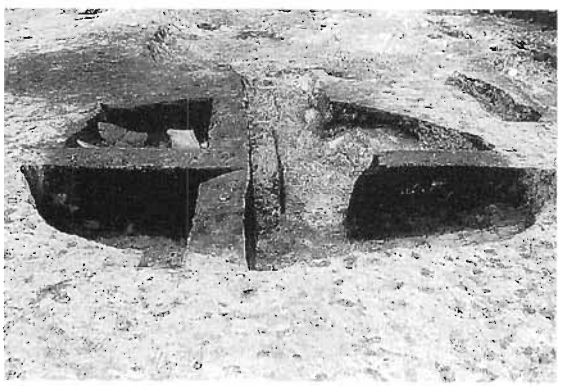
床面土器出土状況

調査風景

写真図版18　Ｂ９住居跡



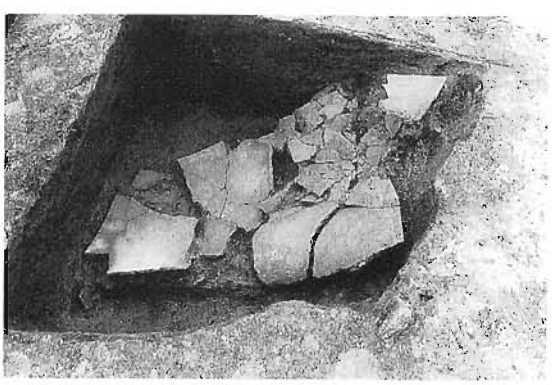
完掘全景（北から）



埋土断面（南東から）

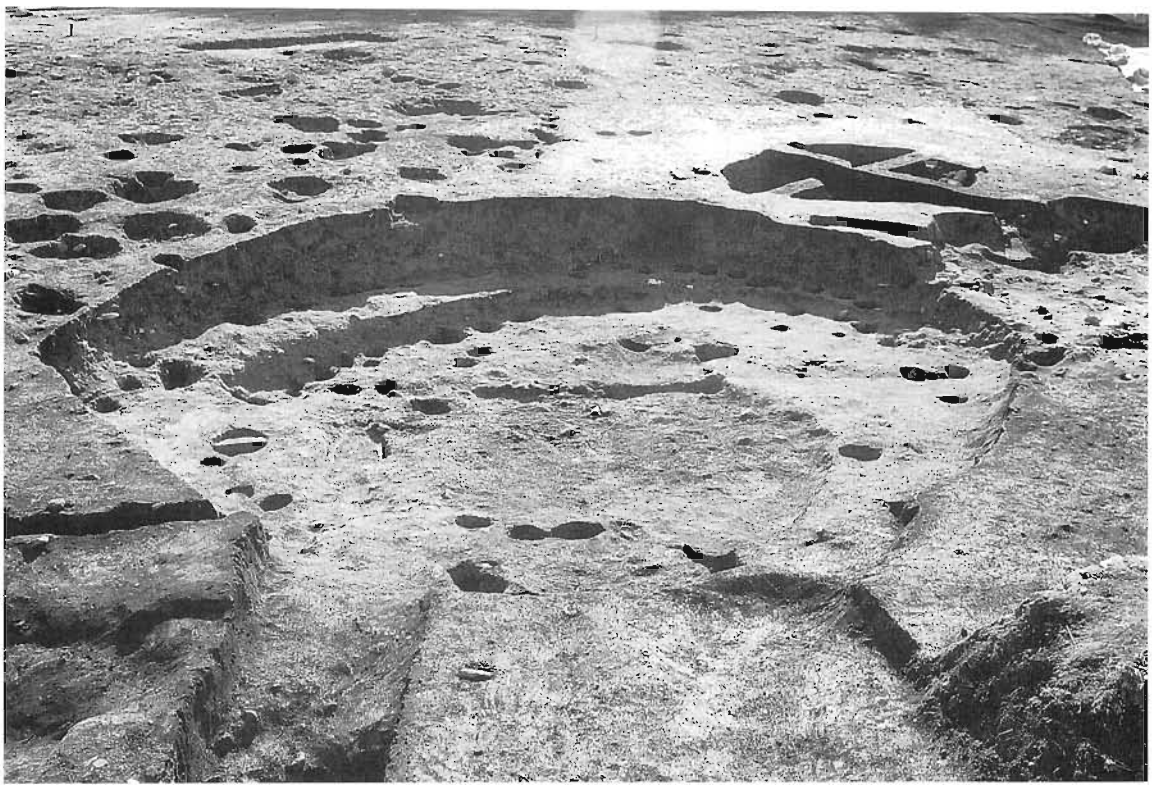
埋土断面（北東から）

検出状況（北から）

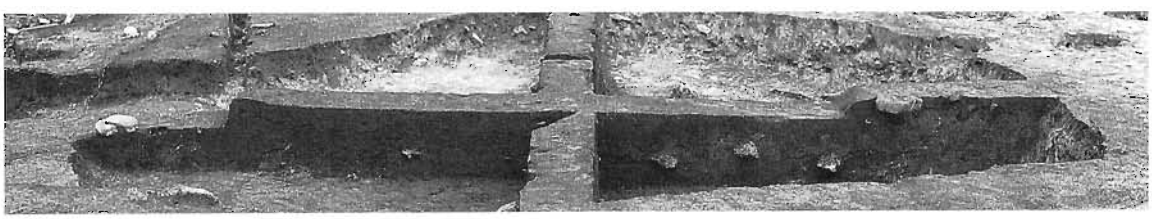


遺物出土状況

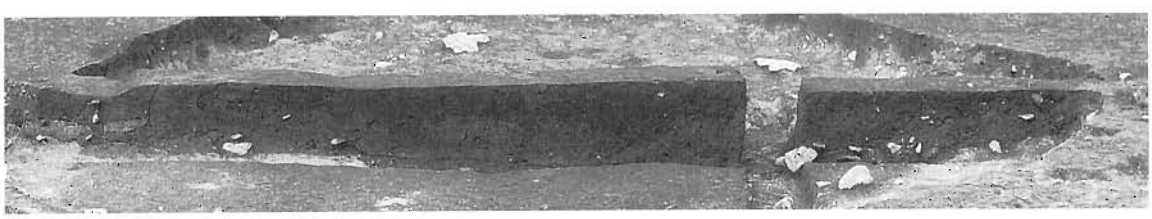
写真図版19　B10住居状遺構



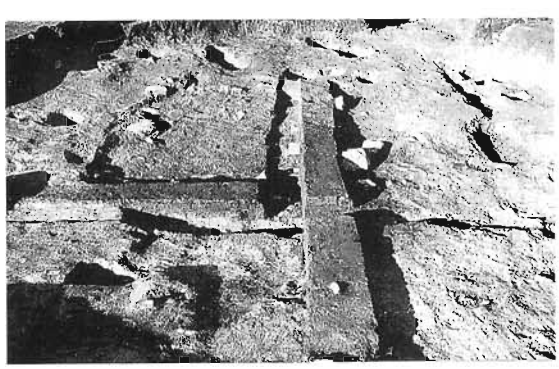
完掘全景（北から）



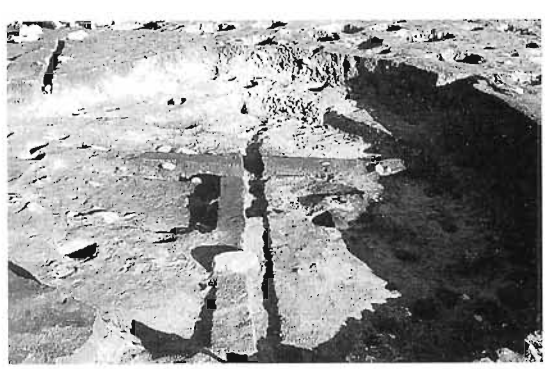
埋土断面（西から）



埋土断面（南から）



中央部凹地埋土断面（南から）

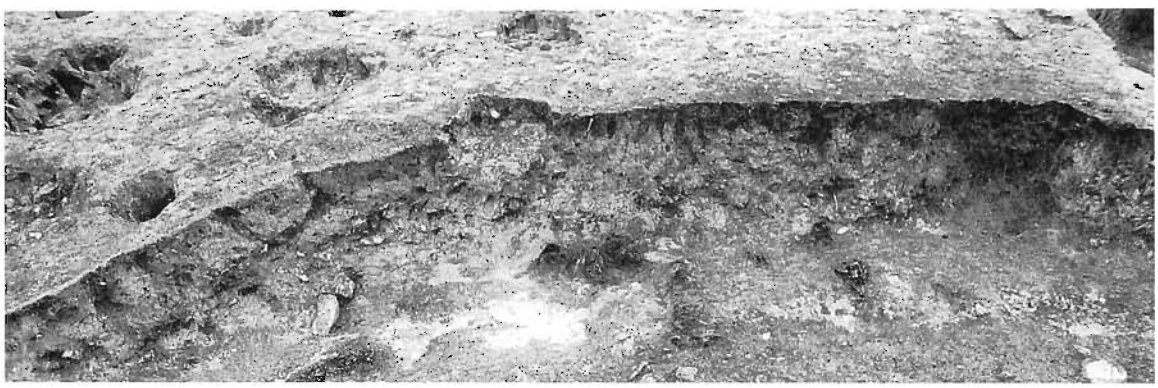


中央部凹地埋土断面（西から）

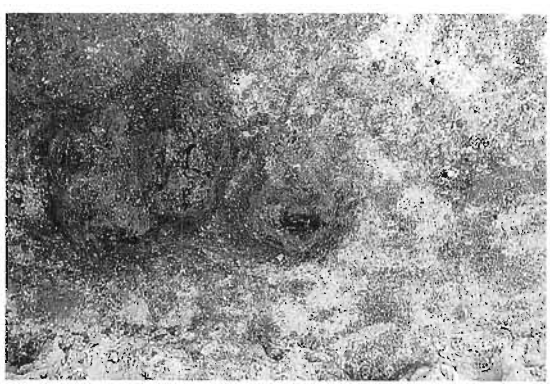
写真図版20　B11住居跡（1）

炉平面

炉断面

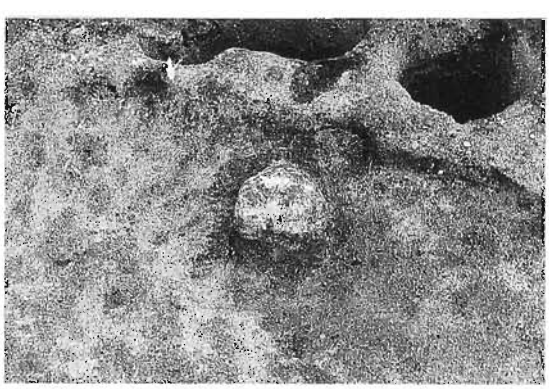


南壁際炭化材出土状況（北から）

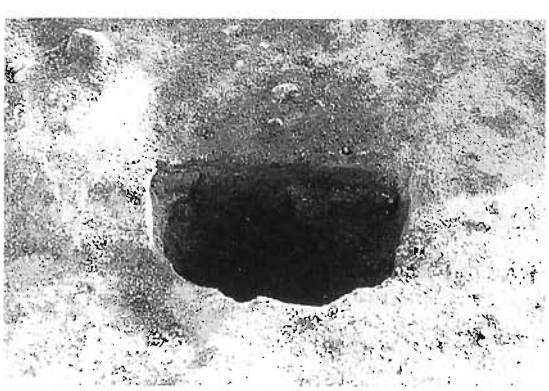


柱穴材検出

床面　遺物出土状況

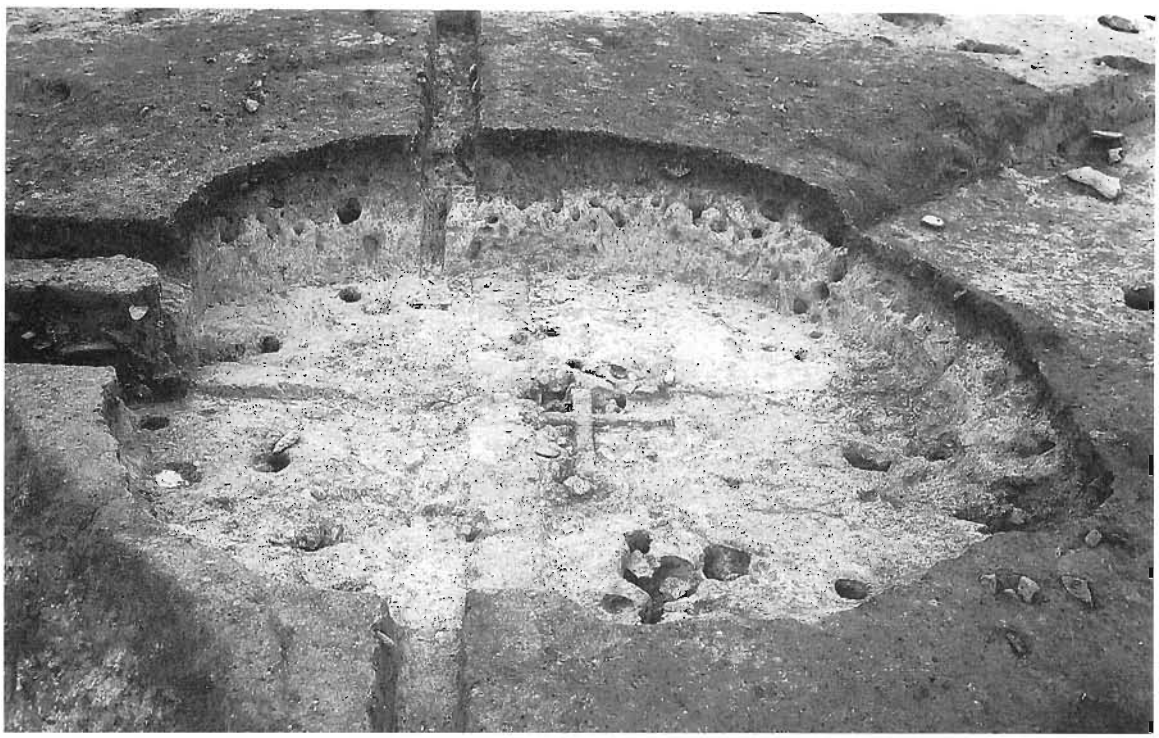


床面　粘土出土状況



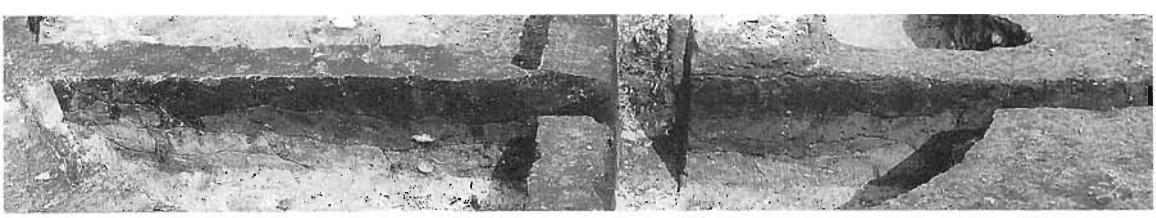
柱穴①断面

写真図版21　B11住居跡（2）



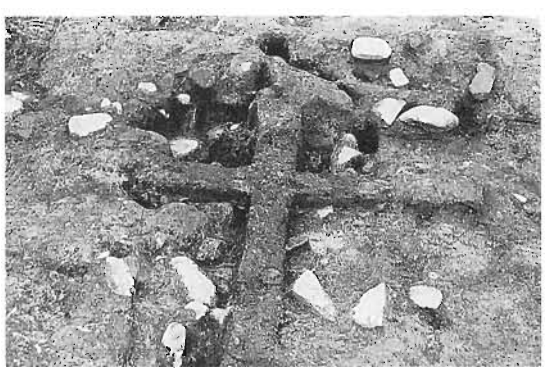
完掘全景（北から）

埋土断面（西から）



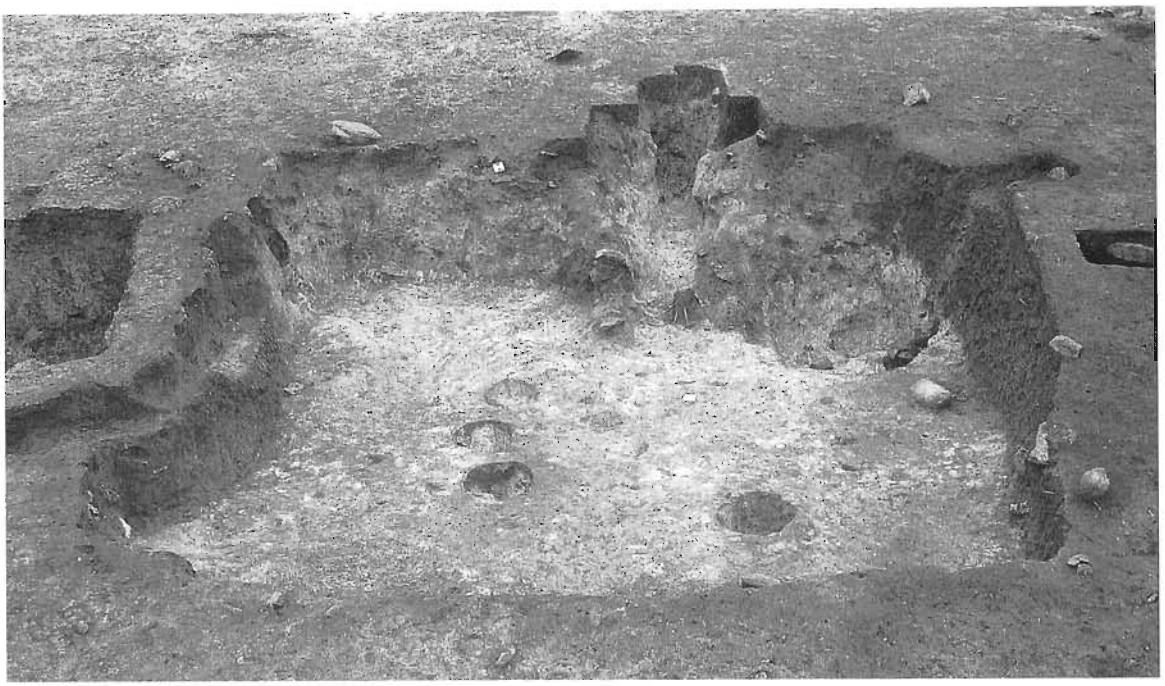
埋土断面（南から）

炉平面

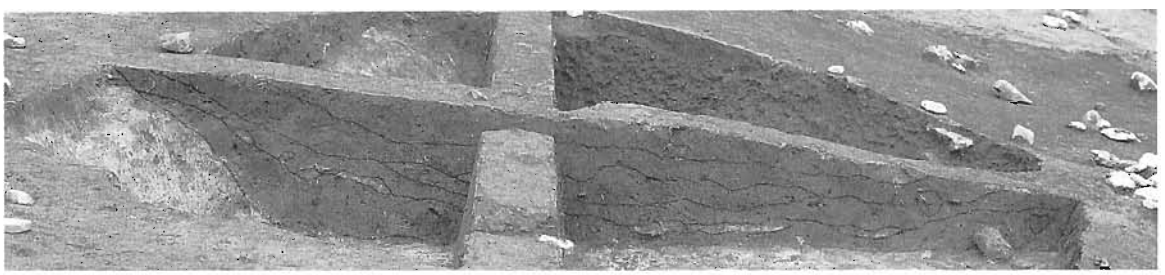


炉断面

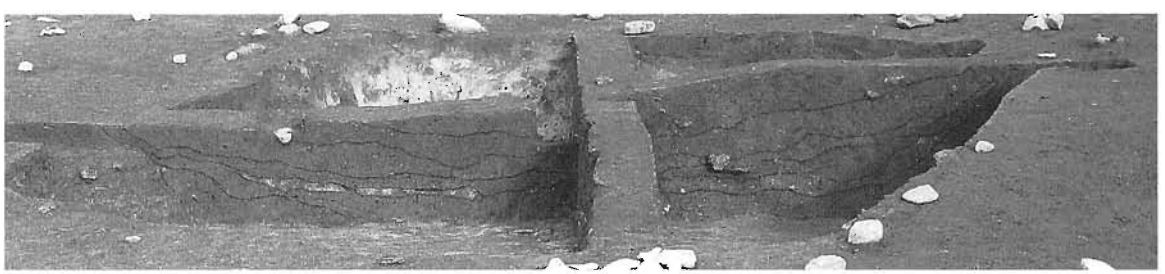
写真図版22　B12住居跡



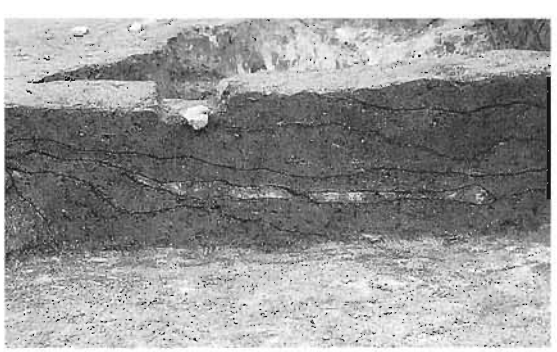
完掘全景（北西から）



埋土断面（北東から）



埋土断面（北西から）



十和田ａ降下火山灰混入状況

床面遺物出土状況

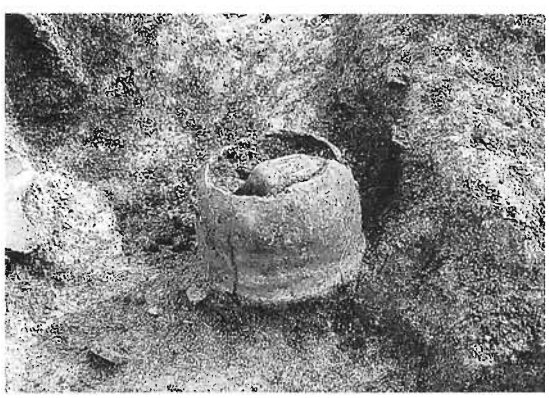
写真図版23　Ｂ13住居跡（１）

カマド全景

カマド断面・1

カマド断面・2

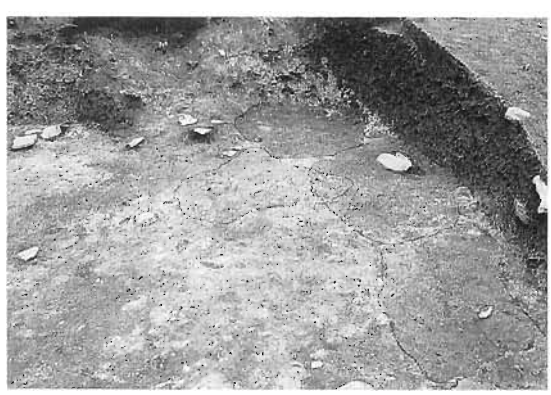
煙道部断面



カマド支脚検出

カマド支脚断面

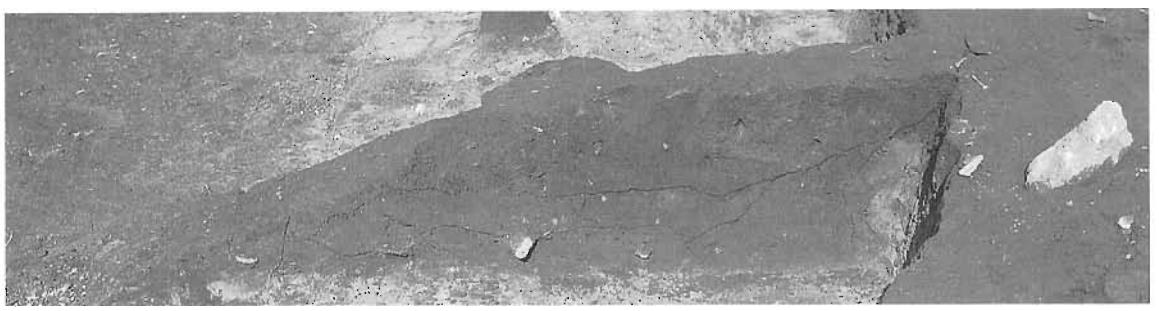
カマド側壁断面



床面土坑・床面焼成部検出

写真図版24　B13住居跡（2）

Ｂ14住居　完掘全景（北西から）

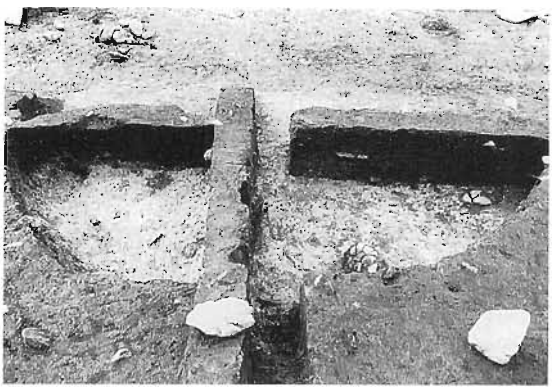


Ｂ14住居　埋土断面（南から）

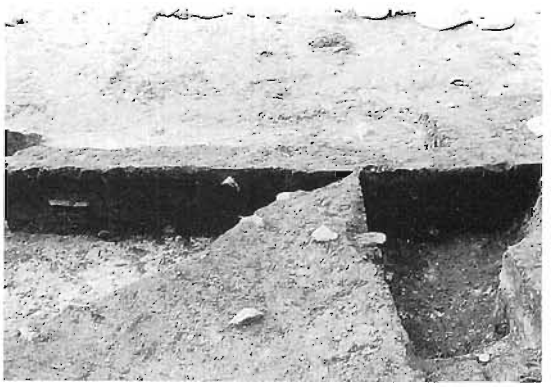
Ｂ15・16住居　完掘全景（北西から）

写真図版25　Ｂ14住居跡、Ｂ15・16住居跡（１）

B15・16住居　埋土断面（南西から）

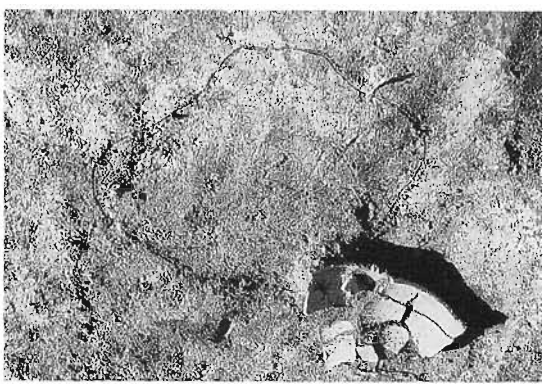


B15・16住居　埋土断面（南東から）

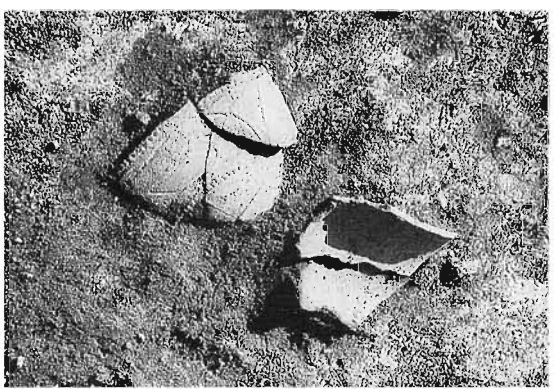


B16住居　埋土断面（南東から）

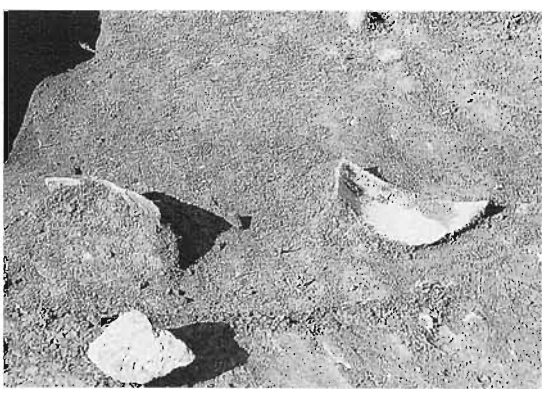
B16住居　埋土断面（北東から）



B16住居　炉平面



B16住居　床面土器出土状況



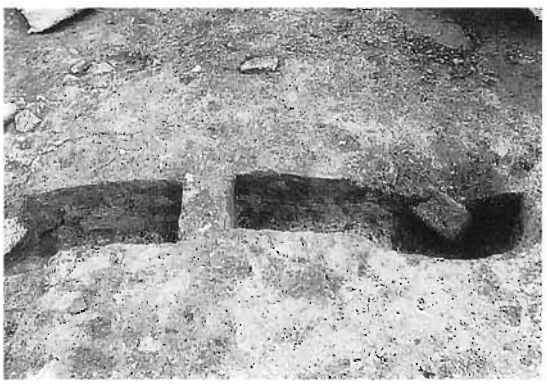
B15住居　土器出土状況

写真図版26　B15・16住居跡（2）

完掘全景（北西から）

埋土断面（南東から）

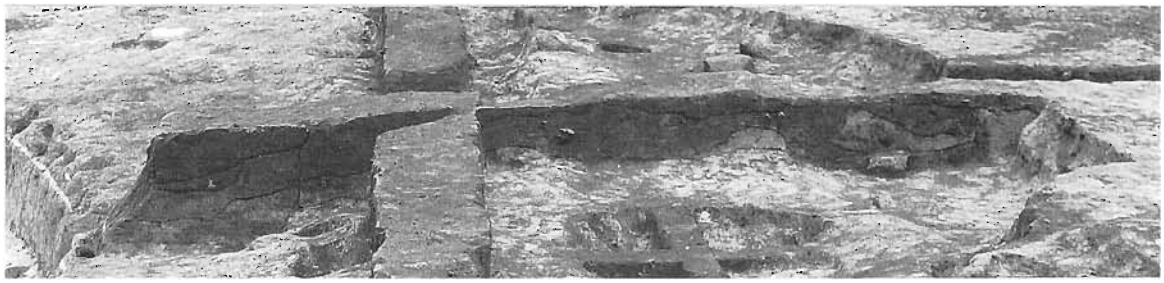
煙道部断面



煙道部断面

写真図版27　B17住居跡

完掘全景（北から）



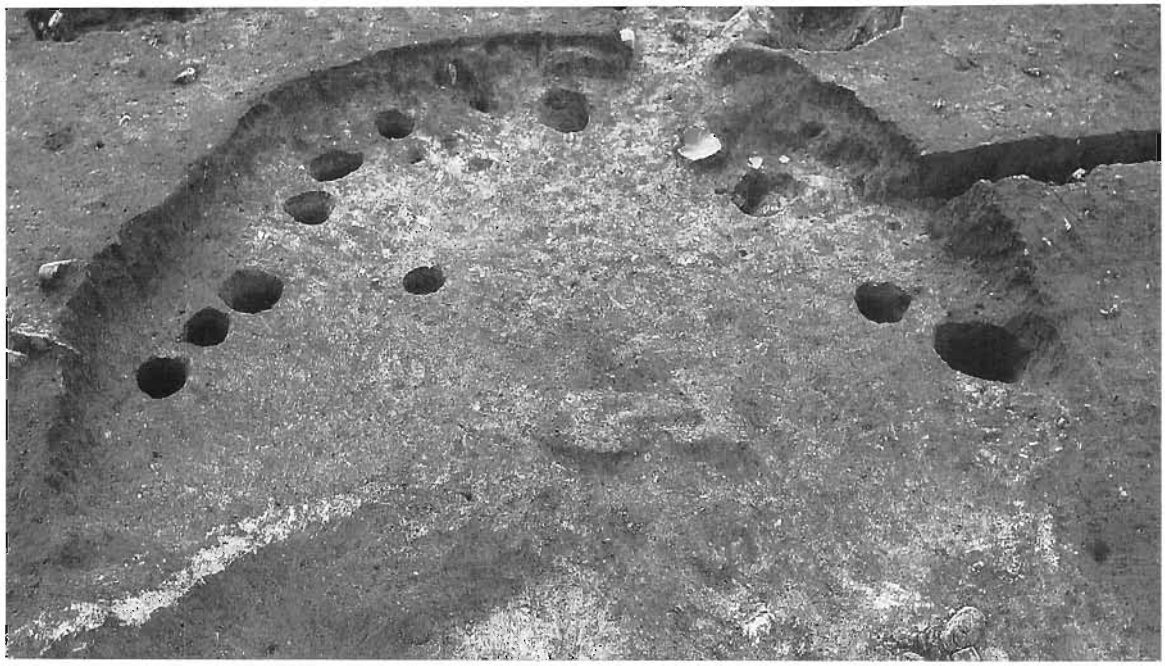
埋土断面（西から）

埋土断面（南西から）

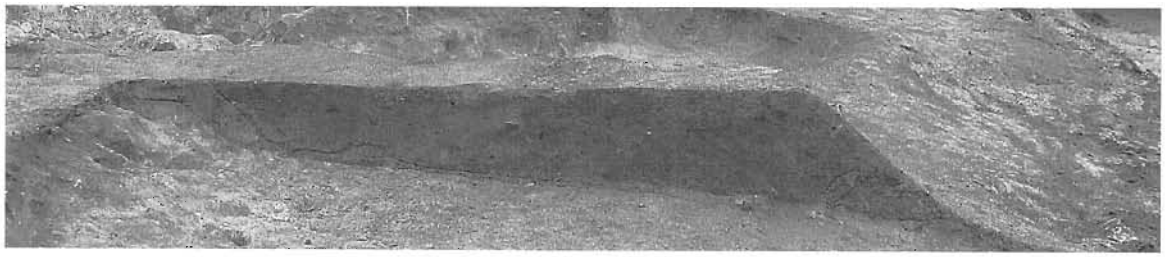
床面土坑１断面

実測風景

写真図版28　Ｂ18・19住居跡

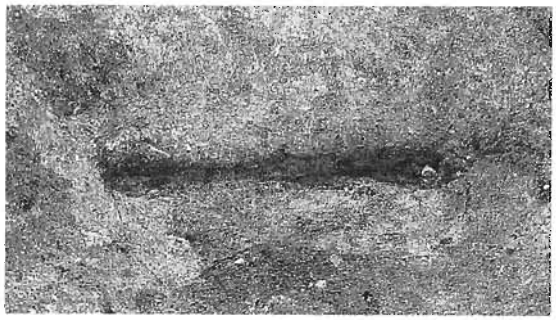


完掘全景（北から）



埋土断面（東から）

炉平面



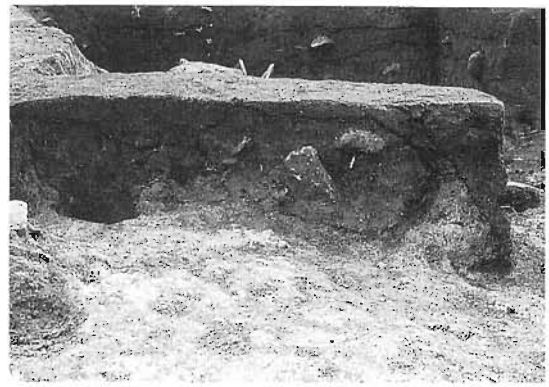
炉断面

床面土器出土状況

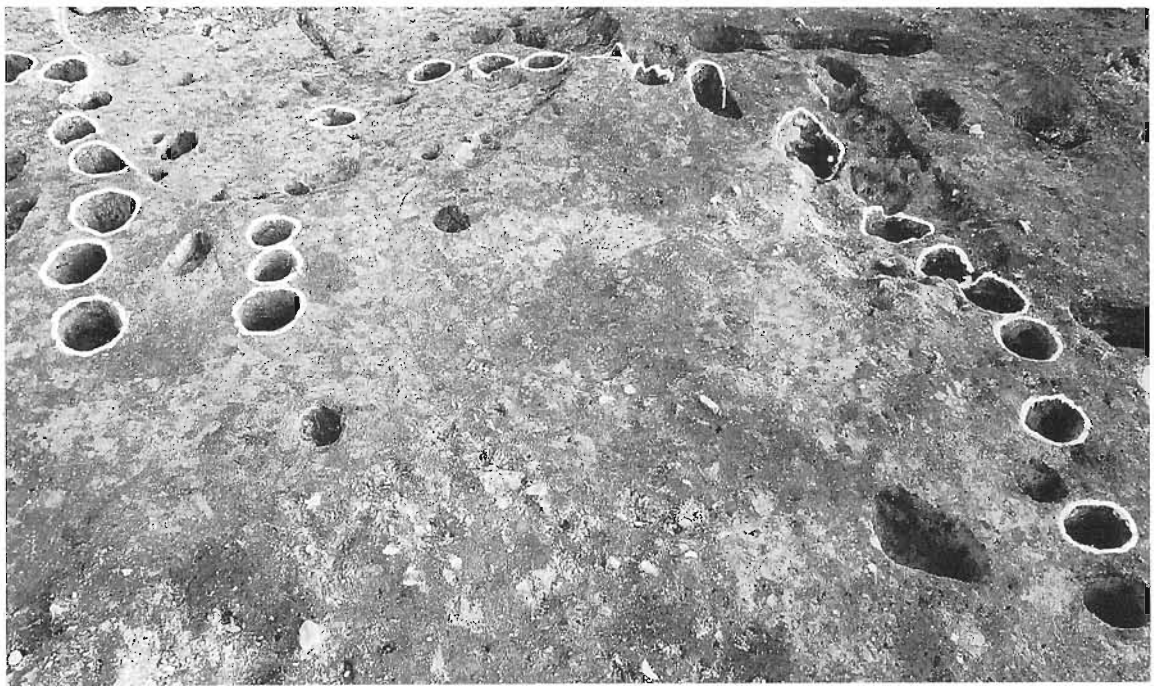
調査風景

写真図版29　B20住居跡

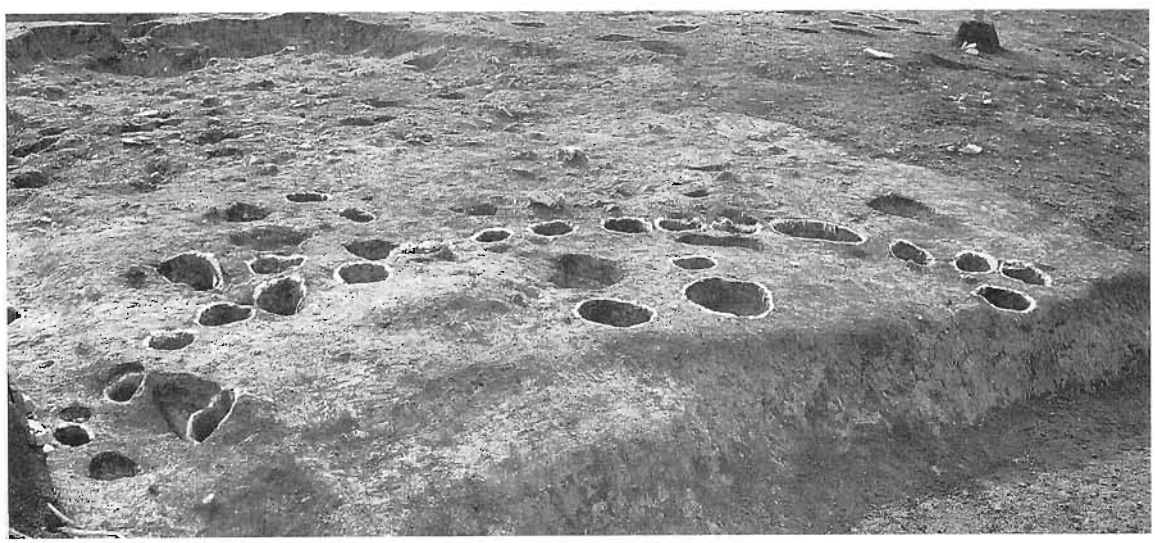
B21住居　完掘全景（北西から）



B21住居　埋土断面（北西から）

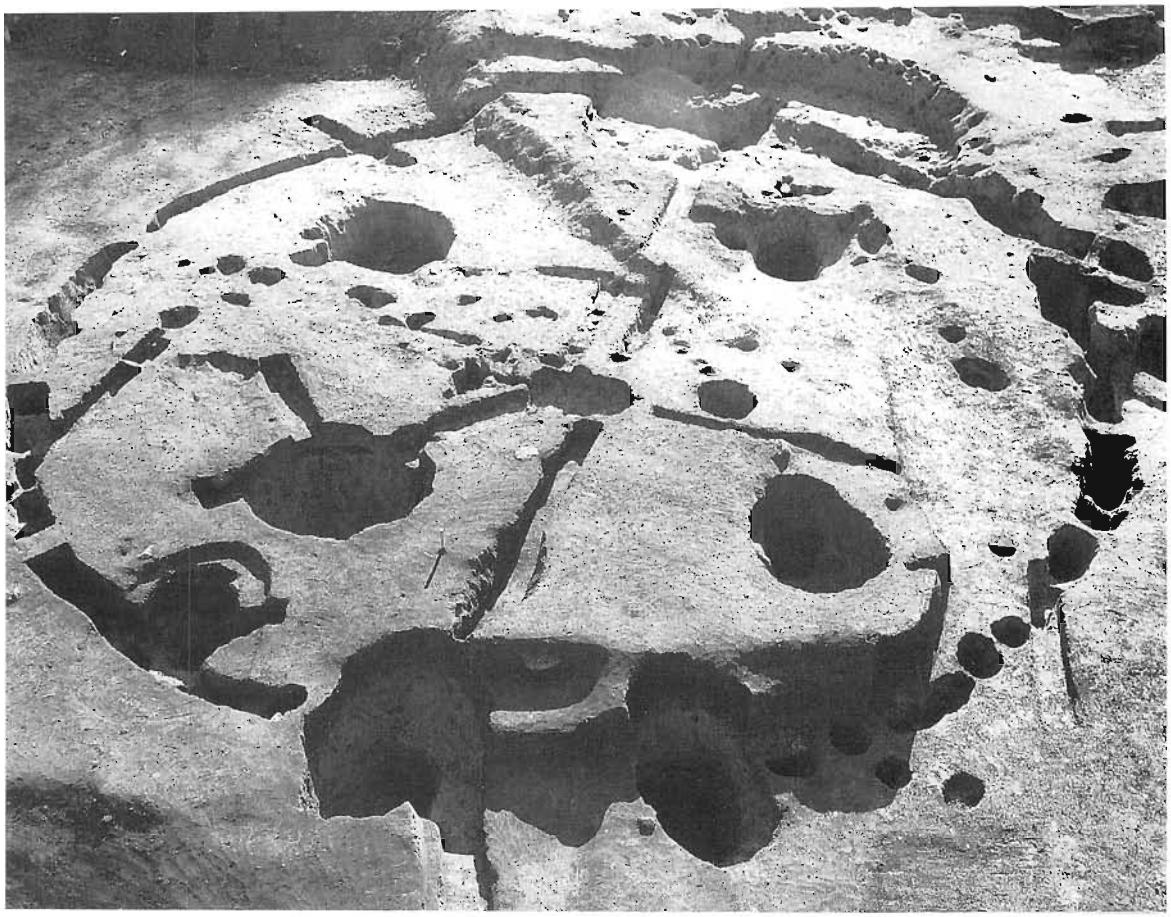


B22住居状遺構　完掘全景（北西から）

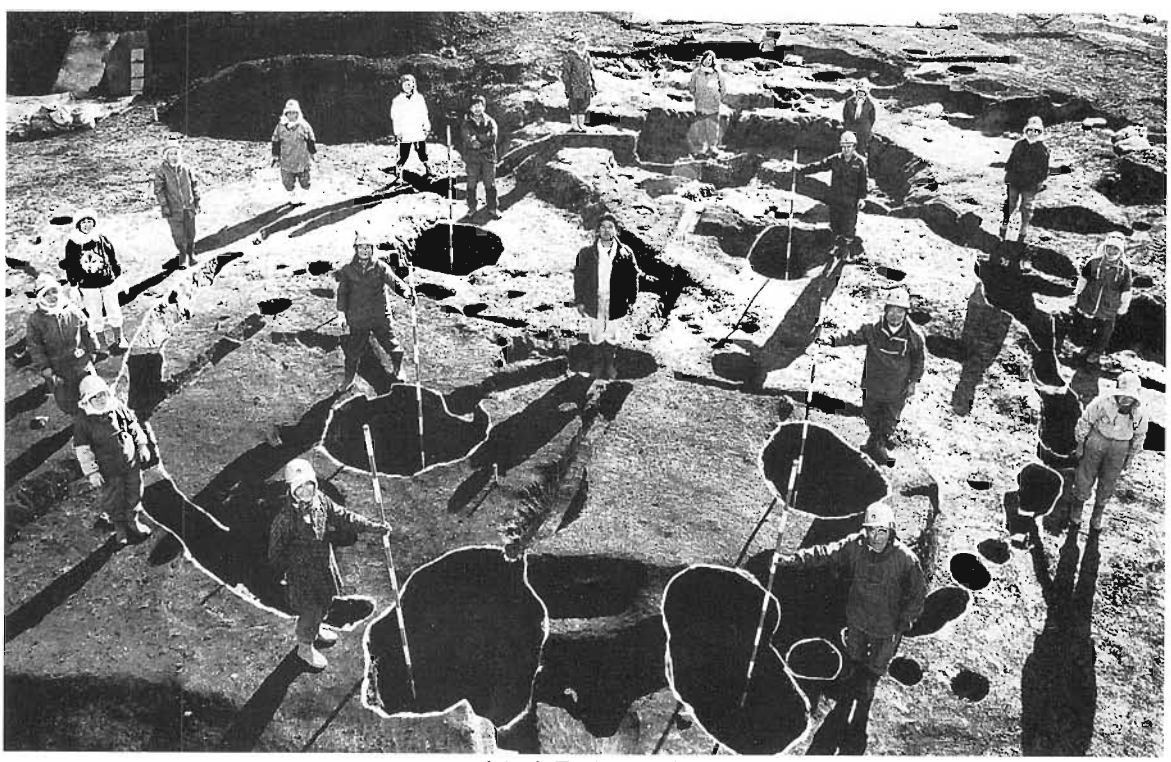


B23住居状遺構　完掘全景（北から）

写真図版30　B21住居跡、B22・B23住居状遺構



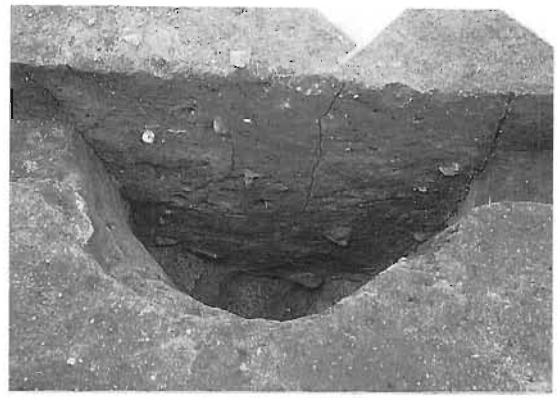
完掘全景（北から）



完掘全景（北から）

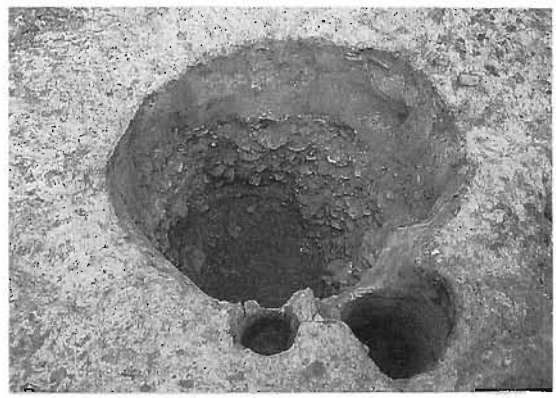
写真図版31　Ａ１建物跡（１）

A 1 土坑完掘

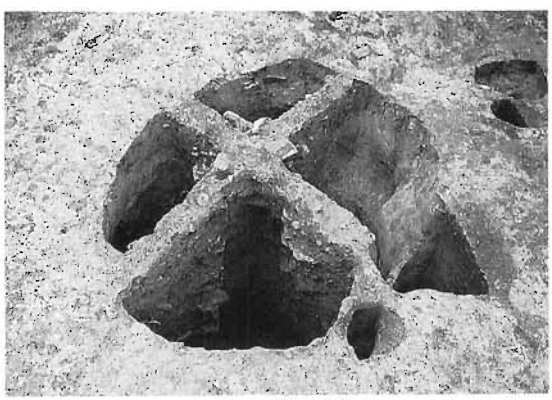


A 1 土坑断面①

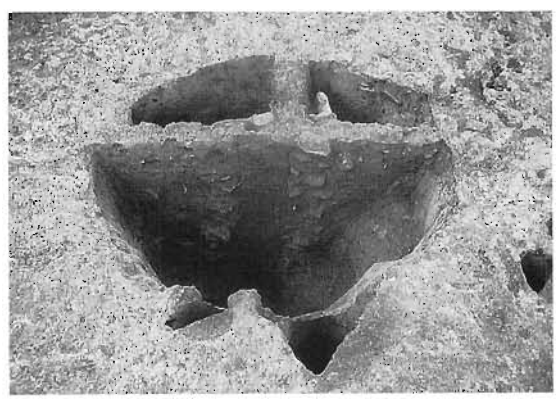
A 1 土坑断面②



A 2 土坑完掘



A 2 土坑断面①



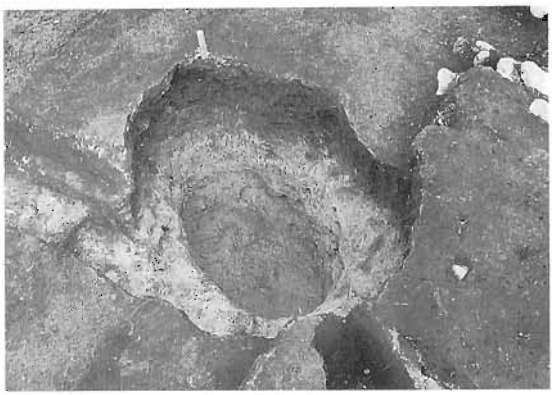
A 2 土坑断面②

A 3 土坑完掘

A 3 土坑断面①

写真図版32　A 1 建物跡（2）

A 3 土坑断面②



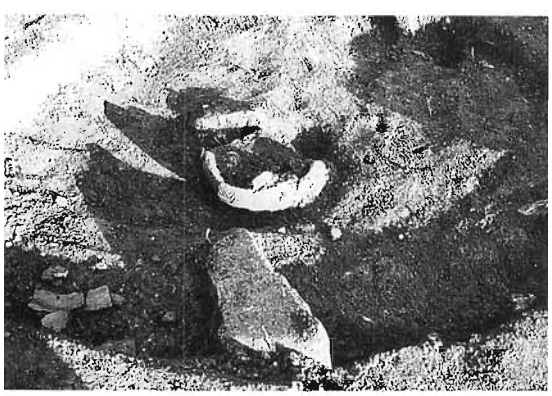
A 4 土坑完掘

A 4 土坑断面①

A 4 土坑断面②

A 5 土坑完掘

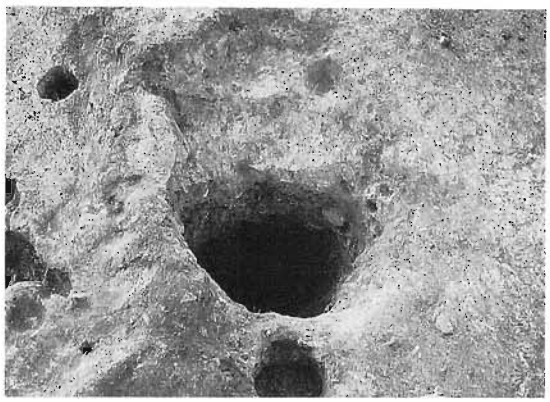
A 5 土坑断面



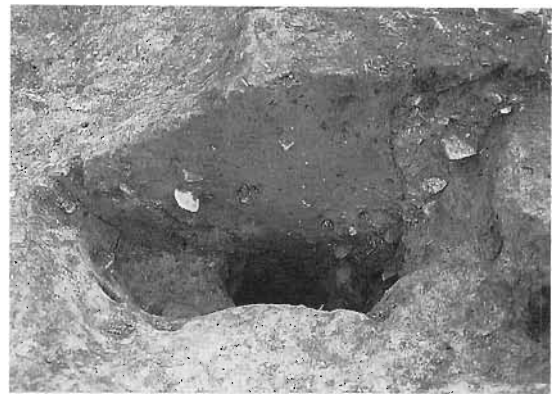
A 5 土坑土器出土状況

A 5 土坑実測風景

写真図版33　A 1 建物跡（3）

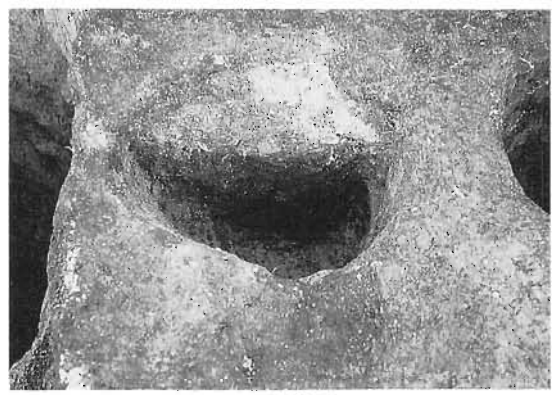


A 8 土坑完掘



A 8 土坑断面

P P27完掘

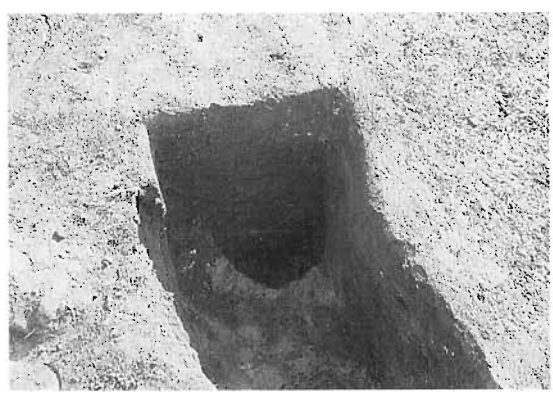


P P 1 断面

P P13断面

P P18断面

P P42断面

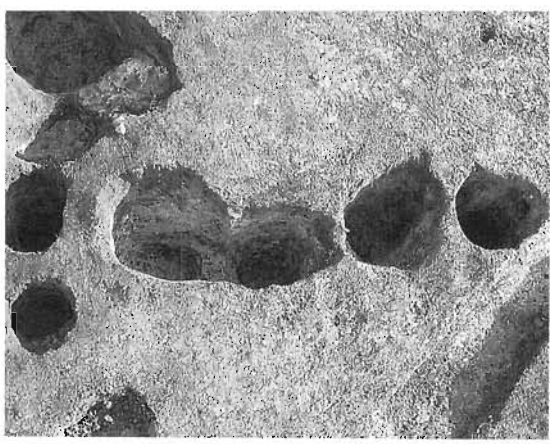


P P47断面

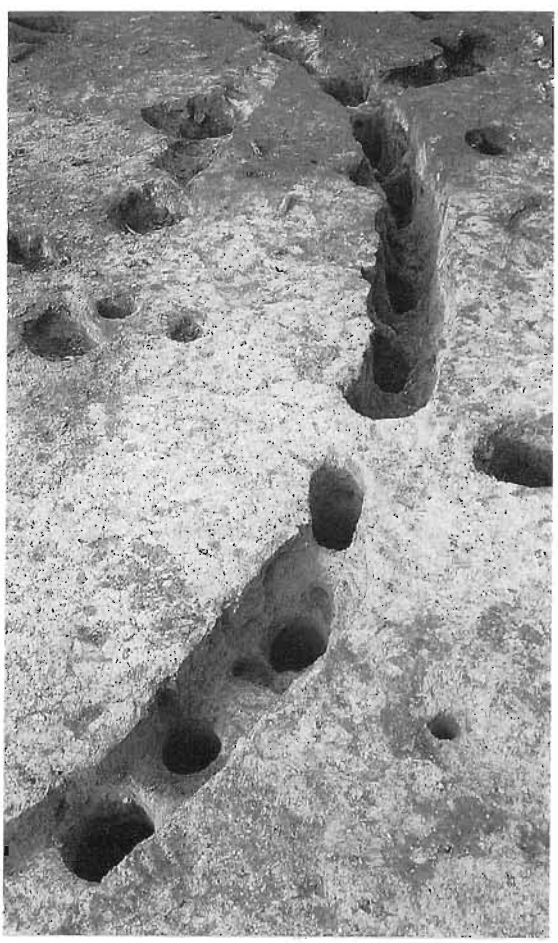
写真図版34　A 1 建物跡（4）

南側柱穴埋土完掘

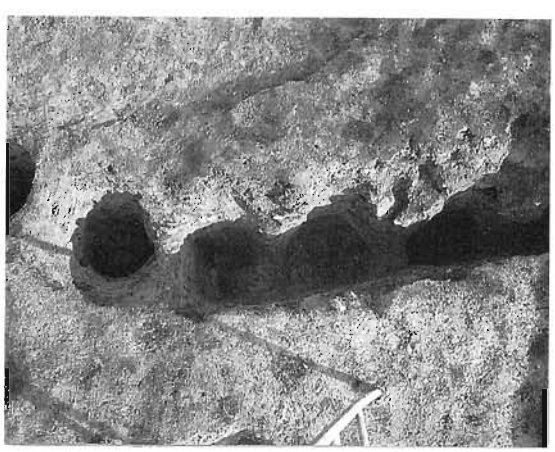
柱穴列完掘（南側）



柱穴列完掘（北西部）



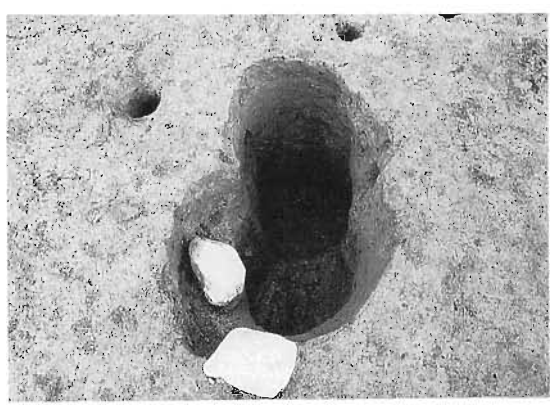
柱穴列完掘（東部）



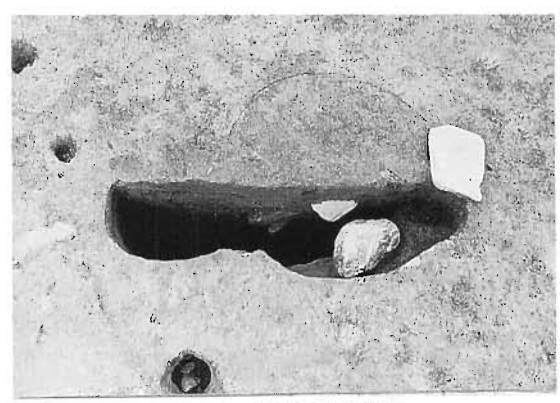
柱穴列完掘（西部）

写真図版35　A１建物跡（５）

Ｂ１・２建物跡　完掘全景（西から）

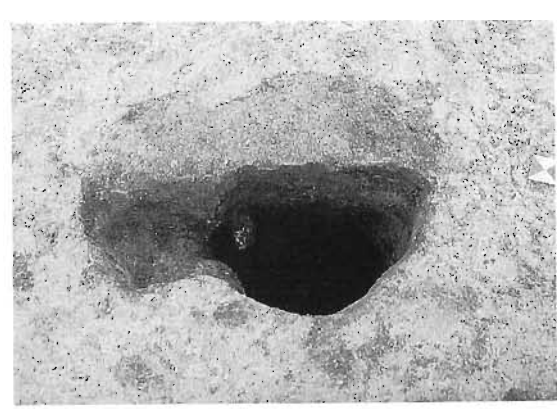


Ｂ１建物ＰＰ５・Ｂ２建物ＰＰ４　完掘



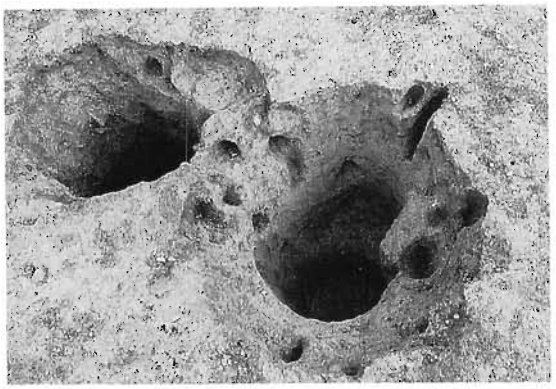
同左・重複状況断面

Ｂ２建物ＰＰ５完掘

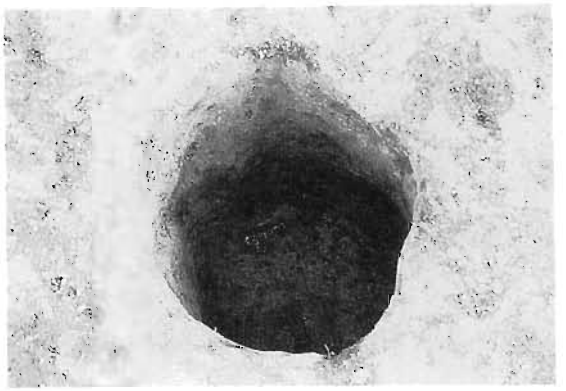


Ｂ２建物ＰＰ５断面

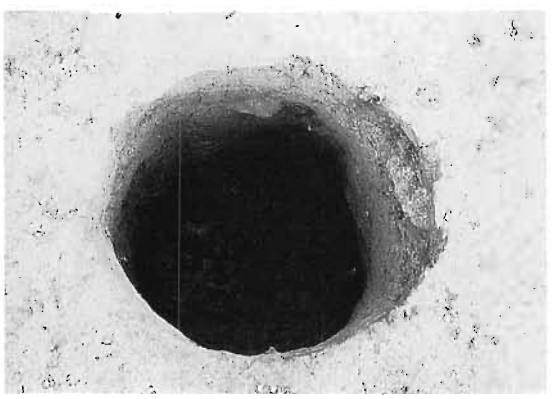
写真図版36　Ｂ１・２建物跡（１）



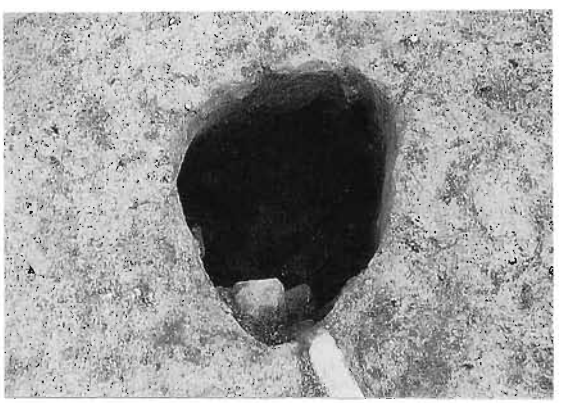
Ｂ１建物ＰＰ３・Ｂ２建物ＰＰ２完掘



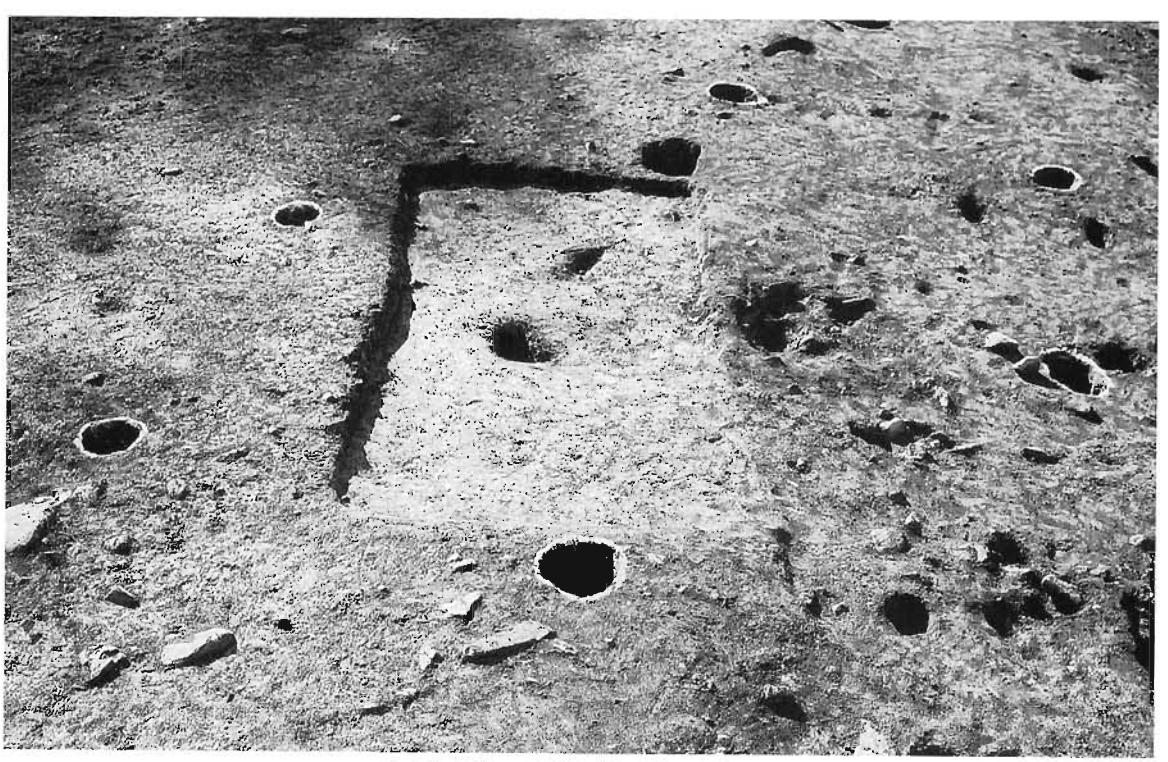
Ｂ１建物ＰＰ１完掘



Ｂ１建物ＰＰ４完掘



Ｂ２建物ＰＰ３完掘



Ｂ３建物跡　完掘全景（北から）

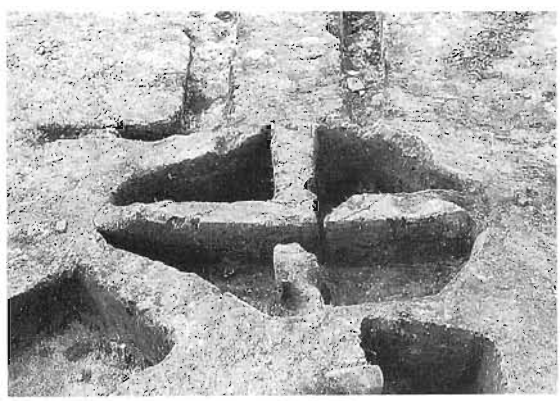
写真図版37　Ｂ１・２建物跡（２）、Ｂ３建物跡

A 6 土坑完掘

A 6 土坑断面

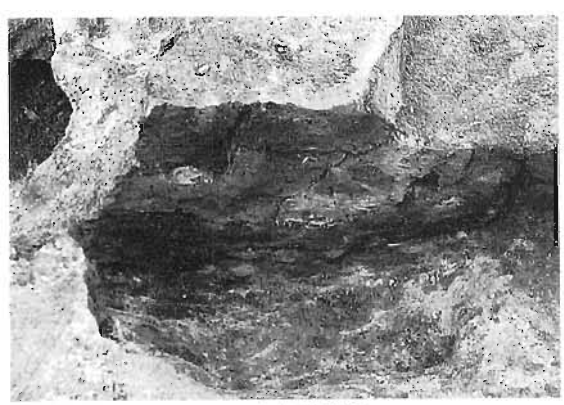
A 7 土坑検出

A 7 土坑完掘



A 7 土坑断面

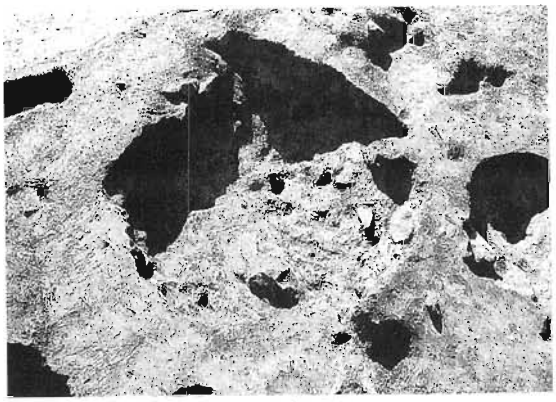
A 9 土坑完掘



A 9 土坑断面①

A 9 土坑断面②

写真図版38　土坑（1）



B 1 土坑完掘

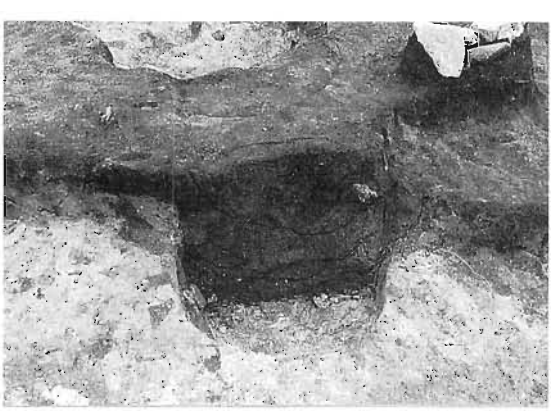
B 1 土坑断面

B 1 土坑検出

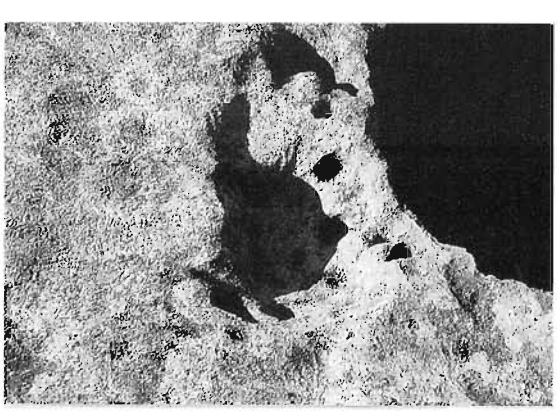
B 2 土坑完掘

B 2 土坑断面

B 3 土坑完掘

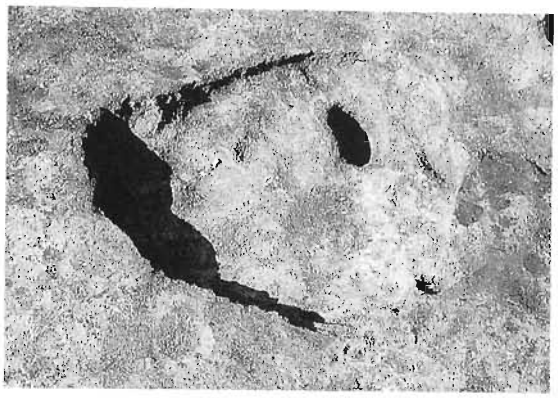


B 3 土坑断面



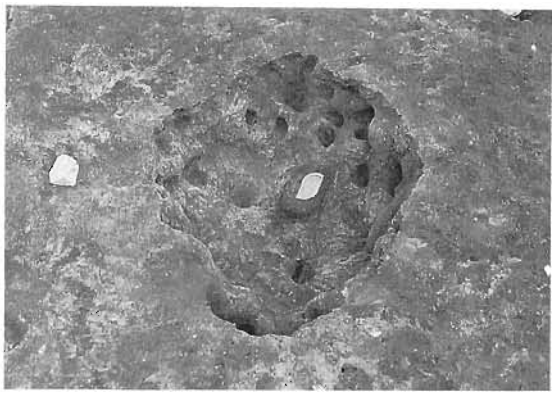
B 4 土坑完掘

写真図版39　土坑（2）

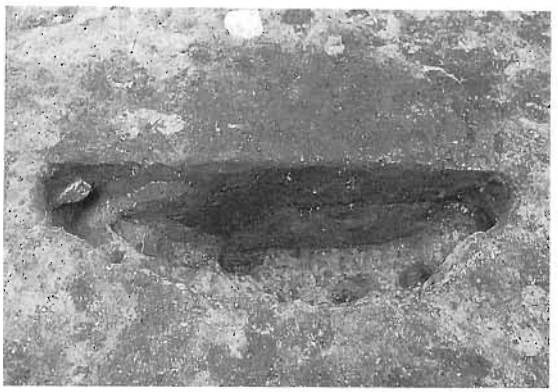


B 5 土坑完掘

B 5 土坑　土器出土状況

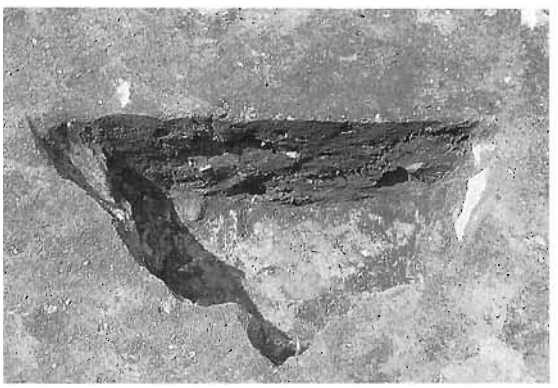


B 6 土坑完掘



B 6 土坑断面

B 7 土坑完掘



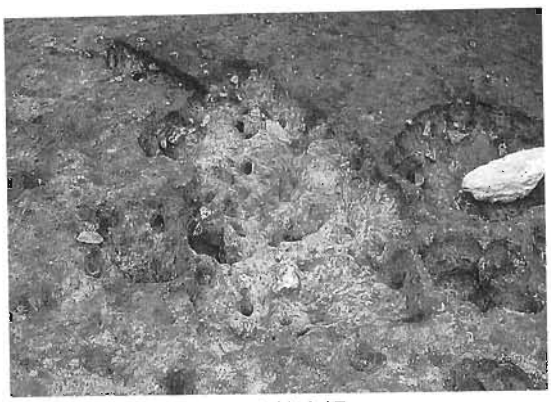
B 7 土坑断面

B 8 土坑完掘

B 8 土坑断面

写真図版40　土坑（3）

B 8 土坑検出



B 9 土坑完掘

B 9 土坑断面

B 9 土坑検出

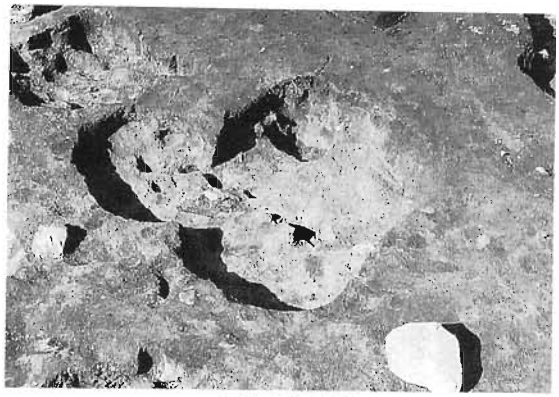
B10土坑完掘

B10土坑断面

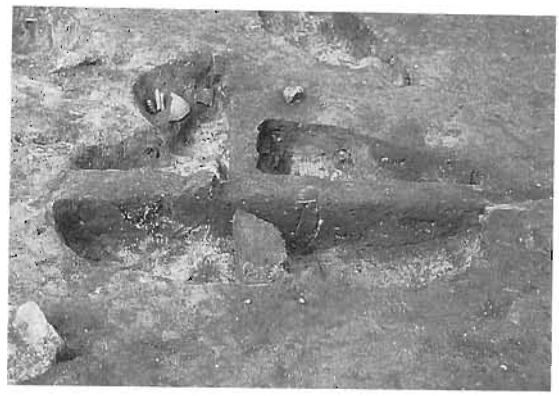
B11土坑完掘

B11土坑断面

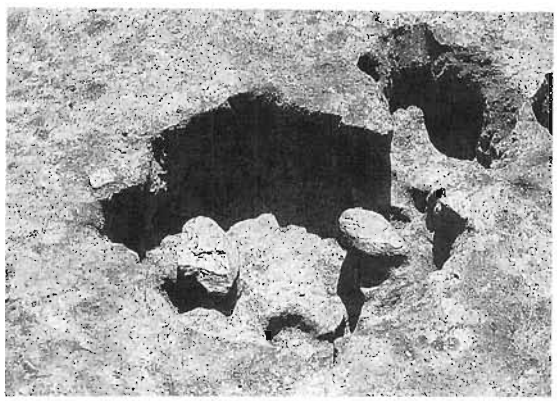
写真図版41　土坑（4）



B12土坑完掘

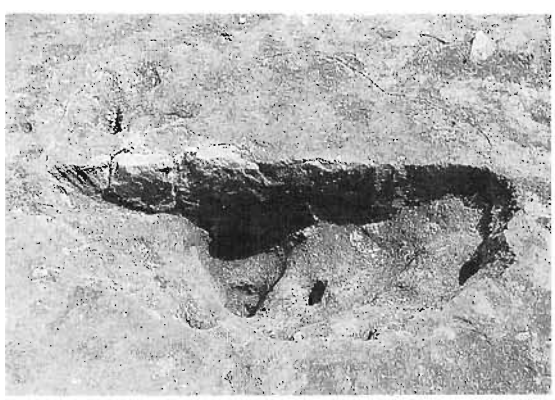


B12土坑断面



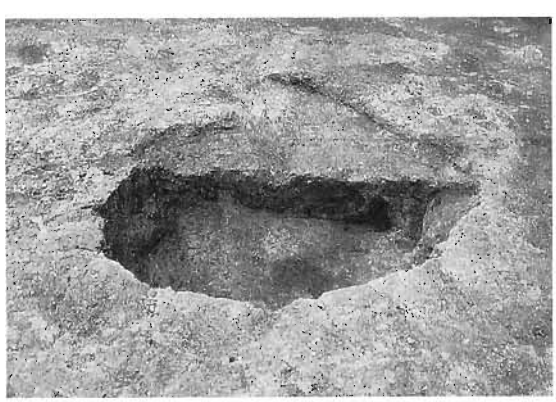
B13土坑完掘

B13土坑断面



B14土坑断面

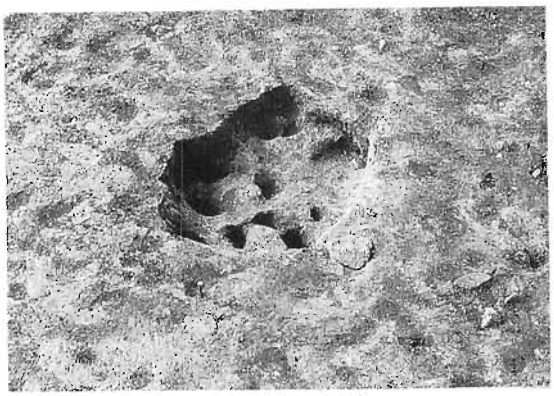
B16土坑完掘



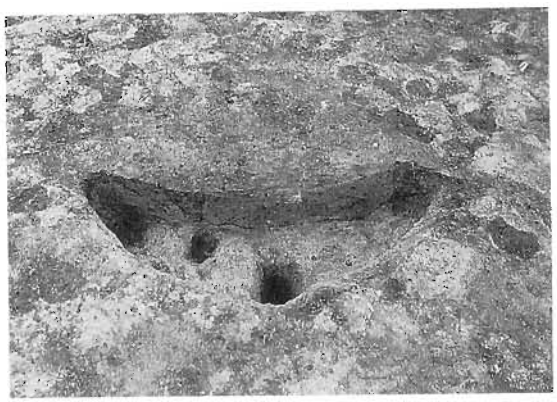
B16土坑断面

B区土坑群精査風景

写真図版42　土坑（5）

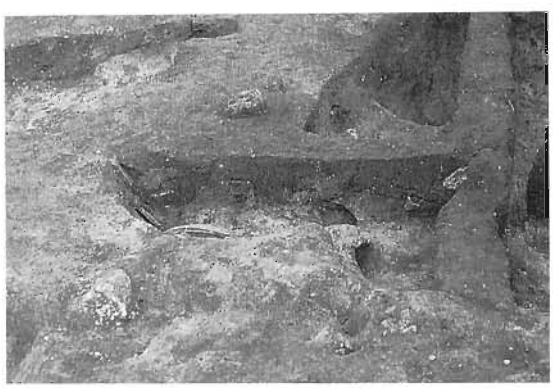


B17土坑完掘

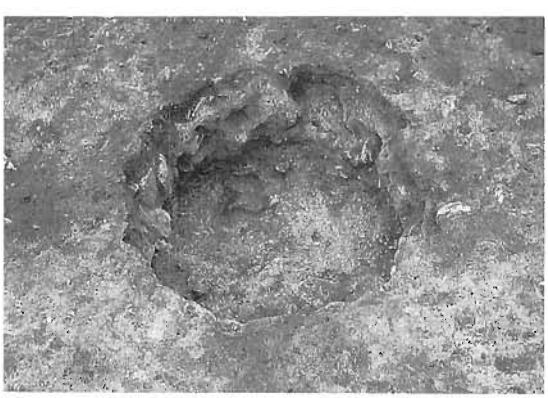


B17土坑断面

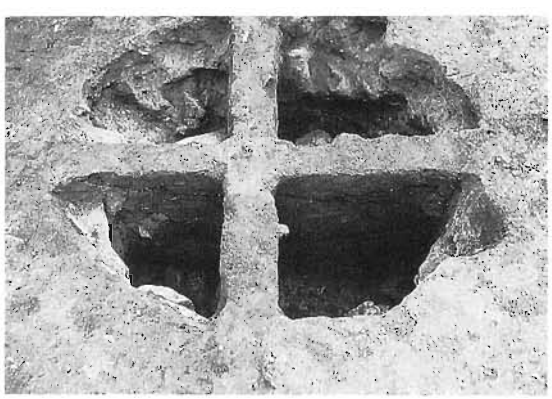
B18土坑完掘



B18土坑断面



B19土坑完掘

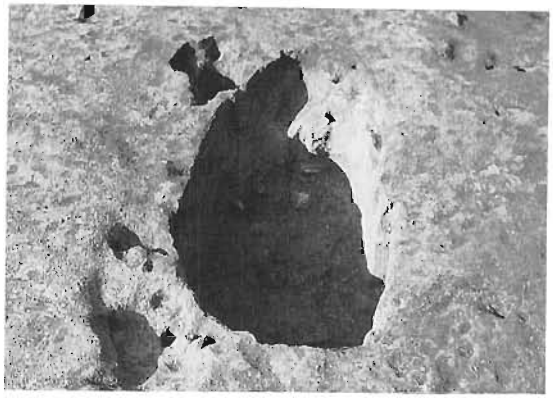


B19土坑断面

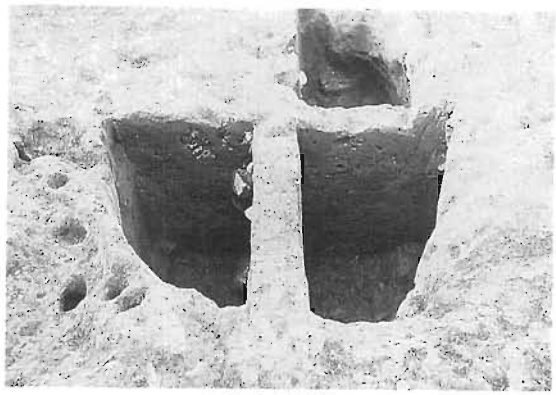
B20土坑完掘

B20土坑断面

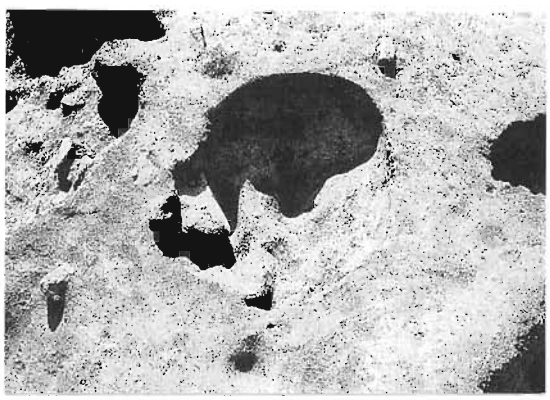
写真図版43　土坑（6）



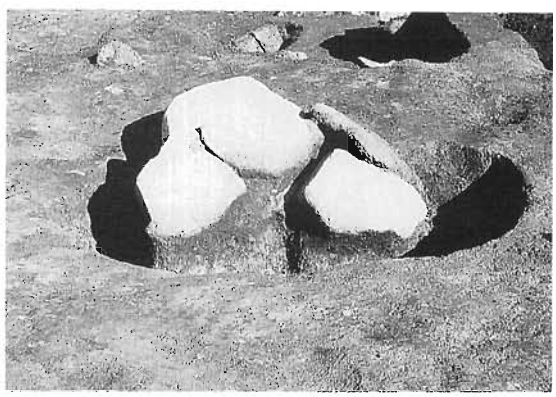
B 21土坑完掘



B 21土坑断面



B 22土坑完掘

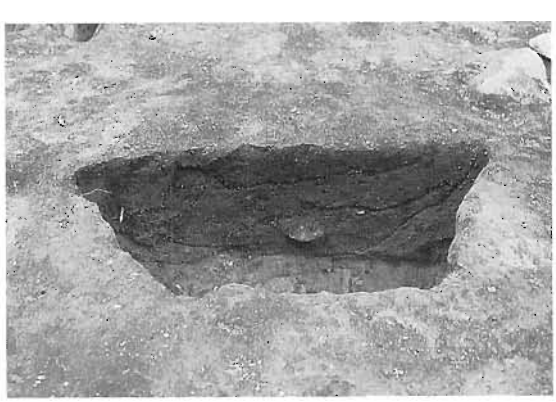


B 22土坑断面

B 23土坑完掘

B 23土坑断面

B 24土坑完掘



B 24土坑断面

写真図版44　土坑（7）

B 25土坑完掘

B 25土坑断面

B 26土坑検出

B 26土坑断面

B 27土坑完掘

B 27土坑断面

B 29・28・15土坑完掘

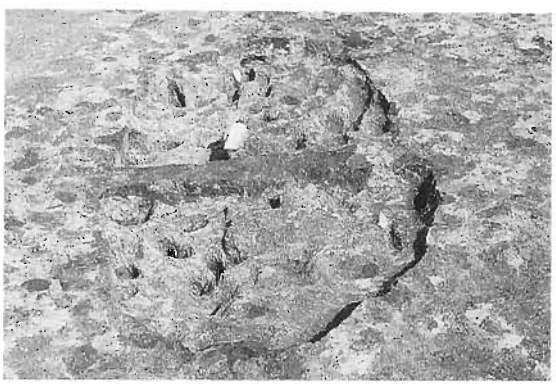
B 29土坑断面

写真図版45　土坑（8）

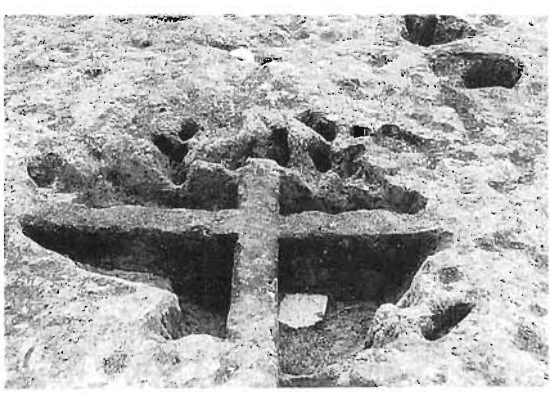
B 30土坑完掘

B 30土坑断面

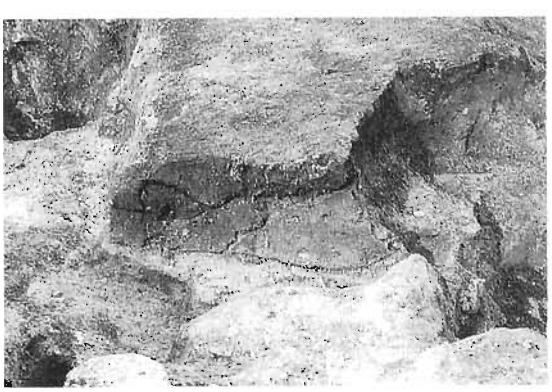
B 31土坑完掘



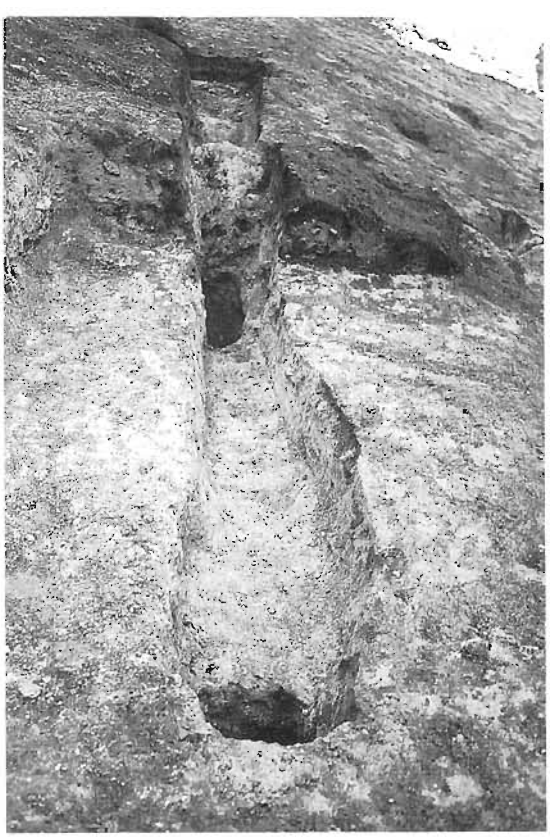
B 31土坑断面



B 33土坑断面

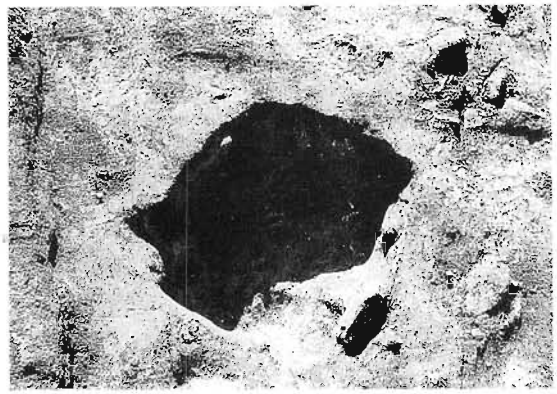


B 36土坑断面



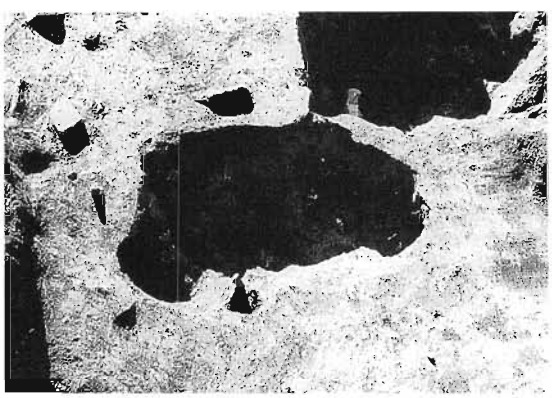
B 37土坑完掘

写真図版46　土坑（9）



B 34土坑完掘

B 34土坑断面



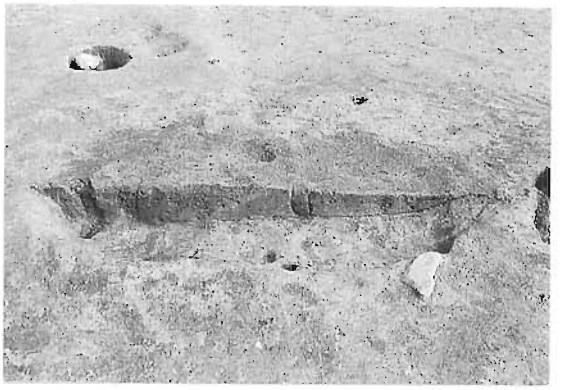
B 35土坑完掘

B 35土坑断面

B区土坑群分布状況（北西から）

写真図版47　土坑（10）

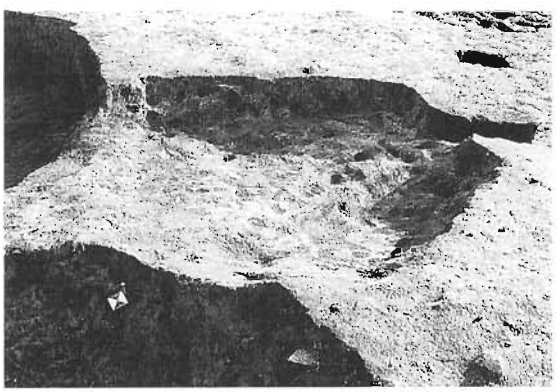
B 39土坑完掘



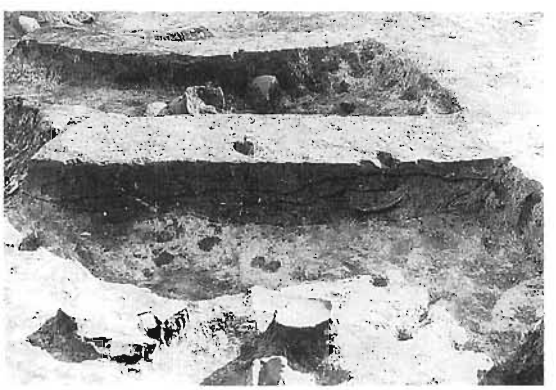
B 39土坑断面

B 44土坑完掘

B 44土坑断面



B 45土坑完掘

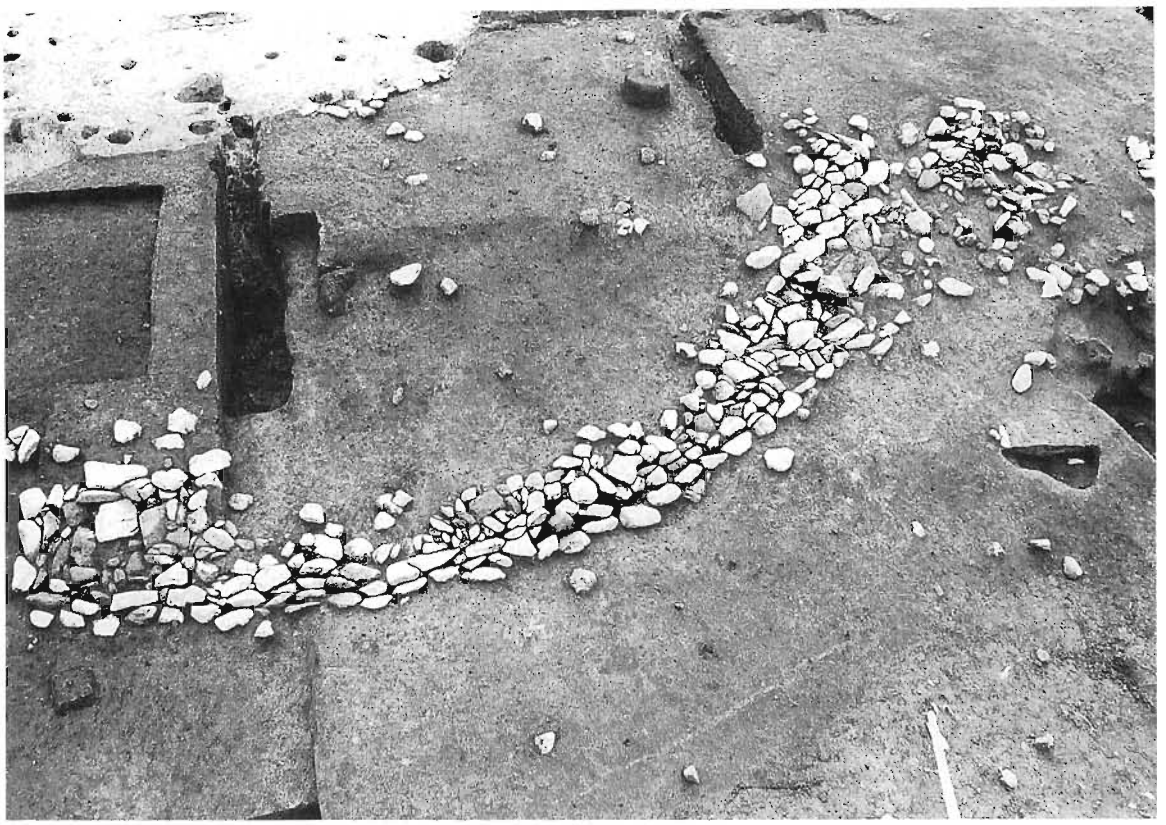


B 45土坑断面

B 45土坑遺物出土状況

B 46土坑完掘

写真図版48　土坑（11）

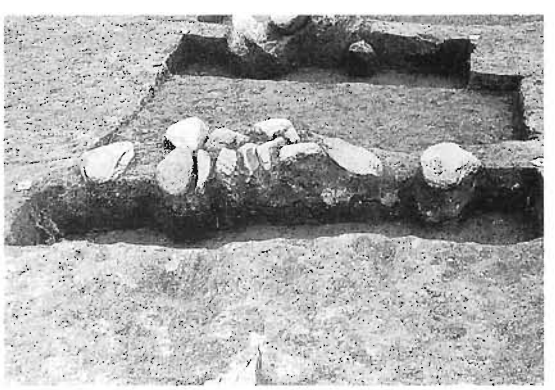


全景（北から）

全景（南西から）

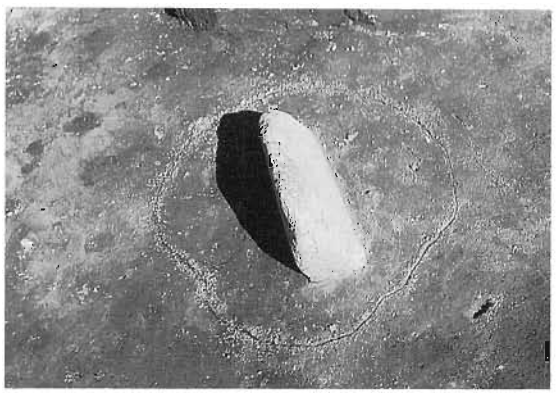
東端部全景

断面１



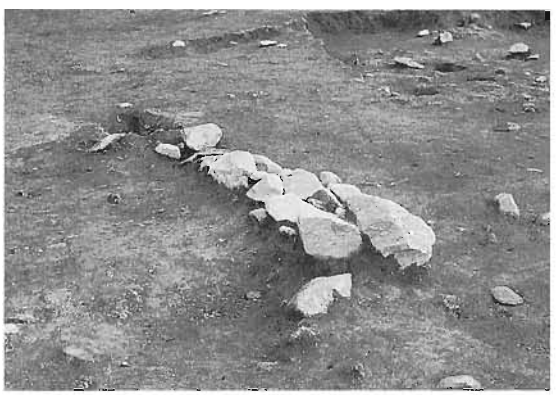
断面２

写真図版49　Ａ１配石

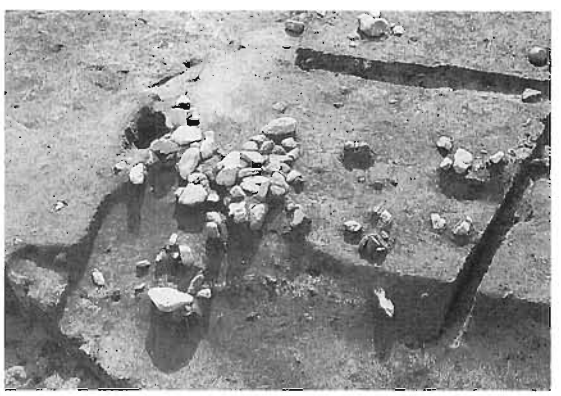


B 1 立石検出

B 1 組石検出 1

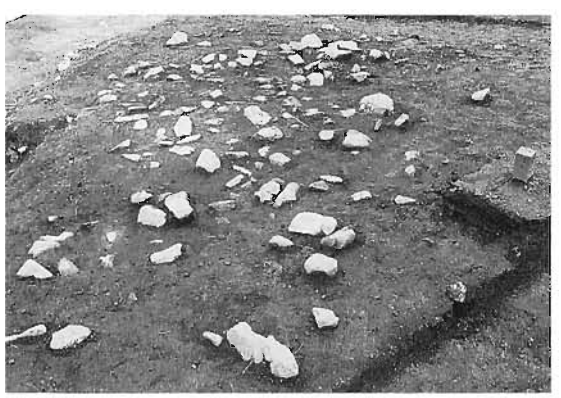


B 1 組石検出 2



B区礫群 1

B区礫群 2

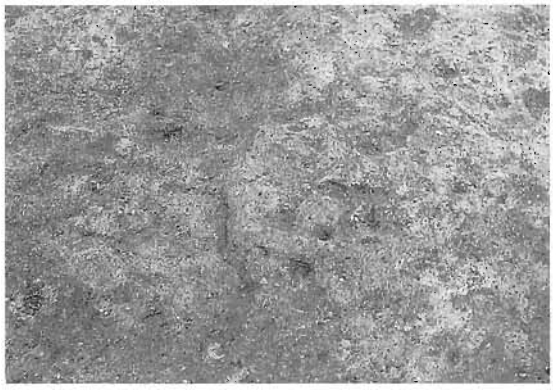


B区礫群 2 （近接）

B区礫群 3

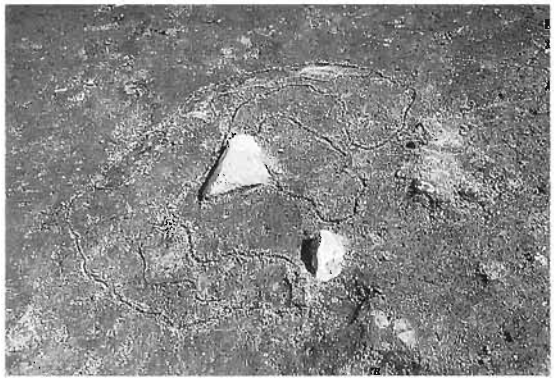
B区礫群 3

写真図版50　立石・組石・礫群



Ａ１焼土検出

Ａ１焼土断面

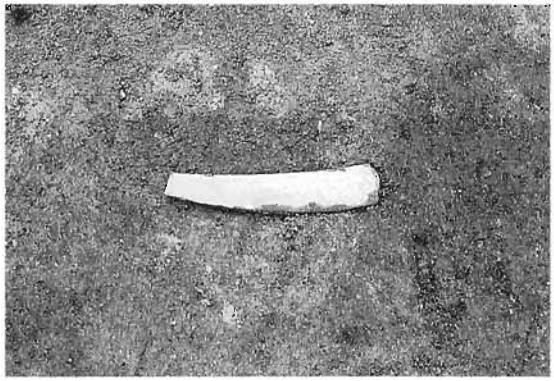


Ｄ１焼土検出

Ｃ区遺構群検出(南から)

旧河道全景

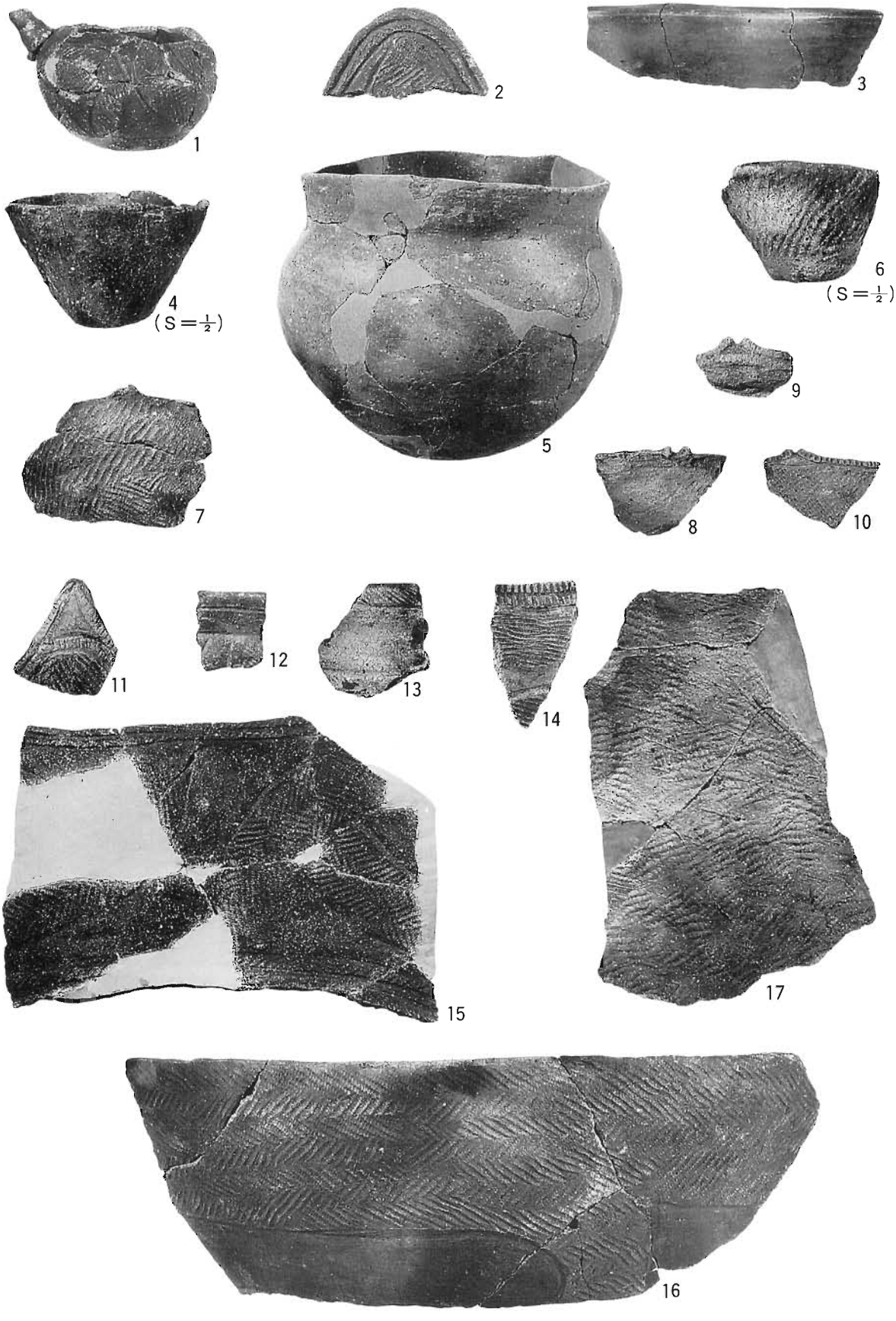
５Ｈ区　Ⅲｃ層土器出土状況



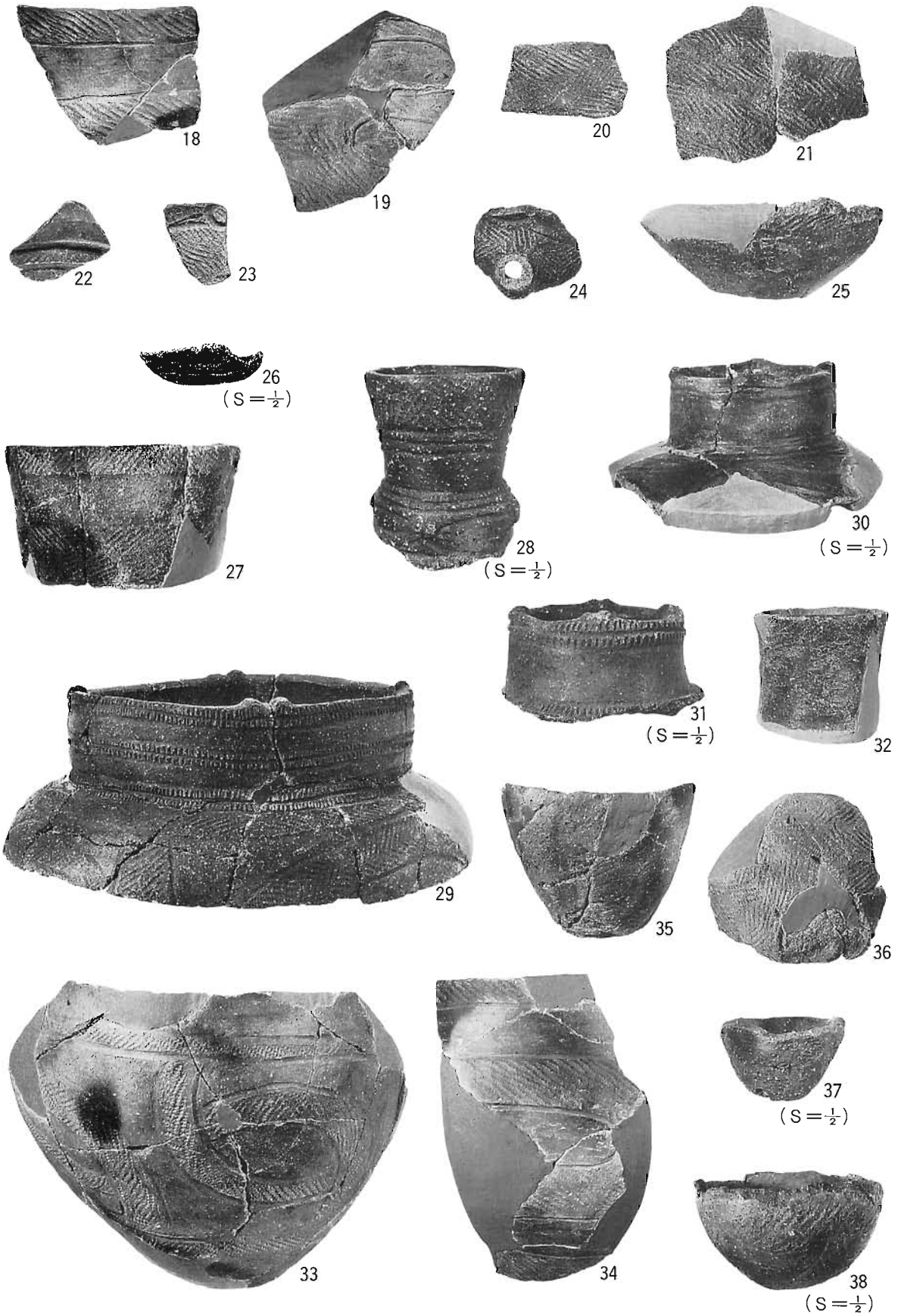
５Ｈ１ｅ区　石刀出土状況

Ａ区客土中土器出土状況

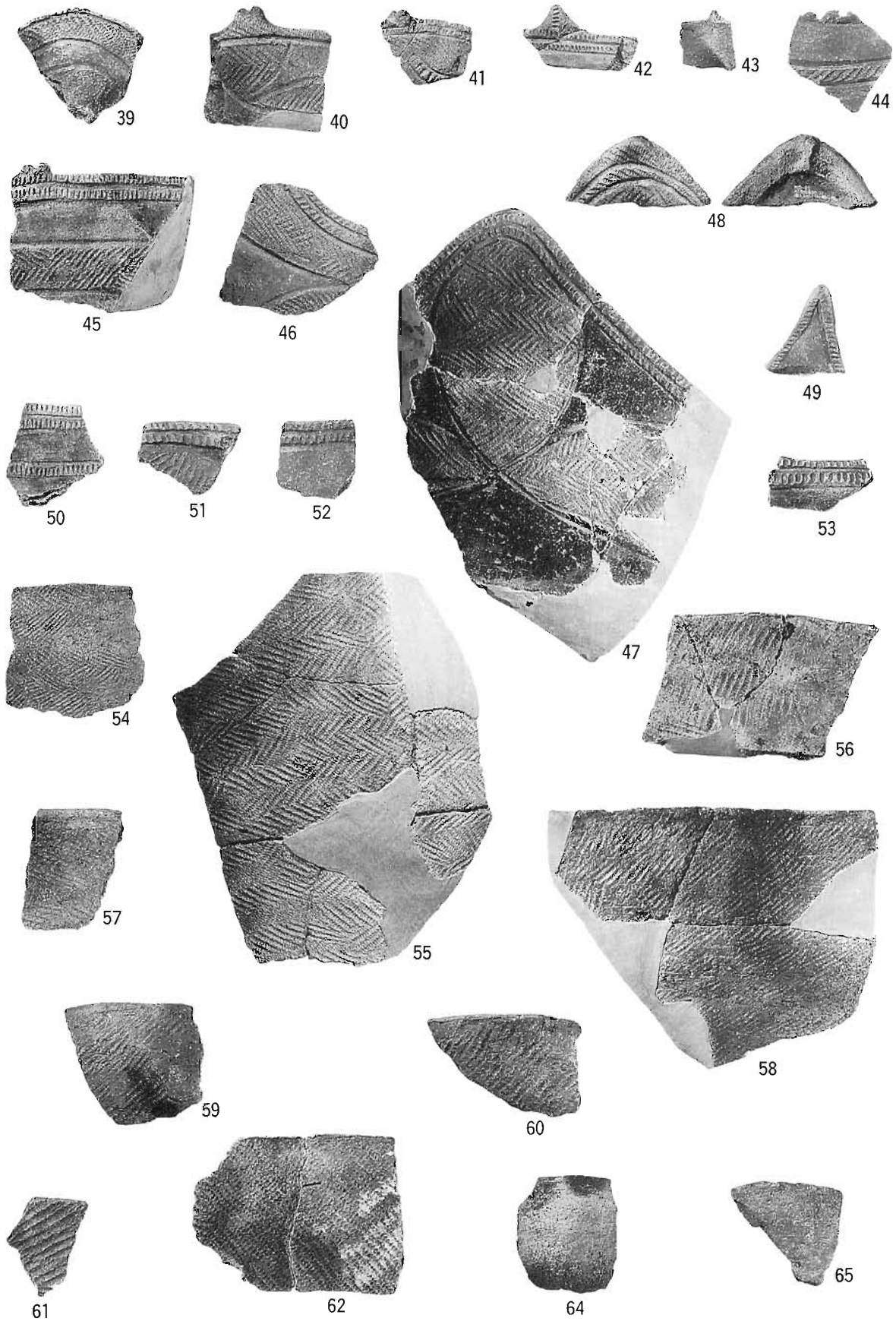
写真図版51　焼土遺構等



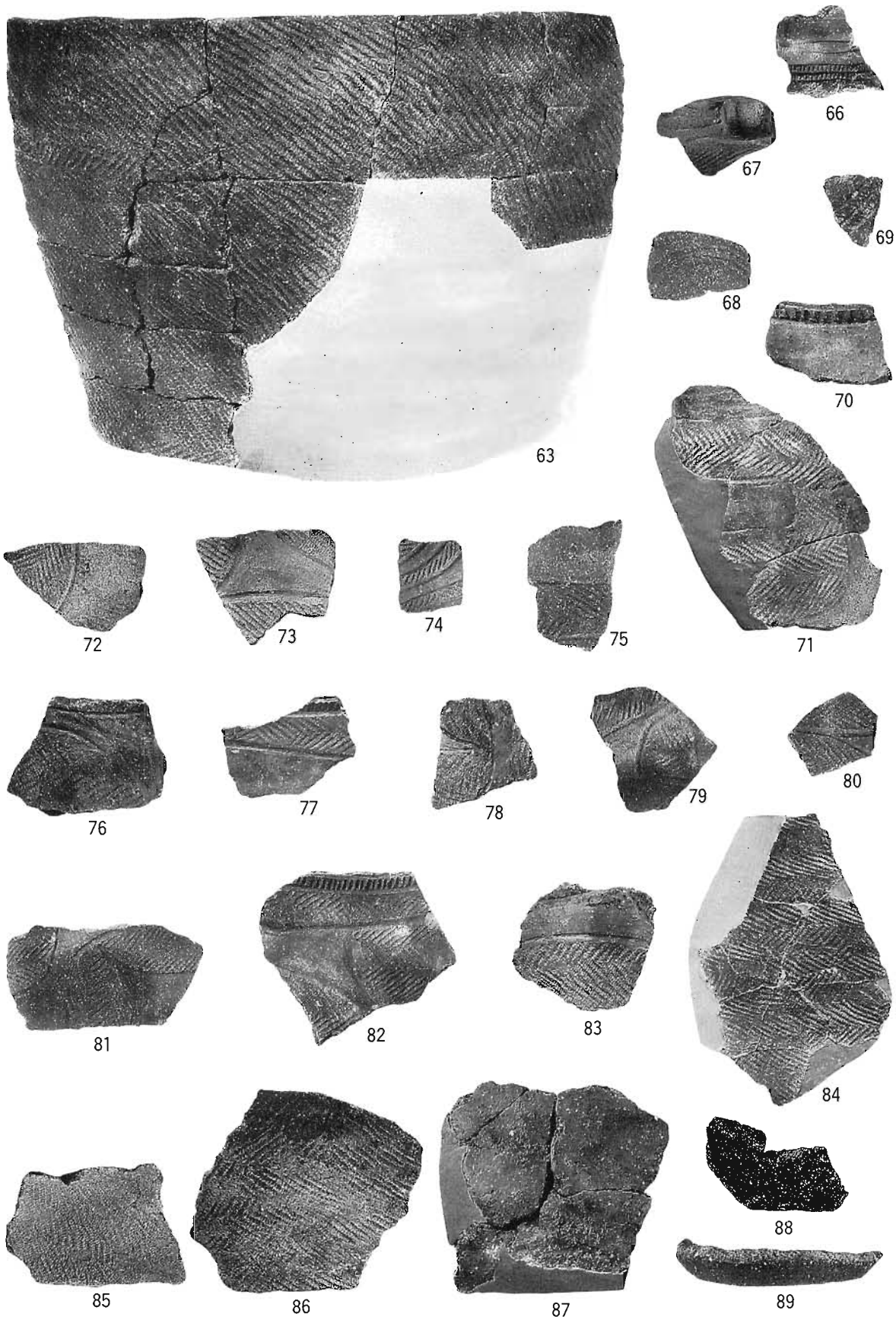
写真図版52　遺構内出土遺物（1）



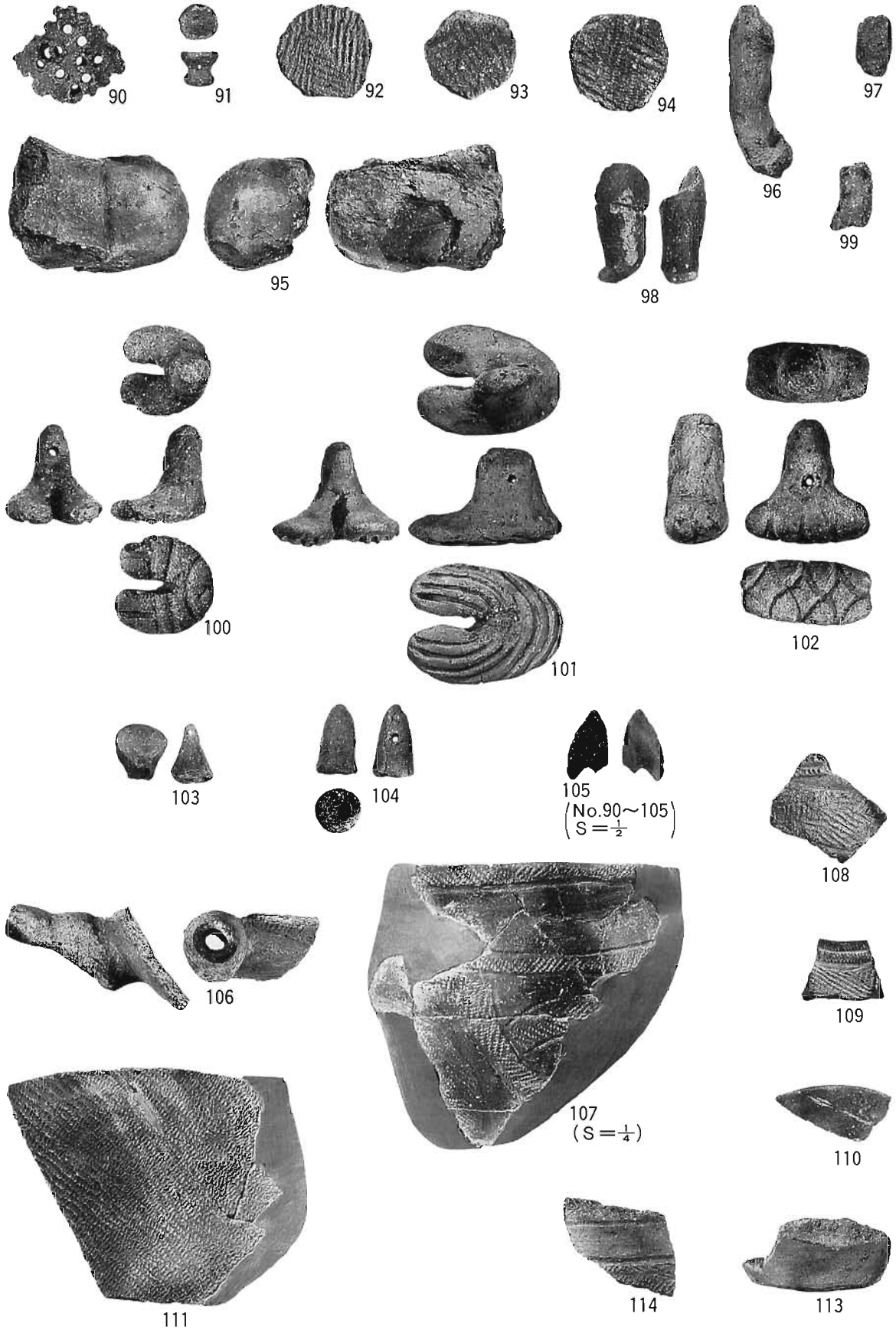
写真図版53　遺構内出土遺物（2）



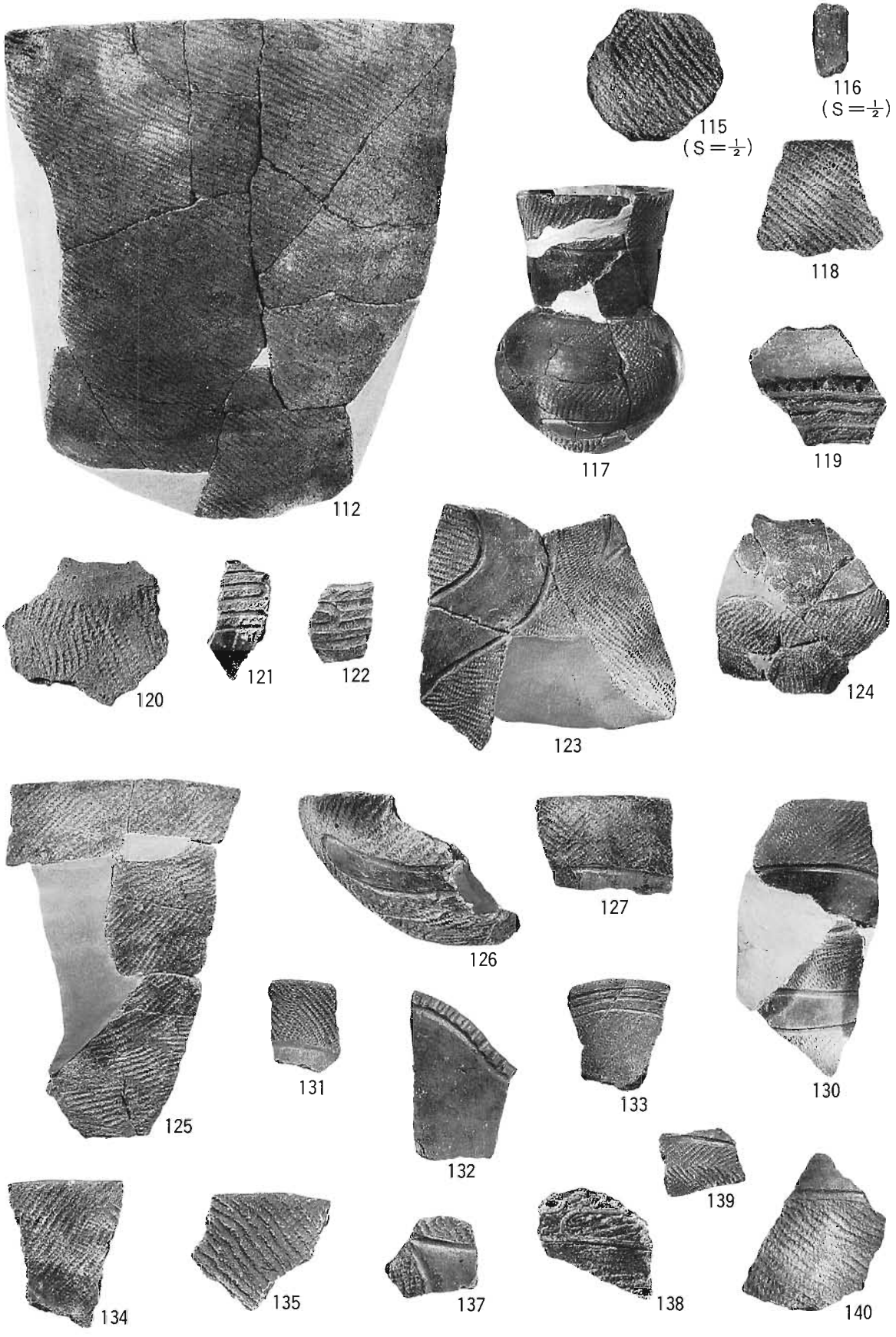
写真図版54　遺構内出土遺物（３）



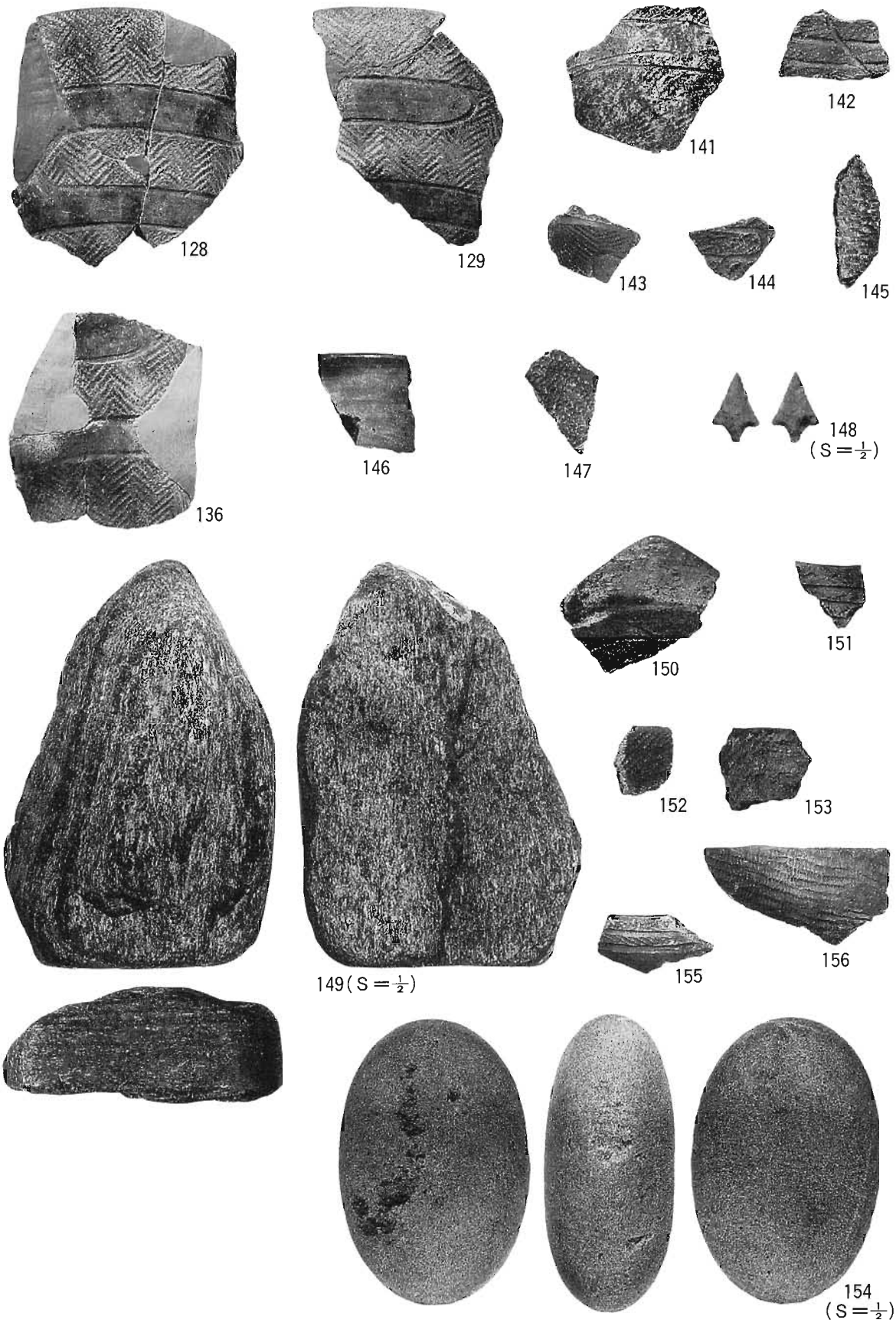
写真図版55　遺構内出土遺物（４）



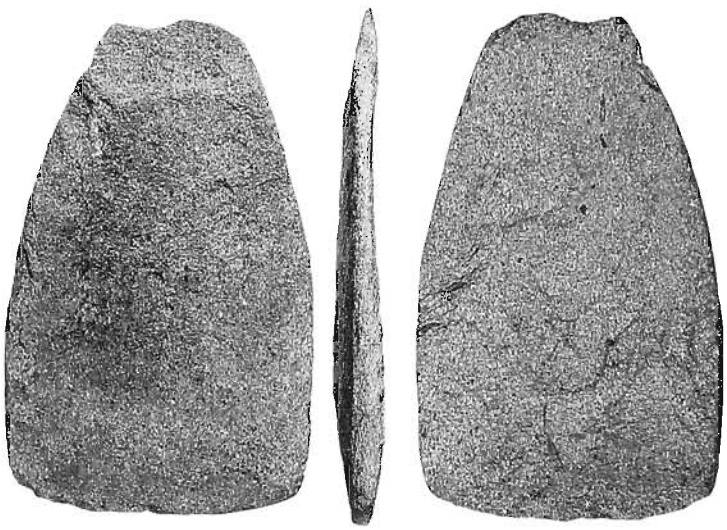
写真図版56　遺構内出土遺物（５）



写真図版57　遺構内出土遺物（6）

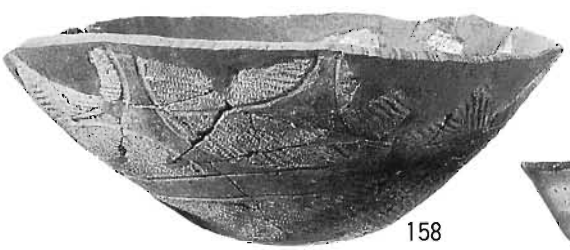


写真図版58　遺構内出土遺物（7）



157(S＝$\frac{1}{2}$)

159



158

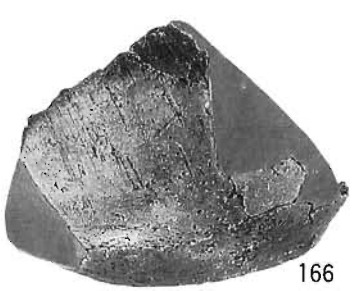
162

163

160

161

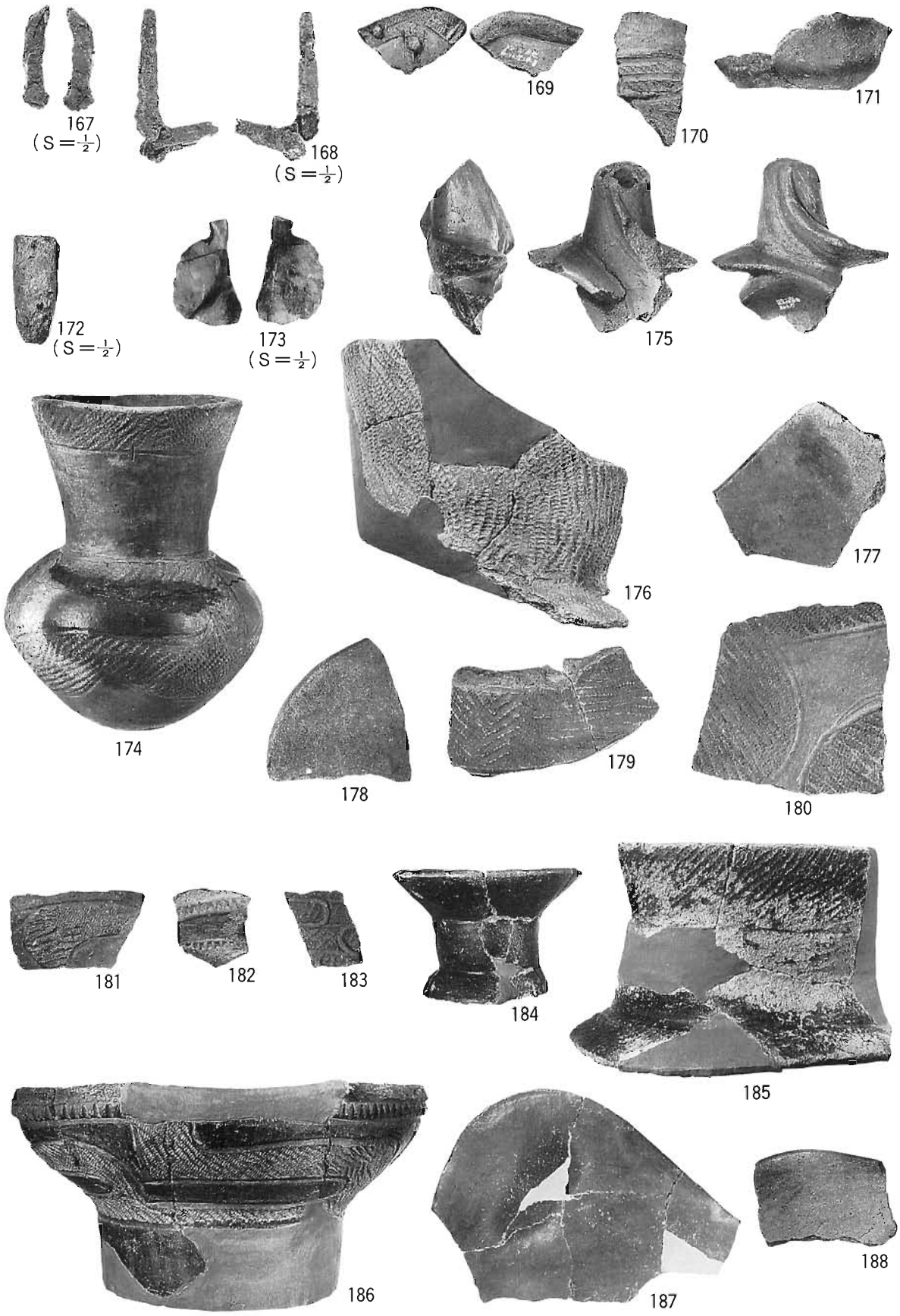
164



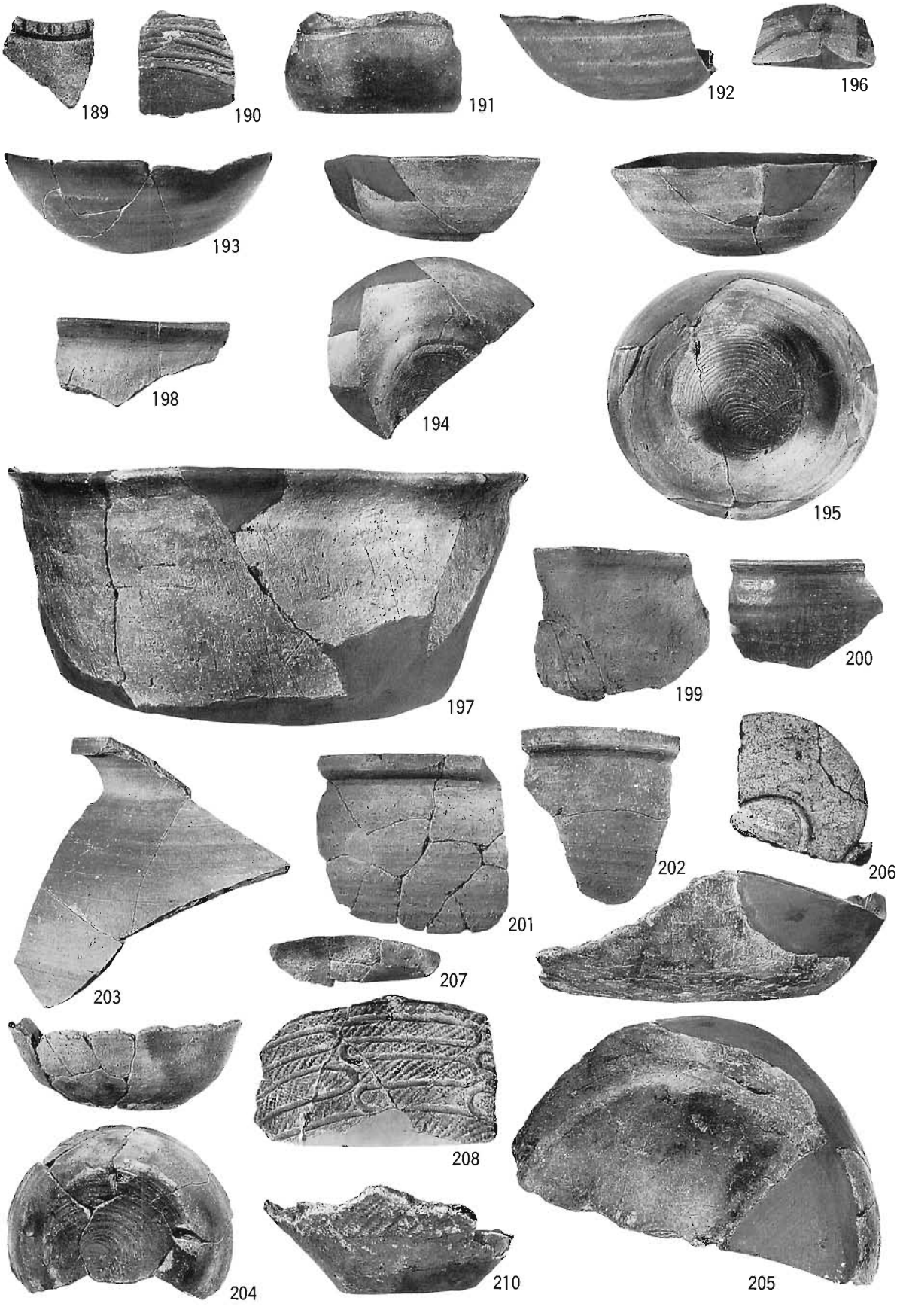
166

165

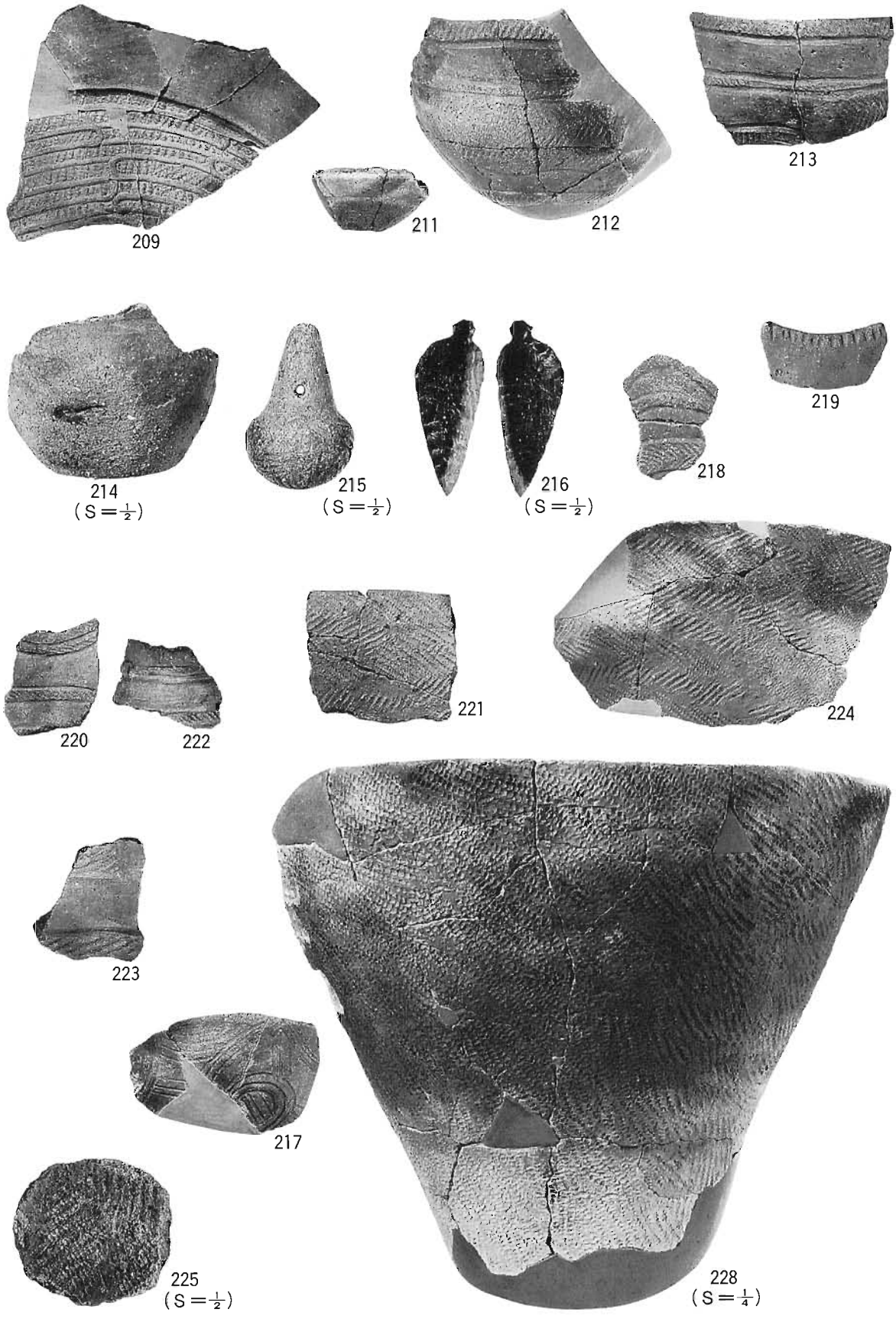
写真図版59　遺構内出土遺物（8）



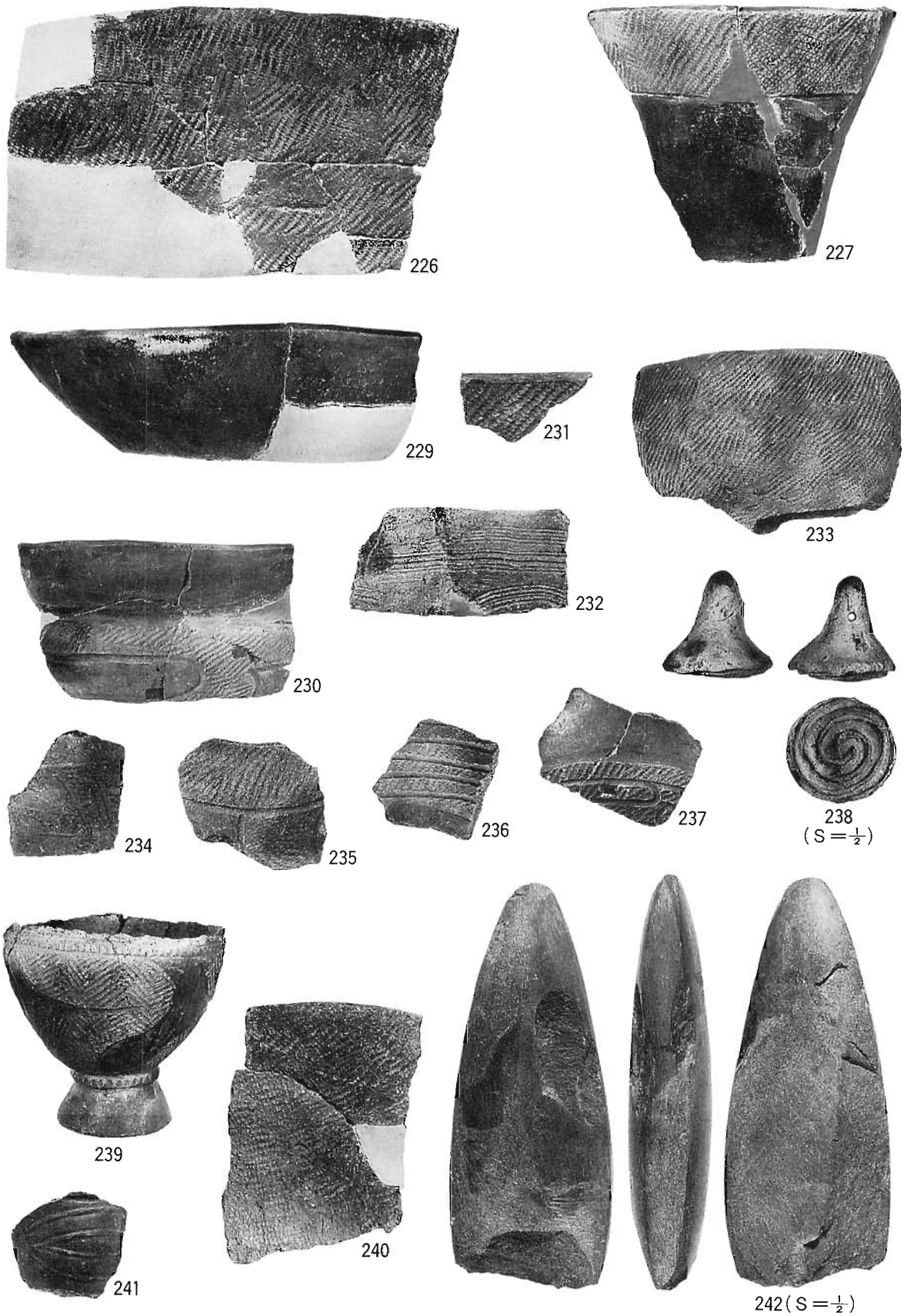
写真図版60　遺構内出土遺物（9）



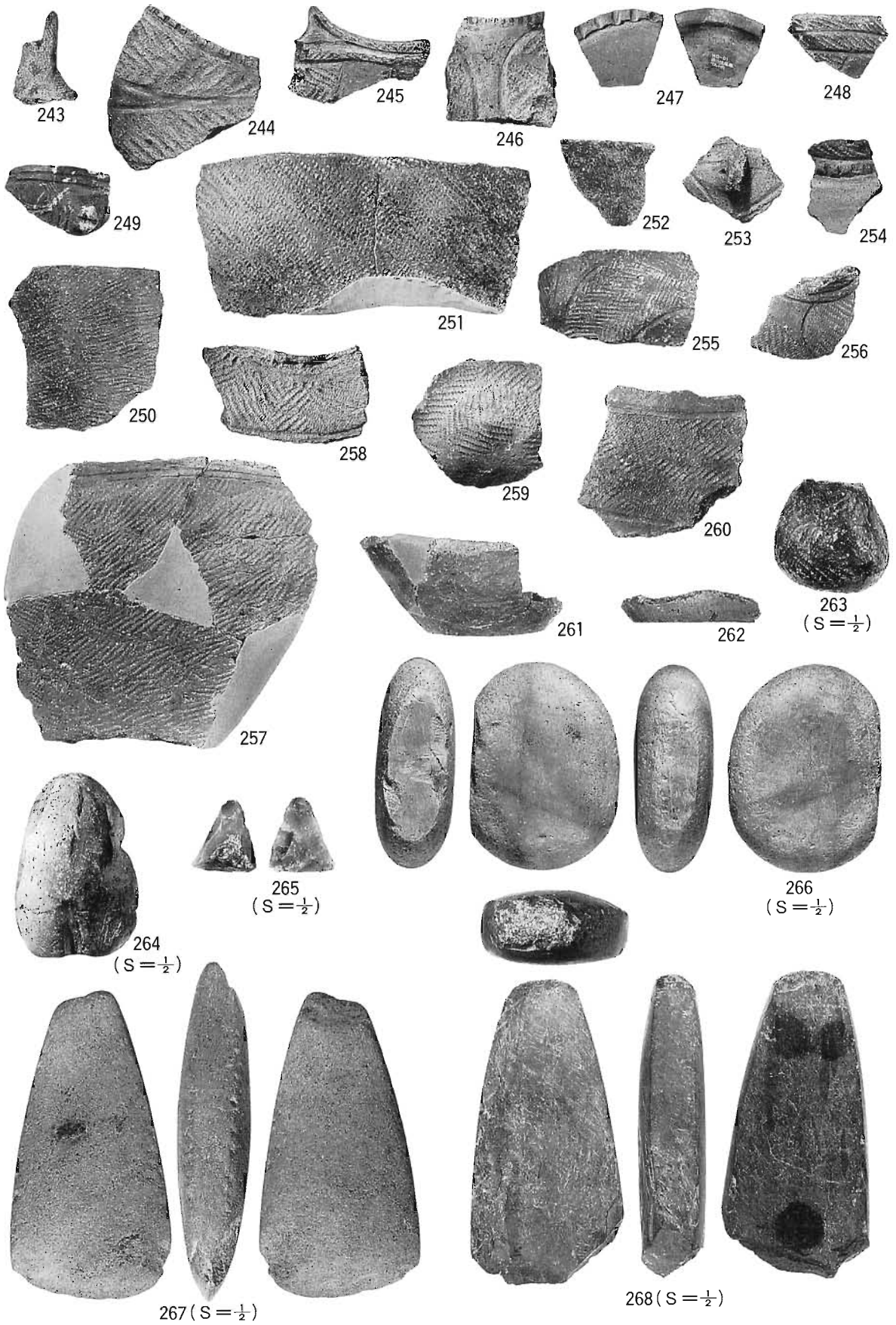
写真図版61　遺構内出土遺物（10）



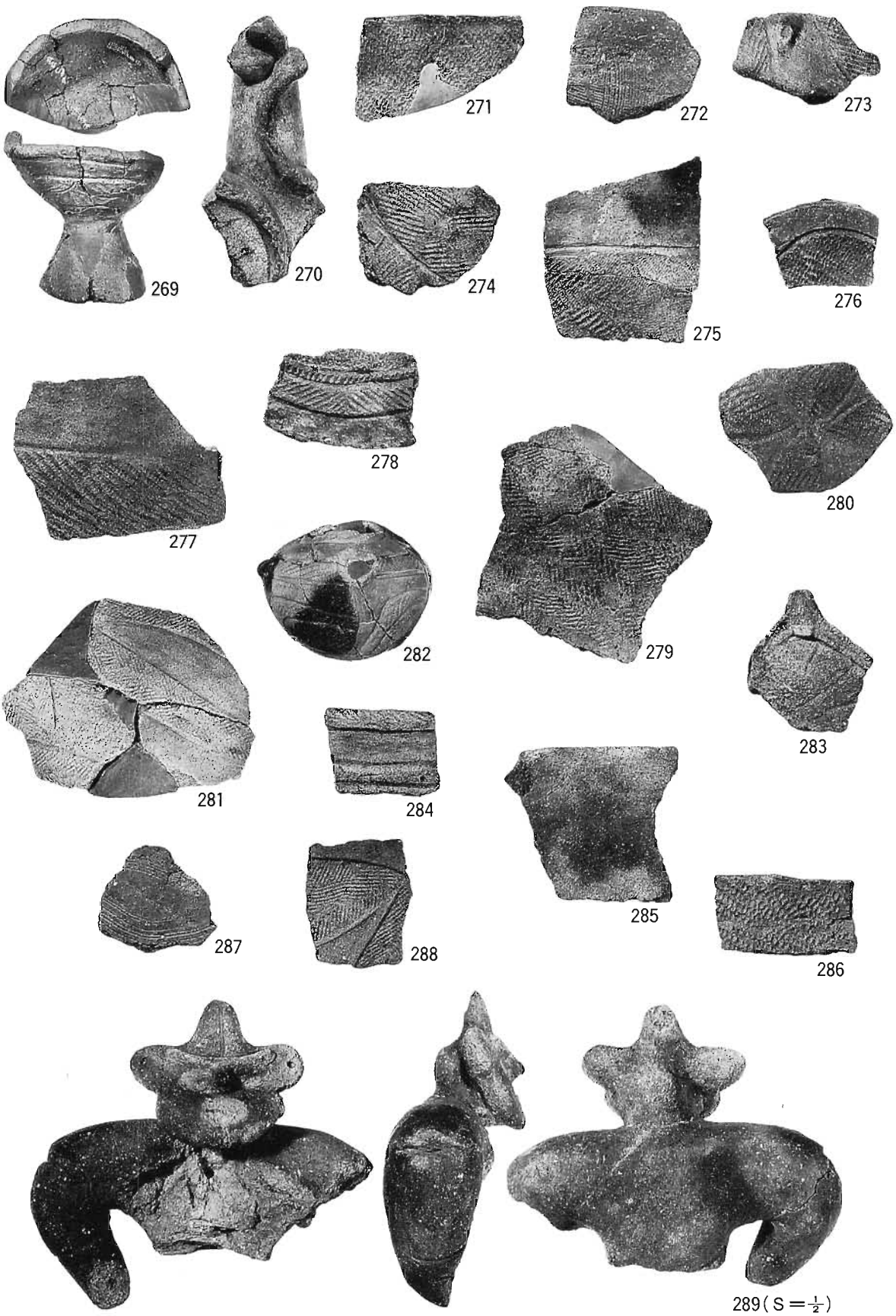
写真図版62　遺構内出土遺物（11）



写真図版63　遺構内出土遺物（12）

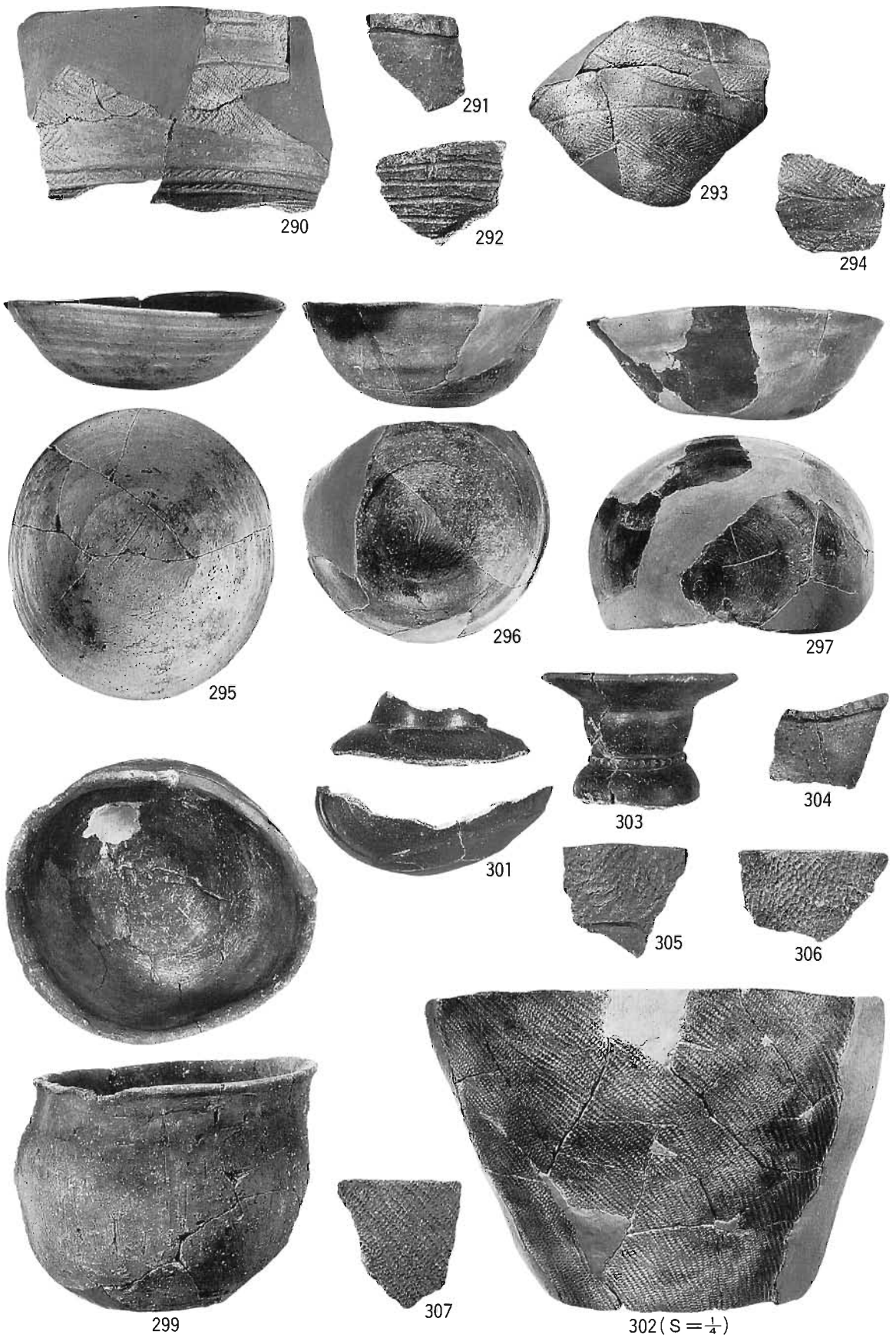


写真図版64　遺構内出土遺物（13）

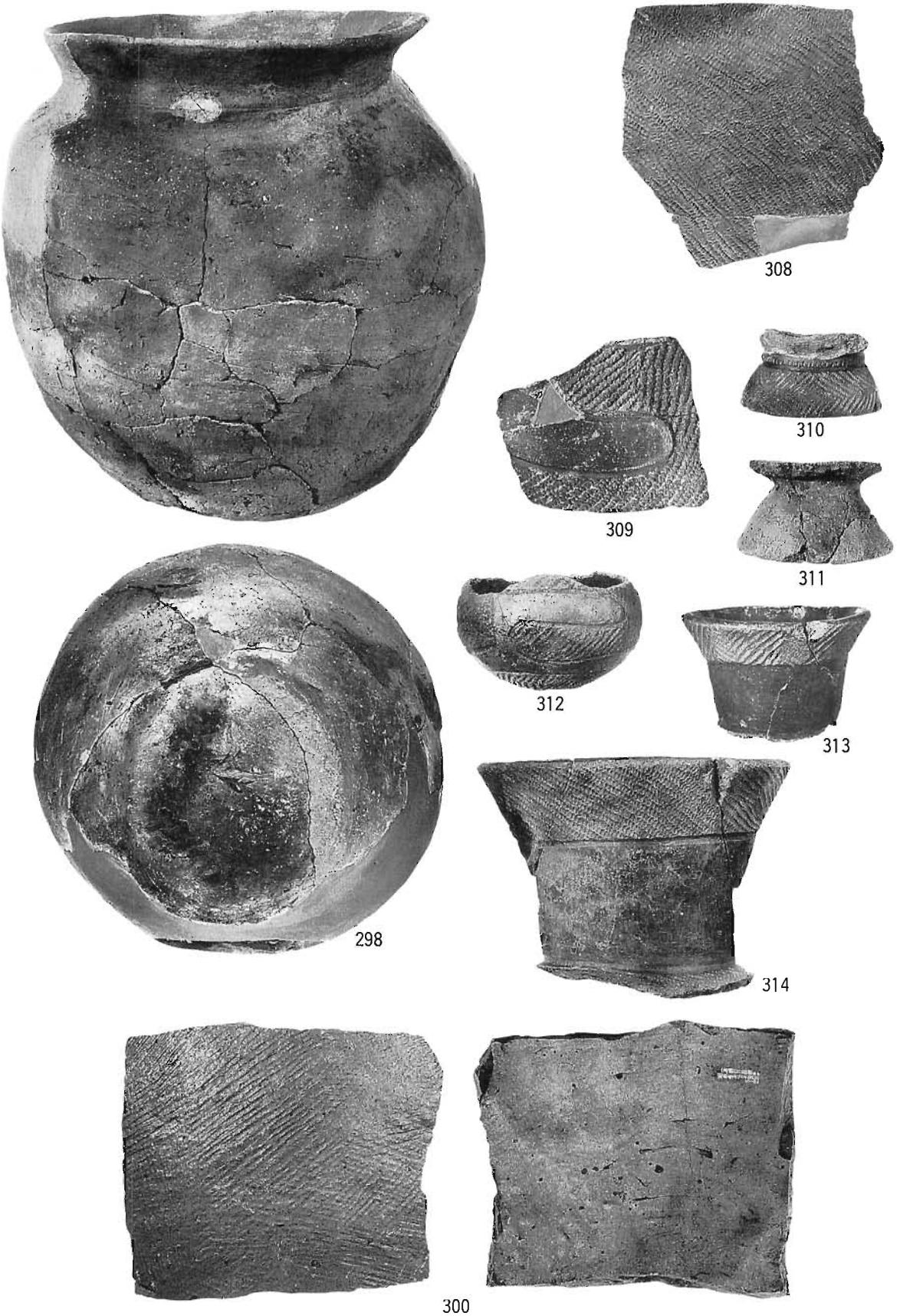


写真図版65　遺構内出土遺物（14）

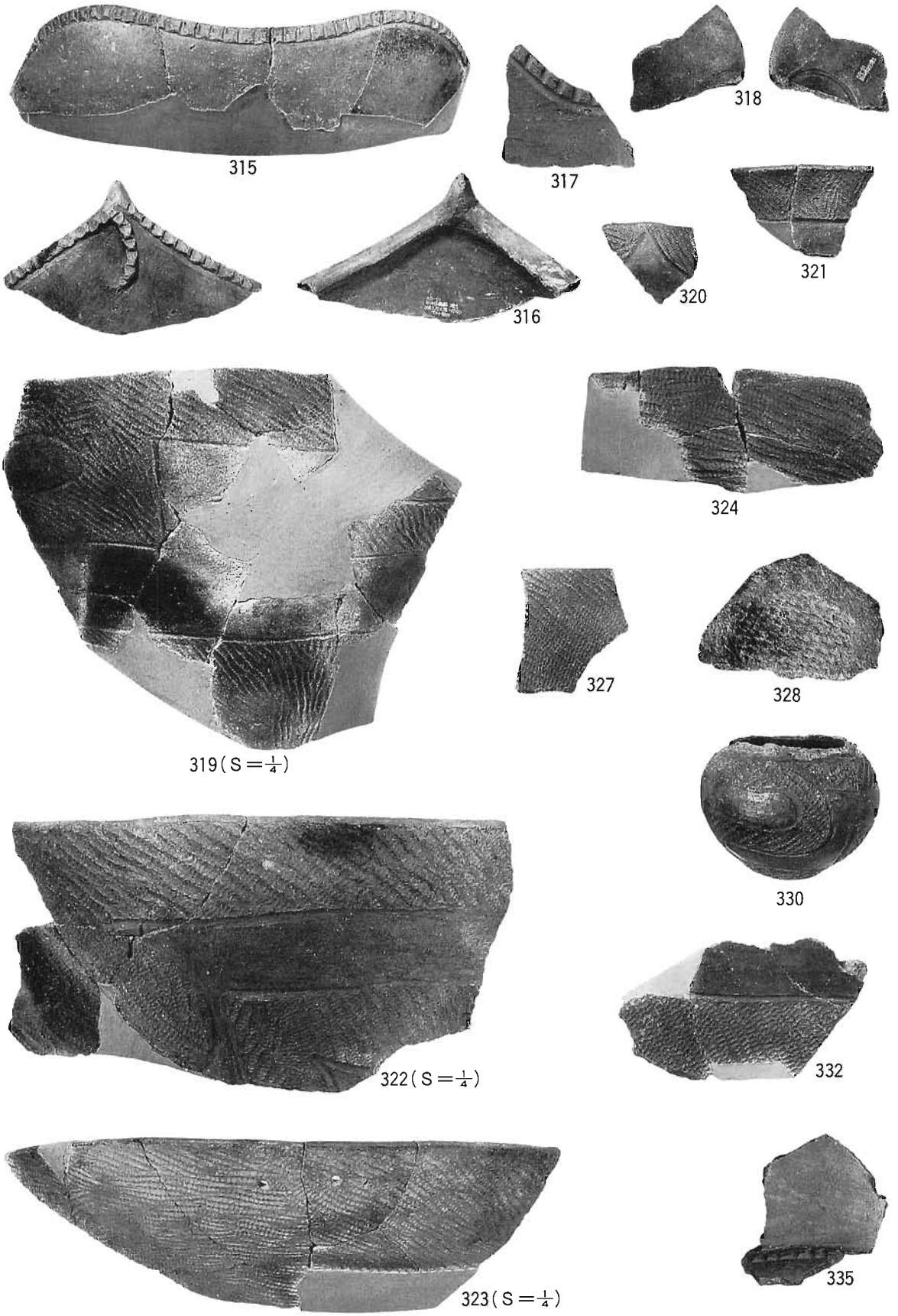
(S＝$\frac{1}{4}$)



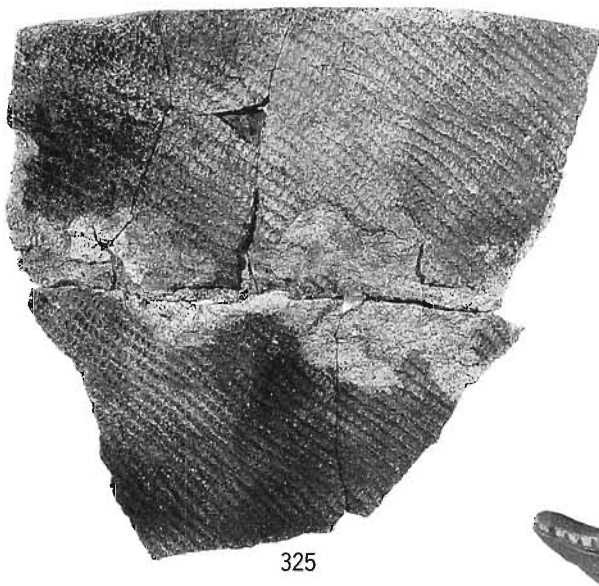
写真図版66　遺構内出土遺物（15）



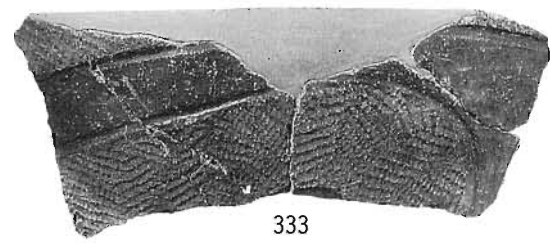
写真図版67　遺構内出土遺物（16）



写真図版68　遺構内出土遺物（17）

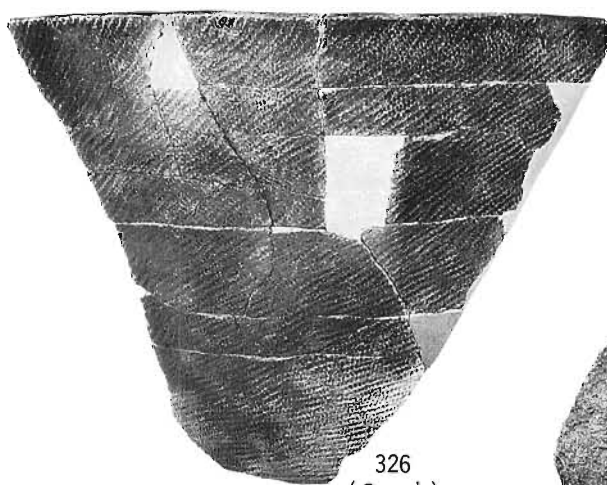


325

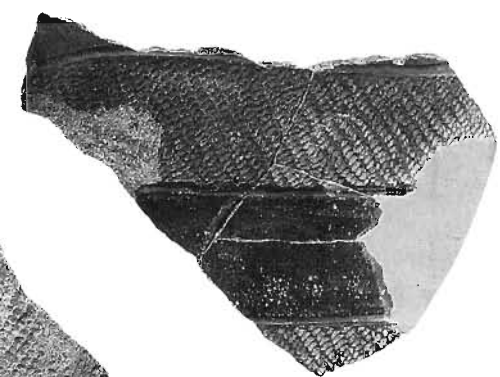


333

329



326
(S＝$\frac{1}{4}$)



334

336

331

337

写真図版69　遺構内出土遺物（18）

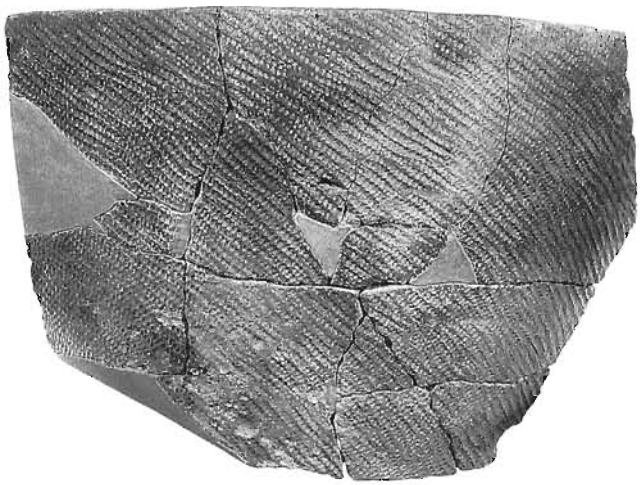
338

339

340

341

342


343

344

写真図版70　遺構内出土遺物（19）

346

347

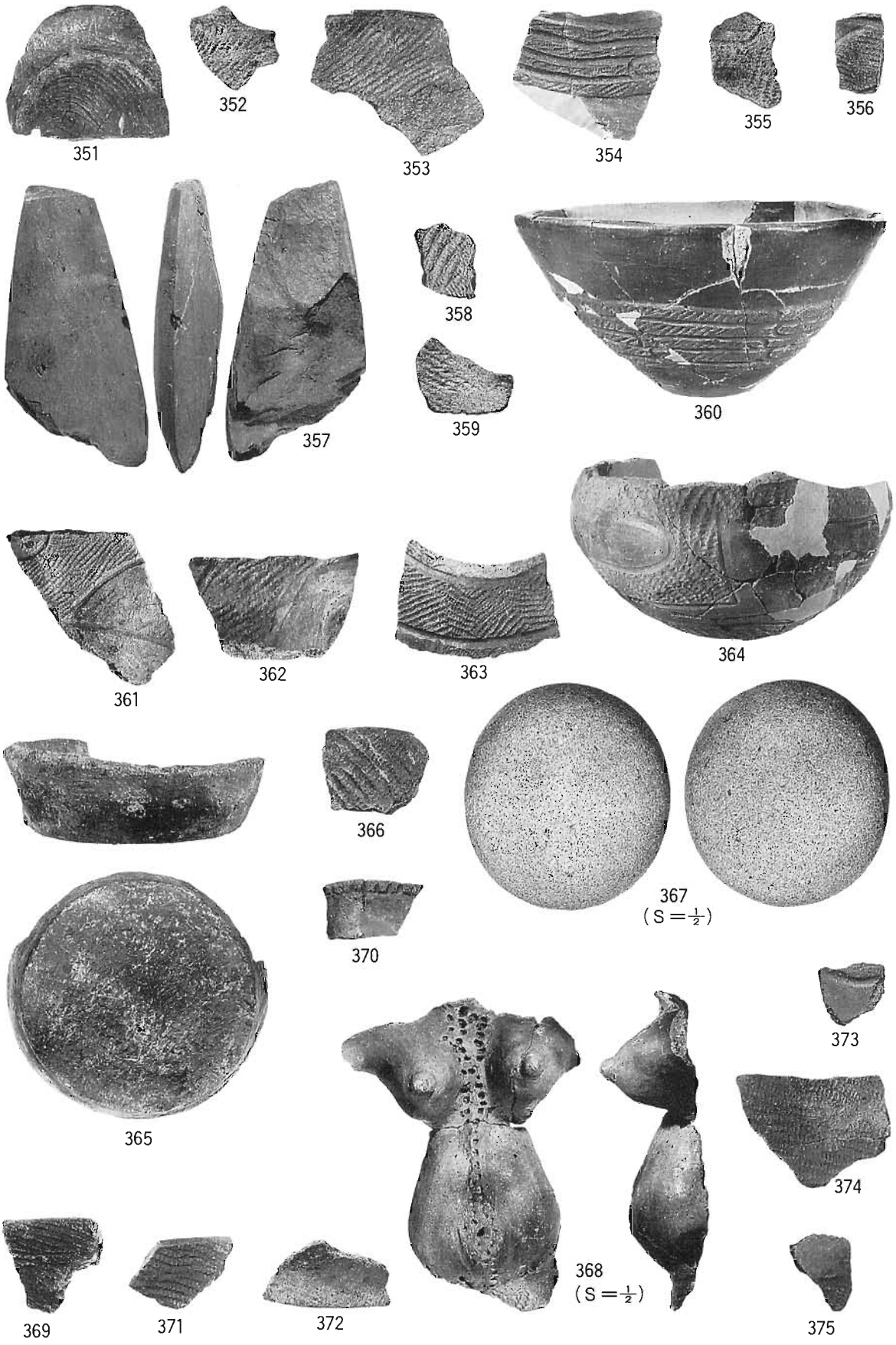
345

348

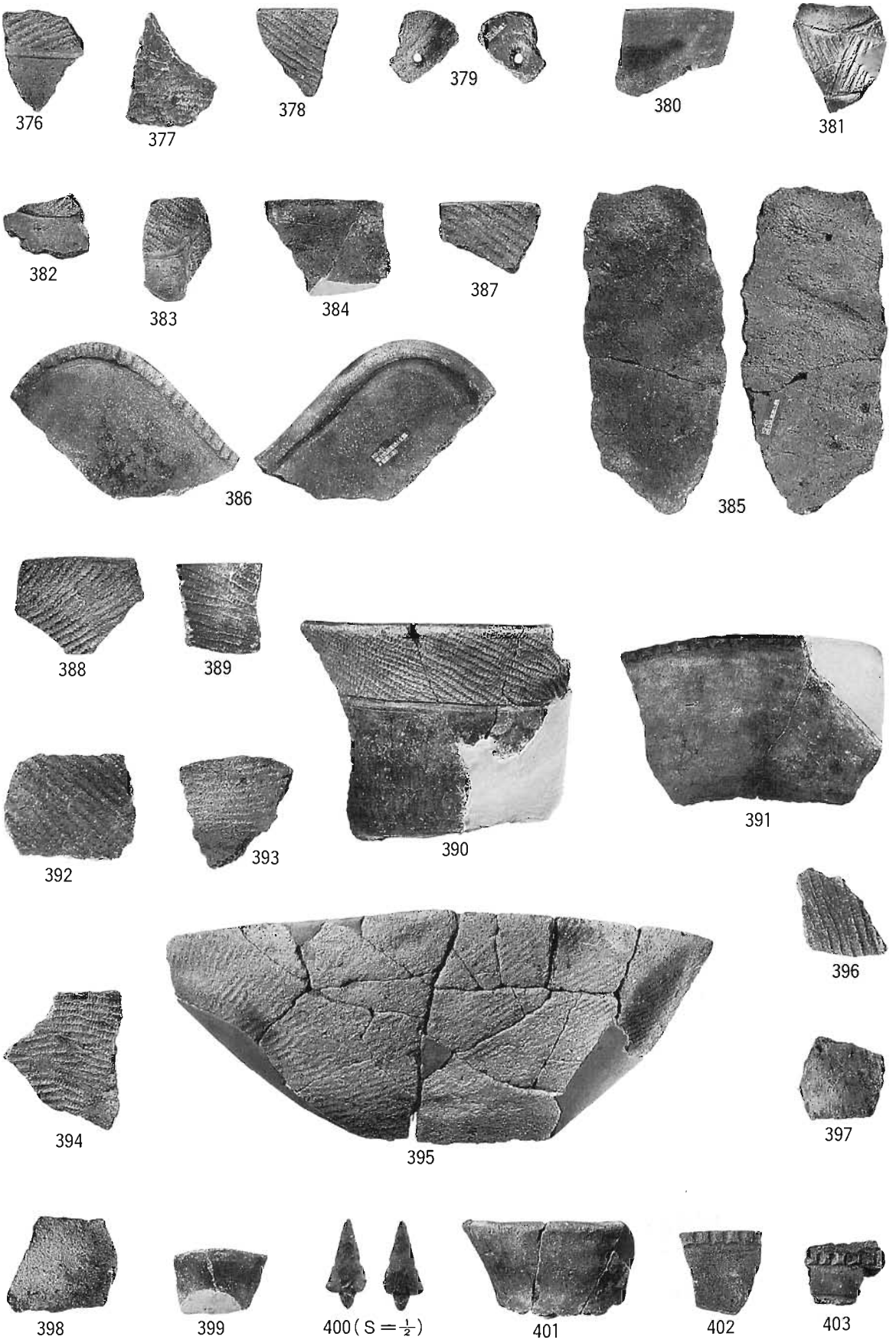
349

350

写真図版71　遺構内出土遺物（20）



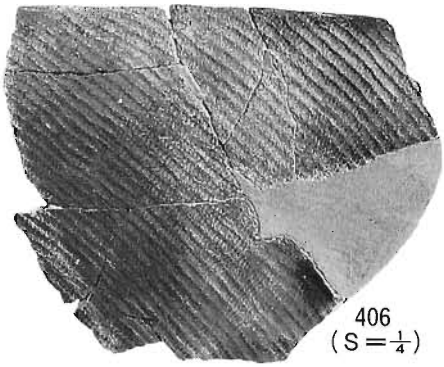
写真図版72　遺構内出土遺物（21）



写真図版73　遺構内出土遺物（22）

404

405



406
(S＝$\frac{1}{4}$)

407(S＝$\frac{1}{4}$)

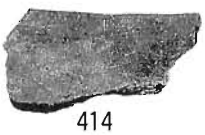
408

409

410

411

413



414

415

416

412(S＝$\frac{1}{4}$)

417

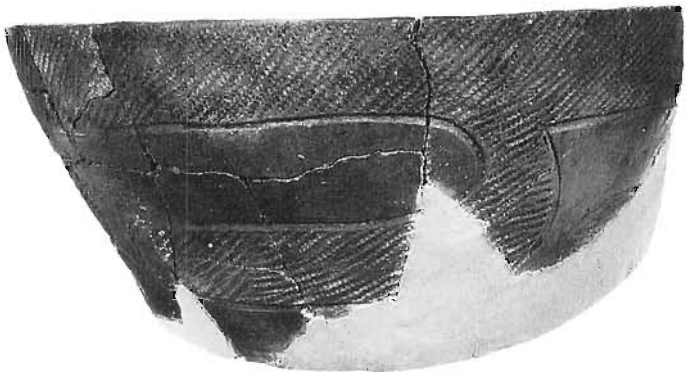
418

419

422

420

写真図版74　遺構内出土遺物（23）



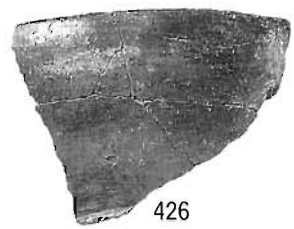
421

425

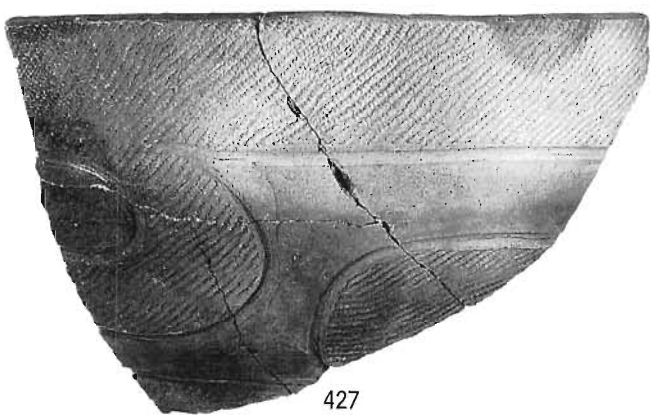
423（S＝$\frac{1}{2}$）

429（S＝$\frac{1}{2}$）

424（S＝$\frac{1}{2}$）



426

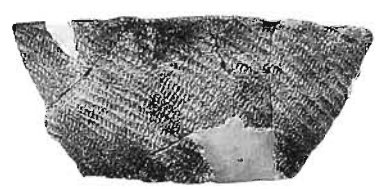


427

428

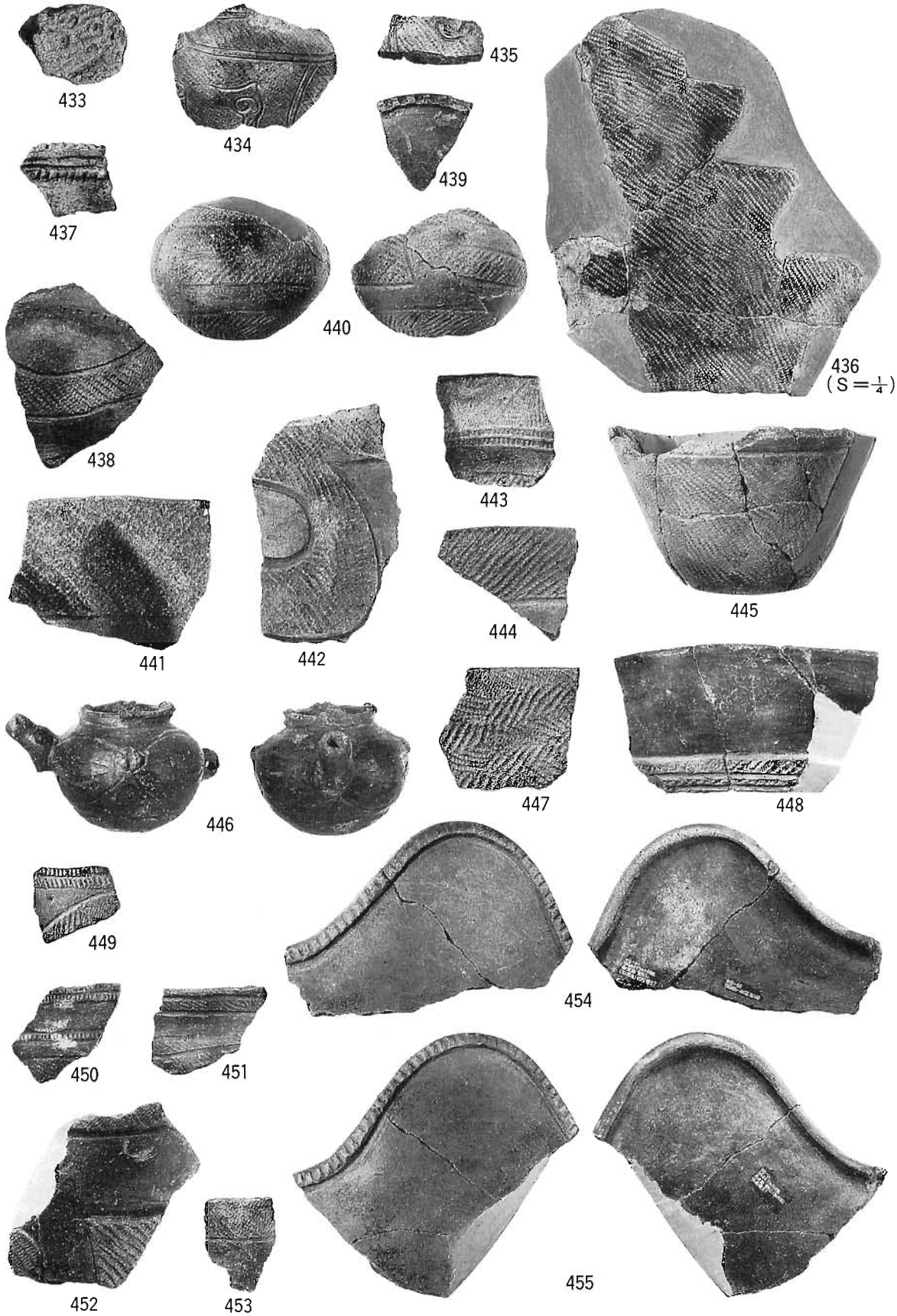
430

431

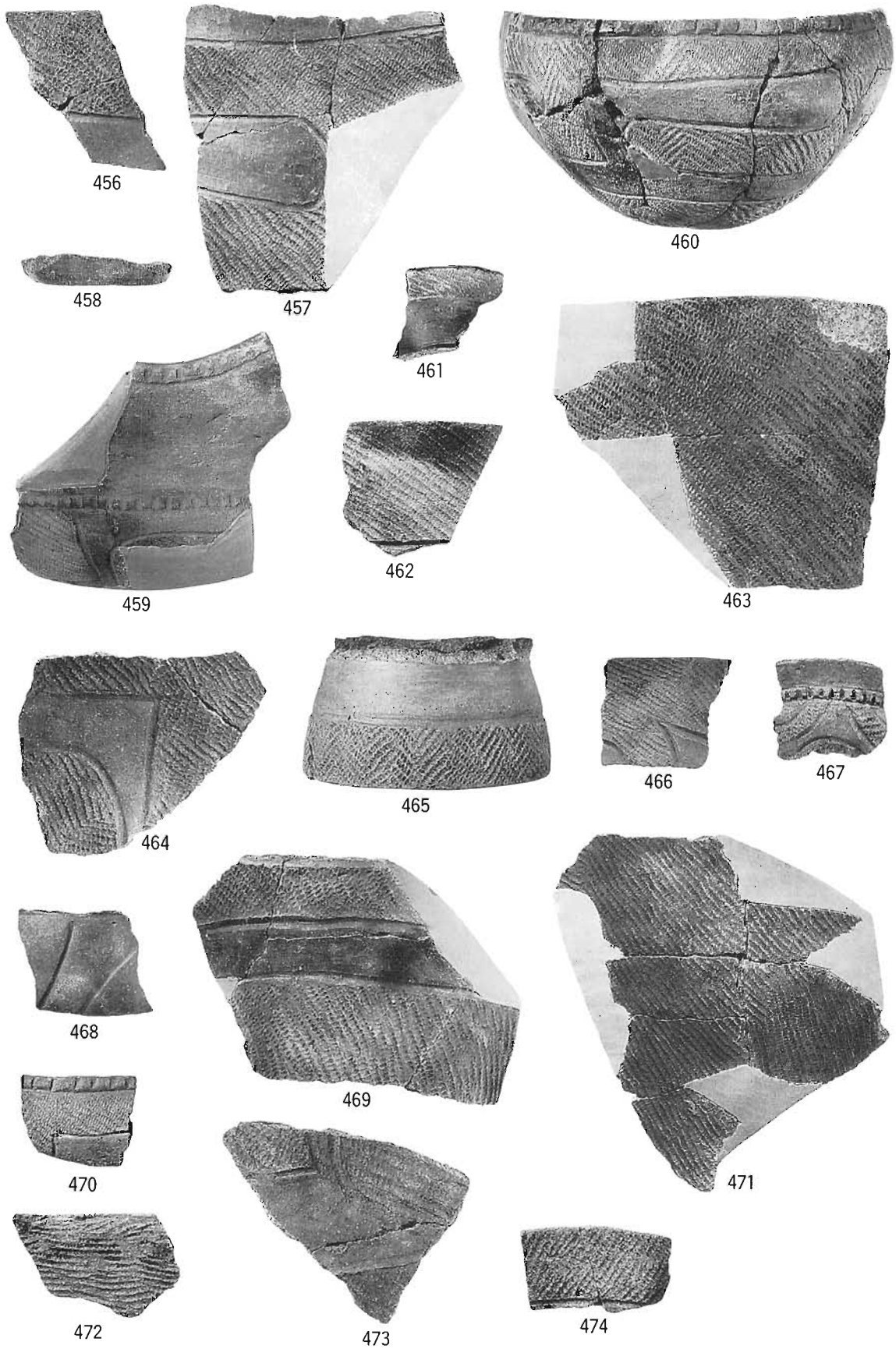


432

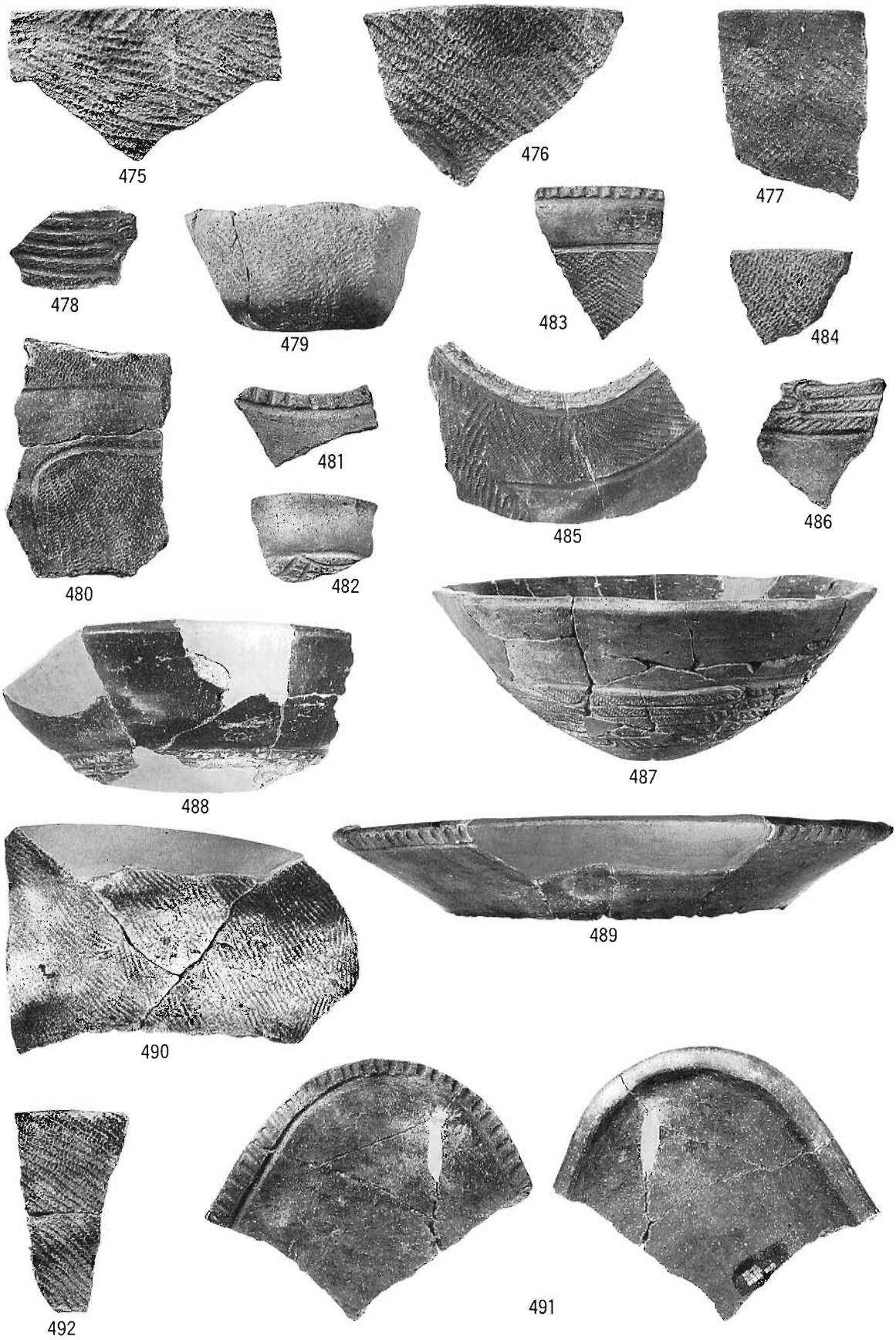
写真図版75　遺構内出土遺物（24）



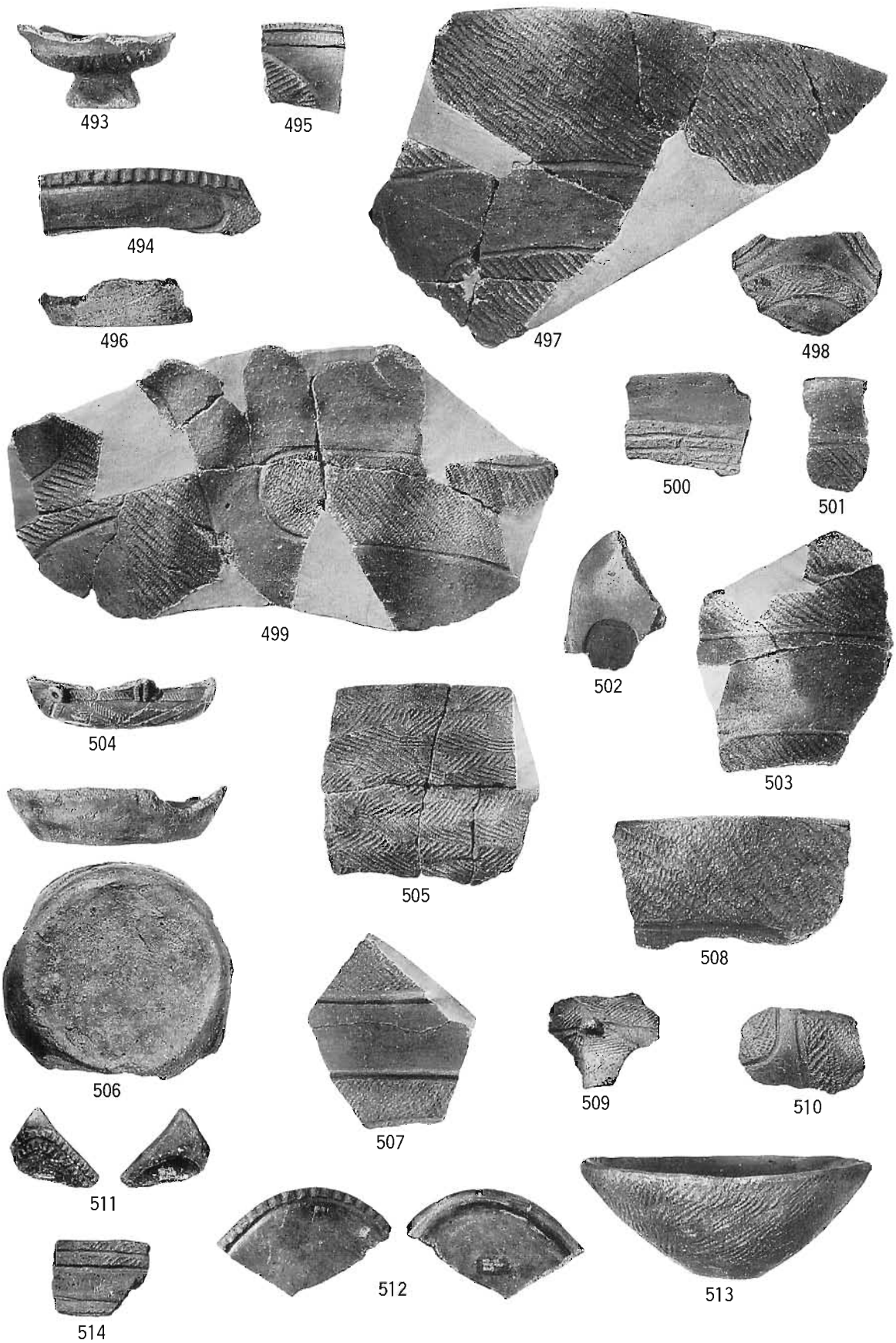
写真図版76　遺構外出土遺物（1）



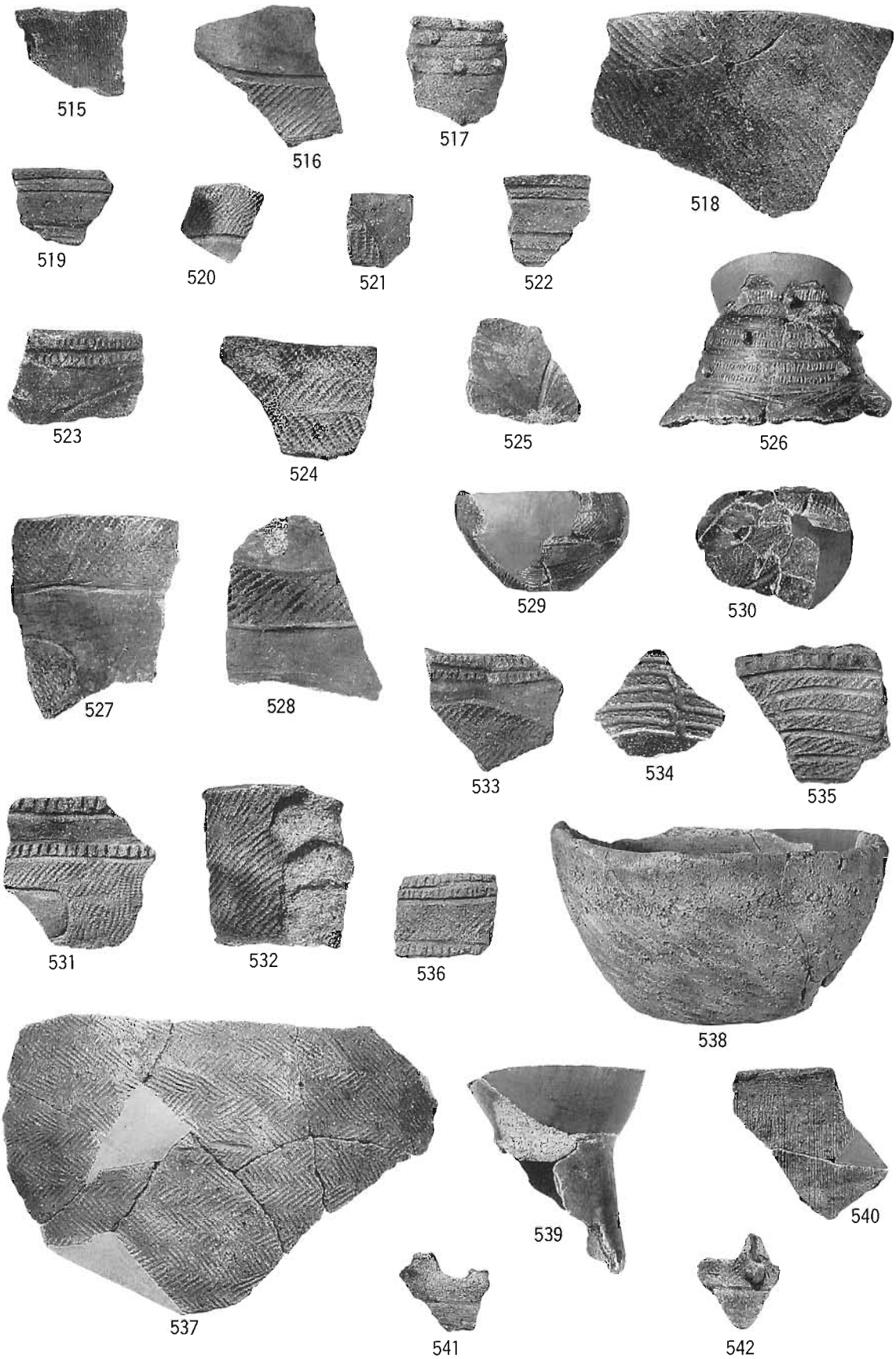
写真図版77　遺構外出土遺物（２）



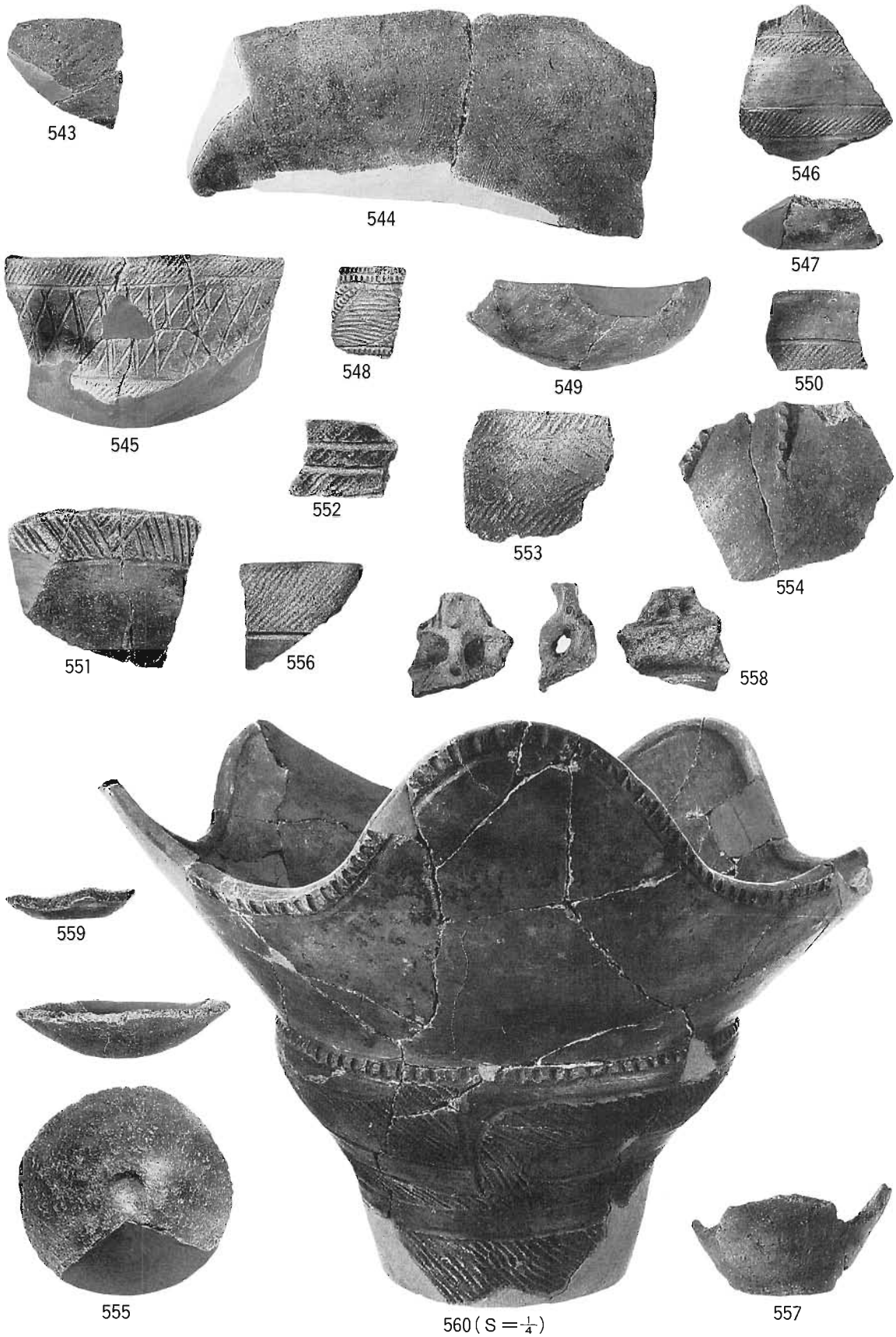
写真図版78　遺構外出土遺物（３）



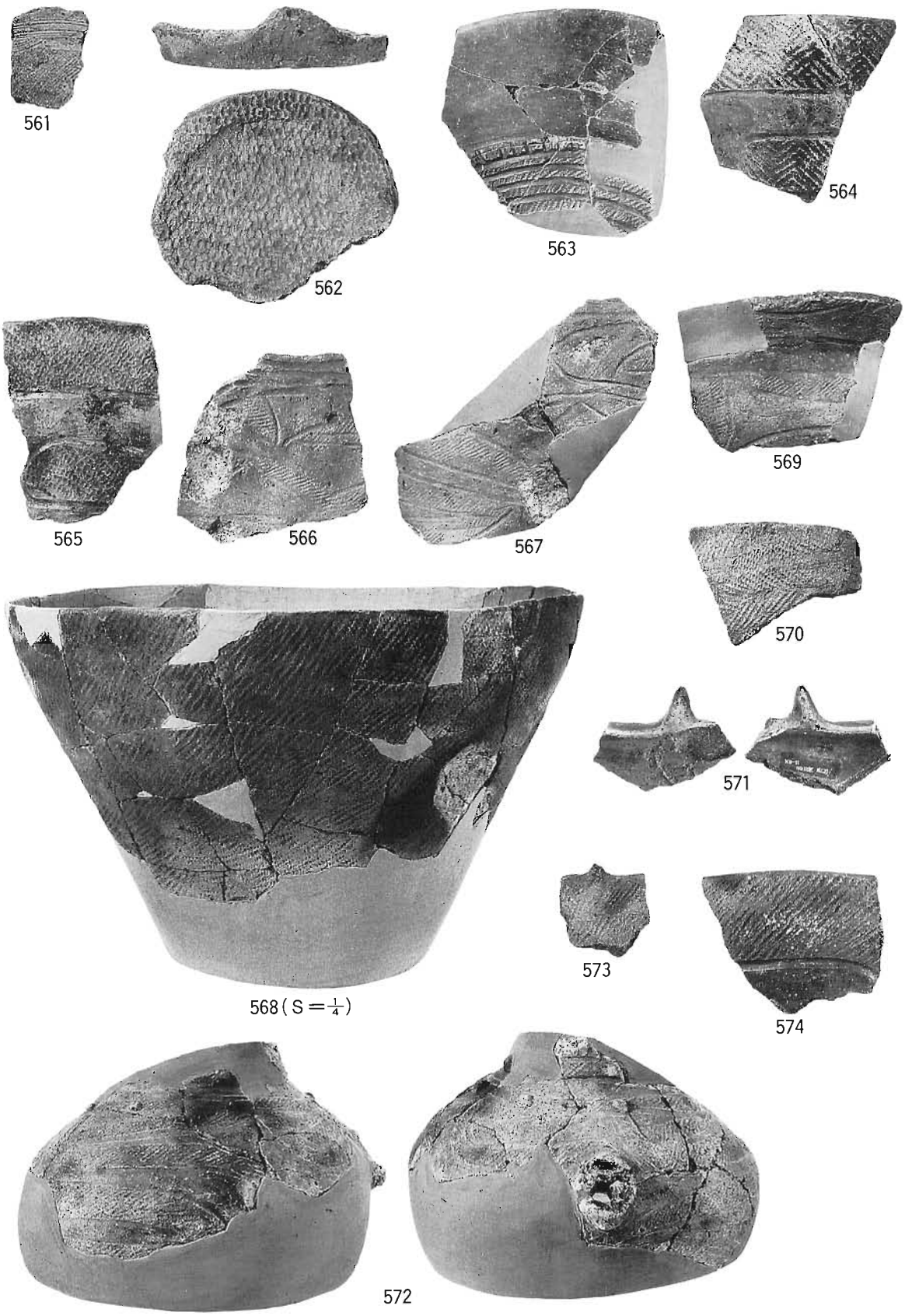
写真図版79　遺構外出土遺物（４）



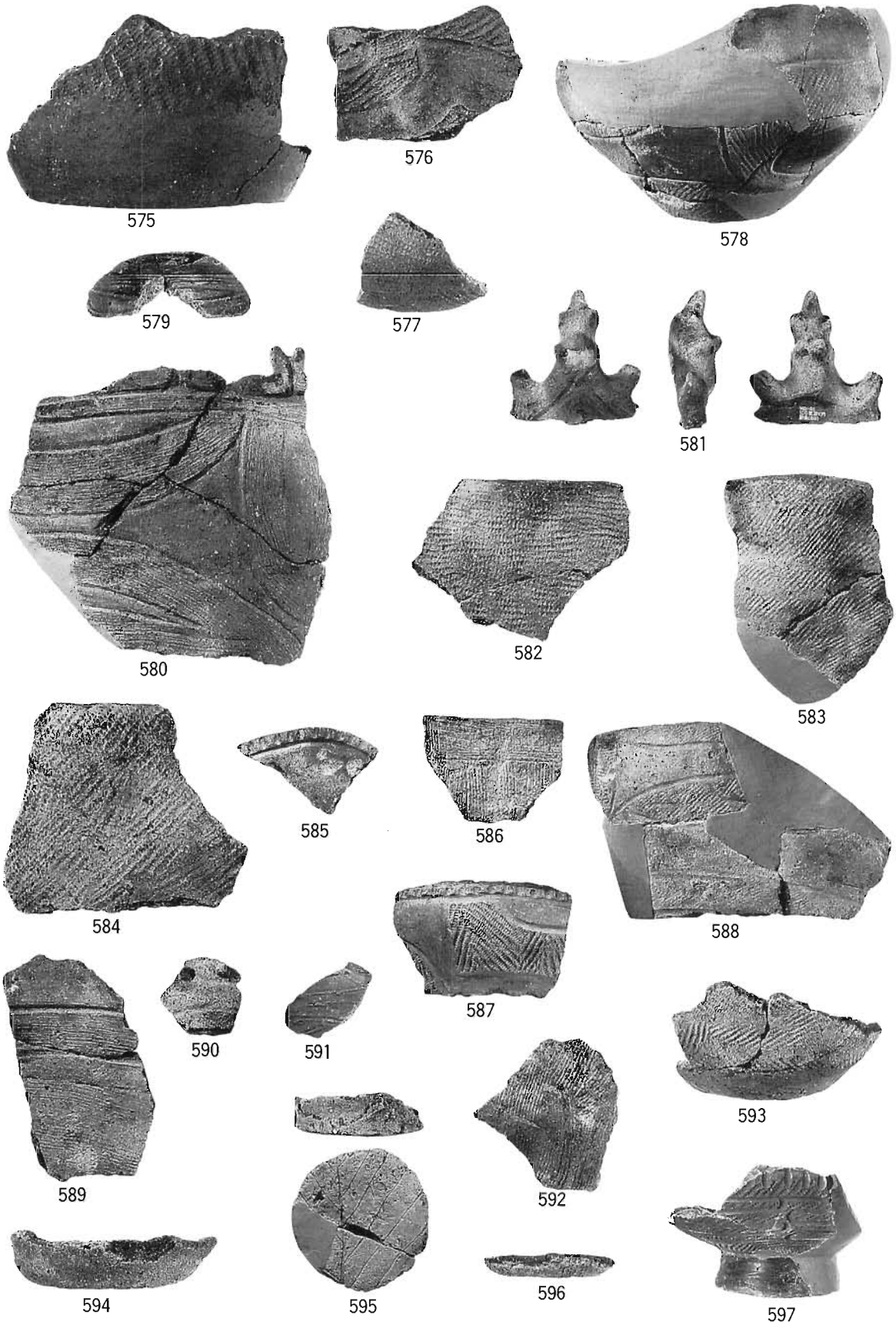
写真図版80　遺構外出土遺物（５）



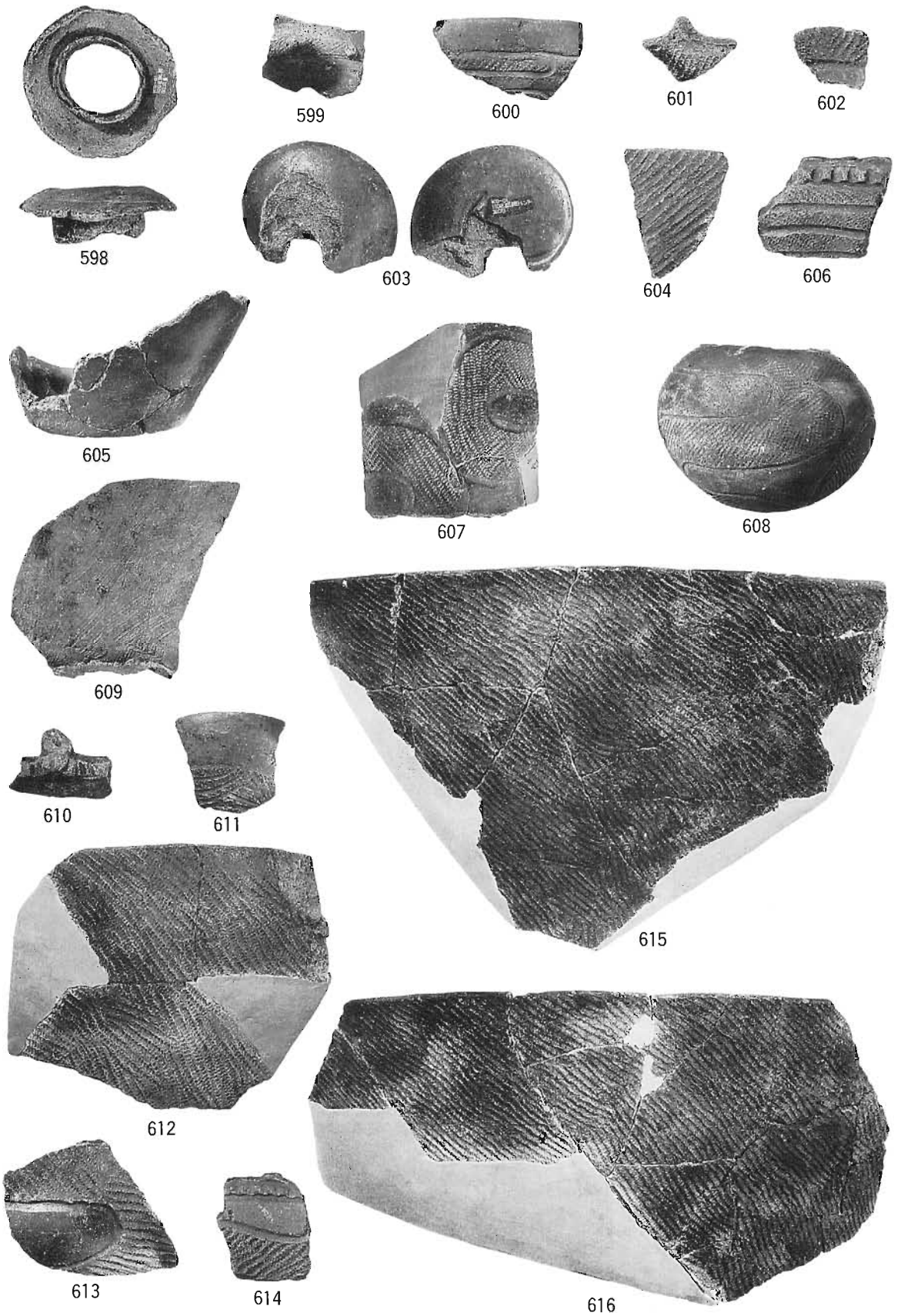
写真図版81　遺構外出土遺物（6）



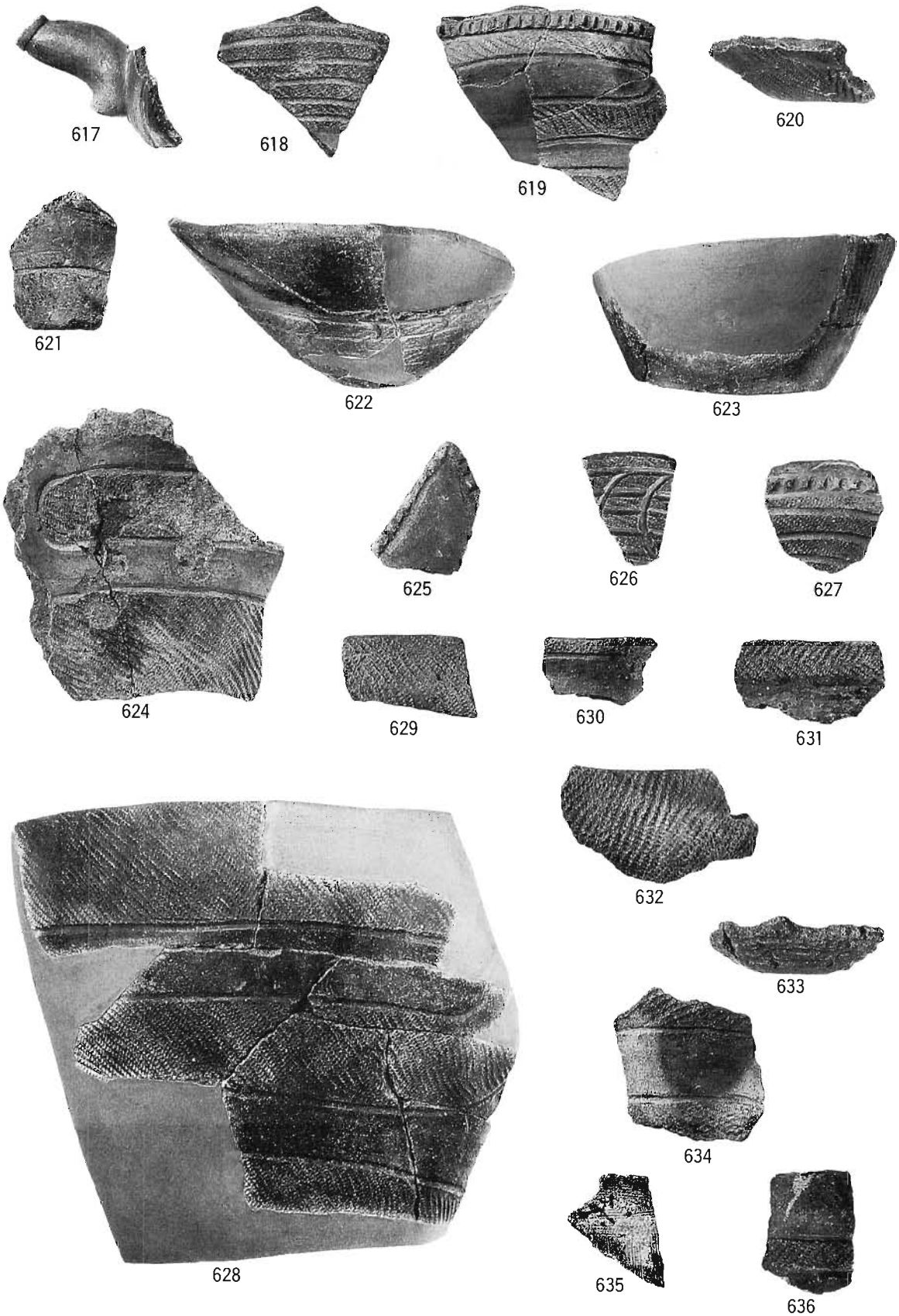
写真図版82　遺構外出土遺物（７）



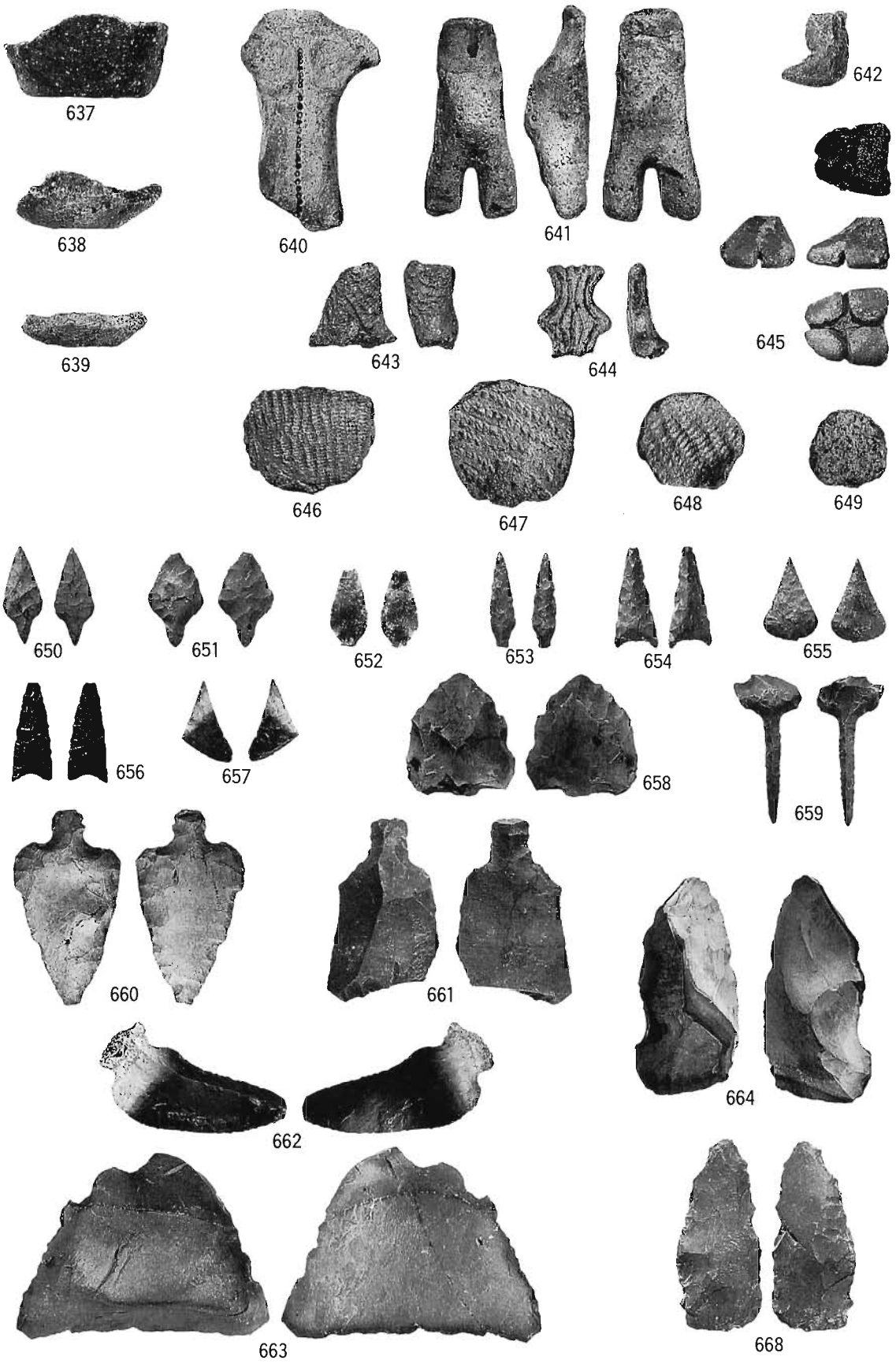
写真図版83　遺構外出土遺物（８）



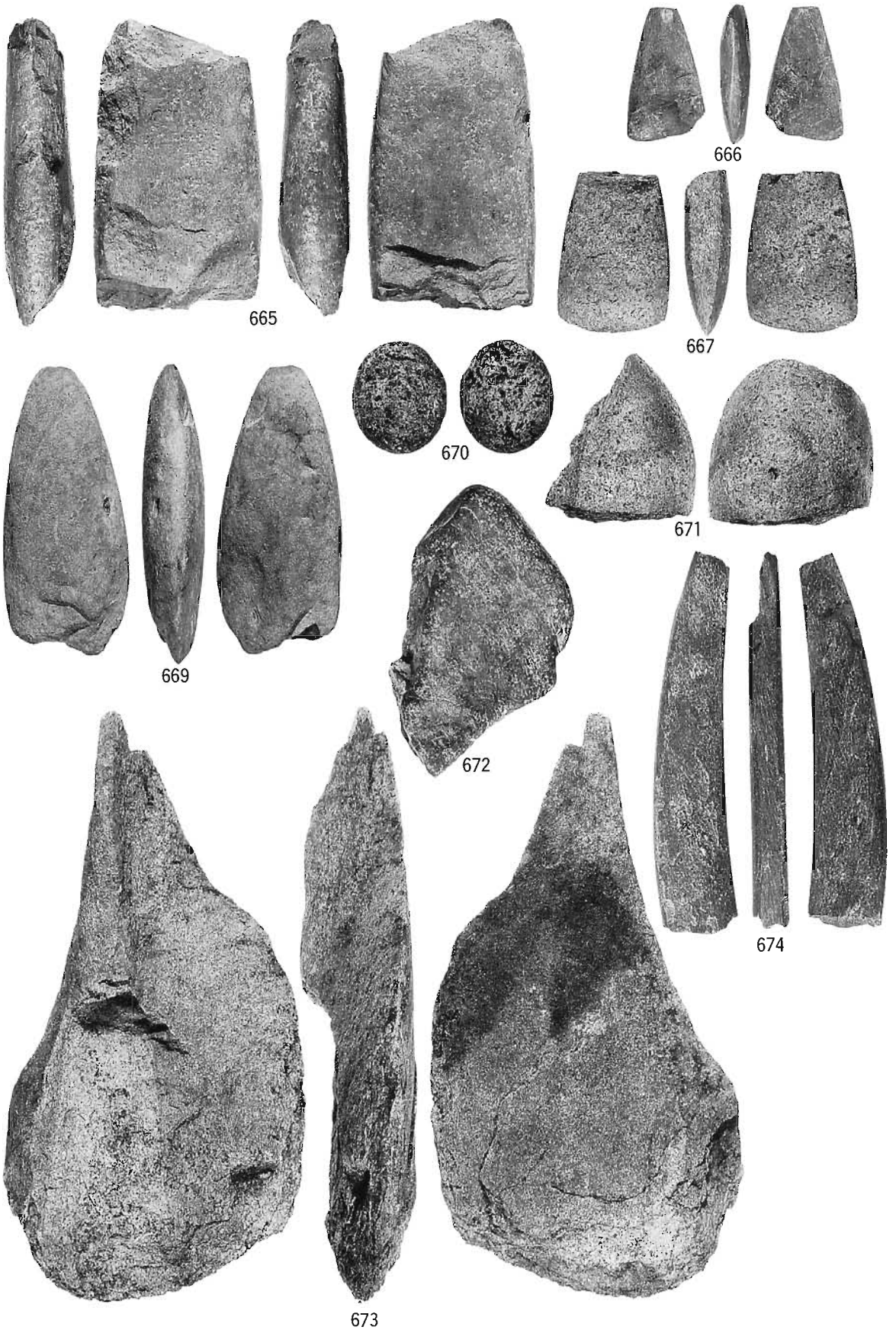
写真図版84　遺構外出土遺物（９）



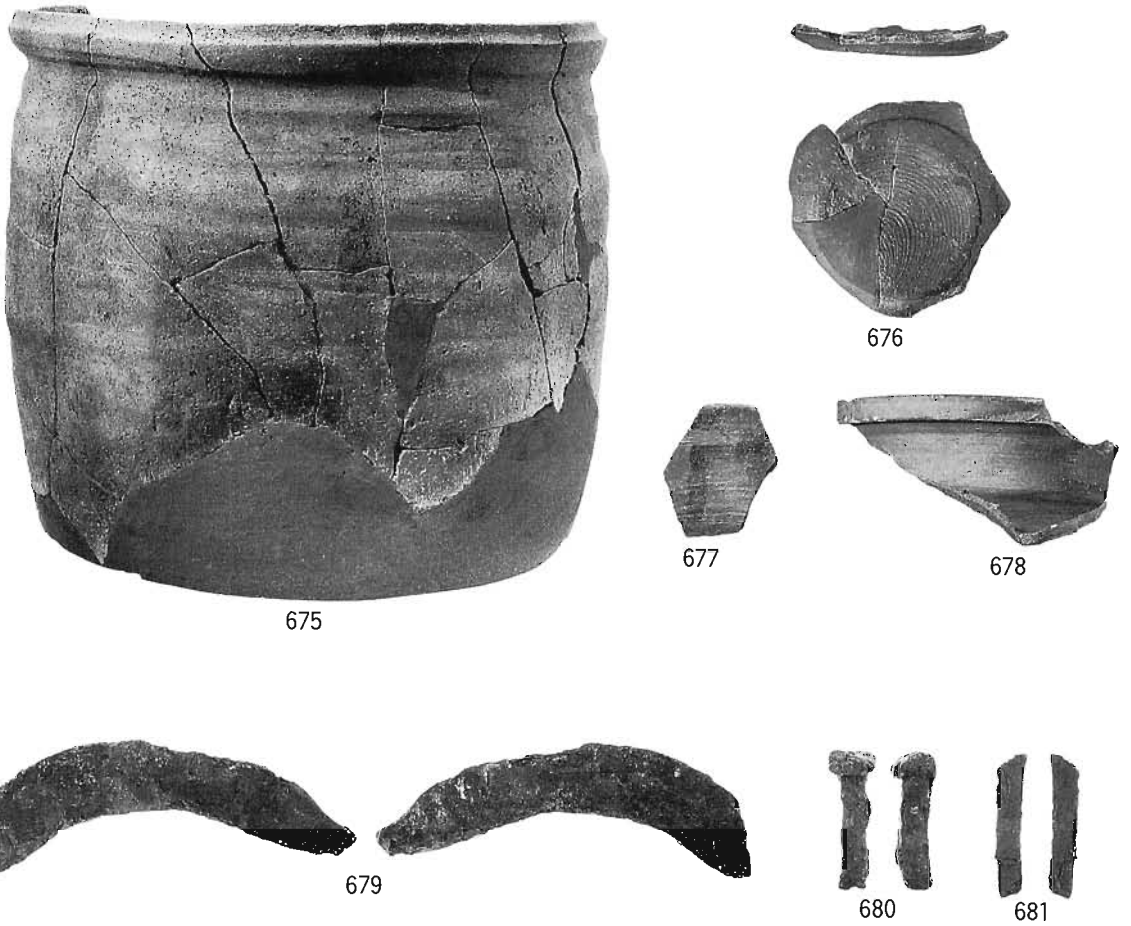
写真図版85　遺構外出土遺物（10）



写真図版86　遺構外出土遺物（11）



写真図版87　遺構外出土遺物（12）



写真図版88　遺構外出土遺物（13）

報告書抄録

ふりがな	きゅうでんいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	久田遺跡発掘調査報告書
副書名	土地改良総合基盤整備事業伊手西部地区関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第406集
編著者名	千葉正彦・菊池賢
編集機関	財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　TEL019－638－9001・9002
発刊年月日	平成15年 3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
久田遺跡（きゅうでんいせき）	岩手県江刺市伊手字沢田23番地ほか（いわてけんえさししいであざさわだばんちほか）	03212	ＮＥ09－1329	39度10分30秒	141度17分37秒	20010608～20011205	3,000㎡ 本調査 2,000㎡ 範囲確認調査 1,000㎡	圃場整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久田遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　21棟 住居跡状遺構　3棟 掘立柱建物跡　4棟 土坑　44基 配石遺構　3基 柱穴状土坑群	縄文土器（後期前葉～後葉；主体は中葉） 土製品 石器 石製品	県南部では検出事例の少ない後期中葉期の集落跡。竪穴住居多数および祭祀関連施設と推測される掘立柱建物、配石遺構、土坑群（土坑墓を含む）が検出された。
		平安時代	竪穴住居跡　4棟	土師器 須恵器 金属製品	北上山地の山稜部における10世紀初頭の小規模集落跡。
	散布地	近世		金属製品（古銭）	残丘頂部の陣場館跡（時期不明の城館跡）との関連は不明。
		時期不明	柱穴状土坑群		縄文時代に属する可能性あり。

平成14年度（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

【職　　員】

所　　長	木村　　昇
副所長	高橋正儀

〔管　理　課〕

課　　長	韮沢正吾
課長補佐	山崎善光
〃	山岸直美
主　　査	中嶋賢一
嘱　　託	高橋照雄
〃	加藤美代子
〃	湯沢邦子
〃	伊藤滋子

〔調査第一課〕

課　　長	佐々木　勝
課長補佐	佐々木清文
〃	高橋義介
文化財専門員	小山内　透
文化財調査員	吉田　充
〃	亀　大二郎
〃	佐々木信一
〃	早坂　淳
〃	小松則也
〃	金野　進
〃	野中真盛
〃	金子昭彦
〃	阿部孝明
〃	阿部勝則
〃	羽柴直人
〃	高木　晃
〃	長村克稔
〃	星　幸文
〃	杉沢昭太郎
〃	村上　拓
〃	本多準一郎
〃	青山紀和
〃	西澤正晴
〃	村木　敬
〃	福島正和
〃	北村忠昭
〃	八木勝枝
〃	米田　寛
〃	丸山浩治
〃	北田　勲
〃	島原弘征
〃	中村絵美
期限付調査員	坂部恵造
〃	畠地　剛
〃	玉山健一
〃	吉田真由美
〃	小林弘卓
〃	長洞ひかり
〃	藤原大輔
〃	川又　晋
〃	太田代一彦
〃	江藤　敦
〃	立花公志

〔調査第二課〕

課　　長	高橋與右衛門
課長補佐	中川重紀
文化財専門員	金子佐知子
文化財調査員	赤石　登
〃	阿部眞澄
〃	飯坂一重
〃	鈴木裕明
〃	久慈泰彦
〃	（濱田　宏）
〃	安藤由紀夫
〃	星　雅之
〃	佐藤淳一
〃	半澤武彦
〃	皆川英香
〃	溜　浩二郎
〃	丸山直美
期限付調査員	齋藤麻紀子
〃	吉田里和
〃	菊池　賢
〃	立花　裕
〃	駒木野智寛
〃	原　美津子
〃	石崎高臣

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第406集

久田遺跡発掘調査報告書

土地改良総合基盤整備事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成15年３月20日
発行　平成15年３月27日

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185
TEL　(019)638－9001・9002
FAX　(019)638－8563
印刷　川嶋印刷株式会社
〒020-0021　岩手県盛岡市中央通2－３－10
TEL　(019)651－5373

© ㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2003